創立40周年記念出版

◎原口正宏 ◎長尾けんじ
◎赤星政尚

タツノコプロ インサイダーズ

本書は、創立40周年を迎えたタツノコプロの、特に草創期に視点を定め、“吉田竜夫とタツノコプロ”とクレジットされた時期を中心に編纂を試みた。漫画工房であったタツノコプロが、なぜアニメを制作することになったのか。多くの才能あるクリエイターが、いかにしてタツノコプロに集い、アニメ作りに情熱を注ぎ込むようになったのか。
創立から、吉田竜夫氏が逝去される昭和52年頃までの、第一次黄金期と呼ばれる時期にタツノコプロに関わられたクリエイターの証言から、それらを感じてもらえるはずである。

カバー(表)原画
○『マッハGoGoGo』吉田竜夫

カバー(裏)原画
○『昆虫物語みなしごハッチ』田中英二

表紙原画
○『紅三四郎』九里一平

カバーデザイン○岡　泰司

©タツノコプロ

タツノコアニメ 秘蔵 原画集

紅三四郎
原画／田中英二

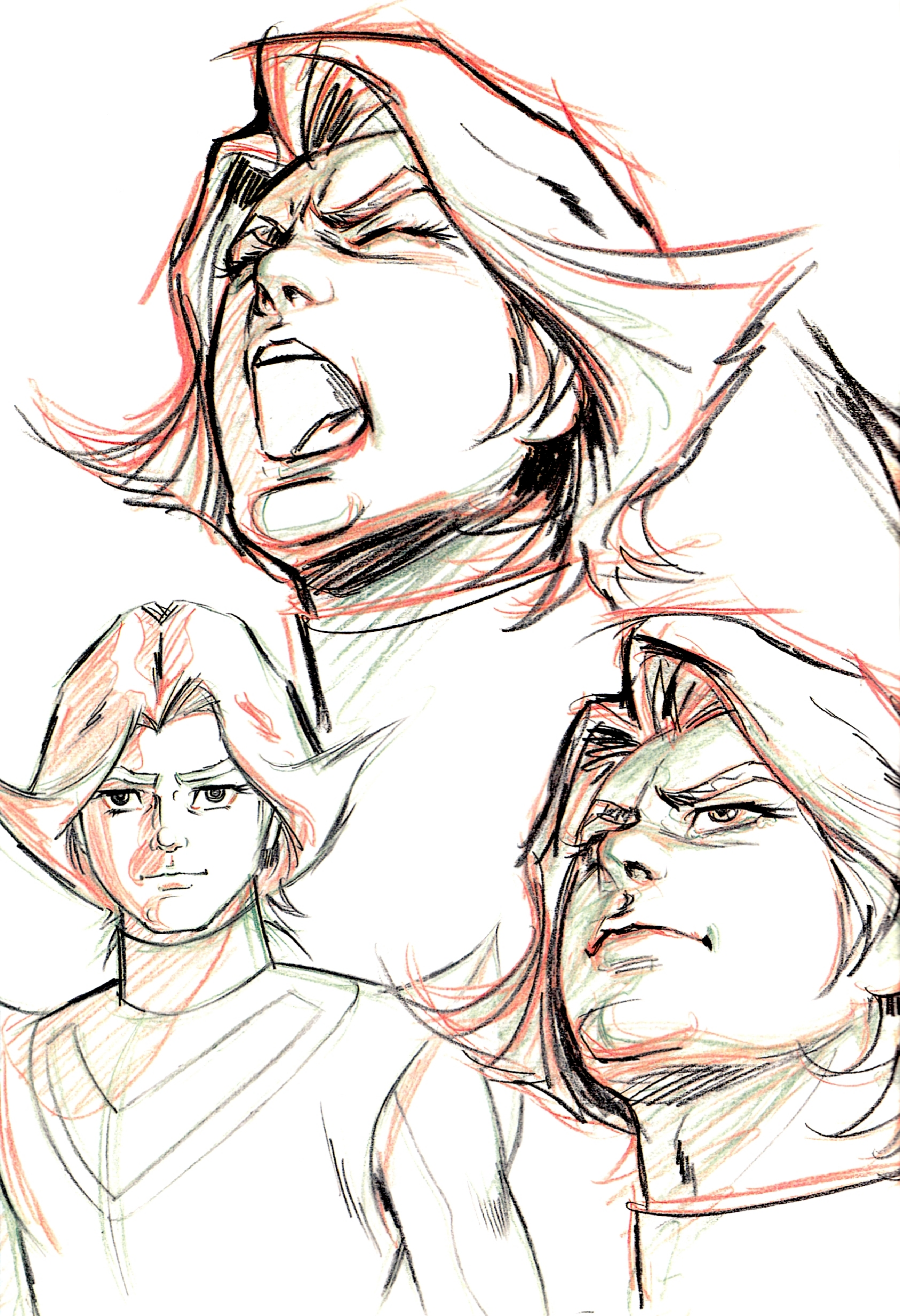
ここに掲載する原画は、当時以来タマ・プロダクションに保存されていた貴重なものであり、本書のために発掘していただいた、まさに蔵出しマテリアルである。

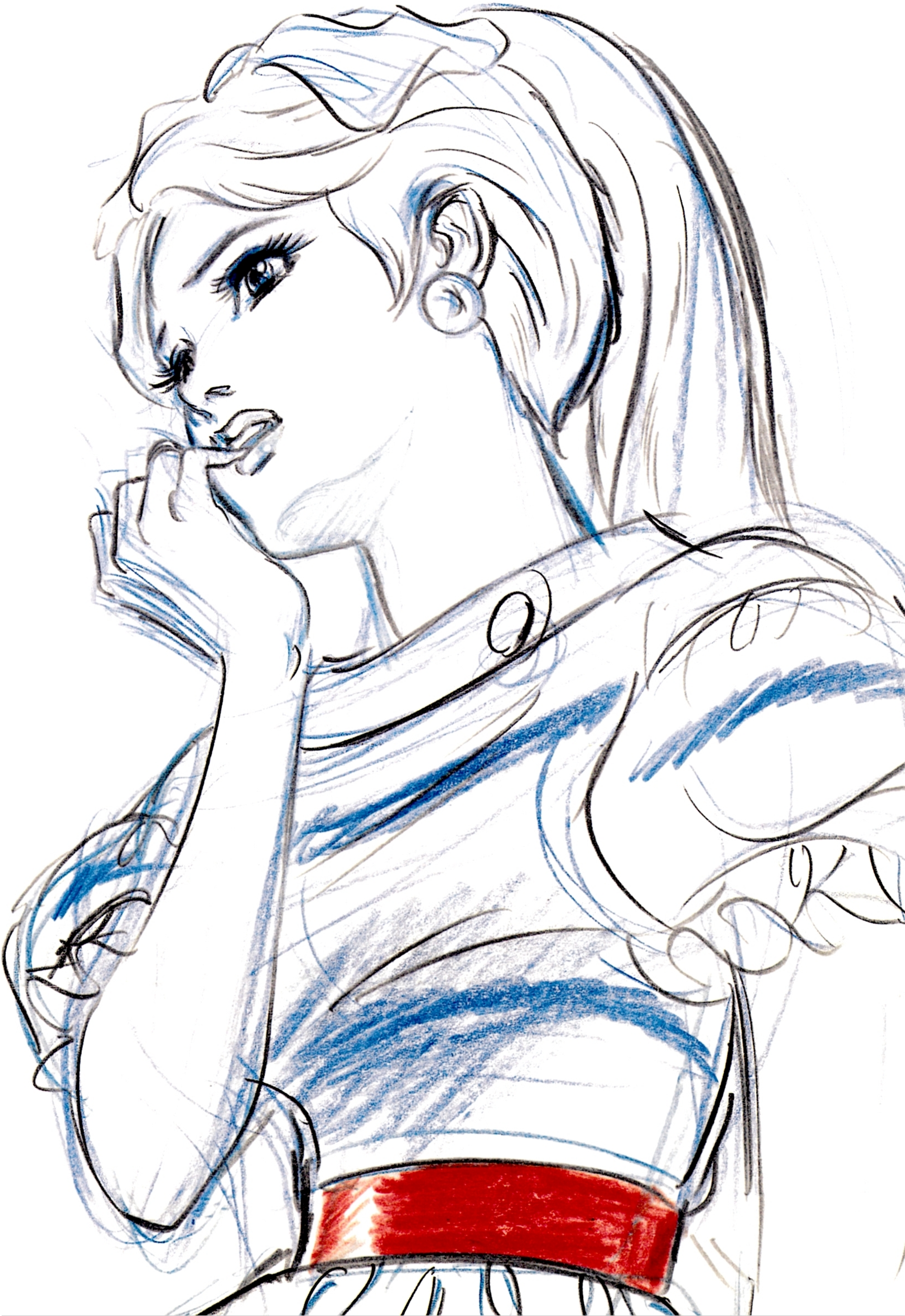
また、これらの原画には、吉田竜夫の修正が入っているものも含まれている。

宇宙の騎士テッカマン

原画／吉田竜夫

意外なようだが、『テッカマン』の頃にも吉田竜夫自身が原画修正を施したカットは存在する。掲載のものは第１話「太陽の勇者」（作画監修／二宮常雄、原動画／タマ・プロダクション）のもので、主人公・南城二が父の窮地を知り、その死に涙するカット。父の仇に対する復讐が主人公の変身の動機となるだけに、ここで高いレベルの“芝居”が要求されるのは必然ともいえ、さすがに吉田竜夫の筆にも力が入っている。



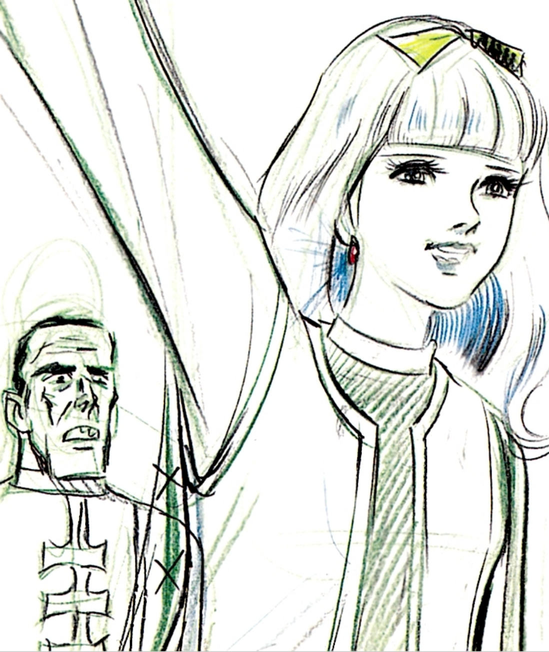


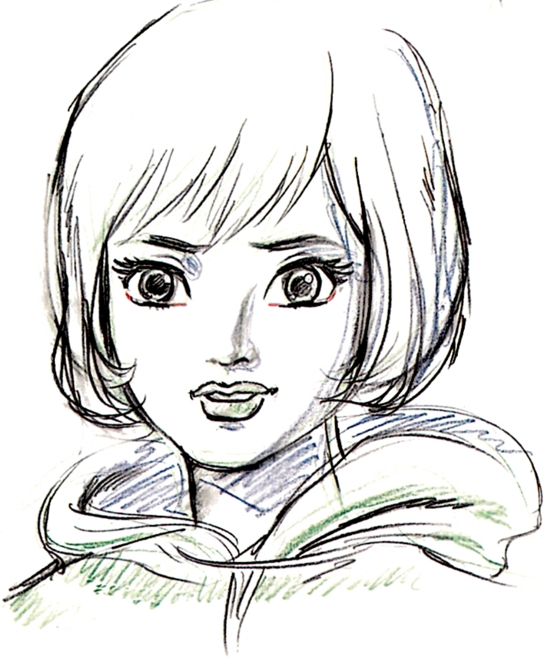
紅三四郎

原画／田中英二

PROFILE

北海道生まれ。釧路高校中退後、北海タイムスに勤務。'56年頃に上京し、星城夢ニ(朗ニ)のペンネームで少女漫画家として活躍。若木書房の「ゆめ」で描いた読みきりの少女漫画や「風車」で好評を博した『マミちゃん』シリーズ等が代表作として挙げられる。その後、TCJや虫プロでアニメーターとして活躍後、'66年1月にタマ・スタジオ（現／タマ・プロダクション）を設立。『マッハＧｏＧｏＧｏ』からタツノコプロ作品に参加、タマプロは現在に至るもタツノコ作品に欠くことのできない作画スタジオである。掲載の原画に明らかなように、女性キャラの繊細さには定評があり、各話のゲストに美女が用意された『紅三四郎』は、格好の舞台だったといえるかもしれない。タツノコ以外での代表作に、ナックで手がけた『チャージマン研！』(原作、キャラクターデザイン)『アストロガンガー』『ドン・チャック物語』(キャラクターデザイン、作画監督)『星の王子さま　プチ・プランス』(キャラクターデザイン)等がある。'82年没。





スカイファイターZ

原画／田中英二

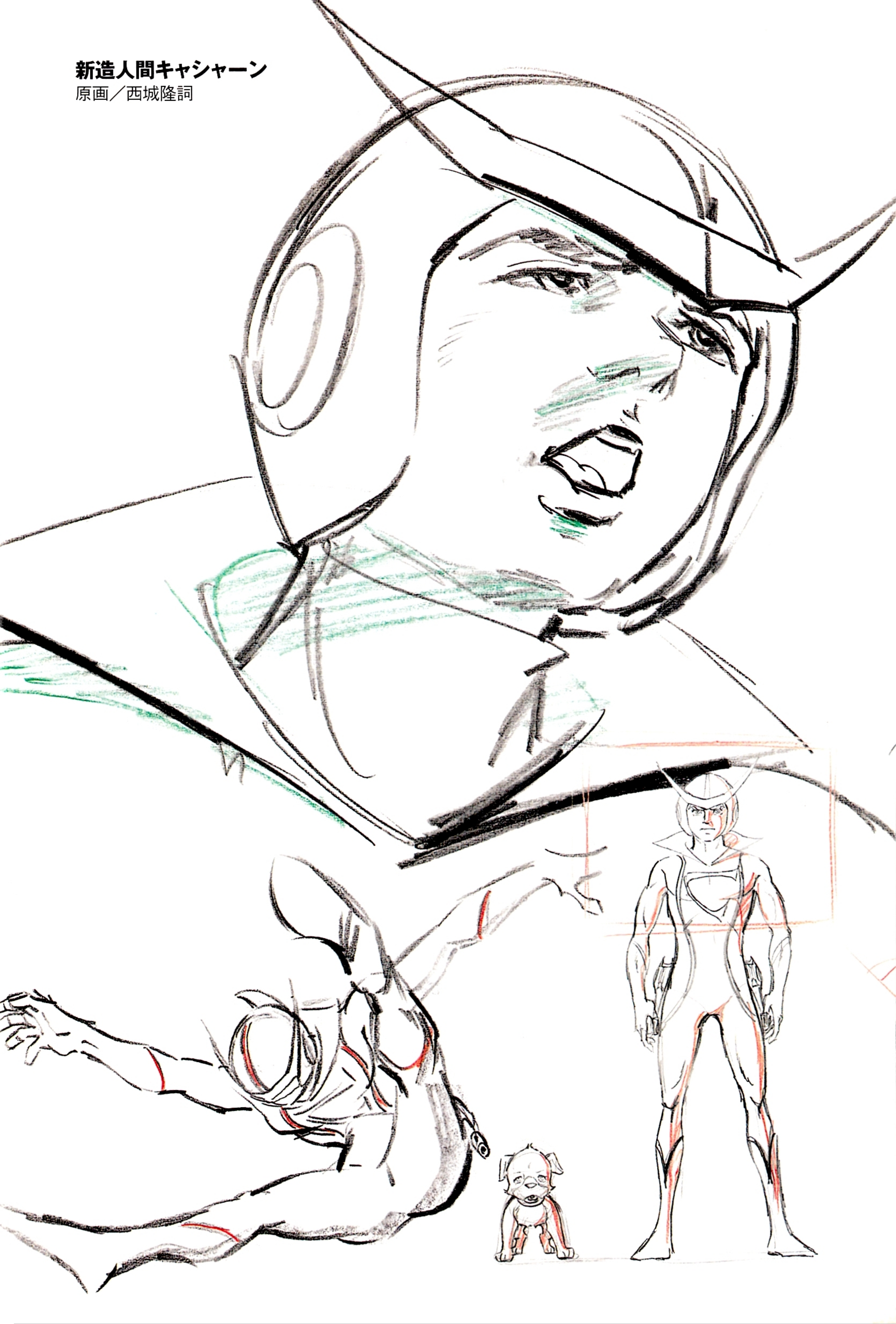
　航空機版『マッハＧｏＧｏＧｏ』を企図して制作されながら、都合３本の試作フィルムで終わった、幻のシリーズ。風巻航空に所属する主人公・大空文太と、操縦桿にＡＢＣＤＥのボタンを持つ愛機・ライト号の活躍を描く。レシプロ機からジェット機へ変型するライト号が、ホワイトボディに赤いラインも鮮やかなカラーリングだったり、ガールフレンドの風巻ミキに“ミッキー”の愛称が用意されていたり、意図的に『マッハＧｏＧｏＧｏ』のイメージの継承が図られており、未制作が惜しまれる。

原画／田中英二

原画／西城隆詞
（右端も。ともに修正は田中英二による）

新造人間キャシャーン

原画／西城隆詞



タツノコプロ インサイダーズ

原口正宏
長尾けんじ
赤星政尚

写真は、過日の吉田竜夫。
『ハクション大魔王』をスケッチ中である。

序

本書は、今年で創立40周年を迎えるタツノコプロダクションを巡る談話集である。

1962年10月19日、人気漫画家として活躍中の吉田竜夫を中心に、吉田健二、九里一平（本名／吉田豊治）の三兄弟が、分業制の漫画工房としてタツノコプロを誕生させた。そしてタツノコプロは、漫画家として人気絶超の最中、突如アニメーションの製作に乗り出す。'65年5月8日、土曜夜6時15分に放送が開始された『宇宙エース』が、タツノコプロの処女作である。以降、『マッハGoGoGo』『ハクション大魔王』『昆虫物語みなしごハッチ』『科学忍者隊ガッチャマン』『タイムボカン』といった作品が次々と発表され、テレビの前の子供たちの心を瞬く間に虜にした。やがて放送が終わった作品は、国内から海外へも飛び、多くの人々に現在もなお親しみを持って愛され続けている。

タツノコプロ作品の魅力とは一体何なのだろうか？

その手懸かりを得るために、本書では、タツノコプロの特に創成期に視点を定め、「吉田竜夫とタツノコプロ」とクレジットされた時期を中心に編纂を試みた。漫画工房であったタツノコプロが、なぜアニメを製作することになったのか。多くの才能のあるクリエイターが、いかにしてタツノコプロに集い、アニメ作りに情熱を注ぎ込むようになったのか。

タツノコプロの第一次黄金期とも呼ばれている、創立から吉田竜夫が逝去される'77年頃までの時代に関わられたクリエイターの証言から、それらは感じてもらえるはずである。彼らは、まさしく吉田竜夫の子供――タツノコ――ともいうべき存在だった。彼らが互いに影響し合い「吉田

竜夫とタツノコプロ」の時代を作っていったのだ。
それは同時に、吉田竜夫の思い出をうかがう行為でもあった。一種のカリスマ性を持って社員から絶大なる信頼を得ていた吉田竜夫。クリエイター諸氏の談話から、その各人への影響力、あるいは人間味溢れるその人柄が、こちらにも伝わってきた。
こうした証言の数々は、細大漏らさず誌面に反映させたつもりである。当事者の言葉で初めて明かされる多くのエピソードが、本書を幾多の驚きで満たしているのではないか。

また、吉田竜夫のデビュー作から'70年頃までの漫画、絵物語の情報を可能な限りリストアップした「タツノコ漫画作品リスト」と、『宇宙エース』から『風船少女テンプルちゃん』までの詳細なデータを網羅した「タツノコプロフィルモグラフィー'65～'77」も併載し、資料面での充実も図ったつもりである。

ともあれ本書はタツノコプロの歴史のみならず、日本アニメ史の一側面を確実に切り取った一冊になったのではないか、という自負もある。
末永くお手元に置いていただければ、これに勝る喜びはない。

なお、本書の制作にあたってご助力をいただいたタツノコプロの皆さん、ならびに全ての関係者の皆様に、この場を借りて厚くお礼を申しあげます。

二〇〇二年一二月吉日

編者一同

タツノコプロ インサイダーズ

目次

タツノコアニメ秘蔵原画集 1

序 10

第一章 タツノコプロの礎 15

吉田竜夫〈インタビュー再録〉 16

九里一平 18

吉田健二 26

第二章 企画文芸の理 35

鳥海尽三 36

小隅 黎 42

陶山 智 46

酒井あきよし 50

小山高生 54

柳川 茂 58

宮田知行 62

第三章 演出という術 67

笹川ひろし 68

原征太郎 76

木下敏治 82

坂本雄作 84

鳥海永行 87
布川ゆうじ 94

第四章 キャラクター創造という業（ぎょう） 99
天野喜孝 100
河井ノア 104

第五章 アニメーターたる闘（いき） 109
西岡たかし 110
西城隆詞 113
窪　詔之 117
高橋資祐 121
須田正己 125
二宮常雄 129
湖川友謙 133
井口忠一 136
杉井興治 140
宮本貞雄 144

第六章 表現すべき彩（あや） 149
中村光毅 150
大河原邦男 154
多田喜久子 158
向井　稔 162

第七章 それぞれの匠(たくみ) — 167

細野 正 — 168

谷口 肇 — 172

本田保則 — 176

佐藤俊彦 — 182

第八章 外部にいる輩(ともがら) — 187

水本 完 — 188

加藤昭二 — 192

松山貫之 — 196

大野 実×木村 実 — 199

木村英俊 — 205

スペシャル プレゼント — 209

タツノコ漫画作品リスト — 16

ジャケット グラフィティー — 34／66／98／108／148／166／186

フィルモグラフィー'65〜'77 — 210／319

第一章 タツノコプロの礎（いしずえ）

■『紅三四郎』より

吉田竜夫

再録

「季刊 ファントーシュ」
第7号より

本書読者の多くが吉田竜夫さんの名を認識したのは、その訃報によってではなかっただろうか。というのは、アニメムックとしてはもっとも古い部類の一冊「月刊マンガ少年臨時増刊 TVアニメの世界」（朝日ソノラマ、昭和52年12月1日発行）に、その訃報が掲載されているからだ。

つまり、アニメファンという市場の存在をマスコミが認知した時（徳間書店から「アニメージュ」が創刊されるのは、翌年6月のこと）には、既に吉田竜夫さんは逝去されていたということだ。

そのため、いわゆるアニメファンに向けた吉田竜夫さんの談話は、残されていないに等しい。

が、その生前の談話が収録されたほぼ唯一と考えられる一冊「季刊 ファントーシュ」（発行／広瀬和好、ファントーシュ編集室）第7号から、印象的な談話を、本書の談話集としての性格に基づいて、再録してみよう。

（よしだ・たつお）

1932年3月7日、京都市南区比永城町に生まれる。岩田専太郎、福島鉄次、梁川剛一の絵を模写し、画家になることを志す。'47年頃、伯父・誠次が紙芝居製作の京都画劇研究会を開設。ともに挿絵画家を志していた親友の辻直樹（なおき）、湯浅利八、木村光久らがアルバイトとして働く。'53年頃、竜夫、辻、ともに画劇研究会を辞める。竜夫は、京都新聞で芸能欄の挿絵を担当したり、神戸の紙芝居製作元の仕事を引き受けるようになっていた。やがて仲間の湯浅利八が上京し、絵物語を描いたことが刺激となり、'54年に上京。挿絵画家を目指しながらも生活のために、絵物語を描き生計をたてる。竜夫の絵は人気を集め、間もなく雑誌界を席巻する。しかし時代は、絵物語から漫画へ移っていった。そのため、絵物語を漫画絵にして欲しいと編集部から言われ、漫画絵の描けなかった竜夫は、弟の九里の漫画を手伝いながら漫画家としてのデフォルメを逆に吸収していった。そういった絵に対する貪欲な姿勢は、竜の子プロを設立してからもなんら変わることはなかった。

1977年9月5日、肝臓ガンで死去。享年45歳。

タツノコ漫画作品リスト

本欄は吉田3兄弟の作品を可能な限り探索し、それを発表順に並べたものである。貸し本漫画や新聞の挿絵は割愛した。一部、吉田竜夫の初期の絵物語と小説の挿絵などは、タイトルの下に(　　)をつけて例外的に記載した。

時期はタツノコプロの漫画作りが大きく形態を変える、1970年までとした。

1 **少年プロレス王 鉄腕リキヤ**（絵物語）
吉田竜夫《・え》《梶原一騎・作》
冒険王（秋田書店）
1954（昭和29）年8月号〜
1954（昭和32）年12月号

2 **ジャングル・キング**（絵物語）
吉田竜夫《・え》
少年画報（少年画報社）
1954（昭和29）年11月号〜
1955（昭和30）年4月号

3 **荒野の快男児**（小説）
梶原一騎《・作》 吉田竜夫 え
少年画報（少年画報社）
1955（昭和30）年1月号

4 **嵐をこえて**（絵物語）
吉田竜夫
少年画報（少年画報社）
1955（昭和30）年5月号〜
1956（昭和31）年2月号

アニメーションを始めたキッカケは？

キッカケっていうものは特に無いんです。強いて言えば虫プロさんが、華々しく登場したことですね。ただ、アニメでなら自分の作品にインターナショナルな性格を開発できるのではないかというビジョンは持っていました。おこがましい考えかも知れませんが、世界へ羽ばたきたい。というわけです。

初期からの作品で吉田さん御自身が気に入ってるものは何ですか？

技術的には今から思うと未熟な面がありますけど、「マッハGo Go Go」それに「紅三四郎」「みなしごハッチ」「ガッチャマン」拾って上げるとすれば、そんな所ですね。

今まで僕は、現場にはあまり口を出さずに作りたいように作らせていたんです。フィルムは資産になるわけですから、後になって、〝なんだこんな作品〟などと思うんじゃなくて、やっぱり、〝いい作品だった〟と思えるものを考えたからです。

「ガッチャマン」などはそうして作ったわけです。ところがそうなると、きりなくゼイタクをしだすので、口を出さないわけにはいかなくなってしまうんです。会社が左前になってしまいますから……。

若い者がいいの描いてると、しゃくにさわるしね。個人としては〝負けていられない〟という気にもなります。しかし会社としては、とてもうれしい事ですよ。若い人をどんどん延ばしてあげるべきだと思いますね。こっちはこっちでまた、いいものを描けばいいんだから……。

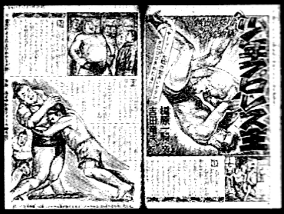
現在は、アニメを見るのが当たり前であるかのごとく、アニメが氾濫しているし、みんな似たようなものを作っている。これでは駄目です。

良心的に作ってるところが勝ち残るんじゃないでしょうかね。そう思って頑張ってるんだけど、まあ、いろいろとそればかりじゃいかないですけどね。

以上が、いまから25年前に吉田竜夫さんが遺された談話のいくつかである。本書に談話を寄せていただいた、吉田竜夫さん所縁のクリエイター諸氏の談話と読み比べることで、照射される何かがあれば幸いである。

改めて、御冥福をお祈りします。

5
少年プロレス王（絵物語）
梶原一騎・文　吉田竜夫・え
おもしろブック（集英社）
1955（昭和30）年11月号～12月号



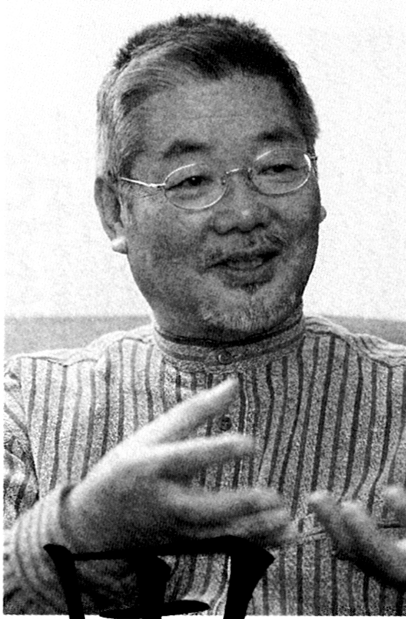
6
少年レスリング王　プロレス五郎（絵物語）
吉田竜夫《・え》
おもしろブック（集英社）
1956（昭和31）年1月号～1957（昭和32）年7月号

7
リングの王者　鉄腕タイガー（絵物語）
吉田竜夫《・え》
漫画王（秋田書店）
1956（昭和31）年9月号～1957（昭和32）年6月号

8
黒い牡牛（小説）
キング・ブラザース・プロ作品　RKOラジオ映画超大作　吉田龍夫・画
（文陽社）
1956（昭和31）年

9
勇気と愛と忍耐と（小説）
吉田龍夫・作
（文陽社）
1956（昭和31）年

10
あばれ天狗（貸本漫画）
九里一平《・え》
（嶋村出版社）
1956（昭和31）年



（くり・いっぺい）

1940年1月1日、京都市南区比永城町に生まれる。本名・吉田豊治。吉田兄弟の3男で、吉田竜夫(長男)、吉田健二(次兄)を兄に持つ。挿絵画家となった長男の竜夫に憧れ、'58年に洛陽高校を中退して次兄・健二と共に上京。絵物語で活躍する兄・竜夫の手伝いをしつつ、貸本漫画の『あばれ天狗』(嶋村出版)でデビュー。当時の少年誌にテレビ作品の漫画化を連載し、一躍人気漫画家に。'62年に吉田竜夫を社長に漫画家の会社として竜の子プロを設立。3兄弟で分業しながら作品を執筆する。'63年に東映動画(現・東映アニメーション)から、アニメ用オリジナル企画の話を打診され、それがきっかけとなり自社でアニメを制作することになる。九里はアニメにも参加する傍ら『弾丸児』などの漫画も執筆。アニメには'69年以降、本格的に乗り出す。キャラクターデザインから、演出、原画、企画、プロデューサーと多才であり、竜の子そのものを代表する作品歴である。現在、竜の子プロの代表取締役社長。

九里一平

●株式会社　竜の子プロダクション
代表取締役社長

まだ働けないから、兄貴が頼りですよね

――九里さんが幼い頃の竜夫さんの印象というのはどうでしたか？　年齢差も8歳あったということで、かなり大人に見えたのでしょうか？

1歳の頃に母親が亡くなってまして、その年から戦争で、親父は満州の方に行っちゃったんですね。後に帰ってきたんですけど、病気になって……僕が5年生くらいかな……亡くなって。まだ働くこともできず、兄貴が頼りでしたね。

――もう絵のお仕事をされていたんですか？

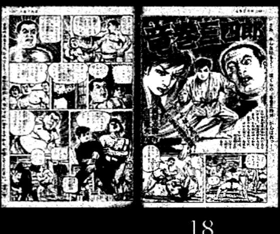
もう本職ですね。京都新聞とか都新聞とかに挿絵を描いて。

――九里さんも幼い頃から、絵はお好きだったんですか？

絵というのは願望を描けば、実現してくれるじ

11 **竜巻三四郎**（絵物語）
梶原一騎・作　吉田竜夫・え
少年（光文社）
1957（昭和32）年1月号～6月号

12 **大空行進曲**（絵物語）
梶原一騎・作　吉田竜夫・え
少年のお正月大増刊　探偵ブック（光文社）
1957（昭和32）年1月号
正月増刊号



13 **にっこり剣四郎**（絵物語→漫画）
吉田竜夫《・え》
少年（光文社）
1957（昭和32）年7月号～
1958（昭和33）年9月号

14 **怪奇冒険絵物語　魔人島**（絵物語）
丸山健太・作画
おもしろブック増刊（集英社）
1957（昭和32）年　夏休み漫画読物号

15 **世界少年隊**（絵物語）
武田武彦・案　吉田竜夫（・え）
おもしろブック（集英社）
1957（昭和32）年8月号～
1958（昭和33）年8月号

16 **白虎大助**（絵物語→漫画）
梶原一騎・作　吉田竜夫・え
ぼくら（講談社）
1958（昭和33）年1月号～
12月号

ゃないですか。自動車描いて、その横に自分を描けば、自分が持っているようにね（笑）。学校で図画の時間、まわりから、うまいうまいと言われたのがいちばん嬉しくて。先生が市の展覧会に出してくれたりとかね。そうなると次から下手なものを描けないって、それで一生懸命描くようになった覚えがありますよ。

――お仕事をして弟さんたちを養って、それで竜夫さんが上京されるきっかけというのは、東京からの誘いがあったわけですよね？

兄貴の知り合いで、東京から来て新聞で挿絵をやってた方がいたんです。「竜夫さん、君は京都じゃもったいない。東京に出て挿絵画家になりなさい」と紹介状を書いてもらって、東京へ行ったということです。最初は新聞社、中日新聞なんかの仕事ですね。

――やはり、新聞の挿絵というつもりで上京されたんですか？

挿絵はそのへんからしか入れないだろうと。ところが生活もありますからね。やっぱり厳しいわけですよ。少年漫画の挿絵、当時はまだ雑誌に挿絵ありましたからね。それで、絵物語というものをやったわけですね。それが『少年画報』だったと思いますね。

――『鉄腕リキヤ』とかになるんですか？

いやいや、これです。『ジャングル・キング』（笑）。

――それでは、これ（『ジャングル・キング』）は京都でご覧になっていた？

そうです。雑誌が出たということで見て、ものすごく感激して、兄貴、やったんだぁ……って。しかし、うまいなぁ。この頃、いきなり、こういう絵が描けた人というのはねぇ。しかも、我々にとっちゃ兄貴だからね、雑誌のインクの匂いまで、いまだに思い出す感じですね。

――竜夫さんが上京されてから1年後、九里さんと健二さんが一緒に東京に来られたわけですが、竜夫さんを頼られて上京されたんですか？

そう。僕たちも絵が好きだから。健二氏もそうだったし、その頃はまだ彼も（画家を）志してたから。

――九里さんはおいくつだったんですか？　やはり、漫画家を目指しておられた？

その頃は、17くらいですね。やはり挿絵家になりたかったものですから、まさか漫画家になるとは思わなかったですね。面白い運命ですよ。

――竜夫さんは、いわゆる浅草時代、梶原一騎さんと仲がよかったそうですね。

吉田竜夫の奥さんの知り合いが東京にいまして、浅草のアパート見つけてもらってね。浅草だから、飲むところいっぱいあるわけですよ。梶原一騎さんとふたりで飲んではクダ巻いて、それに困らされて、吉田竜夫の奥さんが風呂敷包んで京都に帰ろうって（笑）。

――竜夫さんがご結婚されたのは、東京に出てこられる前だったそうですが。

自分の絵の修行もしないといけないわけで、恋愛してたんですけど、振り切って東京に来る予定

17
ぼくは八公
九里一平《・え》
ぼくら夏増刊（講談社）
1958（昭和33）年　夏の増刊
まんが大ゆかい号

18
痛快探偵小説
ぬすまれた切手（小説）
《作・》窪田篤人　え・吉田竜夫
おもしろブック（集英社）
1959（昭和34）年1月号

19
あおげ太陽（小説）
松浦健郎・作　吉田竜夫・え
ぼくら（講談社）
1959（昭和34）年1月号～12月号

20
怪奇探偵ものがたり
呪いのランプ（絵物語）
吉田竜夫《・え》
おもしろブック（集英社）
1959（昭和34）年　新年増刊号

21
デメちゃん
九里一平《・え》
ぼくら（講談社）
1959（昭和34）年2月号

だったんです。でも、奥さんはどんな苦労してもいいからということで、ついてきちゃったというわけですよ。

ま、アルバイトでやってみようと(笑)

— 挿絵の仕事をされていた頃の竜夫さんのご様子というのは？

生活がありますから、いろいろな仕事してるうちに……売れ出したんです。梶原一騎さんと組んだりしてね。『チャンピオン太』とか。そういえば梶原さん、飲み代でうちの兄貴にずいぶん借金してるようだったです。有名になっても返さない(笑)。だけど、お互いに金銭的にも余裕ができてるわけだから、いちいちね、返してくれとは言わない(笑)。それくらい、梶原さんも元気の出てきた頃で。梶原さん、背は185～186センチありましたけど、ガリガリだったですよ。自分は空手やってるって言うけど、あの人、ハッタリうまいからね(笑)。

— 九里さんたちが上京されて、浅草から小岩に引っ越して。で、そこで一緒に住まれて、お仕事のお手伝いもされていたんですよね？

そうそう。

— 九里さんのデビューというのは、どういう形で訪れたんでしょうか？

僕のデビューは、赤本の単行本です。『あばれ天狗』という時代劇でした。(吉田)健二氏に表紙を描いてもらってね。健二氏がこういう単行本の表紙を嶋村出版で描いていたものですから。僕は講談社や、集英社など、メジャーなところを目指してたんですけど、ま、アルバイトでやってみようと(笑)。最初、怖さ知らずで、月に1冊描いてたんですね。それで、国家公務員の高卒初任給が1万5000円という時代に、1冊描けば、3万円もらえたんですよ。こんないいことない、好きな時にやってね、絵が描けて(笑)。で、3巻シリーズだったんですよ。2巻目が出て、3巻目また描いて原稿持っていったんですね。そしたら、あなたの本は売れませんと言われて(笑)。がくーんときてね。それでまた原稿料半分にしてくれと言われて。これで生活してるんだから、キツいなぁって。1万5000円でもそんなに悪い原稿料じゃないけど(笑)。その時はとてもショックでした。こんなところで、こんなこと言われたら、講談社はないなって(笑)。若い時代だから、1ヵ月くらい変な気持ちで、なんにもやる気にならなくてね。

— それは上京されて、その年、翌年くらいですか？

1年くらいはアシスタントやってたと思いますよ。それで2年目くらいに……。

— 20歳にはまだなられてないくらいですか？

なってないです。18か……その頃です。そういえば、あの当時、最年少の漫画家、と言われたことがある。連載を始めた頃に。『あばれ天狗』は売れなかったんですけど、それ見て、『日の丸』という集英社の雑誌の編集員がわざわざ訪ねてきて、

22
狼魔人(小説)
今井康夫・作　吉田竜夫・え
日の丸(集英社)
1959(昭和34)年6月号～8月号、1960(昭和35)年3月号
《9月号以降「黄金のマスク」に改題》

23
マガジン文庫　大西巨人
吉田龍夫・え《扉》　大津皓一・原作
福田としかね・え
週刊少年マガジン(講談社)
1959(昭和34)年6月18日(13)号～11月1日(32)号
《吉田龍夫の扉絵は、8月9日(20)号～8月30日(23)号まで》

24
Zボーイ
九里一平《え》
日の丸(集英社)
1959(昭和34)年7月号～12月号

25
スーパー・ジャイアンツ
宮川一郎・原作　吉田竜夫・え
ぼくら(講談社)
1959(昭和34)年8月号～1961(昭和36)年6月号

26
時代講談少年太閤記(小説)
本山弓平・文　吉田竜夫・え
おもしろブック(集英社)
1959(昭和34)年　夏の大増刊号

連載してみませんかって言ってくれたんです。この時はねぇ……ホント嬉しかったですね。それでやったのが『宇宙エース』のはしりの……『Zボーイ』という。スーパーマンの少年なんですね。それが受けがよくて、それから『マッハ三四郎』かな。講談社の牧野（武朗）編集長、後に『壮快』とか作られた方がみえて。それから『パイロットエース』。かなりちがった形になったんだけど、『マッハGoGoGo』の前身ですよ。

ああ、これからはこの時代だな

―― 九里さんのお名前、ペンネームはどういう由来でつけられたんですか？

一緒に考えた友達がつけてくれた。僕、丸顔でクリクリしてるから、だったらしいんですけれどね。雑誌デビューするちょっと前かな。名前考えてくれって言われて。一平はね、九と里と一と平と、字柄的にもバランスがいい。それで、一平にしたんですよ。

―― ちなみに竜夫さんは、その名前になられてからは、『九里』さんとペンネームで呼ばれるようになったんですか？

ええ。もうほとんど、九里、九里ですよ。僕も『吉田』よりも、九里のほうが好きです、今は。雑誌でやってた時から、その名前で成長してきたわけでしょ？ 捨て切れないんですよね。

漫画家やったのは、僕が最初なんですよ。なぜ漫画家になったかというと、雑誌を見るでしょ、吉田竜夫氏の作品、見るでしょ、しかし、ほかの絵物語は読まないですよ。どうしても、最初にある『イガグリ君』とか『鉄腕アトム』だとか、そっちを見ちゃうわけですよ。面白いですよね、やっぱり。映画みたいで。ああ、これからはこの時代だな、と思ったのがきっかけなんですよ。

―― 『タイガーマスク』で有名な辻なおきさんが、竜夫さんと幼なじみだそうですが。

ええ。うちの兄貴と年代が同じだから、昔から、遊びからなにから、なんでもライバル。将棋をやっても、お互い、手がブルブル震えるくらい真剣勝負（笑）。ギターがうまかったんですね、辻なおきさん。兄貴もクラシックギター、うまかったんですよ（笑）。それでふたりとも作曲したり、ダンスやったり。常に張り合うわけですよ（笑）。

―― 辻さんも、出版社の勧めで上京してきたんですか？

兄貴が出てきて、それでライバルだから（笑）。兄貴がずいぶん売れてる頃、上京したんです。だけど、目的が作曲家だっていうんです。『有楽町で逢いましょう』とかで有名な吉田正っているでしょ？ あの人について、1年間やったのかな。それで結局、吉田正に、天才は掃いて捨てるほどいるって言われたって。それでがくっときて。もう故郷に帰るってことを告げに、我々のところに来たんです。僕らもね、辻さんには可愛がってもらってましたから。まだ、絵があるじゃないのって

27 **名探偵たけし**
まんが・しのだひでお（と、笹川ひろし）《扉》え・吉田竜夫
日の丸（集英社）
1959（昭和34）年 夏の大増刊号

28 **マガジン文庫 アパッチ投手**
吉田龍夫・え《扉》 佐野美津男・原作 石川球太・え
週刊少年マガジン（講談社）
1959（昭和34）年8月9日（20）号～1960（昭和35）年7月10日（28）号
《吉田龍夫の扉絵は9月6日（24）号～10月11日（29）号まで》

29 **20世紀のなぞ なぞの風船部隊**（小説）
渡辺啓助《作》 吉田龍夫・え
週刊少年マガジン（講談社）
1959（昭和34）年10月4日（28）号

30 **連載物語 怒りのつばさ**（小説）
志賀ひろし・文 吉田龍夫・え
週刊少年マガジン（講談社）
1959（昭和34）年10月18日（30）号～1960（昭和35）年2月14日（7）号

31 **パトロールQ**
吉田龍夫・え《扉》
伊藤照夫・原作 天馬正人・え
週刊少年マガジン（講談社）
1959（昭和34）年10月18日（30）号～1960（昭和35）年4月17日（16）号
《吉田龍夫の扉絵は1959（昭和34）年10月18日（30）号～1960（昭和35）年2月4日（7）号まで》

止めたんですよ。辻さん、そもそも、大阪で手塚（治虫）さんといっしょに、漫画の単行本出してたんですよ。その頃見てね、うまいなぁと。ちっちゃいコマでね、手塚治虫に似てるんですよ。

不思議なものを見てる感じでね

――吉田竜夫さんが梶原一騎さんと組んだ『チャンピオン太』が実写化されて、続いて『忍者部隊月光』も実写になっていますね。竜夫さんの原作とテレビでは、舞台設定ががらっと変わってますが。

いくらなんでも、太平洋戦争は描けないじゃないですか。だから、むしろ現代風にしたほうが斬新でよかったんじゃないかなと思います。それだけだと思いますよ。話も違うわけですし、不思議なものを見てる感じで。主人公の月光、あぁ、水木襄だなぁと。スターでしたから、そういう嬉しさもあったですね。

――そして、遂に『宇宙エース』の話が来るわけですが。

ええ。『Zボーイ』という形で雑誌（漫画）をやってたら、東映動画から僕に電話来たんですよ。その頃、会社組織になっていましたので、兄貴に相談しなきゃいけない。当時、手塚治虫さんの『鉄腕アトム』がアニメになるかどうかという時でしたでしょうか。僕らはもうやりたくてしょうがなかったんです。日本でもアニメーションができるんだって。ディズニーっていうのは雲の上だから、そんなの作れないと思ってましたけど。テレビアニメでも、アニメーションが作れるということは、すごいことだなと。漫画を志す以上は、動かしてみたいとか、どうしてもあるんですよ。それで、『Zボーイ』をモデルにしてくれって言うから、デザインして描きました。

――『Zボーイ』をそのままアニメ化ということではなく？

ではないです。

――東映で実際に準備を進めて、デザインを出した段階で、すでにタイトルは『宇宙エース』だったんですか？

そうそう。それから、いざやるとなってからは共同作業で、吉田竜夫氏や僕なんかでまとめていったということですね。

――その前後、国分寺に移ってこられてから、九里さんがご結婚されて別々に住まれていたそうですけど、『宇宙エース』の頃はもうご結婚されてるんですか？

はい。

――昭和何年か覚えてます？

いや、覚えてないね（笑）。（奥さんの）誕生日も知らないよ（笑）。

――紆余曲折あって、結局、『宇宙エース』をタツノコプロが自社でアニメで作るという話になった時は、竜夫さんから相談はされたんですか？

うーん、東映で中止にしたのはいいけど、雑誌

32 **ミサイル金太郎**
九里一平（・え）
漫画王→まんが王（秋田書店）
1959（昭和34）年10月号～1960（昭和35）年9月号

33 **ミサイルボーイ**
九里一平（・え）
少年（光文社）
1959（昭和34）年11月号

34 **海底人8823**
黒沼健・原作　九里一平・え
少年（光文社）
1960（昭和35）年1月号～12月号

35 **拳銃かめん**
都築道夫・文　吉田竜夫→中村英夫・え
まんが王（秋田書店）
1960（昭和35）年1月号～9月号
※吉田竜夫は6月号まで、以降は中村英夫が担当

36 **白雪剣之助**
長谷公二・原作　九里一平・え
冒険王（秋田書店）
1960（昭和35）年1月号～7月号

37 **ミサイルGメン**
九里一平
少年お正月大増刊　探偵ブック（光文社）
1960（昭和35）年　新年増刊号

の仕事があって、みんな忙しいし、本格的にアニメにのめり込むつもりでもなかったんです。だけど、もったいないってことで、いろいろ話してるうちに……東映に研修にも行ったし、最終的には我々が作るようなもんなんだから。だから、作れるよってことで。それだけのことなんです。それで、場所はどこにしようって。吉田竜夫の家……社屋の裏が空いてましたので。

――国分寺のお家ですか？

はい。そういうルームを作って。坂になったところにある、おかしな部屋だったんですけれど、15～16人は入れる、細長い地下壕みたいなところで。まぁ、そこでアニメーションができるとは思ってなかったですよね。とりあえずは、作っていかなきゃいけない。それで、そのうち、鷹の台のほうに、もう1棟、建てようと。だけど建ててみても、こんどは1棟じゃ足りないってことになって。それでも精一杯なのに。お金もかかりますし。だから、一歩一歩進んでいくという感じだったですね。それで（アニメ制作のことを）わかってる人が必要だったので、東映を定年で辞められた方を重役で迎えたんですよね。

――それが六郷（晃正）さん？

六郷さん。あの人にこれでどうですか、これでどうですか？　と聞くと、まだ狭いなぁとか。占い師みたいなもんですよ（笑）。それでやっていくと、確かに足りない。なにが足りないって、こんどは撮影台がないとか。そこまで気が回らなかったですね（笑）。

――『宇宙エース』って途中で等身が高くなって、デザインが変わるんですけど、テロップの上では、変わるまでが九里さんになっていて、等身が高くなってから吉田竜夫さんになってるんですけど。

この高くなってるのも、ホントは僕だと思います。

――それじゃ、クレジットを吉田竜夫名義にしただけなんですか？

うん。『宇宙エース』も最初は僕がやってたんですよ。テレビ化になる前に。

――「少年ブック」の連載を、九里さんが？

僕が雑誌の担当だからやってたんです。だけど、アニメになったら、すべて吉田竜夫というブランドで。『紅三四郎』もそうです。あれも僕が書いていて、なんとかテレビのためにね、原作いいのを作っておかなきゃいけないと思って。その割には人気がなかったですけれど（笑）。それで連載が終わった頃に、ようやくテレビが決まって、そしたら、原作が吉田竜夫名義になって。僕もアニメの演出やったり忙しくなって、雑誌もお留守になってくるでしょ。いわば、早くアニメやりたくてしかたがなかったため、雑誌のほうは人に任せたみたいな。デッサンくらいやる時もありましたけれど、アニメのほうが魅力的だったし、楽だったんですね。雑誌はそれくらい忙しくやっていて。監督くらいになれば、分担ができるじゃないですか、アニメやってても。遅らせるのへっちゃらでしょ？（笑）当時ね、許せなかったですね。雑誌は絶対、遅らせられなかったから。こんなに楽で楽しい世

38 マッハ三四郎
久米みのる・原作　吉田竜夫・構成
九里一平・まんが
週刊少年マガジン（講談社）
1960（昭和35）年2月21日（8）号～1961（昭和36）年12月24日（52）号

39 スーパーマン
アメリカ　ナショナル・コミックス社
発行☆日本語版＝少年画報社独占
少年画報（少年画報社）
1959（昭和34）年9月号～1960（昭和35）年10月号
《連載当初は海外の漫画版を掲載。吉田龍夫は1960（昭和35）年5月号～10月号まで》

40 アラーの使者
川内康範（原作）　松原佳成（脚色）
九里一平（え）
冒険王（秋田書店）
1960（昭和35）年8月号～1961（昭和36）年1月号

41 走れ！白バイ
原作・長田純　脚本・はざまたけし
企画・電通　協力・京都府警
構成・吉田竜夫　漫画・九里一平
少年ブック（集英社）
1960（昭和35）年6月号～11月号

42 アロー・エース
赤塚五郎（原作）　九里一平（え）
まんが王・小学生画報（秋田書店）
1960（昭和35）年10月号～1961（昭和36）年5月号

界はないなぁって最初は思ってましたよ。雑誌は厳しかったから。

―― 健二さんにお伺いしたら、『宇宙エース』の当時、読売広告社ではなく、電通と組む可能性もあったと。

はい。電通は大きすぎて、後で冷たくなるんじゃないかって(笑)。読広っていうのは庶民的なところがありましたから。

―― 読広さんていうのは、それまで子供向けのテレビは手がけていたんですか?

それがなかったみたいですね。当時は、新聞広告からテレビ広告に転換していかなければいけない時代だったでしょ? そのためにはアニメーションがいちばん早かったですね。アニメでも全枠、持つということは、実績になっていきますから。森永製菓とか、子供向きでしょ。そういうスポンサーを新聞広告やラジオ広告で抱えてましたから。

――『マッハGoGoGo』の後に幻の企画で、『ブンブン野郎』という飛行機ものの作品があったそうですが? これも九里さんは関わられてますか?

当時、僕は、パイロットだとか、オープニングとかに回されてたんですよ。シリーズの流れができてくると、新しい企画のほうに回されていたんです。ですから必ず、初めの頃はぜんぶ関わってましたね。

―― それは演出として関わられたってことですか?

これは監督として、1話を作った覚えがありますね。『マッハGoGoGo』が成功したものですから、空の『マッハ』をやろうって。

―― 操縦桿に、マッハ号と同じようなボタンがついてるんですよね?

そうそう。それに、空のほうが、もっと縦横無尽に面白いことできるからって発想でしたね。3話くらいまで作ったと思うんですよ、色つけて。7話くらいまで原動画は進めた気がします。

みんなを繋いでましたね

―― タツノコプロっていうのは、最初、漫画家集団から始まって、アニメ制作会社となったわけですが、会社としてやっていけそうだなと実感できたのは、どの頃なんでしょう?

『マッハGoGoGo』とか『ガッチャマン』時代は、あったかもしれないですね。

会社としては、億に近い借金も返していきながら、本数も多かったですからね。それから、他にアニメもなかったですし、やればある程度当たりました。そういう意味では、いちばんよかった時代ですね。その後は、吉田竜夫氏が病気になる頃、僕なんかも、雑誌から打ち込んできたエネルギーを、だいぶ使い果たし、『ガッチャマン』でピークの頃でも、先々のこと考えると、吉田竜夫や僕の絵柄のままじゃいけないな、と思い始めまして。でも、その代わりに、笹川氏のギャグなどが出てきましたし、天野君みたいな、いいもの持ってる

43 **パイロットA**
原作・丸山健二 《え・》吉田竜夫
少年画報(少年画報社)
1960(昭和35)年11月号～
1964(昭和39)年4月号

44 **のろわれた拳銃 デビルジョスレー**
第5話 最後の銃声
《え・》九里一平
まんが王(秋田書店)
1960(昭和35)年12月号

45 **少年鉄仮面**
原作 川内康範 脚色 武田知之
《え・》九里一平
少年(光文社)
1960(昭和35)年12月号～
1961(昭和36)年3月号

46 **ジュードー・ボーイ**
新井豊・原作 吉田竜夫・構成
九里一平・え
少年ブック(集英社)
1961(昭和36)年1月号～
1962(昭和37)年3月号

47 **ライフル ロック**
九里一平
少年お正月大増刊 探偵ブック(光文社)
1961(昭和36)年 新年増刊号

48 **少年快速王**
《え・》九里一平
冒険王(秋田書店)
1961(昭和36)年 お正月大増刊号

指令000(スリーゼロ)

人間がいれば、見出していったり。下元（明子、現／河井ノア）君しかりですよ。

――『ガッチャマン』の頃から、アニメだけではなく、プラモデルとか関連の会社を増やして、いろいろなことに挑戦していく時期がありますよね。それはこれまでの方向性だけでは、吉田竜夫さんが不安を感じていたということなんでしょうか？

いや、それはなかったと思います。多角的なことっていうのは、売れてるいちばんいい時だからこそ、よそに出すより、自分たちで事業くらいはしないといけない。事業をやってれば、自分たちがスポンサーの一部になれる。いまだに、どこも考えることなんだけど、当時、それをやろうとしました。あれなんかそうでしたね……『破裏拳ポリマー』。タツノコランドというプラモの会社を作って、そこにスポンサーとして乗ったんです。夢だった。やりたい作品を作るためにはね、自分たちが（場を）作らないといけないという発想です。

――吉田竜夫さんがご病気になられた時って、九里さんはいつ頃から、そんなにお悪いとお気づきになっていたんですか？

ええとね……悪いというの……確か、（亡くなった年の）春頃かな。

――時期的にいうと『風船少女テンプルちゃん』の準備が動いていた頃ですね。『テンプルちゃん』は、キャラクター、絵はメインではやられてないけど、企画の進行は関わって、途中で入院されたということでしょうか？

だと思いますね。僕はその頃、プロデューサーでしたから、（企画の詰めで）籠もったりするのに、どうしてもついていかなければいけなくて。鳥海（尽三）さんと一緒に箱根に行ってね。そこに吉田竜夫さんはいなかったですからね。

――人間ドックに行かれたけど、異常は見つからなかったという話で。

つき合いがあったスポンサーの重役さんに紹介されて、僕が病院に健康診断に連れていってあげたことがあるんです。だいたい、風邪をひきやすいタイプだったですね。年中、くしゃみしてて。またやってるなって。ところが、本物でしたね。

――若手は育てられていたんでしょうけど、竜夫さんが突然亡くなられた打撃というのは、やはり大きかったんでしょうか？

そりゃ、そうですね。まさか、そんなことになるとは思わないし。突然引退されてしまったようなもの。そりゃ困りましたね。誰からも親しまれて、どこに出してもひけをとらない。兄貴のこと言うと手前味噌になるけど、かなりの名士に会っても対等で迎えるくらいの器量を持ってましたから。みんな、そのへんの魅力に取り憑かれてました。読広の上の人もみんなそうでしたし。オモチャメーカーの重役でも「たっちゃん、たっちゃん」ってね。もう、惚れてたくらいで。会社の中でも、みんなに親しまれてたし。カリスマ的な存在感はありましたね。我々はそれをいいことにして持ち上げながら。こう側面で演出しながら、みんなを繋いでましたね。

（2002年3月26日、於／東京都国分寺市「竜の子プロダクション」）

49
《え・》九里一平
冒険王（秋田書店）
1961（昭和36）年2月号～11月号

50
少年スピード王
久米みのる・原作　九里一平（・え）
少年（光文社）
1961（昭和36）年4月号～1962（昭和37）年2月号

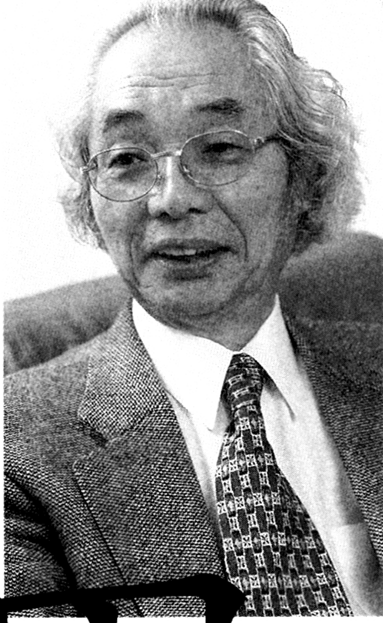
51
はやぶさQ
吉田竜夫（・え）　丸山健二・案
ぼくら（講談社）
1961（昭和36）年7月号～1962（昭和37）年7月号

52
海洋少年隊
九里一平（・え）
まんが王→小学生画報→まんが王（秋田書店）
1961（昭和36）年8月号～1963（昭和38）年7月号

53
ハリケーンGメン
梶原一騎（原作）　九里一平（え）
冒険王（秋田書店）
1961（昭和36）年12月号～1963（昭和38）年5月号

54
チャンピオン太
梶原一騎・原作　吉田竜夫・まんが
週刊少年マガジン（講談社）
1962（昭和37）年1月1日（1）号～1963（昭和38）年12月22日（52）号

テスターZ



（よしだ・けんじ）
1935年1月1日、京都市南区比永城町に生まれる。吉田兄弟の次男。16歳の頃から、兄・竜夫の手伝いをして、京都や神戸の紙芝居製作元の仕事や挿絵のアルバイトをする。東京への上京後も神戸の紙芝居を続けながら、更に貸本漫画の表紙絵専門の絵描きとして、丸山健太(二)のペンネームで嶋村出版などで活躍する。又、漫画家だった天馬正人らと竜の子プロの作家として原作やアイディア提供など文芸面を陰で支えた。自社でアニメ制作をすることになってからは、プロデューサーとして金銭面の管理を行っている。'73年には、アニメ制作だけでなくプラモデルなどの玩具製造・販売のタツノコランド(後にシーホースと改名)にも関与。'77年に兄・竜夫の急逝後、同社の2代目社長として、音楽出版を自社内に設けたり、自社ブランドのビデオ発売など精力的に業務を拡張する。一時期、同社を離れて、自ら遊エンターテインメントという会社を起こして『横山光輝　三国志』などの制作にも関与するが、'95年に復帰。現在、竜の子プロの会長。

吉田健二

●株式会社　竜の子プロダクション
代表取締役会長

兄貴も酒は大好きだから

——まず、吉田竜夫さんが挿絵画家になられた頃からお願いします。

兄貴はね、昔から絵がうまくて挿画家を希望してたんですよ。京都にいた頃から、いろんな絵の活動をやっていたんだけど、僕が20歳の頃だから、昭和30年くらいかな？　上京して、雑誌の「少年画報」などの仕事に携わるるようになりましてね。

——竜夫さんが上京された頃というのは？

京都で結婚してきたんです。1年遅れて、僕と弟が一緒に東京に出てきました。その頃はもう兄貴は、講談社や少年画報社の仕事が膨れあがってて、それまでは浅草に学生が住むようなアパートを借りていたんですけれど、仕事場、アトリエが必要ということで、小岩のほうの少し大きな部屋

55 **テスターZ**
丸山健二 作　九里一平《・え》
少年（光文社）
1962（昭和37）年3月号〜12月号

56 **すぴーどぶんちゃん**
九里一平《・え》
小学二年生（小学館）
1962（昭和37）年4月号〜10月号

57 **少年ライフル部隊**
久米みのる・原作　九里一平・え
小学四年生（小学館）
1962（昭和37）年4月号〜12月号

58 **走れ　はやぶさ**
丸山健二・原作　吉田竜夫・まんが
たのしい三年生（講談社）
1962（昭和37）年7月号〜
1963（昭和38）年3月号

59 **0戦チャンピオン**
高森朝雄・原作　吉田竜夫・まんが
ぼくら（講談社）
1962（昭和37）年8月号〜
1963（昭和38）年9月号

60 **大空のちかい**
九里一平《・え》
週刊少年サンデー（小学館）
1962（昭和37）年11月4日（45）

に引っ越したんです。そこで三兄弟、同居しました。

――その当時、アシスタントみたいな方はいらっしゃったんですか？

いや、その役はまだ我々がね。あの当時は「少年サンデー」とか「少年マガジン」とか週刊誌が創刊されていませんから、そこまで忙しくなかった。でも、分担はしてましたよ。ベタ塗りや枠引いたり、資料探し、それから割付までね。かなり仕事はありましたね。

――『鉄腕リキヤ』がデビュー作なんですね。原作は梶原一騎さんですよね？

梶原さんとは、僕らが1年後に来た時は、もうコンビ組んでましたね。兄貴も酒は大好きだから、浅草当時は飲み友達で、ふたりでよく飲みに行ってましたよ。梶原さんというのは、ちょっと横柄な感じでねえ(笑)。あの人、飲みに行くとよく借金して(笑)。

――竜夫さんが先に挿絵画家としてデビューされてますけど、こんどは九里さんが漫画家としてデビューされてますよね。

そうですね、でも、それはちょっと後。

――九里さんがまだ、漫画家としてデビューしてない頃に、上京してきたわけですか？　それでは、小岩にいらっしゃる時に、原稿の持ち込みなどをされたんですか？

そうですね。当時は、僕もよく描いていて。アシスタントをしながら、漫画単行本の表紙を描いてました。貸本漫画、昔、流行ったでしょう？

こういうの。1年、2年くらいやってたのかな？

――小岩から現在のスタジオがある国分寺へ引っ越されるわけですね。どうして国分寺に？

小岩は工場があって空気がよくないし、騒音がある。そこと比べると（国分寺のほうが）静かで、土地が安いしね。40坪くらいの土地を買って、家を建てることに決めてましたから。

――そこに引っ越された頃の作品というのは？

『チャンピオン太』の時期だと思うんだけどね。そのあたりから人（アシスタント）が増えてきて。最初のアシスタントに、望月三起也さんがいたんです。すでに単行本は出されてたと思うんですけど、まだ名が売れてなかった頃で。古城（武司）さんも同じくらいですね。もうひとり、週刊誌をやられてた、天馬正人さんというのがおられて……その方が古城さんを紹介してくれたのかな？　それから、同じ京都出身で『タイガー・マスク』の辻なおきさん。

――その頃になると、健二さんは、すでに完全に竜夫さんや九里さんのマネージメントのほうに？

まだ、マネージャー半分ですね。雑誌社の方が来られての仕事だったですから、来たものはたいがい受けてましたね。ただ、忙しくなれば、僕が出かけていかなければならない。雑誌社には交渉してましたから。大きな交渉は兄貴がやってましたけど。アニメになってからだと、絵はもうやめて、経営のほうに没頭するようになりました。『マッハGoGoGo』の頃は240〜250人の社員がいましたからね。

号〜1963（昭和38）年12月15日(52)号

61 **ファイター健**
吉田竜夫・原作　九里一平・え
少年ブック（集英社）
1962（昭和37）年5月号〜1963（昭和38）年4月号

62 **からぶりけんちゃん**
久米みのる・原作　吉田竜夫・え
たのしい二年生（講談社）
1963（昭和38）年1月号〜3月号

63 **無敵のつばさ**
九里一平《え》
別冊少年サンデー（小学館）
1963（昭和38）年4月1日春季号

64 **マレー白虎隊**
九里一平《え》
少年ブック（集英社）
1963（昭和38）年5月号〜12月号

65 **すっとび力丸**
竜の子プロ・構成　九里一平・まんが
週刊少年マガジン（講談社）
1963（昭和38）年5月26日(22)号〜1963（昭和38）年9月8日(37)号

66 **青島要塞爆撃命令**
原案・須崎藤弥　《え・》九里一平
冒険王（秋田書店）
1963（昭和38）年6月号

理想の集団をこしらえようと思って

――仕事として絵を描かれるのを断念されたのは、どうしてなんでしょう？

　週刊誌の仕事をするようになって、もの凄く忙しくなったんですよ。それで我々3人もいるんだから、私はふたりをサポートする側に。それと、経営のほうに回ったんです。

――会社組織にされたきっかけというのは？

　保険制度とかそういうものが全然なかったでしょ。病気になると大変なことで。当時、よく言ってたのは『今日は先生、でも、連載終わればルンペン』……。働きやすい、理想の集団をこしらえようと思って。それでスタートしたんですね。

――会社にされた時の3人の肩書きは？　代表取締役は竜夫さんで？

　代表が3人いて、僕は代表取締役専務、九里は常務。3人でやるんだから、代表権は3人が持っていたほうがいいだろうし、その時は、もっと大きくしようという野望もありましたから。

――タツノコが漫画からアニメ制作に移られる過程ですが、最初の『宇宙エース』は東映（動画）でアニメ化が進んでいたんですよね？

　そうです。原作から原画までうちで作ろうということだったんです。笹川（ひろし）と原（征太郎）を東映へ研修に行かせて、3ヵ月くらい、アニメの作り方を勉強してもらったんです。だけど、最終的に権利関係の問題でダメになっちゃったんです。兄貴は、権利が全部、東映さんに行ってしまうのは嫌がったんですね。

――そこで、自分たちでスタジオを建てて、アニメを作ろうという話になるわけですが、その決断は、やはり竜夫さんがされたわけですか？

　そうです。兄貴がやろうって。僕らのほうは最初、やっぱり、雑誌にいたほうがいいんじゃないか、と言っていたんですが。けれど、結局、我々でやろうってことになったわけです。途方もないことなんだけれど、そのへんが、若さ、情熱っていうんですかね。また、アニメーションがそんなに大変なことだって、考えていなかった。ホント、漫画の何倍かくらいで済むだろうと。やってみたら、そうじゃなくて（笑）。

――アニメ制作用の最初のスタジオを建てられたのは、昭和39年の夏頃ということですが、せっかく建てられたご自宅を担保にされたそうで。場所を鷹の台にされたのは、やはり、候補として、国分寺に近い場所で探した結果だったんですか？

　そうです。仕事がしやすい静かなところね。林の中に小さい建物を建てて、後はプレハブね。どんどん（スタッフが）増えてくから。

――最初のスタッフ募集というのは、アニメーターだけでなくて、背景とか仕上げとか、いろんな職種をいっぺんに集めたわけですか？

　はい。

67
人間魚雷　回天
九里一平（・え）
別冊少年サンデー（小学館）
1963（昭和38）年　夏休み号

68
少年忍者部隊　月光
吉田竜夫（と竜の子プロ）
週刊少年キング（少年画報社）
1963（昭和38）年8月1日（創刊）号～1965（昭和40）年2月10日号

69
大空三四郎
原作・高森朝雄　まんが・吉田竜夫
ぼくら（講談社）
1963（昭和38）年10月号～1964（昭和39）年7月号

70
風雲からす丸
宮崎惇・原作　竜の子プロ・構成
木村光久・まんが
週刊少年マガジン（講談社）
1963（昭和38）年10月6日（41）号～12月8日（50）号
（竜の子プロ・構成は11月10日（46）号まで 以降はクレジットなし）

71
ハリス無段
梶原一騎・原作　吉田竜夫・まんが
週刊少年マガジン（講談社）
1963（昭和38）年12月15日（51）号～1965（昭和40）年4月4日（15）号

——技術指導については、どうされたんですか？

東映動画さんを辞めて来られた人が中心ですね。それから、うちの版権をやってた六郷（晃生）さんが（以前）東映動画にいて、彼が呼んでくれたのが……原画で虫プロから木下敏治さん。制作部長ですね。

——六郷さんの東映人脈で、経験者を集めて、その人たちに指導を頼みながら新人を入れて、という形だったんでしょうか？

うん。だけど、みんな素人集団で。（経験者といっても）ちょっと先輩くらいのもので。だから、ホント大変だったんですよね。

——健二さんも丸山健二名義で『宇宙エース』に脚本でクレジットされてるんですが。最初はシナリオまで含めて社内で全部やろうとされていたんですか？

僕はね、当時、すでに雑誌からは離れてましてね。人材や資金の確保やら。いちばん大変なのは資金なんですよ。雑誌やってる頃はともかく、アニメをやりだしたら、急に、金がドンドンなくなっていくわけですよね（笑）。助けてくれる人もいましたけどね。集英社の長野（規）さんですか、少年ジャンプの生みの親。そもそも、あの人がアニメをやりなさいって言ってくれたんです。

——これからはアニメの時代だと？

そうです。集英社の雑誌のほうで、連載してたんですけど。そういうことがあって、集英社にお金借りたりね。いろんなとこに金策を……。

——その後、タツノコと長くタッグを組むことになる読売広告社とは、どの段階で？

（『宇宙エース』が）4～5話できた状態で、スポンサーがつかない。そこで資金がもうダメで。雑誌の仕事ならともかく、アニメだと、タツノコだかカズノコだか知らないって（笑）。こりゃダメかな、と。当時、今と違って、映画のお金なんか、多少の担保入れたって、銀行も（資金を）出してくれないから。そこで、たまたまスポンサーが必要で（読広が）ついたんですが。

——テレビ局がフジというのは、スポンサーがついた時点で決まっていたんですか？

最初、日本テレビだったんですよ。契約書の段階まで来たんですよ。ところが日テレで企画していた『サブマリン707』、それを制作していたプロダクションが問題起こして、その煽りで我々まで信用がなくなってしまって（笑）。

——日テレの線が消えて、フジになった経緯というのは？

スポンサーにカネボウさんがついてから、読広さんが走り出した。で、読広さんが決めてくれたんです。ただ、『宇宙エース』が終わった後、こんどもまた1年間、（仕事が）なにもない。でも、スタッフはいっぱいでしょ？　作り続けていかなきゃ……。

——続く作品は『マッハGo Go Go』ですが、すぐに作り始めてはいたんですか？

ええ。それもまた、日テレさんがやれってことで、7話か8話か、あの当時、モノクロとカラーと、両方見られるような作り方をしなきゃいけな

72
白虎戦車隊
九里一平（・え）
少年ブック（集英社）
1964（昭和39）年1月号～7月号

73
大空のちかい〔第2部・ラバウルの巻〕
九里一平（・え）
週刊少年サンデー（小学館）
1964（昭和39）年1月10日（2）号～5月3日（19）号

74
爆音
九里一平（・え）
別冊少年サンデー（小学館）
1964（昭和39）年　正月ゆかい号

75
風の力丸
竜の子プロ・作　九里一平・え
中一時代（旺文社）
1964（昭和39）年4月号～1965（昭和40）年3月号

76
探偵長　ジャガー7
竜の子プロ　九里一平
別冊少年マガジン（講談社）
1965（昭和40）年　春の特大号

77
宇宙エース
吉田竜夫と竜の子プロダクション
少年ブック（集英社）
1964（昭和39）年7月号～1966（昭和41）年5月号

い。日テレさんで、明度の研究とか、色の調整とか研究してましたよ。そうこうして、1年ですね。すぐに放送が決まらなかった。

――日テレさんはその時、どうして、またダメになったんですか？

それは代理店の問題でね……。読広さんが交渉をやる、保証もするという条件で、資金を1億円強出してもらって……それでも、また借金は残るわけです。もう大変ですョ。

――『宇宙エース』を大変な状況で制作されて、続く『マッハGoGoGo』でカラー化、キャラクターもリアル路線になったりと、また冒険を重ねた印象があるんですが。

当時、カラーには魅力があったから。海外に一刻も早く進出しようという想いと重なって『マッハGoGoGo』、決心しました。

――カラー制作、海外展開ということでは、虫プロさんが1歩先んじているわけですが、それを意識したとか？

かなりありましたね。同じ雑誌畑でスタートしてね。向こうは大先輩、天下の手塚さんですし。

――『マッハGoGoGo』のリアルな絵柄というのも、虫プロには当時ないもの、という意識もあったんでしょうか？　タツノコのオリジナリティとして。

いやーありましたね。そういうものを作ろうと。（虫プロと）同じようなものを作ってもダメですからね。

――笹川（ひろし）さんにお伺いしたんですが、『マッハGoGoGo』の放映が始まってもまだ、スポンサーが決まってなくて、最初の3話くらい、スポンサーなしで放送したという。

そうなんです。というのは、読広が全然、スポンサーをつけられなくて。それで、フジテレビに持ち込みました。編成局長が局で買いましょうと言ってくれたんですね。局買いですね。局でオープンしてスポンサーをつける。局が代理店をするんですね。

あれはやっぱり、いちばん心に残る作品で

――企画文芸部に制作部、タツノコの中にもいくつかセクションがあって、そうしたスタッフをまとめていくご苦労などは？

（苦労は）しょっちゅうありました。多人数になればなるほど、いつもなんかブスブスブスブス（笑）。スタッフが多くなると、とにかく、先行する作品のことを考えた。企画については迷いましたね。『みなしごハッチ』の時に虫を題材にするっていうのは、兄貴のほうから言い出してね。あの当時、昆虫ブームで、子供が虫を掘ったりするのを見て、虫がいいってことだったんでしょうけど。僕らは『シートン動物記』とか、動物を主体にしたほうがいいと思ったんですけどね。

それでも兄が是非にと主張しまして、文芸部で

78
てれびまんが宇宙エース
竜の子プロダクション　吉田竜夫
幼稚園（小学館）
1965（昭和40）年10月号～1966（昭和41）年6月号

79
戦場
吉田竜夫　竜の子プロダクション
別冊少年ブックビッグX（集英社）
1965（昭和40）年12月号

80
宇宙エース
吉田竜夫・作　竜の子プロダクション
週刊マーガレット（集英社）
1966（昭和41）年1月2日（1）号～2月13日（7）号

81
少年シャープ
竜の子プロダクション　吉田竜夫
小学二年生（小学館）
1966（昭和41）年1月号～3月号
小学三年生（小学館）
1966（昭和41）年4月号～8月号

82
宇宙エース　トミーの友情
吉田竜夫　竜の子プロダクション
少年ブック（集英社）
1966（昭和41）年　正月増刊号

83
スピードクリちゃん
竜の子プロダクション　吉田竜夫
小学二年生（小学館）
1966（昭和41）年4月号～1967（昭和42）年3月号

相模湖の湖畔亭で企画を詰めたんですけれど、なかなか、いいんですよね。これ、いけるんじゃないかなと。

——母を捜すっていうストーリーは、湖畔亭の籠もりの結果、鳥海（尽三）さんがそういうストーリーの骨子、虫ものにそういうドラマをつけて上げてきた？

尽三さんもそうですが、うちの兄が大部分、アイデアを出したんでしょう。これは面白いな、と。昆虫記じゃないですしね。また、母を訪ねて……でもないし。また、当時、親と子の問題が騒がれていた時代で。ただ、1話ができても、まだスポンサーが見つからない。森永（製菓）さんは虫は嫌だ。食べ物のお菓子に虫は売れない。そういう感覚ですから。読広にも反対されて。そうこうしているうちに、サッポロビールさんが。当時、ジュースでリボン・シトロンを出しておりましてね。で、サッポロビールさんに『みなしごハッチ』を見せたら、『これいい！』ってね。それで決まっちゃったの。その時は背水の陣で、これがつかなかったら、えらいことになる。会社の縮小を考えなきゃならんか、と。

——結果、タツノコプロの代表作になりましたからね。

そうですね。あれはやっぱり、いちばん心に残る作品で。作る時の大変さ。あとやってくうちに、参加する人が多くなっちゃってね。こちらとしては、いちばん管理しやすい形が『みなしごハッチ』だった。

——それはみんなが参加したいって言ってきたんですか？

そうそう。参加させてくださいって。外からの脚本もね。プロダクションで人材の管理をするには、みんな乗る作品を作れば、問題なくスムースにいけるんだなって。

——『マッハGoGoGo』の後、『グズラ』『ドカチン』といったギャグ路線が来ますが、これはどういった意図があってのことなんでしょう？

だいたい僕はギャグが好きなんですよ。兄の絵は兄に任せておけばいいんで、いろいろ幅を広くしたいと。ただ、笑いというのは難しいですよね。シナリオで書けない部分なんですよ。漫画的なセンスがある演出家がいないと。

——シリアス路線というのは、竜夫さんや九里さんのほうで自然にでき上がるけれども、ギャグのほうは、健二さんが挑戦できる居場所、領域みたいなことだったんですかね？

みんな、同じですけどね。タツノコの中でも、ギャグというのは、そういう作品（『グズラ』など）の中で入れられないかなと。だから、いつもギャグの時は、意外と顔、出してるんです。

——『ハクション大魔王』もそうなんですか？

そうですね。兄貴もまぁ、ギャグの絵柄も、器用な人で、キャラクター設定も書きますから。その時は、なぜか知らないけれど、私に意見を求めてきました。

——『ガッチャマン』が終わる頃、東映、虫プロの組合運動が、少し時間を置いてからタツノコプ

84
てれびまんが宇宙エース
竜の子プロダクション　吉田竜夫
よいこ（小学館）
1966（昭和41）年4月号〜7月号

85
マッハGoGoGo
吉田竜夫　竜の子プロダクション
少年ブック（集英社）
1966（昭和41）年6月号〜1968（昭和43）年5月号

86
弾丸児
九里一平とタツノコプロ
週刊少年サンデー（小学館）
1967（昭和42）年7月9日（28）号〜1968（昭和43）年3月31日（14）号

87
同期の桜
吉田竜夫　タツノコプロ
週刊少年サンデー（小学館）
1967（昭和42）年8月20日（34）号

88
マッハGoGoGo
吉田竜夫　タツノコプロダクション
（10、11月号）
原作・吉田竜夫　絵・奥田たつお
（12月号）
小学館コミックス（小学館）
1967（昭和42）年10月号〜12月号

89
同期の桜　月光編
吉田竜夫とタツノコプロ
週刊少年サンデー（小学館）
1967（昭和42）年10月15日（42）号

口にも影響しますよね？　賃金問題などで、その時期に70～80名が辞めて、再度スタッフを集めるのに苦労されたとか。竜夫さんが日本を離れられているタイミングで、健二さんがだいぶ苦労されたそうですが。

いろんなことがあって、どれが苦労なのかもわからないくらい。人が辞めていったのを止めないで見ていたことがありましたね。本数は少なくなる、かといって、読広さんに逆らって他のところに営業できない。もの凄くピンチで、人件費はかさんでくる。そういうときは人数減らすしかないなという、そういう厳しい気持ちはあったですね……。

心の準備どころじゃなかったですね

――竜夫さんの身体の不調は、健二さんは、どの頃からご存じだったんですか？

兄が亡くなる、確か9月5日に亡くなってるんですが。その年の3月頃、風邪をひいて調子が悪い、あまり仕事のほうも熱心にできない、と。で、人間ドックに2日ばかり入って。それが6月だったかなぁ……。それで大丈夫でね。ちょっと肝臓が悪いってことくらいかなぁ。……ところが、どんどん悪くなってきたんですよ。腹の調子がおかしいって、煙草を吸わなくなった。食事も少し変化があって、病院に行くよと。医者に診てもらったほうがいいよって。

――入院された後も、いくつか病院を変わられたそうですが。

1回、2回ですね。最初の病院の手配が遅かったのか、病院の選び方ものんきにかまえていた。

――病気のことは、健二さんたちのほうが先にご存じだったりしたんですか。

僕が知ったのは……最後の病院に行くちょっと前ですね。3日ほど前に、癌の疑いがあるって聞かされて。

――竜夫さんご自身は最後まで知らなかったんですか？

知らないです。僕と九里も、ホントに知ったのは、かなり後からですから。1ヵ月……ぎりぎりのところですよ。それまでは、その「疑い」。だから心の準備どころじゃなかったですね。ちょうどあれは『ヤッターマン』の制作に入った頃で。（兄は）ほとんど仕事してないと思うの。キャラクターだけで。

――竜夫さんが突然亡くなられてしまった後、結局、健二さんが会社を引き継がれたわけですが、そこまでの竜夫さんのお仕事というのは、健二さんは把握されてたんですか？

もう、なにがどうっていうより、一緒になってやってましたからな。3人でささえていた。

――では、ある程度状況はわかって。

兄の場合は、営業そのものより、物作りを中心にしてましたから。基本は3人でがっちりと分担

90 **同期の桜　特攻編**
吉田竜夫とタツノコプロ
週刊少年サンデー（小学館）1967（昭和42）年11月26日（48）号

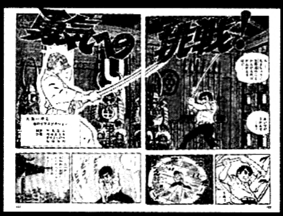
91 **人間魚雷　回天**
吉田竜夫、タツノコプロ
週刊少年サンデー（小学館）1967（昭和42）年12月10日（50）号

92 **少年スピード王　マッハGoGoGo 怪盗ピカソ仮面の巻**
吉田竜夫　タツノコプロ
少年ブック　新年増刊　テレビまんがブック（集英社）1968（昭和43）年　新年増刊号　テレビまんがブック

93 **紅三四郎**
九里一平と竜の子プロ
週刊少年サンデー（小学館）1968（昭和43）年7月28日（31）号～11月17日（47）号

94 **怒りの柔道着**
九里一平と竜の子プロダクション
希望ライフ（潮出版）1968（昭和43）年11月号

95 **勇気への挑戦！**
九里一平と竜の子プロダクション
脚本／天馬正人
作画／内山まもる、安来よしのり、佐藤栄司
希望ライフ（潮出版）1969（昭和44）年1月号～2月号



しあってる、互いの支えを大切にしていましたから。

―― 実質的に経営面の中心で、会社のプロデュースは健二さんがやられてたから、竜夫さんが亡くなっても、今までの延長でやっていくような形で？

そうですよ。兄貴がいなくなって困ったのは、キャラクターとか物作り方面が手薄になっていくことで。(吉田竜夫氏が存命なら)他の作家では代わりになれない、もっといいものをどんどん作れただろうし。

―― 吉田竜夫さんという看板を失ったことでの影響というのは、やはりあったのでしょうか？ 営業のやりにくさとか。

そりゃ、ありました。社長が亡くなったんですからね。それに兄が物を作ってきたから、これからタツノコは物を作れないんじゃないかとかね。そういう面では、打撃は大きかったですよ。

ホント苦しいですよね

これからは、いろいろな技術がどんどん新しくなっていくから。我が社もそれに打ち勝っていかないといけない。ホント苦しいですよね、希望もありますけど。人材を抱えるということが、プロダクションのいちばん強いとこでも弱いとこでもあります。人材を抱えたら、仕事を回していかなければならない。ただ、人材不況の時は、仕事ができない。その兼ね合いをどうしたらいいかということ。現在はコンピュータ他、人が少なくてもできる時代になってきましたから、ある程度は楽なんですが、昔はそれで苦しみましたね。

自分たちはある程度作ったからいい、というわけには……ね。次の世代に伝えていく責任があるし。よりいいものを作っていきたいと。僕なんかも、私的なものでは贅沢してませんから。こういう作るということが好きですから。ただ、いろいろ反省もするんですね。作る側に立って物事を考えてきてたのが失敗だったかな？ 経営サイドで冷たく割り切ってね(笑)、やっていけば、この会社ももっと何倍も大きくなって、みんな豊かになれたかなと。夢と現実と、併せてまわりの人たちの幸せと。常に考えております。いろいろ考えることがあります(笑)。

(2002年3月26日、於／東京都国分寺市「竜の子プロダクション」)

96
とびだせ隼人
九里一平と竜の子プロダクション
希望ライフ(潮出版)
1969(昭和44)年3月号

97
紅三四郎
吉田竜夫と竜の子プロ　構成／天馬正人
作画／内山まもる、安来よしのり、佐藤栄司
少年ジャンプ(集英社)
1969(昭和44)年5月22日(10)号〜7月10日(13)号

98
ハクション大魔王
吉田竜夫とタツノコプロ　内山まもる・え↓天馬正人・案　内山まもる・え↓天馬正人・案　太田じろう・絵
たのしい幼稚園(講談社)
1969(昭和44)年11月号〜1970(昭和45)年10月号
《内山まもるは1970年2月まで、天馬正人・案は1月〜10月。太田じろう・絵は3月〜10月》

99
ハクション大魔王
吉田竜夫とタツノコプロ　絵・内山まもる、松岡よしき、富田まさよし
脚本・天馬正人
週刊ぼくらマガジン(講談社)
1969(昭和44)年11月18日(創刊)号〜1970(昭和45)年4月21日(17)号

タツノコプロ JACKET GRAFFITI

▲『宇宙エース』 品番号／M-17 形式／17cmフォノシート 発行所／朝日ソノプレス社 発行年月日／1965年7月1日 ジャケット総ページ数／ページ 価格（当時）／280円 収録内容／正主題歌と新録ドラマ「復讐ロボット・イボ」（脚色／若林一郎）

▲『マッハGoGoGo』 品番号／SCS-33 形式／17cmＥＰ 発行所／日本コロムビア 発行年月日／1967年7月 ジャケット総ページ数／6ページ 価格（当時）／300円 収録内容／正主題歌と挿入歌「たまにゃのどかに」

▲『マッハGoGoGo』 品番号／M-82 形式／17cmフォノシート 発行所／朝日ソノラマ 発行年月日／1967年4月5日 ジャケット総ページ数／16ページ 価格（当時）／300円 収録内容／正主題歌と新録ドラマ「魔のアクロバット族」（脚本／若林一郎）

▲『マッハGoGoGo』 品番号／CSF-2809 形式／17cmフォノシート 発行所／日本コロムビア 発行年月日／1967年4月 ジャケット総ページ数／16ページ 価格（当時）／280円 収録内容／正主題歌とサントラドラマ「マンモスカーの挑戦」

▲『マッハGoGoGo』 品番号／KSC-3014 形式／17cmフォノシート 発行所／勁文社 発行年月日／1967年4月 ジャケット総ページ数／12ページ 価格（当時）／300円 収録内容／正主題歌とサントラドラマ「謎の覆面レーサー」

▲『おらぁグズラだど』 品番号／SCS-61 形式／17cmＥＰ 発行所／日本コロムビア 発行年月日／1968年7月 ジャケット総ページ数／6ページ 価格（当時）／330円 収録内容／新主題歌「グズラ音頭」と正主題歌

▲『おらぁグズラだど』 品番号／M-103 形式／17cmＥＰ 発行所／朝日ソノラマ 発行年月日／1967年11月30日 ジャケット総ページ数／16ページ 価格（当時）／300円 収録内容／正主題歌と新録ドラマ「サーカスの巻」（脚本／若林一郎）

▲『おらぁグズラだど』 品番号／P-8 形式／17cmフォノシート 発行所／朝日ソノラマ 発行年月日／1968年7月1日 ジャケット総ページ数／16ページ 価格（当時）／330円 収録内容／新・旧の主題歌と新録ドラマ「グズラ音頭でおどろうどん」（脚本／若林一郎）

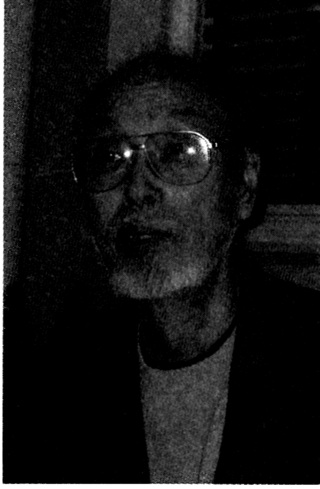
▲『ドカチン』 品番号／P-17 形式／17cmフォノシート 発行所／朝日ソノラマ 発行年月日／1968年10月5日 ジャケット総ページ数／16ページ 価格（当時）／330円 収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「ちびっこ家出」（脚本／若林一郎）

▲『紅三四郎』 品番号／CW-933 形式／17cmＥＰ 発行所／クラウンレコード 発行年月日／1969年4月 ジャケット総ページ数／6ページ 価格（当時）／370円 収録内容／正・副主題歌

第二章 企画文芸の理（ことわり）

■『決断』より

鳥海尽三



（とりうみ・じんぞう）

1929年2月1日、北海道空知郡滝川町（現在の滝川市）出身。陶山鉄、松浦健郎という2大脚本家に師事する。日本大学芸術学部映画科在学中に日活映画『お月さん今晩わ』（'58年）を酒井尽三名義で執筆。その一方で、バンド活動もしており、並行して日活映画の『だから言ったじゃないの』（'59年）、『若い港』（'64年）、テレビ映画『わんぱく同盟』などを執筆していた。映画産業の斜陽もあって'64年に虫プロ文芸部に所属。『鉄腕アトム』の脚本に参加。オリジナル作品を作りたいという思いから、'65年4月に社員としてタツノコプロ文芸課へ。自ら主宰するイデア工房をシリーズの中核に添えて『宇宙エース』後半の脚本を執筆する。『マッハGoGoGo』以降は、広瀬正、陣野修など、自らの人脈を使って企画立案から作品に全面参加。タツノコプロ初期作品のイメージリーダーとして同社の全作品のメインライターを務める。タツノコ時代は、企画文芸部長兼制作部長を経て、取締役企画本部長に昇格。

'77年12月に文芸部にいた鳥海を代表に、陶山智、酒井あきよしが独立し鳥プロを設立。『宇宙魔神ダイケンゴー』の企画・製作や、3人の共同ペンネーム・響わたる名義でタカラの玩具『ミクロマン』のコミカライズ漫画を講談社「テレビマガジン」誌上で連載する。しかし、脚本家の集団だったことが仇となり短命に。'83年に日本サンライズ企画部、'84年にタツノコプロ企画室に所属。以後、フリーとして多くの作品に参加する。'88年にシナリオサークルの鳳工房を主宰。2000年度、日本シナリオ作家協会よりシナリオ功労賞を受賞する。

虫プロは、オリジナルってわけにはいかないじゃない

――鳥海さんは、虫プロからタツノコに移られたわけですけど、移籍された理由は？

虫プロから移る時、ここに来たらオリジナルで自分のやりたいものがやれると思ったからね。虫プロは、手塚（治虫）さんのとこだから、オリジナルってわけにはいかないじゃない（笑）。だから、ここを母体にして、やりたいことやってやろうって。そうじゃなかったら入らなかった。オリジナルが魅力だったからね。

――最初、タツノコに行かれた時、『宇宙エース』のパイロットは完成してました？

見た、見せられた。ところが、その前に手塚さんの所で既に見てた。フジテレビにいたプロデューサーが、こっそり持ってきてた。でも手塚さん、「他社が、こういういい物を作ってんだから負けられない、頑張れよ」って評価してたよ。で、僕は『宇宙エース』の9話からかな、担当したんだ。9話から視聴率、ボンと上がった（笑）。

――資料だと、実際の執筆は広瀬正さんですが。

そう、彼と一緒に書いたの。それで、僕も書きながら、いろいろな連中を探すようになったんだ。

――**当時、企画文芸部は、本当に鳥海さんおひとりで？**

暫くやってた。あとは、広瀬（正）か。彼は外部だったけど、家もわりあい近かったし、よく飲んだりしてたんですよ。それで、イデア工房ってグループを作った。俺と広瀬と鈴木良武、それから誰だっけ？　日経だかで新聞記者やってた……。

――**草川隆さん？**

そうそうそう、4人でやってた。俺が、二股かけたような状態で(笑)。

――**当時のタツノコプロのご様子は？**

まぁ『宇宙エース』はなんとかやったでしょ。ところが2本目が決まらなかったから、京都の宿で、一晩で適当なストーリーを作ってタイトルつけて、吉田竜夫と一緒に『宇宙エース』の延長を、カネボウに頼みに行った。スポンサーだったから。フジテレビからプロデューサーも来たかな？　そしたら「これから面白くなりますね」って言うから、てっきり延長してくれるなと思ったら、やらねぇって。ガッカリして、吉田竜夫と京都の街をフラフラしてて、それでレースものやろうかっちゅうことになって、決まったのが『マッハGoGoGo』。なんか漫画があったでしょ、原作が？

――**『パイロットA』ですね？**

「これ使えないか?」って吉田竜夫が言うから「使えない」って(笑)。まぁ、部分的には使ったけど。

――**覆面レーサーの設定ってのは、鳥海さんが作られたとか？**

原作にあったと思ったけど……なかった？　なんかその、意味もなく出てくるようなことはできないからね。ところが、これもエピソードがある。僕が企画書を作って、ふたりで打ち合わせしたら、吉田竜夫が「ホームドラマの設定でやりたい」って言うから、俺は「駄目だ」って言った。意見が合わなくて、俺、そっぽ向いちゃったんだ。30分ぐらい、本っ当に喋らなかった。そしたら吉田竜夫が「鳥さん、やっぱりアクション仕立てにしたほうがいいのかな?」って言うから「企画書でこれだけ家族構成やってたら、ホームドラマの要素が入らないわけないでしょ?」って言った。だから、ことさら強調しなくても、ちゃんと入ってんだって。アレですよ、（レースに）勝つか負けるかだったら、面白くも可笑しくもないじゃない。「それで行こ」って(笑)。ここが吉田竜夫のいいところなんだけど、そういうことがわかったら速い。でなかったら失敗してました。ところがね、代理店の人が10話も終わってない頃、バイヤーと一緒にタツノコに来て「シナリオが面白くない」って言ったの。それで俺、頭に来てね「どこが面白くないんだ!」って、怒鳴ったことあるよ。そうこうしてたら視聴率が上がって、16%ぐらいいったの。すると「シナリオがいいからねぇ」って、こうだもん。それから俺、代理店は信用しないことにした(笑)。

――**その後が『グズラ』ですが。**

『グズラ』は急に入ってきた。放映まで2ヵ月かそこら、3ヵ月はなかったと思ったな。で、吉田竜夫が「鳥さんできるか?」って言うから「できるよ」って。キャラクターは、たしかあったんだけど、タイトルがなかなか出てこなかったんだよね。もう時間ばっかり経つし、笹川（ひろし）が面倒くさがって「グズな怪獣なんだから、グズラとでもしとけば?」って(笑)。でも『グズラ』は書いてて楽しかったな。

――**『グズラ』は当初からモノクロの予定だったんですか？**

いや、だって2作目の『マッハ』がカラーだもん。だけど、そういう、切羽詰まった状況だったから、モノクロでやったんだよね。そんなに当たるとも思わないし(笑)。ところが、意外と当たっちゃったからね。

■『おらぁグズラだど』

—— その次が『ドカチン』ですね。

あれは完全に僕のアイディア。〝げんし〟って言葉から連想するものって、原始時代と原子爆弾と両方あるでしょ? だから、原始から現代に甦ってきた一家を使って、いくら現代が科学の時代だからって、そうとばかりはいえないよ、って風刺したんですよ。でも、アレだね、『ドカチン』の

■『ドカチン』

笹川ひろしは抜群だった。彼、言ってたもん、「ギャグの演出家にさせられちゃった」って(笑)。だから『キャシャーン』の時、「1本(シリアスものを)やってみる?」って、やらしたの。そしたらクールな、いい演出やりましたよ。あれで僕は彼を評価したな。その後も依然としてギャグものばっかりやらされてたけど(笑)。それに、僕が文芸をやってた頃は、僕のOKが出ないと(シナリオを)演出に廻さなかったんだけど、彼はそれを勝手に直すようなことは(他の演出家に)させなかったからね。

吉田竜夫が「昆虫で何かできない?」って

東映に飯島敬って友達がいたんだけど、彼に言われたもん。「(タツノコの作品は)みんな当たるじゃないか。いったい、どういう作り方してんだ?」って(笑)。だから、俺、言ったんだよ。「企画の連中、温泉に連れてって、酒のんで酔っぱらって、すけべ話して終わり」(笑)。

—— (笑) 籠もり、ですよね? 相模湖の湖畔亭とかに泊まられて……。

あそこは初期だね。でも『ハッチ』は、あそこで企画書、作ったんだ。

—— 『ハッチ』の主人公って、最初は女の子だったそうですけど?

それ、吉田竜夫が言ったんだよ。そもそも吉田竜夫が「鳥さん、昆虫で何かできない?」って言ったの。だから俺、また「できるよ」って言った。俺、できないって言うの嫌いなの。「じゃ頼むよ」それで終わり(笑)。その後はもう、こっちでいろいろと調べて、でっち上げてね。それをまとめたのが、例の相模湖。吉田竜夫がキャラクターを描いて、俺は、せっせせっせとストーリーをまとめたわけ。

—— 母恋ものにされたのは、何か理由があるんですか?

それは、僕のお袋のイメージが強いんです。ほら、僕もご幼少の頃(笑)は、いたずらしたわけよ。すると親父が〝でれっき〟ちゅうのを持って、追っかけてくるの。僕、北海道(の出身)だから、ストーブがよく燃えるように石炭をかき混ぜる、先のこう曲がった鉄の棒が(家のなかに)あるんですよ。で、叩かれちゃ痛いから逃げる。いちばん安全な所は、お袋のお尻(笑)。その当時、お袋、太ってたからね。それでも親父、叩くんだよ。でも、俺は痛くねぇの。お袋が叩かれてるの。子供が悪いことしたのわかってても、やっぱりね、自分が叩かれながら庇ってくれてんですよ、母親ってのは。僕ら兄弟ね、その姿を見て〝観音様〟って言ってた。そのイメージがあった。それと、中国の残留孤児。母親は赤ん坊を連れて逃げたいんだけど、一緒に殺されるかもしれないから、せめて子供だけでもと思って、どっかの家の軒下に置

いて逃げちゃう。その人たちが日本に来て、母親と再会して、抱き合って泣いてんだよね。ただ血が繋がってるってだけで。だから旅の話にした。で、1話を書いた時に、永井（昌嗣）がね、まず読んだわけ。泣いてんの(笑)。「部長が泣かせるようなシナリオ書いてくれました」って、吉田竜夫のところに行ってんの。

――じゃあ当初から、当たりそうな手応えって、あったんですか？

いやいや。当時、物凄い当たってたアニメが他にあったの。『巨人の星』。「こんなんで勝てるか！」とか「当たるか！」とかいろいろ言われたんだけど、いつの時代になっても、どこの国だって母親と子供の愛情っちゅうのは不変なんだと。それで、まだ音が入んない、ラッシュをつないだフィルムをスポンサーに見せることになった。ただ見てもわかんないからって、僕がミキサー室っちゅうの？

■『昆虫物語　みなしごハッチ』ママ

あそこに入って、画に合わせて解説していった。森永の重役が3人来てたかな？　それが終わって、僕がスタジオへ戻ると、3人ともいないんだよ。それで〝これは駄目だわい〟ということになったんだけど、ところが決めてくれたのは森永ですよ。というのは、その日は、大変な会議をわざわざ抜けてきてたから、戻んなきゃいけなかったわけ。そういうことも、ありました。

「あるのは鳥海カラーだ」って

俺、辞めてから、小山（高生）に言われたことあるよ。「タツノコカラーってのはない、あるのは鳥海カラーだ」って(笑)。そりゃねえ、だいたい1話って僕が書いてるでしょ？　書かなかったのは『宇宙エース』ぐらい？　やっぱ、1話って原作に匹敵するんですよ。世界観からキャラクターの性格から、全部作るわけだから。自分で企画して、ストーリー構成もやるでしょ。そうすると、出だしはこうしておけば、あとは（他の脚本家が）書けるな、と。もうわかっちゃうからね。僕は、本格的な劇場の映画からやってきてるから、いい加減な作り方って嫌なんですよ。そうするとね、やっぱり敵も出てくるわな。それに、社員のボーナスだって、僕が査定するんだもん。そういう責任もあるし、かなりうるさくやったから、味方50、敵50だったですよ。それでいいと思ってるけどね。

だらしないから、みんな、特にアニメーターなんて。いや、僕も11時過ぎに（会社に）行くんだけどね。だからタイムカードなんて押したことない。俺にタイムカード押せって言った時は「お世話になりました」だよ(笑)。ただ、寝坊して11時に行くんじゃないんだよ。だってね、2本も3本も先の企画を作ってるってことは、家で2時だか3時までやってるわけよ。責任あるんだから。そしたらね、起きるのはもう、10時ぐらいになっちゃうでしょ？　それから飯かっこんで会社に行くんだからさぁ。

――最後に吉田竜夫さんと一緒に進められた企画というと？

『一発貫太』の頃ですよ、あそこまで。いや、これもね、代理店が会社まで来て、「根性ものでないスポーツものをやりたい」って言うから、「ギャグでいいか？」って。じゃあ野球やるか、と。野球もドラマだというんでね、作ったんです。

――『一発貫太くん』の後、間もなくタツノコを去られるわけですけど……。

（竜夫さんが）亡くなって暫くして、〝ああ、ここにいてもしょうがないな〟と思ったし、もっといろんなことやりたくなったんですよ。だけどね、吉田竜夫が亡くならなくても、僕は、いずれはいなかった。段々、思うようなことできなくなってきてたしね。そらぁ10年以上やってきて、物書きだったら他に（場を）求めたいと思うでしょ？　このままじゃいかんな、と。

――吉田竜夫さんが肝臓癌になられたのは、いつ

――頃からご存じだったんですか？

初めから知ってますよ。倒れて、どっかの病院にかかって、家で寝てたんですよね。それで見舞いに行ったの。で、俺のよく知ってる医者がいるんです、そんな大きな病院じゃないんですけど、そこに入院したいって言うんで、すぐ、その日に入院したんです。そしたらその時に、言われたんです。それで暫くして、今度は日本医科大を紹介してもらって、そこの先生に診てもらったら、僕のところにまず電話が来たんですよ。「箝口令かけましょうか?」って言うから「かけてくれ」って言ったの。だから、僕は真っ先に知った。見舞いに行った連中も、誰も知らない。みんな呑気に、ちょっと具合が悪いぐらいにしか思ってなくて、俺も言えないしね。会社に行ったって、仕事になりゃしないよねぇ。企画、やる気もしないし、〃一体どうなるんだ、ここは?〃と思った。それで(吉田)健二氏と綾子(吉田竜夫未亡人)さんを呼んで、飯田橋の蕎麦屋でさ、初めて話したの。でも綾子さんは、覚悟してたんだろうね。

――その後、鳥プロを作られるわけですけど、最初はおひとりで独立されるおつもりだったんですか？　それとも最初から、酒井さん、陶山さんとご一緒に？

酒井はもう辞めてたし、陶山も辞めてた。

――じゃあ鳥海さんが辞められた後に、おふたりを？

そうそうそう。まだ(タツノコに)いたけど、もう辞めることが決まってからだね。あと、海老沼三郎がいたな。それで丁度、スポンサーに直接「何かやってよ」って言われてやったのが、『宇宙魔人ダイケンゴー』。

――タツノコに所属されてた時期を振り返られると、鳥海さんとしては、当初、狙われたようにオリジナル作品を充分にやれたと思えるような感慨は……。

そりゃあ、ありますよ。

――でしたら、鳥海さんのなかでいちばん、思い出が深い作品というと？

そうねぇ、力を入れてやったのは何本もあるけど、やっぱり『ハッチ』だろうね。あれが代表作ですよ。あれは僕でなきゃできない作品だから。自分の個人的なテーマでやってたからね。その経緯は『アニメシナリオ入門』(映人社)に詳しく書いた。原作と名乗るヤツがいたからね。まぁ『ガッチャマン』も面白かったし、『キャシャーン』みたいなのも好きだけどね。

――『キャシャーン』は最初のナレーションを考えられてますよね？

原案からやりました。ああいうの好きなのよ。『決断』(冒頭のナレーション)だって、俺が考えたし。地下鉄の電車の中でね。アニメンタリーって言葉も。

――ああいう漢語調の口上は、日活譲りなんですか？

いや、日活は関係ないです。ただ、あんなことが好きだから、小説を書くようになったんだろうね(笑)。

(2002年3月12日、於／東京都練馬区)

■『一発貫太くん』

■過日の企画文芸部、青梅鉄道博物館にて
右から小山高男（当時）、酒井あきよし、鳥海尽三、陶山智、落合茂一

（こずみ・れい）
1926年10月27日、石川県出身。本名・柴野拓美。'51年に東工大機械科卒業後、都立小山台高校定時制で数学の教師を務める。'56年に日本空飛ぶ円盤研究会に入会。そこで知り合った仲間と共に'57年5月15日、日本初のSF同人誌「宇宙塵」を創刊。星新一、矢野徹、光瀬龍、眉村卓、宮崎惇、伊藤典夫、野田昌宏など、多くのSF作家・翻訳家が名を連ねていた。
アニメ初参加はTBSから声をかけられた『宇宙少年ソラン』の脚本から。その後、友人の広瀬正から吉田竜夫を紹介され、『宇宙エース』の科学考証や脚本を担当する。'72年の『科学忍者隊ガッチャマン』では、SFマインド溢れる設定が受け、以後『新造人間キャシャーン』『宇宙の騎士テッカマン』と立て続けに参加。「SF考証」という分野の創始者として、後にタツノコSFと呼ばれる作品世界の構築に貢献した。
SFの研究家で、作家や翻訳家でもあり、ニーヴンの『リングワールド』、ホーガンの『造物主の選択』など訳書も多い。

小隅黎

「シルバーリングの原理を教えてくれ」って言われてもねえ（笑）

――『宇宙エース』に加わられたのは、鳥海尽三さんとの間に広瀬（正）さんが入って、そこから小隅さんのほうへ話が行ったという流れでいいんでしょうか。

だと思います。タツノコプロへ呼ばれて行って、まず見せられたのがパイロットフィルムでした。吉田竜夫さんとも、その時が初対面です。若くても、プロダクションを立ち上げるような人というのは、やっぱりたいしたもんだなぁと思った記憶があります。まさに創立者の顔だなという印象を受けました。ただ、お会いして最初に聞かれたのが「シルバーリングの原理を教えてくれ」っていうんで面食らっちゃって。考えたご本人にそんなことを言われてもねえ(笑)。その場では、「一種の力場（フォースフィールド）でしょう」としか言えませんでしたね。それにしては後で形が変わったりチャンバラしたりしてますけども(笑)。

――では、もともと「SF考証をお願いします」ということでタツノコに呼ばれたわけではないんですか？

そうではなくて、シノプシスや科学的なアイデ

ィアが欲しいということだったと思います。〝SF考証〟なんて言葉は、当時どこにもありませんでした。ずっと後になって、なにか肩書きをつけましょうってことで、最初は〝科学監修〟と言われたんですけど、とても恥ずかしくて「科学」や「監修」なんて言えないんで、「〝SF考証〟ではどうだ」と私が言ったら、それが通っちゃったと。でもねえ、〝SF考証〟って滑稽な名前だと思いません？　〝SF〟って、要するに仲間うちでの約束ごとでしょう？　その〝考証〟っていったいなんだと。なのに、妙にかっこいいんですよね。だからよけいに困っちゃう(笑)。

――広瀬さんも「宇宙塵」の同人ですから、小隅さんと並んでSF考証の2本柱として立ちそうなものですけど、それはなかった？

ないですねえ。広瀬さんが科学畑の人ではないからでしょうね。あくまでも脚本。でも、設定としてのアイディア出しはやってらっしゃったでしょうね。よく電話もありましたし、直接うちへいらっしゃったことも何度となくありました。これは『マッハGo Go Go』の時の話ですけども、マッハ号に7つの能力がありますよね。あれを「A～Gまでのつく名前をつけたいんだが、いいのはないか」と言われたことがあって。「これとこれとこれは考えた、じゃあこれはこうしようか」と、ふたりでひねり出した覚えがあります。

――『宇宙エース』では、17話の「プラチナ光線」や18話の「四次元の抜け穴」で、小隅さんは鳥海尽三さんと連名で、脚本クレジットされていますよね。

いいえ、私は脚本は書いておりません。ただ、かなり詳細なシノプシスを出してますから、それででしょう。「プラチナ光線」の時は、私はほんの思いつきを言っただけなんですよ。そもそもは向こうが「シルバーリングだけじゃ芸がないから何か凄いのはないか」と、つまり新しいアイディアを求めてきたんです。じゃあ、「うんと追いつめられた時にしか出せない超能力というのはどうだ」と。これはもう、昔からSFの世界ではよくある手でしてね。それに名前をつけろと言うんで、「エントロピー光線かプラチナ光線か」と。「じゃあプラチナ光線でいきましょう」という話になりました。

それも〝SF考証〟の範疇なんですよ

――『宇宙エース』から『ガッチャマン』までかなりブランクがありますが？

『グズラ』や『ドカチン』では私なんぞの出る幕はありませんからね(笑)。『ガッチャマン』は、鳥海（尽三）さんから連絡があったんだったと思います。あの頃、変身・合体という言葉がだんだん流行りだしていた。今でも覚えていますが、「今度はメカの変身とメカの合体をやります」というのが第一声でした。「あ、新しいアニメはそういうふうに発想するのか」と思ったものです。

――その段階では、メカの変身・合体はどこまで決まっていたのでしょう？

5機のGメカの、変身前後のデザインは、もうできていました。私が聞かれたのは、「それぞれ違った変身をさせたいので何かアイディアはないか」ということでした。ちょっといいかげんなんですけど、林の向こうを通り過ぎると変わっているとか、煙に包まれて変わるとか、ハーローに包まれて変わるとか、そういうのを4つか5つ出したと思います。どういう理屈で変わるのか、脱ぎ捨てるのか取り付けるのか、そういうことは一切言っておりません。全部あちらが決められたはずです。でも、形状記憶合金のようなものを考えればおかしくないんじゃないですかね。当時既にそういうものはありましたから。

――〝SF考証〟というよりは、ビジュアルのアイディアですね。

それも〝SF考証〟の範疇なんですよ。いわゆる生え抜きのSF仲間、お子さんじゃない方にも笑い飛ばされないような体裁を整えるのが〝SF考証〟の仕事ですから。ある時は言葉であったり、ある時は映像であったりします。私が一度ゴネたのは、(『ガッチャマン』の)劇場（版）の時ですね。部内試写か何かを見せていただいたんですが、セリフの中で「ブラックホールはアインシュタイン博士が予言し」って言ってたんです。あれは、そうじゃないんですよ。具体的に予言したのはオッペンハイマーですから。そこを直してもらいま

した。だいぶ渋られましたけど(笑)。あれは言うなれば〝科学歴史考証〟ですな。

――SF考証で、何か思い出深いものは？

これは先方に依頼されて考えたものなんですけど……（『ガッチャマン』のファンコレを取り出し）これですね。科学忍法火の鳥の原理。文字になって公にされたのはこれが初めてですし、思いついたのも実はこの時が初めてです(笑)。なにしろ視聴者から、「どうして形があんなに変わるんだ」とか、「火に包まれてももとの形より細くなるはずはないだろう」とか言われたんだそうで、何か説明をつけなきゃならないぞと(笑)。

Dr.コズミの
ガッチャマンSF考証Q&A
回答＝小隅黎

Q 火の鳥の原理はどういうものなのでしょうか？

A 四つのメカが変身を終えて母機に合体し、スイッチが入ると、電気フィールドでプラスとマイナス、磁気フィールドでNとSが引き合うように（それよりはずっと複雑で数式的には核力フィールドと似ていますが）、強力な時空フィールドが四つのメカを核として発生しゴッド・フェニックス母機全体を四次元空間の歪みにうずめて、外からのあらゆる攻撃を遮断します。このとき、四つの極のあいだに、クロス形に生ずるフィールドが、周囲の大気分子を激しくイオン化するため、風を切って飛ぶ十字形、すなわち光り輝く火の鳥となってみえるわけです。伝説の「火の鳥」とは関係ないわけですが、その外見と効果からみてもふさわしい名称といえるでしょう。

■ファンタスティックTVコレクションNo・3「科学忍者隊ガッチャマン」（朝日ソノラマ）より

――では放映当時は、火の鳥について考証を頼まれたわけではないんですか？

ないですね。「ああ、そういうものがあるのか、それもいいだろう」と思っただけです。あるいは、自分の頭の中ではこのように（機体を十字形の強力な力場で包んで半分亜空間に沈め、周囲の空気がイオン化されて炎の尾を引くと）解釈していたのかもしれません。これ（ファンコレ）の依頼があった時に、さっと出てきたんですから。いかにも〝なんとなく科学的〟な言葉で誤魔化したという意味では、自分でも傑作だと思ってます(笑)。

かなり英語に堪能な方がおられたんですね

――『キャシャーン』は『ガッチャマン』の放映中に始まっていますから、その頃は2本掛け持ちだったわけですか。

そういうことになりますね。『キャシャーン』は、笹川（ひろし）さんが入れこんでたのかな。最初っから私を引っ張り込んで、「あそこ考えてくれ」「ここ考えてくれ」ってずいぶん言われましたよ。だから『キャシャーン』にはかなり早くから関わっています。なぜブライキング・ボスだけが君臨しているのかについても理屈をつけた覚えがあります。ある程度以上の複雑さを持った回路が何かのきっかけで意識を持った存在になるというのは、SFではありふれたアイディアです。ブライキング・ボスが意識を持ったのは、いわば必然的な結果ですが、その時たまたま最初に自我に目覚めたのが彼で、他の連中は彼が手を下して目覚めさせたから1段低い能力しか与えられていない、ということです。そこまでやっている一方で、スワニーなんかはひとつの幻想として、最初からSF考証とは切り離して考えてましたね。ひとつだけ頭を抱えたのはフレンダーなんですよ。あんなに強いロボット犬がいったいどこから出てきたのか(笑)。あの時考えつけば良かったと思うのが、ブライキング・ボスが自分の部下を目覚めさせる時に1体だけ置き忘れたと。それを東博士がフレンダーに仕立てたということにすれば良かったなあと、後になって思いました。

――『テッカマン』は、当初から〝宇宙版ガッチャマン〟と言われてましたよね。

そうなんですか？　いや、それは知りませんでした。ただ、「お城があって馬があって騎士がいるんだ」という説明をされて、「うまいなぁ」と感心したのは覚えています。『キャシャーン』同様、最初の頃から入っていましたけども、『キャシャーン』ほど綿密に関わることはできませんでしたね。

――お城と馬と騎士というと、ナイトもののイメージでやられていたんでしょうか。

いや、それはあくまで喩えでしょう。たしかにスペースナイト・テッカマンとは言ってましたけどね。テッカマンていう名前はなんなんでしょうな？　鉄仮面をもじったんだそうですが、対外的

にはそうも言えませんから、私はＴＥＣＨ－Ａ－ＭＡＮと解釈することにしてたんです。だから、武器や何かも、テッカ○○ではなくて、テック○○と言わせているわけです。テックセッターも、最初はテッカセッターって言っていたんですよ。それを「テックセッターのほうがいいんじゃないの？」とかね。まあ、いちいち直したというほどのことでもない、ちょっとアイディアを出したって程度です。

――当時、読売広告社に松山（貫之）さんというネーミングの名人がいらっしゃって、『ガッチャマン』なんかもこの人の鶴の一声で決まっちゃったそうなんですけど。

ああ、聞いたことがあります。その方、かなり英語に堪能な方なんだと思いますよ。いや、私は当初、鳥海尽三さんから「ガチャ目のもじりだろう」って聞かされたり、ＧＵＴＳ－Ａ－ＭＡＮなのかなと思ったりしていたんです。ところが私、翻訳の仕事をしていながら当時知らなかったんですが、英語でＧＡＴＣＨＡあるいはＧＯＴＣＨＡってのは「やった！」の意味なんです。ＧＯＴ ＹＯＵ！の省略形なんです。だから後の『ヤッターマン』なんてのはまさにその邦訳なわけでね。実はあの頃、海外に紹介する時にも、ＧＵＴＳ－Ａ－ＭＡＮと書いたことがあるんですけど、その後すぐにＧＡＴＣＨＡっていう言葉があることを知って、ＧＡＴＣＨＡＭＡＮに直しています。むろんその方はご存じだったんでしょう。大した人がおられたわけですね。

絵がきれいだったから

――竜夫さんが亡くなられたのが、劇場版『ガッチャマン』の翌年ですね。

お世話になってましたから、お通夜にうかがって、お焼香だけはしてきたんですけど、お葬式の日は都合が悪くて行けなかったんです。お身体を悪くされてたってことはその時までまったく知りませんでした。絵を描いてらっしゃる姿を拝見する機会はなかったんですが、印象に残ってるのは、『ガッチャマン』の主題歌ができてきた時ですね。「誰だ、誰だ」のほうです。その時、ちょうどお邪魔していたので、それを聞かせてもらいまして、「どうですか？　いいね、これ使いましょう」なんて言われたのを覚えています。

――当時タツノコはすごく家庭的な雰囲気で、スタッフもよく旅行やパーティーに誘われたそうなんですが。

覚えているのは、『宇宙エース』が終わった時の慰労会ですね。あれは楽しかったですな。場所はどこだったのか、畳敷きの大広間でしたよ。その宴会の席で、スタッフの方が面白半分で作った『アダルト版宇宙エース』披露されたりして。もちろん動画じゃないですよ。紙にアサリちゃんとエースを描いて、ラブシーンを始めるんです。「エース、大好き！」「アサリちゃん！」なんてね。いやいや、やるなあと(笑)。その後、二次会だってことで、吉田（竜夫）さんに飲みに連れて行かれた覚えがあります。私と、広瀬さんと、笹川さんもいらっしゃったかな？　現場の近くでしたから、鷹の台か国分寺だったでしょうね。その時も、吉田さんてのはつくづく大人だなあと思いました。経営者ってのはこうでなきゃいけないんだなあとね。

『エース』といえば、最初赤ちゃん体型だったのが、後半は大人っぽくなったのも嬉しかったですねえ。真面目に、ＳＦっぽく考えてくれてたんだなあと思いました。『宇宙エース』でも『ガッチャマン』でもそうですけど、タツノコっていうところはとにかく絵がきれいだという印象を、私は持ってましたね。あれで絵がよくなかったら、ここまで熱を入れてやってはいなかったろうと思いますよ。だいたい、アニメやなにかの科学関係の考証なんてものは、本気でやると投げ出したくなります。それでもなんとか続けてこられたのは、絵の魅力に惹かれたからです。ＳＦ考証というものは、要するに妥協の産物ですからね。だから、最近出ている、空想科学ナントカなんて本を見ると、腹が立つんです。あんなアラ探しだけなら誰にでもできる。それをなんとか克服するためのアイディアを出す、〝なんとなく科学的〟な説明をつける、それが〝空想科学〟なんですから（註：〝空想科学〟という言葉を〝自然科学〟に対応する独立した概念として日本で初めて使ったのは小隅氏であるとされる）。

（2002年5月14日、於／神奈川県中郡）

陶山智

（すやま・さとる）
1937年11月28日、東京都墨田区出身。脚本家の陶山鉄の子息で、子供の頃から調布にあった日活の撮影所に出入りし活動映画に慣れ親しむ。'58年に日活に入社し企画室へ所属。'61年公開の『散弾銃の男』で原案を担当し、企画室から出される多くのプロットやシノプシスに関与。しかし、企画室での仕事は懇意にしてくれた人たちの退社や派閥問題もあり、あまり恵まれたものではなかった。同時期に、他社作品のアルバイトとして『宇宙エース』『光速エスパー』などの脚本を担当する。
'70年12月に、日活の路線変更もあってタツノコプロへ移籍。鳥海尽三や日活時代の上司・陣野修に呼ばれ、同社の企画文芸部設立に加わる。『科学忍者隊ガッチャマン』『宇宙の騎士テッカマン』などのタツノコ第一次黄金期と呼ばれる作品の企画、脚本、文芸に参加。しかし、番組の企画成立が、アニメ制作会社主導から、TV局や代理店、スポンサーサイド主導へと移行する時期でもあったため、外圧からの意見に作品を左右される状況に疑問を抱き、'76年にフリーに。但しタツノコプロには、契約のかたちで'78年1月まで企画や脚本に協力。一方で和光プロの『合身戦隊メカンダーロボ』のシリーズ構成などを手がけた。
'77年12月、遅れて退社した鳥海尽三らと、アニメーションの企画・制作会社として鳥プロを設立。『宇宙魔神ダイケンゴー』のプロデューサーを務める傍ら、タカトクトイスの玩具化を企画先行させた『龍虎巨人ゴーカイザー』(原作)を小学館の「てれびくん」に連載するものの、制作母体がないことが災いし短命で終了。その後、鳥プロを離れフリーとして芝居やCMの仕事を続ける。
'92年頃には『科学忍者隊ガッチャマン』のアドベンチャーゲームのためにタツノコプロへ再度入るが、作業中に脳梗塞を発病。病気が完治するまでの間、一切の活動を停止する。'00年にはリハビリを兼ねて講談社のフェーマススクールズに入学。子供の頃の夢であった画業に就くべく勉強し、今春無事卒業。現在は絵本作家としてデビューすべく日々邁進中。

タツノコに縁があってお世話になったわけですけど

——陶山さんのお父さん＝陶山鉄さんは元々松竹・日活などで活躍された映画人だったそうで。

シナリオライターであり、プロデューサーであり、演出家でもあった人で、母親も芝居をやってました。そういう家庭で、自分も役者になろうと思ってましたから……。

——お父さんの鉄さんというのは、鳥海尽三さんの師匠に当たる方なんですよね？

日活の山根（啓司）製作部長から、優秀な青年がいるから面倒を見てくれないかって話があったんです。それで尽三さんが小説を原作にした『穂高』って脚本を持ち込んできて。私も読んだと思う。

——鳥海さんはその時、お弟子さんとして住み込みだったんですか？

いや、うちは狭いから毎日通いで。31年頃から、2年かそこらじゃないの。親父が亡くなったのが33年ですからね。

——お父さんが亡くなられて、二十歳で日活の企画部に入られたんですよね？

大学出身の企画部員とは全然違って、縁故関係

だから準職員の待遇でね。

——日活の企画部には何年くらい在籍されていたんですか？

13年いて、正式な部員になってからは6年ですね。企画部に入って6年目の頃にね、尽三さんが吉田竜夫さんを連れてきたんですよ。それで本社の営業部長で劇場部長も兼ねていてプログラムを組める人に、吉田竜夫さんたち三兄弟を引き合わせたんですね。日活ではお子様番組はやったことないからちょっと無理かと思ったんですけど、変わったことをやるのが映画界の始まりなんだから、そういうつもりで会ってもらったんです。

——33年に日活に入られているってことは、8年目くらいじゃないですか？『マッハGoGoGo』は昭和42年のテレビ番組だから、その年に会われているということで。

うーん、どうだったのかな？ その時、日活の試写室で『マッハ』を見て、びっくりしたんですよ、日活の他の人間もみんな驚いた。こりゃあ凄えや、と。

——どういうところが凄いと？

とにかく全部がね。カラーで初めてアニメを見たってことも大きいでしょう、その出来映えもびっくりしたけど。あ、その前にね、『宇宙エース』（のシナリオ）をね、アルバイトでやったよ。ただ、その時は竜夫さんには会ってないんですよ。

——日活で『マッハ』をご覧になったというのは、当時、日活でもアニメには関心があったということなんでしょうか？

当時、撮影所に技術部長の三輪さんて人がいて。かつて手塚さんにかわいがられた技術屋さんらしいんだ。その下に若い石川さんて人がいて、彼らがアニメをやりたいってさんざん言ってたんだけど、会社は動かなくてね。私も大風呂敷広げるのは得意だから、東映があれだけやってるんだし、やろうと思った時にやらなきゃ駄目なんだと上司に言ってたんです。私の妹、それに親父のお弟子さんがいるんだし、タツノコと提携したっていいって話したんですよ。ところが全然駄目。『マッハ』だって、日活でかけようって言った時、うちは今までやってないからって。

——陶山さんは、いつ頃、日活を離れようと？

ロマンポルノに切り替えた時ですよ。

——タツノコに行かれたのは、辞めたのを知って、鳥海尽三さんが呼びかけてくれたってことですか？

まぁ、それはそれでね。タツノコに縁があってお世話になったわけですけど。

——それ以前、たとえば『宇宙エース』のシナリオを書いた時なんかに、タツノコに行かれたことはあったんですか？

そうね、尽三さんに会いに鷹の台のスタジオに行きましたよ。現場を見せてもらったかな。陣野（修）氏や天馬（正人）さんも会ったことがあるんだよね。紹介されて笹川（ひろし）さんにも会ったし。柴田（勝）さんや六郷（晃生）さんにも。

社長や九里さんのキャラクターが良かったのかもしれないよ

——陶山さんが参加されたのは『決断』からと伺ってますが、すでにある程度、制作は進んでいたんですか？

3話か4話、いってたですね。タイトルバック見たのかな、零戦の。ああ、ここまでやるんならなんでもできるんじゃない、っていう感じで受けとめたですね。マンガマンガしたアニメーションじゃなくて、これほどリアルなものができるんだって第一印象がありましたからね。でも、あれは苦労したね。戦史叢書っていう、こんな分厚い本を国会図書館で借りてきて。作戦からなにから全部載ってるから、それを鳥海尽三さんや私たちが全部読破して、シナリオライターにコピーして渡したりしてさ。本当に地道によく調べたよね。脚本は足で書く本っていうけど、何をやるんでもそれが大事だっていうね。

——陶山さんは途中から参加ですけれども、脚本の手配といった文芸のお仕事をされてますよね。『みなしごハッチ』で脚本を書かれるよりも、『決断』のほうが先なんですか？

いや、『ハッチ』が先。というか、『決断』の仕事をやりながら『ハッチ』書いてたんですけどね。

——『科学忍者隊ガッチャマン』のお話をお伺い

したいのですが。

あれはキャラクターが先行してるからね。社長や九里（一平）さんのキャラクターが良かったのかもしれないよ。まだ『ガッチャマン』じゃなくて『バードマン』とか呼ばれてて。「科学忍者隊」っていう題名は前からで、『科学忍者隊バードマン』とかね。

――『シャドウナイツ』って呼ばれてる時期もあるそうですね。

そうそう。竜夫さんが3日ぐらいで描いちゃったよね。私なんかが相模湖に籠もってる間に描いちゃった。その描きあげたのが、読広へ行ってるから。そのイメージが強烈だから、ほかの原作もへったくれもない。そこで夢が膨らんじゃうからさ。

――陶山さんが相模湖の籠もりに行ったのは、それが最初だったんですよね？

初めてです。

――『ガッチャマン』のそれぞれのキャラクターの設定っていうのは、その籠もりの時に作られたんですか？

そうそう。

――敵の「ギャラクター」というネーミングなんですが『宇宙エース』の時に、当時脚本に入ってたSF作家の広瀬正さんがネーミングをされて、その時、敵のキャラクターとして出てきてるんですね。それが復活した名前らしいんですけど。

尽二さんがそのネーミングはなじみがあるから、それを使おう、と。僕らもそれならいいんじゃないのってことで使った覚えがあります。南部博士とか、そういうのから何から何まで全部その場で、ネーミングして。で、ベルク・カッツェっていうのは山猫から。ドイツ語で、山はベルク、猫はカッツェ。これは私と平谷（寿敏）氏が、山猫はドイツ語でベルク・カッツェなんだ、って。それは覚えてる。

――その時に山猫というネーミングが出たのは、絵柄があったんですか？　それとも敵に山猫のイメージの幹部を作るという発想があって？

うん。変わった人格にしようって、そういうことだった。男だか女だかわからないような変わったものはどうだって。男のくせに口紅を塗って。着ているものは紫。それから「スナックジュン」とか出てくるでしょ？　あれはね、子供の憧れだったんです。あの頃は、おしゃれなスナックを経営するのは、夢だった。

――甚平はどういうところから？

私のせがれが昌平なんです。今村昌平さんから名前をもらった。だけど昌平ってつけるわけにいかないから、こっちは甚兵衛の甚平でいいやって。悪いねえ、聞いてがっかりだ(笑)。あと竜とかはね、あれはもうデブっちょでさ、海の男のイメージで。

――健っていうのは何故？

健はね、あれはまあ二枚目だからね、ジョーを反比例させてさ。

――『ガッチャマン』の時も、脚本の手配は基本的に陶山さんがやってられてるんですか？

まあ、尽二さんと相談しながらね。

――陶山さんはご自分で絵を描かれるので、『ガッチャマン』の鉄獣のラフデザインをされていたという話をお伺いしたことがあるんですが。

全部が全部じゃないですけどね。そもそも脚本を誰にするかっていう時に、まず問題になるのが、メカが得意のシナリオライターがいないんだよね。メカの理屈とか、子供に喜ばれるメカとか、それは私がフォローしなくちゃいけない。どういうメカなのか、どういうドラマが展開できるか。基地もそうだし、鉄獣、動くものの中で、どういうドラマ展開ができるか、これが大事だった。例えば、ガスバーナーをオーバーにしたメカなら、それのネーミングを考えたり。そうすると次は鳥海永行さんとの話になって。こういうシナリオライターに、こういう内容のメカを素材にした話を発注してあるよ、と。すると具体的には（そのメカは）どういうものかってことになるから、落書きでだいたいこういう、と。そうすると永行さん、こんなもの動かねえじゃねえか、となるわけですよ。動くにはどうすんだ、と。そうすると、動くようにするにはこうしたら、となるわけ。

■『科学忍者隊ガッチャマン』甚平

――永行さんが仰ったのは、シリーズが始まった時に、レッドインパルスが死ぬって予定は全然なくて。永行さんはレッドインパルスみたいな親父が覆面の姿で出てくるのが嫌で……。機会があれば殺してやろうと思ってた、みたいなことを言ってて（笑）。

うんうん、わかる（笑）。

――それで、ちょうど1年経った時に、自分の回で殺しちゃって、殺しちゃったよ、って事後報告をしたって話をされてたんですよ。

うんうん。私はもう、間に立ってね、辟易したんだけど、私も聞かされた。もう、ボロクソだよ。

――『ガッチャマン』で、陶山さんがご自分で書いた脚本で、印象深いものってあるんですか？ 文芸としての仕事のほうが忙しいっていうのも当然あったと思うんですが。

脚本ではちゃんとしたものを書いてないって気がする。

――エピソード的には有名なのでいうと「火の鳥対火食い竜」ファイヤードラゴンが出てくる奴とか、「死の谷のガッチャマン」っていう、他の4人が出てこない異色回。

私ね、そういう、1対1とかね、変わったことをやりたい。凝ってる割にちゃんと描いてないからね。反省してるんだけど、人と変わったことはやりたいよね。それは前から思ってるんですけどね。

――鳥海永行さんっていうのは、当時、初監督だったわけですけど、どういう印象をもたれてますか？

こ憎らしいヤツだけど、いいヤツだね人間的に（笑）。私もアニメの人は、演出家ってそんなに付き合ってないけど、本当に勉強してる人だと思う。匂い、雰囲気が出せる人だね。大事なことだよね。

――終盤に向けて、ジョーにクローズアップしてドラマが転がっていくのって、脚本だけが高まっていても駄目で、あそこに鳥海さんの演出っていうのがあって初めて……。

レッドインパルスや、最後のほうを彼（鳥海永行）がやったから、彼のホン（脚本）で描いたからいいわけで。そうじゃなきゃ、他の人間できないよ、あれ。バンアレン帯を元へ引き戻すなんて。普通のシナリオライターにできないでしょ。そういう点では彼に『ガッチャマン』やらせたのは大正解。

これは企画力の第1歩なんだよね

――竜夫さんのご病気のことは、いつ頃からご存じだったんですか？

風邪かなにかこじらして、医者に行って帰ってきたところを、太陽ビル（当時のタツノコプロ本社）かな、エレベーターの中で会ってますよ。あれが（自分が会ったのは）最後だった。

――生前の吉田竜夫さんとの個人的なおつき合いは？ 飲みに連れていかれたりとか。

私、飲めないんですよ。でもね、旅行なんか行って、同じ部屋ですぐそばにいたってことはあるけどね。ストレスが祟ったんだね。生きておられればね、いろいろいい作品を残しただろうし、残念だね。

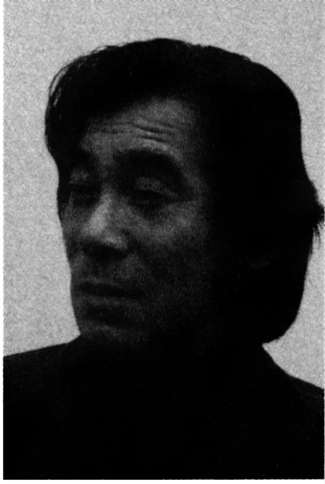
――生きてる時の竜夫さんがみんなを結束させる、タツノコの屋台骨だったっていう印象が強くあります。そういう竜夫さんの魅力というのはなんなんでしょう？

自分は実写の世界とアニメーションの世界を両方歩いてきてたけど、何かを作ろうって時の反応、判断、吉田竜夫さんがいちばん速いね。

――先程お話のあった、日活とはある意味対極的なお話ですね。

そう。細かいことはわからなくても、やろう。やってみる、とりあえず作ってみてっていうことだね。まず話に乗ってくれる。これ大事なんです。誰の話でも、まず話に乗ってくれる。これがね、私にとってもいい勉強なんですよ。人の話をまず聞いて、乗ってくれるか。これは駄目だよ、これこれこういうわけだから駄目なんだ。いいねえ、それいい話だねえ、じゃあとりあえずまとめて、まとめて1回、早いうちに見せてよ、それがちゃんとできた人だね。ものすごく大事なんだね。これは企画力の第1歩なんだよね。

（2002年5月16日、於／東京都多摩市）



（さかい・あきよし）
1942年10月23日、熊本県出身。明治大学文学部在学中、演劇を専攻する傍ら日活映画のプロット（原案）書きのバイトを行う。同校卒業後、日活のバイトで知り合った陶山智にプロットの持ち込みや相談を持ちかけながら、産経スポーツの嘱託や東京テレビ照明で働く。その後、タツノコプロに移籍した陶山の誘いで71年7月、同社の文芸部に入社。『いなかっぺ大将』第190（＃95ーA）話「越すに越されぬ大井川ダス」で念願の脚本家デビューを果たす。以後、文芸部の鳥海尽三の下で文芸担当として活躍する。
'77年８月、会社から昇格の辞令の報を聞き、定時出社や役付きの息苦しさを考えタツノコプロを退職。フリーの形で、引き続き企画文芸に参加。前後して退社した鳥海尽三と陶山智の誘いもあって鳥プロへ移籍する。『宇宙魔神ダイケンゴー』の原作と脚本を担当し、'79年フリーに。その後『宇宙戦士バルディオス』（原作構成）、『パタリロ！』ドラマ『HOTEL』などを執筆。'96年からは主に葦プロ作品にプロデューサーやシリーズ構成として参加している。

酒井あきよし

昼からしか行かなくなった

——酒井さんは、陶山（智）さんに誘われてタツノコプロに入られたわけですよね？

そう。で、社長室に案内するって言われて、ここトイレじゃないかと思ってガラッと開けたら、座って絵を描いてる人がいて、それが社長（吉田竜夫）だったの（笑）。よく覚えてないんだけど、なんか普通の引き戸だったような気がするんだよね。

——特に、アニメーションのシナリオを志されて、タツノコに入られたわけではないんですよね？

シナリオライターになろうと思ったのは、学生時代からなんだけど、卒業してもなれなかったからね。で、タツノコで初めてそれらしい仕事をし始めて、当時ね、フジテレビで『あしたのジョー』やってたんだよ。それで凄い感動して、『あしたのジョー』に負けないようなホン（脚本）を書きたいと思ったんだよね。アニメーションをやろうって気になったのは、ひとつにはそれがあるのね。

——最初に担当された作品は『いなかっぺ大将』ですよね？

だったと思う。ただ『いなかっぺ』って、平谷

(寿敏) さんって人が担当してたんですよ。で、1年ぐらいしてから僕が担当することになって、半分ぐらいやったのかな?

―― 酒井さんが初めて脚本としてクレジットされるのが、第190話の「越すに越されぬ大井川ダス」ですけど。

覚えてない(苦笑)。当時ね、社内稿ってのがあったのよ。(原稿料は) 普通に発注する脚本料の半分だったと思うけど、それで随分救われたのね、給料安かったから(笑)。

その前かな?『みなしごハッチ』のストーリー(シノプシス) を、尽三さんに「やってみろ」って言われて、書いたりしてたのを覚えてるけど。3、4回 (稿) 書いたのかな?

―― 当時、尽三さんは相当、厳しかったそうですけど?

それはもう、尽三さんがOKしないものは駄目だったからね。自分でも言ってたけど、厳しい男だと言われたいようなところがあったから(笑)。だから、タツノコにはこういう男がいるぞ、というぐらいの気持ちで仕事はしてたんだと思う。

いまもそうだけど、脚本家の名前は、エンディングに入るじゃないですか? というのは、エンディングは、毎回、スタッフが変わるけど、オープニングは決まってるわけでしょ? 尽三さんが、どうしても脚本家の名前をオープニングに入れろって言って、揉めたこともあるよね。それで、サブタイトルは毎回、変えなきゃいけないから、その下に脚本家の名前を入れたりね、そういうこともありましたよ。

―― ああ、『キャシャーン』とか『てんとう虫の歌』なんかは、そうなってますね。

要するに脚本家の立場というか、作品に対する位置づけを上げようというのがあって、その当時はアニメーションの脚本家って、まだ凄い低く見られてたからね。その地位を上げるために、尽三さんなんかは、かなり運動したと言ったら、そうなんじゃないかな。

呼ばれて行くんだよね、怒られに

『けろっこデメタン』やった時に初めて、シリーズ構成(クレジットは「構成」)っていうのを任せてもらったのね。たぶんシリーズ構成って名前ができたのは『けろっこデメタン』が初めてだったと思うんだけど(実際には『決断』で、鳥海尽三が「構成」とクレジットされている)、言ってみれば、ホンにおけるプロデューサー的な仕事だよね。普通のテレビドラマと違って、アニメーションっていうのは、総監督がいるじゃないですか。

■『けろっこデメタン』

プロデューサー・システムで作れば総監督はいらないんだけど、アニメーションってのは、コンテから何からチェックしないといけないから、総監督の必要はどうしても出てくるでしょ? だから総監督と、ホンのプロデュースっていうとアレだけど、ホンをチェックしてOK出して、局を通して総監督に渡すまでの仕事はやってたわけですよ。

―― 『けろっこデメタン』の企画って、どういうところから生まれたんでしょう?

よく覚えてないんだけど、社長(吉田竜夫)が、蛙のキャラクターを描いてきたような気がする。蛙だから、指が5本あるとおかしいとか、そういうことを言ってたのを覚えてるね。

―― その次が『新みなしごハッチ』ですけど。

最初の『ハッチ』はフジテレビでやってたでしょ。これも最初は、フジテレビでやるつもりで進んでたんじゃなかったかな? よく覚えてないけど。ところが(フジテレビが)乗らなかったんだよね。それで、困っちゃって毎日放送に持っていったんだったと思うんだけど、そしたら飛びついたんだよ、毎日放送が。それで、ホン読みってのは普通、テレビ局に行ってやるんだけど、本社は大阪だから、東京(の毎日放送の支社)で、大阪と打ち合わせするんだよね。(毎日新聞社の)上の階に打ち合わせ室があるんだけど、そこにマイクが置いてあるんだもん。打ち合わせしてる相手が、どんな人かはわかんない。引野(芳照)部長って人なんだけど、僕はまだ当時、若かったじゃない

ですか。最初、ちょっと馬鹿にされてた感じで、その部長が東京支社に来た時に「ほんとに貴方が書いたの?」って言われたからね。ただ、帰りの新幹線のなかで僕の書いた3話を読んで、じ～んときたとかいうことで、後で誉めてもらったんだけど(笑)。

でも、蓋を開けてみたら、視聴率、伸びなくてさ。大阪（毎日放送本社）に何度も呼び出されて、僕と尽三さんと、九里（一平）さんがいたかなぁ? 呼ばれて行くんだよね、怒られに(笑)。でも『新みなしごハッチ』ってのは、僕が（タツノコに）入って初期の仕事だから、なんか思い入れがあるんだよね、視聴率は取れなかったけど(笑)。

けっこう煙たがられてたよね

——企画文芸部と演出部って、けっこうライバル意識があって、シナリオを演出家が直したりすると、「なんで直したんだ」みたいなやり取りがあったそうですけど。

そうそうそう、要するに「シナリオを勝手に変えるな」ということはありましたよ。OKになったシナリオを勝手に変えちゃったら、なんのために打ち合わせして決定稿を出したかわかんないわけでしょ? だから、揉めたんですよ。揉めたというか、お互いに、こう、ライバル意識? いい意味でのね。コンテを切っていくと、確かにシナリオどおりにならないとこも出てくるわけでしょ。するとやっぱり、総監督がチェックして直したりするじゃないですか。笹川（ひろし）さんなんか、全部、直すんだから(笑)。小鳥（鳥海永行）さんだってそうだけど。それで、そのコンテをまたチェックするわけですよ。チェックって言うと言葉が悪いけど、笹川さんも「ここはこういうふうにしたいんだけど」ってコンテを持ってきて、見せてくれたりしてたわけですよ。でも、コンテを見ちゃあ、「違う、ここはこうじゃない!」とか、文句を言いに行くから、けっこう煙たがられてたよね。笹川さんに「酒井くんさ、実写のほうが向いてるんじゃない?」とか言われたし(笑)。小鳥さんに「なんでこれがこうなるの?」って言ってさ、やりあったこともあるよ。いまでも小鳥さんとは、たまに会ってるけど(笑)。

ああいうの全部、逆説なんだよね

——当時、酒井さんが書かれた話って、ヒーローものとしては、かなり掟破りな話が多くて、正義と悪の図式というものに懐疑的な視点を持ってらっしゃる印象があるんですけど。

いや、そんな難しくは考えてない(笑)。

——『テッカマン』の第11話「失われた宇宙船」（堀田史門名義で執筆）なんかは、明らかに南城二に非があるという話で。

あれはね、芥川龍之介に〝鬼ケ島〟の話があると思うんだよね（『桃太郎』）。桃太郎が鬼ケ島に退治しに行くじゃない? それを皮肉ってる小説があるのよ。鬼は鬼ケ島で幸せに暮らしてるのに、いきなり桃太郎が乗り込んできて、みんな退治してしまった、と。そこから発想したんだけど、要するに、30分っていうのは、どうしてもひとつのアイディアが勝負になるから、ホンを書く時に、企画書の穴を探して、そこからアイディアを拾うっていうのは、ひとつの方法なのね。もちろん企画書は丹念に作るんだけど、どっかに書かれてない部分、穴ぼこがあるわけよ。『キャシャーン』なんかでも、アンドロ軍団が攻めてきた時に、市長が、キャシャーンなんかいらねぇよ、と（第14話「キャシャーン無用の街」）。ああいうの全部、逆説なんだよね。

——逆説というのとは、ちょっと違うと思うんですけど、『ヤッターマン』って『タイムボカンシリーズ』なのに、ちっとも〝タイム〟じゃない(笑)のは、こう、制約を解除しようと意識されたりとか、したんですか?

よく覚えてないんだけど、『タイムボカン』の時は、タイムトラベルものを作ろうってことで、結局、それが受けて、おもちゃ屋さんなんかの関係もあって、パート2みたいな形で、続けて作ったんだよね。でも、タイムマシンで過去に行っちゃっても、そこの人間と直接、関われないんだよ。

歴史が変わるとか、実際に起こってないことはやれないって設定があるから、話の発展性がないわけですよ。だから、これじゃ発展性がないからってことで、いろいろ変えたとこはあるね。

なんか、社長が凄くノッて、「ヤッター!」ってのがいいんじゃないか、って話を持ってきたんだよ。『タイムボカンシリーズ』っていうと、初めのやつじゃなくて、すぐみんな『ヤッターマン』って言うからね(笑)。実際、それだけ当たったってことなんでしょう。

それで「辞めます」って言ったんだよ

――酒井さんがタツノコを辞められたのは、鳥プロに参加なさるおつもりで?

違う。僕は、尽三さんが独立する1年ちょっとぐらい前に、フリーになってたから。

――何か、きっかけがあったんですか?

課長の辞令か何かもらったんだよね。それで、健二さんに呼ばれたのかな?「朝、ちゃんと出てきてくれ」って言われて、厳しく叱られたのよ、初めて(笑)。管理職なんだから、ちゃんと出てきてくれないと困るよ、と。それで「辞めます」って言ったんだよ。「考え直せ」と、社長も言ってくれたんだけど、僕はもう辞める気になってたから。

幸運だったのは、フリーになっても暫くやっていけるようにって、尽三さんが、当時やってた『ヤッターマン』のシリーズ構成（クレジットは、鳥海尽三と連名で「企画」）を、契約でやらしてくれたんだよね。ホンも書かしてくれたからさ。で、1年半くらいしてから、陶山さんと尽三さんが辞めて、鳥プロを一緒にやらないかって誘われたんですよ。

――でしたら、吉田竜夫さんが亡くなられたから、辞められたわけではないんですね。

亡くなったから辞めたわけじゃないんだけど、（フリーに）なるかならないの時だとは思う。ちょっと具合が悪かった頃、自宅に見舞いに行ったことあるもんね。腹の調子が悪いとかって頃に「辞めます」って言ったから、なんとなく、あの時はちょっとね。

――吉田竜夫さんの印象を一言、いただけますか?

吉田竜夫さんって人は、相手の才能を伸ばすようなことはしても、決してそれを抑えることはしなかった人ですからね。いまはちょっと、そういう人いないよね。だから、あれだけの人材が集まったんだと思うんだよね。

――その後、鳥プロで『宇宙魔人ダイケンゴー』を手がけられたわけですね。

あれは、会社を作ったからって、スポンサーにお祝いでもらったのよ。尽三さんが、タカトクの人と仲が良かったってこともあって。それで、東映に（話を）持って行ったら、制作費が下りることになって、制作はどこにするっていった時に、グリーンボックスの佐藤みっちゃん（光雄）が聞き付けて「ウチでやらしてくれ」って、飛んできたわけですよ。尽三さんは、佐藤みっちゃんを可愛がってたからね。

ところが、アレが大変でね。陶山さんがプロデューサーになって、しょっちゅうグリーンボックスに通ってたんだけど、やっぱりほら、グロスで出してるでしょ。だから、上がりがわかんないし、遅れるし、その後、火事を出したりなんかしたよね。それに関しては、そんな被害は受けなかったけれど、『ダイケンゴー』自体は、そんなに儲からなかったんだよね。

その頃、雑誌（漫画の原作）もやってたのね。当時、田中利夫さんが編集長だった「テレマガ」の。

――『ミクロマン』（作画／森藤よしひろ）の原作の響わたるって、酒井さんの?

僕と陶山さんと尽三さん、3人の共同ペンネームなの。その他にも、車ものをやったんだよね（『ひみつ指令 マシン刑事999』、作画／すがやみつる）。

でも、『ダイケンゴー』の後が決まらなかったから、僕は鳥プロ、1年ぐらいで辞めちゃったんだよね。なぜかというと、営業がいないんだよ。要するに、机に向かって字を書く人間ばっかりじゃない?（笑）だから、誰かそういう人がいれば、また違ったかもしれないけどね。

（2002年3月7日、於／東京都三鷹市）

小山高生

森の吹かしで受かったようなもんじゃないの

（こやま・たかお）
1948年4月21日、東京都昭島市出身。'72年3月にタツノコプロの企画文芸部へ。『いなかっぺ大将』で脚本家としてデビュー。その後、『かいけつタマゴン』『新造人間キャシャーン』の文芸担当を歴任し『てんとう虫の歌』の途中で退社。フリーとなって『アンデス少年ペペロの冒険』『UFO戦士ダイアポロン』などの脚本に参加する。
'79年にスタートした『タイムボカンシリーズ　ゼンダマン』では後半から文芸担当に。元々『タイムボカン』はタツノコ時代に企画から携わっていたこともあり、文芸やシリーズ構成としては『逆転イッパツマン』までに参加。『イタダキマン』には脚本のみを提供している。
'86年7月に新宿の日本テレビ音楽学院の教室を借りて開講したアニメシナリオハウスを母体に、'88年1月に脚本家集団ぶらざあのっぽを結成。以後、ここを母体に多くの作品のシリーズ構成に携わる。
主な作品は『聖闘士星矢』『魔神英雄伝ワタル』『アイドル伝説えり子』『天空戦記シュラト』『ドラゴンボールZ』『勇者特急マイトガイン』『スレイヤーズ』『さわやか3組』('95,'96年版)『タイムボカン2000　怪盗きらめきマン』等。

タツノコに入ったの、ホントに偶然だったの。僕は作詞家になりたかったから、じゃあ教員免許を取ろうと思って、大学に入ったわけ。

——さ、作詞家になるのって、教員免許が必要だったんですか？

違う違う、当時、学校の先生から作詞家になった人が多かったから(笑)。それで2年生になる時に、『タイムショック』（当時NET）っていうクイズ番組の問題ブレーン募集があって、週に200問（問題を）作るバイトを始めたわけ。いざ就職する時に、そこの事務所（企画集団Q）にそのまま残らないか、って言われたんだけど、ズルズルベッタンが嫌で、いろいろ入社試験を受けたんだけど、全部、落っこってさ(笑)。それでお正月明けて卒業する年になって「しょうがない、市役所でも受けるか」って時に、タツノコプロの募集を新聞で見たわけ。それもね、正月に新聞、変えたばかりだったの。

で、野間児童文芸賞などを受賞した森忠明（童話作家）が当時、文芸部にいて、それが高校の時の友達なわけだ。弁が立つ奴だから「小山を採ら

なかったら、タツノコの損失だ」とか、いろいろ吹いてくれたんだよな。面接に行った時、鳥海（尽三）部長に「森くん、知ってんの?」とか聞かれたりして。それで見事に合格して「3月1日から来い」ということで、卒業式前から行ったんだよね。だからさ、森の吹かしで受かったようなもんだったんじゃないの、きっと(笑)。

鬼の酒井のお陰なんだよね

それで、鳥海さんに最初「ここには下足札を預けてるつもりで、いつでも、靴もらって出てくように勉強すりゃいいんだ」なんて言われたんだよね。変わったこと言うなぁ、と思ったもん。ずっとこの会社にいろ、なんて言わないわけだからさ。それは、凄く有り難かったね。

――当時の鳥海さんの印象って、どうでした?

体力のある人だと思ったね。飲むわさぁ、遊ぶわさぁ、食うしね。とにかく、体力。だって、ホン（脚本）が間に合わなくて、明日までに上がんないと制作からギャアギャア言われちゃうんだから。時にさ、その晩、書いてきてくれちゃうなんて凄かったね、ああなりたいなぁ、と思ったもん。

――鳥海さん以外の方の印象も、聞かせていただけますか?

陶山（智）さんって人は、僕が入った時は主任で、ホンを書くっていうよりも、どっちかっていうと企画者の人だったから、全然タイプが違ってたよね。（鳥海さんとの）間にいてくれて、凄く助かる、みたいな。

酒井さんは、もう、トンガリ酒井って感じでさ、僕らは〝鬼の酒井〟って呼んでたけど、ホンのチェックでも、厳しいわけさ。（デビュー作の）『いなかっぺ大将』は15分だったけど、初めて30分ものでプロット通ったのが、『けろっこデメタン』で、いまだに覚えてるけど「虹の池の舞踏会」って話でさ、プロットが一発でOKになって、シナリオに入ったんだけど酒井さんは「これはプロットを伸ばしてるだけだ」って言うわけ。僕はシナリオの勉強してたわけでもなんでもないから、プロット一発OKで、なんで伸ばしちゃいけないんだ、って思うわけよ。シナリオとプロットの違いを、全然わかってないからさ。それで3ヵ月やったけど、最後までOK出なかったの。それで違うプロットを書いて脚本に入ったわけ。（第21話）「泣くな友情のケロケロ笛」っていうんだけど、それを鳥海さんにチェックしてもらったんだよ。そしたらね、1稿でOKになったの。それが30分ものデビュー作になっちゃうんだけど、だから、前の3ヵ月は無駄じゃなかったわけよ。鬼の酒井のお陰なんだよね(笑)。

柳川（茂）くんは、『カバトット』で脚本家連盟に入ってしまった脚本家でね、当時、いちばん若い脚本家連盟の会員。で、僕が『かいけつタマゴン』の文芸担当になった時にも、書いてもらったわけ。だけど、板橋の三畳一間の鰻の寝床みたいな安アパートに住んでいて、「今月『タマゴン』のギャラが振り込まれないと、家賃、払えない」とか、そういう極貧の生活してたわけ(笑)。その年（'72年）の暮れのボーナス前に、森が辞めたのね。それで、翌年の夏だったかな? だれかいないかな、なんて話になって、声かけたの。

天地真理の頃だもん

――小山さんが最初に籠もりに参加されたのは?

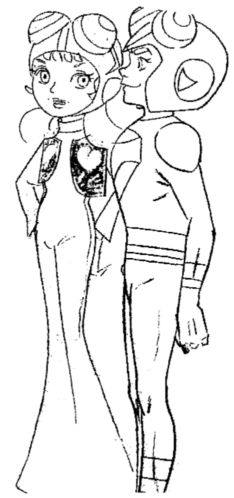
えっとね……『タイムボカン』が最初かもしれない。『キャシャーン』なんかも籠もってるけど、籠もりは『タイムボカン』のほうが早いんだよ。アレ、おクラになってた時期が結構あるから。企画書は後に作ったのに、『キャシャーン』が先に放送されちゃったってのは、よく覚えてるから。

――『タイムボカン』のそもそもの発想というのは?

吉田健二さんが、企画の部屋にミニカーを持ってきたんだ。「これで、なんかできない?」って。だから、ミニカーが売れるようなものができないかな、っていうのが最初よ。『グレートレース』（'65年、監督／ブレイク・エドワーズ）って映画があったりしたからね。そういうなかから、タイムマシンを使ってという話が――。

――ど、どうしてここで突然、タイムマシンが?

あの時ね、笹川（ひろし）さんとか、鳥海永行


■『タイムボカン』丹平&淳子

さんも、会議に出てたんだよな。誰のアイディアかっていうのははっきり覚えてないけど、笹川さんあたりが言ったのかな？ それでタイムマシンを使ったものっていうので、『タンマー大混線』っていう企画書を上げるわけ。

──時期的には、いつぐらいになるんでしょうか？

47年の暮れか、48年の早い時期に企画してるね。当時は、丹平ちゃんと淳子ちゃんじゃなくって、五郎ちゃんと真理ちゃんだったんだよ。天地真理の頃だもん。

──じゃあ、五郎ちゃんは野口五郎？

そうそう。それが、オンエアする時は、桜田淳子に変わるんだから、その間、眠ったわけね。なんで五郎が丹平になったのかは覚えてないけど(笑)。

8稿したんだよ

──『タマゴン』の時は、籠もられたりしたんですか？

しなかった。ホントにもうちょこちょこ、笹川さんたちと（企画書作りを）やったって感じ。あとね、これは（主題歌の）作詞をやってる。森とふたりで作ったよ。

──その後の担当作品が『キャシャーン』になるわけですね。

『キャシャーン』は、最初、後の『うる星（やつら）』の落合（茂一／'99年4月6日、癌のため逝去）さんが担当してたんだけど、落合さん、5話ぐらいまでで（タツノコを）辞めちゃったんだよね。その後を僕が引き継ぐってかたちになってさ。

それで、主題歌の作詞をする時に、塩山（山梨県）の上流の温泉に籠もったんだけど、鳥海さんも落合さんも、生葡萄酒かなんか飲んで酔っぱらっちゃってんだよ(笑)。しょうがないから、僕と酒井さんのふたりで、2番とか3番、作ったもん。

──シナリオ作りもご苦労されたとか？

鳥海さんがなかなかOK出してくれなくて、8稿したんだよ(笑)。だから、5週間か6週間かかったんだけど、鳥海さんも、よく付き合ってくれたよね。今でも感謝している。最後はセリフひとつ変えられて、それも1稿（改稿）なんだけど、でも、言われて直してるたびに良くなってる感じは、自分でもあったからね。それで書いたのが、第4話の「MF銃に怒りをこめろ」。演出は富野喜幸（現／由悠季）さん。

──キャスティングに関しても、面白いエピソードがあるとか？

オーディションの時に、西川（幾雄）さんと神谷明さん、ふたりが残ったんだよ。神谷明さんがまだ若くてさ、最後、吉田竜夫さんの「『三四郎』やってたし、彼（西川幾雄）のほうが芝居もできるでしょう」とかって一声で決まっちゃったんだけど。でも神谷明さんは、ゲストで出てたよね（第13話「裏切りロボット五号」）。

ファンレターの返事、全部、書いてたの

僕ねぇ、吉田竜夫さんに来たファンレターの返事、全部、書いてたの。（タツノコを）辞めた後も通ったもん、1ヵ月ぐらい。溜っててさ(笑)。

──そ、それは、吉田竜夫名義で？

(笑) 違う違う違う、代理で小山高男（当時）って書いて出したんだよ。売り込んだの、名前を(笑)。それで、セル画を送ってやってたのよ。いまだに年賀状くれる人もいるよ、もうみんなおばさんになっちゃってるけどさ(笑)。そのなかのひとりが、（キャラクターデザイナーの）高田明美だもん。

──高田さん、遊びにこられたりしたとか？

三姉妹を僕が案内して、結局、タツノコに入ったんだから。

──タツノコプロをお辞めになられたきっかけというのは？

昭和48年の冬にオイルショックがあって、仕事は前年より多かったのに、ボーナスが悪かったわけ。希望退職者を募ったりしてさ。それで、みん

■『かいけつタマゴン』

な頭にきちゃって、団交みたいになったわけ。丁度、吉田竜夫さんが台湾に旅行に行ってて留守で、健二さんが矢面に立ってたんだけど、僕が首謀者みたいに扱われちゃってさ、それ以降ボーナスの査定が凄く悪くなったのよ(笑)。だけどまぁ『てんとう虫の歌』が決まってたから、御礼奉公のつもりで、1年間働こうって。

その間、フリーになる足掛かりを作っておけば、なんとかなるだろうと思ったからね。

で、50年の8月に辞めたんだ。それで、その年の10月から『（タイム）ボカン』が始まって、秋にLPを出す（発売／ワーナー・パイオニア）っていうんで、ドラマを書いてるのよ。その時、吉田竜夫さんに「書かせてもらえませんかね」って頼んで「ペラ助のぼやき節」なんて詞も書かしてもらったんだよね。

―― 竜夫さんのお身体のことは、どの段階で聞かれたんですか？

えっとね、その頃、僕も具合が悪かったのよ。51年の6月に肝臓を悪くしたんだけど、『マシーンブラスター』がスタートした時（76年7月）は、入院してたわけだしさ。あれは、酒井さんと僕と柳川くんとで企画したんだ。で、僕、4話か何か書いてて、病院でその放送、見たもんね。病院に、葦プロの佐藤（俊彦）社長が、こんな大きいポスター持ってきたの、覚えてるもん。

で、入院してる時、吉田竜夫さんは、代理の誰かに見舞いを持たしてくれたり、時々、電話をくれたりして、気づかってくれてたわけ。珍しいよね、辞めた人間にこんなことしてくれるってのは。そのうち、入院したなんてことを聞いちゃって、どうも癌らしい、なんて話でさ。で、僕はまだ自宅療養中って感じの時だったから、一度もお見舞いに行けないうちに亡くなられたんだよね。

―― 吉田竜夫さんの印象を聞かせていただけますか？

いま思うとね、吉田竜夫さんって、なんか力道山が凄かったのと同じ感覚がある。力道山って、僕が中学2年生の時に、38(歳)で死んでんのよ。だけど、もっと年上の人じゃないかなって印象が、どうしてもあってね。それと同じで、吉田竜夫さんも初めて会った時が39(歳)なんだけど、小学生の頃『チャンピオン太』なんかずっと読んでて、おじさんぽいような人をイメージとして持ってたから、意外な感じ、したよね。

で、45(歳)で亡くなってるわけだから、タツノコプロとしてアニメの制作始めてさ、10年ぐらいのもんでしょ？ そうするとさ、35、36(歳)から45(歳)までの間の仕事なわけじゃない？ いま考えると、凄かったなぁと思うね。

―― タツノコ時代のことを振り返って、なにか一言いただけますか。

あの場（企画文芸部）にいたのが、3年5ヵ月でしょ。非常に貴重な体験だったよね。オリジナルのアニメが多かったっていうのは、非常に勉強になるんだよ。それは、各パートともそうなんじゃないの？ 演出にしたって、原作があると構図ひとつにしろ、随分違うと思うよ。

それとね、とにかく制作会社は人材がすべてだってこと。それはもう、天地人、揃ったってことなんだ。いいタイミングで、あの時に花開いたんだよね。だから、同じ人間が集まっても、時代が違うと駄目なんだろうし、同じ状況ってのも難しいだろうなぁ。あの時しかなかったんだろうね。そういう場にいられたのは、ホント幸せだよね。それがやっぱり糧になってるわけだから、足向けて寝ちゃいけないんだけど……、だからタツノコもうちょっと、僕に遠慮なく頼ればいいのにな(笑)。

（2002年3月7日、於／「ぶらざあのっぽ」）

柳川茂

（やながわ・しげる）
1950年5月18日、神奈川県出身。相模台工業高等学校卒業後、シナリオ研究所へ。以降、フリーで『いなかっぺ大将』『かいけつタマゴン』の脚本を手掛け、'73年7月にタツノコプロへ入社。『ウリクペン救助隊』の文芸担当をきっかけに、メルヘンものやギャグもので活躍する。'78年以降、鳥海、陶山、酒井が抜けた企画部を宮田知行と共に支えた企画室の中心的人物である。タツノコプロ時代は『闘士ゴーディアン』『森の陽気な小人たちベルフィーとリルビット』『とんでも戦士ムテキング』『神伝説サダメビウス』『タイムボカンシリーズ　タイムパトロール隊　オタスケマン』『タイムボカンシリーズ　ヤットデタマン』『アニメ親子劇場』などの企画・原案。シリーズ構成として『ダッシュ勝平』等に参加。'83年にフリーに。ほかに『うる星やつら』『めぞん一刻』『美少女戦士セーラームーン』『しましまとらのしまじろう』などの脚本がある。
　最近は自らの文に、夫人である河井ノアが絵を担当した『のどか森のリトル・ジョイ』シリーズや、『ファーマーさんはみすてない』といった作品を発表している。

会社も辞めちゃって、ず〜っと書いてたら

——そもそも、この業界に入られたきっかけというのは？

　きっかけはね、シナリオ研究所っていう学校があったんですよ。いまもあるのかな？　そこに僕は単身上京して入ったんですけど、たまたま鳥海尽三さんがアニメのゼミを持ってて、実際に会社でやってるものを生徒たちに書かせて、良ければ採用するって話だったんですよ。それで『みなしごハッチ』を見せられて、どう作ったかって説明があって、実際に生徒たちに書かしたのは、5分アニメの『カバトット』。企画書を渡されて、翌週までにみんな書いてきて、回し読みして、鳥海さんが、これは使えるんじゃないか、ってことであれば採用になるっていうようなかたちだったんですね。で、かなりたくさん書いたら、何本か採用になったんですよ。

——『カバトット』ってキャラクターが喋りませんけど、シナリオってどんなものだったんですか？

　だから、ト書きだけですよね。せいぜい（セリフは）「ぎゃぁ！」とか。どっちかといえば、プロットっぽいのかな？　アイディアが面白ければ、

あとは演出でうまくやるって感じだったと思うんですけどね。

――直しの要求も当然あったと思うんですけど？

ああ、ありました。その当時の由起さんって担当者に「ここをこう直して」って言われて、ペラで7、8枚なんですけど、それを4回も5回も(笑)。それで最終的にOKになって、でもまぁテレビで放映されるのは初めてだったから、感激しましたけどね。名前なんか出ないんですけど(笑)。

で、僕は『カバトット』がず〜っと続くと思ってたから、会社も辞めちゃって、ず〜っと書いてたら、突然、終わっちゃったんですよ(笑)。そういうことで、今度は『かいけつタマゴン』っていう5分アニメが始まって、担当は小山（高生）さん。で、しばらく書いてたら企画文芸部で欠員ができたんで入らないか、ってことで、やっぱりフリーってしんどいから、会社員って辛い面もあるけど、まぁ給料もらえるでしょ(笑)。だから、安定してから辞めればいいな(笑)と思って、入っちゃったんですよ。23歳の頃かな？　それから、もう1年もう1年ってことで、結局、9年間ぐらい（タツノコに）いたんですけどね。

シリーズ構成って ホントに大変だな、と

――タツノコに入られて、最初に担当された作品というと？

最初にやらされるのは、助手なんですよね。酒井（あきよし）さんとか小山さんとか、シリーズを持ってる人の下について、コピーしたりとか、シナリオをもらいに使い走りしたりとか(笑)。あと、ペラシノっていって、あらすじ（シノプシス）をペラ（２００字詰め原稿用紙）1枚にまとめる仕事とか、予告ナレーションも書きましたね。酒井さんがやってた『新みなしごハッチ』だとか、小山さんがやってた『てんとう虫の歌』だとか。それが、最初の1年ぐらいかな？

で、最初に持ったのが『ウリクペン救助隊』だったかな？　浜美枝さんの旦那さんの金子満さんが原案者で、やっぱり5分の帯番組。月〜土で、いろんな動物のキャラクターが〝よ〜いドン〟で走ってって、最後に誰が優勝するかって、視聴者に投票してもらう番組。ニチレイがスポンサーで当たると何か、もらえる。すると、電話、かかってくるんですよ、子供から。「今週は誰が優勝するのか？」って(笑)。僕、人がいいもんだから、その子に一度、教えちゃったんだよね。そしたらもう、毎週きて……。まぁ抽選だから、応募しても当たるとは限んないんだけど。

で、タツノコって（シリーズを）任されると、担当者がひとりでホン読み（シナリオ打ち合わせ）に行くんですよ。その頃のホン読みって、いまと違ってシナリオを声に出して読まされるんだけど、さっきの金子さんとか、局のプロデューサーとか、代理店の人も、ずら〜っと大勢いる前で。しかも最初の番組だったから、ホントにもう、何を言われてんのかわかんないしね。で、会社に帰って「こう言われました」って言うと、制作が待ってるんだけど「なんでそんな意見、聞いてきたんだ」とかね(笑)。制作は、流さなきゃいけないから。その板挟みで、シリーズ構成っていうのはホントに大変だな、と思ったんですよね。

――次の担当作品が『タイムボカン』ですが。

『タイムボカン』ってのは最初、わりと硬かったんです。歴史上の事件を使ったりとかして、そういう物語性があったんだけど、笹川（ひろし）さんもアイディアが次々に出てきたんで、なんか、後半ほとんどギャグメカアクションになっちゃうところが、ライターの人には申し訳なかったんですよね。僕なんかも何回も直しを出して、OKになって、それでテレビを見ると、「全然違うじゃないか」っていう。

――コンテの段階で、凄く変わっちゃってるわけですね？

他の番組はわかんないんだけど、笹川さん自身がね、変えていいってかたちで（演出家にシナリオを）渡してたみたいなで……。字面のとおりコンテにしたってつまんないんだから、面白いとこを引き出してやるぶんには変えてもいいっていうね。だからみんな、どんどん変えてっちゃう（笑）。でも、人気が出だしたのは、やっぱりストーリーではなくて、三悪の人気とギャグアクションでしょ？

歴史がどうなるのか、とか、見てる人は、そん

なに興味があるわけでもないしね。

――コンテのチェックみたいなことは、されてなかったんですか？

演出も「コンテ上がりましたから見てください」なんて持ってこないわけ、うるさいから(笑)。で、録音台本を作るのも僕らがやる仕事だったから（注／通常、アフレコ時に使用される録音〈アフレコ〉台本は、絵コンテをもとに起こされる。言わば絵コンテを文章化したもので、脚本家の書いたシナリオとは別物）、僕らが気づくのは、その段階でしょ。だから、もう何を言ったって、スケジュール的に間に合わないから、このシーンがおかしいとか、秒数が合えば、セリフをこう変えてくれとかしか言い様がないよね。あんまり変わった時には、僕らが言っても聞いてもらえないから、ライターが怒って電話をかけてきてる、とかね。実際に、怒って電話をかけてくる人もいるんだよね、「あんなに苦労して直したのになんですか？」って(苦笑)。

でも、予定より早く終わったんだよね

――『タイムボカン』と前後して『ポールのミラクル大作戦』もやられてますが。

あの番組は、ホントにもう途中で早く終わんないかな、って、自分でやってて思ったんだよね(笑)。

――そ、それは、どうしてまた？

あのね、ファンタジーって、結局は夢物語でしょ？　イメージの世界だから、読む人にこんなことありえないって言われちゃうと、もう、その話って成立しなくなるんです。例えば、宇宙にテレビのブラウン管が浮かんでて、その星自体に、なんか、その星の映像がいつも映ってる、とかね。イメージ的には凄く面白いと思うんだけど、ある年代になっちゃうと……って、年代かどうかわかんないんだけど、「そんなの有り得ない！」って言われちゃうんだよね。要するに、シナリオを読む以前に理解不能っていうか、それはもうその人のなかでは、面白いつまんないんじゃないから、するともう、こっちも直しようがない。でも、予定より早く終わったんだよね(笑)。

――途中、キノッピーが出てきたり、ニーナが戻ってきたりして、路線が変更されるのは、その影響なんでしょうか？

なんか、ベルトサタンみたいな大きいやつが女の子を持ってるのは、変質者みたいだ、とか、そういう話はあったね。それから、恐怖心を煽るのはまずい、とかね。同じファンタジーで『風船少女テンプルちゃん』っていうのも、僕、やってんだけど、あれは風船旅行に行く話でしょ？　でも、フランスなんかでは、女の子が風に飛ばされて怖～い、っていうだけで、恐怖心を煽るから駄目、っていうのがあったんだよね。本当か嘘かわかんないんだけど(笑)。

なんか、異様な感じはあったよね

――柳川さんから見て、企画文芸部と他の部署との交流って、どんな感じでした？

企画文芸部は、いちばんなかったね(笑)。限られた人しか入りづらいような部屋だったんだよ。なんかこう「関係者以外、入室禁止」とか、貼り紙があってね。まぁ、秘密のものがあるってことなんだろうけど、だからホントに、笹川さんとか社長とか、そういう人しか入ってこなかったよね。それから、隣が試写室だったんで、初号（試写）の時に、わりとみんなが集まることと、不定期に企画会議ってのがあったんで、その時に、他の部署の偉い人が集まるぐらいの交流しかなかったんだよ。だから社内旅行に行ったって、どの人がどこの部署なのか、よくわかんなかった(笑)。文芸部員は、部長を筆頭に固まってたから、自由時間なんかもなくて、部長が「飲みに行くぞ～」って言うと、みんなしてついていく感じで。なんか、異様な感じはあったよね(笑)。

――吉田竜夫さんに関しての思い出みたいなことがあれば。

やっぱり、鳥海さんと笹川さんの両方を、会社の両輪って感じで上手に活かしていたのかなぁ、と思うね。お互いにそれぞれのトップだから、意

見とか不満とかあるだろうけど、吉田さん、あっち行って笹川さんの言うこともわかるっていう感じで意見を聞いて、こっち来ると、鳥海さんの言うこともわかるって感じで。だからまぁ、ふたりとも、かなり無理な仕事でも、吉田さんのためっていうかたちで、結構、がんばったんじゃないかなぁ。

――その後、尽三さんたちがタツノコを辞められて、柳川さんと宮田（知行）さんの名前が、必ずクレジットされてる時代が来ますよね。

結局は、人がいないってことだよね（笑）。鳥海さんたちが辞めて、鳥プロがうまくいったら呼ぶからな、って言われて、僕なんか呼んでもらえると思ってた。それが結局、うまくいかなくて呼ばれなかったんだけど（笑）。でも、いままで上の人たちにくっついてただけだから、やる自信もなければ、なんの訓練も受けてないわけ。だから吃驚しちゃったんだけど、最後の愛の鞭っていうか、『ガッチャマンF』だったかな？　それで籠もった時に、メインのストーリーとか、それまで鳥海さんが書いてたものを、僕に書けってことになって……。そういう重要な役どころをやらされて、初めて、やんなきゃいけないな、って自覚は出てきたと思う。

それで、宮田くんと一緒にスポンサーに会って売り込んだりして、わりと企画が決まるってことが多かったよね。こういうおもちゃで、こういうのを作るとかいうのは、本来、アニメにとってはいいことではないと思うんだけど、まぁ（企画を）決めるって意味では、そういうことっていうのは大切なんでね。宮田くんってのは凄い器用な人だから、営業に人がいないからって、それで、そっちに移ってっちゃったんだけどね。

数十枚しか売れなかったけど

――ちょっと時代が下っちゃうんですけど、「マイアニメ」（秋田書店）で『神伝説サダメビウス』って小説、連載されてましたよね？

あれはね、宮田くんの力をもってしても企画が決まんなくなってきちゃって、やっぱりテレビ化の前の段階で原作を作っておかないと、アニメ化できないって情勢になってきてたから、じゃあ原作を作ろうってことでやったんだよね。漫画が良かったんだろうけど、そういう媒体がなくて、たまたま「マイアニメ」が、そういうページを取ってくれるってことで。童話なんかは書いてたんだけど、こういうかたちで小説を書いたのは初めてで、まぁ一応、なんでもやりたいって思ってたんでね。

――単行本にもならなかったんで、残念だったんですけどね。

そうだね。僕としては結構、気に入ってたんだけど、九里さんからは、リアルすぎるってクレームが出てね。折角、宇宙を（舞台に）使うんだったら、太陽系っていう近場の話ではなくて、未知の、ファンタジーっぽい宇宙のほうがいいって話になったんだけど、突然ファンタジーにいっちゃうのもおかしいし、だから、その都度、ファンタジー的な要素を入れてこうってことで、ごまかしたんだけどね（笑）。

――これ、アニメ用の企画書って作られたんですか？

作ったのかな？　あるかもしれない。宮田くんとふたりで作ったのかな？　でもこれ、タイトルが凄く気に入ってたんだよ。僕が考えたタイトルって、わりと採用になることなかったんだけど、ひとつあるのが『ムテキング』。あれは珍しく、代理店に電話でタイトルをいくつか言ったら、採用になったんだよね。

――『サダメビウス』って、主題歌のレコード（発売／ビクター音楽産業）も出ましたよね。

それも作詞したけど、数十枚しか売れなかった（苦笑）。

（2002年3月4日、於／東京都立川市）

■『サダメビウス』
マイアニメ（秋田書店）'82年7月号

宮田知行

とにかく、この会社に入りたいと思ったんですよ

（みやた・ともゆき）
1949年6月27日、東京都出身。福生の外人ハウスに住み、ヒッピー生活を送る。遊び仲間だった天野喜孝にタツノコプロが文芸スタッフを募集していることを教えられ、'76年4月にタツノコプロへ。企画室で『一発貫太くん』『コラルの探検』『怪盗ルパン813の謎』の文芸担当。『森の陽気な小人たち　ベルフィーとリルビット』『神伝説サダメビウス』『Gライタン』の原案、『タイムボカンシリーズ　タイムパトロール隊　オタスケマン』の企画、『とんでも戦士ムテキング』『ダッシュ勝平』のプロデューサーを担当。
'82年にタツノコプロを退社し、キティ・フィルム三鷹スタジオへ。『みゆき』『街角のメルヘン』のプロデューサーを務める。その後、独立し現在は（株）J.C.STAFFの代表取締役。

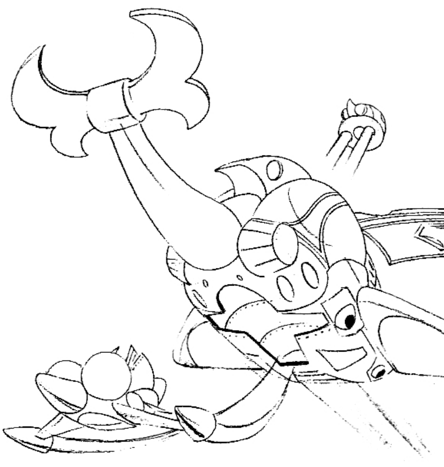
僕はヒッピーだったんで、路上のアクセサリー売り、あれをやってたんですよ。それでまぁ、福生の外人ハウスに住んでる同士で、天野（喜孝）さんと友人になりまして――彼が、原画からキャラクターデザインになった頃だと思いますけど――よく一緒に遊んでたんです。酒飲んだり旅行したり、バンドのまねごとをしたりとか。そんなこんなしてるうちに、もうそろそろ働こうかな、と。26歳だったですね。どうせなら、やりたい仕事をやろうと思ったんですけど、それが見つかんなかったんで（笑）、あぁ、そういえば映画が好きだったなぁと。アメリカのニューシネマが好きだったんですよ。『真夜中のカーボーイ』（'69年、監督／ジョン・シュレシンジャー）もそうだし、『スケアクロウ』（'73年、監督／ジェリー・シャッツバーグ）とかもね。だったらというんで、日活なんかを受けに行ったんですよ。だけど、当時もう斜陽でね。募集が大道具しかなくて。

その時に天野さんが、タツノコの文芸部なら、入れるんじゃないかと言ってくれて。ただ、あんまり興味なくて、漫画かぁ、と。当時、アニメと

いう言葉も知らなくて（笑）。ただ、どんなもの作ってんのかなぁって、『タイムボカン』をたまたま見たんですよ。そしたら「ムムッ！　これはなんだ⁉」みたいなね（笑）。なんかあの世界って、非常に能天気なんだけど、人間を肯定するというか、前向きなエネルギーに溢れていたんですよ。あのシリーズも先に行けば行くほど普通のアニメになっていくんですけど、『タイムボカン』だけ非常に異質なんですよね。ほよほよしてるというか、のんびりしてるというか。とにかく、この会社に入りたいと思ったんですよ。

——入社試験のようなことは？

たぶん、面接だけだったような気がします。（鳥海）尽三さんと、それから……3、4人に面接をされて、覚えてないんですけど、最後は総務の人にも面接されたような気がしますねぇ。



■『タイムボカン』

——尽三さんが面接にいらしたということは、最初から志望は？

脚本を書きたいと思ってたんで、部署は文芸です。青山にあった……シナリオ講座だっけかな？　そこに通ってましたから。タツノコ入ってからも、しばらくね。

徒弟制度って味わったことがないわけですよ

——文芸部に入られていちばん最初にどんなことをされたんですか？

最初は掃除とコーヒーいれる係。いちばん下っ端ですから。掃除機を仕上げの女の子たちの部屋へ行って借りてきて、コーヒーはみんなサイフォンでいれないと気がすまないんで、大変でしたよ。

——酒井（あきよし）さんは、入社して暫くすると、もう午後出社されてたそうですけど、宮田さんはどうだったんですか？

他の人は早くて昼頃でしたけど、僕は9時35分。で、僕が文芸部にいる間は、僕の後に誰も入らなかったんですよ。文芸部にいたのは2年か3年だと思うんですけど。メインの仕事はコピーですね。当時は湿式コピーなんですけど。

——いわゆる「青焼き」ですね。

シナリオ1話分だと当時60枚ぐらいありましたから、それを6部とかとるとすごい時間がかかるわけですよ。だいたい1日、4、5時間はコピー室に入ってましたね。

それで半年ぐらい経ってから、録音台本に載せるあらすじ（シノプシス）を、200字詰めの原稿用紙（ペラ1枚）に書く仕事をやらしてもらって、そのうち、予告（のナレーション）を書けと。

——なんの作品か覚えてらっしゃいます？

なんだろう？　もう覚えてないんですけど、とにかく先輩たちが面倒くさいのは、回ってきましたね（笑）。

——時期的には『（ゴワッパー5）ゴーダム』とかでしょうか？

『ゴーダム』はペラシノ（を書いていたん）じゃないかな。それでプロット書かせてもらえるようになって、シナリオを……最初の1本を書いたのが、（入社して）10ヵ月……8ヵ月ぐらいかな？　とにかく、自分としてはすごく四苦八苦して書いたんですよ。ただ、先輩たちに言わせると、普通こんなに速くOKシナリオは書けないって。嬉しいような、これは大変だなと思ったような、そんな感じでしたね。いずれにしても、酒井（あきよし）さんとか、すごい厳しい人がいてくれたお陰ですね。

——酒井さんは〝鬼の酒井〟と呼ばれていたとか。

厳しかったですね。ただ、逆にいい経験でした

ね。僕はヒッピーやってたんで、徒弟制度って味わったことないわけですよ。酒井さんがほとんど面倒見てくれました。恩人ですよね。だけど、だからこそシナリオはやめようと思ったんです。酒井さんが担当してる（作品の）ホン（脚本）を書くと、（自分の）力のなさってのをひしひしと感じてね。

――それってどういうことでしょう？

言葉じゃうまく言えないですけど、当時のタツノコの文芸部が求めているプロのレベルというのが非常に高かったですね。とにかく迷惑をかけっ放しでしたよ。

文芸部って、毎日のように飲みに行きますから

当時、企画を立てる時には、（吉田）竜夫さん、笹川（ひろし）さん、それから企画部員が全員そろって、会社で打ち合わせするんですね。それで方向性が出たら、企画部員だけが温泉に籠もって。

――あ、籠もりですねぇ。

それが辛くてねぇ。着いたら、飯食って酒飲まされて、今日は温泉入っておしまいかなぁと思ったら、夜9時頃から打ち合わせが始まるわけですよ。朝方、3時、4時までね。で、寝る前に「お前は企画意図を書け。プラス、ペラシノ3本」「お前は人物表書け」とか決められるわけですよ。最初はこんなの簡単だと思ったんですけど、これが書けないんですよ。先輩たちはレベルが高いから、ぱぁーっと書いて温泉入ったり、昼間、ドライブ行ったりできるんですけど、僕は書いても書いてもOKが出なかったですね。特にシノプシスですね。「こういう話でどうでしょう?」「それはお前、ただのストーリーだろ」って、ライター言葉で「ヘソがない」って言うんですけど、「お前のはドラマになってない。ヘソもない」って言われてね。とにかく話がわからなくて、どう書きゃいいんだと。だから2泊3日で籠もりやるとね、ほとんど不眠不休みたいな感じで、ついに1回も温泉に入れなかったということもありましたよ。

■『一発貫太くん』

――最初に籠もられた企画って、なにか覚えてらっしゃいます？

僕が入ったのが昭和51年4月で、たぶん、夏以降だったと思うんで……52年オンエアの作品からだと思うんですよ。『一発貫太くん』が僕の最初の担当作品で、いきなり入ったやつに文芸担当持たせないですから、その前の籠もり……たぶん『ヤッターマン』かもしれませんね。

――『ヤッターマン』はシナリオも？

何本かやってますね、酒井さんに叱られながらですけど(笑)。

――それが最初に書かれた脚本になるんですか？

最初はね、たぶん『一発貫太くん』だと思います。自分が文芸やってたんで、1、2本は自分で書いたんじゃないかなぁ。

――クレジットには、お名前がないですが？

これ、時効ならいいんですけど……公にしていいかどうか、酒井さんに聞いてください。

――酒井さんは、堀田史門なんてペンネームで書いておられたそうですけど。

そうですか、ハハハ……。その辺は不問ということで……。いずれにしても文芸部って、毎日のように飲みに行きますから(笑)。なにかと費用が……。

僕はもう大好きでしたよ

— 当時の文芸部のメンバーというと？

えーと、尽三さん、陶山（智）さん、酒井さん、それから柳川（茂）くん、それと私、ですね。

— 尽三さんは、やはりある種のカリスマ性のようなものは？

ああ、ありましたねぇ。やんちゃ坊主がそのまま大人になったような、すぐ怒るしね（笑）。でも人情家ですぐ泣くし、ワガママ言うし（笑）。なんか妙に優しかったり。とにかくカリスマでしたね。で、僕はタツノコってより、文芸部っていう小さな会社があって、そこで働いてるみたいな感じでしたね。そこのトップが尽三さんで、オーナーが竜夫さんで、時々来て、若い、僕らにも「元気か？」と目をかけてくれるみたいな。だから、初期の頃は制作の人もあんまり知らないし、演出も笹川（ひろし）さんぐらいしか知らないし。ほとんど、こう、隔離された世界でしたねぇ。

— 宮田さんにとっての、吉田竜夫さんの印象を聞かせていただきたいんですが。

僕はもう、大好きでしたよ。尊敬してましたねぇ。もちろん、鳥海部長も酒井さんも尊敬してましたけど。竜夫さんはオーラが強くて、僕なんかいちばんペーペーですけど、可愛がってくれたんですよ。クリスマスとか家に来てくれたりしたこともありましたね。

— 宮田さんのお宅に？

たぶん、吉田健二さんも九里一平さんも知らないと思うんですけど。

それに竜夫さんのボトルのある飲み屋のうち、何軒かは、フリーパスだったんです。飲んで、お金を払わないで帰るっていうね（笑）。あと、僕と天野さんと竜夫さん、3人でギターをやったりとか。僕がトラブル起こして、文芸部をクビになりそうな時も、竜夫さんが間に入ってくれたりとか。その辺のことを知ってるのは柳川くん、天野ちゃん、下元明子さんくらいかな？

— 吉田竜夫さんの体調が悪くなった話は、いつ頃に？

竜夫さんがだいぶ痩せてきた頃ですけど、「入院するんだ。でも、すぐ治るから。そしたら、一緒に曲を作ろうな。もう詞は書いてあるんだ」って言われたんですよ。だから僕も「じゃあ、早く治ってくださいね。一緒にやりましょう」みたいな。その時に僕は、病名も知らなかったんで。（入院は）1ヵ月かそこらかなぁ、と。それが最後でしたね……。

— 竜夫さんが亡くなられて、尽三さんたちが独立された後というのは、やはりタツノコは自分たちが支えなきゃいけないという責任は感じられました？

うーん、難しい質問ですねぇ。感じてたことは確かです。不安のほうが大きかったですけど。僕も、柳川くんもね。

— それ以降、一時期はほとんどの作品に、柳川さんと宮田さんのお名前が、クレジットされることになりますけど。

柳川くんは文芸部、僕はその頃、営業部でしたけど、ほとんど、ふたりで組んでやってましたからね。柳川くんには公私ともに、とてもお世話になりました。彼は凄いアイディアマンなんですよ。ふたりで企画やった時は、彼が突拍子もないアイディアを考えて、僕が、それを型にはめていくという感じで、楽しかったですね。ただ、タツノコにどれだけ貢献できたかっていうと、ちょっとわからないですけど。

とにかくふたりで夢中で働いてました。僕は円形脱毛症になったり、胃を2／3切ったり、それで黄疸になって、駅の階段も登れなくなるぐらい疲れて、最後は自宅で倒れちゃいましたからね。柳川くんもかなり大変だったと思いますよ。

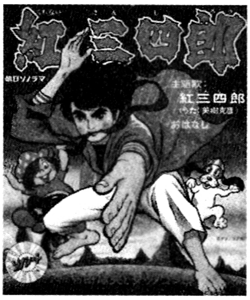
— 現在、タツノコプロの流れを汲む会社、プロダクションI-G、スタジオぴえろ、そしてJ・C・STAFFという印象があるんですが。やはりタツノコの血を意識するみたいなところはあるんですか？

難しいなぁ。確かに竜夫さんは大好きだったし、九里さんもね。ただ作品の傾向・作り方はかなり違うんじゃないかな。いずれにしても気持ちとしてはタツノコ出身っていうことはあるし、やはり僕の原点だと思います。感謝しています。

（2002年3月8日、於／東京都三鷹市「J・C・STAFF」）

タツノコプロ JACKET GRAFFITI

▲『紅三四郎』　品番号／SCS-79　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1969年８月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／330円　収録内容／正・副主題歌（新）



▲『紅三四郎』　品番号／P-36　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／1969年６月２日　ジャケット総ページ数／16ページ　価格（当時）／330円　収録内容／正主題歌と新録ドラマ「猫魔族の挑戦」（脚本／若林一郎）

▲『ハクション大魔王』　品番号／SCS-89　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1969年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／330円　収録内容／正・副主題歌

▲『ハクション大魔王』　品番号／P-52　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／1969年11月１日　ジャケット総ページ数／16ページ　価格（当時）／330円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「大モテジャングルの王様」（脚色／辻真先）

▲『昆虫物語みなしごハッチ』　品番号／SCS-101　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1970年４月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／400円　収録内容／正・副主題歌

▲『昆虫物語みなしごハッチ』　品番号／KKS-20064　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年６月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／1000円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌10曲

▲『昆虫物語みなしごハッチ』　品番号／SD-3　形式／30cmＬＰ　発行所／サン企画　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／14ページ　価格（当時）／1300円　収録内容／オリジナルの「ハッチ音頭」とえかきうた５曲、サントラドラマ「きずだらけのバレリーナ」「魔のむしくい草」、他

▲『昆虫物語みなしごハッチ』　品番号／P-68　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／1970年５月20日　ジャケット総ページ数／16ページ　価格（当時）／330円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「この空のどこかに」

▲『いなかっぺ大将』　品番号／SCS-114　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1970年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／400円　収録内容／正・副主題歌

▲『いなかっぺ大将』　品番号／KKS-20076　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年８月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／1000円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌10曲

第三章　演出という術(すべ)

■『紅三四郎』より

笹川ひろし

（ささがわ・ひろし）

1936年7月9日、福島県会津若松市出身。学生時代から漫画を描き続け、'57年に手塚治虫の専属アシスタント1号になる。'58年「少年画報」誌上に『探偵学校』を連載して漫画家としてデビュー。以降、SF感覚溢れる『鉄腕ベビー』や『魔犬五郎』などを発表し人気を得る。'62年、手塚治虫が虫プロダクションを設立し、念願のアニメ制作をすると知り『鉄腕アトム』の絵コンテを2本ほど手伝う。同じ頃、漫画家仲間の吉田竜夫らが設立したタツノコプロに、東映動画（現・東映アニメーション）からアニメ用のプロットを作ってほしいという依頼があり、『アトム』の絵コンテを手伝った経験からタツノコプロに参加。『宇宙エース』以降、一連のオリジナルの作品のディレクターとしてタツノコプロの発展につくす。

'79年9月にタツノコプロを退社し、オフィス・アカデミー(後の東京動画)に移籍『メーテルリンクの青い鳥　チルチルミチルの冒険旅行』や『忍者ハットリくん』で総監督を務めた。また、タツノコプロの『タイムボカン』シリーズが放送中だったため、移動用に笹川ひろし事務所を新たに設ける。フリーとなってからは、この事務所を母体に、『ときめきトゥナイト』『パーマン』『オヨネコぶーにゃん』『ウルトラB』『げらげらブース物語』『ダッシュ！四駆郎』『平成　天才バカボン』(以上、総監督)などに携わる。'91年にはアニメーション21の設立に関与し『炎の闘球児　ドッジ弾平』『お～い！竜馬』の総監督、『サラダ十勇士　トマトマン』の原作を担当。

'95年、企画及びディレクターとして古巣のタツノコプロへ復帰。現在は『よばれてとびでて!アクビちゃん』の総監督を担当中。

「アニメ面白いですよ」みたいな話をしたと思うんです

私、武蔵小金井に住んでたんですけど、吉田竜夫さんの自宅兼アトリエが、いまの西国分寺の駅の近くにあったんですよ。そこへ「少年」（光文社）っていう雑誌の編集部の人に、連れて行ってもらったんですよね。そこで初めて吉田3兄弟にお会いしました。アシスタントの人も4～5名いました。僕もその頃、漫画を描いてたんですけど、でも、吉田さんほど忙しくはなかったですから、時々手伝いに行ったりするようになるんですよ。ただ、なにしろ絵柄が違うんですよね（笑）。私は手塚（治虫）調ですし、吉田さんは超リアルな絵、劇画チックなやつでしょう。私、そういうのダメなんですよ（笑）。だからお手伝いったって、ベタ塗ったりですね、まぁさほど役に立たなかったと思うんですけどもね。

――その当時のアシスタントさんというと？

古城武司さんとか、望月三起也さん……あと、時々（遊びに）来てたのは、辻なおきさん。このあたりの人は、そこで知り合いましたね。

――その段階で、タツノコの社員になられたわけではない？

ないんですけどね、それでも3日か4日泊まり込みで手伝ったりしたことはありますよ。その他に、あの頃、手塚（治虫）先生がめちゃくちゃ忙しい時期だったんで、『鉄腕アトム』の絵コンテを手伝ったりしたでしょ。で、そんな時たまたま、吉田さんのところに東映動画からアニメの共同製作の話が来てですね、「アニメ面白いですよ」みたいな話を、僕は吉田さんにしたと思うんです。

――最初は、漫画のアシスタントの人たちが、アニメーターをやればできるんじゃないか、みたいな感じだったんでしょうか？

いや、アシスタントの人たちは、アニメやるのが嫌だったみたいですね。何人か、引きずり込みたかったんですけど、「俺は雑誌に（漫画を）描きに来たんだから、アニメは関係ない」って断られた人もいます。原（征太郎）さんも断るんじゃないかと思ってたら、吉田さんがどうやって説得したか、その現場には私、いませんけど、最後には承知して、それで東映に通うようになったわけですから。

――その段階でも笹川さんは？

外の人です。ただ東映動画からは、これから新人を育成して、その人たちを使う、クランクインは3ヵ月後だと、非常に具体的な話が来てますから、じゃあタツノコプロとして何名出す、ということで、吉田さんも、やっぱり具体的になるしかないですよね。それで、社員ってことになったんですよ。

もう落ち武者みたいな気持ちになったんですけど

――東映動画に通うようになられて、具体的には？

研修の部屋があるんですよ、そこへ僕と原さんが研修の人たちと入って、授業を受けました。先生が熊川正雄さん。

――熊川さんに、実地に、アニメーターとしていろんな技術を教えられた？

そうです。僕らが中割りしたのを、熊川さんがひとりずつ見るんですよ。で、ＯＫの判子を押してくれると、次の課題をもらって、だんだん難しくなっていく(笑)。それで結局、研修期間が3ヵ月間で終わったんですけど、全部終了してる人もいれば、いい加減な人もいたと思うんですよ(笑)。

――笹川さんは？

一応、終了でね(笑)。それで、その2〜3日後の夜に、いよいよクランクインする、ということで、大泉の料亭みたいなところで、乾杯したんですよ。その時、本当は東映動画とタツノコのトップが〝揉めてるな〟ってのは知ってたんですよ。だから、ひょっとしたら……という予感はしてましたよね。

――揉めてる原因というのは？

要するに配分の問題だと思うんですけど、やっぱり、買い取りでしょ？　結局は、タツノコ側としてはそれが我慢できなかったんじゃないですかね。

――その後、タツノコに戻ることになられるわけですが。

東映動画も我々に「残って、ここで演出やってけばいいじゃないですか」って言うんですよ。

――それは、熊川さんが？

いやいや、熊川さんじゃないです。プロデューサーの原徹さん。で、もし戻ったら、これからどうなっちゃうんだろう、って、もう落ち武者みたいな気持ちになったんですけど、やっぱり雑誌仲間でもあるし、行きがかり上、「どうしても残るわけにいかない」と。そしたら原さんも「私もそうします」って。「じゃあ、もう行くな」って吉田さんに言われて、それに従いました。東映動画は新しい企画を急遽、作り上げましたよね。それが『（宇宙パトロール）ホッパ』ですよね。

――その段階で、タツノコで『宇宙エース』をやるぞ、って言っても、まだなにも……。

なかったですね。ないから、ご自宅に中2階みたいなとこがあったんですけど、そこをアニメ室にしてね、それから都内だけだったけど、アニメーターを募集したんですよ。それで来たのが、奥田誠治さん。

――ＴＣＪ（現／エイケン）から……。

そうそう。なんで来たのか知らないけど、彼が

いろいろと教えてくれました。

――**その時は、まだ西岡（たかし）さんたちが来られる前の段階なんですね。**

前ですね。今度は場所を準備するために、吉田さんは鷹の台の山林を買われたんですよね。で、木を伐って宅地に造成してプレハブ住宅を建てて、アニメ班がそっちに移ったんですよ。その時ね、不思議なんですけど、奥田誠治さんはもういないんですよね(笑)。そこで、第1期生の募集をして、これは全国版でやりましたから、西岡さんとか、坪田力蔵さん、あの連中が……。

――**奥田竜緒さんとか。**

ああ、そうですね。

――**で、その方たちに、今度は笹川さんが教えられた？**

そうです(笑)。で、もうちょっと後で木下（敏治）さんが入ってこられたのかな？

――**たぶん直前まで、虫プロにいらしたと思うんですけど。**

そうですね。その当時は、虫プロさんの人たちっていうのは、我々から見たら神様みたいな人ばっかりで(笑)。

――**木下さんはどういう立場で来られたんですか？**

演出です。原画も描かれてましたけどね。

――**第2期生を募集された頃『宇宙エース』の作業は、どの段階まで進んでたんでしょうか？**

パイロットフィルムに取りかかった頃じゃないでしょうか。

――**撮影が、まだネズ・プロを作る前の黒木衛さんですけど、撮影された場所は？**

なんか四谷あたりだったと思うんですけど、コマーシャルの会社に、撮影台がひとつだけありまして、そこで黒木さんに撮影してもらったんですよ。その人が、自らシャッターを押して、セルを取り替えて、私がつきあって、それで1月くらいかかりましたかね。毎日、でき上がったセルを、車で持って行くのを繰り返して。

――**仕上げのスタッフはどこにいたんですか？**

それは社内にいます。スタジオに。

――**それも募集で集められた？**

ええ。でもやっぱりねえ、人手が足りないから、外注さんを頼るわけですよね。そうすると東映動画のベテランの人たちがね、やってくれるんですよ、アルバイトで。

――**じゃ『ホッパ』をやってる人が『宇宙エース』もやってたんですね(笑)。**

いや『ホッパ』やってたかどうかはわかんないですけど(笑)。

「それからおじさん」はそうかもしれませんね

――**『宇宙エース』は、比較的かわいらしい絵柄だったのが、次の『マッハGoGoGo』で、いきなりリアルになりますよね。**

「こういう絵はアニメ向きでない」ということを、アニメーターはみんな言ってましたよね。やっぱり作業の効率も悪かったですし、だから、大冒険ですよね。

――**絵的な部分での指導は、どなたが？**

社長が、作監です。ただスピード感が出なくてねえ、大変だったですよ。それでセールスして（オンエアが）決まった時にね、2話だったかな？　できがよくなくて、これではちょっと放送できません、みたいな感じで、やり直してます。3分の1くらい直したのかなぁ。

――**カラーになるってことで、その部分のご苦労もありますよね？**

そうですね。まだ、モノクロのテレビで見ている家庭が多いじゃないですか。だから、白黒でもカラーでもよく見えるように、っていう厳しい注文があるんですよ。それで、カラーフィルムを機械にかけて1話ずつ検査されたんですけど、赤とか、ちょっと強烈な色が出ると、基準の範囲から針が振れて出ちゃうんですよ。

――**それは、フジテレビでやったんですか？**

いや、あれは日テレだったんですよね。

――**え？**

だけど、日テレでは放送しなかったんですよ。やるつもりで検査したんでしょうけど。

――**3作目で、ついに笹川さんの原作で『グズ**

ラ』がスタートするわけですけど、今までの吉田竜夫原作に替わって、ここで笹川さんの原作になったのは、何か理由が？

これはねえ、雑誌漫画家時代に下地があるんですよ。「少年サンデー」（小学館）だったと思うんですけど、そこに『クズラ』っていう名前でね、おんぼろ怪獣マンガを読み切りで描いたんです。で、タツノコでアニメをやるようになって、「こういう企画がありますけどどうですか」って。

―笹川さんから？

はい。それで、他の会社に（商標を）取られるとまずいから、名前を伏せておいたほうがいいんじゃないか、ということで、じゃあ〝グズラ〟にしとこう、と。

―まったくの仮題だったわけですね。

仮題だった。だけど、グズラ、グズラ、と言ってるうちにグズラのほうがよくなっちゃったんですね（笑）。

―これは最初、カラーの予定だったんですか？

カラーで動いてたと思うんだなあ。壁にカラーのサンプルを貼って、どの色がいいか、なんてやったことがありますよ。

■『オンボロ怪獣グズラ』「週刊少年サンデー」（小学館）'66年3月13日号

―『マッハ』のスタッフは、比較的『宇宙エース』を踏襲した流れがあったんですけど、『グズラ』に入ってから、演出家もいろんな方が入ってきてますよね。

15分の2本立てでしょ、バラまきやすいんですよ。だから、ちょっとアルバイトで、例えば虫プロの人がね、内職でやれる素材だったんです（笑）。

―マンガの連載は「少年サンデー」で、板井れんたろうさんが……。

ええ、私が描けばいいんですけど、描けないでしょ。それで板井さんに――漫画家時代に何度か会ってますから――雑誌社と合意の上で、お願いしたんです。

―その次の『ハクション大魔王』で「それからおじさん」みたいに、茶々を入れるキャラクターを登場させますよね、今風に言えばメタフィクションな感じで。これは、どんな発想から出てきたものなんですか？

これは、タイミングっていいますか、リズムを作る、瞬間的なね。映画っていうのは流れてますから、波、山がありますよね。そこにぽん、と何か、わずかな秒数ですけどひとつ入れてやると、こう、吸引力が出ると思うんですよ。そんなことで、ちょっとね。

―あれってシナリオには？

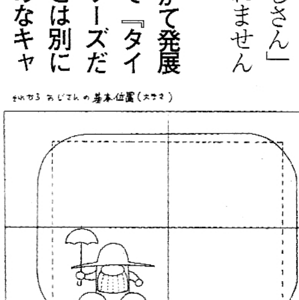
ないですよ。

―キャラクターも笹川さんが作られたんですか？

「それからおじさん」はそうかもしれませんね。

―あれがやがて発展して、それこそ『タイムボカン』シリーズだと、場面転換とは別にああいうこまめなキャラクターが必ず一発芸をやる、ということになるじゃないですか。どのあたりから、ご自身の演出のひとつのキーポイントとして、ああいうものを意識されるようになったんでしょう？

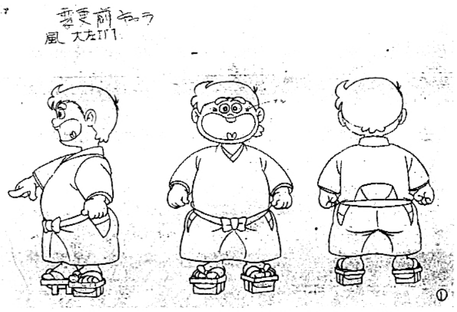
まあ『ヤッターマン』くらいじゃないでしょうかね。まあ、遊びですからね（笑）。結局、遊べる作品じゃないとできないわけですから、『いなかっぺ大将』なんか、ああいうのないですよね。そういう点では、真面目ですよ。



■『ハクション大魔王』それからおじさん（基本位置指定）

「笹川がいいって言ったらやる」みたいな雰囲気になっちゃってね

―『いなかっぺ大将』は、吉田竜夫さん以外の原作っていうので、これはタツノコとしては異色



■『いなかっぺ大将』風 大左ェ門

だったと思うんですけど……。

読広さんの会議室で重役さんたちに囲まれて、「今回はこれをやってもらえないか」って説得されたんですけども、タツノコ側は「うちはオリジナルができるんですから、何も原作ものをやる必要はありません」って、かなり反対したのを覚えてますよ。でも最後、「じゃあ、笹川がいいって言ったらやる」みたいな雰囲気になっちゃってね、いつの間にか孤立ですよ(笑)。社長も困っててね。そしたら向こうのいちばん偉い方が、「とにかく今回はこれやってもらわないと困るんですよ」って言うんですよ。「とにかく育ててみてくれませんか」って、飄々としておっしゃったんですよ。で、僕もその時、すーっと、〃それもそうかな〃みたいな気になって、それで「わかりました」って言ってしまいましたけどね。

―― その段階で、原作漫画のキャラクターからアニメ用のキャラクターを起こすという初めての経験を。

そうです。原作ですと（風大佐ェ門の）着物にね、細かな模様が入る。何枚も描かなきゃいけないんだから、これだけちょっと勘弁してくれませんか、ってことで、それは川崎（のぼる）さんに納得してもらってね。

―― 竜夫さんが描かれたりはしてないんですか？

ないです。一切触れませんでしたね。さすがにね(笑)。

―― オープニングの絵コンテは笹川さんがやられてますよね。

そうですね。

―― オープニング、かなり変わりましたよね。

何回もね。

―― タツノコとしては珍しかったんじゃないですか、この時期？

結局、2年やりましたから、飽きないために、音頭にしたりね。

―― その盆踊りのバージョンで、やけにライヴ・アクションというか、ロトスコープのような感じのバージョンがありますけど、あれは実写で撮ったのを描き起こしたんですか？

ええ、そうですね。実写で、っていうより、コマ写真だったかな。でも、合わなくてねえ(笑)。

―― 2年間の中で、原作のストックが尽きて、当然オリジナルの話をやっていくことになったと思うんですけど、川崎のぼるさんは、どれくらいアニメに対して……。

いや、川崎さんはまったく関わりませんでしたね。注文も、直接はなかったですし。

―― 最終回で、大ちゃんが花ちゃん菊ちゃんと結婚しちゃう、あれこそ原作にない大変な展開だと思うんですけど、あれも？

あれも別に、なんにも言われませんでしたね。

―― ああしよう、って言ったのは文芸部なんですか？　それとも笹川さんが？

私でしょうかねえ。

―― やっぱり、どっちかだけじゃ可哀想だと？

そうでしょうね。まあ面白い作品でしたよねえ。

ギャグものの場合は比較的、許してくれた

―― 笹川さんがタツノコプロとずっと関わってこられたなかで、やっぱりその、演出部と文芸部の衝突というか、どっちが主導でいくか、みたいなやりとりって、絶えずあったと思うんですけど。

主導、っていうより、やっぱり「これはちょっとひどいシナリオじゃないか」みたいな時はありますよ。部長決裁ですから、部長（鳥海尽三）のオーケーが出て、こっちに（シナリオが）来てるわけです。だから「部長がいい、つったのに、それを悪いとは何事か」って(笑)。これがいちばん辛いとこですよ。今度は部長と部長がね、私は演出部の部長でしたから「これはないんじゃないの？」って、そういう衝突はしょっちゅうありましたよ。

――そういう時、吉田竜夫さんはどういう立場にいるんですか?

吉田さんは傍観ですよ。

――(笑)。

演出の連中ってのは、「今回このシナリオで演出をしろ」って時に、まずシナリオ読むでしょ。そうすると、これは自分も経験してますけど、半分は評論家になるんですよね。自分の感性と違う……違いますよ、当然ね。すると「面白くない」という言葉に変わっちゃって「こうしたほうがいいんじゃないか」「俺だったらこうやる」ってことになって、絵コンテでそうやってしまうんですよ。鳥海永行さんなんかもね、どっちかっていうと私流なんで、自分の思い通りやりますから、かなり変わったりするんですよ。そうすっと文芸部から「あのセリフがなぜないんだ」って、クレームがね。片や、セリフ一言に神経つかって書いてると思いますから、それがなくなってたりすると、やっぱカチンとくると思いますよね。僕も自分でシナリオを書いてみたことがあるんですけど、別の演出家に渡したんです。そしたら、もの凄く変えられたんですよ(笑)。それで、逆の立場がわかったことがあるんですよ。なるほど、これがシナリオライターのストレスになってたとしたら、やっぱよく考えないといかんなあ、って思いました。でもね、ギャグものの場合は、シナリオライターも比較的、許してくれたようですね。

――面白ければ許す、みたいな?

セリフ一言に、そんな神経つかって書いてないと思うんですよ。

――文芸部の、シナリオに対するこだわりかたも変わってくる?

それは当然ね、変わりますよね。特に『ボカン』シリーズなんかはもう、いろいろ言いたかったんだろうけど、任してもらいましたよね。許してもらった、っていうか(笑)。

――『ボカン』シリーズなんかは、フィルムの勢いというか、連想ゲームのように、その場でいかに面白いことを思いついたか、みたいなことが命のような感じもありますよね。

だから後輩に伝えるのがね、難しかったですよ。「シナリオ通りにやっちゃあいかんぞ」っていうね(笑)。

――(笑)。

でも、あんまり変えちゃあいかん(笑)。……ところがね、やっぱり変えるんですよ。僕が(コンテを見て)おかしいな、って思うのが、やっぱり出てくるんですよ。で、「もう1回シナリオ読んでご覧なさい」と。「シナリオと自分の描いたコンテと、どっちが面白いか?」と。そしたら「シナリオのほうが面白いですね」って人が、いましたけどね。パーッと(シナリオを)読んで「ああ、面白くねえなあ」みたいなことで(コンテを)描き始めちゃうからね。今は、ホンの読み合わせって、代理店とか局の人とか、関係者が混ざってね、ライターにも直接来てもらって、監督も交えてやるじゃないですか。だから比較的、同じ考えでまとまるんですよ。でも当時は、そうじゃなくて、とにかく文芸部で話し合って(シナリオを)作っちゃうわけですよ。演出家もそのなかに入っていれば、そういうこともなかったんでしょうけど。

いくら引き戻そうと思っても、引き戻せなくなる

――当時『タイムボカン』シリーズって、主人公よりも、むしろ悪役側のほうが人気があったと思うんですけど、そうしたリアクションって、どう受け止めてらっしゃいました?

じゃあ悪役の話を作ったら面白くなるか、っていったら、そうじゃないですよ。こっち(主役)がいるからそっちが活きるんであってね。そういう意味ではやっぱり、善玉といいますか、ヒーローを大事にしなきゃいけないってことは、常に思ってましたよね。ところがやっぱり勢いがね、凄かったでしょ? だから、だんだんだんだんエスカレートして、前に出てきますよね。役者さんも、そんな気分になってくるしね。で、主役の(声優の)人たちが、我々はどうせ表札、みたいなね(笑)。

――あの、敵の女ボスを、あそこまで色っぽいキャラクターにするっていうのは、あんまり子供向けの発想じゃない気がするんですけど、子供向け

だけれども、笹川さんなりにやっぱり遊んでる部分なんですか？

ありますよね。最初、かわいさを出そうとしたんですけど、だんだんやっぱり……どうしてなんでしょうねえ、終いには凄い女になりましたからねえ（笑）。いくら引き戻そうと思っても、引き戻せなくなるんですねえ。勝手に歩き出す、っていうか。

——『ヤッターマン』の時に「タイムボカンシリーズ」って冠がつきますけど、『ヤッターマン』って、都合2年もやってるじゃないですか。これは逆に考えると、本当は『ヤッターマン』で終わらせようとしてたってことなんですか？

いや、そんなことないですよ。こっち（『ヤッターマン』）が人気あるから取り替えるのが怖かったし、もっとどんどんやろうと思ったんですけど。

——でしたら『ヤッターマン』が終わるって決まった時は、かなり……。

■『タイムボカンシリーズ ヤッターマン』ドロンジョ

やっぱ、不安ですよね。今度どうしようか、っていうのは、用意はしてましたけどね。怖いんですよ、変える時って。

——逆に、次の新しいメカを出して3年目も『ヤッターマン』にしようという発想ってのはなかったんですか？

それはなかったですねえ。やっぱり、スポンサーサイドで、だんだんメカの切り替え時期を早めてくるんですよ。1年だったのが、半年で……1クールで……っていうふうにね。やっぱり、売らなきゃいけないから（笑）。

——それは、スポンサーサイドから言い渡されて、それに合わせてストーリーを……。

考えなきゃいけないんです。それが大変だったですね。

まあ、部長ですから

——タツノコの演出家さんって、ある段階まで、原さんと笹川さん、九里さんの回り持ちでやられてて、『ガッチャマン』で鳥海（永行）さんが抜擢されるまで、あとに続いて監督に立つ人がずっといないまま来てたじゃないですか。それが『てんとう虫の歌』くらいから、後進の人たちを育てていかれるわけですけど、これは、何かきっかけがあったんですか？

これはですね、とにかく辞めていく人が多かったんですよ。で、演出家も社員が3人か4人しか残ってなかったんです。外（外注）の人はね、作品に愛着はあるんだろうけど、やっぱり外の人なんですよ。その仕事さえやればいいという。これでは駄目だ、育てましょう、と。それで募集したんですよ。新聞募集だったと思いますけどね。そしたら幸いっていうか、真下（耕一）くんと、植田秀仁くんと、西久保（瑞穂）くんと。その時、3人ともまだ大学生でした。それで卒業前に何回か見学に来てたと思うんですけど、卒業して、全員来ましたよね。それからコンテを清書させたりしてたんですけどね。不思議なことに、全くアニメを知らない人たちばかりなんですよね。

——どちらかというと映画青年という感じの……。

そういう人たちだったんで、かえって良かったんじゃないですかねえ。で、タツノコがいままで作り上げたフィルムを、試写室でね、毎日見てましたよ。それで見るたびに感心して、面白くなったんでしょうね。で、1年遅れて、押井守くんがみえるんですけど、1年経過してる3人の先輩が、いろいろ面倒みてたようですけどね。

——前に押井さんが『ヤッターマン』の、ゾロメカが出てくるシーンだけ（コンテを）任されて、それを最初にやった、っておっしゃってたんですけど。

外の演出家の切ってきた絵コンテをチェックしますと、ほんとシナリオ通りで、ドンパチはやってるんですけど、非常に淡泊なんですよね。で、そのところだけ、押井くんと打ち合わせして、や

ってもらったんですよね。全部描くのは、まだ大変だと思ったんで。まぁ、こっちが忙しかったせいもあるんですけど(笑)。そしたら、まぁ及第点というか。もっとも、何回か繰り返しましたけどね。

――そういう、後進の指導にあたるのは、もっぱら笹川さんの役割だったんですか？

まあ、部長ですから(笑)。

演出も濃いんですよ

――笹川さんはどのくらいの時期に、吉田竜夫さんのお身体のことはご存じだったんですか？

正確にはね、亡くなる4ヵ月くらい前でしょうかね。

――もう入院されてた？

いや、されてなくて、ある時、「おなかが下ってしょうがないんだよ」っておっしゃるんですよ。「今日もラーメンだけなんだ」って。「社長、ラーメンなんて脂っこいもの食べちゃあダメですよ。お粥ですよお粥」って言って、その場は終わってるんですけど、何日かして入院だ、って話になって、それからは早かったですよ。

――お見舞いには行かれたんですか？

丁度ね、『風船少女テンプル（ちゃん）』ね、あれのポスターができた、って誰かが病室で見せてたことを覚えてますよ。やっぱり行くたびに、ちょっとずつ痩せられてたけど、まさかと思いますもんね。

――じゃあ、心の準備なく逝かれてしまった感じなんですか。

そうです。だから知らされて吃驚して。えーって。

――その、演出部長という立場であれば、社長が亡くなった悲しみに浸っている暇なく、会社の経営の問題に引きずり出されたりとかって？

それは引きずり出されませんでしたけど、今後、タツノコはもの作りをやっていけるかっていう問題を、外部が、例えば読広さんあたりが非常に心配されたんですよ。それで、まだふたりの兄弟もおられますし、まあ自分のことを言うのも変ですけど、笹川っていう人もいるし、大丈夫ですから、というね、まあ文書でしょうね、おそらく。代理店がそれを作って、スポンサーへ対処されたっていうのは聞いてます。

――でしたら、その後、笹川さんがタツノコをお辞めになられるのは、吉田竜夫さんがお亡くなりになったのとは直接、関係はない？

いやね、吉田竜夫さんが亡くなってから、やっぱりいろんな方が去っていきましたよね。鳥海尽三さんとか文芸部の人たちも、やっぱり亡くなってから去られてますし。ですから、原さんと、「最後に残るのは俺かな、原さんかな」って、しんみり話したことありますけどね。僕もまさか、そんな話をした時は、去るとは思わなかったんですけどね。でもなんかそういうことになっちゃって、最後に残ったのは原さんでしたけどね。

――その後、フリーになられてからは、シンエイ動画で藤子アニメの総監督をされたりとか、いろいろな作品に関わられるわけですけど、他社の作品を経験されて、改めてタツノコらしさを感じられる部分ってありますか？

やっぱりねぇ、タツノコ作品は内容が重いんですよ。濃い、って言ったらいいのかな？ 外の作品はね、非常に淡泊ですよ、これでいいのかなぁと思うくらい。

――それは絵柄ってことで？

絵柄がやっぱいちばん（の理由）かなあ。

――演出も濃いんでしょうか？（笑）

そうです、演出も濃いんですよ(笑)。なんだか濃いんですよね。

――それは竜夫さんが亡くなっても……。

変わらなかったですね。

――受け継がれてた？

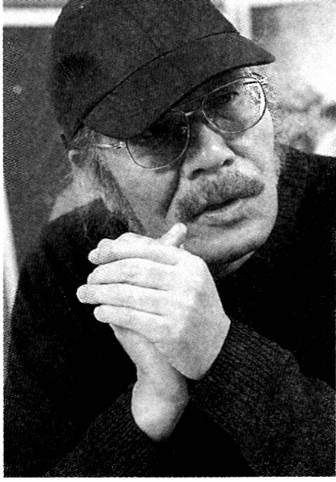
社風として(笑)。いま『（よばれてとびでて！）アクビちゃん』なんてやってますけど、なんかこだわってね、軽く描けないんです、濃いんですよ。不思議ですね(笑)。

――前後しますけど、再びタツノコに戻られたきっかけというのは？

『（タイムボカン）王道復古』のパーティの時だったかな、九里社長に「笹川さん、もうそろそろいいんじゃないの」って言われて、「そうですねぇ」ってことになって、まぁそういうことですよ(笑)。

（2002年3月5日、於／東京都国分寺市「竜の子プロダクション」スタジオ）

原征太郎



（はら・せいたろう）
1939年10月25日、高知県出身。小さい頃から絵を描くのが好きで、漫画家に憧れ上京。永島慎二らとグループを結成して漫画家活動を開始。既に貸し本で漫画家活動をしていた友人の奥田竜緒と共に原田竜太郎のペンネームで『トッポジージョ』などを描く。'62年10月に吉田竜夫らが設立した漫画工房・タツノコプロにアシスタントとして入社。同社が『宇宙エース』をアニメ製作することになり、笹川ひろしと意気投合してアニメーションの世界へ。『宇宙エース』ではアニメーターとして参加し、続く『マッハGoGoGo』で演出家となる。以後、タツノコプロを代表する演出家として初期作品に関わり、'70年の『昆虫物語　みなしごハッチ』からは総監督として数多くの作品の監督を手掛ける。
第1次黄金期と呼ばれる草創期初期から、第2次黄金期と呼ばれる'87年頃までのタツノコプロ作品を支え続けた。特に笹川ひろし監督とは一緒に組むことが多く、各話演出を担当した『いなかっぺ大将』『けろっこデメタン』『新造人間キャシャーン』や、共同でチーフディレクターを務めた『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』など、ジャンルを問わない巧みな演出は、正に職人技と呼べるだろう。
チーフディレクターとしての代表作は『昆虫物語　新みなしごハッチ』『風船少女テンプルちゃん』『とびだせ!マシーン飛竜』『とんでも戦士　ムテキング』など多数。また、原案を担当した『カバトット』では、吉田竜夫と共に設定作りに参画し、作品世界の構築に深く関わった。
'87年3月にタツノコプロを退社してからは、フリーの演出家として『青いブリンク』『ポコニャン!』『ヤンボウ　ニンボウ　トンボウ』『バーバパパ　世界をまわる』などの監督を務める。現在は『しましまとらのしまじろう』の教材用ビデオの演出家として活躍中。

この人なら一生ついていけるなぁ、と

――原さんは、漫画家を志して上京されたそうですが。

赤塚不二夫、石森章太郎がやってた「墨汁一滴」っていう同人誌があるんですけど、僕は高知で、西日本マンガ研究会っていうのをやってたんですよ。赤塚不二夫が僕らの肉筆回覧誌の表紙を描いてくれたりしてたんですけど、赤塚不二夫を通じて「墨汁一滴」と肉筆回覧誌を交換したりね。そのグループに永島慎二も入ってきたりとか。

それで、17歳の時――高校3年の8月ですか――永島慎二が中城健太郎や杉村篤を訪ねて高知に遊びに来ていたんです。それでふたりとも東京へ行くというので、僕も遊びがてら同行して東京へ来たんです。最初にトキワ荘に遊びに行ったりしてね。で、あの頃はトキワ荘派と永島慎二派、どっちかにわかれてたんですよ。僕は、永島慎二、石川球太、中城健太郎、杉村篤（コン太郎）、ほうさやまなおたけ（峯たろう）、尾鼻こういちと7人でむさしの漫画グループというグループ組んで、悪名を(笑)。自分の漫画を認めてくれなくてもいい、わかってくれる人だけが読んでくれればいい

んだ、若い頃は遊びに遊べ、肥やしにしろ、というね、要するにフーテン組ですよ、だから悪名、高いんです。

――その後、吉田竜夫さんと出会われるのは？

23の初めだと思うんですよ、22の終わりだったかなあ、その頃です。その間、5年くらいは、喰ってけないわけですよ。だから、自分の描いたマンガを持って、まず神田へ出るわけですよ。神田は出版社、多いですから。まず小学館に行って「小学一年生」から「（小学）六年生」まで（の編集部を）回るわけですよ。で、秋田書店を回る。あの頃は、どこも景気が良くないから、これを参考にしてくれって、付録までつけてくれるわけですよ。

――ああ、月刊の雑誌を。

ええ。で、それをすぐ神田の古本屋へ持っていく(笑)。

――(爆笑)。

付録まで付いて、新品でさあ、出たばかりですから半額で買ってくれるわけですよ。それを7、8冊まとめて売れば、帰りはピース吸いながら、定食食べて電車に乗って帰れるわけですよ。あの頃は、バイトして食べていこうって気持ちがないんです。自分の描いたもので食べていくしかないって思ってるから。だから3日間、水だけ飲んでることもありましたよね。ある時、友達のところへ行って「安いけど原稿料入ったから、ラーメンでも奢るから」って言ったら、「いやいいです、いまお腹いっぱいです」「どうしたの、どっかからお金はいったの？」「いま、腹一杯水を飲んだところだから、お腹いっぱいです」って、笑い話みたいな、ね(笑)。

――その後、吉田竜夫さんと出会われたきっかけというのは？

僕の友達が吉田竜夫のアシスタントをやってまして、僕が、まだ若かったですから仕事もないし、吉田竜夫がアシスタントを、ということで呼ばれて、僕は1カ月のつもりだったんですよ。まして吉田竜夫の絵は、僕はあまり好きじゃなかった(笑)。僕がやってたのは、ギャグマンガでしたから。

――その頃のアシスタントって、他にどなたがいらっしゃったんですか？

大巻さんって、戦記ものの専門雑誌にイラストを描いてた人がいたんですよ。で、船とか飛行機は彼が描いてましたね。それから渡辺（正美）さん。「なべちゃん」って僕ら言ってましたけどね。それから、後にプークって人形劇団に行く上田（宜夫）くん。

あと、さっきの友達の飯田くんと、天馬正人さん。もうひとりくらいいたかな？　僕なんかの前に、古城武司とか、いたかもわかんないですね。

――原さんがいらっしゃった時は、古城さん、いらっしゃらなかった？

いなかったですね。あと、望月三起也は友達だったのか、手伝ったのか、時々遊びに来てましたけどね。辻なおきさんとかも。

――手伝われた作品というのは？

その頃だから『（少年）忍者部隊月光』（少年キング／少年画報社）とか『チャンピオン太』（少年マガジン／講談社）ですよね。で、絵は好きじゃなかったんだけど、吉田竜夫の人間性――涙もろいところがあったりして――に、非常に惹かれていったわけです。一日二日で惹かれたわけじゃないし、そりゃ腹立つこともありましたよ。だけど、心の底から憎めないんですよね。この人なら一生ついていけるなぁ、ついていこうかなぁ、という気持ちで。それでいながら時々、反抗しましたよ(笑)。でもそれをね、包んでくれたんですよ。「そうか、原くんの気持ちはわかる」と言ってくれる。で、僕は〝かわいいなあ〟と(笑)。もちろん、吉田竜夫は年上だからそんなこと言えないけど。

アニメには興味がなかったんですよ

それで丁度、1年目くらいに映画（アニメ）の話がきて、吉田竜夫がアシスタントの人たちに「協力してくれないかな」って言ったんですけど、誰も協力しなかった(笑)。で、僕は「吉田竜夫がやるんなら、やりましょう」って言ったら、「実は、笹川浩（ひろし）というのもいるんだ」と。

――笹川さんとは、その時に、初めてお会いになった？

東映（動画）に行くというので、初めて顔を合わせたんですよ。

――もうおひとり、小華和為雄さんは、アシス

タントではなくて、アニメをやろうという段階で、竜夫さんが声を掛けられた方なんですか？

　コマーシャル畑から呼んだ人ですね。

――東映動画に研修に行かれたのは、タツノコプロでアニメーションを作るための準備だったんでしょうか？

　そういうんじゃないです。あの頃、東映さんは石森章太郎とかいろんな人の原作を買ってたわけですよ。で、吉田竜夫のところにも「原作を買いたい」と。それで、吉田竜夫が『宇宙エース』を作ったんですよ。ただ東映で作るにしても、吉田竜夫が、絵は自分の息のかかった人たちに描かせたい、と。それを東映が承知して、素人だけど急遽集めた小華和さんと笹川さんと僕と3人を送るから、演出とか原画の勉強をさせてくれ、と。で、東映でパイロット版を作り始めて、打ち入りまでしてくれたわけ。その翌日か、とにかく1週間以内ですよ、吉田竜夫に呼ばれて「あれをうちでつくりたい」と。

――それはまた、どうして？

　僕は当事者じゃないから迂闊なことは言えないけど、確か『宇宙エース』は買い取りだったような気がする。で、その頃、週刊誌か何かに『鉄腕アトム』の記事が出たんですよ。印税の話とか、何億稼いだ、とかね。それで、吉田竜夫が「俺もやってやろう」と思ったんじゃないでしょうかね（笑）。たぶん（東映動画との）契約は、交わしてなかったんじゃないですか。

――それで東映動画から引き揚げられた？

　その時に僕らは『（宇宙パトロール）ホッパ』班に誘われたんですよ。要するに『宇宙エース』班として集めた人材がいるわけで、代わりに『ホッパ』という作品を作っていく。ついては、原画をキミらに描いてもらいたい、タツノコの倍（給料を）出すから、東映に残ってくれないか、と。将来のことを考えたら、普通、残るでしょ？　小華和さんは、残りました。それで、笹川さんと僕は悩んだわけです。その時に吉田竜夫に「原くんと笹川さんに辞められたら、俺はアニメを作れなくなる。俺はなんとしてもアニメを作りたいんだ、なんとかやってくれ」って涙を流された。僕は漫画家になりたかったから、正直言ってアニメには興味なかったんですよ（笑）。でも、吉田竜夫に一生ついていってみようか、と。

――その後タツノコで、笹川さんと原さんが東映動画で身につけたアニメの技術をアテに『宇宙エース』の制作が始まる……。

　いや、身につけた、なんてものじゃないですよ。だって、アニメになんの興味もない人間が3ヵ月間、勉強しただけですよ。3ヵ月やっただけでアニメの何がわかります？　なのに、僕はいきなり『宇宙エース』で原画チーフですよ（笑）。笹川さんが演出で。だから、無謀ですよ。めちゃめちゃですよ。知らないってことと若いってことは、恐ろしいっていうね。だっていま、素人で入ってきて3ヵ月ほどで、本番やらせますか？　責任、もたせますか？　できないですよ。あの頃だから、できた。

　で、（人員を）募集したんだけど、そのテストを作ったのは僕なんですよ。運動場を走る原画を描きまして、これの中割りをしろ、と。でも、僕より知ってる人がいるわけですよ、奥田誠治とかね。奥田誠治に「この原画おかしいよ、これじゃ中は割れないよ」と言われた覚えがあるけど（笑）。だって僕、「トラックアップってなんでしょうか？」って、そんなこともわからないで、原画を描いてたんですよ。それであの作品ができたんだから、恐ろしいですよね。

みんなが青春でしたね

――初期のタツノコ作品の総監督って、笹川さんと原さんがギャグもので、リアルものは九里さんがやるって感じのシフトですよね。

　九里さんは『紅（三四郎）』とかね、やっぱりいいものを作りましたよ。でも九里さんはね、もともと漫画家だから、アニメの会社を作るっていう話には、兄弟ですから同意して、一緒にやろうということにはなったけど、アニメーターになりたいとか、そういう気持ちはなかったんですよね。途中から、自分がやりたくなって演出をやるんだけど、動画を見るタイミングがわからないから、そこだけは頼まれて、僕が見てましたよ。「これはちょっとタイミングが遅い」とか「これは何コマでやったほうがいい」とかね（笑）。九里さんはあ

くまでも、映像のコンテじゃなくて漫画のコマ割りから入ってますから。で、当時は会社から「誰々は枚数で会社つぶす」とか盛んに言われたけど、いちばんつぶすようなコンテを書いたのは、九里さんなんですよ。九里さんが、人には「何枚！」とか言うくせに、自分がやると1万枚(笑)とかね。あの頃は、ゴンドラマルチとかやるのも、1本につき何カットまでって制限されてたんだけど、九里さんのやつはいちばん多いんです。でも経営者だから、誰も文句言えないわけ。だから九里さんがいちばん、お金を好きなように使ってた(笑)。これは、吉田竜夫もそうなんですよ。作り出すと、経営を忘れてんですよ。よく、経営者にものを作らすと失敗する、っていうけど、自分で作っちゃうと、もの作りに欲が出てくるでしょ？

――それだけ、アニメ作りに燃えられてた？

　みんなが燃えてた。みんなが青春でしたね。文芸も、背景も、撮影も、みんなが遠慮しないで、同等で喧嘩もし、ああしようこうしよう、って一丸となって、1話が始まる時は、会社の前に机とテレビを置いて、CMの時から用意をして、オープニングが始まると同時に「乾杯！」って、それがもう毎回の恒例でしたから。0・1%視聴率がのびたことを大喜びしてましたから。とにかく一喜一憂、吉田竜夫を頂点として、がーっとやってましたからね。あそこに追いつけ追い越せ、いまにタツノコがナンバー1になるんだ、という。あの頃は、東映（動画）は東映のカラー、（東京）ムービーはムービーのカラー、タツノコはタツノコで、それぞれの会社のカラーが日本のアニメにはあった。よく言われたのは、新作が出るたびに、タツノコは何をやらかすかわからないな、っていうことで、要するに型にはまってないわけですよ。どうしたら面白くなるか、何かやって驚かしてやろう、というね。そういうことを考えながらやったから、楽しみがあったんですよ。それをやらしてくれた土俵があったってことは、幸せですよね。いまは、そこまでやらせてくれる土俵がないですよ。ひとつのアニメがヒットすると、どこも似たようなキャラになってしまって、もうその会社に頼まなくったって、どこでもできる、というふうになってしまってね。

吉田竜夫が作りたかったのはこういうものなんだなぁ、って

　ある時、吉田竜夫が「原くん、ちょっと社長室まで来てくれ」と。行ったら、ハッチのイメージイラストがバーッと部屋に貼ってあるんですよ。「原くん、これどうだろう」と。で、見てたら「俺がなんでアニメをやろうと思ったか？　この『ハッチ』を作りたかったんだ」と。要するに親子ものをね。考えてみれば、吉田竜夫も両親はいない。兄弟3人だけで――毛利元就じゃないけど――まとまってやっていこう、っていう。で、「いいじゃないですか」って言ったら、「これを原くんにやってもらいたいんだ」と。僕も〝ああ吉田竜夫が作りたかったのはこういうものなんだなぁ〟ってわかったから、じゃあ「わかりました」と。

――続く『樫の木モック』も原さんですよね。

　1話は一緒にやって、吉田竜夫がコンテを切ったんですよ。で、覚えてるんですけど、「ここのシーン暗いよなあ」「そうですねえ」「これ直すわけにいかない？」「直すと背景、50枚書き直しですねえ、社長は直したほうがいいと思います？」「うん、原くんはどう思う？」「僕もそう思います」「じゃあ直させよう」「でも折角描いてもらったから」……で、新井（寅雄）さんに話したら、新井さん、その日から徹夜で直してくれましたよ。

　ハッチの羽根もね、吉田竜夫と一緒に、こうやって塗りましたからね。それで吉田竜夫の奥さんがおにぎり持ってきてくれてね。そういう雰囲気のなかで作ったんです。

――竜夫さんが、そこまで現場の作業に関わられてたんですね。

　で、いいことがあると「原くん原くん」って来て、「こういうことをスポンサーから言われたんだよ」ってね、ホントに嬉しそうに。その時はホント、童顔ですよ。それを見た時に、〝ああこの人はホントに（『ハッチ』が）好きなんだなぁ〟と。

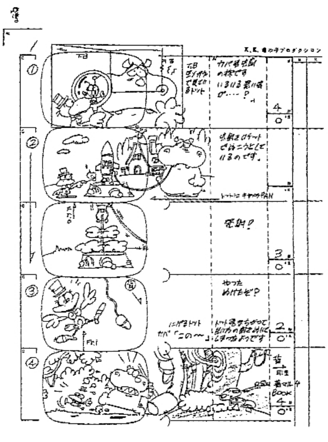
――『ハッチ』は音楽も毎回新録で。

　早めに（ラッシュを）渡して、それを見て作曲家が音楽つけてくれるから、合うわけですよ。だ

けど、お金もかかったんだよね(笑)。それだけに、吉田竜夫が作りたかったのはこれだろう、と。だから、吉田竜夫（の代表作）は『ガッチャマン』とかね、そういうふうに、やっぱり見られがちなんですけど、本当に好きなのはそうじゃないんだって、それは本人が、はっきり言ってましたからね。勿論、『ガッチャマン』も代表作には違いないだろうけども。

――『カバトット』は、原さんが原案ということですけど。

これは、僕がたまたま動画机に落書きをぺたっと張り付けてたのを、吉田竜夫がたまたま通りかかって、「原くんが描いたの?」「はい」「よし、それやろう!」(笑)。それで決まりなんです。「(キャラクター）設計図、作ってくれ」て言うから作ったら、「これ、帽子かぶせたらどうだろう」とか、吉田竜夫が手を加えて、そういうふうに拾い上げてくれた。そこで、うーんうーんと悩むんじゃなくて、即断でね。だから吉田さん、見た瞬間にパッと閃いたものがあるんじゃないですか。たまたまその時、5分ものの話がきてたっていう、タイミングもぴたっとあった。それがなかったら、この作品はなかったですよ。だから、有り難かったですよ。やっぱり作品ってのは、周りに、認めてくれる人、知らせてくれる人、本音の部分で忠告して尻をひっぱたいてくれる人、一緒になって考えてくれる人、いろんな人たちがいてできるものなんですよ。



■『カバトット』絵コンテ（画／原征太郎）

――その落書きの時点では、カバは違う動物だったとか?

もともとこれ、ワニだったんですよね。ただ、ワニっちゅうのはどうしても悪役でしょ？　だからカバにしたんですけどね。『カバトット』はね、もう1回やってみたいんですよ。このままじゃなくても、この世界をね。こんな時代なのに、なんだかんだ迷惑かけあいながら、どっか惹かれて生きてるっていうのは、楽しいじゃないですか(笑)。

「責任をとりましょう」と

――その後『樫の木モック』の時に、その後タツノコの作画の大きな戦力になる、林政行（故人）さんを……。

あの人はね、僕がタツノコへ引っ張ってきた人なんですよ。僕は、結構貪欲な部分がありまして、自分に力がないぶん、いいなと思う人は、絵を描く人でも演出家でも、相手に限らず引っ張ってきちゃうんです。自分にできるのはせいぜい、みんなが出したものを拾い集めることだから、自分の河幅がこれくらいだとしたら、いろんな人の力を借りれば、河幅が広がって大河になってくじゃないですか。そうやって良いものにしたいという気持ちがあるわけですよ。それで、林政行を僕のやる2話にぶち込みたいなぁ、どうしても欲しいなぁ、と思ったんで、乗り込んでいったんですよ。場所は忘れましたけど、宇田川（一彦）くんとふたりで描いてましたね。そしたら「俺らは高いよ」てな感じで(笑)。

その時に「わかった」ってすぐ戻って、吉田竜夫に交渉したんですよ。「これだけ欲しいと言ってる」と。そしたら「高いな」って言うわけですよ。「高くっても、欲しい」「原くんは必要か？　それだけの技量か?」って言うから「必要です、技量を持ってます」と言った時に、吉田竜夫が二つ返事で「わかった、じゃあそれで交渉しろ、やってもらえ」。それで、彼を2話にぶつけたわけです。後半は山本繁なんかも手伝ってくれたんですけど、それでできた2話を見た時に、吉田竜夫が「原くんずるいよ、1話より良いじゃない」って言ったの覚えてますよ(笑)。ていうところから、僕がずるずる引きずり込んで、彼はその後、『キャシャーン』とか、最終的には『（とんでも戦士）ムテキング』とか『ダッシュ勝平』とかね。で、それが彼の気持ちのどっかにあったんじゃないですか、なにかと「原さん原さん」って立ててくれて、僕の横にいつもくっつくようになってね、なんか知らんけど、ウ

マがあった。一緒に遊ぶ、っても麻雀くらいしかなかったけど(笑)。

『ガッチャマン』の時にも社長室へ呼ばれて、やっぱり同じように、「原くん、どうだろう?」って言うから「いいんじゃないですか」って言ったら、「これを原くんにやってもらいたい」(笑)。その時は、まだ『モック』が終わってなかったから「ちょっと待ってください」と。そしたらどうしても「原くんにやってもらいたい」って言うから、僕の下で、『モック』をやってたのが鳥海永行なんですよ。で、彼が上げたコンテって「ここはこうしたほうが……」っていうのは、あって1ヵ所くらい。99%、ほとんどいいものが上がってくるわけですよ。で「彼を監督にしましょう」って言ったら、「ダメだ」っていうわけ(笑)。でも僕は直接、彼と仕事してるからわかるわけですよ、彼がぐんぐん伸びてきてるのが。で、「もし失敗したらどうするんだ、原くんが責任とってくれるか?」って言うから「責任をとりましょう」と。どういう責任をとらされるかは、聞かなかったけれど(笑)。「原くんがそこまで言うなら、鳥海永行にやらせてみよう」ということで、あれが彼の1作目。ですから、彼は知らないでしょうけど、チャンスを与えたのは、僕。あの時、「わかりました、鳥海では無理です」と言って、僕がやるにしろ、別の人がやってたら、鳥海永行の『ガッチャマン』はなかった。

もちろん、ものにしたのは彼の力ですよ。彼はプライドも高いしね、それだけに変なものは作れないから、自分自身にプレッシャーをかけて、全力でぶつかりましたよ。

その後、真下(耕一)だとか植田(秀仁)を、作品に当てていったのも僕だし、だから、何がなんでもこれはおいしいから自分がやる、とかいうんじゃないんですよ。僕がやるよりも、彼らのこういうところが面白いから、彼らを立ててみたほうが違うものができる、と。それは強いて言えば、作品にもプラスになることだし。真下も『ゴールドライタン』を、ひとつのきっかけにしてってたし、植田も「(監督は)嫌です嫌です」って言ってんのを、「真下もやってる押井もやってる、みんな(監督を)やりはじめて、キミがそんな消極的でどうするんだ、一生一演出家でいいのか!」と、僕がどやしつけてやらせたんですよ。

――そうなんですか(笑)。

吉田竜夫に活かされたんです

――『(風船少女)テンプルちゃん』のクレジットで、お名前が「原セイタロウ」になってるのって、何か意図されたんですか?

あれはね、僕は『テンプルちゃん』は幼児ものだと思ったから、絵本のつもりでカタカナにしよう、って僕がそうさせたんですよ。漢字でばーんとやるんじゃなくて、やさしくカタカナで「原セイタロウ」って、そのほうが子供も、読める子は読めるし。それ以外に意味ないです。

――この『テンプルちゃん』を最後に、吉田竜夫さんが亡くなられるわけですけど。

だから、47(歳)なんてね、まだこれからという……。丁度『ハッチ』と『ガッチャマン』でタツノコが少し安定して、さあこれからだ、っていう時ですからね。

ただ、僕が吉田竜夫に凄く感謝してるのは、はずみで東京へ出てきて周りを見た時に、石森章太郎、赤塚不二夫、永島慎二、吉田竜夫もそう、まったくレベルが違うわけですよ。自分にはそれだけの才能はないと、自分でわかったわけですよ。でも東京へ出てきた意地で、絶対この世界へ、っていう部分があった。だから、僕は吉田竜夫に活かされたんです。吉田竜夫が敷いてくれたレールの上を、僕は走ってただけなんです。僕の力でレールを敷いて走ったんじゃないんですよ。ただ、走るエネルギーは持ってたってことですよ。

――その意味じゃ、亡くなられた時のショックも?

僕は、笹川さんと喫茶店で吉田さんの話して、わんわん大泣きしたことがありますよ。その時、笹川さんに言われました。「原くん、死んだ人間は帰ってこないんだから、引きずるなよ」と。で、僕は言いました。「いや、僕はずっと引きずっていきたい。そんだけ影響を受けてる。そんな、ぽろっぽろっと忘れるような、僕はそんな生き方したくない」って。

(2002年3月5日、於/東京都国分寺市「竜の子プロダクション」スタジオ)

（きのした・としはる）
栃木県出身。中学時代から芸術学院に通い挿絵の勉強をする。'43年に慶応大学文学部を中退。工業専門学校で設計の勉強をし、青砥の兵器工場で働く。しかし、終戦と同時に工場は廃止、偶然見つけた漫画映画研修生募集の新聞広告を見て新日本動画社へ入社。アニメーションの先覚者である政岡憲三に出会い、様々な教えを受ける。しかし新日本動画社は、経営不振で倒産、動画チーフをしていた福井英一の勧めもあって漫画家への道を志す。'49年頃に『デコ姫竜雲城』で漫画家デビュー、以後10年程漫画を描き続ける。しかし、手塚治虫からアニメの会社を興したので手伝って欲しいと言われ、'63年7月に虫プロへ。『鉄腕アトム』の2番目のオープニング演出・原画などを担当。'64年にはタツノコプロに移籍し、処女作『宇宙エース』の演出と作画監督として活躍。'65年に自ら(有)きのプロを設立、以後はここを母体として多くの作品に参加する。東映教育映像部の『ピーター君の火の玉たいじ』『母ちゃん泣かないで』といった作品で、総監督、キャラクターデザインなどを担当する。

その他の代表作は『戦え!オスパー』『海賊王子』(以上作画)、『キャプテン翼』『アタッカーYOU!』(作監)、『赤い光弾ジリオン』(レイアウト・チェック)など。

木下敏治

誰もいないなら、入っても楽だし（笑）

―木下さんは虫プロからタツノコに移られたわけですが、まずはタツノコ以前、虫プロに籍を置かれていた当時のことからお願いします。

僕、20代の頃は漫画家やってて、それで虫プロに入ってね。『鉄腕アトム』のテレビシリーズやって、それから『新宝島』なんかをやって、その後、CM課っていうところに行ってね。ただ虫プロにいた時はね、いろんな面で冷視されていた面があるんですよね。手塚さんに引っ張られたから、何かっていうと私を立ててくれるわけ。だから、他の人の嫉妬の目ってのがあってね。

―あ、そうなんですか？

それでも、辞めたら、元も子もなくなるって考えたけど、いろいろ重なっちゃったんだよね。それで六郷（晃生）さんに言われて、（タツノコでアニメを作ることになったが）誰もいないってわけ。誰もいないなら、やりがいがあるしねぇ。実を言うと、私としてはねぇ、入るつもりなかったんですよ。初めはタマ・プロと同じような1本請けを考えてたのね。だけど、（社内スタッフとして）入ってもらえるとありがたいんですけどって、吉田

竜夫さんに言われてね。

――六郷さんが間に立って、吉田竜夫さんに会いに行かれたわけですか？　その頃というのは、鷹の台のスタジオというのは、もうできていた頃なんでしょうか？

そうです。鷹の台のスタジオに行って。スタジオはできたばっかりの頃で。

――まわりになにもなかったと。

竹林くらいで（笑）。それで竜夫さんに会って、給料なんかも当時、昭和37、38年としては破格のことを言われて。これまでは人間関係で嫌な思いもあったけど、誰もいないなら、入っても楽だし（笑）。お金の問題よりもね、それで決めちゃったわけ。

――木下さんがタツノコプロに入られた時、『宇宙エース』の1話はどれくらいまで進んでいたんでしょうか？

絵コンテはできてましたよ。

――作画はどうだったんでしょうか？　すでに始まってはいたんですか？

そうですね。ただ、ほとんど私が指導する形で。

――その頃だと、アニメーターで西岡たかしさんとか、奥田竜緒さんとか、窪詔之さんなんかが新人でいらっしゃったわけですよね。

募集したんですね。窪くんね、自衛隊から入ったんだけど、彼がいちばんうまかったんじゃないかな。覚えがよくてね。西岡君は床屋さんから転業したんだよね。それでみんな素人だから、私が政岡憲三さんを呼んで、1週間、講習させたんですね。

――当時、政岡憲三さんって、ピープロにいらっしゃったんですか？

ピープロにいたっていうよりも、嘱託で。それで、あちこちで講演とか授業とか。そうしたアニメの手法の本を書いててね。それから人を集める責任も僕のところに来たんで、外注いないかって探したんです。それで田中さんなんかに……。

――田中英二さん？

彼とは親しかったからね。それで話をしたら、1本持ちたいってことで、それでタマ・プロができたんですね。

――タマ・プロができる前に、アニメプロって会社があって。田中英二さんや青木茂さん、虫プロにいらっしゃった方々が、そのアニメプロという会社で『宇宙エース』の作画を請けていることはわかっているんですけど。

あ、そうですか。よくお調べになって（笑）。それは私が紹介したんですね。

――『宇宙エース』の1話、2話の作業してる頃に、すでにそうした外注の依頼をされていたってことなんですか？

ええ、そうです。こういう人がいますから、と私が手配する形で。（タツノコに）入った以上はね、『宇宙エース』上げなきゃいけないんだもんね。ところがゴタゴタして、なかなか放送が決まらなくてね。

――『宇宙エース』では、第1、2話をミックスしたの内容の、いわばパイロットフィルムが残ってるんですが。これは木下さんが参加されて、どれくらい経った段階で作られたものなんですか？

パイロットはね……私は最後になって、これでいいかとか、見せられただけだという記憶がありますねぇ。8割ぐらいは、原動画ができていたような時期で。

――ということは、パイロットフィルムは木下さんが来られる前に、笹川さんたちが独学で作っていた動画を使っていたんでしょうか？

そうなんでしょうね。笹川さんは才能がある人だから、慣れないながらも、どうにかやってたんじゃないかなぁ。

――スタッフといえば、最初期は平野（保）さんがいて、いろいろな手配をされていたとお聞きしましたが。木下さんが入られた頃だと、平野さんはどういうポジションにつかれていたんですか？

最初の頃だけなんだけど、平野さんは制作部長か何かの肩書きで。

――木下さんも制作部長ですよね？

その後にね。その前だと、技術部長とかって肩書きですね。笹川氏が演出部長だったかな。ちょっと平野氏のことに戻るけど、立場でいちばんの功労者っていうか、タツノコが『宇宙エース』をやる、アニメーションやるきっかけを作ったのは、僕は平野氏だろうと思ってるんですよね。早くに辞めたし、今だと彼の名前を覚えてる人も少ないだろうけどね。

（2002年5月21日、於／東京都練馬区「きのプロダクション」）

坂本雄作

（さかもと・ゆうさく）

1932年2月22日、愛媛県松山市出身。中学生の頃から漫画映画に憧れ、本の端にパラパラ漫画を描いて遊んだり、8mmフィルムのコマを見ては動きの研究をしていた。松山東高等学校を卒業し、東京芸術大学図案科(現在のデザイン科)に入り、東宝の美術のバイトをする傍ら、アニメーターになる夢を持ち続けていた。'56年8月、東映が日動映画を買収し東映動画を発足。'57年、卒業と同時に同社に入社する。東映長編映画第1作の『白蛇伝』で森康二の原画を担当するセカンド(第2原画)の1人になる。しかし、次第にリアルになる作画に疑問を感じ、東映動画を退社。当時、師でもある森康二が集英社の「こばと」で『いたずらぴいぽ』を連載中で、その原稿を手伝いながら、自らも絵本画家としての仕事が着実に増えていく。しかし、アニメーターへの夢は断ちがたく、手塚治虫が自らアニメプロダクションを設立したと知り、'61年に虫プロへ。国産初の30分TVシリーズとなった『鉄腕アトム』で、初期の演出と作画チーフとして活躍。『新宝島』の原画、『ジャングル大帝　進めレオ!』の演出、などを手掛けた後、虫プロを退社。'67年にジャックを設立。以後、『おらぁグズラだど』『ドカチン』『ハクション大魔王』の演出、作画を受注。他に『20世紀アワー　海底都市ができるまで（31年後の日本）』『千夜一夜物語』の原画などがある。

'70年に地元の松山へ帰り、松山デザイン専門学校で講師をする傍ら、武蔵野美術大学非常勤講師を兼任する。それと同時に、フリーのアニメーターとして白組の制作する『小梅ちゃん』などのCMアニメや、『シュンマオ物語　タオタオ』（作画監督、絵コンテ）などに参加。他に『スプーンおばさん』（文芸担当）『ガラスの仮面』（角田利隆と共同監督）『小公女セーラ』（絵コンテ）など。

その後、'89年にウォルトディズニー・アニメーション・ジャパンへ参加。'97年から5年間、アミューズメントメディア総合学院のアニメーション課で基礎デッサンを教えた。

虫プロに追いつけ追い越せ

――当時、坂本さんたち、虫プロの中にいらした人たちからすると、タツノコができた頃の印象というのはどうだったんでしょう？

虫プロのほうではあまり意識してなかったと思います。ですけど、タツノコさんは、虫プロに追いつけ追い越せみたいなスローガン掲げて、盛んに頑張ってました。吉田竜夫さんとはね、鳥海（尽三）さんを通して知り合って、親しくつき合わせていただきましてね。国分寺の「青い麦」なんてキャバレーへご案内いただいたり。あの人は確か（昭和）7年の3月が生まれで、私が同じ年の2月。歳も近くて。私が中野にいた頃、彼と専務だった健二さん、それから笹川さん、皆さんで遊びに来てくださったり。割合そういう個人的な交流があって。それで私も虫プロ辞めた後、ジャックって会社やってまして、『グズラ』『ドカチン』『ハクション大魔王』とおつき合いさせていただいて。今、うちに、いい腕のアニメーターがいまして。今、ディズニーにいる……。

――山本繁さんですね。

それで質のいいものを作れるだろうということ

で、オープニングやエンディングのアニメーション、その3作はやらしていただいたんじゃないでしょうか。

――坂本さんが作画されたのもあるんですか？

はい、そのへん、手伝ってます。中心は山本繁です。

――ジャック設立の経緯をお願いしたいのですが。

私が虫プロ辞めて、自宅で動画机を何台か並べて、そこにそれまでの仲間が来るようになって……というのが、そもそもの始まりですね。その後、保谷に安い家賃の一軒家借りました。西武線沿線ていうのはアニメ関係の会社が多いんで。

――虫プロや東映とも行き来が楽ですもんね。ジャックの発足時というのは、山本さん以外だとどなたが？

野部駿夫と今「ぴえろ」の社長をやっている布川ゆうじ。このふたりはこの頃結婚して私が仲人で、1週間違いで同じ教会で挙式しました。それから、本郷に古くからあったCMのアニメスタジオで、紛らわしいんですけど、日本アニメーション（映画社）ていうのがあって、そこでチーフになった戸村（克己）、そして神宮（慧）くんも頑張っていました。

――その後、新宿の鬼王神社にあるビルに移られますよね。そこではジャックの他に、多くのアニメスタジオが集まっていたそうですが。

2階、3階を借りまして、その頃だと背景や仕上げのグループもいました。2階には遠藤克己さんのアニマスというスタジオ。3階には木下蓮三さんのロータス、それから野島（進）さんの主宰するアニメートですか。

――そうしたアニメスタジオの寄り合いみたいな形は、坂本さんが呼びかけて集めたんですか？

そうです。そういう下請けプロは仕事が忙しい時は忙しくて、なくなるとパタッと途切れる時があるんです。みんな、いろんなとこの仕事をとってきてやってますから、お互いに忙しい時は回して、暇な時は仕事をもらってみたいな形で。

――ジャックっていうのはなんの略なんですか？英語で書くとJACCになるんですよね？

ジャパン・アニメーション・コミティという意味で。コミティというのは仲間たちという意味で、言葉の響きもいいと思ったんで。

――坂本さんがジャックを作られた時というのは、タツノコから仕事が来る予定があってのことだったんですか？

ある程度、あてにしてたかもしれませんけど……ちょっと記憶がないですね。

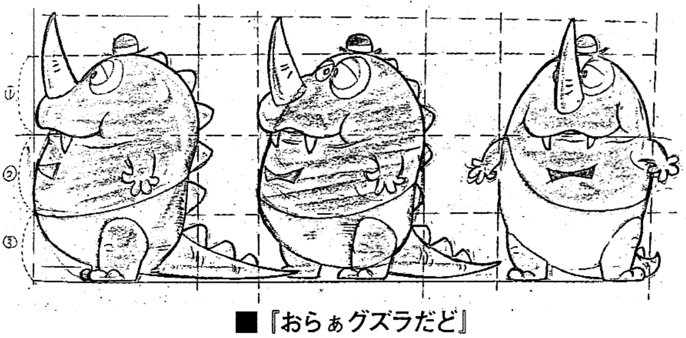
シリーズとしてはタツノコさんだけです

――『グズラ』への関わりは、いつから？

スタート時から関わったと思います。

――『グズラ』はリミテッドアニメを追求してるというか、簡略化した動きを狙われてますよね？あれはタツノコから要求されたものなんでしょうか？

我々としては、『アトム』の線上にあって、そのノウハウを少しは使いたいなぁって。1000枚そこそこじゃなくて。ある程度、動かしていいんじゃないっていう。やっぱり、枚数少なくするってことに関しては、ちょっと締め付けたものがあって。


■『おらぁグズラだど』

――『ドカチン』になると、より枚数使っている印象があるんですが。

あれは時代とともに、枚数使わないとダメだって話になって。あまりに動かないと子供に受けないと思うし。『ドカチン』は派手に動かそうって、打ち合わせあったみたいな気がします。

――当時だと、まだ総作監は立っていないと思う

んですが、ジャックで請けて、タツノコの絵柄に似せるご苦労というのは？

プロのアニメーターにとっては、似せるのは当たり前なんで。特に繁さんが全体を見てくれましたから。だから、そうキャラクターの違いはありません。オープニングやエンディングをやらせてもらうと、それが定番になりますし、そこからほぼ離れることはないですからね。

――『ドカチン』はオープニングで実写を入れてますよね。火山を作って、花火かなんかで噴火させて。手前にセルでアニメ置くカットがあったり。

昔、ポパイかなんかでやってるんですね、結構、立体入ったりして。回転させたりね。『ドカチン』はキャラクターの活発さがあるし、そういう意図があってのことなんでしょうね。

――『ポパイ』もそうですけど、『ドカチン』や『ハクション大魔王』のキャラクターって、末端に行くほど大きくなってますよね。あれは笹川ひろしさんがチーフディレクターとして、デザインのラフを作られたと思うんですけど、あれはどういう経緯で出てきたんでしょう？

笹川さんが自由にギャグキャラを描くと、そうなるってことなんでしょうね。吉田竜夫さんの系統にはないデザインですよね。確かに『ポパイ』的ですけど、そういう話はしなかったと思いますね。笹川さんのオリジナルの絵っていうのは、あんまり見たことがないんですよ。

――『グズラ』『ドカチン』の頃だと、決定稿としてのキャラデザインがどなたなのか、わかってなかったりするんですが、坂本さんのご記憶では？

そこらへん記憶にないですね。

――ご自身で描かれた記憶は？

私はありません。そこまでしたらキャラクターデザイン料もいただかないといけない（笑）。

――ジャックの仕事ということでいうと、テレビシリーズを本格的に請けたのは、タツノコだけなんでしょうか？

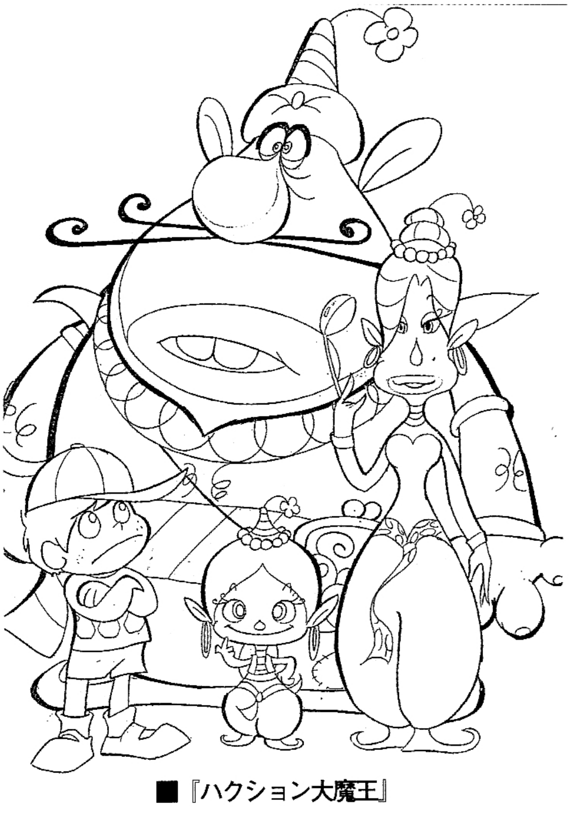
シリーズとしてはタツノコさんだけです。他に手伝い程度のことはありますけどね。

――古巣の東映は全然関係なかったんですか？

関係ないです。さすがにちょっと。虫プロ時代にだいぶ引き抜いたから（笑）。悪党呼ばわり。人買いみたいに言われて（笑）。

（2002年5月13日、於／東京都目黒区）

■『ドカチン』


■『ハクション大魔王』

鳥海永行

（とりうみ・ひさゆき）

1941年10月29日、神奈川県伊勢原市出身。'66年に、中央大学法学部政治学科を卒業。在学中からシナリオ研究所に通い、そこで知り合った友人から紹介され、タツノコプロを訪れる。シナリオを書くつもりで、'66年2月に同社へ入るが、文芸部がなかったために演出部へ。『マッハGoGoGo』で演出家デビュー。ギャグものからメルヘン、シリアスものとジャンルを問わず活躍。'72年の『科学忍者隊ガッチャマン』で初めて総監督を務め、同社を代表する演出家となった。以降『破裏拳ポリマー』『宇宙の騎士テッカマン』『ゴワッパー5ゴーダム』にも総監督として参加し、タツノコ・アクションをまさに確立した。

'78年12月にタツノコプロを退社してフリーとなり『ザ☆ウルトラマン』のチーフディレクターになるも途中降番。布川ゆうじらの誘いもあって'79年5月7日にスタジオぴえろ（現／ぴえろ）の設立に参加。学研制作の『ニルスのふしぎな旅』（チーフディレクター）を皮切りに、多くのシリーズに携わる。世界初のオリジナルビデオアニメ『DALLOS』では原作、脚本、演出を担当し話題となった。以後、ビデオ『エリア88』『BAOH バオー来訪者』や、テレビスペシャル『雲のように風のように』などの監督を経て、スタジオぴえろを退社。'93年12月からは、シリーズ構成と総監督を担当した『しましまとらの しまじろう』がスタート。未就学児童を対象にした久々のテレビ作品で安定した人気をキープ。今年で8年目という、監督としても初の超ロングランシリーズになった。

近年は舞台演出も手がけ、新分野にも意欲的に挑戦中。

アニメ界って、こんなに楽なのか、と

――鳥海さんの入社は『宇宙エース』の終わり頃ですよね？

『宇宙エース』（の作業）が終わって、『マッハ（Go Go Go）』がもう1話（の作業）に入ってましたね。覚えてるのは、スタジオの前広場に社員が集められて、偉い人たちのお話があった時に、笹川（ひろし）さんが「1年間『宇宙エース』をやってきて、一度も（オンエアに）穴を空けなかった、これは素晴らしいことなんだ」と言ってたこと。要するに、週1本アニメをテレビに流していくことは、大変な作業なんだということですよ。

――その時期にもう『マッハ』の制作に入ってたとすると、放送まで1年近くあったと思うんですけど？

いま思えば、実にのんびりしたペースでしたね。だから入って半年は、アニメ界って、こんなに楽な世界なのか、給料が安いの高いの言えないな、と(笑)。

――じゃあ、放送までに『マッハ』のフィルムは、かなり完成していたんですか？

結構、上がってたんじゃないかなぁ。いまでい

う白抜き線録りなんて言葉が、なかった時代ですからね。読広にラッシュを届けて、ここところを直せって言われて、それを直して、また持って行く。そんな悠長な時代でした。アフレコとダビングも、毎週やってたような気がする。だから、ストックはあったんでしょうけど、最終回ぐらいには（オンエアに）追いつかれたってことは覚えてますよ。

――鳥海さんが初めてクレジットされるのって、第34話の「暴走レコードカー」って話なんですけど。

その前に、演出の名前を間違えて出されたんです。僕が初めてやったのは、もうホントに発想そのものがバカバカしい、剛がターザンになる話（第35・36の前後話「密林の怪戦車」）。

――その回が、絵コンテを描く初めての経験だったんですか？

そうです。最初に描いた時は、（吉田）竜夫さんと九里（一平）さん、笹川さん、文芸部長の鳥海尽三さん、４人がチェックしてくれたんですけど、それぞれ言うことがバラバラなんですよ(笑)。

――初めてコンテを描かれる時には、なにを参考にされたんですか？

あの当時、手元にあったのは、九里さんと笹川さんの絵コンテ。あとは、外注さんに出した絵コンテですね。それと、当時、制作部長をやってた六郷（晃生）さんが、東映（動画）の長編の『西遊記』の絵コンテを貸してくれたんですよ。それで、東映の演出家ってこんなに（絵が）うまいのか、ってびっくりしちゃって……それはそうだ、後で聞いたら、作監が清書してんだし(笑)。

――その後『グズラ』『ドカチン』『ハクション大魔王』と、暫くギャグものが続きますよね。

ギャグものは好きじゃなかったんですよ。だから『マッハ』が終わってから……かなぁ？　原さんに言われましたよ、「暫くギャグものが続くから、鳥海くんの出番ないよ」って(笑)。

――その頃から、周囲にも、ギャグ指向の演出家ではないと見られていた？

そうですね。僕自身もギャグものは、できればやりたくなかった(笑)。で、『グズラ』の絵コンテ、嫌々ながら（笑）描いたんですけどね。ただ好きじゃないといっても、古典落語は大好きなんですよ。もちろん、チャップリンにしろキートンにしろ、そういった映画は見ていますから、できないことはねぇだろうと。そん時に『笑いの哲学』（ベルグソン）って本を読んだんですけど、人を笑わすためにはトリックがあるという、実に分析されたことが書いてあって、笑いというのは、やはり科学的なものなんですよ。それで最初の話（の絵コンテ）を描き上げたら、竜夫さんがケラケラ笑って、「お前、ギャグもできんじゃねぇか」って(笑)。

たった半年が、2年に思えたもんなぁ

――『マッハ』の後に予定されていたと思うんですけど、『ブンブン野郎』には関わられてたんですか？

そうそうそう、うん。

――あれは、実現すれば『マッハ』に続くシリーズに？

そうだったんですよ。なんかいちばん覚えてるのは、東京上空をセスナに乗っかって、30分間、雰囲気を味わってきたことですね。（メンバーは）九里さんでしょ、笹川さんに、柴田（勝）さんに俺がいて、池田（仁男）さんが16ミリを回して。

――それは、空撮の主観カットみたいなものも入れていこうと？

そうそう、それで、セスナっていうのは足の下からグッ、と持ち上げられてる感じがするんですよ。自分が飛んでんだって意識が物凄いんです。その感触がなんとも言えなくて、こういったものを描けたらいいなぁ、と思った覚えがありますね。

――演出的には、どなたが中心になるはずだったんですか？

当然、パイロットは九里さんが作ってますよね。で、２話以降って、僕がやってましたから、絵コンテは随分、描いたような気がすんだけどね。

――実現しなかった理由は、ご存じでしょうか？

いちばんの大きな原因は、飛行機はおもちゃにしても売れないという、読広さんの判断でしょうね。

――その後、『決断』には途中から参加されたかたちになるんでしょうか？

僕は当時『みなしごハッチ』に入っていて、『決断』は絶対にやらないって思ってたんですよ。向こうの班が地獄だってことは知ってますからね(笑)。それと、やっぱり世代的に、太平洋戦争というものは描きたくないという想いがありましたから。そしたら突然、呼ばれて地獄の生活を押し付けられたんですよ。

—— それは、人手が足りないという理由で？

そうですね。最初は、総監督が九里さんで、演出が、西牧（秀雄）さんと黒川（文男）さん。もう26本ってわかってるんだから、この3人で大丈夫だという班を組んだんですよ。しかも作画は、外部から宮本（貞雄）さんが来ているわけだから。ところが、原作が児島襄さんでしょ。児島襄さんを呼んだことによって戦史ものになっちゃったもんだから、思った以上に現場が大変になってしまったんですよね。竜夫さんが一生懸命描いたのを、児島さんが「山本五十六は、こうじゃない」とか。尽三さんなんかも、ふてくされて大和のプラモデル、作ってましたよ(笑)。

—— 児島さんの原作でやろうというのが、企画の発端だったわけではないんですか？

ないです。最初は、大将の『将』というタイトルで、太平洋戦争を舞台にした、痛快なものをやろうという感じだったんですよ。九里さんの『大空のちかい』のような。それが、スポンサー、サッポロだったよね？ サッポロの課長とかに、陸軍出身とか海軍出身の人がいて、揉めちゃったわけですよ。それで児島さんを呼んで、話がとんでもない方向に行っちゃったわけです。

—— 鳥海さんは「香港攻略」の回が、最初の演出回ですよね？

そうです。『決断』は、準備というものが、僕の場合はまったくないんです。とにかく呼ばれて行ったらば、陶山（智）さんが描いてたコンテを渡されて、そのコンテを、一晩で直したんです(笑)。もう悲惨ですよ。たった半年が、2年に思えたもんなぁ。あの頃はとにかく、家にいるより、会社にいたほうが多かったんじゃないですかねぇ。

その時は不思議でしょうがないわけ

—— 『決断』や『ガッチャマン』の頃になると、総作監がひとり立つシステムが確立しますよね？

その前に、ある年の忘年会——『みなしごハッチ』の頃かな？ ——に、竜夫さんがレイアウトシステムを採りたいと言ってまして、山本繁さんが候補に上がってましたけどね。

—— それは、実際にレイアウトという言葉を使って？

そうです、レイアウト。で、いまの僕なんか、映像においてレイアウトが、物凄く大事だというのが身にしみてわかってるんですけど、当時はちょっとわかんなくて、なんでいまさらって、不思議だったんですよ(苦笑)。幸せなことに、僕は、須田（正己）さん、二宮（常雄）さん、湖川（滋、現／友謙）とか、絵のうまいアニメーターと、つきあってたから。

—— 実際に『ガッチャマン』で、宮本さんがレイアウトを統一されたりってことは？

■『科学忍者隊ガッチャマン』コンドルのジョー

やってないです。当時は、口はばったいようだけど、レイアウトは演出家がとらなきゃならないし、それを磨き上げてくれるのが、各アニメーターであったし。だから、作監とか動画チェック、背景さんも同じスタッフなのに、どうしてあるところに（原動画を）グロス出しすると、こうなっちゃうんだろうと、その時は不思議でしょうがないわけ。結局ね、ちゃんとレイアウトがとれてないと、画がみんな不安定なんですよ。実際、僕なんかもそれがわかってきたの、ぴえろで『ニルス』をやった時、岡田（敏靖／『ニルスのふしぎな旅』作画監督）さんと付き合ってからですよ（苦笑）。目の前で岡田さんが、僕なんかが見るとなんとも思わない絵を直してるから、「どうしてそんなにこだわって直すのか？」と聞くと、「こうやったほうが見栄えがいいでしょ」って言って、見ると、確かに奥行きがあって空間が広がって見えるんですよね。

私生活を奪われてしまうわけですよ

——で、初めて総監督を務められた『ガッチャマン』ですけど、相模湖の籠もりに参加されたんですか？

そう、『ガッチャマン』の時に、初めて呼ばれたんです。

——籠もりの時期は、放送から遡ると、どれくらいでした？

相模湖は桜が咲いてましたから、（72年の）3月末から4月の頭だったですね。放送が10月でしょ？　当時としてみれば、まぁ普通の余裕ですよね。

——タイトルは決まってたんですか？

まだ決まっていなかった。ただ『科学忍者隊』っていうのは決まっていたんですよ。『ガッチャマン』ってつけたのは、読広さんですから。みんなブーイングしたけども（笑）。

——籠もりに参加されたのは、鳥海さんが、総監督を任されたからなんですよね？

そうですそうです。

——原（征太郎）さんが、鳥海さんを総監督に推されたそうですが。

それは知らないな、うん。原さんが「もし鳥海を監督に」って薦めたとしたのなら、こういう大変なものは他人に任したいという、それしかないでしょ（笑）。『紅三四郎』以降、タツノコのリアルものやったらどうなるかっていうことは、もう、みんな知ってますから。そんなもんにのめり込んだらば、私生活を奪われてしまうわけですよ。

——じゃあ、総監督に決まったいきさつというのは、ご存じない？

そのかなり前に、竜夫さんから「そろそろ総監督をやったらどうか？」と言われたけど、「いくらなんでも若すぎるから」って、断ったのは覚えてますけど。

——それは、各話の演出家さんとの年齢差からの、やりにくさみたいなものがあって？

やっぱり、遠慮はありますからね。

——皆さん、年上ですもんね。

うん。ただ、同年輩というのが、案外やりづらいんですよ。同年輩が失敗してくれたりすると、ホントに腹が立つ。で、次の世代の、押井（守）とか西久保（瑞穂）とか真下（耕一）、あの連中になってくると、不思議なもんで、何をやったって腹は立たないんですよ。（自分が）年上だっちゅう意識が強くて。これは、押井と昔、話したことがあるけども、やっぱり押井も「同じ世代の連中には腹が立つ」って言うわけですよ。そういうもんなんでしょうね。

やっぱり邪道だとは思ってましたよ

——『ガッチャマン』第1話冒頭の、タートルキングのシークエンスっていうのは、実写の怪獣の巨大感みたいなものを、すごい意識されてるように思うんですけど。

そういう気分はなかったですよ、ホント。ただ、どうやったら、鉄獣の不気味さが出るかなっていうのは、カット割りで意識したけども、あとはもうスタッフが絵コンテを見て、「色具合はこのほう

がいい」とか「特効はこうしたほうが重さが出る」とか、やってくれるから。上がった映像に関しては、まぁ自分が見て〝これ以上、リテイクで直すこともないよなぁ〟っていう、演出っていつもそうなんですよ。ただ、あのシーンでちょっと贅沢だったのは、雨が降ってますよね。あの雨を丁寧に作画してもらったんですよ。ロングとアップのやつ、AセルBセルふたつ作って、それを、何枚の繰り返しにしたかな？

――ああ、あの冒頭の暴風雨は、ちょっとテレビを越えてますよね。

最初は、初っぱなの暴風雨と海を、実写的な感じで出せないか、ってのがあって、陶山（智）さんに相談してみたら、日活にはいろんな映画があるし、雨がきれいに撮れてるネガもある。それを借りてこようかと言ってくれて、でも借りると1フィート何十万円かかるとか……（笑）。

――それは、フィルムを借りてきて使うおつもりで？

『決断』の時にやったんですよ、ペンタゴンのニユースフィルムを、そのまま。あの時、ホントに現場が間に合わなくて、東洋現像所（現／イマジカ）にペンタゴンから来てるフィルムがあると情報が入ったんで、それをこっそり（笑）。

――タツノコの作品って、そういうふうに実写映像を使ったりする実験的な方向性があったと思うんですけど、鳥海さんは、どう感じられてました？

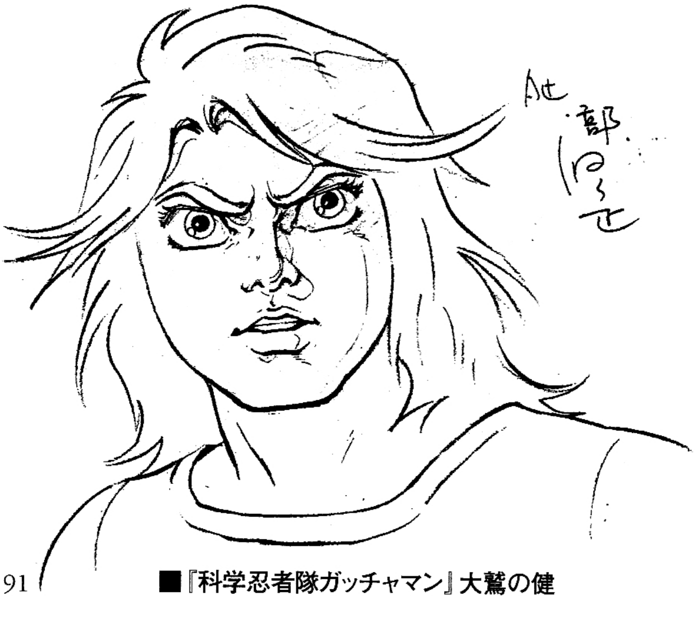
やっぱり邪道だとは思ってましたよ。あのね、宮本貞雄さんが来た時に「タツノコは陸の孤島だ」と、一言で表現したんですよ。アニメーションの動きの部分において、タツノコは物凄い遅れてたんですよ。虫プロにしろ東映（動画）にしろ、実に巧みな動きを、スムーズに画面に出してるのにね。

あの当時、吉田竜夫さんのリアルな絵を、タツノコに集まったアニメーターたちが動かしきれなかったっていう面も、あるんですよ。そうすると竜夫さんも、自分の絵はなかなかきれいに動かないけれども、映像というかたちでまとまってくれればっていうのがあって、撮影とBG、特殊効果もそうだし、実写を合成してみたりするのも、そうだよね。そうやって、他社が真似できない映像作りというものに専念していったってことだと思うんですけどね。

やってしまったからこうなったって感じで

――『ガッチャマン』の場合、キャスティングにはタッチされたんですか？

やってましたよ。竜夫さんが『マッハ』の時に、森巧至、当時、田中雪弥ですけど、彼の声を非常に気に入っちゃって、自分のキャラクターのイメージは、彼しかいないというものを持っていたんですよ。それに対して、斯波（重治／『ガッチャマン』録音ディレクター）さんはちょっと不満があったみたいでしたけど。難航したのは、コンドルのジョーですね。知名度があって、しかも（ギャラが）高くない人っていうのが条件だったんです。ささきいさおを推薦したのは、水本（完）さんみたいですね。ただ僕のイメージは、どうしても野沢那智だったんで、いまだに斯波さんに会うと「ささきいさおは違うよなぁ」って言うんだけど（笑）。



■『科学忍者隊ガッチャマン』大鷲の健

— アイキャッチの声を先に録って、それが決め手になったという逸話もありますけど。

いや、あれは、まだ『ガッチャマン』というタイトルはねぇだろう、ってブーイングがタツノコのなかにはあって、「これを英語的に『GATCHAMAN』!」って言ゃあかっこいいんだよ」「じゃあ、ささきいさおさんにやってもらえ」ってことになったわけ。やっぱり、和製プレスリーですから。他の皆さんも、やったのかな？　別にその後、アイキャッチに使おうなんて思ってなかったんだけど。

— キャスティングに関して、他に注文されたことは？

僕が言ったのは、ベルク・カッツェ、これは、丸山明宏（現／美輪明宏）のイメージで、当時『紫の履歴書』（'68年9月初版発行／大光社）とか、そんな本を書いてたんで、紫色にしたんだけど（笑）。斯波さんに「中性のイメージなんだよ」って言ったら「物凄くわかりやすい意見だ」って言われて、「え、ひょっとすると？」って期待したら、あの人（寺島幹夫）だった（笑）。

— 寺島さんが、ああいう発声ができるってことは、斯波さんがご存じだったんですか？

ということですね。当人は、とにかく照れくさくて照れくさくてしょうがなかったと言ってました。だから、初期のカッツェは、まだ男っぽいんですよね。だんだんだんだん、こう、ノッてきちゃったんでしょうね。

— 最初は中性的な人物として考えられてただけで、両性具有という設定は考えもせずに？

うん、「こういうのかまわないかな？」って陶山さんに相談したらば、「そりゃいいんじゃないのか」っていうことで。

— じゃあ、ギャラクターの女隊長とベルク・カッツェが同一人物ということは、伏線として用意されていたわけではなかったんですか？

いや、なんだっけ、「南部博士暗殺計画」？　あの話から意識したんですよ。で、なんかないかと考えて、まず女でもってスゲぇのを出そう、と。当時の台本にはたぶん、謎の女に括弧して、実はベルク・カッツェって書いてあったと思うんですけど、斯波さんに「役者が意識してしまうから、これは書かないほうがいい」と言われて。

— ジョーの両親がギャラクターという設定も、鳥海さんが？

そうですね、あの頃になると、もう相談もせずに、やってしまったからこうなったって感じで（笑）。レッドインパルスも、「殺しちゃった」って言ったら、みんな大騒ぎして、社長が、なに〜って感じで編集室に来て、「見せろ」って（笑）。

— 竜夫さんは、レッドインパルスって、クライマックスまで生きてると考えられてた？

でしょうね、覆面レーサーと同じような感じで。それは多分に、竜夫さんの趣味だったと思うんですよ。でも、叱られはしなかったんですよ。「実は生きていたって話、できるんじゃないの？」って言われたから「考えときます」って（笑）。

途端に九里さんが「任せる」と（笑）

— 吉田竜夫さんのご病気のことは、いつ頃からご存じだったんですか？

僕が、フランスに合作の件で出掛けて、帰ってきたら、風邪をひいて休んでるって話を聞いたんで、じゃあ、パリの報告は会社に出てくるまで待とうという感じで。それから入院して、皆さんが順番に見舞いに行ってるんですよ。それで、じゃあ行かなきゃ悪いかなってことで、笹川さんに言ったらば、笹川さんに、実はこういう病気で、って教えられて、あのカッコマンの社長が、ちょっとひどい格好になってるから、行かないほうが社長のためだと思うと言われてね。ということで、行かなかったんです。ですから、これはひょっとすると退院できない病気なんだな、っていうのはわかったけど、会社からの発表はなかったですよ。

— じゃあ、フランスから帰られて、会えないまま？

まんま、です。

— 遡ると、最後にお会いになったのは？

（フランスへの）出発の時に、本社前に車を停めて挨拶に行こうと思ったんだけど、上から降りてきて、まぁ頼む、という感じで、それが最後だったんですよ。

―合作のお話っていうのは、タツノコが事業を拡大していくなかで、海外とも制作をするという感じだったんでしょうか？

どういうきっかけだったんですかねぇ？　最初は九里さんがやってましたから、作画は亡くなった林政行で。で、フィルムをパリへ送ったら、ほとんどリテイクというか、いろいろと注文が書いてあって、要するに、日本人とヨーロッパ人の感覚の違いみたいなことですよね。途端に九里さんが「任せる」と(笑)。それで、もう一度、作り直して送ったらばOKが出て。

―それも、作画は林政行さんで？

いえ、林さんも一緒に辞めちゃったんで、日アニから野部駿夫くんが来てくれてね。

―その作業をやられる時期って、『(ゴワッパー5)ゴーダム』の後ですよね？

『ゴーダム』終わって、ほとんどすぐなんでしょうけどね。『ゴーダム』の終わった直後に、僕はもうタツノコを辞めるつもりでいたわけですから。それが、結局は竜夫さんに説得されてしまって、鷹の台に行くのは嫌だとわがままを言ったら、西国分寺のマンションを、仕事場に借りてくれて(笑)。

その間に竜夫さんが亡くなって、『ガッチャマン』の劇場版の話が来ちゃって、ちょっと言いづらくなったんだけども、全部、終わったとこでもって辞表を出したという。

―『ガッチャマン』の劇場版って、最初は断られるつもりだったんですか？

まるまる新作を作るのであれば、それはやりたいと思うけど、再編集なんてとんでもない、っていうのがあったんですよ。

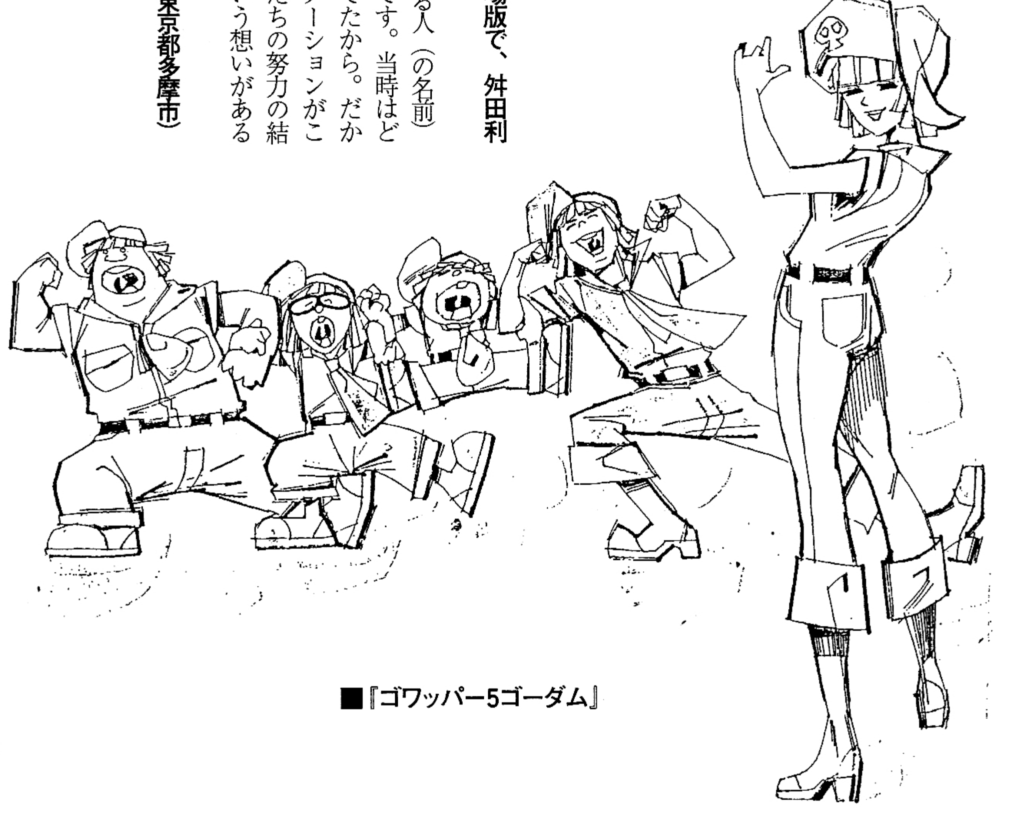
―監修で岡本喜八さんがクレジットされてるのは、どうしてなんですか？

僕のほうで（お願いした）。映画の興行っていうのは、小屋（劇場）がいちばん、力を持ってるわけですよ。その興行主たちが、吉田竜夫なんて知らねぇよ、と。だから、映画の世界で知ってる監督を出せって。

―『（宇宙戦艦）ヤマト』の劇場版で、舛田利雄が監督してるのと同じ理屈？

ですね。要するに興行主が知ってる人（の名前）を出さざるを得なかったってことです。当時はどうしても、アニメって低く見られてたから。だから、あれから20年、30年？　アニメーションがここまできたのは、宮崎（駿）さんたちの努力の結果なんだけども、よかったな、という想いがあるよね。

（2002年3月14日、於／東京都多摩市）



■『ゴワッパー5ゴーダム』

布川ゆうじ

2、3回足抜けしてますよ、僕

——布川さんは最初からアニメの世界を目指されてたんですか？

いや、そんなことない(笑)。とにかく絵で飯食いたいからって、それだけのこと。絵っていうか、元々グラフィックデザインやるために東京に出てきて、そういう学校行って、青山のいい会社にも入ったんですけどね。だけど、なんかひとつ成就すると、僕飽きっぽくて、もうデザイン飽きちゃって(笑)。たまたま新聞広告を見たんですよ。

——アニメ会社の募集ですか？

当時、自分で言うのもなんですけど、絵には少し自信がありましたから、なにか絵で仕事できるものを探してたこともある。まぁ、我々の時代は、アニメーションという言葉も目新しかったですからね。アニメの場合、入ってみて、自分の適性に合ったのかなぁってところもあるんですけど、やっぱり志が違うっていうところもあるから、2〜3回足抜けしてますよ、僕(笑)。

——いちばん最初の朋映という会社には、アニメーターとして入られたんですか？

そうです。その頃やったのが『宇宙少年ソラン』

(ぬのかわ・ゆうじ)
1947年2月11日、山形県出身。朋映、ネズプロでアニメーターを経験後、円谷プロでイベント業務などに携わり、その後、坂本雄作率いるジャックに所属。『ゲバゲバ90分』や、虫プロの合作に携わる。'70年に和光プロからの受注で『カバトット』の原画を担当。監督を務めていた笹川ひろしの仕事ぶりに憧れ、'71年11月にタツノコプロへ入社。続いて『かいけつタマゴン』にも参加。監督の笹川とともにアイディア出しをし、演出と作画で活躍。'73年の『新造人間キャシャーン』で、初めて30分ものの演出を手がけ、『タイムボカン』『ヤッターマン』などの作品に携わる。'77年4月に退社。同年10月に『激走ルーベンカイザー』で初チーフ・ディレクターを務める。'78年に上梨満雄とスタジオぴえろを結成し、ベータフィルムと和光プロからの受注で『新みつばちマーヤの冒険』を担当。その仕事ぶりが認められ、続く学研とベータフィルムの合作『ニルスのふしぎな旅』の制作を任されることになり、'79年5月7日にスタジオぴえろ(現／ぴえろ)を会社組織化。以後、『うる星やつら』(プロデューサー)『きまぐれ オレンジ★ロード』『みどりのマキバオー』『CLAMP学園探偵団』(以上、企画)『魔法の天使クリィーミーマミ』『あんみつ姫』『おそ松くん』(以上、製作)など、多くの作品に携わる。
現在は、ぴえろの代表取締役。

なんですよ。『ソラン』の中盤くらいからですからね。『ソラン』の時は動画でしたけど、その後の『ロボタン』ではもう原画。今で考えれば、1年足らずの経験で原画なんてあり得ないんだけども、なんでもやりましたよね。色まで塗ったから(笑)。あとは『黄金バット』もやったかな。僕がやった最初のカラー作品ですよ。それから川崎のぼるの『スカイヤーズ5』もやったっけ。

――その朋映時代に『ジョニーサイファー』の動画を手伝った縁で、ネズプロに入ることになったわけですか？

そうそう。ネズプロも立ち上がって間もなくてね。体制が整ってなかった時期だから、作画部がみんな新人で、その人たちを教育してやってくれって言われたのね。俺だって1年ちょっとくらいしかアニメやってないのに、なんか強引に口説かれてね。

――ネズプロの後、円谷プロで仕事をされたとか？

円谷は社員にはなってないんですよ。円谷英二さんの次男の円谷皐さんが当時、円谷エンタープライズって会社を興したんですよ。そこにフリーになってから出入りして、万博の太陽の塔だっけ？ あの中にいろいろな生命の……。

――生命の樹ですね。エスカレーターみたいので昇って。

そうそう。いろんな恐竜を展示したんですよ。その恐竜のデザインを円谷エンタープライズが仕切ることになって、絵を描く人を探してるってことで、なんか俺が抜擢されることになった。恐竜に詳しくないんだけどね、上野の博物館行って、ナントカザウルスとか随分スケッチして。で、何点か展示物をデザインしたんですよ。万博の仕事だけでなく、コマーシャルの絵コンテの仕事を受けたり。あの当時は結構楽しかったですよ。

――その後、ジャックに入られるわけですが、いきなり原画として入られたんですか？

あの当時は……まぁ、動画、原画みたいな感じでしたよね。最後はずっと原画でしたけど。『ハクション大魔王』の頃とかね。

――じゃあ、そこで初めてタツノコとの繋がりが生まれたわけですね。

坂本（雄作）さんからプロダクションを閉めたいという話が出て、結局解散した後に和光プロに行ったわけですよ。立場はフリーのままだったけど。ちょうど、タツノコが和光プロに『カバトット』を作らせていた時期で、その次の『タマゴン』は100％タツノコ制作で、いわゆる第5スタジオで作ったんですけど、そこで陣頭指揮をするために、僕が呼ばれたってわけです。

いつも笹川さんとギャグ会議

――『カバトット』はチーフディレクターはどなただったんですか？

笹川（ひろし）さん。

――『カバトット』での布川さんの立場は？

『カバトット』では作画、演出……。

――作画は布川さんが仕切ってて、笹川さんは第5スタジオに通ってきたんですか？

いやいや。コンテチェックだけです。『タマゴン』の時は、キャラクターデザイン、ほとんどひとりでやりましたし。

――総作監みたいな感じで？

あんなの全部作監ひとりでやってたら……(笑)。レベルの高い人をこちらで見極めて、この人だったら一本任せてもいいなという形でやってたんです。

――タツノコ本社から離れた第5スタジオで活躍して、それでタツノコに入られたという経緯だと、吉田竜夫さんとは当初、ほとんど面識はなかったんでしょうか？

入った時はそうですね。だけど、笹川さんから、僕の噂は聞いてたらしくて。

――どんな噂ですか？

木下（蓮三）さん演出・原画の『死神の招待状』（タツノコプロ製作の交通安全指導用映画）の仕事っぷりみたいなのが、笹川さんからいったらしくて。こんど、いい人間が入ったみたいなことが(笑)。

――『死神の招待状』では布川さんは、どういうお仕事されたんですか？ 原画描かれたんですか？

もう忘れちゃったよ。いや、原画じゃないな……なにやったのかな。絵コンテの手伝いしたのか。ちょこっとしか関わってないですよ。そんなに大

きくは関わってないはず。

―― **でも、それが吉田竜夫さんに伝わったんですよね？**

なんか、コマーシャルのコンテも描いたのかなぁ……。竜夫さんというのは、経営者というよりクリエイターだから、絵を見る力でいろいろ判断されるってことでは、いちど目につくと記憶に残るというタイプの人だから。

―― **『タマゴン』で初めてタツノコがユニバーサルに仕事を出すようになって、韓国に半年ほど行かれていたそうですが、その間のご苦労というのは？**

半年ですから、僕はもうある程度、家庭問題にもなりました(笑)。僕自身、相当ヘビーな仕事だったから、しばらく行きたくない。また行かせるならやめると言ったんですよ(笑)。僕も演出として入ってきたんであって、そんなふうに便利屋で使われるのはたまらないって。たとえタツノコといえども、やめちまおうという覚悟もあったわけですよ。それからしばらくは、タツノコで演出家としてやってました。

―― **じゃあ、戻ってきた時は『タマゴン』を外れたんですか？**

この時点で終了したと思います。演出部に配属でね、当時は演出部も笹川さんがいて、原征太郎さんがいて、高橋資祐さんがいて。僕がいて、案納(正美)くんがいて、鳥さん(鳥海永行)がいたのかな。で、後ろ側に天野(嘉孝／当時)ちゃんがいて。

―― **天野さんも同じ部屋に？**

そう。まだあの時はキャラクターデザイン室とかなくてね。キャラクターは演出とジョイントするじゃないですか。それで当時、天野ちゃんがいたんですよ、後ろにね。あと亡くなった林政行さんとか、それから、他のキャラクターデザイナーや作監の人たちですね。

―― **布川さんが30分もののコンテ、演出を初めて受けられたのは、タツノコに来てからになるんですか？**

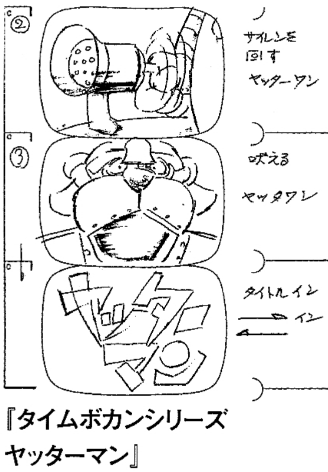
そうですね。まだ第5スタジオにいた時だと思うけど、『いなかっぺ大将』で初めてコンテ描いて笹川さんに見せたら、これはコンテではない、漫画の原稿だと言われたんですよ(笑)。今でも覚えてますよ。

―― **布川さんが『いなかっぺ』最初にやられたのって、二年目に入って間もない頃だと思うんですけど、作品は『喧嘩はわしが預かるだス』？**

それ、わかんないって(笑)。

―― **布川さんの演出の師匠は笹川さんになるんですか？**

そうですね。タツノコに入ってからはね、もう連係プレイでしたからね。僕、ひとの絵コンテもずいぶん手伝いましたよ。僕、描くのは速いんですよ。今の人たちって、コンテ描くのに2週間とか3週間とかかかるっていうんだけど、『ヤッターマン』の時、こういうコンテって、だいたい3日か4日で描いてましたから。当時、タツノコの人たちって手が速くてね、手が遅い人たちって、それを見てみんな自信なくしてやめていったり(笑)。



■『タイムボカンシリーズ ヤッターマン』オープニング絵コンテ

―― **タツノコ時代、布川さんにとって、いちばん演出の勉強になった作品はどれなんですか？**

そうだな……自分で、あっ、これは乗ってたっていうのは『ヤッターマン』じゃないですかね。タツノコではいちばん晩年の作品ですけど。

―― **『ヤッターマン』のオープニングのコンテも切られてますけど、オープニングのコンテは他の作品でもやられてるんですか？**

『ヤッターマン』のオープニングの前に、エンディングはずいぶんやったんだよな。チーフディレクターって、みんなオープニングやるじゃないですか。スケジュール大変だから、布川ちゃん、エンディングやって、みたいな感じが。忘れちゃったけどね、『キャシャーン』とか『タイムボカン』のエンディングもやってるんじゃないかな……。

―― **『タイムボカン』のエンディングの発想というのは、笹川さんの指示なんですか？**

発想……ガイコツというのは笹川さんからだと思うんだけど。これも記憶が定かじゃない。オダテブタあるじゃない、あれなんか俺が言った気がするんだよ。ガイコツって気持ち悪いじゃないで

すか、ギャグにしても笑いとれないから、ブタのほうがいいんじゃないの？　って。で、オダテブタができた気がするんだけど――あのへんはいつも笹川さんとギャグ会議とかやってたんですよ。そういう中で作ってたから、もう、誰がなにを決めたとかってわかんないんじゃない。

――元々グラフィックデザイナー出身ということで、タイトルロゴのデザインをされたりってこともあったんですか？

どうだったかな――『キャシャーン』なんかオープニングのタイトル、僕、全部描いてたんだよね。「演出」だとか。

――ああ、そうなんですか！　あのサブタイトル画面に出る字ですか。確かにあれ、手書きですね。

だから、便利屋ですよ、便利屋(笑)。

――あれって、セルに絵の具で直に描いてたんですか？

そそ。当時はホントね、手作りだもんねー。ホント、そういう面では僕は『プロジェクトX』だと思いますよ。日本のアニメーションの草創期にみんなが見よう見まねでやってきた部分はね。

――タツノコの場合は撮影がすぐそばにあったから、演出で処理される場合、撮影込みでプラン立てやすかったと思うんですけど。

みなさんプライド持って仕事してましたよ。撮影のほうが威張っててね(笑)。ちょっとでも材料が揃ってないと、すぐ返ってくるんですよ。これじゃ撮れねーとか。でも、それは逆にいうとね、そういういろんな一途な連中、仕事を頼めば、それなりの仕事を返してくるスペシャリストですから。僕も自分でぴえろってプロダクション作って、理想のプロダクションというと、全盛期のタツノコですよね。今、ああいうプロダクション作ろうったってなかなか難しいし。すべてオリジナルで作品を作っていくという……全社一丸となってやるなんてさ、今のテレビ局でそういうものを企画で受け取るところってないじゃないですか。そういう面では、いちばん全盛期の頃のタツノコに身を置いたというのは、僕にとってはいちばんいい経験したってところです……感謝しかできないですけどね(笑)。

自分の人生にはよかった気もするんですよ

――布川さんはタツノコを出られた後、『ルーペンカイザー』で初めてチーフディレクターになったわけですが、どうせならタツノコでチーフディレクターになりたいという夢はあったんですか？

うーん……僕の才能というのは、自分の才能で素晴らしいと思うのはね、己の才能を見切ること(笑)。僕も長年、いろんな現場やってきて、とんでもない人いっぱい見てきたわけですよ。虫プロ時代に安彦（良和）くんの絵を見た時、この人にはどう逆立ちしても勝てないとわかるわけね。タツノコでは吉田竜夫さんと天野くんの絵を見た時も。天野くんなんか、どんな緻密な絵も1日かけないんだよ。演出でもそうなのね。笹川さんや鳥さん（鳥海永行）、いろんな演出の人たちを見ると、勝てない。クリエイターには努力型と天才型といましてね。天野くんみたいなのは天才型ですからね。だいたいはみんな、努力型じゃないですか。こつこつこつこつ階段を積み上げて、ひとつの成功に導く。ただ、それには絶対に才能も必要なんですね。天性の才能がそれに加わらないと、どんなに努力しても無駄なの(笑)。そういう面で、自分なんかはこれがダメなら、別のモノに……ま、飽きっぽいっていうのも、要因なのかもしれないけど。自分の半生をふまえると、そういう形で一途にやってこなかったっていうのは、自分の人生にはよかった気もするんですよ。

――経営者を選んだというのも、その選択肢の結果として……？

まず、基本的にこの世界は嫌いじゃないな、と。嫌いじゃなければ、好きになるのはどんなことが考えられるだろう、と。それは現場に対する器を整えるだとか、いろんな企画を考えるだとか、仕事をコーディネートするとか、人を育てるとか。ま、最終的には、お金もいっぱい成功したいってことまで考えるわけだし(笑)。そういう意味では経験も経てるから、多少、そういった（スタッフの）心情もわかるんじゃないかなぁと。

（2002年5月13日、於／東京都三鷹市スタジオ「ぴえろ」）

タツノコプロ
JACKET GRAFFITI

▲『カバトット』　品番号／SCS-125　形式／17㎝ＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年２月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／400円　収録内容／正主題歌と挿入歌「カバトット」

▲『決断』　品番号／SCS-127　形式／17㎝ＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年５月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／400円　収録内容／正・副主題歌

▲『決断』　品番号／C-46　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「真珠湾奇襲」

▲『決断』　品番号／C-47　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「ミッドウェイ海戦（すてられた五分間）」

▲『決断』　品番号／C-48　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「ミッドウェイ海戦（空母飛竜の最期）」

▲『決断』　品番号／C-49　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「マレー突進作戦」

▲『決断』　品番号／C-50　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「シンガポール攻略」

▲『決断』　品番号／C-51　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「バターン・コレヒドール攻略」

▲『決断』　品番号／C-52　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「潜水艦伊168号」

▲『決断』　品番号／C-53　形式／17㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「キスカ島撤退」

第四章 キャラクター創造という業(ぎょう)

■『スカイファイターZ』より

天野喜孝

（あまの・よしたか）

1952年3月26日、静岡県静岡市出身。'67年、タツノコプロへ入社。アニメーターとして『紅三四郎』『昆虫物語みなしごハッチ』に参加。『樫の木モック』から、吉田竜夫や九里一平と共にサブキャラクターデザインを担当する。これ以降、社長室の横にキャラクター室と呼ばれる専属のデザイン室が誕生。同室で、新企画のプランニング、プレゼンテーション用のイラスト、メイン及びゲストキャラクターの設定を担当する。特に'75年にスタートした『タイムボカン』では、独自の個性を活かした三悪が人気を集め、タツノコプロを代表するキャラクターデザイナーとなる。

'81年に早川書房の「SFマガジン」で『トワイライトワールズ』を発表し、イラストへの興味を急速に深めていく。'82年に『地球物語』のキャラクター設定を終えて、タツノコプロを退社。以後『吸血鬼ハンター"D"』『グイン・サーガ』『キマイラ・吼』シリーズなど、イラストレーターとして活躍する。また、演劇『なよたけ』『海神別荘』などの舞台芸術、ゲーム『ファイナルファンタジー』シリーズのビジュアルコンセプトデザイナーとしても有名。

現在、天野喜孝事務所を主宰。

とにかく、絵を描かせてもらえなかった

—— まず、タツノコプロに入られたきっかけを教えていただきたいんですが。

友達の家の近くにタツノコプロがあったんで、見学に行ったんですよ。『マッハGoGoGo』を作ってた頃に。そこにタツノコプロが……吉田竜夫さん、九里一平さんが作られた会社があったから、たまたま僕が行っただけで、そこになければ、たぶん、こういう業界にはいなかった。だから、僕にとってはおふたりは、いちばん大事な人なんですよ。

—— 入社されて、最初に配属された部署というのは？

最初はとにかく、絵を描かせてもらえなかったです。仕上げとか、いろいろやらされましたね。

それで、あんまり覚えてないんですけど、試験があったんですよ。試験というより……3ヵ月間だったかな？ 笹川（ひろし）部長さんの下で、基本を全部マスターしなければダメといわれて、絵を描いたりしてたんです。それで、アニメーターに行けるチャンスを与えられて。

—— その最初の頃というのは、吉田竜夫さんと直

――接の接触というのは？
いや、ないです。もう全然上の人ですからね。とにかく、大人の人だなって感じで。僕が中学を卒業したばかりの頃で、年齢差も21、22歳離れていて、うちの親くらいですからね。
――『マッハGoGoGo』の後半には（作画で）参加されてますよね？
あ、そうですね。
――鳥海尽三さんが、『紅三四郎』の「片目の鬼将軍」に出てくる戦車を、天野さんがデザインをされた気がするっておっしゃってたんですけど？
戦車？ 僕じゃないよ、覚えてないですね。

■『樫の木モック』

――いちばん最初に作られたキャラクターというのは？
手伝ったのは……『樫の木モック』の、サブキャラクターだかなんだかわからないけど、いろいろやってたような気が……。
――『モック』って、吉田竜夫さんと天野さんが、初めて連名でクレジットされた作品なんですけど、基本として、竜夫さんがメインのキャラクターを描かれて、それを補佐されていたわけですか？
『モック』は九里（一平）さんもやってたんですよ。僕は、本当に手伝いなんで、ほとんど覚えてないんです(苦笑)。誰かに言われて、ああそうだったのか、というくらいで。というのは、原画とか動画とか、作監もやってて、その中のひとつにキャラクター（デザインの仕事）があったんで、そのへんがグチャグチャなんですよ。いつから（キャラクター室に）シフトしたのか。

仕事してる振りをしたりとか

――いま言われたキャラクターというのは、ゲストのデザインのことなんでしょうか？
そうじゃなくて、新企画の。
――ああ、じゃあ同時期に、そうしたかたちでキャラクターをお描きになられる方は、吉田竜夫さん、九里さんを除くと、天野さん以外にいたんですか？
……どうだろう？ 笹川さんとか原（征太郎）さん以外だと、わかんないです。たぶん、いなかったんじゃないですかね？
――下元明子さんは？
もっと後。彼女は、竜夫さんが連れてきたんです。出版（部）のほうから来たんですよ。今でも友達なんですけどね。
――当時の、キャラクター（デザイン）室のことをお話しいただけますか？
最初はなかったんですよ、そういう部屋は。僕は普通の部屋、演出家とか原動画（家）がいるところに机があったんですけど、たまたま新作の時――新作のたびに、そこに机なんかが置かれて、いつの間にか、そっち（の仕事）がメインになっちゃったんですね。それでキャラクター室というのができたんです。で、他の人は入っちゃいけないって。でも、隣が社長室だったんで、いきなり（ドアが）開くんですよ。鍵は向こうにあるんで、こっちからだとどうしようもないんですよね。監禁状態、軟禁状態で、いつもびくびく仕事をしてました。仕事してる振りをしたりとか(笑)。
――企画が決まる前のキャラクターデザイナーの仕事というと？
まず最初の段階で、相模湖に1週間くらい籠もって、みんなでゼロから〝よーいドン〟で描くんですよ。それぞれ、自分が使う画材を持ってきて、もうひたすら並んで描く。（企画書を）見ながら（キャラが）多いな、とか、お互いで見比べたりして、九里さんとか、竜夫さんとかうまいなぁって。

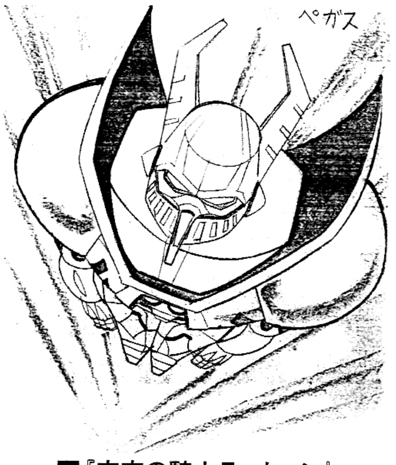
いま思うと、それすごい勉強になったと思います。ただ、僕も若かったですから、帰りたくてしょうがない。どうやって逃げようかって(笑)。抜け出してよく遊びに行ったりね。

そこで素材をまず作って、今度はシナリオもだいたい上がってきた段階で、じゃあ、どういう画面を描こうかってことで、ひとつの絵として各シーンを描くんですよ。九里さん、竜夫さんが描いたり、僕も描かされたり。それを元に、中村光毅さんが背景、メカを描かれたり。それで、ひとつの画面にして、局とか代理店にプレゼンするためのものを作るんです。それで決まるとも限らない……ほとんど決まらないんですけどね(笑)。

それがタツノコプロの魂

――タツノコの独特のキャラクターを描かれるご苦労とかありました？

デザインって、言ってしまうと、役柄に合ったキャスティングですよね。役者を決めるみたいな。その役者はどういう姿、顔してるのか、そういうことですよね。もちろん、形として絵にするんですけど、むしろどういう役柄なのか、性格なんだろうかとか、目をどういうふうにするか、髪の毛をどういうふうにするか、そういうことが大事だったんです。だから、このアニメが流行ってるからって、そういうのは関係ないんですよ。LPのジャケットですごい刺激的な絵があったら、それいただいちゃおうとか、服装にしても、髪型にしても、自分でいちばん興味があるものが入らざるを得なかった。その時代のもの、70年代のものが入らざるを得ないんですね。アニメなんだけど、自分のその時の現実が作品に出ちゃってる。それは、僕だけじゃないと思いますけどね。それに、タツノコの作品なわけですから、なにを描いてもタツノコ（調）になるわけですから。



■『宇宙の騎士テッカマン』ペガス

――それは最終的に吉田竜夫さんがフィニッシュされる時に、自ずとタツノコ調になるから、ということだと思うんですけど、天野さん自身の絵柄へのこだわりみたいなことは？

僕の絵柄は関係ないんですよ。変な話ですけど、仕事として描いてましたから。会社員っていうと変ですけど、やっぱり与えられたものを、仕事として描いてました。それは例えば、ガッチャマンならガッチャマンを描かないといけないわけですよ。ある決められた絵柄を忠実に描けるかどうかって技術的なことで、自分の絵柄の癖とかは、また別の話なわけです。

――技術的に、吉田竜夫さんに合わせた絵というのは、それほど無理なく描けた？

うん。プロとしては、描けないといけないわけです。描けない人は、そういう絵描きになれないってことですから。それが絶対条件。

――それはやはり、そうした要請に応える充足感があったわけですか？

ん、そうだと思います。ただ、変な話ですけど、そこには基準というか、デッドラインみたいなものがあって、それ以上のことは、別に望まれてないんですよ、仕事としては。

――それは、凝りすぎてもダメみたいな？

ですよね。やっぱり、何十人のアニメーターの人が、描けなきゃいけない。そのためには、あんまり難しくても大変だな、と。だけど例えばキャシャーンがね、ベルトがないから、難しくて描きにくいとか、そういうことがあったと思うんです。けど、カッコ良さを追求しちゃうと、この（肩からの）ラインって、ベルトがあると切れちゃうから、ベルトはないほうがいい、とかね(笑)。そういうデザイン優先の形。あくまでも美しさを追求するみたいな、そういうのは吉田竜夫さんのポリシーだと思うんですよ。

――天野さんもやはり、吉田竜夫さんのそうしたポリシーに共鳴されて？

そもそもタツノコプロってどういう会社かというと、僕が思うに、吉田竜夫さん、九里一平さんの世界を具現化するための組織なんですよ。そのためにいろんなスタッフがいる。そこのところがいちばん、大事なところ……いまだから思えるんですけど。だから、（ふたりの世界を）再現できる、そこになにかを与える力のある人間かどうかってことがいちばん大事。それがタツノコプロの魂というか、個性だったと思うんですね。

守ってくれてたっていうか

——作画からキャラクターデザインに移られたわけですけど、そうした進路というのは、当時、ご自分ではどう考えられていたのですか？

決められたことをやるのがダメだったんですね。だから、新しいことをやるほうが気持ちよかった。そういう意味では、キャラクターってゼロから作りますよね。そのほうが自分に合ってるなって。今でもそうですよ。決められたものをトレースするより、決められてないものをやっちゃうほうが、自分が気持ちいいですよ。

——そういう天野さんの資質を竜夫さんが見抜いてた？

だったと思いますよ。組織の中では、僕はあんまりうまくいけなかったんだけど、それを守ってくれたっていうか。〝いや、ああいう人はしょうがないんだ〟って。僕、会社で犬を飼ってたこともあるんですけど（笑）。吉田竜夫さんが、そういうのを許してくれて、たぶん社長の権限で、あいつにはなにも言うなって。

会社に1週間も2週間も来なかったりとか、いろいろなことがあっても（笑）、〝キャラクター（作り）で今、大変なんだから〟って、全部、守ってくれたんです。締め切りも守らないし、演出とか制作とかカリカリしてたと思うんですよね（笑）。それは、九里さんもそうですけどね。竜夫さんが亡くなった後は、誰も守ってくれない、僕が自分でがんばらないといけない。そう思うようになりましたけど。

■『タイムボカンシリーズ ヤッターマン』ヤッターマン2号

——吉田竜夫さん亡き後、新番組を作る時に、吉田さんならこう作るだろうとか、頭の中にあって描かれる部分ってあったんですか？

いや、なかったです。ただ、変な話ですけど。吉田さんは……全部やり尽くしたと思います。だいたいのことを。ご本人は、まだまだあるんだよってことは、よく言われたんですけど、僕は全うされたな、と思います。作家としてはね。むしろあの頃、アニメじゃなくて、遊園地を作るとか……。

——それは社長として、事業を拡大するといった？

だからたぶん、もしもそのまま生きてられたら、違うほうに行ってたんですよ。当然、ゲームとかもやってたと思うしね。そういう感じがしたんで、それを引き継ぐのは、僕なんかとは違う、他の人なのかもしれないと。

——天野さんにとって、吉田竜夫さんは、どういう方だったんでしょう？

竜夫さんは組織の長であるから、やっぱり、いろんな大変な思いをされたと思うんですけど、僕は社長業よりも、絵描きとしての竜夫さんと、ずっといっしょにやってきたんで、尊敬する先輩、大先輩ですね。それはホント、今でも影響受けてます。影響っていうと、自分がそれを実行してるみたいだけど、作品がどうのこうのっていうより、生き方としてね。他の人と比べて、カッコいいな、凄い人だなっていう。

（2002年3月6日於／東京都渋谷区「天野喜孝事務所」）

河井ノア

（かわい・のあ）
7月11日、東京都出身。本名／下元明子。中央美術学園でグラフィックデザインを専攻し、デザイン事務所へ就職。ところが会社は半年で倒産、新聞広告でタツノコプロが社員募集をしているのを知って72年3月、美術部へ入社。その後、出版部に配属となり、幼年雑誌や絵本の仕事をする。75年頃、キャラクター室へ配属となり『てんとう虫の歌』『ポールのミラクル大作戦』『一発貫太くん』『風船少女テンプルちゃん』『森の陽気な小人たち　ベルフィーとリルビット』『とんでも戦士ムテキング』『ずっこけナイト　ドンデラマンチャ』『アニメ親子劇場』『パソコントラベル探偵団』などのキャラクターデザインに携わる。
'81年8月に退社。メインの仕事をアニメから絵本へ移し、名前を河井ノアに統一した。シナリオライターの夫・柳川茂と共に絵本『のどか森のリトリ・ジョイ』シリーズや、『ファーマーさんはみすてない』等、子どもたちに向けて、メッセージ絵本を発表。またメインではないが現在もアニメーションの仕事は手がけており、『おめでとうイエスさま』『のどか森のリトル・ジョイ』（キャラクターデザイン）『しましまとらのしまじろう』（ゲストキャラクターデザイン）などがある。

「わぁ素敵♪」なんて思っちゃって

――この業界に入られたきっかけから教えていただけますか？

一応、グラフィックデザインをやってたんですけど、その会社がね、倒産しちゃったの(笑)。そしたらたまたま新聞広告で、タツノコプロが募集してたんですよ。で、アニメーションやってみたい、と思って面接に行ったのね。面接官が吉田健二さんだったんですけど、「女の人って、なかなか育たないんですよねぇ」って言われたんで、「任してください、がんばります！」みたいな大口きいて(笑)。それで決まったんですけど、「任してください」なんて、とんでもないのね、周りがみんな凄い上手で。

――最初の配属は、美術部だったんですよね？

中村（光毅）さんの下。でも、光毅さんと一緒に仕事をする前に、もう、他の部に行っちゃったんだけれども。

――それはまた、どうして？

社長（吉田竜夫）から挨拶にいらっしゃいって言われて、同じ時期に入った人たちと3人ぐらいで、緊張して社長室に行ったのね。そこで「子供

たちに夢を与えましょう」って言われて、「わぁ素敵♪」なんて思っちゃって(笑)。その後に「描いたものがあったら持ってきて」なんて言われて、社長に見てもらったのね。それは『八百屋お七』の舞台を想定して描いたポスターのイラストだったんですけど、それを社長が「面白い」って言ってくれて、それで「アニメーションよりも、平面処理、そういうものをやってみませんか?」って言われて、なんか面白いことならいいなぁ、と思ってたら、次に机が用意されてたとこが、出版部だったんですよ。天馬（正人）さんの下で。

みんなが先生で、学校みたいでしたよね

『みなしごハッチ』の絵本を3部作で出そうって話が来て、ハッチって描いたことなかったんだけど、でも頭のなかでは凄く簡単に描けそうに思って「やりたいやりたい」って。で、やってみると凄く苦労して、ハッチが、凄く可愛〜くなくなっちゃうの。タツノコのキャラクターって、凄いクセがあるのね。うまい人が描くと凄く良くなるんだけど、下手な人が描くと、どうしようもないキャラになるわけ。私の場合は、後者(笑)。それで、天野（嘉孝）ちゃんとか、源田（秀夫、現／あや秀夫）さんに、ラフの段階で随分、手を入れてもらったんですよ。その時に「ああ、私もこういうふうに描けるといいなぁ」と思って、なんか新たに目標ができちゃって。そう思ってるところに、社長が手を入れてくれたんですよ。その線がね、もう、飛び立って行くような線なんです。「ああ、この人は凄いなぁ」と思って。九里さんにも、最後に随分助けてもらったし、みんな、指導が凄いあったかいんですよ。夜中に会社で徹夜して描いてると、飲んでから、帰ってきてくれるんですよね。2時ぐらいに、お寿司とか買って(笑)。やりたくて手伝ってくれてるわけじゃないと思うんだけど、やりたくなくもないの(笑)。人のためとはいえ、手を入れることを楽しんでくれるんですよね。やっぱりこう、何かものを持ってる人じゃないと、持ってないものがあって(笑)、それを痛いほど見せてもらったの。だから、光毅さんにしてもそうなんだけれども、いま思うと、天才の集団ではなかったのかな、と。

もう、みんなが先生みたいで、学校みたいでしたよね、タツノコプロって。

「嫉妬した」って、書いてくれて

―― その後、また異動されるわけですけど、キャラクター室って、既にあったんですか?

あったの。社長って人を育てるのが凄い好きだったんですよ。それで、天野ちゃんは絵もうまかったし、凄〜く面白〜い世界を持ってたんで、キャラクター室にひとり、置いてたんですよね。そこで最初は、社長と九里さんと天野ちゃんとで、いろんなもの（キャラクター）を作ってたんだと思うんですけど、九里さんなんか、凄く忙しいんですよ、いろんなことやんなきゃいけないし。で、社長もそうだし、それでそのうち源田さんが入ってたんですけど、私が（キャラクター室に）入った時は、もう源田さんが（タツノコを）辞めた後でしたね。だからキャラクター室で一緒にやったのは、天野ちゃん。彼からも、すっごい影響を受けましたよ、私。

―― 天野さんって、凄く仕事の手が速かったそうですけど。

そうですね。ひとつのキャラクター、5分ぐらいで作っちゃうもんね、バーッと。考えないんですよ、あんまり(笑)。彼の場合、考えて作るものじゃないんですよ、こう、感じて作るもの。その、普通の勉強をして上がってきたキャラクターじゃないんですよね。私なんかが同じものを作ると、やっぱり一晩ぐらいかかっちゃうんですけどね、徹夜したりして。でも、私も「5分で作った」って、みんなには言ってましたけど(笑)。やっぱりこう、背伸びしとかないと、ねぇ? だから結構、睡眠時間なかったですよ。

それに例えば、色白の美しい女の子っていっても、いろんなタイプがあるから、いろいろ描くじゃない? これかなぁ、でもちょっと違うなぁとかって。でも、天野ちゃんはもう、ひとつしか作

んない。それが凄くいいんですよね。

――じゃあ、下元さんの場合は、考え込みながら作られてるような感じなんでしょうか？

あの〜、なんて言うのかな、自分のものがない頃は凄く考えて、頭で描いてたところがあったんだけど、いろんなかたちで育ててもらって、段々こう、自分の世界っていうか、自分が可愛いなと思うものが、すぐ出るようになったのね。ただやっぱり、頭の中では描けないんですよ。鉛筆を持たないと。鉛筆が作っていくって感じ？ 指先が。

だから（キャラクター作りに）慣れてからは、とにかく鉛筆を持って、マーカーを持って仕上げていくような感じ、かな？ 最終的には、社長も天野ちゃんも私も、同じような感じで作ってたと思うんですけどね。

――吉田竜夫さんという方は、下元さんにとって、どういう方でした？

社長に見てもらうってことなんですよ、私が何かを描くってことは。アニメになるとかならないとか、関係ないんですよ、もう(笑)。ただ、社長が「いいね」って言ってくれれば、いい世界なんです。天野ちゃんもそう。で、社長室をノックして――社長もよく入ってくるんですけど(笑)――ドアを開けると社長が座ってて、作品をプレゼンテーションするでしょ？ その瞬間がね、凄いドキドキドキして、でも「いいね」って言ってもらうと、嬉しくて、なにもかもがすっ飛ぶの……そういう人でしたね。

あと例えばね、いたずら書きとか、よくしてたんですよ。そこに果物があったら、果物でキャラクター作ったりして置いとくんですよ。それに、社長が「嫉妬した」って、一言書いてくれた時があって、それが嬉しくて、なんか、ねえ？(笑)

その一言で、人を育てるんですよね。けなさないんですよ、決して。ホント、一度もない。「嫉妬した」なんて、自分がそれだけのものを持ってるから言えるんだろうなぁ、と思うんですよね。だから、ホントに吉田竜夫っていう人からいいものをたくさんいただいて、いまがあるな……と、つくづく思いますね。

いまでも真似ができないという線で

――最初にデザインされたキャラクターというのは？

いちばん最初は『てんとう虫の歌』のサブキャラクター、その後が『タイムボカン』だか『ヤッターマン』だかの、サブキャラクターでしたね。そこで三面図を描いたり、仰ったりの練習をして、いちばん最初に（メインキャラを）やったのは『ポール（のミラクル大作戦）』なのかな？

――そうですね。『ポール』は、籠もって作られたんですか？

そうそう。籠もりっていうのは、九里さんが運転して連れてってくれるんですけど、必ず相模湖なんですよ。そこに資料もいっぱい持ってって、3日ぐらい籠もるんですけど、天野ちゃんは、着くとすぐ寝ちゃうんですよ。社長は「仕事をしようか」とか言って、黙々と描いてるんですけど(笑)。それで、みんなが仕事にのってきた頃、天野ちゃんが起きて来て、ワーッと凄くいいものを、いっぱい描くの(笑)。

社長が寝た後、真夜中に天野ちゃんと、社長が描いた絵をず〜っと見てて、「こういう線が描けるようになればいいね」って。もう凄いんですよ、線が。凄く素敵な色の、エメラルドグリーンの色鉛筆でデッサンして、最後に1本を決めて線を引いていくんですけど、それがねぇ、いいんですよ〜。あれはもう、いまでも真似ができないという線で。

――じゃあ『ポール』って、下元さんが単独でキャラクターデザインとしてクレジットされてるんですけど、吉田竜夫さんの手も入ってるわけですか？

一応、基本は私が作ったんだけれど、「どれどれ」って感じで、みんなで、その絵を描くんですよね。社長が描くと、同じキャラクターでも、まったく違うし、九里さんが描いても違うし、そうやってって、定番を作ってって、マーカーで仕上げて、こう、ボードに貼ってくんですね。それを、スポンサーにプレゼンテーションに持って行くんですけど、それまでが楽しいんですよ(笑)。で、そういう時に、犬が耳で飛んじゃおう、とか思いつくことがあるんですよね。その絵を文芸の人が

見て、そういう設定にしたりとか。

――ああ、ドッペが耳で飛ぶのは、先に絵があって、ってことですね。

『風船少女テンプルちゃん』なんかでも、雲の子を描きたい、とか言うと「描こう描こう」みたいな(笑)。だから、ここまではやっちゃいけないよ、とか、ここからはちょっと越権だよ、とかいうのはないの。とにかく好きにやらせて、そこから、マイナスしていくところはあるかもしれないけども、先にまずみんな出させちゃおう、みたいな。

だから、皆で楽しんで仕上げるって感じかな。タツノコプロの創り方は。

――じゃあ、キャラ表をフィニッシュされたのが、クレジットされてる方？

そうですね。三面図を起こしたりっていうのは、キャラクターデザインとして（名前が）出た人が作ります。

子供に向けて仕事をしていこうと思って

――竜夫さんがご病気になられた時って、側にいらっしゃった身としては、どう感じられました？

天野ちゃんとふたりで何回かお見舞いに行ったんですけど、吉田竜夫って人は勘がいいから、もう駄目だって、わかってるんですよ。だけど反対に、演技をするんですよ。「春になったら退院できるねぇ」とか。それが凄い辛くて、ず～っと暗い毎日で、もう泣いて過ごしてたんですけど、タツノコのスタジオのいろんなとこでね、制作の人とか泣いてたり、そんなでしたよ。だからやっぱり、みんな想いが同じなんだなぁ、と。

だから、天野ちゃんと、私たちは絶対に有名になって『徹子の部屋』（テレビ朝日）に出て「いちばん尊敬する人は、吉田竜夫です」って言おうね、って約束して。

――ど、どうして『徹子の部屋』なんですか？

有名になったら、出れると思ってたから(笑)。でも、いちばんの要っていうか、やっぱりこう、社長を中心に、みんなが放射線状に繋がってたから、亡くなって暫くは、横のつながりがぎくしゃくしたり、辞めてく人は、どんどん辞めてくしね。そんななかで、社長が遺してくれたものを、私たちが守っていくっていうか、ある意味、タツノコプロのためにがんばらなきゃいけないんだ、っていう責任感みたいなものが初めて出てきた気はしましたね。

――それは、会社の将来に対する不安からってことですか？

将来が不安とかっていうのは、私たちは、思わなかったですね。経理の人とかはわからないけど(笑)。ただ、不安がないってことは、そこに興味がないってことかもしれないんですよね。私たち（キャラクター室）は、ただ絵が好きな人間の集団だったから、もっとうまくなりたいとか、こういう世界をやりたいとか、どう表現したらいいかとか、天野ちゃんとは、そういう話を、よくしてましたけどね。

――タツノコをお辞めになられた理由というのは？

やっぱりアニメって、キャラクターを作ると、そこでもう終わりでしょ？　その子（キャラクター）がどう動こうと、もう次の仕事が来てるわけだし、サブキャラ（作り）もあるし。だから、なんか凄く寂しいのね。やっぱりこう、自分で作った子は、大切に最後まで面倒を見てあげたいっていう想いが凄くあって。

――それで絵本作家としての道を選択されたわけですね。

でも、いちばん最初に社長室のドアをノックして、社長に言われた「子供たちに夢を与えましょう」って言葉は、やっぱり、もらって辞めましたね。私は、子供に向けて仕事をしていこうと思って。絵本だと世界も自分で作れるし、絵本というのはひとつの塊だから、メッセージを入れられますよね。だから子供たちに送り届けるものとしては、いちばんいい手段なんですよ。

――ところで、タツノコ時代に、実際にアニメーションの原画を描かれたことは？

ないですないです。だって、描くたびに違っちゃうから(笑)。

（2002年3月4日、於／東京都立川市）

タツノコプロ JACKET GRAFFITI

▲『決断』　品番号／C-54　形式／17cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「加藤隼戦斗隊」

▲『決断』　品番号／C-55　形式／17cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新録ドラマ「ラバウル航空隊」

▲『樫の木モック』　品番号／SCS-151　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1971年12月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／400円　収録内容／正主題歌と挿入歌「ぼくは悲しい木の人形」

▲『樫の木モック』　品番号／KKS-4057　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1972年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／1500円　収録内容／正主題歌と挿入歌11曲

▲『樫の木モック』　品番号／SR-5522　形式／17cmＬＰ　発行所／サン企画　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／12ページ　価格（当時）／550円　収録内容／「モックでチャチャチャ」、他４曲

▲『科学忍者隊ガッチャマン』　品番号／SCS-505　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1972年10月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『かいけつタマゴン』　品番号／SCS-509　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1972年11月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正主題歌と挿入歌「タマゴンだよん」

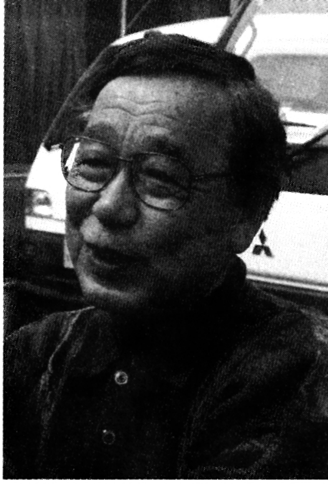
▲『けろっこデメタン』　品番号／SCS-186　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1973年２月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『新造人間キャシャーン』　品番号／SCS-516　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1973年９月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『新造人間キャシャーン』　品番号／KKS-4087　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年３月　ジャケット総ページ数／２＋８ページ　価格（当時）／1500円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌10曲

第五章　アニメーターたる闘（いき）

■『紅三四郎』より



（にしおか・たかし）
1936年２月10日、大阪府出身。'44年、学童疎開で父母の郷里の広島へ移り、以後28歳までを過ごす。'55年「少女クラブ」7月号に美空ひばりの映画を漫画化した『娘船頭さん』を発表、漫画家デビュー。'56年10〜12月末まで「中国小学生新聞」に連載漫画を持ち、以降、翌年の夏まで読み切り作品を発表。父親が逝去した'57年、家業の散髪屋に専念するが、漫画家への夢が断ちがたく「少女クラブ」夏の増刊号に読み切りを発表。以降'62年の同誌廃刊まで、増刊号に作品を発表し続ける。一方、編集部から紹介された漫画家の太田じろうに、タツノコプロがアニメスタッフを募集していることを教えられて入社。5年間の在籍期間中、原動画及び演出に携わり、第1作『宇宙エース』から『昆虫物語みなしごハッチ』のパイロットフィルムまでに参加した。
　その後、芳文社、双葉社、秋田書店、小学館、竹書房、少年画報社、日本文芸社などで、青年誌に漫画(劇画)を発表。同時期に講談社の『ディズニーランド』にイラストを発表(現在も継続中)。8年間にわたる青年誌の劇画をやめ、'77年からは童画と児童向け作品に専念、現在に至る。『悪太郎』シリーズ(秋田書店)、ディズニー絵本『ピノキオ』(講談社)、児童漫画『赤い弓と矢の話』(日本教文社)など、代表作多数。

西岡たかし

だんだんアニメーションが好きになってきちゃって

――タツノコに入られる前は、漫画を描かれていらっしゃったんですよね？

　中学生の頃から漫画が好きで、学童社の「漫画少年」ていう雑誌に投稿してたんですよ。それで田舎で理髪店やってる時、「少女クラブ」(講談社)が廃刊になるまで3年くらい、夏と春の増刊にずっと描いてたんですよ。

――その頃も、西岡たかし名義で？

　ええ、西岡たかしで。弟と妹は僕が学校行かせてたもんだから、ひとりで一所懸命理髪店の仕事してると、突然電報が来るんですよ。「アスシメキリ　スグオクレ」って(笑)。1ページも描いてないわけですよ。もうびっくりして、すぐ病気の格好して店閉めて、3日くらい徹夜して描いて。それくらいのもんですね、漫画描いてた時期っていうのは。

――その「少女クラブ」が廃刊になった後というのは？

　兄貴の友達が集英社にいまして、漫画を見てくれるっていうんで見せたんですが、その人まだ入ったばかりで発言力がなくって、漫画家の太田じ

ろう先生のところへ持っていったら「ああ、この人は田舎おいとくのはもったいない」ってことで、タツノコ紹介してくれたんです。それが28の時です。あの頃は地方にいたんじゃ、よほど傑出した才能じゃない限り相手にしてくれませんからね。それでタツノコには悪いんですけど、ひとつのきっかけとして入ったんですけどね、描いてるうちに、だんだんアニメーションが好きになってきちゃって(笑)。一時、骨を埋めようかと思ったんですけど、でもやっぱり、売れる売れないは別として、出版のほうへも一度は行ってみなくてはと。で、5年間在籍して辞めました。

——ということは、タツノコでも最初は出版部に入ろうと？

そうなんです。会社は出版部が全盛の頃で、『忍者部隊月光』を描いていました。だけど、アニメーション始めるんで、そっちを手伝ってくれないかって言われたんです。

——すでに『宇宙エース』の作業が始まっている頃ですよね？

オープニングとエンディングの仕事にとりかかってたと思うんです。みんな素人でしたからね。僕もアニメーションは全然わからないんですけども、笹川（ひろし）さんたちも東映動画にちょっと行ったっていうだけで、本当に動きなんかほとんど描けないで。みんながゼロからですよ。

——その頃のメンバーというと、笹川さん、原征太郎さん、西岡さんだけだったんですか？

坪田力蔵、奥田誠治、それと奥田竜緒と。彼らは僕より先にいましたから。

職人は黙って盗めっていう感じですよ

——アニメーションをまったく未経験の状態で『宇宙エース』のオープニングを描かれたそうですが、どうやって勉強されたんですか？

当時描けたのは、「歩き」「走り」「旗がぱたぱた動く」「物が正面に飛んでくる」、その程度です。それも自分で描いたもの確認してませんからね。「歩き」も、映した時に地面を滑るようになってしまう「歩き」ってあるじゃないですか。微妙な、0・1ミリくらいの差で、動きがよくなるか、ならないかっていうような。そういうことが、まったくわかりませんでしたからね。

7月、8月に、僕と笹川氏とマネージャーの平野（保）氏で、オープニングとエンディングを撮影するために六本木の撮影所に10日間ぐらい、毎日、朝6時から夜中の12時、1時くらいまでいて。撮影所でセル渡しの仕事をして、それでなんとなく〝ああ、アニメーションてのはこういうものだ〟と、一応わかったんです。撮影の翌日にラッシュフィルムが来るわけですよ。で、「わあ、動いた動いたって」って感激するわけです(笑)。だから、その程度ですホント。

——描いている時は動くかどうかもわからないと。

動くのはわかってるんですけどね、こうペラペラっとやれば動きますからね。確実にスッと動くのを見るのは初めてだったんですね。今ですとビデオがあって、全部きちっと見られますけどね。

——『宇宙エース』のごく初期の段階で、技術指導という形で、虫プロから木下敏治さんを呼ばれたと思うんですけど。

ああ、そうです。動きをね、教えてもらうために、頭下げましたよ。そしたらね、教えてくれないんですよ。職人は黙って盗めっていう感じですよ(笑)。「俺に聞かれても、ちゃんとした理屈でしゃべれるはずがない。学がないんだ」って言われたりしたら、ねえ(笑)。笹川さんに、『宇宙エース』のある場面で人が犬を引いて行進する絵を、1枚の原画で3〜4枚のリピートで動画を、と頼まれた時は非常に困りましたね。僕がいくら考えても動かないんですよ。

——結局ご自分で考えながらお描きになったんですか。

そうです。だからね、火があるでしょう。地面が燃えて、ぱっと動かしになるじゃないですか。そういう場面なんかは、誰に聞いても教えてくれないわけでしょう。「こういう描き方」っていうのがあるわけじゃなし。毎日会社へ行ってね、仕事が始まる前に、動画用紙の古いのとか、ゴミを燃やすじゃないですか。その焚き火をずーっと、1週間ぐらい見つめました。それで、描いた覚えが

あります。歩きにしても、０・１ミリの違いによって、滑らかになるかギクシャクするか、ってとこがあるわけでしょう。それも、初めて自分で描いたのをフィルムになって映してみて、ああ、あれはまずかったなというので、今度は修正するとか。でも、この間、久々にビデオで見たんですけど、『マッハＧｏＧｏＧｏ』なんか唖然としましたね、ヘタで、やっぱり。

——そうなんですか？

やっぱりね、吉田（竜夫）社長の絵は、あの頃はアニメーターには手に負えなかったですねえ。今だとみんな、描いちゃいますけどね。あの時代は、なにしろみんな漫画漫画した（絵を描く）連中ばかりですからね。だからよくあれをやろうと冒険したなと。社長は自分の絵ですから、アレだけど。よくやったなあと思いますね。

——『宇宙エース』の頃でも、設定資料集という形で、設計図（キャラクターデザイン）はすでに存在していたようですが。

はいはい。それ（設定資料）は番組が始まる前に原征太郎が描いたんだと思います。僕が来た時、もうあったんですけども、「僕が描いたんだ」って原くんの口から聞いた覚えがあります。

退職金をもらった第1号です

——アニメーターとしてスタートされて、途中で演出に移られますが、どういった経緯があったのでしょうか？

ある日突然、演出です。演出やれって言われたんです。会社の命令ですよ。演出方法、誰かに習ったわけじゃないから、今まで見てるままで手探りでやり出したわけです。

——絵コンテを描かれたのも、その時が最初だったんですか？

そうです。当時、タイトルに出てるのはかなりいい加減でしてね（笑）。僕が関与してないものでも、僕の名前が出てたりしてますね。絵コンテだって『マッハＧｏＧｏＧｏ』なんかは殆ど僕、描いてません。外注に頼んでたんですけど、その名前がね、全部消えてるんですよ。

——外注スタッフを載せる代わりに、西岡さんの名前になったりしてるんですか。

そうです。ただ、演出は僕がやってますけど。整理係ですよ。

——今だと、演出といっても絵コンテだけ描く人と、その後の処理をする人と、分かれてクレジットするのが当たり前になっていますけど。

僕は後の処理のほうをやってたということです。

——では、全く関与してないというわけじゃなくて、コンテはやっていない、という感じで。

そうです。コンテに関わりだしたのは『ドカチン』と『グズラ』と……記憶がないけど『ハクション大魔王』かなぁ、と思ってるんですけどね。

——タツノコを辞められたのは、やはり出版の世界に行きたい気持ちが強かったからなんでしょうか？

僕、在社中からアルバイトで「週刊漫画（TIMES）」（芳文社）なんかに劇画描いたり、講談社の「ディズニー（ランド）」の仕事してたりしてたんです。それで仕事が増えてきたもんですから、辞めたんですね。僕がタツノコで退職金をもらった第1号です。折角いまから会社が良くなるのに辞めていくのかって、社長が言ってくれてね。最初だからって、10万円の退職金をもらったんです。

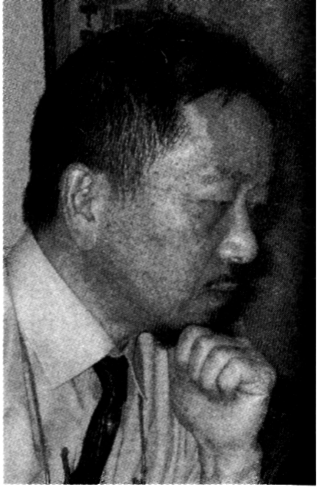
——タツノコを辞められてからというのは、一切、関わりはなかったんですか？　吉田竜夫さんとはどうだったんでしょう？

竜夫さんのところには、１回、おうかがいしました。非常に身体の調子が悪いような感じでしたね。亡くなる半年くらい前ですかね。なんだかんだって言ってもお世話になったんで……。あの人の人間的な魅力ってのはまた別モンですからね。

——竜夫さんの魅力というのは、どういうものなんですか？

非常に気が強そうだけど、反面、神経が細かくて、ナイーヴなのかな。人を嫌にさせる神経質な感じじゃなくって……一口じゃ表現できないんですけども、僕も長いこと散髪して客商売してたんで、人を見る目は確かだと思うんですよ。魅力のある人でした。僕が（タツノコが用意してくれた）アパート入って半年くらい経った時に、部屋に帰ってくると、社長が酒に酔ってひとりでポツンと座ってるんですよ、僕の部屋で（笑）。

（2002年3月22日、於／東京都清瀬市）



（さいじょう・たかし）
1949年11月14日、北海道出身。ハテナプロで『宇宙パトロールホッパ』『鉄腕アトム』の動画に関わる。数カ月後、兄・田中英二が代表するタマ・プロに入り、『宇宙エース』『ジャングル大帝』『がんばれ！マリンキッド』の動画を担当。その後『マッハGoGoGo』『紅三四郎』『ふしぎなメルモ』『ワンサくん』などの原画を担当。
'82年の田中英二死後、水村十司と共に、同社を代表するアニメーターとしてクオリティーの高い作画を維持し続けた。主な作品は『怪盗ルパン　813の謎』『釣りキチ三平』『タイムボカンシリーズ　タイムパトロール隊　オタスケマン』『ストップ!!ひばりくん!』『Gu-Guガンモ』『よばれてとびでて！　アクビちゃん』(以上、作画監督)、『超時空要塞マクロス　愛・おぼえていますか』『北斗の拳』(以上、原画)など。キャラクターデザインを担当した作品に『剛Q超児イッキマン』『湘南爆走族』『5等になりたい。』『地球が動いた日』などがある。
近年は合作の仕事が多く、ウォルト・ディズニーの『人魚姫』『アラジン』、ワーナーブラザースのテレビシリーズ『フリーカゾイド』（スピルバーグ監修）で演出、作画監督を手掛ける。

西城隆司

奇麗な女性は女性には描けない

――タツノコがアニメの制作を始めて、当時のタマ・スタジオ、田中英二さんと繋がりができたきっかけというのは？

それは、うっかり聞いてないんですけど、田中英二は、もともと貸本の漫画家なんですよ。少女漫画が得意だったんですよね。以前に聞いた話ですと、漫画を描いてる当時は直接の交流はなかったらしいんですけど、田中英二は吉田（竜夫）さんの男性的な絵が好きで、吉田さんも、自分にはないセンスを持ってるな、ということで――もちろん竜夫さんは奇麗な女性を描ける方ですけど――田中英二の描く女性をとても気に入ってらしてて、お互いに、そういう意識は持ってたらしいんですよね。

――田中さんって繊細な絵柄から受ける印象とは対極の、男っぽい方だったとか？

もう、男っぽいだけ(笑)。

――だから、描くものは、女性的な部分が秀でてる？

そういう意味では吉田さんも、凄い男っぽい人ですよね。あの方は、そのまま男っぽい絵を描く

んですけど、田中英二は、奇麗な女性は女性には描けないっていう意識を持ってたんですよね。男性は奇麗な女性を求め続けるので、女性が描くよりも素晴らしくなるっていう気持ちを、ずっと持ってたんですよ。

〝車だけ描いていればいい〟って、はっきり言われて

田中英二は、なにかをやるって場合には、徹底してやるタチなんですよ。例えば『マッハGoGoGo』にしても、あの当時、ああいうキャラクターって難しいから、描く人があんまりいなかった。で、田中英二は一応、リアルなものも描けた人ですから、やり手がいないなかで仕事をやるって場合も、車は全部、新人の僕に描かせたりとか(笑)。そういうかたちをとって、徹底してやり方を考え抜いた人なんですよね。だから僕は『マッハGoGoGo』、何本かやりましたけど、実際に人物をちゃんと描かせてもらったことがなかったですね。まぁ、もっとも新人だったんで、原画をやれる実力はなかったんですけど(笑)。

――車のカットだけ、描かれてたんですか？

ええ。こう、PANづけ（フォロー・パン）で崖の縁を何台もず〜っと走ってくような。〝人物は描けなくていい、車だけ描いていればいい〟って、はっきり言われて、描かせてもらえたのは、運転席から、ちょっと見えてる顔(笑)。昔はね、それがいいとか悪いとかじゃなくて、そういうことをはっきり言える人がいたんですよ。言われた本人は、絶対にそれでいいとは思わないので、なんとか人物も描きたいって気持ちが、凄く強くなりますよね。そういう反骨精神を、うま〜く利用するようなことを、言えた人なんですけどね。

――当時、スタジオに原画を描ける方は何人ぐらいいたんですか？

えっと、田中でしょ、それに中谷さん。あとは菊地（政明）さんがちょっと描けましたかね。でも菊地さんは動画専門にやってたので、戦力としてはもう、そのふたりぐらいで、あとは半田（輝男）さんって人と、僕と水村（十司）。途中で須田（正己）さんが入ってきたんですけどね。

――須田さんがいらっしゃった期間って、実際にどのくらいだったんですか？

印象としては強烈なんですけど、そんなに長くないんですよね、半年ぐらいかな？　最初、動画で入ってこられたんですけど、すぐに原画を描けるようになって、あの人もまた凄いんですよ。ウチはその当時、月トータル何枚動画やったか、とかグラフをつけてたんですけど、須田さんは新人なのに、突然、みんなを抜いちゃったんですよ。で、先輩意識で取り戻そうと思って必死になったので、あの人が来たおかげで、ホントにみんな、仕事が速くなったんですよね(笑)。僕の後ろ（の机）にいたんですけど、例えば動画用紙を取る時にも、シュッて凄い音がするんですよ、風を切るような(笑)。すべての動作が速いんですね、消しゴムで消す時とかも。だから、凄くいい影響を、もらったんですよね。あの人はなんか運動神経も発達してたらしくて、アニメーターにはやっぱり運動神経って、凄く必要みたいですね。

『三四郎』の時は、車、出なかったんで

――西城さんが初めて人物の原画を描かれたのは？

『グズラ』は描かせてもらったかもしれませんね。キャラクター的に、少し簡単なので。その後『三四郎』の時は、車、出なかったんで(笑)、一応、人間しか描かなかったんですけど。

――西城さんご自身が原画を描かれた、印象的なカットって？

印象的なのは『三四郎』のオープニングの、こう、ストロボで空中を回転して着地するカットですね。いわゆるOL動画じゃなくて、いくつも残像が残ってるストロボは、アニメではタツノコが最初に使い始めたと思うんですけど、本当のストロボをやるには1コマ打ちでやんないと駄目だって言われて、おそらく1コマでやったんじゃないかなぁ。

――そこは全部、原画を描かれたんですか？

そうですね。もちろん、原画以外に動画も。

―― オープニングのコンテ、どなただったか、覚えてます？

九里さんですかね？　ちょっと、はっきりしませんけど。

―― 九里さんとの打ち合わせとかって？

一応、田中英二が、この当時は作監担当してましたよね。ですから、そういう打ち合わせは、田中英二が担当してたんですよね。で、九里さんも、もとのタマ・スタジオのほうに、直接、修正しに来てくれたこともあったりしたんですけどね。何回もないんですけど。ただ九里さんの絵コンテの場合、みんなが困ったことは、絵コンテの絵があんまり良すぎてね、それ以上の絵が描けないんですよ。ある意味、絵コンテの絵は下手なほうが、楽しく描けるんですよね。いや、ほんとにね、九里さんは1枚1枚の絵が凄いので、いまならおそらく、拡大コピーして使わせてもらったりするんですけどね(笑)。当時はコピー機がないですから、コンテを模写してんのか、原画を描いてんのか、わかんなくなっちゃいますよね。

―― タマ・プロでやられた原画に竜夫さんが部分修正を加えられたものが残ってますけど、あれは一旦、タツノコに納めた後に、一度、戻ってきてるんですか？

えっとね、『紅三四郎』に関しては、原画を1回、渡してますよね、動画の前に。『マッハGoGoGo』も、たしか、全カットではないんでしょうけど、重要な……三船剛でしたっけ？　あれがアップになるカットですとか、一部、チェックが入ったと思うんですけどね。でも『紅三四郎』ぐらいまでですかね、吉田さんが直接手を入れたいってことで、毎回原画をチェックされてたのは。

―― 田中さんと竜夫さんの得意な絵柄というのは、違ってるから、田中さんが描く原画っていうのは、竜夫さんの絵と違うわけですよね。竜夫さんはある程度、それを認めてる部分があったっていうことなんでしょうか？

そうですね。52本の内の半分か、それ以上の数をウチがやるっていうことは、結局、キャラクター集（表）は竜夫さんの絵ですけど、実際に放映される場合には、かなりの率で田中英二の絵に変わってきてるっていうのはもう、しょうがないことだっていう、その辺は感じながら、一応、仕事は出してくれてたと思うんですけどね。なんか、前に話を聞いたんですけど、サイン会かなんかで、吉田さんが、なんかのキャラを、ハッチかな？　描いたら、吉田さん、自分のキャラなのに、子供に〝これ違う〟って言われたって(笑)。結局、テレビを見てた子供は、ウチの、タマ・プロのキャラクターが正しいと思ってたみたいなんですよね。で、〝がっかりしたよ〟って話を、ちょっと聞いたことがあるんですけどね。

―― 西城さんが、竜夫さんの描く姿を見たりされる機会はあったんですか？

それはね、ほとんどないです。ただ、竜夫さんがチェックされて戻ってきたものは、もう一度、見さしてもらって、同じ部分でまた修正が来ないようにって、考えてやってましたね。あと、数字の書き方がね、独特なんですよ。決して上手いって感じじゃないんですけど、でも、もしかしたら、竜夫さんと同じ書き方したら上手くなるかな、と思って、数字をちょっと真似したことがあるんですけど(笑)。

―― 鉛筆とかは真似されなかったんですか？

あの方は濃い鉛筆でガガッと描かれるんで、そういうものは真似しましたけどね。

―― ちなみに『紅三四郎』の頃って、どのくらいの濃さの鉛筆で？

これが、おそらくトレスマシンの最初だったかな、と思うんですよね。原画はとにかく、3Bとか、みんな濃い鉛筆で描いてましたけど、タツノコの柴田（勝）さんが見えられて「動画はHで描いてください」って言われたんですよ。Hがいちばん、マシンで（線が）出るとか言われて。ただ動画の人も、いままでHは使ってなかったんで四苦八苦して。そのうちに、Hはあんまり良くないってことがわかってきて、Hじゃなくなったんですけどね。

すっごい影響力強かった人で

ウチはタツノコさんからもらったスケジュールを、ほとんど、ずらしたことがなかったんですよね。この日までに動画を上げてください、って言われたら、それを徹夜してでもきっちり守ったっ

ていう記憶があるんですけどね。

――それは、クオリティーも含めて？

それがね、自分の会社を誉めるようで可笑しいんですけど、田中英二が言ってたことは、仕事を早く丁寧に、で、期日をきちっと守る。質とスケジュールと両面を目指すっていうのが、基本的なベースなんですよね。質だけ目指しても、結局はスケジュールが間に合わなくって、30分のうちのどっかは凄く良いけど、どっかは流しちゃうってことになっちゃうし、量だけ沢山やれて早く上がったって、質的に大したことなければ評価は得られないっていう、両面大事だってことを最初に教えてもらったんですよね。それは、いまとなってみれば、とてもいいことを教えてもらったな、と。

――後にタツノコが総作監システムを採り入れても、タマ・プロの回は修正が入らなかったとか？

たぶんタツノコさんとの、そうした信頼関係ってのがあるんですけど、田中英二って人は、凄い積極的な人間で、例えば総作監制にすると、流れが非常に悪くなる、それで、これだけのスケジュールでやってくれと言われてもウチはできません、というような、こっちのハッキリした意思表示があったと思うんですよね。だから、それに押し切られて、こっちには回ってこなかったのかもしれませんし、いままで質的に落ちてないぞ、という信頼関係と相まってたのかもしれませんけどね。

でも『テッカマン』なんかは、吉田さんも見て……いま、ぴえろにいるのかな？　二宮（常雄）さんが、僕が修正入れて吉田さんが修正したものを、更に修正して、なんか3枚も修正（原画）があって、原画よりも多かったような気がしたんですけど(笑)。

――頻度は減ったけども、1話とかだと、竜夫さんの修正は『テッカマン』の頃でも入ってたわけですか。

そうですね。ただ吉田さんが、あんまり手をつけなくなったのは、それだけ優秀なスタッフが、タツノコさんに集まってきたということもあるんでしょうけどね。

――竜夫さんと飲んでお話しされる機会とかは？

機会は、そんなになかったですね。打ち合わせに行って、ちょっと声をかけていただいたり、僕が描いた絵に関してのコメントみたいなのは時々あったんですけど、直接、飲んで話すことができる年齢の近さじゃなかったので、ほんとに、じっくりお話をした機会というのはないんですよね。

でも、僕らにとっては、すっごい影響力、強かった人で、直接の言葉はなくても、こうやって自分の人生にとって影響を与えてくれた人って、やっぱりまぁ、いますよね。

――田中英二さんは、どうだったんですか？　しょっちゅう、飲まれてた？

ふたりとも、すごい飲んべえでしたからね(笑)。吉田さんも肝臓でしたっけ？　田中も肝臓なんですよね。おそらく、同じ45だったかな、亡くなったのは？　そういう意味でも、ちょっと似てるんですけどね。

――どれくらいの時間差で亡くなられたんでしたっけ？

たいした時間差はないんですよね。たしか、2〜3年ですかね？

――竜夫さんが亡くなられた当時、特に感じられたことなどがあれば……。

もちろんショックはありましたし、個人的に言うと、酒豪である吉田さんが肝臓で亡くなったって聞いて、うちの酒豪の社長は大丈夫かな、っていう。

ただ、その時すぐには感じなかったことですけど、もう吉田さんのキャラクターが出てこないということで、まぁ九里さんはいらっしゃるし、天野さんとか若い人はいたとしても、タツノコのカラーがどうなるのか、っていうのはすごく、まぁ他人事ながら心配でしたけどね。

――印象に残る作品というと？

『紅三四郎』は修行時代だったので、それは絵を勉強するっていう意識で描いてたと思うんですよね。『キャシャーン』は結構、気持ち的には楽しめたな、という気はするんですけどね。

――最後に、西城さんにとってタツノコプロとは何か、みたいな一言をいただけます？

私のアニメ技術の原点はタツノコ作品のおかげだと思ってますから、今でもとても感謝しています。

（2002年3月22日、於／東京都東久留米市「タマ・プロダクション」）

窪詔之

（くぼ・つぐゆき）

1942年4月8日、台湾台北市出身。終戦後の'46年4月、母方の郷里である鹿児島に引き上げる。中学卒業後、少年工科学校を経て'64年秋にタツノコプロへ。『宇宙エース』の動画、原画、『マッハGoGoGo』オープニングの原画を手掛ける。'66年春にタツノコプロを退社した後、森利夫、山下征二らとスタジオ・ビーズを設立。『レインボー戦隊ロビン』で初作監。以後『魔法使いサリー』『ジョニーサイファー』『ゲゲゲの鬼太郎』『スモーキー・ザ・ベアー』『タイガーマスク』などで作監を務めるが、ビーズは'72年8月に解散。

その後、トップクラフトに移ってからは日米合作アニメが中心となる。『ラストユニコーン』『ホビットの冒険』『フロド』などにキャラデザイン、作画監督として参加。'82年1月にフリーとなり、『ウィンド・イン・ザ・ウィロウ』『コーン・ヘッド』に関わった後、飯塚正樹や西田稔とともにPAC(パシフィック・アニメーション・コーポレーション)を創立。『サンダー・キャッツ』『タイガー・シャークス』などのテレビシリーズで総監督を担当。'89年にはPACの仲間達とウォルトディズニー・アニメーション・ジャパンを発足させた。

幻の劇場映画『金魚姫のシャーベット』のレイアウトを手伝ったのがきっかけとなり、'95年にスタジオぴえろに入社。以後、『ふしぎ遊戯』『たこやきマントマン』『レレレの　天才バカボン』のキャラクターデザイン、作画監督を務めている。

軍隊仕込みのあの調子で面接に臨みましてね

もともと、小さい頃から絵を描く仕事に興味はあったんですが、当時は「物書きや音楽、芸術関係は冷や飯食い」っていうのが、一般的な大人たちの考えでしたからね。そういう仕事で身を立てるなんてことは、とてもじゃないけど恐れ多いという風潮だったんですよ。そこで、親としては勉強しながら身体を鍛えられて、なおかつお小遣いがもらえるっていうことで、親父の友人の武官と話をしましてね。中学を卒業と同時に、僕を少年自衛隊に入れることにしたんです。でも、これが結構な倍率でして、30何倍くらいだったかな。かなりきつかったですよ。僕は昭和17年生まれだから、当時は過渡期というか、戦争を挟んでのまだ発展途上という時期でしょ。みんなが裕福ではなかったから、親としてはみな、子供をそういう所に入れたがったんでしょうね。

―― そこから、どういう経緯でタツノコへ行かれるんですか?

卒業後、僕は千葉にあるロケット実験訓練隊という所に配属されましてね。始めにそこでアメリカ軍の教科書で横文字の勉強をさせられて、ロケ

ットの実地訓練のためにアメリカのテキサスに渡る予定だったんです。今考えれば、ああして英語に馴染んだのが、後々に合作を始めることのきっかけになるんでしょうかね。と、それはともかく、実地訓練が終わってアメリカから帰ってきた場合には、そこでようやく実際の部隊配属が決まることになっていたんです。でも僕は、この1歩手前で辞めてしまったんですよ。実は通信学校時代の仲間で、やはり自衛隊に残らずに辞めた男がいましてね。彼は僕が絵を描いたり、教育課程で配線図を描いて工作のようなことをやっているのを知っていたんです。そこで彼は新聞か何かでタツノコのアニメーター募集記事を見たんだと思うんですけど、「あんた、そっちのほうに進む気はないのかい？」って勧められましてね。そこで僕としては、子供の頃から絵描きの仕事をしたいという思いがありましたから、やはりそちらに進もうと考えて、隊を抜ける決意をしたんです。隊としてはここまで大変なお金を掛けて育て上げたっていうのがあるんで、簡単に抜けられては困ると散々言われましてね。でも、僕の意志は固かったものですから、最後には了承してもらいました。ただ、やっぱりそういう仕事で身を立てるっていうのは難しいことだと思っていたから、半分冷やかしのつもりでタツノコのテストを受けたんですよ。1次はペーパーが送られてきて、それには絵を描いたりといった問題があったんですが、それをなんとかパスしました。次にこちらに上京してきて2次試験の面接を受けたんですが、これも合格して入社が決まったんで、これはじゃあ本気でやってみようかって考えになったんです。それが確か、東京オリンピックの年でしたから1964年ですね。

―― 入社テストは、実際にはどのような内容だったんですか？

1次のペーパーには、宇宙エースの動きを描けとかいった問題もありました。でも、当時の僕はアニメーションの理屈なんてまったく知りませんからね。「左向きの絵なら、右向きのをそのままひっくり返せばいいわけだから……」なんて、窓ガラスに映して描いたりしましたよ(笑)。本当にその頃、僕はアニメーションどころか漫画の知識もありませんでしたから。ディズニーと手塚治虫、あとは横山光輝の名前くらいしか知らないくらいでした。どちらかというと、もともと僕は岩田専太郎といった新聞の挿絵描きや、ペン画で時代ものを描いていた伊藤彦造なんて方向の絵をずっとやってたんです。吉田竜夫さんにしたって、絵物語で挿絵を描いていた頃の絵を何度か見たっていう程度でしたからね。だからタツノコに行ったのだって、特に吉田竜夫だからどうこうっていうわけではないんですよ。2次試験の面接というのもですね、確か面接官として（吉田竜夫）社長と九里（一平）さんと木下（敏治）さんがいたと思うんですが、僕は軍隊仕込みのあの調子で面接に臨みましてね。威勢良く「失礼します！」で面接室に入っていって、お辞儀して回れ右して扉を閉めて、相手が座れというまで立っている。と、そういう強い印象が残ったから、入れてもらえたと思うんですよね。絵がどうのこうのということではなくて(笑)。

どこから手を付けていいんだかもわからないし

―― そういう状態で入社されて、作画のお仕事のほうはすぐにできたんですか？

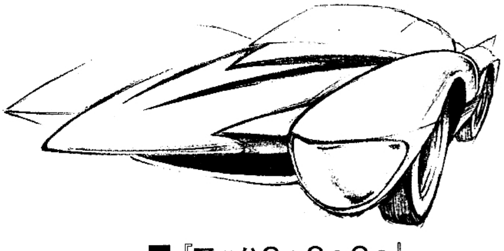
できるわけがないですよ。タツノコで初めての練習課題で、確か水の上をキャラクターが走っていくというカットをやらされたんですが、あれは苦労しましたね。タツノコでやった作業の中で、いちばん苦労した思い出として強烈に残ってます。それに原画スタートの時も、「まずは教えるから」とかいうこともなく、いきなり「明日から描きなさい」っていうんですから。最初は1日中、机の上の白紙を見て過ごしました。別に何も難しいことはない、ごく普通のカットだったと思いますよ。でも、とにかくどこから手を付けていいんだかもわからないし、タイミングやらアクションを作るやら、何をどうすればいいんだか全くなんにもわからない。

―― 当時のタツノコにいた方々のお話を伺うと、ズバ抜けて上手かったのは窪さんだったと、皆さ

ん口を揃えて絶賛されますが。

そんなことはないと思うんですけどね。何がそういう印象に繋がったかというと、たぶん謙虚で真面目な姿勢だったからじゃないかな(笑)。どうせ寮まで歩いて5〜6分の距離だから、夜遅くまで仕事をしていたりしましたから。当時は、残業手当が出るわけでもないですしね。そんな姿をたまたま社長が見たりして、「お、頑張ってるな」って、そういう印象じゃないかな(笑)。もちろん、チャンスをいただければ、それを自分のできる範囲で活かすことを心がけていましたけどね。それに、僕の持論として当時から、「ギャグの絵を描くにも、キッチリとデッサンが取れていなければいけない」という考えがあったので、そういう点でも良い印象を与えていたんだと思います。

――窪さんは、『マッハGoGoGo』のオープニングを担当されてますよね。あの原画は全ておひとりで描かれたんですか？



■『マッハGoGoGo』

たぶんひとりだったんじゃないかな……。実は、オープニングの完成品って、あんまりしっかりと見ていないんですよね。だからどういう流れの映像なのか覚えてないし、仕事の内容の記憶も定かではないんですよ。『マッハ〜』のオープニングを作ったのは、僕がタツノコを辞める直前で、最後の大仕事みたいな感じで臨んだんだと思うんですが。タツノコにいた1年ちょっとの間自体がむしゃらだったから、色々と考えている余裕もなかったですし。たぶん、没頭して一生懸命やってたんじゃないかなあ。で、すぐに辞めちゃったんで、『マッハ』の本編にはまったく関わってないんです。

「冗談じゃない、二度と来ない」なんて思った

――吉田竜夫さんについて、何か印象に残っている出来事などはありますか？

いちばん印象に残っているのは、僕がタツノコを出てからのことですね。ビーズで東映の『レインボー戦隊ロビン』の仕事が一区切りついた時に、ビーズのメンバーで僕と同じくタツノコを出た奴と一緒に、挨拶がてら会社に行ってみたんですよ。だけどまあ、そういう過去があったんで、ある社員の方から「不義理な息子」みたいな感じで、門前払いを食らってしまいましてね。それで、こちらとしても印象を悪くして、「冗談じゃない、二度と来ない」なんて思った所に、社長から声を掛けてもらったんですよ。社長が新しく建てた家に呼ばれましてね、「俺の所の絵をいちばんわかっているのはお前さんだから」って言われて、ご馳走していただいたんです。それで、外に出ていてもいいから手を貸してくれということで、『紅三四郎』に絡むことになったんです。

――タツノコを辞められた時は、どういった状況だったんですか？

僕は山下（誠一）くんと付き合いが深くて、寮にいた頃は夜中に一緒に酒飲んだり、ギターかき鳴らしたりっていう仲間だったんですよ。それで、「いずれは独立して一緒にやろうか」なんて話をしてたんですよね。別にそれは、明日、明後日にどうこうしようといった計画があったわけではなく、その段階では「いつかは」っていう夢みたいなものだったんですよ。でも彼は、タツノコを辞めて岡迫（亘弘）さんのベフプロに出入りするようになったんです。で、しばらくして彼がベフプロも抜けるという段階になって、今度は僕のほうでも放っておけなくなったというか、一緒にやるという話がなんとなくできあがっていったんです。特にタツノコを辞めるつもりもなかったんですけど、まあ、流れの中でそういう状況になってしまったんですよね。つまり、それが『マッハ』のオープニングの頃ですね。仕事しながらも、辞めるんなら次の何かを見つけなきゃいけないってんで、山下くんとふたりでいろんな所を歩き回ったりしてました。で、そういうのが社内でも不評を買ったりして、出社するともう、僕が辞めるのは暗黙の了解みたいな感じにはなってしまってましたね。それで、タツノコを辞めて次に行き着いたのが、朝日フィルムだったんです。最初の半年くらいは

ずっと東映（動画）の仕事をしていたんですけど、暮れ近くになってから『ジョニーサイファー』の話が来ましてね。そこから合作を始めるようになったんです。

今風のキャラクターというのには抵抗ありましたよ

――それからかなり後のことになるんですが、タツノコが制作した劇場版『超時空要塞マクロス』をやられてますね。

あれは、ちょうど合作の合間に空きがある時だったかな。「やってくれ」って頼まれたんですよね。

――『宇宙エース』の頃からやられていて、いまだに現役で今のような作品を描ける方というのは、そんなにいないと思います。最近の絵柄などは大変なんじゃないですか？

〝描く〟ってことに関しては、そこらへんの若い奴には負けないぐらいの気持ちをずっと持ってますからね。「いつでもなんでも描けるようにしておかなければいけない」というのが、この世界で仕事をしていく上での最低条件だと思ってます。これまで描いたことのないような絵が来ても、それを見たままその通りに描くっていうのは当たり前というところがありますからね。それができなきゃお金もらえないでしょう。新しい作品が始まる時には、そのシリーズの作監が描いた絵を下敷きにして、2～3日手慣らしをしてコツをつかめばいいわけです。それに最近は、360度の向きを考えてキャラクターを作っていないというのが多いでしょう。こんなのはありえないってキャラクターもありますから、そこら辺も繰り返し描いて特徴やクセをつかんで、手に覚えさせるんです。でも、最初はやっぱり、いわゆるデッカイ目の今風のキャラクターというのには抵抗ありましたよ。そもそも、僕がぴえろに入るきっかけになったのが、『金魚姫のシャーベット』って作品でしょう。実は、ぴえろに来る1年くらい前にも1度誘われてたんですけど、その時は断ってるんですよ。始めに押切（直之）くんや高江（勇次）くん、上村（修）くんなんかが僕の所に来て、ちょっとやってくれないかって誘われたんですが、キャラクターを見た時に「うわあ、これは勘弁してよ」って感じで一度断ってるんです。電気製品を擬人化したようなキャラクターっていうのも、それ以前に台湾の合作で似たような作品をやっていたのを間近で触れる機会がありそちらに強く馴染んでいたので、どうしても画風が自分に合わないと感じたためですね。でも、その1年後くらいに、ちょうど仕事の区切りがついた時に、ちょっと押切くんたちの所へ訪ねていったら、まだ大変な思いで作業をしていたんですよね。設定が出ていないシーンが結構あったり、これから人員もかなり探さなきゃいけない状況らしくてね。でも、その頃は今風の絵柄に僕みたいなおじさんじゃあ、何もやることはないだろうと思ってたんですけど、「とりあえず設定のないところのレイアウトを中心にやってくれると助かるんだけど」って言われましてね。それなら僕でも絡めるなっていうので、最初はその長編だけのつもりで座ったんですよ。それがまあ、現在まで在籍してて、ギランギランの目玉のキャラクターも抵抗なく描けるようになってますからね(笑)。昔の合作時代の僕を知っている連中なんて、そういうキャラクターを描いているのを見ると、「うわあ、窪さんそんなの描いてるんだ」って言われますよ。今でこそ、そんなこと言われても「何がおかしいんだ？」って言い返せますけど、やっぱりぴえろに来たての時には「俺、こんなの描かなきゃいけないのか……」って思いましたからね。でも、例えば『タイガーマスク』のタッチで描けって言われたら、これも2～3日もらって手慣らしをすれば、今でも全然描けますよ。

この仕事を始めた頃は、僕の人生なんて30代半ばまででいいって、本当に思ってましたからね。そんなことを考えていたから、たぶんその日その日に一生懸命打ち込んで、周りのことが見えないくらい突っ走っていたんだと思います。あまり当時のことが記憶に残っていないというのは、そういうところからかもしれません。

（2002年6月21日、於／東京都武蔵野市）

高橋資祐

（たかはし・もとすけ）
1941年1月11日、宮城県石巻市出身。日本デザインスクールを中退後、第一広告社、文殊デザインスタジオに勤務する。'66年８月、タツノコプロに入社し『ハクション大魔王』『いなかっぺ大将』(演出、原画)、『科学忍者隊ガッチャマン』(原画)、『破裏拳ポリマー』(演出)を担当。また、西岡たかしの後任として作画チーフを務める。『てんとう虫の歌』を最後に、同社を退社。
以後フリーとして『勇者ライディーン』『超電磁ロボ コン・バトラーV』『闘将ダイモス』の演出と原画で活躍。'77年には『超スーパーカー ガッタイガー』で初チーフディレクター。『女王陛下のプティアンジェ』『宇宙魔神ダイケンゴー』のキャラクターデザインを担当する。
'79年春頃、スタジオドオタクを結成。『ニルスのふしぎな旅』以降『うる星やつら』『星銃士ビスマルク』『おそ松くん』『おれは直角』『丸出だめ夫』『NINKU―忍空―』『みどりのマキバオー』『烈火の炎』『東京ミュウミュウ』といった、スタジオぴえろ（現／ぴえろ）作品に演出、原画として参加。一方、タツノコプロの作品には『タイムボカンシリーズ ヤットデタマン』『トンデラハウスの大冒険』『タイムボカンシリーズ 逆転イッパツマン』『パソコントラベル探偵団』『未来警察ウラシマン』などのオープニング原画や、劇場版『超時空要塞マクロス 愛・おぼえていますか』の原画に参加している。

知らないのに、文句ばっか言ってましたよ

デザイン会社に務めてたんですよ、で、当時、草月会館でアニメフェスティバルっていうのが始まったばかりで。「三人の会」とか。あれをたまたま見ましてね、面白いなあ、って。でもデザインってことに関して、自分じゃきついなあ、ってのがあったと思うのね。で、アニメやったら面白そうだ、っていう時にたまたま新聞読んだらね、それがあって、募集してたんです。

――タツノコプロっていう名前はご存じだったんですか？

いや、知らなかったです。ただ、吉田竜夫さんの名前は当然知ってましたけれどね。カミさんもタツノコで知り合って一緒になったんで、聞いてみたんですね。一緒に入ったもんですから、「お前、どういうふうにしてタツノコに入った？」って。そしたらやっぱりね、新聞記事だっていうんですよ。彼女もデザイン学科、日大の美術学科を出て、青山でデザインの仕事をしてたらしいんですね。それがバイトみたいな、給料いっさいもらえないような所らしくて。で、タツノコのそれを見て、来たと。じゃあ同じ新聞読んでたのかなって2～

3日前に話したんです。なんのセクション、っていうのは、たぶん書いてないと思うんですよ。だから面接の時にね、「何を希望か」って聞かれたと思うの。わかんないわけですよ。「彩色ですか、動画ですか」みたいなことを聞かれてもね。わからない(笑)。「いや、入りたいだけだからなんでもいいです」みたいに言ったんじゃないかと思うんですよね。それで、吉田先生のマンガの、絵を真似て描いて見せたんです。デザインやってたんで、そんなに難しくないんですね。ある程度の時間内で、結構な数を描いて。で、上手い奴だってことになったんじゃないですかね(笑)。「雑誌のほうに来ないか」みたいなことをちょっと言われたんですけど、「俺としてはアニメのほうに行きたいんですけど」って言ったのを覚えてますよ。

——昭和41年8月29日入社ということですから、『宇宙エース』の最後のほうの制作をやっていたあたりになるのでしょうか。

『宇宙エース』は全然知らないんです。僕が入った時には、『宇宙エース』は影も形もないっていう意識で。入った時は、『マッハ(GoGoGo)』ですね。あれの制作をやってて。で、それが放映するのかしないのかわからないままやってる状態だったと思うんです。あと、教習期間っていうのがあったんですよ。当時、六郷(晃生)さんっていう部長さんから教えていただいて、何ヵ月か、歩きから走り、そういうのを教えていただいたんです。それが、『宇宙エース』の歩きじゃないかと思うんですよね。それを六郷さんに見せて、で、オーケーだったら次に。

——『マッハ』に入ったのは何話くらいですか?

覚えてないなあ。車か何かを描いたんじゃなかったかという気がするんですよ、車と、手前にふたり、ていう奴じゃなかったかと。マッハ号のあの形がなんとも嫌でね(笑)。今でさえ嫌がると思うんですよ、カーブがね。しかも当時、自分の思った通りの線が出ないでしょ。あとほら、吉田先生のキャラクターっていうのは、アニメ用のキャラクターじゃないわけだから、その時のアニメからすると本当変わってるから、あのへんはアニメーターの中じゃあ不満こいてたからね、みんな(笑)。知らないのに、文句ばっか言ってましたよ。

1本のフィルムは、要するに俺が作るんだ、と

——吉田竜夫さんは、どれくらい作画にタッチされていたんですか?

俺が覚えてるのは、『紅三四郎』かな、原画描いてる時に。で、こんなマンガじゃなくてリアルな形だから、細部は一所懸命リアルに描いてたんですわ。ところが、ダイナミックじゃないんですね、今考えると。そしたら社長が、全部直しを入れて戻ってきてね、それがダイナミックなんですよ、ブルーの線で。やっぱり直されると面白くないじゃないですか。ぐずぐず言うんだけどね、後で考えるとね、要するにこのカットが何を言いたいのか、っていう、こっちは要するに、わかってるんだけどわかってないよね。向こうはダイナミックさを出したいのに、こんなコマコマ小細工しても意味ないってことですよ。だから、一応全部見てるってことじゃないかなあ。間違いなくチェックはしてましたよ、原画を。

——それはシステムとして竜夫さんを通ってるということだったのでしょうか?

それはね、違うと思うんだ。気が向いた時にってことじゃないかと思うんですよ。要するに、抜き打ち検査的な部分もあるんじゃないかなあ。僕は間違いなくね、直されましたから。完璧に。

■『紅三四郎』

——そういう竜夫さんのチェック以外は、各原画マンがばらばらに。

そうです。だからクセがまったく出てる。自分がイメージしたものがみんな正しいと思って、人の言うことを聞かないっていう形だよね。極端に言ったら、このカットのつぎこのカット、それが

ばらばらであっても、知らないみたいなね。1本の流れっていう形が、個々の中にない。わかってでもやろうとしない。その程度の認識。そういうのはありましたよね。逆に上手い下手がわかるっていうか。作監、というシステムが導入されたのは、宮本貞雄さんが来てからだと思うんだよね。あの辺からアニメーションがある程度認められ、いい人材が入りはじめて、淘汰されはじめた頃からじゃないかと思うね。その危機感で変わり始めた。それまで危機感なんかなかったもん。

――作画の統一というのは、演出の要求から出てきたものかと思っていました。鳥海永行さんならこだわりそうな気がするのですが。

それは逆ですよ。演出をやってる人ってのはね、そういうふうには考えない。アニメーションって、普通一般の人が見ると、やっぱり絵じゃないですか。演出よりも、絵のほうが重要視される。ところが演出ってのは、「自分あっての作品だ」っていう意識を持つんです。絵にはこだわりたくないんですよ、逆にね。カット割りなり、タイミングなりで勝負していく。だから、いい例だと思うんだけど、『うる星やつら』が始まった時に、作監が誰もいなかったでしょ、ぴえろに人材が誰もいなくて。で、遠藤（麻未）さんが、直しだけでもやったほうがいいんじゃないかって、一応言ってみたんですよ。そしたら押井（守）さんが「いらない」と。その一言ですね。それがね、演出をいちばん言い表していると思う。作画監督は、極端に言えばいらない。自分が全部作ってるんだっていう意識です。だから、鳥海さんにもそれはあるでしょう。いまだにあるんじゃない？　極端に言ったら、絵描きを認めない。だから、1本のフィルムは、要するに俺が作るんだ、と。作画に頼るという意識は、持ちたくないんだろうね。どんどん侵食されていくっていう不安感があるわけで。自分が意図したものが、作監によってどんどん侵食されていく怖さ。演出っていうのは、相当にその存在が、実体がない。実体がない怖さっていうのは、わからないじゃないけどね。作監の人は「間違いなく自分が作品を作った」っていう意識が相当強いと思うんですよ。演出は、イメージしか言えないからね。で、イメージってのは何かというと、作監の人が全部作り上げるものでしょ。だからやっぱり怖いんですよ。あまりそこにはタッチしないでやってほしい。

――だけどタツノコっていうのは、それ以前に、絵描きが主導型の会社ではあった。

そう。だからそのなかに鳥海さんが例外として入ってきてね。間違いなく、吉田竜夫の存在あっての会社ですから、根底にはありましたよね。「アメコミ的なものがタツノコ」っていうイメージは、どうしても。本質的なタツノコっていうのは、吉田竜夫さんの、そっちのほうがやっぱり本道だっていうイメージが、僕はあるなあ。だから例えば吉田竜夫さんが『みなしごハッチ』をやろうとされても、ちょっと違うんじゃないかなあ、という意識はね、どこかで確実にありましたよね。あと、同じ漫画家が経営してる会社ってことで、虫プロコンプレックスみたいなのがあるわけじゃないですか。だから、向こうがこういうので来るならこっちは撮影で勝負しよう、とか、リアルな色彩にしようとか、特効をどうしようとか、そっちのほうで頑張ってきたっていうのかな、リアルな表現のしかたっていうのか。だからそっちのほうにどんどん寄っていった時期はありますよね。『決断』なんかもひとつの典型だろうし。ようするに絵なんだよね。ドラマとか動きとかっていうのを、絵で見せる方向。

思い入れのない人間がやると駄目だって思った

――演出を目指すようになったのはどの段階からなんですか？

『ガッチャマン』の作画を韓国でやりましたよね。あの時俺、『けろっこデメタン』の演出やりながら、会社に内緒で『ガッチャマン』を作画として手伝ったんですね。進行の佐藤（光雄）くんが、「韓国でやるんだけど、高橋さんもできそうだから」ってことで。当時、布川（ゆうじ）さんが先に韓国に行って、『タマゴン』をやっていたんですが、それもなかなかできない状態で、この上『ガッチャマン』までできるわけがないっていう話だったんですよ。じゃあこっちは逆に、なんとかやってや

ろうじゃないかって、考えたの。どういうシステムでやったらいちばんいいかってね。話を聞いてみると、ばらばらで上がってこない、言うことは聞かないと。じゃあ自分でレイアウトしようと。シートもつけようと。それが始まりなんですね。それでいくと、絵の上手い人はやっぱりいるんですね。で、あ、これはレイアウトでちゃんと芝居付けして、言いたいカットをこっちでちゃんと用意しておけば、ちゃんとしたものが上がるという自信がついたわけです。自分としてはこのシステムが非常に気に入り、性に合って、今でもこのシステムで仕事をさせてもらっています。そういう意味で私にとって韓国の『ガッチャマン』はとても意味のある仕事だったんです。

——『ハクション大魔王』は、ギャグアニメの最終回とは思えないくらい感動的なラストですが、最初から狙っていたのでしょうか。

この作品は笹川（ひろし）監督の手のひらで、みんなが気持ちよく転がりながら創りあげたものなんです（笑）。アニメは各スタッフのモチベーションエキスが必ず作品に表れてくる、という一つの見本のようなものでして、それだけみんなが思い入れてたってことじゃないですかね。同時に作ってるほうも思い入れてて、ギャグっていう意識じゃなかった。別に泣かせようっていう意識じゃなくて、それほどみんなが思い入れしてて、自然にできた、って気がするんですがね、今考えると。本当に、思い入れって凄いよね。『みなしごハッチ』なんかでさ、最終回のナレーションが欲しくて、鳥海尽三さんに「ナレーションが欲しいんだけど」ってお願いしたんですよ。でも、もう終わってるんだね、鳥海さんの頭の中では。だから奥山ってね、当時入ったばかりの文芸の女の子が上がってきたんだけど、思い入れなんにもないから、スッカスカした文章なのね。彼女にしてみりゃ、知らない人にラブレター書くみたいなもんですよ。なんの心もこもってない。あの時は本当、思い入れのない人間がやると、いくら力があっても絶対駄目だって思ったね。だから全部書き替えたの。「苦しかった旅……」ってやつね。するとね、やっぱりそっちのほうがいいわけですよ。心こもってなきゃ駄目なんだな、テクニックじゃないなって思ったね。

40年前にタイムスリップして玉川上水沿いの小道を歩きたい

——竜夫さんご本人との思い出とかっていうのはありますか。

いろいろありますね。作画室チーフの頃に社長室に急に呼ばれたんですよ。もうドキドキしましてね（笑）。で、社長が社内で仕上げた1枚のセル画を見せて「高橋くん！　このカットはセリフがあるのに、セルには閉じ口が描いてあってセリフが言えないじゃないか。なんでこんな初歩のミスをするんだ」と叱られました。当時は口は3枚別々にしてセリフにしていたんです。それで私が「いや、枚数節約のために、開いた口をその閉じ口に乗せて撮影するつもりなんです」（そうすると1枚分のセルが節約できる）と説明すると、大変誉められたことを思い出します。それだけ細かい制作費の部分にも目を光らせていたわけですね。

——竜夫さんに、高橋さんが絵を誉められたとか、評価された部分っていうのは。

『みなしごハッチ』のキャラクター作ってる時に、籠もるじゃないですか。その時、俺も参加してたんですよ。で、俺が描いたのを社長が見て、誰かに「いいだろ？」みたいな、「間違いないだろ」みたいなことをね、言ったのは覚えてますね。

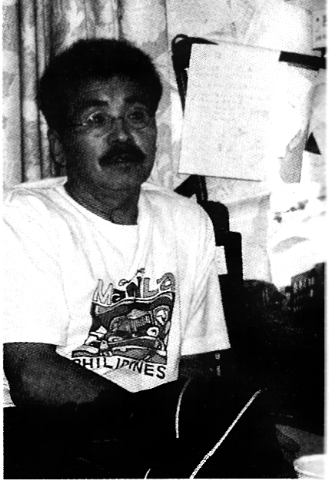
——竜夫さんって、基本的には仕事人間って感じの人なんですか？　それとも、仕事もするけどよく遊ぶ、って感じの人だったんですか？

まあ話には遊ぶって話もあるけど。……社長とは仕事以外のつき合いはなかったわけですから。仕事に対してはとてもピュアな方でしたね。自分のなかでは若気の至りで生意気言ったりして……もし今お会いできたなら、育ててもらったお礼とお詫びがしたいですね。

それともう一度、鷹の台の玉川上水沿いの小道を青い草を踏みしめて、タツノコ作品のために打ち合わせに行けたらいいなぁ（笑）。

（2002年5月21日、於／東京都田無市）

須田正己



（すだ・まさみ）
1943年9月16日、埼玉県出身。'67年にAプロダクションで動画研修を受けた後、タマ・プロダクションへ。『マッハGoGoGo』『おらぁグズラだど』の作画を半年ほど担当し、フリーに。'69年にタツノコプロのオーディションで『紅三四郎』の原画マンに抜擢されて以降、『科学忍者隊ガッチャマン』『破裏拳ポリマー』『宇宙の騎士テッカマン』『ゴワッパー5ゴーダム』などの原画を担当する。
'76年に『マシンハヤブサ』の原画を担当してからは主に東映動画（現／東映アニメーション）作品で活躍。ジャンルを問わず多くの作品の原画、作画監督、キャラクターデザインを担当する。初のキャラクターデザインは『SF西遊記スタージンガー』。
オープニング原画を手がけた作品に『キャンディキャンディ』『Gライタン』『キャッ党忍伝てやんでえ』『クッキングパパ』が、作画監督を手がけた作品に『がんばれ元気』『とんでも戦士ムテキング』『パタリロ!』『昆虫物語みなしごハッチ(新)』『天空戦記シュラト』『銀河英雄伝説』『宇宙の騎士テッカマンブレード』『SLAM DUNK』『地獄先生ぬ～べ～』が、キャラクターデザインと作監を手がけた作品に『地球へ…』『世紀末救世主伝説 北斗の拳』『魁!!男塾』『捜獣戦士サイキック・ウォーズ』『紺碧の艦隊』『マッハGoGoGo(新)』『旭日の艦隊』などがある。

会社って概念なかったね(笑)

――タツノコに入られたきっかけというのは、他の方と同じように、やはり新聞の募集広告だったんですか？

うーん、どうだったかな。どこかで、たまたまそんな話、聞いたんだよね。アニメーションて聞いてもよく意味わからなかったけど、デッサンの勉強なんかはしてたし、面白そうだと思ってね(笑)。雑木林にプレハブのが1棟だけポンとあるところに、試験受けに行ったよ。

――面接はどなたがされたんですか？

今の会長の吉田健二さんかな。その場で人物かなんか（の絵を）描かされたのかなぁ。履歴書も持たずに行って。いや、ホントに(笑)。(描いた絵を見せて）健二さんはなにも言わなかったけど、誰かが「いいんじゃない？」って。それで決まったんですよ。

――入社されてのお仕事はなんだったんですか？

僕は免許持ってたんで、免許持ってない進行の東海林（武）さんたちを車に乗せて、原画の回収するのが仕事だったんですよ。

――免許がないのに制作進行やってたんですか？

そう(笑)。それから運転手ってことで、吉田竜夫さんのお子さんたちの幼稚園の送り迎えとか、いろいろやってたの。九里一平さん乗せたこともあったかな。今、考えてみると、あの頃は会社って概念なかったね(笑)。みんな、身内みたいな感じでね。

—— それじゃ、竜夫さんとの面識はあったわけですか？

入社の時は全然なかったけどね。僕、仕事の後にドラム習ってたんですよ。3年ぐらいすでにやっていてね、プロになってジャズやろうと思ってたから。社長も楽器やってたので、それでバンドやろうって話になって、社長の家で練習することになったのね。

—— 絵を描く試験を受けて入ったのに、その間は絵は全然描けないまま？

うん。描くチャンスが無いので不満ばかり言ってたらしいよ。その頃、僕は『宇宙エース』とか見てね、こんなの簡単に描けるよって言ってたらしい。でも、やっぱり、絵を描かせてくれないからつまんなくなってね(笑)。それでタツノコを離れるんだけど……。

—— その後、Aプロに行かれたんですよね？

そうだね。まだタツノコにいた頃だけど、Aプロがアニメーターの募集してるって聞いて、それで(試験を受けに)行ったんだよね。百何十人かな、すごい人数が来てね。

—— 『オバQ』やってるくらいの時期ですよね？　まだAプロも黎明期で。

そうそう。それで、試験では好きな絵でいいから、なんか描いてって。僕を入れて、受かったのは4人ですよ。アニメーターとして、僕のなにがよかったかわからないけど。それでAプロ入ったのはいいけど、歩きとかを練習で描かされて。しばらくして、他のスタジオに引き抜かれたんですよ。

—— その次にタマ・プロ(当時はタマスタジオ)に行かれるんですよね？　それはどういう流れで？

タツノコ時代の知り合いですね。それで『マッハGoGoGo』では初めてタツノコ作品の絵を描くことになってね。

動画の線が拾えないんですよ

—— 当時、タツノコの絵を描かれてみてどうでした？　難しいとか？

僕はあまり抵抗なかったんですよ、他、あまり知らないから(笑)。

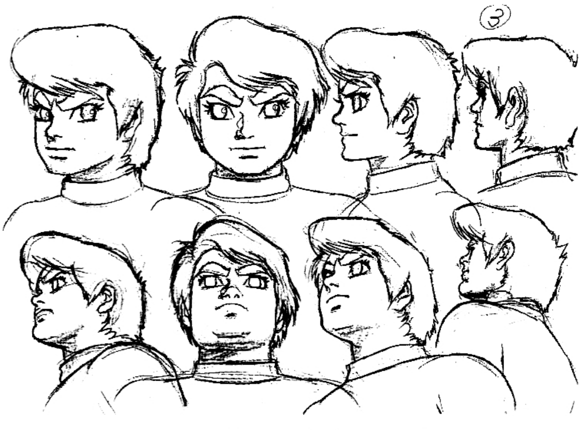
『マッハ』の途中からフリーになったんだけど、円満退職だから、タマ・プロ経由で仕事をやってて。ジャックと同じビルに、アニメートって野島進さんのグループがあってそこにいて、『グズラ』『ドカチン』もやってましたね。

—— 続いて『紅三四郎』にも参加されてますよね？

『紅三四郎』はね、あんな(リアル志向の)絵だから、描ける人間がタツノコ社内にもいなくて、描けるヤツを探せってオーディションみたいなのがあってね。タツノコの仕事をやってたから、野島さんのところにもその話が来たのね。それで描いてみたら、僕の絵だけが気に入られてね。

—— それっていうのは、竜夫さんのイメージみたいなものがあって、それに合わせて描いてほしいというような注文だったんですか？

いや、コンテが来て、その中のこのシーンを描いてみろとか、そういうことだったね。どんな絵を描いたかは記憶にないんだけど(笑)。そしたら、タツノコに入ってやらないかって話が来たりしてね。天野(嘉孝/当時)くんなんかはいたけど、でも、ああいう絵を描ける人って、なかなかいな



■『紅三四郎』紅三四郎

くて、タツノコから受けてやってたタマ・プロとかも、四苦八苦してた頃ですからね。

――『マッハGoGoGo』という雛形があったにせよ、『紅三四郎』でまたかなりリアルな絵になったわけですけど、須田さんはフリーで社外でやられていたということで、タツノコ社内の作画の様子のこととかは気にされていたんですか？ 須田さんは須田さんのペースでやってたんですか？

そう。ただ、人の原画の動画もやってたから、みんなが描いている原画は見てたけどね。当時はなんでもやってたから。

――当時、お仕事をされる際に、なにかお手本はあったんですか？

1回だけありますよ。『紅三四郎』で、木村圭市郎さんの動画をやったんですよ。あの人の絵を見た時、びっくりしたね。ものすごく迫力あるのね。原画枚数も少ないんだけど、動きが大きいんですよ。動画やってて、動画の線が拾えないんですよ。具体的に覚えてるのは、三四郎が木の十字架かなんかを背負って、ボロボロになって歩いてるんですよ。これがものすごい迫力。今までやってきたことと違うぞ、信じられないものを見たぞって感覚でね。動きで驚いたのはそれだね。あれから僕も変わったかもしれない。粗い絵なんですけど、だから、こっちも原画描くような感じで（動画の線を）拾ってくわけです。

――当時、木村さんとの面識はあったんですか？

『紅三四郎』の途中かな、家に遊びに来たこともありますよ。

――続いて『ハクション大魔王』になりますけど、演出をしてみようとは思われなかったのですか？

そうだね。とにかく描くのが面白くて夢中だったからね。それに時間の拘束されるのが嫌だったから。『ガッチャマン』の最後の頃とか、（演出も）面白いかなとも思ったけどね。

――『ガッチャマン』の前の年だと『決断』にも参加されてますよね？

あ、あれは、とんでもない仕事で、写真描いてるみたいなね(笑)。あれはトレスマシンを使うからタッチも出せるっていうんで、ザラ紙あるでしょ？ あれを動画用紙の下に敷いて、わざと編目みたいなタッチを出したりね。面白がってやってたね。

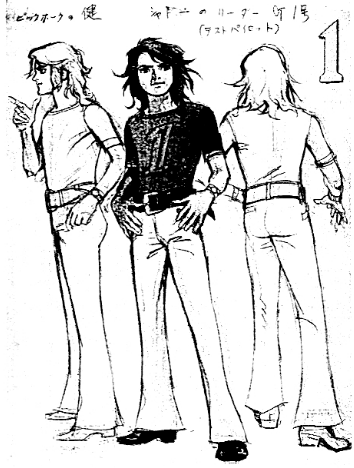
――あれは実録ものだから、毎回、設定が山のように届けられたりとかあったんですか？

……うーん、どうかな？ とにかく凄い作品だったけどね、なんで、これをアニメーションにしたんだろうって思ってた(笑)。

勝手に成長させるの好きなんですよ

――『ガッチャマン』の頃で印象深いことは？

鳥海（永行）さんと（組んで）よくやったよね。たまに他の人だと神経つかったりしてね。



■『科学忍者隊ガッチャマン』大鷲の健

――鳥海さんとの率が高いのは、鳥海さんが須田さんを指名してたということなんですかね？

うん。フィーリングが合っていたと思うね。なぜかずっとやってた気がする(笑)。お互い、向こうがなんか言えば、こっちもなんか言うみたいに、カタにはまった仕事じゃなかったから、面白かったのかもしれない。

――当時、タツノコの原画マンのレベルって高かったと思うんですけど、その中にあっても、『ガッチャマン』の作画クオリティの高さって、8割くらいは須田さんに負ってるんじゃないかと思うんですけど。

いや、わかんないです(笑)。とにかく夢中でやったってだけで。面白かったんだよね。この前、ある取材でも言ったんだけど、これまでの仕事の中で、なにが面白かったかというと、『ガッチャマン』に出会った時と、『北斗の拳』に出会った時。自分がやりたかったことが、まさにここにあるんじゃないかって。いろいろ仕事やってきても、こ

れは滅多にないことですよ。『ガッチャマン』の時は家でやってて、『北斗の拳』の時は、サラリーマンみたいにずっと東映動画に詰めてやってたけど、それくらい面白かったってことですよね。

――『北斗の拳』の時は作画監督やらないといけないから、他人の絵を直す苦労もあったわけですよね？

東映のシステムとしては、（作画監督の責任は）初めの6本なんですよ。1ローテーションする間に（キャラクターを）なんとか近づけさせようと思うんだけど、あれだけリアルなものになってくると難しいんだよね。タツノコの時は、他人のを見るなんてことなかったからねえ。直すなんて考えたこともない。東映と関わるようになって、長編の『地球へ…』からですよ。人の絵を見るようになったのは。

――『マシンハヤブサ』の時はご自身で原画も描いているから、あんまり関係ない？

うん。自分のは自分で（原画も）やるって感じでやってたから。

――『ガッチャマン』や『北斗の拳』などの長いシリーズだと、キャラクターがどんどん成長していくというか、絵が変わっていきますよね？

勝手に成長させるの好きなんですよ(笑)。でも、長いシリーズだと自然にそうなりますよ。『あしたのジョー』だってそうでしょ？ ただ、まわりの人たちは大変だろうけど、（変わると）みんな、それについていくのが面白いよね。競うようにして。

――『ガッチャマン』で「面白いな」と思ったのは、1話を見た時から、そう感じられていたんですか？

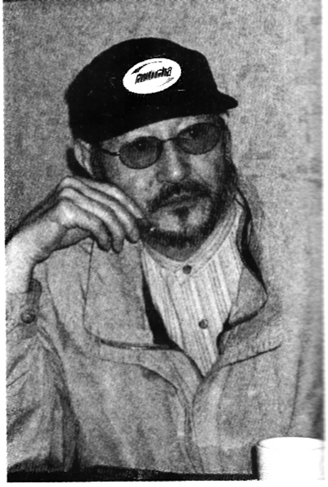
社長が描いた絵を見た時に、これはいい！ って思った。作品が始まる前、最初にみんなが集まって、まだ色もついてない準備稿の絵を見たのね。それを見て、動いてる姿というのがイメージが出てくるんですよ。気持ちよさとか、そこに湧き起こるところがあるんですよ。

――『ポリマー』『テッカマン』が終わった頃にタツノコを離れて、主に東映動画に活躍の場を移されたわけですけど、両者を見て初めてわかる、タツノコの特性みたいなことってありました？

それはありますよ。タツノコの場合、吉田竜夫さんが描いてる、立体、デッサン、なんだよね。それがベースになってる。東映動画は線で捉える感じがしたよね。竜夫さんはね、亡くなる1年前に、どうしてもって無理矢理誘われて一緒に人間ドックに検査に行ったんですよ。社長はなんでもなかったんだけど、逆に僕のほうがバリウム飲んだ時、医者に「あれっ？」って言われてドキッとしたくらいでね。結果、僕は何事もなかったんだけど。竜夫さんがね……やっぱりとてもショックだったね。

■『宇宙の騎士テッカマン』南　城二

二宮常雄



（にのみや・つねお）
1940年5月30日、東京都出身。'67年にピープロに入社し『ハリスの旋風』の動画を担当。その後、アニマスに移籍し『ドカチン』で初原画を手掛け、以降タツノコ作品の常連に。『ハクション大魔王』の途中からフリーとなり、虫プロの合作に参加する一方、『いなかっぺ大将』で原画（オープニングも含む）、『科学忍者隊ガッチャマン』でも原画を担当する。'74年には宮本貞雄の推薦で『破裏拳ポリマー』の作監を務める。以後、『宇宙の騎士テッカマン』(原画、作画監督)、『ゴワッパー5ゴーダム』『タイムボカン』(作画監督)、『合身戦隊メカンダーロボ』などに参加。『ザ☆ウルトラマン』で初のキャラクターデザインを担当し、以後『伝説巨神イデオン』『タイムボカンシリーズ　ヤットデタマン』『ダッシュ勝平』『白い牙　ホワイトファング物語』などで作画監督として活躍する。
'82年には自ら二宮事務所を設立。『タイムボカンシリーズ　逆転イッパツマン』『タイムボカンシリーズ　イタダキマン』(作監)、『ななこSOS』『超攻速ガルビオン』(作画監督)、『機甲界ガリアン』(オープニング・エンディング、作監)を担当して解散。
'85年からはフリーとして東映動画（現／東映アニメーション）作品に参加。『メイプルタウン物語』のキャラクターデザインと作画監督を担当し、続く『新メイプルタウン物語　パームタウン編』『ビックリマン』には作画監督として参加。'88年以後は、スタジオぴえろ（現／ぴえろ）に所属し『まじかるハット』『からくり剣豪伝ムサシロード』『ノンタンといっしょ』『疾風アイアンリーガー』『ソニック★ザ★ヘッジホッグ』『中華一番!』にキャラクターデザインを提供している。
'01年10月からは再びフリーとなり『しあわせソウのオコジョさん』(第一原画)などに参加。最新作は『アンボット戦記五九』のキャラクターデザイン。

刺激的な出会いってあるじゃないですか

ピープロの前に、下請けの時期があって、名前忘れたんだけど、本当に少人数でやってる、いわゆるピープロの下請け。仕上げ専門の会社で、そこがスタートで、最初はトレースから。

――それ以前には、絵の勉強とかされてたんですか？

してない。いろんな仕事やってたからね。俺の場合は（トレス用のペンで）セルをギーギーほじくっちゃってさ、使いもんになんなくてね、制作進行の仕事に回されることになった。でも絵を描きたいから、しょうがないから辞めて、ピープロに入れてもらって。その頃やってたのが『ハリスの旋風』の最終のほうで、動画をワンカットやったんだよ。で、中割りもなにもわかんなかったからさ、ちょっとしょんぼりしちゃうシーンだったんだけど、一応キャラクターの性格を読んで、ちょっと外した画にしたんだよね。そしたらね、それが生きてたんだよ。

――それが認められて、動画から第二原画に？

ちょっと覚えてないねえ。でもワンカットやった時にね、意外と良かった、ていうのがあってね、

面白かったな。なんかこう変わったアニメーションができてさ。

——その後ジャックに行かれてますが、きっかけはどなたが？

ピープロにいた時に、福田（三郎）さんっていう人に引っ張られたのかな。福田さんと一緒に、1回フリーになったかもしれない。俺がピープロに不満があったんじゃなくって、むしろ福田さんが何かアクションを起こそうと思ってて、たまたま誘われて、「じゃあやろうか」っていう。で、そこから、坂本（雄作）さんのグループに呼ばれたのかな。福田さんがそこを知ってて、一緒に入ったんですよ。遠藤（克己）くんも福田さんに誘われたんだと思います。後でアニマスを作った時には、福田さんが最初はトップだったんだけど、それから抜けて、遠藤くんがトップに。で俺がサブになった。ほかには、中村泰敏と、榎本（久雄）くん。あと女の子がいたな。

——アニマスに移ってすぐ、タツノコの仕事が来てたんでしょうか？

ああ、『ドカチン』があったんじゃないかなあ。俺と遠藤くんで原画をやって、タツノコの演出部からのチェックがオーケーなら動画をやる。ちょうどその頃ね、山本繁さんが、『巨人の星』とか、そういうのをやってたのを見たことがあるんだな。絵コンテ描いてたりしてね。うまかったよ。びっくりしたね。すごいうまい人がいるなって。繁さんなんか帰った後にそこへ行って、原画を見させてもらったりしてたね。刺激的な出会いってあるじゃないですか。当時山本さんと出会えたのは、俺にとってものすごく大きい。

——ピープロとタツノコの作品では、かなり毛色が違いますが、どうでしたか。

とにかくさ、キャラクター見て「楽しそうだ」って思えば、やりたくなるよね。そんなに経験があるわけじゃないから、どういう傾向が合うとか、俺自身はわからないんだよね。だけど、元絵の面白さと、繁さんが描いた原画の面白さ、楽しさ。それを見て、「この作品やってみたいな」という気持ちにさせてもらったよね。キャラクターの持ってる生き生きしたものとかを、枚数を使わず、面白く見せてしまう。山本さんは動かしたらやっぱり、細かく動かす人だと思うんだよね。ディズニーなわけでしょ。基本的にはフルアニメーション志向っていう。でもテレビアニメに要求された動かし方をできる人だよね。枚数使わずに。だからそれはやっぱり、俺もその動きの面白さとかをもらったんじゃないかと思うんだよね。とにかく上手かった。本当に俺の出会いの中ではね、山本繁さん、それから後の宮本貞雄さん、その出会いが大きいね。

内緒でアルバイト やったのが 『ハクション大魔王』

——タツノコの中の人では、どの方と最初に出会ってるんでしょうか？

関係者で言うと、やっぱり笹川さんだろうね。1回ね、坂本さんがジャックのメンバーを引き連れて、虫プロへ行って合作をやったんだよね。『リラクタント・ドラゴン』かな？　その時、アニマスは行かなかったんだけど、俺だけはステップ、ジャンプしたいんでね、ひとりで行ったんですよ。グループの中だけでいると、どうしても刺激がないからね。うまくなんないと食えない、と俺は思ってるから。で、そこでもってね、俺と野部（駿夫）さんが内緒でアルバイトやったのが、『ハクション大魔王』だったの。たぶん野部さんに誘われたと思うんですけど。で、じゃあやろうか、っていうんで、15分を半分ずつ、7分半やった。

——その後、二宮さんはスタジオを出られて、いきなり自宅作業に？

そうそう。『ハクション』の終わりか、『いなかっぺ大将』の最初の頃かもしれないねえ。『いなかっぺ』のオープニング、エンディングはたぶん全部俺だと思うんだ。違ったかなあ？　う〜ん、覚えてないなあ。やったような気もするんだけど。あの、エンディングでさ、波のシーンがあるやつね。あれはやってるはずなんだよ。あれは1本目？

——そうですね。

ああ、だったらオープニングも1本目からやってるかもしれない。

——実際の柔道の型とかっていうのは、意識されたんですか？

もちろんありますよね。その時に、型っていうのは、もう当然入ってるからね。昔はそういう、質実剛健さも含めてさ、柔道・剣道ってのは今の人よりは頭の中に入ってるわけですよ。時代劇で育ってるからそれはわかる。本を見なくても浮かんでくるよね。

――大ちゃんの体格で柔道の技をかける作画の難しさはありましたか？

それはあるでしょうね。そこはまあ、アニメーションだから、背丈の違う面白さ。ベースはやっぱり、奥襟をつかんでどうのこうのっていうのがあったとしたらね、それはやるんだけど、その時にね、無理な段差ってあるわけで。それをね、無理なように描くわけでしょ。無理な面白さってあるわけだから。そこを出してやる。「キャット空中3回転」とかも含めて、難しいもんではないよね。想像したものを絵にするわけだからさ、現実と違ってもかまわないわけでね。感情の受け方、出し方で、スピードや表情が変わったりさ、いろいろあるでしょ。

『いなかっぺ』は絶対外せないです

――『いなかっぺ』の後、『ガッチャマン』に参加する時に、かなり傾向の違うこの作品に、二宮さんは自ら志願されたということなんですが。

そもそも、幅を広げようという気持ちがあってね。もともと、リアルもの描けるんじゃないかなっていう自信が自分ではあったんだけど、まだやったことないしということで。宮本さんが教えてくれるしね。ていうことで志願した。タツノコ社内では、不安があったと思うんだよね。描けるかなって。多分『いなかっぺ』の時も、笹川（ひろし）さんはそういう不安は持ってらしたんじゃないかと思う。でも、意外と評価としては良かった。笹川さんの覚えもめでたかったというね、印象は持ってますよ。『いなかっぺ』は俺の出世作だと思ってる。だから、俺がやった何十本かのうちの、半分から後はね、結構充実した感じで、『いなかっぺ』の世界に感情移入できてさ、作品ができたんじゃないかと思うね。大左エ門になり切った、っていうかね。西なら西になり切った、芝居づけができた、と思ってる。だから俺自身はこの『いなかっぺ』は絶対外せないです。今まで『ドカチン』にしても『ハクション』にしてもさ、師匠の山本さんがいてさ、そのひとを見様見真似で覚えたんだけど、それはやっぱり、『いなかっぺ』の充実した感じとは違うんだよな。うまく描こう描こうと思って、山本さんの技術を少しでも取れればいいなと思ってたんだけど、そうじゃなくてこれは自分として、自分の意志で描き込んだっていうかね。それがあったから次のステップに挑戦してみようというのがあったな。それと、自分の技術の幅を広げるためにね、リアルものを覚えようと思ったんですよね。宮本さんのところにいて良かったんだね。

――宮本さんのところに、ご挨拶のようなことは？

たぶんあったと思うけどね。やらしてもらいますんでよろしく、みたいなのはあったと思うよ。宮本さんも俺も昔の人だから、そういう礼節は重んじる、というのはあったと思うよ。

――最初はかなり苦労された？

苦労したよ。自分では第1回を半パート受けて、1話だか2話だか、4話くらいか、忘れたけど、自分では描けてるんじゃないかなあと思ってたんだけどね。全部直ってた(笑)。それで、とてもじゃないけどこれは、気持ちを入れ替えないと駄目だと思ってね、宮本さんに挑戦する気持ちで。『ガッチャマン』は、『いなかっぺ』みたいに自分のものにできたと思える感覚はないな。ない。

――前に伺った時にね、宮本さんも、二宮さんの努力型の姿勢をすごく評価されていたんで、よほど印象に残られたんじゃないかと。

あの人は、そういう人なんだよ。絵の上手い下手は天分だったりするじゃないですか。ハートね。みんなで作り上げていく、ハートが感じられれば、下手な人でもね、教えてくれるって。下手な上に生意気だったりしたらもう(笑)。「おまえやんなくていい、辞めなさい」とかね。言う人なんだ、あの人は。

「二宮アニメはあるから、二宮アニメを目指せ」って

――吉田竜夫さんとの出会いというのはどのへんになるんですか？

吉田さんはね、直接会ったのは『ポリマー』かな。俺が外注から会社の中に入ったから、指導かたがたね。ちょうど宮本さんが抜ける時でしたね。

――初総作監の時の印象はどうでしたか？

作監ていうのは、基本的には我々が目指しているところだけどね、でもいざやってみると、やっぱり大変なんだよ。で、いいところはさ、上手い人の絵を見れるわけ、いろいろと。でも、上手い人がいれば、そうじゃない人もいるわけだから、そうすると直すのに大変でね。両方あるよね。原画描いてる暇なんか全然ない。たぶん直す苦労のほうが大きかっただろうね。泊まり込みが多かったからね。

■『破裏拳ポリマー』車　錠

――二宮さんとしては『ポリマー』で目指したものっていうのはあったんでしょうか？

右も左もわかんない時でね。ただ俺は、個人的には車探偵長が好きでね（笑）。あの青野武さんの声のアドリブがすばらしかったね。あの人には思い入れが入ってたね。車探偵長のカットは作画を担当してみたかった。もっと俺らしいものが描けたんじゃないかと思う。作監やってる中でも、自分が原画やってたらどうするか、てことを考えながら直したよね。来たものをそのまま修正して、じゃないよね。

――格闘シーンが、非常にメリハリがあるように感じられますが、意識されていたのでしょうか？

個人的に、何かを手本にしてメリハリを、っていうのはないんだよね。作品の、キャラクターの世界を見ながらね、自分なりに考えていく。笹川さんに戻ると、笹川さんに言っていただいた言葉っていうのが、俺がちょっと自信のない時、たぶん『いなかっぺ』の時だと思うんだけど、「二宮アニメはある」って言うんだよね。それがすごいきっかけになってさ。自信を持って。だから笹川さんは覚えてるかどうかわからないけど、「二宮アニメはあるから、二宮アニメを目指せ」って言ってくれたのね。自分にそういったものがあるんだ、って思ってね。今まで以上に個性を出すように。やりすぎる場合もあるけどね（笑）。だから笹川さんの一言が、俺にとってはすごく大きかった。

――『いなかっぺ』『ガッチャマン』『ポリマー』の時期っていうのは、アニメーター二宮常雄としては、どういう位置づけになりますか？

その時期は、タツノコ以外ってやってないんだよね。だからまあ、俺にとっては成長期だったと思うよ。

――後に他社の作品と関わった時に、あらためてタツノコの個性を感じられたようなことは？

それはあるよ。具体的に言うと、ヒューマン。土の香りとかね、ヒューマン、ヒューマニズムね。人間を描いてるっていうかね。そこに俺の作画と、タツノコのカラーがシンクロする部分があるんだと思うね。タツノコにいた時期っていうのは、いろんな意味で、素晴らしい出会いもあったし、素晴しい作品もあったし、これは基本になってると思うな。だからよく、賢いとかカッコいいとか言われるけれど、やっぱり、ハートだと思うね。それははっきり言って、今の作品にはあまりね。絵は上手いんだけど、肌を切った時に赤い血が出るかな、っていう、そんな気がしちゃうね。これはもう、切ったら赤い血が出ますよ。タツノコの作品は。そこが俺には合ったんだろうね、昔の人間ですからね。

（2002年5月17日、於／東京都三鷹市）

湖川友謙

（こがわ・とものり）

1950年1月3日、北海道出身。71年に東京ムービーに入社し『巨人の星』の動画、原画を手がけた後、退社。AC企画、ベンゲシャンを経てフリーに。71年『決断』に参加したのをきっかけに『樫の木モック』『科学忍者隊ガッチャマン』『破裏拳ポリマー』『宇宙の騎士テッカマン』『ゴワッパー5ゴーダム』など、一連のタツノコ作品に原画で参加。77年以降は『超人戦隊バラタック』『激走ルーベンカイザー』の作画監督を担当。『さらば宇宙戦艦ヤマト　愛の戦士たち』の総作画監督と掛け持ちする形で、『無敵鋼人ダイターン3』の敵キャラクターを小国一和のペンネームでデザイン。テレビ版『銀河鉄道999』ではキャラクターデザインと、初期の総作画監督を担当する。"79年に作画スタジオ(有)ビーボォーを設立。クオリティの高いスタジオとして名を馳せ、多くのクリエーターを輩出した。代表作は『伝説巨神イデオン』『戦闘メカザブングル』『聖戦士ダンバイン』(以上、キャラクターデザイン、作画監督)。『重戦機エルガイム』(アニメーションディレクター)、『超時空騎団サザンクロス』(キャラクターデザイン、作画監督)。原作を手がけたOVA作品に『グリード』『クール・クール・バイ』(キャラクターデザイン、作画監督)がある。また、音楽と映像のシンクロが見事な『炎のアルペンローゼ　ジュディ&ランディ』(オープニング)や、CM『ナガイの海苔』などの仕事も忘れ難い。

'91年、タツノコプロで『宇宙の騎士テッカマンブレード』のキャラクターデザインに参加後、'92年にNEOXの顧問に就任。『CASSHAN』『無責任艦長タイラー』(作画監督)、『メダロット』(絵コンテ)に参加する。近年はNEOXで斬新な新作を準備中、その発表が待たれる。

あっ、なんか縁かなって（笑）

僕が中学の2年の時ね。田舎の家がちょっと高台にあるんですよ、それで帰ってくる時に、（家の屋根を見たら）あっ、アンテナが立ってる！　って。嬉しくてね。僕は今でもテレビっ子ですから（笑）。家に着くとテレビがあるんですよ。足がついて、幕がかかって、なつかしいやつ。そのテレビで最初にスイッチを点けた時に、『忍者部隊月光』やってたんですよ。俺ね、こういう仕事やり始めてね、あっ、なんか縁かなって（笑）。いや、思った。

――いい話だ（笑）。その時は吉田竜夫って名前は知ってたんですか？

知らないです、全然。知るわけないじゃない。だって、その頃は『鉄人28号』か『伊賀の影丸』ですからね。

――元々、絵描き志望だったんですか？

高2まではね。それからは彫塑家志望で、武蔵美の彫塑科を落ちた。

――鷹の台の近くですね（笑）。

後になってタツノコの仕事で打ち合わせに行ったらね、なんだこれ、どっかで見たことある。お

いおい、あの嫌な思い出だとか思いながら、通っていたんです。それでね、大学がナンボのもんぞって、本気でアニメやろうと思いだした時には、もう、堂々と行ってましたけどね(笑)。

――そもそもアニメーションの仕事をされるきっかけというのは？

俺の知り合いが、アニメやりたいとか言い出して、東京ムービーを受けに行ってね。俺も行ってもいいのかな？　って聞いたら、いいっていうから、ついていったんです。飛雄馬の絵を描いて色もつけて、持ってったんですよ。

――一応、『巨人の星』をやってる会社だとわかって行ったわけですよね？

もちろんです。飛雄馬を描いて行ったくらいですから。でも『巨人の星』はたまに観ていて、うまくない絵だなぁと思っていた程度でした(笑)。

――えー(笑)、それでお友達についていって。

うん、それで30～40人ぐらいいたんですよ。でね、採ったのは4人か5人ぐらい。6月1日からいらっしゃいっていう、ハガキをもらったんだけど、気分が優れなくてね、気分っていうかその……6月1日は欠勤で2日に遅刻で行きました。なぜって興味はないし、どんなものか一日見学気分でしたからね(笑)。しかし不思議なもので、仕事のアップだからお前も仕事やれって言われて、3日目から動画本番やってましたよ(笑)。

――その時の新人は皆さん、『巨人の星』に入られたんですか？　やはり動画で？

そうです。なんも教えてくれないし、失敗ばかりでね。最初にやった動画は、大判の、左門豊作がバットをこうしてるヤツで。それを見た当時の作監の遠藤(政治)さんに呼ばれて、お前原画やれって言われたんですよ。原画って、俺、動画も知らないし、前知識ゼロだしさぁ。イヤですって、そん時は断ったんですが、2～3カ月後には原画をやってました。

俺なんか、勉強しながらでしょ

――タツノコ作品で最初にやられたのは？

『決断』です。

――タツノコと仕事をされるきっかけというのは？

東京ムービーの時に、夕ご飯で定食屋さんに行くと、いっつも『紅三四郎』の時間帯だったんです。で、『巨人の星』よりいいなって。それがタツノコでやってるって知らないんですね。入ってみて、「あっ、ここでやってたんだ、『紅三四郎』」と思った。

――あれ、じゃあ、タツノコに行かれた動機は、元々、『紅三四郎』じゃないんですね。

全然違いますよ。『巨人の星』で僕が原画やってる時に、他の原画マンが僕のことを誘って、抜けて一緒に(タツノコの仕事を)やらないかって。ちゃんとした原画は俺が教えてやるって言って。だけど、いい加減なヤツですぐにいなくなっちゃって、要するに僕がやんなきゃいけなくなったわけですよ、『巨人の星』で原画やったって、たかが知れてますよね。動画やりながらですからね。

――『決断』は難しい絵で、徹夜徹夜でも追いつかなくなって、アフレコには絵がないのが当たり前とか、かなり大変な状況だったらしいんですけど、湖川さんはどれくらいのペースで仕事をされていたんですか？　1話分丸々請けたとか？

いや、丸々じゃないと思いますよ。ただ、一晩で30(カット)、原画を上げたことがあるんですよ。そしたら進行さんに、こいつは30上げれるんだって思われちゃうんですよ。で、もっともっとって言われることがよくあって。俺なんか、勉強しながらでしょ。アニメ業界のこと、技術のこと、なんも知らなかったですよ。

――その後の『ガッチャマン』、間に『樫の木モック』がありますけど、その時期にベンゲシャンってスタジオを作られてますよね。

うん。だけど、なんでそうなったのか、(結成の経緯は)もう全然覚えてないですけどねぇ。

――『ガッチャマン』の時に覚えてらっしゃることとは？　たとえば総監督の鳥海永行さんのこととか。

あのね、鳥さん、お酒も飲んだこともないからわかんないんだけど、すごくいい人らしいんだ。初めてあの人に会ったのは、モーゼルを……セスナ機が……。

――第46話「死の谷のガッチャマン」じゃない

ですか？

あぁ、そういうの！　それが小鳥さん（鳥海永行）が演出だったの。誰が監督でとかね、全然興味ないですから。『ガッチャマン』の頃はいい原画を描けば、コンテを越えるなぁ、ぐらいしかまだわかんないですよ。

――鳥海さんのイメージというのは？　厳しそうな？

最初はね、「俺、ここに来たの、まずかったのかなぁ」ってぐらいに、こうだったんですよ。印象が（厳しい）。で、打ち合わせして「じゃ、ここは、もうちっとこんなふうな絵でもいいですか？」って聞いても、「あぁ、いいよ」とかつれない感じで。で、後半の打ち合わせ行った時に、「あ、お待ちしてました」とか言って。

――それはもう、絵の仕上がりを見て態度が変わったと。

そうみたいです。僕、ポカは別にして、リテークってあんまりないんですけど、その小鳥さんから、リテークが来たことがあんですよ。火山の爆発で。これは火山の爆発じゃないとかってリテークが来て。あの映画の火山の爆発がいいとか書いてあったんですけど。俺だってさぁ、まだアニメ始めたばかりで、必死に考えてやったのにね。で、「俺はアニメーションってこういうふうに思うから、こういう爆発を考えて、『ガッチャマン』にはこれがすごく合ってるような気がして作ったんです」って書いたら、音沙汰なし。

――それからどうなったんですか？　リテークにはならずに？

もう、そのままです。

――そ、そうなんですか（笑）。

それ以来、彼からリテークっていう言葉が消えてしまった（笑）。

――作画でいうと、『ガッチャマン』では宮本貞雄さんが作監で立たれてますけど、面識はあったんですか？

『樫の木モック』の時に、1回だけ行ったことがあるんです。作監の部屋に。そしたら「キャラクターをつかまえるには、キャラ表を下にして、上から何回も描いてみることだよ」とかって。そうか、似てたほうがいいもんなぁと思いながら、1回もやってないですけど（笑）。

――『決断』も宮本さんが作監ですよね。

そうです。それで僕は『巨人の星』みたいな身体描いてたわけだから。でね、「プロレスラーではありません」とか言われて（笑）。なるほどそうだ、この人の絵を見ると。人間はこんな感じだよなって。だから、上手い人なんだろうなぁって思ってて、この人の弟子になろうかなぁなんて思ってたんですよ、ホントは。その頃、師匠が欲しいと思ってた時期なんでね。ただ、結局、甘えですからね。宮本さんにしても欠点を見てしまうと、完璧を求める俺としては、当時でもう師ではなくなってしまった（笑）。

――湖川さんの絵というと、あの特徴的なあおりがあるんですが、あれはどういうきっかけで？

僕はね、リアルな絵が描きたくて描きたくて。人間の顔、全部こう描いて、斜めに線を引っ張って、垂直に横顔、正面顔を描くと、自然とあおってるわけですよ。鼻の天辺と目と、口と、この、その線上に描かなきゃまずいわけでしょ。もう、とんでもない絵になんですよ。若い時はそんなことやってたんです、若い時は。それで、見つけたんですよ、あおり。当たり前の話なんだけど、誰もやってないんだから。『ガッチャマン』の途中で見つけたあおりを描くのが面白くてね。でも極端なあおりはまだ描いてなかったですよ。

――吉田竜夫さんの印象をお願いします。

僕はね、竜夫さんとはね、何回かしか会ってなくて、話したことはないんですよ。ただ、ああ、この人が社長さんなんだなぁとか思って、誰かと話していたのをちょっと聞いたぐらいですね。だけど、あの人は、ずっと生きてて、今でもやってたら、僕は一緒にやってるんじゃないかなって思う。誠実と、発想と、やる気と。それから、常識踏まえた人。今、僕、学校で授業やってるんだけど、そもそも学校っていう体制がイヤなんですよね。それでも自分の科は少しづつですが、随分よくなってきたんですよ。随分。（生徒が）俺の話に耳傾けるようになってきて、相談に来るんですよ。だから、やっぱりこう、積み重ねかもしんないですね、人間は。竜夫さんは積み重ねたんでしょうねぇ、あの人。ほんとに前向きな人っていう感じがしていました。

（2002年6月6日、於／東京都西東京市）

井口忠一

（いぐち・ちゅういち）

1950年2月25日、東京都出身。子供の頃から漫画少年として過ごし、TVで見た『昆虫物語みなしごハッチ』に感動。偶然見つけたタツノコプロの求人募集に応募して、70年9月、同社のアニメーターに。『ハッチ』で作画チーフを務めていた内野純緒の下で、トレースを勉強。『いなかっぺ大将』から本格的に動画を手掛けるようになる。また、メカニックを描くのが好きだったことから『決断』では軍艦や戦闘機などメカの原画に、鉛筆でカスレた陰影のタッチをつけるために参加。以後、『科学忍者隊ガッチャマン』(原動画)、『新造人間キャシャーン』(作画監督)、『宇宙の騎士テッカマン』(原画)、『ゴワッパー5ゴーダム』(作画監督)といったメカニック描写が多い作品を担当。

'77年3月にタツノコを退社し、グリーンボックスに移籍。『無敵超人ザンボット3』『ルパン三世(新)』(原画)、『宇宙魔神ダイケンゴー』『宇宙戦士バルディオス』(作画監督)などを手がける。'80年頃にフリーとなり、主な作品に劇場版『銀河鉄道999』(原画)『Gライタン』（作画監督）、『タイムボカンシリーズ　逆転イッパツマン』(作画監督)、『未来警察ウラシマン』(キャラクターデザイン、作画監督)、『超時空要塞マクロス　愛・おぼえていますか』(原画)、『赤い光弾ジリオン』(作画監督)、『軽井沢シンドローム』『アイ・シティ』『変幻退魔夜行　カルラ舞う!』(キャラクターデザイン、作画監督)、『機動警察パトレイバー』(OVA版、劇場版では原画、TV版では作画監督)、『覇王大系リューナイト』『無責任艦長タイラー』『シンデレラ物語』(作画監督)などがある。

'96年からはタツノコプロへ、契約社員として復帰し、『マッハGoGoGo(新)』『時空転抄 ナスカ』『タイムボカン2000　怪盗きらめきマン』『しあわせソウのオコジョさん』『よばれてとびでて!アクビちゃん』などで作画監督を務めている。

なにかさ、ハッチが凄く可愛いじゃない

―アニメーターになられた経緯というのは？

おぼろげながらも、将来は絵を描く仕事に就きたいと思ってたんだよね。その頃、タツノコでは『みなしごハッチ』をやってたんだけど、テレビを見てて大好きだったんだよね。なにかさ、ハッチが凄く可愛いじゃない。特にオープニングで、水滴がハッチの顔の上に落ちるところとか。いいよね。それに、僕は小さい頃から漫画が大好きだったから。漫画家の吉田竜夫さんや九里一平さんが作った会社だって知ってたんだよ。それで、ある時、新聞でタツノコプロのアニメーターの募集広告を見つけたんです。それでね『ハッチ』が大好きだったから、この会社で働きたいなって思った。それで、タツノコプロの笹川ひろしさんに相談の手紙を送ってね、タツノコへ入ったんだよね。

―最初はどんなことをされたんですか？

『ハッチ』は丸い線が難しいでしょ？　だから、まずはトレースの練習をさせられたの。内野純緒さんが、動画チェックみたいなことをしながら教えてくれました。作画の部屋には内野さん、菊地（晃夫）さん、本多（哲）さん、加藤（茂）さん、

奥野（芳久）さんといった人がいたと思います。先輩たちの描いた原画とかを何回も繰り返して、線が綺麗になるように何度も何度もなぞってね。当時のアニメーターは、定規とかプレートを使わずに色々な大きさの直線や曲線を自由自在に描かなければいけなかったからね。とにかく、曲線とかを綺麗にトレースすることが大変なんだよね。それから、しばらくして本格的に動画として参加したのは『いなかっぺ大将』から。これがまた難しくってね。ニャンコ先生とか、ギャグ調の直立した猫っていうのは思ってた以上に難しかったな。

――『ハッチ』や『いなかっぺ』って、番組初期と後期ではキャラクターの顔が微妙に成長して違ってきてますよね。あれは、途中で設定画を描き直して成長させたりしたんですか？

いや～あ、設定を途中で描き直したりはしないよ。多分、その人自体の絵が変わってくるんじゃないかな。自分で作画しながら、他の人たちの絵を見て「ああ、こうすればより可愛くなるなあ」とか思って、少しずつアニメーターの人たちも成長していって、それが違った味として作画ににじみ出てくることもあるよね。

どんなメカでも描いてみせるって意気込みがあった

――リアル系の作品は何が最初なんですか？

『決断』だね。こういうリアルなものって、1枚の原画として止めで描くと物凄くリアルで重厚なんだよ。結構作画には波があった気がするけど。でも、須田（正己）さんの原画は凄かったよ。須田さんの原画を制作進行の人が会社に持ち帰ってくるとね、どんな絵が上がったか作画室の皆で見に行くんだよ。それを見て、自分で吸収してね。たぶん、当時の仲間たちは全員、須田さんの影響を受けてたんじゃないのかな。ただ、当時のアニメって動いた時にその作画の質を維持することができないんだよ。だから動くと、どうしてもチラツキが目立っちゃうんだよ。特に飛行機なんかのメカは、動かしちゃうともうダメ。全然大丈夫じゃないんだ。絵がチャチくなっちゃうし。それで戦闘機とかは、質感を出すためにいろいろ工夫してるんです。上がってきた原画にメカの質感を出すために、動画用紙の下に下敷き敷いてね。鉛筆をねかせてこすると、下敷きの凸凹にあたって、ギザギザした質感が動画用紙に出せるんだよね。『決断』ではメカの質感を出すために一生懸命ギザギザをだしてたんです。でもね、物凄く苦労して描いても、動くと余り目立たないんですよね。ただし、動画枚数は潤沢に使えたけどね。メカシーンは、やっぱある程度の枚数を使わないと、メカの重さが出せないし。つけパンだって、枚数がかかるからね。

――『決断』のメカって戦闘機の質感だけでなく、仕上げでも上から戦闘機の汚しを入れたりしてリアルでしたよね。

戦闘機とかはタツノコ社内でプラモデルを作ってね、作画の参考資料にしていたんですよ。僕も昔は戦闘機とか好きだったから、そういったものを思いっきり描けると、面白がってやってましたね。だから大変な作画も全然苦にならなかったな。それは『樫の木モック』のようなメルヘンものでもそうですね。タツノコ作品は作画だけでなく仕上げや特殊効果とかが加わって完成しますから。頬の赤みがブラシだったりすると基本的には、ほっぺたに赤で丸を描いてね。そこは後でブラシが入って絵として完成したんじゃないかな。

――その後が『ガッチャマン』ですか？

そうですね。作画のリアルさにおいては、当時としては群を抜いてましたからね。あのあたりが当時のタツノコの特徴じゃないかな。極端に描くと目なんか六角形で、眉毛が太くてさ。ただ、『ガッチャマン』って段々とキャラの目がデカくなっていったよね。最初の頃の爽やかさってのが、薄れていっちゃった気がする。目の中の涙腺みたいなのまで描くようになるじゃない。ジョーなんてリアルに描こうとし過ぎて度を越えてきちゃったって感じた(笑)。タツノコキャラって鼻筋とかも結構難しいんだよね。ちょっと短かったり、幅が広がったりするだけで、全然違った感じになっちゃう。鼻の下の線なんかも、円内に入れると唇が分厚くなっちゃうんだよ。だから目と一緒に唇も変化していってね。『ガッチャマン』も最後のほうではかなり厚くなってきちゃったでしょ。

――でも、当時これだけの原画を描ける人は、そう多くはなかったと思うんですが。

そうだね。須田さんと、二宮（常雄）さん、湖川（友謙）氏、それと高橋資祐さんの絵も似てたね。中でも須田さんは、やっぱり当時のアニメーターのレベルとしても群を抜いて上手かった。だから、須田さんの原画が上がってくるのが本当に楽しみだった。フィルムになってもタイミングがいいし、ポーズも他の人が描くのと全然違うんだよ。重さのある絵というか、落ち着いた感じでね。最終回の原画なんて、忘れられないくらい印象的だったね。二宮さんは、表情とタイミングと、動きの流れが上手い人。凄くシャープな動きなんだよね。ギャラクターの隊員って、身体の線が出てるじゃない。そうすると、須田さんの描くキャラと、二宮さんの描くキャラでは体型が違うんだよね。須田さんのはどっしりしていて、二宮さんのは凄くスマートでガッチリしてる。これが甲乙つけがたいというか、どっちも魅力的でいいんだよね。

――『ガッチャマン』の後半から、社内の南家講二さんや池田茂之さんといった方々が作監補という形になりますよね。

『ガッチャマン』は、線が多くて普通の作品よりも大変じゃない。それを最初は作画監督の宮本（貞雄）さんがひとりだけで修正をしてたんだよ。でもそれじゃあ、やっぱり時間的にも追いつかなくなってきたんだよ。それに作画の質を保つという意味でもひとりでは無理があったからね。それで、途中からふたりが選ばれたの。南家氏は、結構目をデカく描くんだよ。カメレオンタイプの目。漫画家を目指したいって言ってて、キャラを似せる技を持ってたね。池田氏もやっぱり上手い。宮本さんに近い絵を描いてたよね。動きになるとちょっと苦手だったけど、1枚の絵は凄くかっこよく描けるんだよ。人物のデッサンもしっかりしてたから。

――井口さんは、この頃から原画になったんですよね？

『ガッチャマン』が初原画です。あの頃は、タツノコのメカって好きでね。ゴッドフェニックスとか喜んで描いてたね。あの頃はメカってだけで嫌がるアニメーターって多かったから、逆に僕のセールスポイントになったのかもしれない。今のメカって描きたくないけど、あの頃はどんなメカでも描いてみせるって意気込みがあったね。それから途中で抜けて、新番組の『キャシャーン』の作監として参加したんです。林政行さんが作監で、川端宏さんと僕が作監補みたいな役割でした。その中でも僕は、メカ作監を主にやっていましたね。まあ、単に人がいなかったから任されただけ(笑)。『キャシャーン』は、僕が『決断』でメカ作監みたいなことをやってたから、その経験からやってくれって。それで、この作品のメカに関しては、質感だとかを『決断』の時の技術を応用してやっていました。出てくるのってほとんどロボットだしね。すぐにキャシャーンが壊しちゃうけど(笑)。そのロボットの内部の部品だとか、細かいの描いてたなあ。結構、いろいろと登場するメカを考えたよね。

――作監の林さんってどんな方なんですか？

人間的には良い人なんですが、一度仕事に入ると厳しかったですね。それは、上がってきた原画を見ながら僕に修正のアドバイスをしてくれるんです。人の描いた絵を良く見るとその絵の弱点って見えてくるんです。だから、そういった部分を反面教師として見ながら「こういうふうに描いたらまずいのか」とか、「こういうふうに描けば良く見えるのか」とか、思いながらいろいろと勉強させてもらいました。林さんが作監した絵では、まゆ毛の付け根をシャープに描いてました。林さんの描くキャシャーンって、それまでのタツノコの絵とは違うんだけど、とても新鮮な感じがして好きでしたね。

――井口さん的に『キャシャーン』で気に入っている部分ってありますか？

やっぱ、フレンダーの変形を4種類考えたのだろうなあ。確か僕がやったと思うけど、仕上げの人が迷ったら困るからって、色を考えながら徐々に変形させたんです。あの論理的でない変形ってね、考えるのが面白かったなあ。

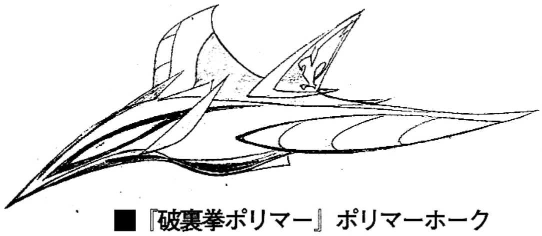
――それで『キャシャーン』が終わってから、また『ガッチャマン』に戻られたんですか？

そうそう。それでその後、韓国に行ったんだ。その頃、ちょっとスランプ気味でね、自分の絵に対して自信が持てなくなってたんだ。何か絵を描いていても疲れてきててね。当時の韓国のスタジ

オって、今と違ってて向こうに技術指導もかねてるんです。それで、南家氏と本多（哲）さんと3人で韓国へ行ったんです。そうしたら、韓国の連中が一生懸命作画の技術を覚えようと必死になるんです。それを見てたら「僕も頑張らなきゃな」って勇気づけられたんです。だから良い勉強になりました。で、日本に帰ってきてから『ポリマー』を途中までやって、それでまた韓国へ行ったりとなんだか慌ただしかったです。

――『ポリマー』ってリアルな絵でギャグ顔になりますよね。あれはデッサンがしっかりしてないとできませんよね。

車探偵長とかいいよね。あれはギャグキャラだから、表情が作りやすかったよ。それで主人公（鎧武士）はというと、原型がブルース・リーじゃない、顔もさ（笑）。その時代の流行を取り入れて使ってるんだよね。だからさ、本当上手いよね。タツノコ独特の表情の変化だとか、ギャグ顔だとかね。作画でいちばん遊べたっていうか、表情の勉強になった作品だよ。アクションに関しても『ガッチャマン』とはまた違った動きだったしね。



■『破裏拳ポリマー』ポリマーホーク

――その後『ゴーダム』でも作監をされてますね。

そうだっけ（笑）？　オープニングは須田さんだったんだよね。でも『ゴーダム』はちょっと中途半端な印象だったなあ。で、間もなくグリーンボックスの佐藤（光雄）さんから誘われたんだよ。ウチに来ないかって。あれは東映の『宇宙魔人ダイケンゴー』の頃だね。あの頃の僕はタツノコ調の絵しか描けなかったからね。それで、グリーンボックスでいろいろな会社の仕事をしたんです。ただ『ガッチャマンⅡ』をやる時に、あの絵を描けるアニメーターがいないってことで久々にタツノコ作品に戻ったんだ。それで、前後してグリーンボックスを辞めてフリーの形で参加してたね。野部駿夫さんが作監で、確かマジックや筆ペンで修正してた記憶があるなあ。『ガッチャマン』って線が太いじゃない。だから鉛筆の細い線でやるの面倒臭いんだよ。それで太い筆ペンでやっちゃってるの。凄いよね。そんなので修正入れたって、普通は動画は描けないじゃない。まあ、それでも回ってくる以上、やらなきゃいけないんだから、本当に大変だったね。それから『ガッチャマンF』で、河合静男さんが入ってきてね。河合さんは、宮本さんのキャラクターの描き方を色濃く受け継いでいたよね。

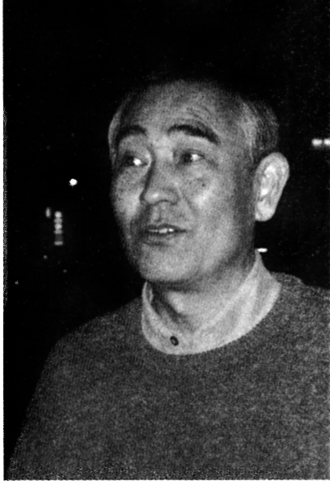
それはやっぱり動きだよ

――井口さんにとってタツノコ作品をやって手応えを感じたというと、どんな作品になるんでしょうか？

自分が変わったという意味では、その後の『Gライタン』や『ウラシマン』なんだろうなあ。ただ、特に何かに影響を受けたということはないよ。フリーのアニメーターとしていろいろな会社で描いてたらそうなっちゃったの。自然に。昔の太い線から細い線になってきちゃったんだよね。使ってた鉛筆の硬さも変わっちゃったし。以前は3Bとか5Bとか柔らかい鉛筆を使ってて、太い線も細い線も全部1本で描いてたんだよね。須田さんもそうだったから、真似して描いてたんだよ。だけど、段々鉛筆が2BとかBとか、そのくらいの硬い鉛筆を使うようになってきちゃったんだ。丸々1話分の原画をひとりでやるようになったのも、このあたりからだよね。『ウラシマン』では、かつて『ガッチャマン』の作画をしていた、なかむらたかし氏、加藤茂氏、僕の3人でキャラクターから作画までできたからね。たかし氏のデザインは『幻魔大戦』の後ということもあって、ちょっと影響されてたじゃない。あれが、僕の考えていたイメージと違った感じで、妙に新鮮だった。それに自分としても描きやすいキャラクターだったし、その後の僕の描く絵にも影響があったしね。ただ、それまでのタツノコ作品と違ってシンプルすぎて、影の付け方によって顔の表情が変わってきちゃうんだよね。描きやすかったけど描きにくい、というかな。ただ、今までにない新しい絵作りを持ち込んだのは良かったと思うね。

（2002年5月20日、於／東京都国分寺市「竜の子プロダクション」スタジオ）

杉井興治



（すぎい・こうじ）
静岡県出身。幼い頃から漫画に興味があり、実兄(演出家の杉井ギサブロー)の影響もあり、アニメ業界へ。TCJ(現／エイケン)、虫プロ、アニメルームを経て、71年にタツノコプロに入社、『決断』の原画マンに。『樫の木モック』からは作画チーフに就任。『科学忍者隊ガッチャマン』では、作監の宮本貞雄と共に社内の若手アニメーターを育成し、南家講二、池田茂之を作監補に昇格させるなど、社内作画のレベルアップを心がけた。
'75年、和光プロに移籍し『アンデス少年ペペロの冒険』の制作デスクを担当。'77年に再びタツノコプロへ戻り、同社のプラスチック玩具製造部門へ配属される。'78年に『科学忍者隊ガッチャマン』の続編を作るため、社内作画スタッフの強化を目指し、新設されたタツノコアニメ技術研究所所長に就任。当時サンリオの社員となっていた宮本貞雄を招き入れ、タツノコプロの若手アニメーターの指導に務めた。ここからは、橋本とよ子、飯田史雄、浜崎博嗣、水村良男、村田俊治、川崎逸朗、寺岡賢司、西田正義といった人材が輩出されており、社内作画のみならず、アニメ業界の人材育成に貢献した。
'90年、アニメーション21に移籍。『炎の闘球児　ドッジ弾平』『お〜い！竜馬』などに携わるが、同社は'95年に解散。現在は、シンセイ・リテラスでアニメ資料開発部を担当。また、笹川ひろし、原征太郎、杤平吉和とは雀友でもあり、月に一度は打つほどの仲である。

一緒にどうかと言われて、それで行ったんです

僕が最初にタツノコを知ったのは、奥田誠治という人がいたからです。
奥田さんは僕のＴＣＪ時代『鉄人28号』が始まる時に入ってきたんですよ。僕たち何人かは、そうこうしているうちに虫プロに移っちゃったんです。奥田さんは残っていたんですけど、ある時、電話がかかってきて、「杉井さん、アニメーションの会社移りました」「どこに入ったの?」「実はタツノコに入ったんです」「そう、いま（作品は）何やってるの?」「裏の雑木林を切っています」というんです（笑）。当時は雑木林を自分たちで切り開いて少しずつ広げていったんですよ。建物もプレハブだから、屋根にホースで水をかけたりしていたようです。僕が入った時はもうそういうことはありませんでしたけどね。

―― それ以前に、例えば竜夫さんなんかとお会いになったことはないんですか。

全然ないですね。タツノコは企画とか、シナリオ、演出、そういうところはもともとしっかりしていたんですよ。鳥海尽三さんがライターをやれば、笹川ひろしさんが絵コンテを描く。原さんが

演出をする。それからもちろんキャラは吉田竜夫さん自身が描く。撮影も線画台があって自分のところで撮る。作画だけが弱かったんです。アニメーターだけがどうしても弱かったんですね。それでたぶん、タマ・プロの田中英二さんとか、宮本貞雄さんに声をかけたのだろうと思うんです。ちょうどその頃僕は、宇田川一彦さん、宮本さん、林政行さん、と一緒にスタジオを持って仕事をしていたんです。政行は『樫の木モック』か、何かのアルバイトをやってました。宮本さんがタツノコに呼ばれて行って、作画を任されたんです。そこで宮本さんは作画が弱いと同時に虫プロのアニメーターの力が欲しいと思ったんですね。僕に来てくれないか、一緒にどうかと言われて、それで行ったんです。

　吉田竜夫さんが偉いのは「任せる」と言ったら全面的に任せて、「好きなようにやってください」と後は余分なことは言わないんです。

　タツノコには加藤茂、井口忠一たちがいました。一生懸命描いているから「何やってんの?」と聞いたら、「清書してるんです」と。見たら、上手くないんですよ、その絵が。違うなぁ、と思って。で、「ここにあるのは何?」と聞いたら、「いや、一緒に入ってた紙をジャマになるからこっちに置いてあるんです」「どれ?」「これです」、見たら修と書いてあって、作監がちゃんと修正しているんです。でもみんな知らなくて、作監の修正の入った紙をどけちゃって、原画のままのほうを清書しているわけですよ(笑)。

入ってきたら「まず遊びなさい」(笑)

――そのあと昭和49年にタツノコを1回辞められて、和光プロへ行かれたり、葦プロに関わられたり、会社を作られたりなさってから、52年にまたタツノコに戻って、研究所のほうを任されてますよね。

　実は最初に辞める時、吉田竜夫さんが、宮本さんと僕、南家こうじと加藤ちゃんと、4人を自宅に呼んで。「今回はいろんなトラブルがあって出ていかれるけど、絶対にもう一度みんなに声をかけて呼ぶから」と言われたんですね。で、それからある時に「もう一度作画をやってくれないか」と電話をもらって、それで戻ったんです。すぐ台湾に行ってるんですよ、僕。最初の年は3カ月、翌年の10カ月と2年くらいは台湾でした。

　思いもよりませんでしたが、向こうにいる間に吉田竜夫さんが亡くなられたんです。突然電話での知らせに驚きました。葬儀にも出ていないんです。残念でした。

　台湾から帰って後、吉田健二さんが社長になられて「竜夫さんの意を継いで、もっといい作品を作りたい。それにはどうしても作画が必要だ」と。その頃、社内にはまだ作画がなかったんです。とりあえず社内にアニメーターになりたいのはいないかと話したら、薄井(義雄)くんと橋本とよ子さんがなりたいと言うんで、ふたりをアニメーターにしたんです。その後、社内だけでは追いつかないので、独立したアニメーターの養成所を作ってはどうかと進言したんです。ちょうどタツノコは本社を建てる計画が出ていて、国分寺に土地が買ってあったんです。二階建ての普通の民家だったんだけど、それを使っていいと社長から話があり、「わかりました、そこを改造しましょう」と。

それでそこに研究所ができたんです。次にアニメーターの募集をしなきゃいけないと、まず10人採ろう。その時入ってきたのが、遊佐和重、浜崎博嗣、飯田史雄、千明孝一で、その1年後が香川浩。その後は確か13年か14年やっているんじゃないですかね、研究所を。もともと僕は、アニメーションは教えるものだと思ってないから、勝手に覚えて、上手くなっていくものだと思っていますからね。僕自身教えてもらったことがないから。ただ、「同期の人を大切にしなさい」と、なるべくたくさん入れたんです。多い時は毎年20人。だからたくさんの人が入ってきたもんで、後半はわからないですけど、最初の頃の連中はイメージが強いですね。タツノコの初期にいたのはみんな残っていますよね。加藤茂も井口忠一も南家こうじもやっているし、中村孝も江村(豊秋)もやっています。

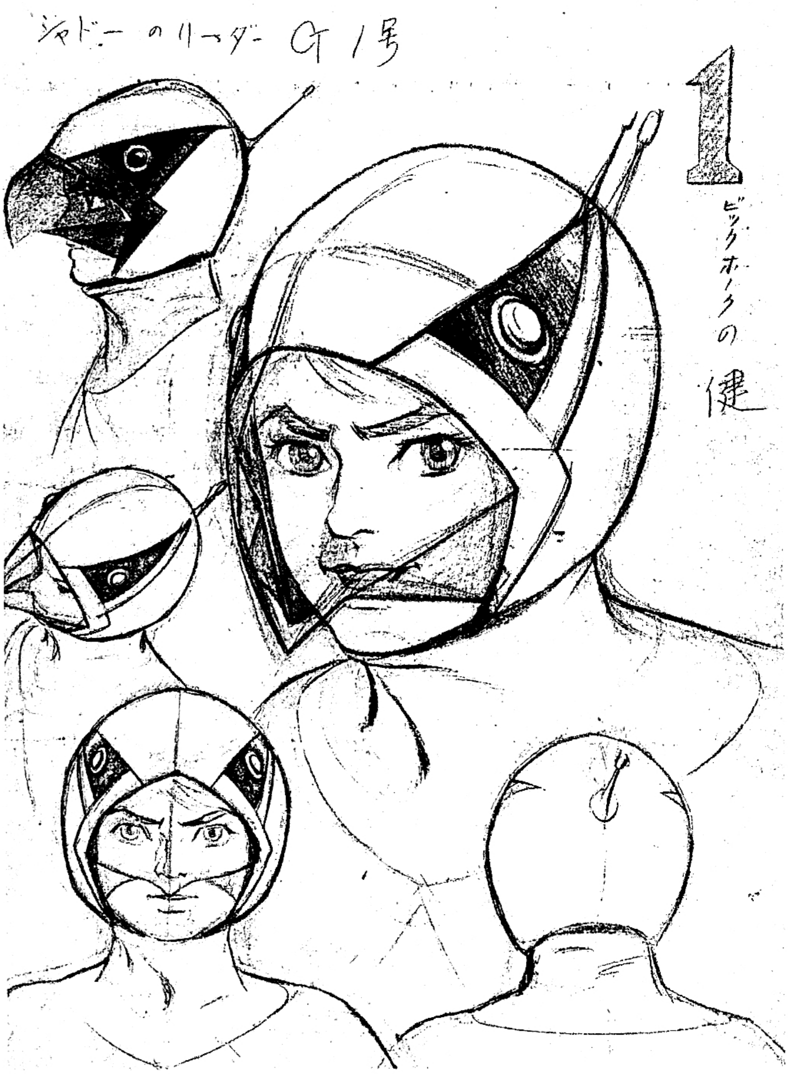
　徹底して言えることは、僕はアニメーションを教えた記憶がないんです、自分の頭のなかでもわからないから。教えるものじゃあなくて覚えるものだって思っていますから。「いつ入るかじゃなく

て、いつ辞めるかだよ」と。20歳で入っても、25歳で辞めたら5年でしかないけど、30歳で入っても60歳までやれば、30年。30年間ひとつの仕事をやり通せば、立派に誇ることができ、自分のものになる。新しく入ってくる人にはそういう教え方をしてきたんです。「絵をたくさん描きなさい」とか「勉強しなさい」とか、そういうのを言った記憶はひとつもないんです。入ってきたら「まず遊びなさい」（笑）。やらせたのは野球。これだけはもうタツノコから研究所から、どこへ行ってもそうなのだけど、まず野球。研究所の時は、みんな野球をやらなきゃいけない。年2回、必ずソフトボール大会をやる。酒は絶対飲まなきゃいけない、宴会は月に1回か2回やる。まずスポーツをする。宴会をする。それだけはやらせたんです。でもそのおかげであまり問題が起こらなかったようです。そのかわり、面白いのはたくさんいましたけどね（笑）。

キャラクターシートってないんですよ

――タツノコプロでは、吉田竜夫さんにしろ天野（嘉孝／当時）さんたちにしろ、ある時期までアニメーター出身でない方たちがキャラクターをデザインされていますが、作画用のキャラクターシートなどはどうされていたんでしょうか。

ないんですよ。『ガッチャマン』もそうだけど、キャラクターシートってないんです。メイン作監の修正原画を切り貼りして、キャラクターの参考資料にしていくんですよ。だから次々と増えていくんだけど、等身大のガッチャマンがいて、ほかのキャラクターがいて、キャラクター設計図があるかっていうと、ないはずなんです。吉田竜夫も、自分の描いた原案があるだけで、そこから先はほとんどタッチしてない。だから決定稿の設定の中に、準備稿しか描かれなかったキャラクターが混じってるんだよね。Tシャツの番号が違ってるとか、ナマズヒゲのはね具合がシートによって統一されてないとか。たぶん天野ちゃんもやってないはずですよ。ただし、雑誌に載せるのはどうした



■『科学忍者隊ガッチャマン』大鷲の健

らいいかとかね、ほかの部分になると手が入ったのかもしれないけど。だから宮本さんがキャラクターデザインじゃないんだけど、宮本さんが統一された『ガッチャマン』を作っているわけですよ。宮本さんが作監したやつを、ほとんどの外注さんに回して、それがキャラになっちゃってるわけですからね。ずっと後になるけど『地球物語』なんかもね、実際に天野ちゃんがキャラを作るんだけど、正面顔と横顔が違うんですよ。しょうがないから、宮本さんが「じゃあなんとかしましょう」っていうんで、これに手を加えていくから、またキャラクターが変わっていくのね。天野ちゃんが作ったのはいまでいうところの原案で、実際のキャラクターは宮本さんが作監をやりながら統一させてる。キャラクター設計図があるかっていうと、実際にはない。だから『ガッチャマン』も、吉田竜夫が描いた『ガッチャマン』と、テレビに出た『ガッチャマン』って、実は全然違うんですよね。かと言って今あるような、みんながこのキャラクターに合わせるというような三面図はないはずなんです。

『ムテキング』と『スターザンS』は僕が持ってるんですけども。作品に関してはほとんど僕が管理してましたんでね。それにもね、三面図ってないんです。ほとんど、1、2、3話くらいを抜粋して、キャラクター設定の参考資料として作ってるのが圧倒的に多いですね。だから『ガッチャマン』もないんじゃないですか。もちろん『ハッチ』なんか全然ないだろうし。タツノコで三面図を作ったのは原作ものが多いですね。河合静男の『ダッシュ勝平』、橋本とよ子が『光の伝説』で。今思い返してみると。1、2、3話くらいまで作る間に、キャラクターを作り上げてしまうというのが多かったですね。

自分の原稿でもコピーして貼っちゃう

聞いた話ですけど、吉田竜夫さんは、漫画家時代には自分の原稿でもコピーして貼っちゃうんだそうです。アシスタントに描かせるのではなくて。自分で何パターンか作り、それをコピーしておいて、自分で原稿に張り付けていたんだそうです。合理的ではっきりした人でした。

（2002年3月19日、於／東京都東村山市）

■過日のタツノコ野球チーム
後列左端から、杉井興治、小山高生、陶山智、佐藤光雄。前列左端が、宮本貞雄

宮本貞雄

（みやもと・さだお）
1937年5月16日生まれ。大阪の一光社でCM関係の仕事をした後、上京して虫プロへ入社。『鉄腕アトム』『悟空の大冒険』(原画)、『リボンの騎士』『アニマル1』『千夜一夜物語』（作画監督）などの作品に参加する。
'70年『決断』を制作するため、タツノコプロへ招かれる。以降『樫の木モック』『科学忍者隊ガッチャマン』（作監）に参加。'74年にタツノコプロを辞め、サンリオがセルアニメを制作するということで同社に参加。劇場映画『チリンの鈴』『くるみ割り人形』(人形デザイン、設定協力)、『星のオルフェウス』、パイロット版『ユニコ』に携わる。
'78年に『科学忍者隊ガッチャマン』の続編を制作するため、作画部門の強化を迫られ、再びタツノコプロへ。タツノコアニメ技術研究所を通じ、若手アニメーターの育成を開始。作画監修として『怪盗ルパン813の謎』『科学忍者隊ガッチャマンF』『とんでも戦士ムテキング』『海底大戦争　愛の20000マイル』『Gライタン』『ダッシュ勝平』『地球物語テレパス2500』に参加。『未来警察ウラシマン』でも、研究所の若手アニメーターの技術指導に活躍した。
'84年に研究所を退社し、フリーの形で東映動画の合作に参加。'91年に渡米し、ディズニープロコンシュマープロダクツのシニアスタッフ・アーティストとして勤務。'02年5月に勇退し、現在はアニメ人生最後を楽しめる作品を作るべく企画立案中。

タツノコの情報も持ってなかったです

— 宮本さんがタツノコで仕事をされるきっかけから、お願いしたいのですが。

当時、僕はまだ虫プロに所属してたんですね。とはいっても社員は辞めて、契約でやってたんです。そこに吉田竜夫さんから直接ではなく、永井（昌嗣）さんから電話かかってきましてね。

— 永井さんは虫プロにいた時期もありましたよね?

その頃、永井さん、僕と顔合わせてましたから。後、鳥海尽三さんね。結構、あの人たちとは仲良かったんですよ。仕事でじゃなくて遊びのほうで、ですけどね。それで僕のこと、情報が流れたんじゃないかと思います。その永井さんの電話で、今、国分寺におるんだけども、時間あったら来ませんかみたいな話があってね。それで行ってみたら、竜夫さんがいらっしゃって、初対面から「わー、よく来てくれましたぁ!」という感じだったんです。

— 吉田竜夫さんの初対面の印象というのは?

竜夫さんのほうが僕より、3歳か4歳か上なんですけどね、尊敬できる人でね。作家ですから、

子供っぽい一面もある人なんだけど、あの人なら許せるみたいなね。親分肌の人なんだけど、弱い面を見せることもできる人で、誰もが尊敬することができる人でしたよ。あの人も（僕と同じ）関西出身で、ま、僕流に言うと肌が合ったというか、人間的に惹かれたというかね。それまではあの人の画風も知らないし、タツノコの情報も持ってなかったです。

――初対面の時はどんなお話をされたんですか？

いろいろ話したんですけど、タツノコに来てくれという話はなかったんですね。水面下では考えていたんでしょうけど。でないと、僕みたいに一介のアニメーターをわざわざ遊びに引っ張ってくれるわけないんで。その後、何回か誘ってもらって、『決断』という作品をやるんで、それに参加してくれませんかって話になったんです。それじゃ、契約で1年ぐらいやらしていただきましょうってことで、まとまったんですね。

決して戦争はカッコよくない

――『決断』に入られたタイミングというのは？

オンエアは始まってませんけど、第1話はもう進んでましたね。この作品、キャラクターを当時の挿絵の大物の方たちが描かれてるから、それをそのまま、アニメーションにするっていうのも土台不可能なことだったんですけど。ただ、この作品の方向性を見た時、自分の不得手な部分じゃないからってことで、お引き受けした形ですね。

――タツノコサイドとしても、宮本さんならこの作品でも大丈夫だろうということで、声をかけられたんですかね？

虫プロでは週に1回、アニメーターがみんな集まって、デッサン、クロッキーをやってたんですけど、虫プロのアニメーターは漫画家志望だから、ちゃんとしたデッサンはできないんですよ。僕と木下蓮三くらいなんですよね、ちゃんとできたのは。蓮三とは大阪時代、一緒にデッサンやってたから。虫プロのスタッフにしてみたら、異質な描き方をしてる連中だと思われてたんでしょうけどね。憶測ですけど、そんなことがあって、タツノコに僕ならリアルなものが描けるという情報が行ってたんじゃないですかね。

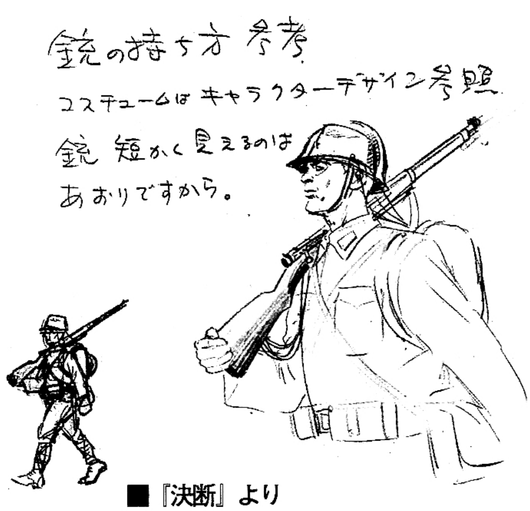
――『決断』での最初のお仕事というのは？

僕の記憶だと……兵隊が銃を持って、というのをリアルなタッチで描いた絵が残っているはずなんですけど……。アニメーションで波をリアルに見せるにはどうしたらいいのか、そうした工夫とか……。あの当時、アニメーションのシステムを検討している段階でしたからね。挿絵画家が描かれたものをそのまま使うかどうするか、リアルなものを描くための組織作りみたいなことですね。

――テレビのクレジットだと第5話からお名前が出て、「作画監修」という肩書きになっているんですが、これはどういう立場で？　アニメーターの絵を全般的に見てくれという要請だったんでしょうか？

いや、そうじゃなくて……とにかく来てくれと（笑）。挿絵画家の人に全部描いてもらうわけにいかないけど、そこから来た絵を全部、僕が描き直したとか、そういうことはないんですよ。『ガッチャマン』なんかの時と違って、キャラクターシートは作ってないんで。ただ、挿絵画家さんの絵をそのまま持ってきても、アニメーションにはできないので、そちらと現場との調整みたいなことはしましたね。

――『決断』では戦地の兵士の描写について、かなりこだわりを持って描かれたというお話を伺ったんですが。



■『決断』より
宮本貞雄による銃の持ち方参考

僕の身内に兵隊さんがいるんですね。親父が3人兄弟だったんですけども、3人とも兵隊にとられましたからね、町内の人たちと一緒に送り出すこともやってましたから。（戦地から）休暇で帰ってきた叔父なんかに、子供心に感じた兵隊さんの匂いなんか、いまだに残ってるわけですよ。今でも、僕、戦争は嫌いなんです。本来なら善良なお父さん、お兄さんが赤紙1枚でとられていったら、人殺しにならざるを得ないんですね。互いに憎み合ってる相手じゃないのに、殺し合いをしないといけない。だから、戦争の実写フィルムを見ると、全部だぶるんです、叔父であり、知り合いであり……若い兵士が送られていくシーンとか見ると、いまだに胸が詰まるんです。行軍する人たちの絵を描いても、新品の靴履いてるわけじゃないですからね。マメがなんども潰れて、わずかな個人の持ち物すら捨てて行くわけですよ。だけど、軍靴だけは捨てられない。天皇陛下からいただいたものだから。そういうことを感じられるような、決して戦争はカッコよくないということを描きたいと思ってたんですね。

――そうした宮本さんのお気持ちとは裏腹に、『決断』が放送されていた当時は右傾化、戦争賛美ということで批判があったようですが。

戦争云々というのは、僕の個人的なことですからね。ひょっとしたら、戦争賛美で作ってる人もいたかもわかんないですね。この作品は反戦を謳うものだといえる、ポジションでもなかったし。ただ、男の美学みたいなこともわからないではない。僕がその歳で戦争に行ったら、勇敢に戦おうという気持ちがあったかなと思うんですね。戦争が好きとか嫌いとかいう話とは別に。

――『決断』の制作状況はかなり過酷だったと伺っているんですが、当時の現場の状況はどうだったんでしょう？

現場でアニメーションの経験者は少なかったと思います。原動画やってた人は同じところにいなくて、僕は挿絵画家さんや、メカや写実的なキャラクターを描いてた人たちと一緒にいましたから。吉田竜夫のいた部屋と繋がってる、鷹の台のスタジオの2階の部屋で……。

――それは天野喜孝さんなんかがいらっしゃったキャラクター室でしょうか？

天野くんのことはよく覚えてないんだけど……。

――挿絵画家の方たちというのはタツノコに常駐されて？

常駐ではなかったように思いますね。

皮膚の厚みとか入れてったはずです

――タツノコとの契約は『決断』を含めて1年とのことでしたが、その後、更新されたということですか？

『ガッチャマン』の途中で契約切れたんで「じゃあ」って言ったら、「なに言ってます、全部、終わるまでやってもらわないと困る」と言われて、やったわけですね（笑）。

――すると、4年か3年半くらい在籍していた感じでしょうか？『ガッチャマン』だけで丸2年放送されているので。『ガッチャマン』の前に『樫の木モック』の仕事をされてますが、それは『決断』が終わってもまだ契約があったという事情なんでしょうか？

そうです。ただ、準備からは絡んでないですね。

――その頃の作品でいうと、たとえば『みなしごハッチ』『けろっこデメタン』といった作品には参加されてないんですか？

『ハッチ』はタッチしていないですね。『新ハッチ』もやってないですけど、『デメタン』にはちょっと触った記憶はありますね。人間の目線で捉えると、小動物の世界が出ない、描いてるうちに、どうしても人間の大きさになるから、それを気をつけようなんて話した記憶がありますね。大きさを認識させるために、対比で他のものを入れるようにしようとかね。

――『モック』のクレジット上では33話までは宮本さんが作画監督になっていて、それから林政行さんにバトンタッチされています。それはたぶんが、『ガッチャマン』が始まったからだと思うんですが、『ガッチャマン』の準備期間のご記憶は？

記憶にありませんね……。

――『ガッチャマン』も作画作業には参加されて

いるけど、準備にはノータッチだったんでしょうか？

　ええ、そうです。これ、なんとかならないかって持ち込まれた感じで、白紙の状態からじゃなかったですね。最初、『ガッチャマン』（のデザイン）が出てきた時には、こんな大変な絵、誰もアニメーションやってくれる人いませんよ、アニメーション用にキャラクター作り直せませんかって話をした気がするんですよ。アニメーターたちが少しでも描きやすいように。

――**宮本さんが吉田竜夫さんの絵を元に、キャラクターシートを描き直したということですか？**

　それをやった記憶、ありますよ。

――**『千夜一夜物語』でも、キャラクターデザインのやなせたかしさんの絵をアニメーション用にリファインされてますよね？**

　それとまったく同じことですね。やなせさんは漫画家で、その絵をアニメでやるために、シートを描き起こしました。アニメーターの目で、『ガッチャマン』をどうやらないといけないかということで、手を入れたんです。現場をまとめている者としては、アニメーターから、ここはどうなってるって聞かれた時にも、僕なりの解釈で返していかないといけませんからね。

――**それは宮本さんなりの味つけを入れていくということですか？**

　僕がやる以上、僕の味つけになるんですけど、そういうことではなくて、アニメーションはひとりで描くわけでないから、他の人が迷わずできるかどうかが大事なわけです。もちろん、原作者である竜夫さんの絵のいいとこをいっぱい出さないといけない。ただ、それがアニメーションで支障をきたすといけない。作業として効率よくするには、ということで手を入れたつもりです。

――**『ガッチャマン』は第1話では、ご自身、原画はやられてないんですよね？　須田正己さんの原画を、宮本さんがスタイルを統一していくというのが、最初からの決め事だったんですか？**

　そうですね、僕の目で見て、絵柄が統一されてないように思ったんですよね。それがこれまでのタツノコの流れだろうけど。そうしたアニメーションの作り方だと、ずっとやってはいけないだろうな、と。そうした僕の考えに、みんな抵抗もあったんじゃないかなと思いますけど……。今、どういうわけなのか、宮本貞雄＝『ガッチャマン』というレッテルが貼られているんですけど、それはたぶん、全カット見たからじゃないかな。韓国に出したヤツでも、全部見てますから。

――**『ガッチャマン』やタツノコのキャラを描く時のポイントというのは？**

　それはですね……人の何倍もたくさん描いて、この部分とこの部分を残さないと吉田竜夫の絵にならないと見つけるまでは、試行錯誤したと思う。漫画的なアニメーションと比べると、イラストレーション的な要素が強いので、顔の中のポイントでいうと、目、鼻、口が大事で、これをきっちり押さえないとダメですね。

――**『ガッチャマン』はシリーズが進むにつれて、目元の線なんかがどんどん増えていきますよね。アップになると睫も増えるとか。**

　それはたぶん、僕の責任でしょうね。アップの時は止めで耐えられるモノということで、イラストっぽく、皮膚の厚みとか入れてったはずなんです。

――**タツノコの場合、吉田竜夫さんのキャラクター原案があって、さらにキャラクターデザイン専門のキャラクター室というのがある。この体制というのは、外から来られた宮本さんから見ると功罪両面あったと思うんですが。**

　（デザイン室から上がってきたものは）アニメーションにそのまま使えない、たとえばぐるっと一回転させなきゃいけない時に（そのキャラクターだと）1回転できないようなデザインに描いてあったり、アニメーションのデザインとしては問題ある場合もありました。だけどデザイン部があることによって、ゲストキャラひとつにしても、シナリオができた段階で、すぐそちらに着手してもらえる良さがありますよね。それにアニメーターとして経験を積んでいくと、どうしても保守的になってしまうところを、新鮮なデザインが来て刺激される良さもあったと思いますね。

（2002年7月2日、於／東京都国分寺市）

タツノコプロ
JACKET GRAFFITI

▲『昆虫物語新みなしごハッチ』　品番号／SCS-229　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年４月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『昆虫物語新みなしごハッチ』　品番号／C-112　形式／17cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年４月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／600円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌「がんばれハッチ」、旧作主題歌

▲『ウリクペン救助隊』　品番号／SCS-239　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正主題歌と挿入歌「帰ろうよランラララン」

▲『ウリクペン救助隊』　品番号／APS-5012　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正主題歌と挿入歌、新録ドラマ「コアラちゃん救出大作戦」

▲『破裏拳ポリマー』　品番号／SCS-240　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『破裏拳ポリマー』　品番号／APS-5010　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「猫魔団闇におどる」（脚本／鳥海尽三）

▲『てんとう虫の歌』　品番号／SCS-238　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1974年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌「ななほしてんとうほしななつ」

▲『てんとう虫の歌』　品番号／SCS-298　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1976年６月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／新副主題歌と挿入歌「てんとう虫のマーチ」

▲『てんとう虫の歌』　品番号／CW-7022　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1975年６月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／1500円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌８曲と新録ドラマ（構成・脚色／天馬正人）

▲『てんとう虫の歌』　品番号／APS-5009　形式／17cmフォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「日曜日のかあちゃん」（脚本／竜の子プロ）

第六章　表現すべき彩（あや）

■『紅三四郎』より

中村光毅

（なかむら・みつき）

1944年4月7日、東京都出身。'60年に東映動画(現／東映アニメーション)に入社。'64年9月にタツノコプロに移籍。以後、個性的な美術や斬新なメカニックデザインで『マッハGoGoGo』『科学忍者隊ガッチャマン』『タイムボカン』など、初期のタツノコ作品をデザイン面で支え続けた。

'76年にタツノコ時代に部下だった大河原邦男と共に、デザインオフィス・メカマンを設立。大河原邦男は1年ほど在籍した後、独立。以後、メカマンは美術スタジオとして若手育成をしながら除々に大きくなっていく。

ジャンルを問わず様々な作品の美術監督を務めており、主な美術監督作品は『ニルスのふしぎな旅』『機動戦士ガンダム』『神伝説サダメビウス』『太陽の牙ダグラム』『スプーンおばさん』『ダーティペア』『風の谷のナウシカ』『逮捕しちゃうぞ』など多数。

現在、同社の代表取締役でありながら、若手美術監督と共に現役として活躍中。

とにかく背景を描きたいなって

――アニメの世界に入られたきっかけからお伺いしたいのですが。

小学生の頃、いい映画だと映画館を借り切って、学校で行かされるんですよね。その頃にディズニーアニメを見て、それで好きになったっていうかね。あっ、これだ！　この背景をやりたいなっていうふうに思って。

――え？　小学生の頃から、背景をやりたいと思われていたんですか？

キャラクターを描くって全然ダメで、センスがないって思ってたもんですからね。ただ、とにかく背景を描きたいなって。

――その頃、そういうお仕事（アニメの背景を描く）というのは一般的に知られていたものだったんですか？

あ、それはちがう。知らないですよね(笑)。

――作品でいうと、特に強烈に焼きついたものとか？

ディズニーの『シンデレラ』とか、東映の『猿飛佐助』とか『白蛇伝』だったですね。あれで「あぁ、もう決めた」って、もうそれに絞ったってい

うところですね、ええ(笑)。

――当時すでに、背景美術がどういうふうに描かれてるのとか、その技法とかってご存じだったんですか？

テレビが白黒の時代、アニメーションを作っていく過程の番組があったんですよ。それで、ああ、背景をこうやって描くのかって。で、あの……よけいファイトが、はっはっは(笑)、もう燃えるものがあってね。これならできそうだと思って。もうそこで決めましたね。子供（時代）からもうターゲットは絞りきったっていうのは、今、考えても、なかなかのモンだなと思いますよねぇ。うん(笑)。

――で、社員を募集している会社とかは、どうやって探されたわけですか？

中学出てすぐこの世界に入ったんですね。中学時代の美術の先生が、たまたま東映動画の課長さんの笹谷（岩男）さんて人を知っていて、話をしてもらったんです。それでまず様子見て、よければ雇おうってことになったと思うんですね。思うと、今まですごくいい人に巡り会えてるんですけど、1回目がそのチャンスだったんですね。東映動画に入った時は、ちょうど『西遊記』の作業の半ば頃です。あの頃は1年半くらいかけて作ってましたからね。

――入って最初はなにをしていたんですか？

最初はもう、絵は描かせてもらえなくてね。トレーサーって、線を全部ハンドで描くセクションで。その次に彩色。それをやりながら、雑用をやらされるんですよ。なんでもやらされましたね。絵の具の調合とか、在庫のチェックだとかね。3年ぐらいやりましたですね。ただ、課長さんがまたいい人で、たとえば撮影っていうと、ちょっと教わってこいとかね、で、動画も描いてみろとかね、そういう意味でいろいろやらしてくれたんですね。編集はやんなかったけど、アニメーションの一通りのことを全部やらしてもらったんですね。他の方に聞いても、そういうふうにやらしてもらった人はあんまりいなかったみたいですよね。でも、東映ではまだ力もないし、背景ができなかったんですね。ただ、私も若いから業を煮やして、なんとか描きたいっていうことで、浦田（又治）さんっていう方がね、タツノコを紹介してくれるんですよね。

――それはどういう？

『宇宙エース』を作るってことで、吉田竜夫さんがスタッフを集めるっていうんで、ちょうどそれに乗っかって行ったわけですね、だから、そこで初めて背景画描くんです。まだモノクロの時代ですけどね。

――あの、ちなみにそのタツノコに行かれる時っていうのは、作品を見せたりということは？

しました。東映にいた頃から自分でどんどん描いてたんで、それを見せて。『宇宙エース』の第1話から入って……背景をやりたいっていうことが、そこで初めて実現したって感じですね。その前までは、言ってみれば修行だったなと思うんですね。

――社員という形で、タツノコの美術部に入社されたわけですね？

はい。美術部は私を入れて3名ぐらいかな、年配の方と、それから30代の方が。私がまだ20歳で、それでスタートしたんですね。

――そのおふたりというのは、山口（あきら）さんと槻間（八郎）さん？

そうです。

――中村さんを含めた3人だけで、『宇宙エース』の毎回の背景を描き上げることができたんですか？

あの頃は3人でまかなえたね(笑)。スタートして、放映が決まってからはそうはいかないんで、ぼちぼち人を増やしていって……鳥海永行さんがなぜか背景に入ってこられた(笑)。

――えーっ、そうなんですか？

うん、なんか、回されてきたって言って。すぐ演出のほう行ったけど、彼にも背景の描き方、少し教えたんですよ。今でも語り草ですね(笑)。もうあの頃から、高飛車な態度でしたね(笑)。

――タツノコの黎明期、『宇宙エース』の頃というのは、プロダクションのカラーを築いていく時期ということで、吉田竜夫さんとは濃密なやりとりをされていたんでしょうか？

よく社長室に呼ばれてね。それで描いたものを見たりとか、作品の考証する方とかも来られて、一緒にお話ししたりね、シナリオがあって、次こんなの出てくるからどうしよう、みたいなのはやってましたね。

――その頃っていうのは、演出や作画の人たちと、職種を越えた社内での交流はどうだったんで

しょうか？
ドア開けたらもう、動画の部屋だったりしてるんで、けっこうありましたね。昼休みになるとみんな外出てね、バドミントンやったりなんかしてるんですよ。それがちょっと楽しみでね(笑)、そういうコミュニケーションは、随分とれたですね、あの頃は。

――そうした黎明期だと、なにもかも初めてだと思うんですが、モノクロだからグレースケールのものでしょうけど、たとえば絵の具の番号とかにしても、先達の東映で使ってた番号を利用したりということはあったんですか？

それはニッカっていう会社が、全部、基本色作ってあるんですね。だから、どこの会社でもあの、同じ番号でやってたんですね。白と黒、グレーがその間で、5段階ぐらいあったかしらね。モノクロ時代は、ずっとそのニッカでしたね。

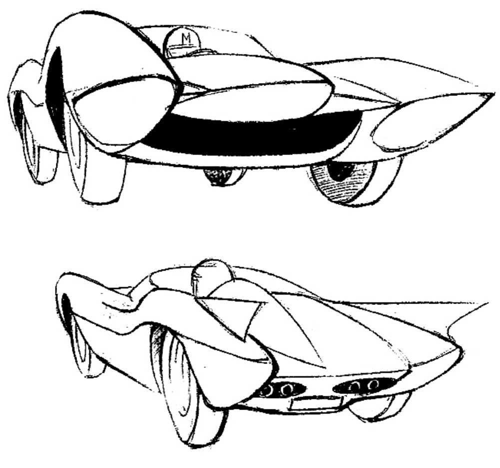
大抜擢ってほど人いないから（笑）

――中村さんは美術としてのお仕事と同時に、メカデザインの仕事もするようになるわけですけど、『宇宙エース』を作っている頃というのは、お仕事の範囲はどのあたりまで？

あくまでも背景ですね。(デザインは) ロケットやったくらいで、だから、メカデザイン云々っていうのは、『マッハ』だとかね、あの頃が発端ですよね。

――『マッハGo Go Go』でいきなりの大抜擢っていうような感じなんですか？

いや、大抜擢ってほど人いないから(笑)。車そのものに興味があるほうだったから、それで、なんかやってみろっていうのでやらされて、いや、自分からやらせてくれって言ったのかな。それがスタートだと思うんですよね。そう言わなければ、雑誌の（デザインの）車をそのまま使ったかもわかんないですね。それにその頃は、そんな大仰に思わなかったのね、ただ流れの一環として描いたぐらいで、メカデザインという感覚は『マッハ』の時もなかったですよ。1キャラクターという扱いでしたからね。



■『マッハGoGoGo』

――マッハ号のデザインというのは、マニアというか車に詳しい人を唸らせるような工夫とか、ここがポイントだというのは考えたりしてたんですか？

いや、それはなくてね(笑)。デザインはおそらくフェラーリの影響なんですね。それから、つけたり外したりなんかしてって。マッハ号といえば、最初に上がってきた動画が形がうまく取れてないので、私が全部描き直したんですね。

――あ、そうなんですか。

オープニングのマッハ号はほぼ、私がおせっかいをやって(笑)。

――当時は動画の参考用に立体を作ったりはしなかったんですか？

しなかった……というより、できなかったですね。よく設定だけでみんな描いてたもんだなと思いますね(笑)。その設定すらちゃんとしてないから、各話ごとエンジンが前だったり後だったりいろいろあるよ(笑)。

――デザインに対して、吉田竜夫さんからの要望はなかったんですか？

それはないですね。

――マッハ号はベースカラーが白ですよね？　後のガッチャマンとかキャシャーンといったキャラクターも白ですけど、そうした関連性というのは？

あの頃のプラモデル屋さんは、赤、白、青っていう素材がメインで、だからそれに全部統一して、それから白になったと思うんですね。元々の雑誌（掲載時）のカラーだと赤いボディなんですね。

――カラーテレビでの画面映りとか、そうしたことも考慮されての「白」なんでしょうか？

もちろん、それはあります。それと社長は白が好きだったこともあると思います。

――レースものということで、世界中を舞台にするわけですが、ロケハンもできない中、資料などはどうされていたんですか？

（資料に関しては）それはもう、本や雑誌ですね。でも、当時、観光ものとかはあまりなかったです。

――タツノコプロのカラー作品第1弾ということで、そちらの方面の研究もされたわけですか？

カラーはそんなに普及してないから、20％か10何％かな、（視聴者は）ほとんどモノクロで観るんで。だから、カラーで作ってもモノクロでぼけちゃいけない。ちゃんと見えるように、この色はグレースケールでいうと何番になりますよっていう、全部データを作ったんですね。そのために、裏からちょっとデータを……。

――テレビ局が作ってたヤツですか？（笑）

そうそう。見せてくださいって言って、断ってから見たかどうかわかんないけども（笑）、データもらったと思うんですよね。でも、我々は我々で、カラーをモノクロの写真で撮って、それで色の段階全部、調べて作ったんですね。『宇宙エース』の後半の頃から調べてたんじゃないでしょうか。でも、それでやると描けないんですよね。制約されちゃって。だから、後々……どこの会社もそれにあまりとらわれなくなってやりましたね。もう見えなくてもしょうがないよっていうことで。

凄い人生ですね（笑）

――中村さんご自身の美術の志向としては、どういうものだったんでしょうか？　例えばリアル志向なのか、デザイン的なものとか……。

あぁ、意外にね、自分ではデフォルメの世界が好きなんですよね。バタ臭いのが好きなんですね。で、リアル志向になるのは、要するに（スタジオ）ぬえさんがリアルなメカを描くようになったじゃないですか。それから背景もそれに付随するように、リアルっていうか、そういうふうになりますよね。あの辺から、うーん、やっぱりそうなんなきゃいけないのかなと思いましたけど、根っこはバタ臭いのが好きですから（笑）、だから脱出できないんですね（笑）。

――最後に吉田竜夫さんとのお話をあらためてお伺いしたいんですが……竜夫さんのご自宅の2階に住まわれていたそうで……。

（吉田竜夫さんの自宅は）会社から歩けば10分ぐらいのとこなんです、奥様がいつも社長を車で送り迎えしてましたね。その家は1階が社長宅で、2階がアパートだったんです。そこの2階に住んでたことがあるんですね。もう通いきれないっていうんで、上野から引っ越したんです。それで、お風呂も社長宅のお風呂を使ってました。

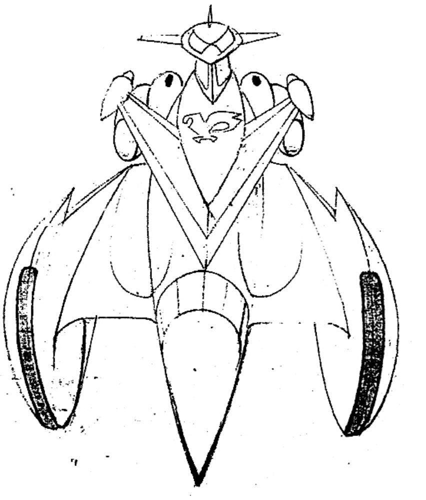
――そうなんですか（笑）。

声をかけてくれるんです、お風呂どうぞって。ええ。それで、風呂から上がると必ず何かご馳走になって、ありがたいですよねぇ。

――吉田竜夫さんもいらっしゃった、タツノコのスタッフで結成したタツノコバンド（後にクレイジーキッスと改名）には、中村さんも参加されていたというお話ですが。

日曜日に社長のお宅で練習やってたりね。僕、ギターをやってたんですねぇ（笑）。遊園地なんかでタツノコのイベント、たとえば『ガッチャマンショー』なんてやった後で、そのステージで発表会をやってたんですね。凄い人生ですねぇ（笑）。

（2002年3月4日、於／東京都国分寺市「デザインオフィス・メカマン」）



■『破裏拳ポリマー』ポリマーマシン

大河原邦男

（おおかわら・くにお）

1947年12月26日、東京都出身。'69年に東京造形大学のテキスタルデザイン科を卒業。オンワード樫山、おとぎの国を経て、'72年4月にタツノコプロの美術課に入社。同室で美術とメカニックデザインを兼任していた中村光毅のサポート役として『科学忍者隊ガッチャマン』のゲストメカでデビュー。以後、『破裏拳ポリマー』『宇宙の騎士テッカマン』のメカニックデザインを、中村と共同で担当した後、『ゴワッパー5ゴーダム』ですべてのメカニックデザインを任される。

'77年4月にタツノコプロを辞め、中村光毅と共にデザインオフィス・メカマンを設立。1年間在籍した後、フリーとなる。代表作は『ヤッターマン』以降の『タイムボカンシリーズ』、『機動戦士ガンダム』シリーズ、『太陽の牙ダグラム』『戦闘メカザブングル』『とんでも戦士ムテキング』『未来警察ウラシマン』『装甲騎兵ボトムズ』『銀河漂流バイファム』『蒼き流星SPTレイズナー』『勇者エクスカイザー』『疾風!アイアンリーガー』『タイムボカン2000　怪盗きらめきマン』など多数。

現在、(有)OFFICE.Kを主宰し、主にサンライズの『ガンダム』シリーズで活躍中。

なんとなくおもしろそうだなと思って

――タツノコには新聞広告を見て応募されたとか。

そうですね。新聞の求人欄を見て、たまたま「若干名募集」っていうのがありましてね。応募したんです。たしか制作と美術があったと思います。美術があるんならと思って応募したので、制作だけじゃあなかったと思います。その時、結婚が決まってて無職だったんですよ。結婚式の日が迫ってて、それまでにどっかに入っとかなくちゃいけないって状況だったものですからね。前の会社（キムラタン）を辞めて2～3ヵ月だったんですけどね。まあ、アパレル業界に飽きちゃったのかな。

――その時点で、タツノコがどういう作品を作ってるかというのはご存じで？

ぜんぜん(笑)。タツノコっていう名前は知ってたけどね。アニメーションというものに興味があったわけでもないし、漫画もほとんど読んだことがない。ただなんとなくおもしろそうだなと思って行ったんです。

――入社試験のようなものはあったんですか？

試験というか、僕の場合は「作品を持ってきて

くれ」って言われましたね。だから、大学でテキスタイルやってた時に織った生地を持って行きましたよ。竜夫さんのご兄弟は、そっちの方面に明るい人ばっかりでしたからね。（絵でなくても）何を持って行ってもわかるんでしょうね。

——では、その生地を見て認められて、美術のほうへ？

ていうか、なんでもいいから入れちまおうってことだったんじゃないですかね。入ってから、「大河原さん、免許持ってるから、制作のほうやんない？」とか言われて（笑）。あの頃は、免許のある人は貴重だったんです。危なくそっちへ持っていかれそうになった時に、吉田健二さんが、「せっかく美大出てるのに、制作もないだろう」っておっしゃってくれて、それで美術に入ったんです。

——なぜ大河原さんがメカニックデザインをやることに？

新入社員だったからじゃないですか？ 僕が入った時は、まだ『ガッチャマン』の決定稿も出てなかった頃です。企画書用には、中村（光毅）さんが描いたものがあって、結局それで決定までいくんだけど、その時はまだ完璧に決定稿になってはいなかった。それを、「ちょっといじってみな」って言われて、僕が一生懸命描いてるのを中村さんが見てたのは覚えてる。

——最初にデザインされたものは？

なんだろう。1話の小物か何かだと思いますよ。3話のミイラ巨人なんかは、最初の状態を天野ちゃんがデザインして、その後の包帯が取れてメカになったのを僕がやったりしてる。とにかく演出で必要なものは全部デザインするんです。たとえば、キャラクターの歯に爆薬を仕掛けて爆発させるなら、その歯もデザインします。動物でもサイボーグみたいなのは僕のところへ来ますし、コクピットや司令室といったメカ的な美術も僕がやります。普通の部屋なら美術の担当者がやりますが、そこに電気スタンドがあって、それが芝居に絡む（アニメーターが作画する必要がある）なら、電気スタンドは僕がデザインします。

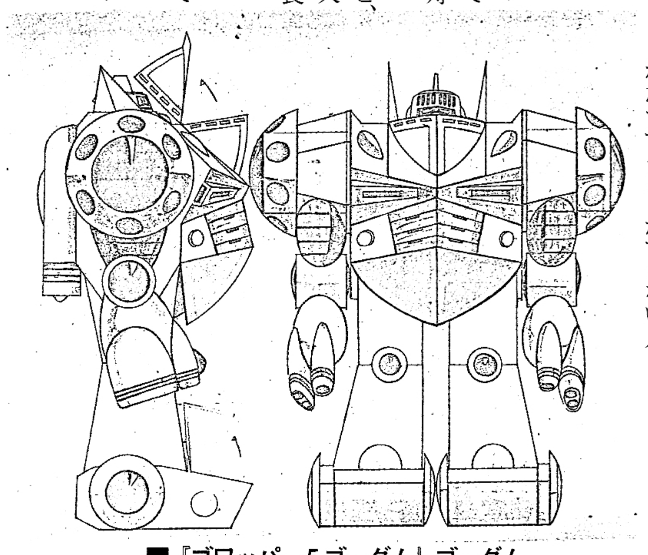
アニメにも漫画にも興味ないから

——最初に竜夫さんに会われたのは、面接の時？

面接では会ってないと思いますね。ただ、『ガッチャマン』が評判良かったんで、好意的に接してくれてましてね。1回、天野（嘉孝）ちゃんと寿司屋へ連れて行ってもらったことがありますよ。本当は中村さんも一緒に誘われてたんだろうけど、ほら、お酒飲まない人だから（笑）。それで僕と天野ちゃんだけになったのかもしれないですね。良くしてもらってたのは覚えてますよ。

——竜夫さんの初印象は？

僕は吉田竜夫っていう名前を知らなかったんですよ。アニメにも漫画にも興味ないから。ああ、こんな人なんだって思ったとしか言いようがないよね。そりゃあ、絵はね。設定画がいつも目の前にありますから、見てましたけど、僕、絵好きじゃないし、どう思うって言われてもわかんないよね。ただ、なんでも見て吸収しなきゃいけない立場だったので……う〜ん。やっぱりこういった漫画やイラストを描ける人はすごいなとは思ってましたけどね。それ以上に、中村さんのセンスがすごいなって思ってましたよ。メカでもよくあれだけセンス良く描けるなってね。もう、生まれつきのセンスですよね。僕なんかは、数をこなしてどうにか形にしていったっていう気があるけど、中村さんの場合は、デザインするともうそれが洗練されてるんですよね、もともと。そういう洗練されたデザインしかできない人。



■『ゴワッパー5ゴーダム』ゴーダム

― 中村さんの机は、美術部の中にあったんですか？

うん、ずっとあったよ。企画のほうにも席があったけどね。美術をやる人っていうのは、個性の強い人が多いから(笑)、課長としての管理者的な仕事も大変なんですよ。

― 大河原さんご自身は、扱いやすい部下だったんでしょうか？

僕ですか？　僕は扱いやすいですよ(笑)。だから、会社を出る時に、一緒に（メカマンを）作りましょうよって話になったんだろうし。その話はもう、1年目から言ってましたからね。中村さんのほうから、「辞めた時は一緒にやろう」って言ってましたね。

― 大河原さんは、'51年の4月6日付けで、正社員から契約に変わって、その1年後にフリーになられてますね。

その間に、サンライズとのコンタクトもほとんどできてた。それなりに需要があるっていうことが見込めたんですね。それまでに栃平（吉和）さんや長谷川（徹）さんも、タツノコをやめてサンライズに行ってる。サンライズさんと直接のおつき合いができたのは、栃平さんの紹介なんですよ。「サンライズで仕事やんないか」ってことで。それで、いちばん最初に『ろぼっ子ビートン』の内部図解とかね。そういうのから入っていったんです。

― 組合の騒動で、ある時期に70人くらい辞めているそうなんですが。

僕はね、ノンポリだから全然興味もなかったけど、そういう組合運動が活発にあったのは覚えてるよ。でも美術部は関係なかったね。その頃、サンライズの仕事をもらってる下請けの会社から公然と求人に来たりしてましたよ。僕のところに。

― それは、メカデザイナーとして？

『ガッチャマン』は、業界内でも評判が良かったんですよ。それで、その中に見慣れないクレジットで出てるから、目についたってことでしょうね。それ以降は、メカデザインっていう仕事も企画の中に入ってくるようになりましたね。僕が参加した作品は、必ず〃メカデザイン〃って出てましたから。

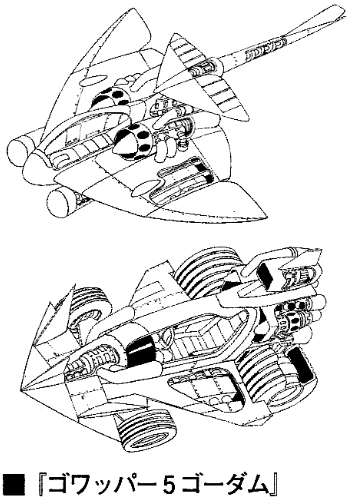
みんな仲間意識が強くて

― タツノコを出られてみて、タツノコの個性みたいなものを感じられたことは？

タツノコっていうのは、一種の学校みたいなとこだと思いましたね。サンライズとかだと、会社にお勤めという感じなんだけど。タツノコの場合は、1本の作品を作るために、みんなが社内にいたわけですよ。だから、プロ集団というよりは、どこか同好会的な感じがありましたね。でも、すごく前向きな人が多かったですよ。表現方法にしても、各セクションがいろいろチャレンジしていた。僕がいた頃は、まだ創立10年くらいで、「こうじゃなきゃいかん」みたいなものもなくて、「あれもやってみよう、これもやってみよう」という気持ちの人が多かったですね。撮影の細野（正）さんにしても「こんなのどうかね」とアイディアを出したりして、同じ作品を作る仲間だったね。そういえば、タバコのパイプを作って、九里さんにプレゼントしたことがある。中村さんがデザインをして、僕が彫ってね。パイプを自作するキットって売ってるんですよ。それを買ってきて。

― 当時作ったものって残ってます？

ほとんどないね。僕は作ってる過程が好きなんで、いろんなもの作ったけど形にして残してないんですよ。そうだな、九里さんのところにもし木製帆船（の模型）があったら、それ、僕が作って売ったやつですよ。あの時お金が欲しくて、「九里さん、買わない？」って、買ってもらったんです(笑)。当時、給料安かったですからね。その分、仕事は楽しかったけど。あと、笹川さんの家の池にあるグズラの噴水とかね。あれも、中村さんと笹川さんが粘土でモデリングして、みんなで石膏

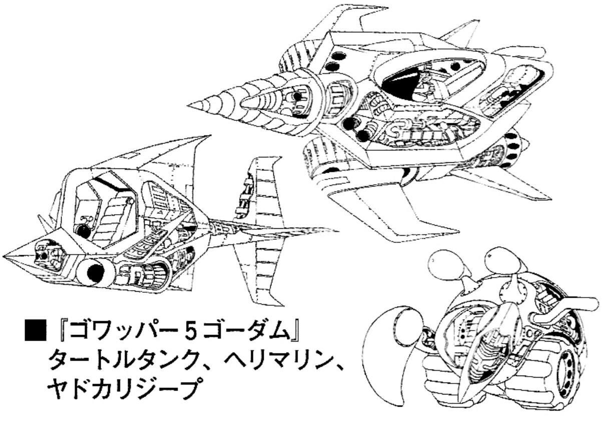


■『ゴワッパー5ゴーダム』エイプレーン、ゲソマシーン

で型を取って、僕がFRPを流して噴水にしたんです。笹川さんがあの家を新築した時に、池に噴水が欲しいってんで、共同作業で作った思い出がありますね。だから、みんなとの仲間意識が強くて、楽しんだよね。入ってすぐ社員旅行もあったしね。伊良湖岬とか、伊勢神宮のほうに2泊3日。社員全員でね。美術部だけでも、忘年会とかやったよ。中村さんは飲まないから、いつも家まで車で送ってってもらってた。ヒドイよね、課長に送らせてたっていう(笑)。

——竜夫さんのご病気については、ご存じだったんですか?

知ってましたよ、全部。僕は意外と、鳥海尽三さんなんかと親しかったんですよ。鳥プロを作る時も呼んでもらったし、鳳工房のゼミの時にも呼ばれたりしましたし、サンライズでも一緒に仕事しましたね。中村さんとも親しかったし、だから誰に聞くでもなく、なんとなしに伝わってたんです。最初に入院した時から、ほぼね。その頃、僕はもう非常勤になってて、自宅で仕事をしてたんだけど、葦プロの『マシーンブラスター』とか、和光プロの『メカンダーロボ』とかをやってて、タツノコ出身の人と仕事をする機会がけっこう多かった。だから、いろんな情報が入ってくる立場でもあったんですよね。竜夫さんのお葬式をやった三鷹の法専寺は、サンライズへ行く道すがらなんで、今でも通る時はいつも手を合わせてますよ。お葬式もよく覚えてます。中村さんとふたりで行ったんですよ。



■『ゴワッパー5ゴーダム』タートルタンク、ヘリマリン、ヤドカリジープ

同じ建物の中にいるわけですから(笑)

——大河原さんのデザインポリシーとは?

これは設定っていう部分にも関わりがあるんですけど、結局アニメーターさんに形を伝達するため、あるいはアニメーターさんに余計な労力をかけないようにするために、線の量の問題があるわけですよね。なるべく線の量を少なくすることを考える。そうでないと、同じタツノコの建物の中に、アニメーターさんもいるわけですから(笑)作画が苦しむような線は引けませんよね。アニメーターさんと同じところにいると、遠慮もあるんですよ。今みたいに、デザインはここでやって、進行さんがそれを持って作画のほうに渡すっていう仕組みだと、その間は見えないですから、何を言われてるかわかんない。何を言われてもここまで聞こえてこないから、その分助かるといえば助かるけど、それがはたして良いことなのかどうかはわからないよね。アニメーターだってプロだから、できるだけ合理的に仕事をしたいはずで。なるべく少ない労力で良い結果を出したいと思ってるはずですからね。それが聞こえてこないのはちょっと寂しい。タツノコ時代は(アニメーターの声が聞こえてくるのが)逆に怖かったんですけどね(笑)。僕はまだ入ったばかりで、威張っていられる立場じゃなかったしね。あの時代にあの鉄獣みたいな線の多いものを動かしてたっていうのは、アニメーターさんは大変だったと思いますよ。あと、特効の朝沼(清良)さんにしても誰にしても、能力のある人が集まってましたよ。いろんなプロダクションがあるけど、僕はタツノコがいちばんだと思ってた。だから、よそで仕事をする時でも怖くなかったですよ。タツノコの外へ出て仕事をしてみると、タツノコ出身の人は真面目な人が多い気がするね。僕も仕事に関しては真面目ですし、質はどうかわかんないけどね(笑)。贔屓目なしに、能力のある人がたくさんいたし、あれで給料が良ければ最高でしたよ(笑)。

(2002年5月16日、於/東京都稲城市「OFFICE・K」)

多田喜久子

（ただ・きくこ）

10月9日、福岡県出身。日本大学芸術学部の芸術科を卒業後、'67年にタツノコプロの美術課に入社。『マッハGoGoGo』などの背景を手がけた後、同じく背景を手がけていた『昆虫物語　みなしごハッチ』の途中から各話の美術設定も担当するようになる。以後『樫の木モック』『けろっこデメタン』『新造人間キャシャーン』などで美術設定を担当。代表作は『風船少女テンプルちゃん』『とんでも戦士ムテキング』『超時空要塞マクロス』『OKAWARI-BOYスターザンS』『炎のアルペンローゼ　ジュディ&ランディ』『ドテラマン』など。

'87年4月、タツノコプロの美術部門から独立し、ほわいとまっぷを設立。『赤い光弾ジリオン』『おらぁグズラだど(新)』『闘将!　拉麺男』の美術監督を担当の後、フリーに。『毎日が日曜日』(美術監督)、『美味しんぼ』『新世紀エヴァンゲリオン』『FUNK THE PEANUTS ハイッ!ハイッ!ハイッ!ハイッ!』(背景）などに参加。

'96年頃から、古巣のタツノコプロへ契約社員として復帰。『マッハGoGoGo(新)』『世紀末伝説　ワンダフル　タツノコランド』『タイムボカン2000　怪盗きらめきマン』『よばれてとびでて！アクビちゃん』で美術監督（各話の美術監督も含む）を歴任し、現在に至る。

私はてっきり新人歓迎会だと思って（笑）

―― 多田さんがアニメの道を志したきっかけからお願いします。

そんなものないですよ（笑）。絵の勉強をして、卒業就職の時に、勉強したことが役に立つ仕事を探してただけだから。タツノコの中でも美術部にいた人は特に、アニメじゃなくて絵が好き、描くことが好き、そういう連中だと思うんですよ。第1期アニメブームになって、「アニメーション」っていう言葉も定着したわけですけど、私が入社した頃はまだ「テレビまんが」ですからね。

―― 希望としては、やはり画家になりたかった？

画家で食べようなんて、そんな大胆不敵なことはねぇ。ただ教員免許は持ってても、教員にはなりたくない。絵の仕事につきたいなぁ……と。なぜここ（タツノコ）に決めたかっていったら、会社の周りの環境ですよね。武蔵野の林がたくさんあって、鳥が飛んでて、お昼休みには雑木林でバドミントンやキャッチボールをやったり、とにかく自然がいっぱいだったんですよ。だから決めたんであって、アニメが好きだからとか、そんなちゃんとした大義名分はなにもない。私、油絵なん

ですけど、アニメの場合ポスターカラーでしょ。キャンバスじゃなくて紙に描く、まるっきり違う。けど絵を描くということでは同じだから。入った当初は、与えられたものをコピーのように描かなきゃいけない立場だったけど、それがやっぱり、がんばってるうちに、自分の個性がプラスアルファされたり、演出さんとの打ち合わせで抽象的なものを具体化するとか、そういう範疇に来ると面白味が増してきますよね。会社とはいっても、上下関係も堅苦しくないし。それで、ついつい不精ものだから、同じところで、引っ越しもしないで同じ仕事をしてきたっていう、それだけのことでしょう。

―― 多田さんが入社されたのは、何を作っていた時だったんですか？

入社日が『マッハGo Go Go』の第1話のオン・エアの日だったんです。放映記念でみんな集まってるのを、私はてっきり新人歓迎会だと思って(笑)。あの当時はまだ、誰もがテレビを持ってる時代でもなかったから、会社でみんなで見たっていう。

―― 会社にはカラーテレビがあったんですか？

いやいや、まだカラーの時代じゃないから。ただ、リテイク出しとか、その当時は会社でやってましたんで。この部屋が編集室だったから、ここにスクリーン張って。その時点ではカラーで見たけど、テレビでは白黒です。

―― 入社された当初に、背景の書き方から基本を教えてくださったの、どなたなんですか？

教えてくれる人はいなかったですよ(笑)。先輩のやってる作品をコピーしたり、やってるのを後ろから見たり。今の子はそういう学び方をしないから、手取り足取りこれはこうするんですよ、と言わないと、育っていかないから、教えるものは大変なんですよ、時間かかっちゃって。昔は、ほっといてくっついてくる人だけが残っていくわけですから。『マッハ』はね、岩場が多かったでしょ。岩場のフォローって大変なんですよ。それこそ水張りして一気に。それができなくて、入社間もなく徹夜しましたもんね、

―― 多田さんが『マッハ』の放映日に入社された頃の美術部の様子というのは？

背景課の課長が山口あきらさんで、中村光毅さんや新井寅雄さんより年輩の方で。あと、ずらっと10人くらい。

名前から覚えないとわからないわけだから

―― 学生時代は油絵の勉強をされていたということで、絵を描くのに美術に使うポスターカラーは使われたことはなかったんですか？

学校で使う主な画材っていったら水彩絵の具でしょ？　で、油絵やるから油絵具、他にクレヨン、クレパス、パステルとかアクリルとか、そういうのはあるけど、ポスターカラーで、なおかつ絵を描くっていうのは、ある意味驚きだったですよね。

―― ガッシュとかはあったんですか？

でもメインとして使ったことはないから、本当ないですよ。入社していちばん最初に覚えたのは、色の名前。60色くらいあるわけでしょ。その名前から覚えないとわからないわけだから。12色とか、メインカラーはわかったとしても、その中でまた分かれているわけで。それを実際に塗って、どういう色かっていう。絵の具の持つ性質、あるんですよ、質の悪い絵具とかね。ひねくれたのとか、収拾のつかない絵具とか。水張りとかやるんですけど、ここまで塗りたいのに、その倍くらい絵の具が滲み出ちゃうとか、そういうのとかね。それから、AとBの絵の具を混ぜたらどうなる、何対何の割合だったらどういう色になるとか、3色混ぜたらどうなるとか、そういうところからの勉強でしたよね。ポスターカラーはやったことなかったから、自分自身の感覚をゼロにして、先輩たちの言うことを聞いて、与えられたテーマをこなしていく。長くかかるのは嫌だから、短期にマスターっていう（笑）その負けん気はありましたよね。

―― 紙は画用紙だったんですか？

いや、もっと高級な紙で、いわゆる画学紙っていう紙ですけど。学校で使う、画用紙よりは、もっといい紙で。今、紙の種類がだいぶ減ってると思うんですけど、一時、ものすごく氾濫した頃があったんですよ。平面塗りをするポスターカラー

で立体画像を出すっていうことは、絵の具の濃淡、水とか、いろいろテクニックを使うんで、水張り、というのが基本中の基本テクニックとしてあるんですね。『みなしごハッチ』とか『けろっこデメタン』とか、ああいうクローズアップされた世界っていうのは、植物の柔らかさとかを出すのには濡れてるうちに一気の処理っていうのがあって、そのために水張りっていうのは、ボカシのテクニックを入れる上で非常に大切なんだけども、それに耐えうる紙、という要求は強かったですよね。だからそういう紙を選んで購入するという。いろんな紙質のをいくつか入れてやってましたけどね。このところ、10年以上ずっと同じ紙を使ってるけど。

――水張りっていうのは、木の板かなにかに画鋲で……？

そんなのしてたら1日に何枚も描けないじゃない(笑)。机の上に紙を置いて、刷毛でこう、描いていくんですよ。大きいポスターを描く時とかは留めたりしますけども。

――『マッハ』の頃というと、背景課の皆さんが全員で作品にかかっていたと思うんですが、仕事の割り振りというのは？

それは、山口（あきら）さんが誰々はこのシーンと割り振って。

――山口さんが皆さんの得意不得意みたいなものを考慮して？

あったんじゃないですかね。苦手を承知で送ったら、直しも大変だし、時間もかかると思えばそれはやらないですよね。

――『マッハ』の時に先輩の技を盗むようにされていたということですけど、同時に、必要な技法をご自分で編み出すっていうこともあったんですか？

あの頃、外注さんから上がってくる背景が、東映さん系統とか虫プロ系統とか、はっきりしてたんですよ。それを見て「これいい、これ真似よう！」とかね。撮影終わったのを1枚借りて、仕事の合間なり終わった後なりにそれを見ながら描いて。最初に目にして思ったのは、岩場の描き方が、東映の人間、上手いな、と(笑)。タツノコ社内で描く岩と、東映から上がってくる岩って、岩質が違ったんです。切り立ったような岩とか、わりと軟質な、手足をかけて登ろうとしたら崩れるような、あるでしょ？　そういうのを描く人が、社内にはいなかった。やっぱり、いろんなバリエーションを身につけてたほうがいいわけですからね。

絵って、教えられて身につくモノじゃないんですよ。描き込んで描き込んで、ある時、自分で「えっ？」ってビックリするほど描けている。徐々にとか、そんなんじゃないのね、1段ずつっていうんじゃなくて「描けないなぁ、描けた！」って感じで。その時はすでに手が覚えてる。それを忘れないように、手首の回し方とかを身につけていく、それだけですよね。理論は教えてくれるかもしれない。これ何色使ったんですか、とかね。でも、きれいにボカすにはどうしたらいいですか、となったら、やっぱり自分で努力する以外にない。それだと思うんですよ。後はよく観察して、よく練習して、自分がその気になること。たとえば私、俯瞰とかあおりとか描く時に、感覚としては鳥になったつもりで、下に町並みを想像しながら、レイアウトを入れていくとか、そういう形になると思うんですよ。

――『グズラ』『ドカチン』『ハクション大魔王』だと、『マッハ』とはまた内容がガラッと変わって、要求される美術も当然違ってくるわけですよね？　その時、イメージを固められるのはやはり中村（光毅）さんの仕事で、多田さんたちは、それに歩調を合わせようと頑張っていらしたということなんでしょうか？

中村さんのほうでスタイルを決めて、竜夫社長との話の中でOKがもらえたら、そのボードを持って美術へ来て、次はこういう作品で、こういうものをこういうスタイルでやるからって言うんで、そうするとみんなそのボードを見ながら、1週間か何日か、筆使いを練習するわけですよ。例えば『ガッチャマン』のメカ、鉄板の壁処理ありますよね。それから『デメタン』みたいな柔らかい蓮の茎の描き方とか、いろいろ違いますから。はい次はこれって出されたんじゃあ、とても対応できないっていうか。昔のタツノコはそれほどバラエティーがありましたから。次に来るのはとにかく違うものだっていうのは、みんな覚悟してました。最近の作品はそういうバリエーションがないっていうか、割と統一された絵柄だけど、そういうのに比べれば昔はハードでしたね。

――『マッハ』ではレースで舞台が変わるってこ

とはあっても、それに合わせて、美術の様式自体まで変えようって意識は、当時まだなかったんでしょうか？

『マッハ』の時はそうだったかもしれないですね。だから、例えば中村さんが担当のものと、新井さんのものとやっぱり違いがありましたし。極端なばらつきはなかったと思うんですけど、逆に統一性、スタイルとかいうことだと、その後の『グズラ』とかのほうが、しっかりしたものができたと思うんですね。

——『グズラ』になるともう、多田さんが描く時に、はっきりとスタイルを決められて描かれた記憶があると？

スタイルの記憶として、「おおっ」て思ったのは、やっぱり『ハッチ』じゃないですかね。ただ、作品として昔のを見て、割と統一感が出てきてるのは『グズラ』あたりからだと思うんですよ。『いなかっぺ』にしても、あそこらへんになったら、普通の住宅街でも、ぱらぱらって背景を見ただけでも、これはなにってわかる。でも『マッハ』あたりだとぐらつきがあるっていう感じ、ありますよね。

——『グズラ』『ドカチン』『ハクション』の頃って、タツノコって不思議な無国籍性っていうか、日本なんだろうけどキャラクターがちょっとバタ臭いっていうところがあるんですけど、美術でもやはり、純日本的な要素をあまり表に出さないようにとか、キャラクターに合わせて無国籍ふうにするような工夫とかはされたんですか？

……そういうのを意識させない作品だったんじゃないですかね。だから、例えば『ドカチン』とか『グズラ』とかであれば「かわいい」とか、そういうのが優先されるから、日本的だとか、何々ふうとかっていうよりは、かわいいとか、かっこいいとか、センスがいいとか、そういうもので持っていってるから、日本住宅でもヨーロピアン調になるとかいうだけのことであってね。

一緒に泣いたというかね

——タツノコのどなたに伺っても、竜夫さんへの強い信頼というものを感じるんですが。多田さんはどんな印象だったんでしょう？

（当時のタツノコは）家庭的でした。会社として完成されてない、ファミリーっていうか、そういう雰囲気は多分にありましたね。いい面悪い面ありますけど。大きくなって、会社っていう完成された組織体ができる以前でしたから、吉田竜夫さんという方そのものも、会社の社長だとかそういうんではなくて、アニメが好きな仲間っていう認識が強い方でしたから、苦しむのも楽しむのもいっしょ、みたいな。気軽に声をかけてくださったりとか。

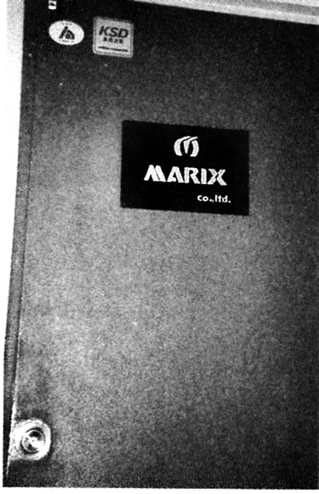
——何か多田さんのなかで、印象的なエピソードはありますか。

美術の人間が仕事の後で集まって喋ってたんです。すると社長さんが入ってみえたんです。そこで、社長が売れる前の苦しい時代の話として、タクアンのしっぽがひじょうに美味しかったって話をされたんです。それくらいの貧しさだった、という。それまでは社長という認識で捉えてましたけど、そういう苦労話を伺って、早くにご両親を亡くして、とか。私が『てんとう虫の歌』第1話の美術設定をやってる時に、父を亡くしたんです。で、戻ってきた時に、美術の部屋の入り口で社長から声をかけられて、社長が涙を流して、いっしょに泣いたというかね。亡くなられた時は、上層部とか親しい人はご存じだったと思うんですけど、普通の社員には一切秘密でしたから、ショックでしたよね。

——入院して、帰ってこられると思ってたのに。

ええ。当時は病名も告知せず、ていう、そういう時代でしたから。やっぱり言って欲しかったっていうのは、それは今でも時々思います。今、お元気だったらなぁって。怖いけど優しい方でしたね。『決断』の時も、スタッフのなにがしかが泊まり込んで必死でやってたわけでしょ。今みたいにコンビニがあるわけじゃないし、こんな田舎にあるところだから、夜食逃すと食べるものがない。っていう時代でしょ。そしたら、奥様がおむすびを沢山握って、車で運んで下さって、どうぞ、とかね。そういう家庭的なところでしたね。

（2002年5月20日、於／東京都国分寺市「竜の子プロダクション」スタジオ）



向井稔

（むかい・みのる）

1964年10月、タツノコプロに入社。『宇宙エース』の頃から仕上課に所属し、『マッハGoGoGo』『おらぁグズラだど』『ドカチン』『紅三四郎』『ハクション大魔王』などで、色彩設定や仕上（彩色）を手掛ける一方、コンプレッサーによる特殊効果も、業務の一部として兼任する。'70年の『みなしごハッチ』からは特殊効果という役職が新たにクレジットされることになり、昆虫の羽や自然描写などに、質感を感じさせるためのリアルな処理が施されるようになった。また『決断』や『科学忍者隊ガッチャマン』のようなメカニックの活躍を主体にした作品では、朝沼清良らと共に生み出したリアルな爆発描写が威力を発揮し、これらは同社の得意路線へと成長していくことになる。

'74年９月にタツノコプロを退社し、フリーとなって『アンデス少年ペペロの冒険』の色彩設定を担当する。

以降、特殊効果専門のマリックスを設立し、『くじらのホセフィーナ』(色彩設定)、『宇宙戦士バルディオス』『銀河鉄道999』『宇宙大帝ゴッドシグマ』『魔法のプリンセス　ミンキーモモ』『特装機兵ドルバック』『超獣機神ダンクーガ』(特殊効果)と代表作を列挙するときりがないが、主にメカものを中心に活躍。

タツノコに押しかけたんです

私は関西でアパレルメーカーに就職したんですね。たまたま、読売新聞の朝刊（でタツノコの社員募集）を見て、あぁこれは絵を描ける仕事だなぁと思ってね。それで応募したんだけど、２回滑ってね。

——タツノコに2回滑ったんですか？

そうです。漫画ってのは見たことはあるけども、あんまり好きじゃなかったし、描いたことなかったんですよね。ただ絵の世界に入りたいなぁっていうのが、元々強いんですね。タツノコの試験が郵送（で応募）なんですけど、宇宙エースがグランドをぐるぐる回ってるっていうアニメを描かせるんですよ。だけど、２回も滑ったから、このままは面白くないと思って、家出同然でこっち来て、タツノコに押しかけたんです。

——それはアニメーターの募集ということだったんですか？

いや、それは美術とか一切合切含めた試験ですよ。

——タツノコに押しかけられたという話ですが、本当にいきなり押しかけてしまったんですか？

うん。だから、無給でいいから置いてくれって。無給でいいんだったら、入れてみようって言われて(笑)。

——それまで務めてた会社も辞めてきちゃったんですか？

もちろんそう。

——直接行かれたその日から、お仕事を始めたんですか？

その日から。そういう記憶があるねぇ。

——その時、向井さんはおいくつだったんですか？

20……21か22歳になろうって時かな。

——で、どこの部署にまず回されたんですか？

仕上げですよね。気が付いたら、最後まで仕上げですよ(笑)。

——タツノコもまだできたばかりの頃でしょうし、仕上げの部署も新人ばかりだったんですか？人数はどれくらいいたんでしょう？

新人ばかりですよ。30人から40人はいたでしょうねぇ。

——向井さんが入られた頃っていうのは、まだ特殊効果というセクションはないわけですよね？どういうきっかけで、向井さんが特殊効果をやることになったんですか？

当時の仕上課の課長が「お前、ちょっとやってみるか？」っていう話でね。いきなりですね。ただ、それ以外の普通の塗りの仕事なんかも、忙しかったから、なんでもやらされてね。

——ブラシの使い方とかは誰に教えてもらったんですか？

その課長が東映（動画）から来た人で、そうした技術があるから、ブラシってのはこうやるんだよって教え込んでくれました。

——特殊効果、ブラシをかける時っていうのは、演出、作画からの特別な指示があるわけですよね？

この仕事ってのはね、なければないですむんですよ。あればね、きりがないんですよ、できるなら、全カットでもやって欲しいみたいなもんですよ。だから、最初にある程度の打ち合わせはするんですよね。現場からしたら、あまり忙しいのも嫌ですから、なるべく省こうって意識もありますよね。『宇宙エース』の頃はまだしも、『紅三四郎』の頃なんかだと、演出家の欲がどんどん出てきて。

——演出家のやる気が出てくるに従って、注文が具体的に増えていくみたいな感じで？

演出家さんも経験ないからね、頭にあっても、うまく言葉で表現できないんですね。だから、あでもないこうでもないって、お互いに勉強したって感じなんですよね。

——『宇宙エース』にシーホース号ってロケットが出てきますけど、そうしたメカニックにブラシを入れるっていう発想は、どなたのものなんでしょう？

やっぱり吉田竜夫さんですよ。経営者でありね、画家ですよね、あの人はね。まったくの絵描きなんですよ。だから、ああいうものでも質感を出せという発想が出てくるんですね。風防にしても影にしても、最初は透明絵の具っての使ってたんですよね。だけど、一晩置かないと乾かないんですよ。それで考えてるうちに、「あぁ、ブラシにすれば簡単じゃないか」ってことに気がついて。

——その透明絵の具っていうのは、セル用の絵の具とは別に発注して作ったんですか？

いや、元々透明絵の具ってのはね、たぶん、東映（動画）さんが作ったと思うんですよ。

——ブラシに使う絵の具というのは、最初の頃はなにを使われていたんですか？

最初は今みたいにリキテックスってなかったら、全部ポスターカラーですね。

——目詰まりしません？ ポスターカラーで。

あぁ、それはひどいですよ。しょっちゅうノズル替えて。それにすぐ剥がれるしね。傷もつきやすいし、そういうリテイクが多かったですよね。

200色が300色に増えたんですよ

——『マッハGoGoGo』で、現在、第2話のエンディングのテロップカードだけは残っているんですけど、それを見ると「色彩設定＝向井稔」って名前になっているんですが、特殊効果だけでなく、色彩設定もされていたんですか？

あの時はまだ、特殊効果だけじゃなくて、色彩設定やいろいろやってたんです。『紅三四郎』で昼と夜のシーンの色を変えたのも私でね。あと、逆光のシーンは一時、フィルターかけるとかしてた

■『紅三四郎』

んだけど、それより、トレスを黄色とか、寒色とか暖色、うまくすれば、よい効果が出るんじゃないかって思って、そこから色トレスが始まったのかな？　色使うために、原画さんにこっちのほうから説明して、3色から4色ぐらい分けるように、青い線だと光を転換する意味だとか指示しましたからね。

――『紅三四郎』の第1話で、三四郎の影が紫でこう入るっていうのが、非常にカッコよかったんですけど、あれも向井さんが？　あの紫の影が入るっていうのは、後々に色指定やる人たちにかなり影響力があったと思うんですけど。

私、全部私ですよ。これ（『紅三四郎』）からね、200色が300色に増えたんですよ。

――そうすると、タツノコ側から要求した新しい色を作ったわけですから、色番号はどうなったんですか？

調色したのは、こっちなんで、もう自分勝手ですね。それはなんでもいいんですよ。向こうに色見本渡して。これとこれを混ぜたらこうなると、色見本とデータ、全部渡すんです。

――『三四郎』あたりから、3段影みたいなのがつくんですけど、その3段目の色っていうのは向井さんが決められたと？

そうですね。そうした作業でいちばん大変だったのは『決断』ね。これは夜と夕方、昼と3色いるのかな？　全部色が違うんで。

――『紅三四郎』で、敵の盗賊が持ってる剣のところに、銀紙が貼られているように思うんですけど。

あれ、私やったです。他にやってないことやらないと、やっぱつまんないですよね。

――あれは紙を貼ったんですか？

糊で。撮影の現場でカットして貼りつけて。しっかり貼りつけてあると、よじれちゃうから、糊も軽く塗って。

――ということは、撮影する直前に？

直前です。当時は、そういうことばかりやってました。銀色を塗っても、グレーに見えちゃうんで、なんとか銀色に見せろって、社長が言うんですよね。それでどうしようって考えて。ただラッシュ見たら、ライトの影なんかで微妙に黒くなってたり、グレーだったりするんで、ライティングの問題がやっかいでしたけどね。

――テストしながら撮影していく感じだったんですか？

そうそう。撮影まで立ち会うとかね。みんな、好きだったのかなぁ、やっぱり。『宇宙エース』の頃だと「あっ、俺が描いたのが動いたー」って、それで泣く人もいたからねぇ(笑)。そういう時代だったからねぇ。

――でも、それもやっぱり、あのー、撮影と仕上げが同じ屋根の下にあるからできたんですよね？

そうですね。

頭に全部

入れとかないと

——『紅三四郎』の頃からトレスマシンが導入されているようなんですが、仕上げの仕事になにか変化はあったんですか？　例えば原画や演出がこれはマシンでかけてくれ、これはハンドトレスで、と要求するような。

　ハンドトレスにしても、鉛筆のHBと2Bでも細かい差があるんですよね。船で、小さいものとアップにしたものと、同じ鉛筆だとね、出るものと出ないものとあるんですよ。だからね、半々ですね。うまい人には手描きでやってもらう。決めポーズだけはマシンにかけるとかね。

——その割り振りの判断は向井さんがやったんですか？

　全部です。やっとかなきゃいけない。全体を見て、それで1個ずつ見て、色指定する時に、あ、これはマシン、これは手描きって書くんです。絵コンテ1回見たらもう、頭にワンカットワンカット全部入れとかないと。

——『ガッチャマン』の頃というのは、そうした入念な作業というのは、社内で仕上げをやっていればこそだと思うんですね。やはり、外注というのはほとんど使われていなかったんですか？

　ですから、特殊効果は全部社内でやるしかないですね。

——外注で上がってきた作品も含めて、特殊効果は全部社内っていうことですよね？

　そう。何10本かあるの、全部やらなきゃいけない。毎日、4、5本があったですね。

——就職された頃のお話からすると、仕上課に回されたのは偶然だったということなんですが、結果、特殊効果に対してひじょうに情熱的になられたわけですが、その理由というか動機というのは、なんだったんでしょう？

　やっぱり、吉田竜夫さんの存在が大きかったよね。ホントに、なんていうんだろう、芸よりも人間に惚れるっていうかね。やっぱり吉田竜夫さんが亡くなってから、アニメ界全体から情熱もなくなった気がするね。

（2002年5月23日、於／東京都杉並区「マリックス」）

■『紅三四郎』

タツノコプロ JACKET GRAFFITI

▲『宇宙の騎士テッカマン』　品番号／SCS-262　形式／17㎝ＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1975年７月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『タイムボカン』　品番号／L-1278P　形式／17㎝ＥＰ　発行所／ワーナー・パイオニア　発行年月日／1975年11月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『タイムボカン』　品番号／APS-5036　形式／17㎝フォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「博士はどこだペッチャ」

▲『ゴワッパー５ゴーダム』　品番号／SCS-289　形式／17㎝ＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1976年４月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『ゴワッパー５ゴーダム』　品番号／CW-7076　形式／30㎝ＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1976年８月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／1500円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌２曲、他

▲『ポールのミラクル大作戦』　品番号／SCS-322　形式／17㎝ＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1976年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『ポールのミラクル大作戦』　品番号／APS-5060　形式／17㎝フォノシート　発行所／朝日ソノラマ　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「ベルトサタンをやっつけろ!!」（脚本／竜の子プロ出版部）

▲『ポールのミラクル大作戦』　品番号／LM-2002　形式／17㎝フォノシート　発行所／徳間音楽工業　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／650円　収録内容／正主題歌、その他の竜の子プロ作品主題歌３曲

▲『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』品番号／KV-47　形式／17㎝ＥＰ　発行所／ビクター音楽産業　発行年月日／1977年２月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』品番号／KV-48　形式／17㎝ＥＰ　発行所／ビクター音楽産業　発行年月日／1977年２月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／挿入歌「ドクロベエさまに捧げる歌」「ヤッターマン・ロック」

第七章　それぞれの匠（たくみ）

■『宇宙の騎士テッカマン』より

（ほその・ただし）

1965年にタツノコプロに入社。元々は漫画のアシスタントとして応募するものの、仕上課へ配属となり、その後、作画へと異動。丁度その頃、社内に撮影台を設置しようということになり、元々の機械好きが高じて撮影室へ。本格的に社内での撮影が開始された『マッハGoGoGo』から撮影に携わっており、以降『おらぁグズラだど』『ドカチン』『紅三四郎』『ハクション大魔王』『昆虫物語　みなしごハッチ』に参加。『決断』からは撮影チーフとなり、『樫の木モック』『けろっこデメタン』『科学忍者隊ガッチャマン』『昆虫物語　新みなしごハッチ』などで、様々な実験を試みながら画作りを進めていった。

'74年8月にタツノコプロを退社し、撮影マンから演出家へと転身。本来は音響制作プロダクションであったアーツプロが、'76年頃からアニメの制作に乗り出していたため、同プロに所属。演出家として東映動画（現／東映アニメーション）や、ダックスインターナショナルのテレビシリーズに参加。'77年には高橋資祐がチーフディレクターを務めた『超スーパーカー　ガッタイガー』でアシスタントディレクターを務める。その後『宇宙戦艦ヤマト2』の制作をアーツプロが受注することになり、新設の谷原スタジオで技術指導をするうちに、折からの人手不足で、自らが撮影監督の任を負うことになる。

'79年に高橋プロへ移り、劇場版『エースをねらえ！』『ルパン三世　カリオストロの城』『あしたのジョー2』『新ど根性ガエル』『スペースコブラ』『CAT'S EYE』などの撮影に参加。その後、スタジオワールド、ファルコンで撮影監督を務め、『D-1デバイスター激闘編』などに参加するが、同社の撮影部が閉鎖されることになり、'00年7月に引退した。

細野正

社長の所に行って、土下座して謝りましてね

僕の親父は本を読むのが趣味で、「漫画も本のうち」ということで子供の頃には漫画は買ってくれてたんです。さらにお袋は映画好きで、よく劇場に見に連れて行ってもらってました。だから、漫画や映画といったものに対する興味というのは、子供の頃からあったんですよ。思えば、僕が撮影だとかいったことをやりたいなって考えたのは、グレゴリー・ペックの『白鯨』を見に行った時なんです。鯨が船にぶつかって壊したりする映像を見て、親父に「あんなのどうやって撮ったんだろう?」って聞いたら、「あれは作り物なんだ」って教えられましてね。それで「うわあ、凄いな」って感激したんですよ。それから、東宝の怪獣ものや戦争ものといった、いわゆる特撮映画を見るようになっていったんです。その後、僕は高校1年の時に、漫画家になりたいって中退しちゃいましてね。その頃、新聞広告にタツノコのアニメーター募集と一緒に、漫画のアシスタントも募集してるのを見付けたんです。そこで、それまで描いた絵なんかを持って、昭和40年の9月にタツノコに面接を受けに行きました。でも、僕が行った時に

は既に何人かアシスタントとして入ってしまってましてね。それで、仕上課で色塗りをやることになったんです。その頃、僕はアニメの技術も知識もありませんでしたが、タツノコではそういう人間はまず仕上げから、ってことになってたんです。

——タツノコに入られる上で、吉田竜夫さんという存在は意識されていたんですか？

いや、特に竜夫さんの会社だから云々という考えはなかったですよ。でも、後々考えてみると、竜夫さんの描かれてた『スーパー・ジャイアンツ』なんかは好きでしたから、入るべくして入ったのかなって気はします。竜夫さんは怖い人だったけど、非常に気持ちの中で温かい部分を持っている人でしたね。会社に出入りしてて「社長助けてくださいよ」っていうと、拾い上げてくれるなんてことがあった人なんです。それに撮影で何か変わったこと、新しい効果のものをやったりすると、温かい、ニコっとした目で見ててくれました。だから僕は、竜夫さんが亡くなられた時、タツノコを辞めてもう何年か経ってたけど、葬儀だけは行きましたからね。やっぱり、他にもタツノコを辞めて結構経ってた人も何人も来てましたし。人情味のある人だったんですよ。それにある時期、仕事が段々増えてきて、1ヵ月泊まり込みになったことがあったんです。でも撮出しして撮影に持ってくるのが、夜の8~9時なんですよ。そうすると昼間は仕事がないから、みんなブラブラ遊んでるわけじゃないですか。だから、「今日はみんな帰してくれ。明日、また朝一番から頑張ってやりますから」って、上に掛け合ったんです。そうしたら、どう間違ってか「撮影が仕事を拒否している」と伝わってしまいましてね。それで上の人たちが「もういい、全員クビだ」って、かんかんに怒ってしまったんです。そうじゃないんだって説明しようとしても、聞いてくれなくなっちゃったんですよ。それで、僕は社長の所に行って、土下座して謝りましてね。「クビならクビでいいですけど、関わった以上、この話数だけはやらせてください」ってお願いしたんです。そうしたら、社長のほうも「よし、わかった。今回はこのままやってもらう」と納得してくれました。吉田竜夫という人は、そういう男気のある人でしたね。で、結局その日も徹夜しましたよ(笑)。

「今日からキミ、撮影のチーフだから」

——撮影のお仕事をされることになったのは？

僕がタツノコに入って6ヵ月くらい経った頃に、会社でカメラを1台買って、そこで初めて撮影部ができたんです。それまでは、撮影はネズプロといった所に出していたんですが、『宇宙エース』の終わりくらいには社内でも撮影するようになってました。で、僕はもともと撮影に興味がありましたから、仕事をやりながら暇な時間ができると、よく撮影室へ覗きに行ってたんですよ。それでそのまま、撮影の助手として撮影部へ移ることになったんです。ところが、僕が撮影助手に入ってから1年たたない内に、『マッハ～』の途中くらいで撮影部のメンバーがほとんど辞めちゃったんですよね。こっちはやっとフィルム装填とか覚えて、わかってきた頃にはもう上の者がいないんですよ。その時点では、僕と入りたての新人がふたり残っていただけ。それで（吉田）健二さんに、「今日からキミ、撮影のチーフだから」って言われまして(笑)。今から考えると、タツノコも勇気がいったと思いますよ。まあ、でも途中で上のほうでも「素人に毛が生えたような奴がやってる」って心配になってきたんじゃないかな。池田（仁男）さんが制作部の部長という形で立つことになったんです。僕は役名で言えばチーフ代理ですね。

——『紅三四郎』では、オープニングの夕日をバックにタイトルが出るあたりなど、非常に印象的ですよね。

あれはもう、完全にオプチカルですね。太陽と、絵が崩れていって、紅三四郎の文字になるところはハイフォンで撮ってます。確か文字がヒュッと出てきて、バンと向こうへ行って決まるはずなんだけど、そこの部分はズームイン、ズームアップで撮ってます。それとストロボ。あれは池田さんにやってくれって言われてやったんですけど、一連の動きの絵を1枚ずつ2コマとか3コマとかずらして撮ってるんです。その後にもっと別の方法も開発されていくんで、実はこの時のストロボは

あまり成功してないんですよね。ただ、当時アニメーションで初めて使ったから、他の会社は「あっ」となったでしょう。まあ、もともとのアイディアはこれの変形したものが既にあったんですが、こういう形で使ったのはあの作品が初だったんですよ。

—— 第1話で船の炎上シーンは、ミニチュア撮りですよね。

あれも、池田さんが言い出したことですね。中村（光毅）さんがミニチュアの片側だけ作って、わざわざライトとハイスピードカメラを借りてきて、会社の外で燃やしたんですよ。でも燃やしたはいいけど、火が出てこない。しょうがない石油撒けっていうんで、バッとかけちゃったら、バーッと燃え上がっちゃって(笑)。

—— 『紅三四郎』では、フジフィルムの技術賞をもらってますね。

実は、フジフイルムではカラーのムービー用フィルムはそれまで出してなかったんですよ。それが発売されて、いちばんはじめに使ったのがタツノコだったわけです。それで実際使ってみて、そこそこの上がりになってたんで賞をもらえたんですよ。随時、何か技術的なことを入れていこうと思ったのは、この作品の後半くらいからですね。もともと僕が持っていた「特撮的なことをやりたいな」って部分と、『紅三四郎』という作品がうまくかち合っていったのかな。そしてそれがピークになったのが、その後の『決断』とか『ガッチャマン』なんですよ。

最後の日にはみんなバタバタ倒れちゃいましたよ

—— 『決断』は現実にあった戦争を描写するということで、要求される画面の効果が桁違いだったと思うんですが、撮影であそこまで撮ろうっていうのは、細野さんの自発的な思いからだったんでしょうか？

そうですね。当時のタツノコの流れとして、漫画チックなものから写実的なものに変わっていく過程で、それの一種の頂点ってのがあのあたりの作品ですよね。だから、今までにないようなことをやりたいなって考えはありました。例えば、アルミ箔を潰して、その上にサランラップを広げて海の効果を作ったりといったこともしてます。これだと、スチールで1枚の写真として見た場合、本物に近く見えるんです。それに、洋上の連合艦隊などを、ミニチュアで撮ったりしました。ミニチュアにしたって、当時はプラモデルで出ていないものが多かったですから、僕が自分で作ったんですよ。もともと、子供の頃から模型作りは好きでしたから、飛行機の部品なんかを組み合わせたりしてね。それに、この作品のメカを描いている人たちって、本当の絵描きさんなんですよ。だから、実際に物がないと描けない。しょうがないんで、僕が設定のための資料として、出てくるメカの模型を全部作ったんですよ。そんな感じで、撮影とは関係ない部分でかんじゃったから、他にやりたいことがもっとあったんだけど、そっちのほうがあまりできなくなってしまったんですよね。

『決断』といえば、第1話のラストカットがもう大変でしてね。艦隊が攻撃を終えて、スコールの中、引き上げていくというシーンなんですが、これが3日もかかったんですよ。あれは、船が手前から奥に重なってくるのが、全部マルチなんです。で、手前がモーフィングしてるし、最後に南雲の顔が出てきて回るし、とんでもなく大変でしたね。最後の日にはみんなバタバタ倒れちゃいましたよ(笑)。でも、それだけ時間をかければ良いものができるんですよね。今はなんでも短時間でやらせようとしますからね。

—— 『ガッチャマン』について、撮影面で印象に残っているような事はありますか？

レベル的には『決断』をそのまま引きずっている部分がありましたからね。会社はもう、完全な実写作品的な感覚で作っていたというところがあったと思います。例えばキノコ雲を作

■『科学忍者隊ガッチャマン』
第1話のキノコ雲

るのに、誰かの家で金魚鉢として使ってた水槽を持ってきて、それに水を張って絵の具を流して撮ったりしました。完全なキノコ雲じゃなくて、ブワーっと上がっている感じの雲になっていましたけどね。あれは本編でも使われているはずです。それと、地球を立体で作ったのも、僕のアイディアなんですよ。近所の金物屋で、いちばん大きい金ボウルを買ってこさせましてね。でも、ボウルって底の所がぐらつかないように平らになっているじゃないですか。だから、剥がれないように表面に穴を開けてから、粘土をかぶせてあるんですよ。で、美術監督の中村（光毅）さんの所に持っていって、「これに地球を描いて」ってお願いしたんです。でもあれ、まだ粘土が半乾き状態だったんですよね。撮影終わったら、ひび割れしてましたから(笑)。第1話のタートルキングが向かってくるシーンも、本当はミニチュアで撮ろうとしてたんですよ。それは時間がなくなってしまって、結局できなかったんですけどね。

――第1話にはいろいろと変わったことを試されていますよね。

まあ、『ガッチャマン』の時はもう、制作が週1ペースになってしまってましたからね。第1話のように時間が空いている時じゃないと、凝ったことはできなかったんですよ。それに、演出の鳥海永行さんのこだわりも大きかったですね。鳥海さんは自然現象にものすごくこだわる人で、タートルキング上陸の時の雨なんてのも、「雨が太すぎる」だとか、非常にこだわってました。あの雨自体はセル傷で、それに鳥海さんのアイディアをもとに、こちらで手を加えていったという形ですね。『紅三四郎』でもそうなんですが、あの人の作品には雨とか風とか、雪なんかが非常に多いんですよ。草原でススキがたなびいていたり、太陽光のゴーストが入るなんてのも、鳥海さんのこだわりです。でも、そういう表現法について、あの人とはよくケンカをしましたね。やっぱり特殊効果というのは、自然現象がいちばん難しいんですよ。だけど、それがタツノコの技術的な向上になったのは確かですよ。

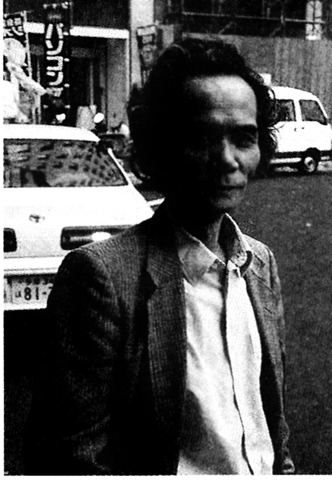
今までになかったものを表現したい

――やはり、当時はライバルとしては虫プロを意識されていたんでしょうか？

それはそうですよ。僕がタツノコに入った当時から有名でしたしね。それに、あの頃はアニメ制作会社といえば虫プロとタツノコの他にはピープロや、できたばかりのムービーくらいでしょう。東映（動画）は映画会社ですから別格でしたし。勝負云々というのではないけど、当然意識の下にはみんながライバル的な感覚はあったんじゃないかな。でも、僕としては虫プロがどうというよりも、タツノコ以外の他の会社がやっていないこと、今までになかったものを表現したいって思いがありましたね。それにそういうのがなければ、やっても面白くないですしね。あの職種というのは、与えられたものを黙々とやっていたら単調じゃないですか。だからその中で何か苦労してやって、ひとつの成果が画面の中に現れた時は、これはもう金の問題じゃないですよ。自己満足かもしれないけど、周りが「おおっ！」と言った時の、あの感覚というのは何物にも代え難いものがあります。だからやっぱり、好きじゃなきゃできない商売です。それでなきゃ、2週間だ3週間だなんて、泊まり込んでできないですよね。具体的なところでは、爆発シーンをセル画上の仕上げで処理したというのは、あの当時タツノコでやっていた作品の流れの中で生み出されているんですよね。虫プロさんや他の会社では、例えば『アトム』であるとか『レオ』だとか、ようするにディズニー系の流れを汲んだアニメーションじゃないですか。それに対して、タツノコの作品というのはアメリカンコミック的な流れを汲んでいる作品ですから、〝爆発〟という表現の処理ひとつとっても、その違いというのが当然出てくるわけです。水面の透過光なんてのも、今はどこでもなにげにやってますが、あれはもともとタツノコが始めたんですよね。あの頃はみんな、動画で描いてましたから。その後に出てきた各社の様々な作品というのは、どちらかといえばタツノコの流れを汲んでいる作品じゃないですか。写実的な作品というのは、やっぱりタツノコが先駆者なんですよ。

（2002年6月9日、於／東京都町田市）

谷口肇



（たにぐち・はじめ）
1964年、三幸スタジオで『伊賀の影丸』『ビッグX』の編集を担当する。'66年にスタジオゼロに移籍し『おそ松くん』『パーマン』『怪物くん』『ウメ星デンカ』を編集。
'70年11月、『昆虫物語みなしごハッチ』の途中からタツノコプロへ。『科学忍者隊ガッチャマン』『昆虫物語　新みなしごハッチ』『破裏拳ポリマー』『てんとう虫の歌』『宇宙の騎士テッカマン』『タイムボカン』『ゴワッパー5 ゴーダム』『ポールのミラクル大作戦』『コラルの探検』『怪盗ルパン813の謎』『あしながおじさん』『海底大戦争　愛の20000マイル』などの編集に携わる。'81年には制作部に移動となり『アニメ親子劇場』の制作担当、『トンデラハウスの大冒険』『ダッシュ勝平』(後期)のプロデューサーを担当。
'87年２月にフリーとなり、タマ・プロの『ズッコケ三人組』の制作担当を経て、'87年に編集会社・ファルコンを設立。厨川治彦と共に『おそ松くん』の編集に参加。以降『平成　天才バカボン』『横山光輝　三国志』などの編集を担当した。

いきなりチーフとして入社したんです

僕はもともと、三幸スタジオっていう会社で、実写作品の編集をやっていたんです。そこで、TBSで放映していた人形劇映画の『伊賀の影丸』といった作品や、記録映画の仕事をしていました。アニメ作品では、東京ムービーの『ビッグX』や『オバケのQ太郎』を手伝ったこともあります。その後、仕事を辞めてフリーとして編集の仕事を続けていたんですが、ある時、スタジオゼロで編集を探しているという話を聞きましてね。アニメの経験もあるし行ってみようかということで、今度はゼロへ行って『おそ松くん』のテレビシリーズの編集をしていたんです。その頃、ゼロの原画マンに秦泉寺（博）さんという方がいましてね。この人のお友達の羽田さんという方が、タツノコにいるという話だったんですよ。そこで、『おそ松くん』も終わって次はどうしようかという時に、秦泉寺さんの紹介で羽田さんを訪ねて、タツノコへ入社したんです。作品で言えば『みなしごハッチ』の頃ですね。実はその直前くらいに、編集のチーフの方が辞められていたらしく、急遽編集者の補充が必要になっていたんですよ。だから、僕

はいきなりチーフとして入社したんです。そういう意味では、非常にタイミングが良かったんですよね。

――タツノコの場合は、編集というのはどういう形で行われていたんですか？

まず監督とでき上がった作品を見て、尺がオーバーしていたり足りなかったりした場合には、担当演出も交えて相談する。それでコマを切ったり伸ばしたりで尺を調節する。編集というのは、あくまで作品の繋がりの部分の問題を解決するという仕事なんですよ。作業的には早い時は4～5時間で終わるけど、8時間から9時間かかることがあります。その後にアフレコやってダビングやって、音ネガが上がってくる。それでその辺が全部終わると、次にネガ編の作業が出てきますね。で、最後に音ネガと絵ネガと合わせてラボに入れれば、放映できるプリントが上がってくるわけです。僕が入った時には、1本切れる人が3人いましたね。それから、まだ完全には切れないんだけど、っていうのがふたりばかり。そのくらいの人数で、シリーズを3本か4本やってました。『ハッチ』と『いなかっぺ大将』と、それから『決断』が、僕が入ってから半年くらいして始まったんですよね。

――『決断』といえば、当時であれだけのリアリズムを追求した作品では、編集や撮影といった所にいちばんしわ寄せが来たんじゃないかと思うんですが？

ええ、確かに来ましたよ(笑)。僕らの所はもう、最後の最後なわけですから。もう『決断』は徹夜で原版見ましたね。あの作品は忘れられないですよ。キャラクターにしてもメカにしても何にしても、当時のアニメーションとしてはものすごいリアルな作りじゃないですか。絵のほうが全然上がってこなくて、アフレコに間に合わない。あの作品からですよね、いわゆるシロミってのがアニメ界に広まったのは。仕方ないんで、ダビングをやりながら絵を埋めていって、台詞合わせを転がしていく。で、それをどんどん組み替えて、映像がOKになると、それを持っていくわけですよ。

X線を当てられちゃって全部消えてしまった

――『ガッチャマン』の頃から、タツノコは制作の一部を韓国に回すようになりますよね。

それはもう当時から、放送しているアニメーションの本数から考えて、正規の納品に間に合わせるためには、国内のアニメーターの数が絶対的に足りないという状態でしたからね。だから、東映動画がいちばん最初にそれを始めて、タツノコでも韓国に回すようになったんですよ。でも、編集の作業だけは向こうではできないんですよね。やるとなると、機材も全部、向こうへ持っていかなければいけないですし。時間がなくて現像まで向こうでやったこともありますが、基本的には撮影までしたものを日本へと持ってくるという形でした。ただ、一度時間がなくてフィルムを缶に入れたまま税関を通そうとしたら、X線を当てられちゃって全部消えてしまったなんてことがありましたね。まあ、材料は全て向こうに揃っているわけですから、撮り直してから今度は別の方法ですぐに送ってくれと連絡しましてね。その間に、こちらではわかっている材料で編集して、尺を合わせて、それでアフレコをしておいて、なんとか間に合わせたということがありました。

――『ガッチャマン』の第1話は、かなり時間をかけて制作されたんですよね。

第1話はパイロットもかねてましたからね。あれは、総監督の鳥海（永行）の好きなように作ったものなんですよ。だからあの第1話って、とても良くできているでしょ。放映が決まっているわけでもないから制作時間も十分にありましたし、3段マルチ4段マルチで、しかも実写まで入ってる。もう、本当に彼のやりたいように作ったんですよね。それにタツノコの場合は、そういうパイロットの制作というのを、吉田竜夫さんが平気でやらせてしまうという度量を持っていたんですよね。だから、彼ら演出家は非常に恵まれた環境にいたんだと思いますよ。

――その後、会社内で労働争議みたいなことがあって、『ガッチャマン』を境にタツノコの制作力がガクンと落ちる時期がありましたよね。

僕はそこら辺の経営的なことはわからないけど、

オイルショックの時期ですからね。そういう社会的な背景というのもあったんでしょう。会社のほうから、今なら退職金を倍出すからと提示されて、辞めた人間も結構いました。僕の場合はずっとフリーでやってきていた経験があるから、そのことに対してまったく焦りだとかは感じませんでしたけどね。会社が潰れるとかいうなら別ですけど、仕事はあるわけじゃないですか。「目の前の仕事を放り出して、お前ら辞めるのか?」って思いはありましたけどね。放送があるわけですからね。会社がどんな状況になっていようが、絶対に間に合わせなきゃいけないじゃないですか。内部事情なんか、それはそれで、仕事は仕事ですよ。それに、たとえ人が辞めてしまって誰もいなくなったとしても、会社外のフリーのアニメーターさんに頼めばよいわけじゃないですか。外の特効さんを呼んできて、「ちょっとバイトでやってくれない?」とか。アニメ業界って、それができる世界ですからね。新人をさっさと入れちゃって、教え込んでもいいわけだし。それは演出にしても、絵描きにしても、僕ら編集にしても同じことです。ただ、撮影だけはそうはいかないですけどね。あれだけは技術も知識も必要なんで、新人連れてきてすぐに撮れというわけにはいかないですからね。まあ、それでも、全部わかっている人がひとりいれば、その人が指示を出せばいいわけですから。作品制作上での現場的な混乱というのは、どこの部署でも大してなかったと思いますよ。

1シーン丸々とか切っちゃわないといけない

――当時は、作画では尺よりもフィルムをかなり多く取っていると思うんですが、結構な尺数がカットされているのでは?

確かに、演出によってはかなりカットしている場合もありましたね。例えば『ハッチ』の場合、本編の放送時間は21分だったんです。そこに、オープニングとエンディングと予告が入って、全ての秒数は全部決まってたわけですね。で、本編の21分を2ロールに分けるんですが、このバランスはどちらが長くても短くても構わないんです。10分と11分になっても良いし、その逆でも良いし。以前はちゃんと10分30秒ずつにしなければいけない時期もあったんですが、その辺は段々と緩やかにはなってきてたんです。で、これがコンテを描く人によって、1分やら5分やらとオーバーする人が当然いましてね。アニメーションで5分っていったら大変なことですよ。そういう部分は担当演出と相談して、「このシーンは長いから、この辺でポンと切ろうよ」って、切らざるを得ないんですよね。30秒から1分くらいのオーバーだといちばん切りやすいですし、切っても話的にOKなんですよね。でもそれをオーバーしちゃうと、どこか1カ所くらい、1シーン丸々とか切っちゃわないといけないわけですよ。せっかく一生懸命描いてくれたんですけどね。尺に収まらなかったり短すぎたりする原因も、いくつかありましてね。もちろん、キッチリと秒数まで計算して自分で絵コンテ描くなんて人もいますが、逆にそんなことは全然関係なく描きなぐってるような人もいるわけですからね。それに僕も演出家に直接聞いたわけじゃないですけど、例えばシナリオによっては思い入れがあってカットが増えちゃったり、つまんない場合には、「まあ、この辺でいいんじゃないか」って切り上げちゃったりなんてこともあるみたいですしね。それにもうひとつ、〝上手い人〟が作業をすると、増えていっちゃう場合というのもあるんですよ。つまりですね、例えば非常に上手い演出家がコンテを切ったとしますね。そのコンテは少々尺をオーバーしてるんですが、それを見た原画家が「ああ、いいなあ」と思う。そうするとそのまま描いて、撮影に回してしまうなんて現象が起こる事もあるんですよね。そういうのが最終的に僕の所へ来ると、非常に良い繋ぎなんだけど、切らなきゃいけないなんてことになるんですよね。こういうのって、実写の編集の仕方とかなり違いますからね。実写の場合、ドラマなんかだと尺が決まってますが、映画なんかは1分や2分切ったところで、全然関係ないですからね。

――昭和50年あたりになってから、コンピュータを使った手法を取り入れるようになりますね。

あれは『タイムボカン』のパイロットを作っていて、放映が決まった頃ですね。〝スキャニメイ

ト〃というものがあるという話を聞いて、東洋現像所（現／イマジカ）さんに行ったんですよ。それは、原画が1枚あれば動かすことができるっていうから、面白いからやってみようということで、いろいろ試してみたんですよね。でも、実際には人間が描くような動画ができるわけではないじゃないですか。でも、「これは現実世界じゃなくて、異次元の世界という描写で使えるんじゃないか」と考えて、『タイムボカン』の異次元空間のトンネル内の処理に使ったんですよ。他にも、『テッカマン』のオープニングなんかでも使ってますしね。あの映像というのは、コンピュータで作ったものをビデオテープで録画して、それをキネコに起こしてからブラウン管に写し、更にそれをカメラのフィルムで接写して撮影しているんですよ。だから、あの異次元のシーンだけ、画質がちょっと荒れていますよね。まあ、異次元の世界だから、かえって画面が荒れていたほうがいいな、という感覚で使ったんですけどね（笑）。あれはコンピュータ処理のはしりですよね。

今現在、吉田竜夫という人が生きていたら

――一時期、制作のお仕事もされていますよね？

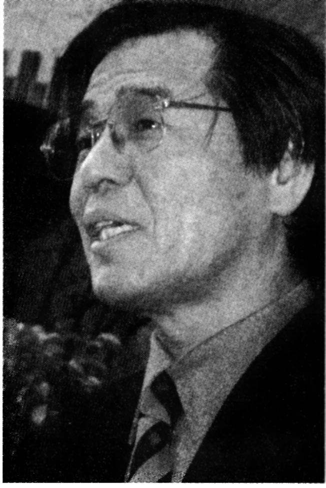
タツノコで編集として働いて10年目ですね。突然、「誰もいなくなったから、制作部長をやってくれないか？」って言われましてね。僕は技術屋であって、制作なんてやったことはなかったんですけど。でもまあ、やってみたら結構面白かったですよ。この仕事っていうのは、流れている作品全部に目を通しておかなければいけないんですよ。いわゆるスケジュール管理ですね。ようするに、社長であろうと専務であろうと、局であろうと代理店であろうと、「スケジュールどうなってるんだ？」とかって、僕の所に聞きに来るわけです。お金のことに関わるのはあまり好きではないんですが、それでも動画がいくらだ、撮りがいくらだっていう、末端のお金の流れも全部把握していなければいけないんです。赤字が出れば、僕の所に文句が来ますしね。まあ、僕の場合はそれまで編集をやっていたわけですから、誰が原画をやっているだとか、仕上げがどこの外注であるとか、全部わかっているんですよ。そういう部分では、苦労はしませんでしたね。

――谷口さんの目から見て、吉田竜夫さんはどういう方でしたか？

非常に気配りの人という印象でしたね。例えばどこかに旅行や研修に行っても、社員に対しておみやげはバランス良く買ってきたりね。で、一度、僕と『けろっこデメタン』のパイロットを一緒に作りましてね。その時に、朝の4時くらいまで飲んだ事があるんですよ。でも実はそのパイロット制作作業というのがその日の朝7時からで、翌日には仕事しなきゃいけないのにふたりして飲んだわけですよ（笑）。それで店を出ていったん別れて、僕は7時5分前にはスタジオに着きましてね。でも、社長はゆっくりと来るんだろうなって待ってたら、キッチリと時間に到着したんです。いくら社長といっても、こっちがちゃんと来てるのに30分も40分も遅刻するようじゃ、社員としても不満が残りますよね。吉田竜夫さんはそういう部分はきちんとしていて、不快感を与えることなく、気持ちよく仕事をさせてくれましたね。本当に、人間的に良い人でしたよ。それに社内では、まさに〃鶴の一声〃という感覚ですね。彼が「こう決めて、こうする」と言えば、みんながそれについて行くというね。僕としては、今現在、吉田竜夫という人が生きていたら、アニメ業界のデジタル化という現状をどう考えただろうか、という事に興味があります。あの人は、当時35ミリカメラでの撮影が常識であったアニメ業界に、16ミリカメラを持ち込んで撮影させた人ですからね。その頃のほとんどの人間は「アニメは35ミリ」という固定観念があって、実は僕なんかも「16ミリなんかじゃ画質が悪い」と、反対したひとりでしたから。でも、そこを強引に押し切ってタツノコが16ミリで撮影してから、その後は各社でもテレビシリーズは16ミリで撮り始めたわけじゃないですか。そういうことをやった人ですから、現在の塗りから撮影まで全てがコンピュータでできるという時代に入った時に、どういう行動をとっただろうかと思うんです。もしかしたら、もっと早くからそういうことを研究させていたかもしれないですよね。

（2002年6月5日、於／東京都立川市）

本田保則



（ほんだ・やすのり）
1943年5月30日、富山県出身。名古屋でラジオの仕事を経験した後に、上京。新橋の劇団・創芸で舞台の仕事を担当した後、音響スタッフの募集を見て'66年にタツノコプロへ。『マッハGoGoGo』で助手を経験した後、『おらぁグズラだど』で音響監督に就任。『紅三四郎』からは音響プロデューサーとして作品の音響面を取り仕切る。その後、東北新社を経てフリーに。
'74年に吉田竜夫の助言もあって、アーツプロを設立。音響ディレクターとして『破裏拳ポリマー』『カリメロ』『宇宙の騎士テッカマン』などに参加する。'78年の『宇宙戦艦ヤマト2』では制作担当を務めるなど、一時期アニメ制作にも関わっていた。他の音響監督作品は、『超時空要塞マクロス』『ストップ!!ひばりくん!』『機甲創世記モスピーダ』『プロジェクトA子』『ちびまる子ちゃん』『ロードス島戦記』『天地無用!』など。
現在、アーツプロの代表取締役。

劇団入ろうと思って上京して

僕がタツノコに入ったのは昭和41年、会社が設立されて3年目の頃ですね。それまでは名古屋のCBCというラジオにいました。

――今の中部日本放送ですね。そこではディレクターとして？

ディレクターという言葉は当時なくて、僕らはアシスタントプロデューサー。脚本の手配、送り出しから、選曲してきたレコードを自分で回してキュー出したり。全部。その頃、22～23歳ですけど、(仕事が)面白くねえなぁと思って、で、劇団入ろうと思って上京して。

――役者になろうと？

いや、演出部。入ってたら、今頃、食っていけなかったと思うんですけど(笑)。上京して、新橋の「重役室」って喫茶店でアルバイトしてたんです。吉田竜夫さんがそこによくコーヒーを飲みに来て、演劇青年かね？　と仰っていただいて。演出志望って言ったんですけど、うちの演出は絵コンテとか絵を描けないとダメだからな。って言われてんですけど、とりあえず、吉田さんの引き立てがあって面接に行って、そしたら即採用になっ

て。

——音響演出をやりたいんだって言われて入社されたんですか？

そうですね。僕ができることってそれしかないでしょって。当時の初任給、みなさん、まちまちでしょうけど……僕の記憶だとタツノコの初任給は7500円だったんです。

——安いですね（笑）。当時だと、相場は1万5000円くらい？

CBCだと1万7000円くらいもらってましたから。どうやって食ってこうかなって思って。

——本田さんの同期では、どなたがいらっしゃったんですか？

歳は僕よりひとつ上ですけど、鳥海永行さん。動画部のほうには白土武さんがいました。あと高橋資祐さんとか。『宇宙エース』の最後のほうの制作をしている頃ですね。あとマッハＧｏＧｏＧｏ』はまだオンエアも決まってなくて。企画をあちこちにセールスしてた頃でした。

——すぐに音響をやられたんですか？

音響という部門はまだなかったんですよ。読売広告社のスタジオ使って、音響の担当者ということで（タツノコプロから）石田忠賢さんが出向してやってて。僕が入った時は居場所がないっていうんで、編集室に1ヵ月だけいたんです。

——その1ヵ月の間で、編集のお手伝いとかはされたんでしょうか？

したんですよ。だけど即、もう触らなくていいと言われて（笑）。その後、銀座の読広とタツノコとの間を行き来して、経理の仕事で請求書や小切手を運んでました。経理を外に出せないくらい、人の数が少なかったんじゃないですか？

——最初に編集室付きだった時も、立場は、録音の石田さんの部下だったんですか？

そうです。石田さんは読広のスタジオにいて、ほとんどタツノコに来ることなかったです。我々音響、録音のスタッフが効果と打ち合わせするんですけど、ほとんど僕のほうでやらせてもらってましたね。

『マッハＧｏＧｏＧｏ』当時はキャスティングも早くから決まってましてね。主役の田中雪弥、今の森功至はあれが恐らくアニメデビュー作ですけど、吉田竜夫さんもすごく気に入ってた人です。彼は何十回と見る人でしたから、リハーサルのために読広のスタジオで試写に1日とるんですよ。僕はアシスタントですから、そこでフィルムかけるのが仕事でした。

——『マッハＧｏＧｏＧｏ』の1話で読広のスタジオに入ったのが、アニメのアフレコの初めての経験ですか？

初めてですね。

——その前の『宇宙エース』の制作の時にはなにをされていたんですか？

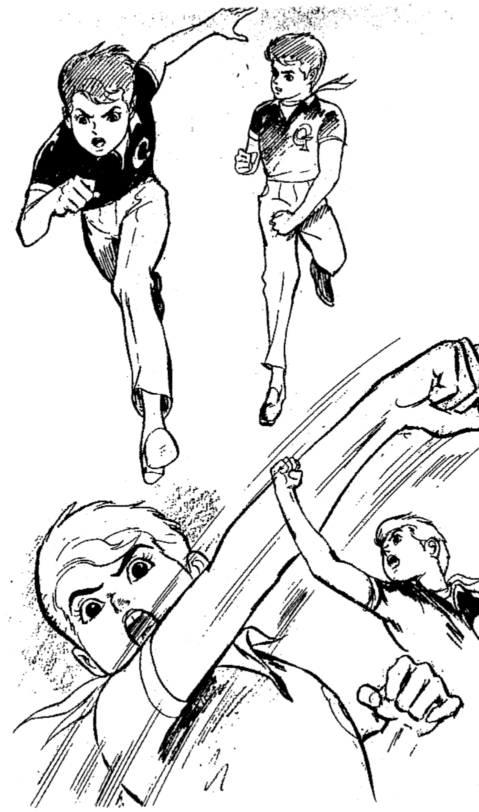
東洋現像所（現／イマジカ）とタツノコの間で音の入ったサウンドネガのやりとりとか、そういう運び屋さんをやってましたね。アフレコは見てなかったですね。

——『マッハＧｏＧｏＧｏ』では音響監督は誰が？

石田忠賢さんと、あと木村（実）さんが。木村さんは今でいえばプロデューサーなんですけど、ディレクションにも立ち会って。

——放映に先行して制作されていたということで、アフレコのペースは？

1月に1本録ったりしてた時もあります。1月に2本2週分録ったり、当時は越部（信義）さんが、1本1本に音楽をつけてくわけです。



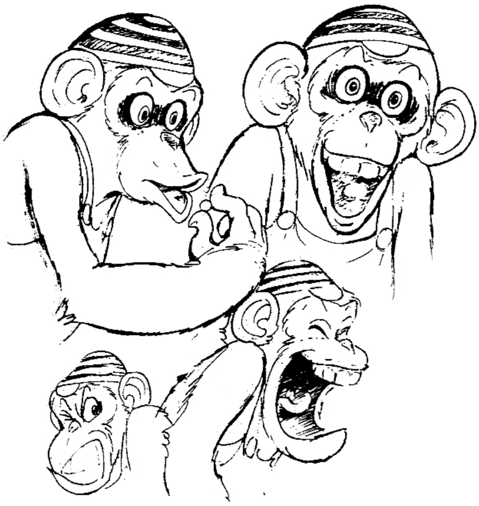
■『マッハＧｏＧｏＧｏ』三船　剛

―― 音楽プランは石田さんが？

石田さんと越部さんですね。それで、尺に合わせて音楽ができてくるわけです。それでもダビングは夜中、翌日の明け方まで続きましたね。当時、効果音というのはアナログで、テープを切って貼ってってたわけです。しかも、効果さんが自分のスタジオで作ってくるんじゃなくて、その場でネタを持ってきては、たとえばマッハ号のジャンプのヒョンヨンヨンというような音も、ひとつの元音を出して、そこにリバーヴをかけたりして、全部、そこで作っていくんです。

―― 効果音はほとんどテープからのダビングなんですか？

車の走行音なんて、何十種類ありましてね、毎



■『マッハGoGoGo』三平

回使いますから、そのテープを全部用意してあるわけです。さらにループっていいまして、（エンジン音のように）絶えずウーンウーンていうのは、テープを輪っかにしてテープレコーダにかけて回ってる。それで使う時にミキサーのほうで音を出すわけです。ちなみに三平ってサルですけど、あれは石田氏の声です(笑)。

――『マッハGoGoGo』の時だと、フィルムはどんな状態で音をつけていたんですか？ 完成品に近いもので？

最初の頃の十数本はほとんど全部完成品でした。練りに練り上げられた絵でやってました。ただ、そこから少しすると、1カットか2カットか仮の絵をアフレコに使ってましたけど。

―― 音楽のつけ方について詳しくお聞かせ願いたいんですが。

まず、1回きりしか使わない音楽、何本もあるんです。テーマ曲でも新しいアレンジもあれば、レースは世界中回ってるんで、そこで敵レーサーが出てくるとまたそのテーマと、みんなその回ごとに作ってたんですね。もったいないんです(笑)。

―― 毎回新たに音楽をつけるというのは、フィルムを見ながら演奏するんですか？

そういうのも何曲かありました。『グズラ』とか『ハクション大魔王』まではやってたんじゃないですかね。だから、それまではアバコだけでなく、音楽録音のスタジオはみんな大画面が置いてありましてね。

越部さんは『マッハGoGoGo』が終わってアメリカに行かれて、戻られて初めてのアニメが『サザエさん』だったですよ。その時はもう、アメリカンポップスをとり入れてたんですけど、それまではあの人、ほとんどオーケストラリゼーションで、ストリングスも20何本も呼ぶわけですから。ひじょうに贅沢な作りですよ。越部さんがパート

■『おらぁグズラだど』

譜まで全部書きますから、2曲の譜面がこんなにあるわけですね。

――本田さんが音響演出として一本立ちされたのは、どの作品になるんですか？

『グズラ』で一本立ちです。入って2年半くらいしか経ってないんですから、早いんです。

――『グズラ』は『マッハGoGoGo』の後半年とかぶってると思うんですが。本田さんは『マッハGoGoGo』の後半、はずれてるんですか？

『マッハGoGoGo』の途中、石田さんがタツノコ辞めて、音響ディレクターが木村実さんに変わるんですよ。『マッハ』は僕が現場録ってて、木村さんがいつもそばについててくれて。『グズラ』は『グズラ』で一本立ちということで、2本やってたんですね。この頃、タツノコに帰るのは1月で2回くらいになりましたね。入って2年そこそこで一本立ちするのは稀なことです。たいがい、助手は3年から5年。今、思うとラッキーなんでしょうけど、忽然と石田さんが――。

――石田さんは、石田サウンドプロを作るためにタツノコを辞められたんですか？

いえ。石田サウンドプロっていうのは、この時にはまだありません。『グズラ』からです。

――『ドカチン』も本田さんが？

これは頭からやりました。（ドカチンの声は）中村メイコさんだと思うんですけど。

――本田さんがタツノコにいらっしゃった時というのは、そのセクションはなんと呼ばれていたんですか？ 音響部とかですか？

非常に単純な……録音担当。名刺には録音製作課とか。

――『みなしごハッチ』の時は？

『ハッチ』の時は外部のオムニバス（プロモーション）、もう水本（完）さんたちがやってますから、タツノコはあくまでもプロデュースですね。

――そういう形で、音響が外部になったのはどの作品からになりますか？

……『紅三四郎』の時からですね。『ハクション大魔王』は、頭から10何本かは自分が現場に出てキュー振ってますから。

――そうした形になった理由は？

今までの作り方だと時間と金がかかったんじゃないですかね？ 読広さんも制作費切り詰めなきゃいけないから。それに吉田竜夫という人は、意外と外へ任すという見切りは早かったです。僕は吉田竜夫さんと言い合って（外に）出たんじゃなくて、正直なところ、現場がやりたい、楽しいかな、と。プロデューサーといっても、タツノコ側から、演出がどうしても立てない時とか、社内の演出の意図であるとか聞いて、こういう方向で作ってほしいと伝える立場でしたから。

――キャスティングにも関係なくなって？

それはあります。オムニバスはタツノコの意見は重要視しますからね。僕はオムニバスと、エグゼクティブプロデューサーであり原作者でもある吉田竜夫と話を繋ぐ、そういうことをやってたんですよ。

タツノコにいた人間にとっては悪夢でしたね

――音響プロデューサーは現場に関われないということで、お辞めになった後というのはどうされていたんですか？

藤子（不二雄）さんたちのスタジオゼロの一角に机を借りて、とりあえず様子を見てようって時に、東京テレビ動画というところから話がありまして。日本テレビのアニメで、『赤き血のイレブン』というサッカーのアニメで、音響担当者が急に降りてしまったんで、行ってみたら、即、第2話から頼みますという話になって。仕事場は信濃町にあった番町スタジオですね。

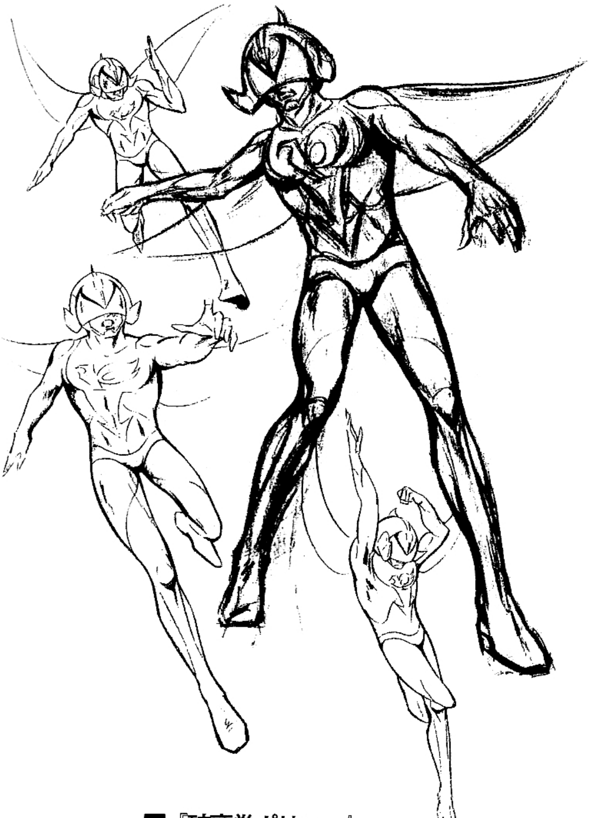
タツノコにいた人間にとっては悪夢でしたね。白身で線が引っ張ってあるだけで、ほとんど絵はなかったですね。

――その後というのは？

スタジオゼロで単発ものを2、3本やった後、東北新社の契約社員になって、洋画の吹き替えでアニメの世界から4、5年、遠ざかることになるんですよ。東北新社はあの当時、吹き替えものは凄い数でしたね。ただ僕はタツノコ育ちですから、アニメの音やりたいなって思ってた時に、吉田竜夫さんから声がかかったんです。吉田竜夫さんが

新宿のどこどこで会おうと。「そんな、僕が出かけていきますよ」「いやいや、いいんだよ。たまにタツノコの国分寺じゃないとこの空気吸ってみたいから」。それで竜夫さんが「おまえのところで、かつてのオムニバスさんのような会社を作れないか。金がないなら俺が出してやってもいい」と。タツノコは本田個人に預けるんじゃマズい、法人にしてくれってことで、会社、アーツプロを作ったんです。それが49年の10月だと思います。場所は新宿区坂町。雪印とかね、四ッ谷の駅に近いところです。オムニバスさんと、ほんの20メートルくらいのところで。その次が大京町に移ったのかな。

　その時に竜夫さんに見せられたのが、『破裏拳ポリマー』のキャラクターで。『紅三四郎』もそうなんですけど、あれはタツノコにいた佐藤光雄がモデルなんですよ。佐藤をモデルにして、竜夫さんがデッサンしてたんですね。よく佐藤が「俺、また社長室だよ～」って。1日出てこないんですよ。いろんなポーズとらされたり、こう筋肉をウーンんてやらされたりね。



■『破裏拳ポリマー』

――タツノコ作品復帰となる『破裏拳ポリマー』について聞かせてください。

　当時、ほとんど、アニメには使ってませんでしたけど、アバコっていうスタジオでやってみようと思って。（最初）キャスティングはやっぱり森功至かなってことでした。

――ポリマーの？

　ええ。ポリマーの。出なかったですけど、どうも吉田さんの中には、『マッハGoGoGo』のイメージがあるんでしょうけど、あいつを使ってみたいんだと。

――『ガッチャマン』終わった直後なのに。

　森功至って言われた時に、僕はもうちょっと探してみたいって言って。たとえば神谷明とか。オーディションをして、吉田さんは全部のオーディションに来て、いちばん最後の日に、やっぱり森功至かなぁってなったんですけど。帰り際にぽこんと来たのが、テアトル・エコーの研究生だった、曽我部(和恭)。「なんかフニャフニャした声だな」って吉田さんは言ってました。鎧武士というキャラクターは二面性持っててね、こっち（普段）側には合うけど、こっち（ヒーロー）側に懸念があるって。僕、責任負いますからということにして、日常の武士は問題ないです、むしろ森功至じゃできませんからと。それでアフレコの後、別の部屋でポリマーになった時の特訓ですよ。実際、ポリマーに変身した時はいつも彼だけ後録りで。彼はあれがアニメ作品の主役デビューらしいんです。その後、彼は『マシンハヤブサ』とか、結構主役やるんですよ。そういう意味では『ポリマー』は印象深いですね。

――『ポリマー』のキャスティングは全面的に本田さんが。

　はい。僕と吉田竜夫さんが全部。それまでは社内会議をやってたんですけど。『ポリマー』の青野(武)さんて、タツノコの当時の作品では、ほとんど端役の通行人のA、Bとか、そんなのが多かったんです。だから、むしろ富山敬さんのほうが先に名前が挙がって。雨森雅司さんは当時、『小さなバイキングビッケ』のお父さんだとか、バカボンパパで活躍してましたね。それ1役1役、吉田さんにOKもらって。（南波テル役の）落合美穂って子、黒沢良さんの学校を出た新人でしたけど。わざわざ連れていって、声、聞かせたりして。

――続く『テッカマン』は？

吉田さんは、こんどこそ森功至だと。ただし、こちらとしては、アンドロー梅田に山田康雄をなんとか入れたいと。

――山田康雄さんは、洋画やられてる経験のほうから？

そうですね。それと、アンドローっていうのは、ちょっと毛色が変わったのを録りたいなって。

ビルが建つんだ、見とかなきゃって

今、葦プロの社長の佐藤（俊彦）くんは、タツノコ辞める前は、版権営業部にいたんですよ。彼は営業、版権関係、今井科学とかタカトクとかバンダイへのセールスノウハウは全部知ってるんですね。だから佐藤が辞めるとなると、版権収入がガクッとなるわけですね。それで、吉田竜夫さんが当時、そっと反対したらしいんです。僕がアーツプロ作って2年くらいの時ですけど、結局、佐藤はタツノコ辞めて、本田さん悪いけど、とにかく、こういうわけで出てきてしまったんだ、仮に事務所をここに置かせてくれないか、と。

――それは葦プロではないんですか？

葦プロではまだ登記をしてなかった。当時、タツノコはずいぶん、人が辞めた時代でしてね、スタジオぴえろもその前後にできたんじゃないですかね。高橋資祐、笹川（ひろし）さん、それから案納（正美）さんなんかがぴえろの設立に絡んでると思うんですけど、そんな時期のはしりでしたから。それで吉田竜夫さんから、佐藤俊彦、そっちのほうに寄ったりしてることないだろうね、なんて聞かれて。こっちは滅相もないですって……（笑）。

だけど、遂にバレちゃったんですよ。そん時だけは、悪いけどタツノコ来てくれないかって言われて。あー、相当なこと言われるだろうと思って、こちらから開口一番、申し訳ありませんでした、1週間だけって約束したもんで、と。なんでもタカトクの専務さんの筋から、佐藤くんがアーツプロにいるっていうことがバレちゃったらしいんですよ（笑）。

――吉田竜夫さんの具合が悪くなられたのは、いつ頃からご存じだったんですか？

まだ入院してない頃ですかね。……タツノコビルっていうのができるのは、竜夫さんが亡くなって何年してからでしたかね？　板橋の病院に見舞いに行った時に、言ってましたもん。ビルが建つんだ、どうしてもそれを見とかなきゃって。

――最初から深刻な病気だということもご存じで？

僕ははじめは聞いてなくて。どっかに、腫瘍ができた程度にしか。

――それでは、いきなり亡くなられたという感じだった……？

いきなり、でしたね。今のうちに行っといたほうがいいって言われて、行ってみたら、意外と元気だったんです、吉田さん。なんだよと思って。で、社長、みんな心配してるんだけどって言ったら、「馬鹿野郎、この通り元気だ」って。その後ね、もうひとつ病院移られたんですよ。その時も、見舞いに行きましたけどね、だいぶ進行してましたけど、元気に見えて……。

いずれにしても、僕がこの世界入ってやってこれるのも、新橋で吉田さんとの出会いがあったからで。

今でも、僕が現場出て思うのは――タツノコってのは、確かに初期の頃はよそから厳しいこと言われたんですよ、手が遅いだの、素人集団だの……けどね、吉田竜夫の悪口については聞かなかったですね。

あの当時、アニメーションというと漫画、という時代に、あれだけのリアリティがあるものを描いちゃう人ですから。『マッハGoGoGo』も、あの当時、車をあそこまでする（描き込む）ところはないだろうと。デザインは全部、中村光毅さんですけど、単なる思いつきではなく、正確に（本物の）車のデザインと同じにやっていくわけですからね。そういう面じゃタツノコは取り組み方の真面目なプロダクションだと思いますね。プロダクションIGの石川（光久）君と話すことがあって、ああいうことって、自分の生き方になってるなって。世の中はこうだけど、そこに乗っかっていけないブキッチョさは、やっぱりタツノコの精神だねって。タツノコの魂というか「こころ」があるんです。

（2002年3月19日、於／東京都新宿区）

（さとう・としひこ）
宮崎県出身。CM関係の仕事に従事した後、タツノコプロに入社。同社のCM制作部門の一員として『名糖アイスクリーム』『ライオン歯磨き』『マルシンハンバーグ』『味の大関』『雪印ババロアの素』などを手がける。また、PR映画として、交通安全教育映画『死神の招待状』、ジャパン・バロン・クラブの『倶多楽湖の詩』を制作。
'75年12月24日、タツノコを独立して葦プロダクションを設立。玩具メーカーのタケミがスポンサーとなり『ブロッカー軍団Ⅳ　マシーンブラスター』の企画が動き出す。しかし、当時組んでいた代理店の力が弱く放送見通しがたたないままの先行制作となり、自己資金も底を突き、葦プロの第1作は、結果として新たな代理店と日本アニメーションの制作となって、日の目を見ることになった。日本アニメとは、続く『超合体魔術ロボ ギンガイザー』『女王陛下のプティアンジェ』でも組んでいる。
初の自社制作は、国際映画社と組んだ『くじらのホセフィーナ』。以後、『宇宙戦士バルディオス』『戦国魔神ゴーショーグン』『超獣機神ダンクーガ』『魔装機神サイバスター』『ビーストウォーズⅡ 超生命体トランスフォーマー』などを企画。
現在、葦プロの代表取締役。

佐藤俊彦

社員として入ったのはタツノコだけです

――佐藤さんはタツノコ入社前、ＣＭのお仕事をされていたそうですが、どこかのＣＭ会社にいたんですか？　フリーではなくて。

そもそも僕は大学卒業して、『黒い花びら』とか『君こそわが命』なんかの水原弘のプロダクションにいて、マネージャーや、マスコミ関係の窓口をやってたんです。そこから映画の制作会社に行ったんですけど、桜映画というところで、あの当時は社員とらないから契約で入ったんですね。作品ごとにプロデューサーにくっついて一緒にやるとか。

――進行みたいな仕事なんですか？

その補佐みたいな仕事ですね。その後、国際放映に入ってから、和光プロってアニメーションの撮影会社に行って、そこでコマーシャルの仕事等をしてました。そこからタツノコです。学校卒業して以来、正式に社員として入ったのはタツノコだけです。コマーシャルやPR映画の制作やったりするから、協力してくれないかという話で入ったんですよ。25か26の歳で、（昭和）45～46年というところでしょうか。

—— **その時すでに、CM制作のセクションがあったわけではないんですよね？**

（新たに）セクションを作ったんです。僕をタツノコに紹介してくれた、前里（元義）さんがそこの室長みたいな形になったんです。

—— **じゃあ佐藤さんの入社に合わせてスタートという形だったんですね。そのセクションは鷹の台のスタジオの中にあったんですか？**

最初1年くらいは鷹の台だったんですけど、事業部移転ということで、本社の国分寺のほうに移りました。

—— **そのセクションには、佐藤さんと前里さん以外、誰がいたんですか？**

あとは、うちの会社で一緒にやっていた加藤博くんってのが、僕のアシスタントで入って。それまでは仕上げの進行をやってたんですけどね。加藤くんは、僕より先にタツノコ辞めちゃいましたけどね(笑)。

—— **入社された当初、吉田竜夫さんとの関わりというのは？**

竜夫さんはもう怖いイメージしかないです、作家としても凄く可能性のある人だし、研ぎ澄まされたところがあったんで。

—— **入社したその日にお会いしたんですか？**

しましたね。

—— **それが初対面？**

初対面です。それ以来、気にしていただいたのか、コマーシャルのほうには協力的にいろいろやってくれましたよね、

—— **CM部がスタートして、どのような活動をされたんでしょうか？**

雪印とか、アニメのスポンサーになってくれたメーカーの新作（CM）を作ったりしてました。黒沢久雄氏なんかに演出させて。

—— **佐藤さんのCM部での役職というのは、プロデューサーでいいんですか？**

いや、『制作』という捉え方がいいですね。営業で仕事とってきてということですから、今でいうプロデューサーですけど……制作という意識しかない平社員です。

—— **タツノコがアニメ制作会社といっても、アニメのCMばかり受けるとは限らないわけですよね？割合としてはどんなもんだったんですか？**

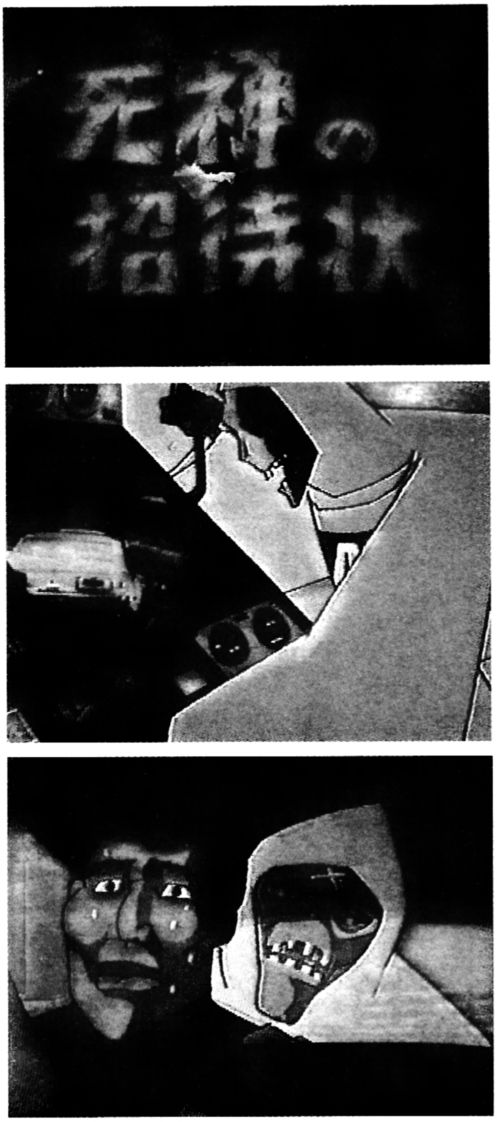
（アニメは）2割くらいでしたね。あと、8割は実写です。

—— **そのアニメの場合は社内で作画したんですか？**

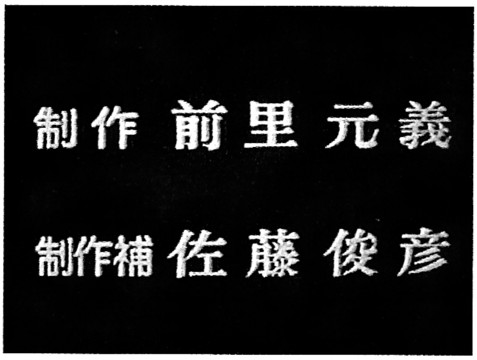
いや、なかなか社内は使えないです。部分的には使えるんですけど、撮影をちょっとタツノコの中でやるとか。そういう形でやってました。

—— **ディレクターはどのような方を起用したんですか？**

ディレクターはフリーの人。大手は有名な作家使えるんですけど、我々はローバジェットですから、いろんな人とやりましたね。コンテを切ってもらうとかアニメの部分は、布川（ゆうじ）さんにやってもらったりとか、ありましたよね。今、



■『死神の招待状』



■『倶多楽湖の詩』

スタジオぴえろの社長やってますけど。

――タツノコに『倶多楽湖の詩』という作品が残されているんですが、これはどういう作品なんですか？

たくさんの作品を作って、すべて実行予算の中で作ってきたんですけど、これだけはですね、受けた金額と同じ金額が出ていったんですよ。これはもう、僕の負の遺産なんですけどね(笑)。沖縄と北海道に1カ月くらいのロケーションして。

――これはもともと、なんの目的で作られたフィルムなんですか？

神戸製鋼という会社がありまして。そこの東京事務所が、全国に財界のお偉方とかが保養できる施設を作っていこうと。それをアピールする作品だったんですよ。北海道の倶多楽湖の近辺に、広大な建物を建てて、そういうリゾート施設を作りましょう。北海道だけでなく、沖縄や日本の何カ所かにもね。それの布石として、PR映画を作りませんかという話だったんです。

――その施設に来てもらうためのイメージビデオのようなものですか？

そういうことです。それに参加してもらうために。

――実際は撮影にはどれくらい？

2ヵ月。撮影実数は北海道道南だけで1ヵ月。と、沖縄で3週間。

――その間、ずっとついていたんですか？

営業はそうなんですよ。スタッフ集めて、監督、照明、メイクアップ、それにタレントさんてかたちで連れていきますから。

――作られたのは、このフィルム1本だけですか？

（続けて）作っていこうと思ってたんですけど、沖縄編の準備をしている途中で計画が立ち消えたんです。

――これは、佐藤さんが、タツノコいらっしゃる時期でいうと、どの頃？

これは……48年か49年頃ですよ。48年じゃないでしょうか？

なんでもやりましょうという時代ですから

――48～49年頃から、タツノコはアニメーション制作だけでなく、プラモデルや繊維関係、そしてコマーシャルと、経営を広げていく方向にあるんですが、それはやはり吉田竜夫さんのビジョンだったんでしょうか？

竜夫さんにしても吉田健二さんにしても、（そういう考えは）あったかもしれませんけど、僕らまだ若かったんでわかりません。まだ、版権ビジネスのはしりの時代ですからね。ただ、いろいろなことしようよ、という楽しい雰囲気はすごくありました。

――『ガッチャマン』当時のことを調べてみると、メインスポンサーの万創というオモチャメーカーがありまして、そこで作られたオモチャがタツノコランドで出されてたんじゃないかって考えたんですけど。

ちがいますね。万創さんが倒産しまして、タツノコに負債が残ったんですよ。そこにプラモデルは今から流行るよ、という吉田竜夫さんの考えがあって、それでタツノコランドというのを作ったんですね。自分たちのキャラクターを作るんだか

ら、もう別にどっかに許諾するのやめようと。その布石になったことはまちがいないです。

――きっかけにはなった？

ええ。で、自分たちのキャラクターを自分たちで作って、販売してもらえばいいんじゃないか、と。そこで今井科学という会社があったんで、そこに販売をお願いしようと。

――モデロックという接着剤の要らないプラモデルですよね？

そう、そういう形で作って。やはり素人だから、今井科学さんと一緒にやったほうがいいんじゃないかと、それで今井科学さんの資本も入れて一緒に作ったのがタツノコランドじゃないですか？　詳しいことわかんないですけど。

――『ウルトラマンレオ』のプラモなんかまで出されてるようなんですが。

今井科学と一緒にやったからじゃないですか？　今井科学が（権利を）とってきて、開発、販売をしたんだと思います。

――タツノコのキャラクターを使った、遊園地に置かれるような大きな遊具まであったようなんですが、これもタツノコランドでやった仕事なんでしょうか？

うーん、あれもランドの一部としてやってたんじゃないですかね？　遊技場の人と話をして、そういうものを作りませんかという話はありましたよ。なんでもやりましょうという時代ですから。

――タツノコランドとして、自社制作のアニメ『キャシャーン』のスポンサーになったりしていますよね？　それ以外でもスポンサーになった作品はあるんですか？

ええとね……僕が吉田健二さんとNET（現／テレビ朝日）に持っていって、こちらもリスクを背負ってやるんで、テレビ化しましょうと始めた企画があるんです。……『破裏拳ポリマー』ですね。スポンサーが集まらなくて、なかなか決まらなくて、結果、そういう形にしたんですよ。

僕はタツノコの社風が大好きです

――佐藤さんはタツノコをお辞めになるまで、結局、テレビシリーズの制作には関わってらっしゃらないんですね？

はい。営業的には関わってますけどね。

――タツノコを退社された後は、また元のようにＣＭの制作をされていたんですか？

そうです。フリーランスのコマーシャルプロデューサーという形で、国際放映とか、いろいろなところでやりました。そういう形で8ヵ月くらいやってました。吉田竜夫さんにもはっきり言いましたし、アニメの会社を作ってどうこうする気はまったくなかったんです。

――それがまたアニメに戻るきっかけっていうのは？

僕はＣＭをやりながら、企画の営業をやってたでしょ？　すると、当然、バンダイをはじめとするオモチャ屋さん、スポンサー、広告代理店をずっと回るじゃないですか。知り合いになるわけですよ。それである日、突然、クライアントから電話があったわけです。自社の商品を出したいんで、これをアニメにしたいんだけど、おまえ、やらないかって話だったんですよ。

――それが『マシーンブラスター』だったんですか？

そう、『マシーンブラスター』。タカトクをやめた方の作ったタケミという会社でね。でも、僕、アニメやらないって辞めたから。そうじゃなかったら手伝えるけどって言ったんだけど。どうしても、これをテレビシリーズでやりたいという話が出て。それで、僕は吉田竜夫さんのところに行ったんですよ。実はこういう話があるんです、と。そしたら、辞めたおまえがそんなこと言ってくれるとは嬉しい、おまえの好きなようにやれと竜夫さんのお言葉をもらったんで、僕は会社を作ったんです。それが葦プロなんです。その時に、もうすでにタツノコを辞めた加藤くんとか、彼以外にも何人かタツノコを出た人たちがいて、一緒にやるかって話になって。計画的に辞めたんじゃないんですからね（笑）。今でも、僕はタツノコの社員でいたことを誇りに思っています。タツノコの社風が大好きだったんです。なんでも好きなことやらしてもらえる自由なところがあったんで。

（2002年3月8日、於／東京都杉並区「葦プロダクション」）

タツノコプロ JACKET GRAFFITI

▲『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』品番号／KV-2002　形式／17cmＥＰ　発行所／ビクター音楽産業　発行年月日／1978年２月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／600円　収録内容／正・副主題歌（新）

▲『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』品番号／KV-2006　形式／17cmＥＰ　発行所／ビクター音楽産業　発行年月日／1978年７月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／挿入歌「おだてブタ」「ドロンボーのなげき唄」

▲『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』品番号／APS-5083　形式／17cmフォノシート　発行所／ビクター音楽産業　発行年月日／不詳　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と新録ドラマ「ドクガメカをやっつけるコロン」（脚本／天馬正人）

▲『一発貫太くん』　品番号／SCS-376　形式／17cm　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1977年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

▲『一発貫太くん』　品番号／SCS-405　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1978年４月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／挿入歌「貫太仁義節」「おれたちの星」

▲『一発貫太くん』　品番号／CS-7050　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1978年１月　ジャケット総ページ数／８ページ　価格（当時）／1800円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌６曲、新録ドラマ

▲『一発貫太くん』　品番号／LM-1　形式／17cmフォノシート　発行所／徳間音楽工業　発行年月日／1977年９月　ジャケット総ページ数／４ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌と各々のカラオケ

▲『風船少女テンプルちゃん』　品番号／SCS-374　形式／17cmＥＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1977年10月　ジャケット総ページ数／６ページ　価格（当時）／500円　収録内容／正・副主題歌

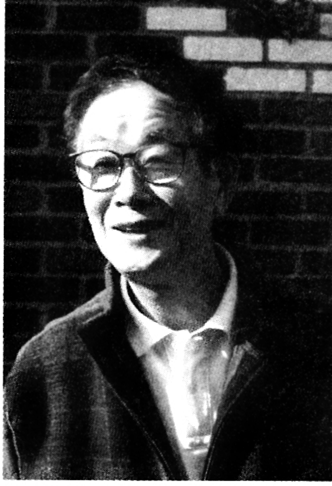
▲『風船少女テンプルちゃん』　品番号／CS-7049　形式／30cmＬＰ　発行所／日本コロムビア　発行年月日／1977年12月　ジャケット総ページ数／８＋２ページ　価格（当時）／1800円　収録内容／正・副主題歌と挿入歌６曲、新録ドラマ「二つの友情風船」「音楽に結ぶ友情」（脚本／佐藤和男、構成・演出／鳥海俊材）

第八章　外部にいる輩（ともがら）

■『宇宙の騎士テッカマン』より

水本完

これは軽い気持ちじゃヤバいぞって



（みずもと・かん）

福岡県出身。新協劇団、自由劇場で、斯波重治や鳥海俊材らと演出部に所属し活躍する。その後、先に劇団を辞めた斯波重治の誘いもあって、外画の吹き替えをやっていたオムニバスプロへ。アニメの初めての仕事は'69年に放送された『紅三四郎』から。劇団時代の後輩でもあった西川幾雄と共に、手探りで音響監督の仕事を築き上げた。以後、読売広告社とタツノコプロが制作する作品に携わるようになる。

'75年、オムニバスプロから独立し、仲間たちとザック・プロモーションを設立する。個性的な音響監督として『新造人間キャシャーン』や『タイムボカン』シリーズ、『おそ松くん』『幽☆遊☆白書』などに携わる。しかし'97年に終了した『みどりのマキバオー』を最後にＴＶアニメの音響監督は引退。今は、後任の育成に情熱を注いでいる。

タツノコプロとザックの関係は、両社の野球チーム同士で対戦したり、仲間たちと小旅行、バーベキューパーティーを催すなど、公私にわたって家族的な付き合いだったという。

現在、ザック・プロモーション相談役。

―― まずは、タツノコ作品に関わられるきっかけからお願いしたいのですが。

オムニバスプロモーションて会社でディレクターをやってたんです。外国映画、テレビ映画の吹き替えの仕事ですね。フランス映画をよくやってましたね。

（アニメをやるきっかけは）フジテレビの別所（孝治）さんが、オムニバスのことを読売広告社に紹介してくださったんですね。それで最初に手がけたのが『紅三四郎』です。

ただ、それまでアニメなんかやったことなかったし、どっかでアニメなんてね……馬鹿にしてたところがありました。僕が子供の頃っていうと、テレビもなかったからね、アニメも映画で、年に1回くらい見に行ったくらいですよ。当時でも、『ファンタジア』は見てたのかな？ 凄いなとは感じましたけど。ただ、会社としては仕事ですからね。これを嫌だ、あれはやらないってのはないわけで。（ディレクター）は斯波（重治）さんとか、何人かいましたけど、ああ、俺が最初に出るのかって気分で。

―― 読売広告社さんからはオムニバスさんにという話であって、特に水本さんを指名してというお話ではなかった？

だったろうと思います。

―― 社内で水本さんが指名されたのはどうしてなんでしょう？

アニメっていうと喜劇的な感じがあるじゃないですか？　それで僕ならできるだろうって考えたのかもしれないし。それで（『紅三四郎』の）フィルムをすぐに見せられて。第1話をね。

―― 当時はかなり先行して制作されていたそうですが。

2ヵ月くらい前にはできてたですよね。僕らアフレコダビングやるのは、常に絵は完璧なものでやってましたからね。

―― 最初に『紅三四郎』のフィルムをご覧になった時の感想は？

読広さんのスタジオで見たと思うんですけど……僕はびっくりしたんですよ。アニメってのはマンガだって知識しかなかったから、なにこれ、凄いじゃないかという感じで。ものすごい可能性あるなって感じたんですよ。単にマンガじゃない。これは軽い気持ちじゃヤバいぞって。

―― 音楽の越部（信義）さんは以前からご存じだったんですか？

音楽は聴いたことありましたけど、その時が初対面でしたね。ものすごく真面目な方で、いい人でしたね。見てる人は、この映像と音楽によってカタルシスを覚えるようなものを作り上げてくれって。そんな言い方をしたのを覚えてますよ。今考えるとちょっと恥ずかしかったかもしれないけど、まだ若かったからね（笑）。

―― アフレコ、音楽っていうのは順番的には、まず越部さんとの打ち合わせのほうがキャスティングなんかよりもより先に？

いや、どっちが先かな？　それはキャスティングが先だったかな、ま、同時並行ですな。

―― この頃は、毎回、音楽付けをしていて、後の作品のようにメニューから選曲するのとは全然違うわけですよね？　その都度、ここにこういう音楽つけたいと、越部さんに伝えるわけですか？

そう。僕のほうで、アフレコ台本に線引いて準備してね。それで（越部さんと）一緒に見るんですよ。

―― その段階ではもう台詞録りは終わってる？

台詞録りの前です。アフレコする前に、（音楽だけじゃなくて）イメージも設計も全部作る。アフレコの前に音楽、効果、指示して。僕は外画やっててもそうですけど、だいたい、5～6回見ますね。だから役者が理解してきてない時、指摘して、これはこういうふうにやってくれなきゃ困ると。ま、言えるわけ。越部さんと打ち合わせする時も、どういう音楽にしたいか書き込んで渡してね、一緒に見ながらまた説明するわけですよ。そうしたら越部さんがそれ以上のものを作ってきてくれる。俺なんかがイメージしたりよりすごくいい曲が生まれてきちゃう。『みなしごハッチ』の時なんか、まさにそうでしたね。そういう幸せな仕事、やらしてもらってました。

―― 『紅三四郎』の頃っていうのは、音響プロデューサーという形でタツノコから本田（保則）さんが来てますよね？　水本さんと本田さんとの分担というのは？

（本田さんは）タツノコさんの窓口ですね。読広さんと僕らの関係の間に立って調整してくれたり、そういうことですね。

―― 『決断』というのは、作業に大変時間がかかったそうですが、ドキュメンタリー的な内容のせいなんですか？

『決断』っていうのは、九里さんが好きだったんで、絵に凝りまくって。予算はこんなもんなのに、「これは絶対入れなきゃダメだ」って、間に合わなくなっちゃうんですよ。まったく、絵が入らない。これはもう、アフレコなんて役者大喜びですよ（笑）。絵、なしでやってるからラジオですよ（笑）。こういう相手にこう言ってるんだってことだけを伝えて。重なって喋ってるところも、1秒、間をとって喋ってもらって。

―― 後で重ねる場合は音をミキシングさせるわけですね。

だから、2本くらいのシネテープを起こしておいて、絵が上がってきたら、台詞の順番から入れていくわけですよ。絵といっても、線画やなんかで。それで音作り始めるから、実際にダビングが始まるのは夕方から夜になるから、朝までかかる。そんなのが毎週、毎週でしたね。

——『紅三四郎』で完成品を見てやったのと比べると、設計がひじょうに難しいというか……。

それはもう、ほとんどなしですね。絵コンテでおおざっぱに考えて、で、出てきた絵を見て考えてね。僕は最初に時間もらうんですよ。で、ずーっと見ながら、流れをおいかけながら、ここからここまで、こうと。その時はもう選曲（方式）だったですね。

——後になると、いわゆる白身の画面はキャラクターの表情がわからないから、声優に不評だって話も一方にあるんですが、その頃は逆に面白がって、ラジオドラマ的に、プラスの要素として捉えて演じてたんですか？

プラスだったかどうかはわかんないけどね。ただ、役者たちは、これはこれで割り切ったんじゃないですか？　でも面白いもんでね、慣れてくると、別にそんなに苦にならなくなってね。朝まで仕事なのは辛かったけど。

横で読んでくれるんですよ

——キャスティングの話についてもお伺いしたいんですが。『紅三四郎』『新造人間キャシャーン』の西川（幾雄）さんは劇団時代からのお知り合いだとか。そうした縁でキャスティングも決まったんですか？

あれはオーディションだったですね。笹川（ひろし）さんか誰かが（彼が）いいって言ったんですよ。僕は逆に以前から知っていたから、ちょっと心配だったんですけどね。

西川くんといえば、（演出のプランを立てる時に）彼が毎回ついてくれたんですよ。僕が絵と台本の文字の両方を追いかけきれなくて、何回も戻らなきゃいけないんですが、ビデオなんかないし、フィルムをいちいちかけてやってるわけです。フィルムに傷が付くし、苦労してるよって話を西川くんにすると、僕、読みますよって毎回来てくれてね、横で読んでくれるんですよ、他の人の台詞も。それでね、僕は（演出のプラン）を作ることができたんですよ。

——それは同時に西川さんの練習にも？

そうですね。西川くんもアニメ、初めての主役だったし。自分もできるだけ絵に親しんでおきたい、と。

——『みなしごハッチ』からだと思うんですけど、岡本茉利さんはタツノコ作品には欠かせない声優さんですよね？

茉利ちゃんがまだ小学生だった頃に、大阪で『王様と私』のミュージカルがあったんです。彼女、子役だけど、大きな役やったらしいんですよ。その後、中学生になって、東京に出てきたいというんで、うちの会社のいまの社長の妹さんが一時期、マネージメントをやってたことがあるんです。そんな縁でオーディションしたんですけど、ステキな感じの子でね、レギュラーにはできなかったけど、2話のモンキチョウの役……チョコちゃん？　なんで覚えてるのかな？（笑）ずっと親しかったからかな？　ま、それが彼女がこの業界に入るきっかけになったんですね。『いなかっぺ大将』も笹川さんが気に入って、『タイムボカン』もそうですよね。清潔な魅力ですね。ご当人はそれでしか扱ってくれなかったっていう恨みはあるかもしれないけど。

——タツノコというと、大平透さんもお馴染みですが。

僕は大好きですよ、『ハクション大魔王』とかね……。

——『ハクション大魔王』の時に大平さんというのは、水本さんが大平さんのことをご存じで、ぴったりだと思われたんですか？

大平さん、『グズラ』やってらして、それを見て面白かったんで。それまでも大平さんは知ってましたけど、アニメのああいう芝居っていうのは知りませんでした。（大平さんを決めたのは）笹川さんじゃないですか？

——大魔王といえば、「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン」とか「〜でごじゃるよ」という台詞だけじゃなく、あの独特の喋り方が印象的なんですが、そうした部分は、どのような経緯で生まれてきたんですか？

それはやっぱり、大平さんがどんどん作っていったんですよ。台本にはありましたけど……。同じことは『タイムボカン』の八奈見（乗児）ちゃ

んも小原（乃梨子）さんもそうですよ。「ポチッとな」なんて、まさに八奈見ちゃんの独壇場ですよ。もう、あんなの台本にもなかったし。面白いですよ。コミックなんてのはね、役者が乗ってくると、そのキャラクターといっしょに画面の中に存在できるようになってくるわけですよ。自分の素直な感覚の中で、ぽっと出てくる言葉がある。こういう状態を作り出せると、作品は面白くなりますよね。笹川さんは、そういうの作り出す名人ですからね。

―― 音響やる立場からしても、笹川さんの作品というのは、意図的にそういう遊びを入れられる余白が用意されているんでしょうか？

用意はされてないと思うんだけど、役者の感性を大事にされていましたね。

―― リハーサルの段階で八奈見さんなんかが自由にアドリブ入れて、それがすごく面白かったとしても、本番でうまくいかないってこともあるんですか？

何回もありますよ。「いまの面白いから本番でもお願いします」と言うと、一般的には意識して面白く喋ろうとするからうまくいかないものなんです。でも八奈見ちゃんのは何回やっても面白かったな（笑）。

作る人間側の仲間としてね

―― 吉田竜夫さんとの思い出をお伺いしたいのですが。

僕らにはすごく神経使って接してくれたですね。絵に関して必要なことがあったら是非言ってください。教えてやってくださいって言われるんだよね。僕なんかも音響の場から絵のほうに不満を持ったりすることはある。じゃ、そういう話をしてくださいって。でね、僕は行きましたよ。

―― それは鷹の台のほうに？

そう、よく行きました。演出される方が、九里（一平）さん始め10人くらいいらしたかな。僕ら音響はこういう時に困る、全体の流れを作られなきゃいけないんじゃないか、絵だけ、ストーリーだけが、繋がればいいってもんじゃない。そんなことを生意気に言った記憶がありますよ。今は恥ずかしいですけどね（笑）。

下請けだから、黙ってやれと言うんではなく、会社全体に、自分たちと一緒に仕事をしてる人たちだという意識があって話を聞いてくれる。作る人間側の仲間としてね。僕らもそういうふうに扱われてること、嬉しかったですよ。だから責任があったし、いいものを作ろうと思いましたね。

タツノコさんとは、あちこち一緒に旅したり、家族的な雰囲気あったですね。あの頃、3本、同時にやってた頃かな？　僕は2本の担当で。その3作品で車を10台連ねて、30人くらいで千葉のほうに旅行に行ったこともありましたよ。船宿をみんな借り切って、役者たちは徹夜で飲んだり。マザー牧場、みんな並んで記念写真撮ったのがありますよ。民宿の前で、横沢啓子がこんな（大きな）タイを釣り上げたみたいに持ってる、ウソなんですけどね（笑）、まだ少女だったけど。そういう時代の写真がありますよ。

（2002年3月20日、於／東京都江戸川区）

■読広スタジオにて『ハクション大魔王』の収録
左より２人置いて相模太郎、麻生みつ子、加藤みどり、大平　透、吉田竜夫、笹川ひろし、松山貫之

加藤昭二

（かとう・しょうじ）
　1947年1月6日、熊本県出身。'67年に石田秀憲が主宰するイシダサウンドプロに入社。タツノコプロの『おらぁグズラだど』から、音響効果を担当する。以後、『ドカチン』『紅三四郎』『ハクション大魔王』『いなかっぺ大将』『科学忍者隊ガッチャマン』『新造人間キャシャーン』『てんとう虫の歌』『宇宙の騎士テッカマン』『タイムボカン』『ゴワッパー5 ゴーダム』に参加。同社に所属する七人の侍たちによって、個性的な音響効果を次々と創り出す。
　'76年にイシダサウンドプロの経営的な問題から独立。自らアニメ・サウンド・プロダクションを興し『ポールのミラクル大作戦』に参加。今までの流れからタツノコプロの作品を中心に音響効果を担当。『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』『一発貫太くん』『とんでも戦士ムテキング』『Gライタン』『ダッシュ勝平』『未来警察ウラシマン』『パソコントラベル探偵団』などを手がける。
　その他の代表作は『フランダースの犬』『タッチ』『おそ松くん』『平成 天才バカボン』『おれは直角』『丸出だめ夫』『幽☆遊☆白書』『みどりのマキバオー』『たこやきマントマン』など。
　現在は『満月をさがして』の音響効果を担当中。

ない音をどうやって作ろうか

　昭和40年にニュージャパンスタジオという会社に、技術者として就職したんです。40年から43年くらいまでそこにいて、後にイシダサウンドで一緒にやる、石田（秀憲）と知り合ったのが、そもそものきっかけなんです。石田は外国映画の制作をやってる日米通信社という別の会社で吹き替えの効果をやってたんですが、よくうちの会社のスタジオに来ていて、お茶飲んだりしてるうちに、仲良くなったんですね。

――初期の外国のテレビ映画はMEテープがよくなくて、日本側で効果や音楽を手直ししていたそうですが……。

　そうなんです、効果音の抜けがあるので必要なんです。音楽はだいたい入ってるんですけど、当時はいろいろな事情があって、こちらに送られてくるMEで完璧なものはなかなかなくて。それにMEがあると、当時は（買い付けの値段が）高い、ないと安いなんてこともありましたね。そうした状況で、当時は外画でも効果（音）が必要だったりしたわけです。

――イシダサウンドができるきっかけというの

は？
　当時、日米通信社の景気が悪くて、会社を維持するのも大変みたいな状況があったらしいんです。そんなことがあって、石田は会社のほうから、独立してみないかと言われてたらしいんですよ。

―― おふたりとも、まだ、アニメとの接点はなかったわけですよね？

　ええ。僕がいたニュージャパンスタジオが『ライフルマン』とか外画を輸入して制作している会社ですから、吹き替えばかりです。ただ、石田はハンナ・バーベラの作品なんかで、ＭＥ合わせたりとか、そういう知識はあったんですね。
　それで石田が独立したのはいいんですけど、ひとりじゃ手が足りないから、一緒にやらないかと話があったんですね。僕もスタジオで仕事をやってて、不満もだいぶたまってた状況で。将来のことで不安もあったんですけど、（本格的に効果の仕事をやることを）決めましてね。外画と邦画、松竹の家族モノとか、多くやりました。

―― その時点で石田さんと加藤さんで会社を興したということなんですか？

　いえ。石田も僕もまだ個人ですよ。それから、僕は技術者としてやってただけなんで、効果なんてなにもわからない状況でしたから、そこから石田について、いろいろ仕込まれるわけですよ。今みたいにコンピュータでひとりでできるわけじゃなくて、僕と石田で組んで一緒にやってました。
　ただ、番組が多くなると手が足りなくなって、伊藤克己ってＴＢＳの朝の番組の音響効果を担当した人間を、（石田の）昔の友達なんで引っ張ってきて、それで3人。それでもまだ会社になってませんけどね。

―― タツノコに『グズラ』のタイトルカードが残ってて。石田・伊藤効果グループって書いてあるんですよ。これはまだ会社組織でない時期のものなんでしょうか？。

　そうです。こういう形で出してたんですね。

―― 加藤さんの名前が出てないのは？

　まだ効果としてそんなに仕事ができない時期ですから（笑）。

―― 効果音の仕事というと普通はライブラリーとか、それまでの財産を活かせると思うんですが、フリーで始められた場合、手元に音源がなかったりして、苦労されたりしたんでしょうか？

　それは外画のＭＥから、使えるものを抜いて、テープに起こして持ってましたから。いつも60本くらいのテープが入った段ボール抱えてスタジオに行ってましたね。それに当時も実写だと、スタジオ撮りで同録がほとんどですし、だいたいは「ある」音ですから、効果といっても、ちょっと足せばいいくらいのものでしたから。アニメだと「ない」音を作ったりするわけですけどね。

―― 効果音を作るといえば、ラジオドラマなどでよくあるような、道具で音を作る……アズキで波の音……さすがに、ああいう生音ではないんですよね？

　いや、発想としてはそうですよ。ない時は、なにかで作らないといけないから。セロハンと割り箸折って、火の燃える効果音にしたり。そういう発想がないと効果はダメです。ない音をどうやって作ろうかと。その発想が優れていたのが、やっぱり石田ですね。『ガッチャマン』なんかだとＳＦでしょ？　その当時になるとシンセサイザーが出たばかりで、今みたいな立派なものじゃなくても、高かった時代ですけどね。もうそれを駆使して、それらしい音を作ってましたから。

エコーかかるとなんとかサマになるもんですよ

―― 石田さんのグループが会社組織（イシダサウンドプロ）になるのはどこからですか？

　これから4人、5人と増えていって、かなり後ですね。

―― 『あしたのジョー』の時はイシダサウンドとなってますけど。

　名前だけ、イシダグループ、石田組という意味でそうしてますけど、会社になったのはだいぶ後だと思いますよ。会社組織にしようと言い出したのは僕ですけど、実際、会社にするのは大変だから。

―― スタッフが5人いて、手分けは決まってたんですか？

だいたい決まってましたね。石田がメインで指示を出して。僕は調整卓について。依田（章良）っていうのが、生の音を録ったり。そのうち本数が多くなっていくと、みんなで分散して、独り立ちというか、各自が作り出す形になりましたけどね。ライブラリーは共有財産で、霞町に事務所を作ったのかな。スタジオは別に借りて、夜だけ使わせてもらったりして。

――『グズラ』からアニメーションの音響効果をやるようになって、それまでの仕事とは仕事内容も変わってきたんですか？

コミック、ということで、まず楽器をたくさん買い込んで、コンガとか木琴とか、とにかくスタジオの中に音が出るものを揃えましたよ。

――『グズラ』の効果というのは、テープで素材を用意していたんですか？　それともその場その場で録っていったんですか？

その場に絵を持ってきて、それから発想ですよね。スタジオの中でいろいろやってみて、テープに取り込む。それで回転を変えたりして、合うまで見つけるわけです。どうしても徹夜作業になってましたね。今はCD買ったり、簡単にできますけど。あの頃はひとつの音を録るのに一日潰したりね。車の音を録るのでも、わざわざ山の奥に行くんだけど、いくら静かでも夜だと虫が鳴いてててダメだとか、いろいろ苦労がありましたね。

――『グズラ』の頃も毎回、フィルムができてから音楽をつけて？

そうです。この当時は絵がちゃんと用意できてますから、絵を見てもらって、演出の指示があって。今は辛いですよ、発想しにくいですから。時には絵コンテがフィルムになっているようなものですからね。

――『グズラ』の総監督の笹川（ひろし）さんはどんな印象だったんですか？

笹川さんは近づきやすい方でしたね。アフレコにもダビングにも立ち会われて、ここはこうして欲しいという話があれば、こちらも当然それに応えて。

――笹川さんのギャグ作品の場合、シチュエーションの切り替えでスピード感を出すために、『ハクション大魔王』の「それからどーした？」みたいに場面転換用のキャラが出てきたりしますが、ああいうところの効果音も印象的でしたが。

『ハクション大魔王』のあれはピアノで「てれんっ」て入れてるんですよ。笹川さんに場面転換に使いたいから、なんか考えてくれないかと言われて。そんな感じで、大事なポイントの指示はしてくれましたね。

――『ハクション大魔王』といえば、確かに効果でいろいろな楽器が使われていますね。

タンバリンとかね。あとボンゴ、ラテン系の楽器はたくさん使ってますね。

――『ガッチャマン』になると、5台のメカがあって、敵にも鉄獣というロボットがあって、架空の音がとたんに増えたと思うんですが。

そのためにシンセサイザーを買ったんですね。

■「少年写真ニュース」1969年9月28日号より

築地に潰れた太平洋テレビってスタジオがあって、そこを借りたんですね。外画をたくさんやってたところなんで、もう物置みたいに汚くなってたんですけど、広くて生の音もちゃんと録れて。そこにシンセ置いてやってましたね。『キャシャーン』『タイムボカン』はシンセの音と金属の軋みの音と合わせて、いろんな音を録りましたね。

――『ガッチャマン』だと火の鳥の効果音でも、かなりご苦労があったとか。。

決まらなくて時間がかかったんですよね。いざ作るにしても、赤く燃えるまでが結構長いんですよ、キジの声を使うってことになったんですが、長さが足りなくなって、スタジオに入って鳴いてみますって(笑)。スタジオの中でワーッて大きな声で。出だしはキジで、途中から僕の声に変わっているんです。『キャシャーン』のフレンダーも感情があるんで、実際の犬でもなかなか感情出せないでしょう？（笑）だから、感情出す時は僕の声を使うことが多かったように思います。

――それは加藤さんの声を元に回転数をいじったりして？

いえ、回転数も変えずに。ただエコーかけるだけ。エコーかかるとなんとかサマになるもんですよ(笑)。

――『キャシャーン』のアイキャッチの効果音が「キャシャーン」という音に聞こえるんですけど、これは狙って作られたものなんですか？

そうです。読広の木村（実）さんからの注文ですね。

――これ、音の素材はなんなんですか？

いろいろあって……石田も困ってしまったけど、いろんな音から「キ」とか「シャ」とか聞こえる音を拾って。「キャ」は短いから回転上げたり。これはもうすごく印象に残ってます。他によく覚えてるのは、これも木村さんからで『いなかっぺ大将』の下駄の音で一晩、二晩泣きましたね(笑)。下駄の音がよくないってクレームがついて。大ちゃんが歩いているところだから、気持ちよくいきたいわけですよ。だけど、生音だとなかなか気持ちよく聞こえないわけですよ。ずいぶんかかって、結果的には下駄でやったんですけど、当て方とか、普通の下駄だと強いから、素材を桐に変えてみたり。で、なんとかOKが出たことが印象に残ってますね。今、そんなリテイク出したら放送に穴が空きますけど(笑)、当時は納品が1ヵ月、2ヵ月前でしたから。

効果ばっかり気になるんですよね、職業病ですよね

――『ハッチ』は自然の音が多いですよね。

そうですね。デフォルメしてつけるのは、敵の虫が攻めてくるとかね、そういうところは注文あるんですね。ただカマキリが来てもつまらないんで、迫力出す音を出したりしないと。当時だと、なにからその音を出すのか。鳥だったら羽音以外、なにが出るのかな？　と考えて。発想しないと効果はダメなもんですから。だから、映画見ても、効果ばっかり気になるんですよね、職業病ですよね(笑)。その作品（映画）のストーリーはなんだったかな、なんてね(笑)。

――『ハッチ』とは正反対というか、『決断』などはどうだったんでしょう？

あれは石田の右腕でやらされてたから、とにかく大変でしたね。1日目にチェックして、2日から徹夜で音作りに入って、3日目にようやく終わる。あの頃は月曜日に出てきて、日曜日に帰る、毎週、そんな状況でした。その頃、結婚もしたんですけど、1週間にいちどしか帰れないから、ちょっと困って、それくらいなら仕事辞めて九州に帰ろうって話になったんです。それがきっかけで石田さんに相談して、独立するきっかけになった作品なんですけどね。

――その後、タツノコでは真下（耕一）さんや植田（秀仁）さん、新しい世代の監督さんたちが出てくるわけですけど、音響効果の面での変化はあったんですか？

真下くんや植田くんは新しいものを作りながらも、先輩たちのいいものを受け継いでますからね。そういう意味で大きな変化はなかったと思います。

タツノコさんとの仕事で印象に残ってるのは、昔は線画とか白身は音響スタジオに持ってきたくないと盛んに仰ってたことですね。それは恥ずかしいことだからって。ただ、笹川さんが、私の担当している他のアニメで、線画の多い作品を見て、「あ、これでもできるんだ！」って気づかれちゃったことがありましたけど。あれは困りましたね。マズいとこ見られちゃったなぁって(笑)。

（2002年5月17日、於／東京都港区「アニメ・サウンド・プロ」）

松山貫之

（まつやま・かんし）
1923年1月24日、佐賀県出身。お寺の息子として生まれる。'43年に有田工業学校の図案科を卒業し、特攻隊幹部候補生を志願する。戦後しばらくは九州にいたが、'47年に上京し瀬戸物屋で働く。'50年に求人募集を見て、読売広告社へ入社。桃屋や森永製菓などの広告を担当する。
'64年、読売広告社初のテレビ作品として『宇宙エース』をプロデュース。以後、『マッハGoGoGo』『おらぁグズラだど』『いなかっぺ大将』『科学忍者隊ガッチャマン』など一連のタツノコ作品に携わる。
特に番組タイトルの命名にかけては天才的な閃きを発揮しており『科学忍者隊ガッチャマン』『新造人間キャシャーン』『タイムボカンシリーズ　ヤッターマン』とヒット作も多い。
'93年に読売広告社を定年退社。'95年12月から'96年11月までの間、タツノコプロの会長として在籍する。現在はシンセイ・リテラスの顧問。

「松山」なんで「待つ」のは苦じゃないんです

――『宇宙エース』はタツノコの初作品ですが、読広さんにとっても子供向けの番組に代理店として参加されるのは初めてだったんですよね。

そう。でも、僕は元々そういうのやりたかったんですよ。あの作品は最終的にはフジテレビで放映されましたが、最初ＴＢＳからも僕のところに話が来てたんですよ。でも、もう亡くなってしまったフジテレビの担当の方が、僕の所に夜中12時頃電話してきて「私にやらせてください」って言われましてね。彼がいなければＴＢＳになっていたかもしれないです。スポンサーのカネボウも僕が話を通したんですけど、大阪の本社で決定の会議をやっている時に、僕は朝から夕方6時くらいまでずっとカネボウで何もしないで待ってました。「松山」なんで「待つ」のは苦じゃないんですよ(笑)。それでカネボウがスポンサー参加を決めて会議が終わった時、社長に「やりたまえ」って言われて、あれは本当に嬉しくて飛び上がりましたよ。(吉田)竜夫さんも、東京から出てきてましてね。お祝いということで、カネボウさんに飯を食べさせてもらいました。その後、『宇宙エース』の放映1年ほ

■『宇宙エース』

ど前の7月の終わりに、フジテレビの企画でアメリカへ旅行へ行きましてね。あれで読広とフジテレビとカネボウが集まって、意志をひとつに固めたというような感じになったのかな? でも、後々噂で聞いたんですけど、この作品は読広とは別に、実は大阪の電通も動いていたようですね。誰も教えてくれなかったんで、僕は全然知らなかったんですけど。

―― 吉田竜夫さんとの繋がりというのは、最初はどのような形で?

いちばん最初は、僕が竜夫さんのもとを訪ねていったんですよ。それから、非常に仲良くさせていただきました。彼が倒れられてからも、病院にお見舞いにも行きましたし。

―― 松山さんは、タツノコ作品のタイトルを数多く名付けられているそうですね。

『ガッチャマン』ってタイトルは僕がつけたんです。科学と忍者を融合させたSFアニメですよね。5人の男女が5台のメカに乗り、合体して巨大な鳥のメカになるわけです。そこで〃合体〃をコンセプトに考えると「5人の男女がメカで合体……合体……ガッチャ……ガッチャマン」と。自動車や列車やなんかの機械が連結する「ガッチャ」ってあれですよ。タツノコからは確か『シャドウナイツ』とか何案か出てたんです。それで読広の会議室でタツノコの人たちと話してましてね。僕が『ガッチャマン』って名前を言ったら、その場で全員に反対されたんですよ(笑)。「そんなのじゃ困ります。別のにしてください」って。でも僕は『ガッチャマン』が絶対イケるって直感してたんで「これで良いんだ!」って引かなくてね。それでタツノコの人が「竜夫さんに連絡する」って、電話をしたんです。すると……その時、偶然地震が起こったんですよ。仙台で起こった地震だったかな? それで僕は〃自信〃が付いてね(笑)。「絶対このタイトルだ!!」って押し切って、それで『ガッチャマン』ってタイトルに決まったんです。実は『宇宙エース』の時も、竜夫さんと初めての話し合いの最中に新潟のほうで地震がありましてね。それでタツノコと一緒に仕事をするようになったんです。僕の場合、何故か重要な局面では、〃地震〃が起こって〃自身に自信〃を付けてくれてることが多いんですよ。駄洒落のようですけど、でもそうやって決めた番組はちゃんと当たりますものね。

―― 他にもタツノコ作品で命名されたものってありますか?

仮題『ネオロイダー』と呼ばれていたのを『キャシャーン』としたり、『どろんこ大将』が『一発貫太くん』になったり。『闘士ゴーディアン』は、最初『ガーディアン』だったのですが庭師を連想させるという事で『ゴーディアン』にしました。他にも『みなしごハッチ』『樫の木モック』『けろっこデメタン』『ヤッターマン』『ドテラマン』とか沢山あります。

―― 実はタツノコの倉庫に『クレクレタコラ』の録音台本が保管されてるんですよ。それで気になって調べたら、タツノコの出版部と所縁のあった太田じろう氏が幼年誌で漫画を描いていたんです。そこには『タコラ』の原案者が〃よみひろし〃とあったのですが、これって読広って意味ですよね?

よみひろしは、僕が作詞をする時に使っていたペンネームなんです(笑)。『クレクレタコラ』ってタイトルも僕の命名です。この頃は僕がいちばん張り切ってた頃で、どんな仕事でも欲しがって、クレクレとやってたんですよ(笑)。

漫画やアニメのおかげで、世界中を回れましたよ

―― タツノコの作品で、印象深い思い出などありますか?

『いなかっぺ大将』が始まる前、銀座の4丁目の角で大ちゃんとキクちゃんの結婚式って宣伝イベントやりましてね。それはすべて僕が担当したんですよ。日産のビルの上から式場の指示を出してました。そのイベントで、まだ小学校の6年生くらいの、天童よしみに歌ってもらったのを覚えて

ます。あのイベントは当時、結構評判になったんですよ。

――タツノコの『マッハGo Go Go』は、後にアメリカに輸出され『スピードレーサー』の名で人気を博していますが、海外への販売も、読売広告社さんのほうで動かれていたんですか。

イタリアにひとりで1週間ばかり行ったこともあるし、チベットの山の上のほうや、タヒチなんかにもね。漫画やアニメのおかげで、世界中を回れましたよ。言葉はベラベラじゃなくてほんのカタコトだったんですけどね。でも会社でしゃべれる者がいなかったから、外国からの電話なんかは私が対応してたんですよ。だけど社内ではやっかみなのか、僕のそういう様子を面白くないと思っている人たちも多くてね。夕方の5時頃になると社内で役員会があったんですが、ヨーロッパでは時差が8時間だからちょうど朝の出勤後くらいなんですよ。それで「フロム、ユーロ」って電話が掛かってくるんですが、すぐに切るわけにもいかないでしょう。しばらくカタコトで話をしていると、もう周りから嫌な目で見られましてね。でも、犬や猿と話ができるってのならまだしも、カタコトで英語しゃべってるくらい、嫌がらなくたっていいじゃないですか。もう、「妬ましいならしゃべってみろ」って言いたくなりましたね。

（2002年6月4日、於／東京都世田谷区）

■読広スタジオ録音室にて　左より松山貫之、吉田竜夫、笹川ひろし

（きむら・みのる）
1934年9月30日、東京都出身。'58年に早稲田大学第一文学部仏文科を卒業し、読売広告社へ。同社初のテレビ作品『宇宙エース』を担当。'67年の『マッハGoGoGo』からは、録音も社内のスタジオでの作業になり、『おらぁグズラだど』『ドカチン』『紅三四郎』の担当に。以後、'75年頃まで、タツノコプロ作品に携わる。

大野実
木村実

（おおの・みのる）
1948年８月25日、東京都出身。中央大学を卒業後、71年に読売広告社に入社。『昆虫物語みなしごハッチ』の途中から番組担当に。以後、『科学忍者隊ガッチャマン』『てんとう虫の歌』『タイムボカン』全シリーズ、『Ｇライタン』『ダッシュ勝平』を担当。他に『魔法のプリンセス　ミンキーモモ』『未来警察ウラシマン』『魔法の天使クリィミーマミ』（プロデューサー）『幽☆遊☆白書』『みどりのマキバオー』『ウルトラマンティガ』『ウルトラマンダイナ』『ウルトラマンガイア』『魔法のステージ　ファンシーララ』（企画）などがある。

お互いノウハウ持ち合おうや、ということで始まったんです

――そもそも読売広告社さんとタツノコプロとの出会いというのは？

木村　出会いはね、集英社に長野規さんという方がおられて。

大野　去年、亡くなられましたね。「少年ジャンプ」の編集長をやられて。

木村　当時、「少年ブック」という雑誌を集英社で出していて、その編集長が、長野さんだったんです。のちの「少年ジャンプ」の初代の編集長です。その長野さんが、吉田竜夫さんの作品に目をつけられて、当社の松山（貫之）という電波担当役員に、タツノコの吉田竜夫さんを御紹介いただいたんです。確か東京オリンピックの年に、集英社の昔のビルで、吉田竜夫、健二、豊治（九里一平）三氏にはじめて、お会いしました。新潟の大地震の日です。忘れもしないんですけど、竜夫さんと名刺交換しようとしたら、グラグラときて……。東京も揺れたんですよね。6月の16日です。

大野　昭和39年ですね。昼前ですね。忘れられないですね、それは（笑）。

木村　その頃、タツノコの皆さんがね、雑誌で『ハ

リス無段』や、いろいろ仕事をされてたんですよ。当時はアニメ番組は『鉄腕アトム』ぐらいしかなかった頃です。お三方が、アニメ番組をやりたい、映画を作りたいというお話だったですね。それで、ウチも実は、アニメーションに関心がありました。いろいろ、企画を検討中でもありましたので、いいチャンスでした。

――読広さんは、それまではアニメーション以外の子供番組は？

木村　いやぁ、まったくありません。元々、プリントメディア、新聞が中心ですから、電波は後発なんです。ですから、タツノコさんにやってみたいと言われてもね、まったくノウハウがないんですよ。

　当時、『鉄腕アトム』は、フジテレビに別所（孝治）さんって方がいらっしゃって、虫プロ（作品）をコーディネートされてて、録音、仕上げという部分では、フジテレビがいろいろご指導する立場になってたようなんです。で、ウチも、コマーシャルではいろいろなプロダクションとおつき合いもあるし、声優さんや、作曲家さんのルートがありますから、録音というものを含めて、ご協力申し上げようかと。それから、広告業界とか民放の世界はタツノコさんはまったくご存じないですから、そうした業界の案内役をつとめるのが、こちらの仕事……。ただ番組を扱うということでなく、制作をして、スポンサーをつけてという一貫作業、プロダクションとエージェンシーをひとつにして、やってみようかということもありましたから。広告会社として、今までいろいろ持ってる情報とか知識とか、それをタツノコさんと協力して、お互いノウハウ持ち合おうや、ということで始まったんです。

　やってみようかという時に、タツノコさんは国分寺の林の中にバラック建てのオフィスを設立されました。エアコンはないですからね、とにかく暑いですよ。トタン屋根の上に、暑さをさえぎるように、木の枝を日よけに置いたりして。まるでジャングルのようでした……。

それで尺を調整してたんです

――お話をお伺いすると、音付け以降の作業は読広さんが引き受けていた、という形でよろしいんでしょうか？

木村　そうですね。音付け以降は、タツノコさんにも当然、見ていただきますけど、だいたいうちのほうがお膳立てして仕上げていきました。途中からは（読売広告社の）以前のビルに録音スタジオができました。そこがほとんどタツノコの作品の制作ベースになったんです。

大野　その（スタジオができる）前はどこでやっていたんですか？

木村　新橋の朝日録音のスタジオで大変お世話になりました。藤井さんて立派な社長さんがおられました。『宇宙エース』はそこでやりました。面白いのは、かなり有名な俳優さんが出てるんですよ。藤岡琢也氏が博士、愛川欽也氏がロボット犬かなにかやってて。

大野　愛川さんがラジオでどんどん売れてきて、途中からＴＢＳの車がスタジオの下で待つようになったんですよね。

――読広さんのコーディネートで、愛川さんたちを呼んできてんですか？

木村　そうです。俳協という組織がありましてね。そこに杉山繁三という熱心な方がおられましてね。柳川さんという女性の方にキャスティング事務をお願いしたんです。

――『宇宙エース』は音響ディレクターはどなただったんですか？

木村　僕はアフレコはよくわからないし、コマーシャルしか知りませんでしたけれど、それでも最初の頃は、やりましたね。声優の皆さんが大変、親切にバックアップしてくださいましたので。タツノコの担当として、平野保さんがいらっしゃいましたけど。プロデューサー、製作担当ですよ。オーディオディレクターとして、石田忠賢さんがその後、ずっとやってくれました。

――パイロットフィルムについては、番町スタジオというところで収録されたという記録があるのですが。

木村　パイロットは番町スタジオですが……ホントに短い作品で。それは簡単なものでしたから。藤岡琢也がやってたのは、そのパイロットの頃からですよ。当時、放送するフィルムっていうのは、

字幕やなんか入ってパッケージされたものが放送局に入るんです。スタッフやキャストの文字なんかも放送でテロップで入れてもらっていました。これが大変なんですよ。

大野　それは僕が入社した後もしばらくそうでしたね。オンエアの時に、テロップカードをタイミング合わせて出してもらって。昭和46〜47年までやってたかな。

木村　テロップカードは僕、やってましたよ。

大野　代々、制作進行がやるんですよ。タツノコさんからキャスト、スタッフのリストをもらって、キューシートを書いて、シートと一緒に納品するんですよ。

木村　当時はクレジットでどのスタッフを出せばいいか、その序列とか、まだルールも確立されてなかったので、我々がそれを作っていったという側面もあるんですよ。

――なぜフィルムに焼かなかったんですか？

木村　結局、それは技術的なものなんですよ。

大野　というか、アニメだけでなく、他の番組もこういうふうにやってたんじゃないですか？　アニメがその手法でやっただけじゃないんですかね？

木村　まだオンエアの形式がひじょうにアナログだったんですね。それと絵を仕上げるのが大変で、文字のことなんかどうでもよくなっちゃうんですよ（笑）。『宇宙エース』にかぎっては、52話ですか？　おそらく、本編の長さが全部違いました。本編が短かい分、エンディングが長いのとか、いろいろあるんですよ。それで尺を調整してたんです。なにしろ初期の初期ですからね。

■『宇宙エース』アサリ

――『宇宙エース』の企画時で印象的だったのは？

木村　スポンサーのカネボウさんから、宇宙エースにハリスガムを食べさせることはできないかとのお話があり、『ハリス無段』のタイアップでお世話になっていることもあり、チューインガム状のスペースフードを食べさせると元気になるというシーンを新設しました。

――弱くなるとガム食べて元気になるという（笑）。アニメが最初のタツノコに、最初から30分枠のテレビシリーズを任せることに不安はなかったんですか？　当時は5分枠の短いアニメもありましたよね。

大野　たしかに短いのありましたね。

木村　でも『鉄腕アトム』が30分枠でいってるから、もうそういう頭でいたんじゃないですかね？

ボタン押すの忘れてじっと見ちゃうんですよ

――『宇宙エース』といえば、吉田竜夫さんたちが作られた主題歌もあったそうで。

木村　『宇宙エース』の主題歌作曲はいずみたく、作詞は『アンパンマン』のやなせたかしです。

――竜夫さんたちはマイナーな曲調が気に入らなかったという話ですが。

木村　当時、カネボウはいずみたく氏が専属の作曲家だったんです。そういうことがあって、いずみたく氏がいいって話になったんです。竜夫さんはそういう世俗的なことと関係なく、原作者としてお考えがあったようです。

――九里さんが作詞されたそうで。

木村　そうですね。作曲は竜夫さんじゃないのかな？

――越部（信義）さんじゃないんですか？

木村　越部さんはパイロットですね。だけど、テレビの劇伴は小森昭宏さんにお願いして。

―― 音楽についてのディレクションやメニューを作られていたのは？

木村　音楽ディレクターは中村勝彦氏、オーディオディレクターは石田忠賢さんですね。楽器の編成なんかもいろいろ無理を言われて（笑）。ハープを使ってくれとか言うから、いや、ハミングのほうが安いよって言ったり。

大野　僕もその時代の最後の生き残りですからね、ハープが高いの知ってますよ（笑）。ハープが来ると、あ、今回は高いなぁって思いましたよ（笑）。

木村　みんな、金のことは関係なくやりますからねぇ（笑）。

――『宇宙エース』の後に『マッハＧｏＧｏＧｏ』になりますが、放送はかなり難航されたそうで。

木村　カラーテストまでは日本テレビにお願いしました。画面にカラーとマークが出るような時代で、日本テレビがカラー作品に積極的だった。だから、音も入れたパイロット版もできたんです。それで東京商工会議所のホールに子供たちを集めて、テストをやるんですよ。面白いかつまらないか、子供たちにボタンを押させるんです。『マッハ（ＧｏＧｏＧｏ）』の制作自体はすでに進んでいて、スポンサーの反応もすごくよかったんですよ。ところがその子供たちのテストをやってみたら、内容がスリリングだから、子供たちがボタン押すの忘れてじっと見ちゃうんですよ（笑）。で、もうひとつが虫プロの『悟空の大冒険』で、そっちに負けちゃった。

―― 結局、最初の何回かはＣＭなしで流されたんですよね？

木村　スポットはあったんですけどね。そういうことができたのも、当時はカラーのソフトが少なかったからだと思います。そういう形も、うちとタツノコさんにとっては初めてじゃないんですよ。

―― けれど、カラー作品だし、制作費も高いですよね？　海外輸出を睨んで、ということはあったんですか？

木村　あの頃はみんな、多少意識してたんじゃないですかね？

――『マッハ』というと、以前、森功至さんにお伺いした時、リハーサルのために、ひとりだけ読広のスタジオで前日から練習していたという話があるそうなんですが。

木村　彼は声がいいんですけど、かなりトレーニングしてもらったんです。その時のディレクターが石田さんかな？　うちのスタジオによく来てくれましたね。彼も熱心でしたからね。自分のところのスタジオですから、そういうこともできたんです。

――『みなしごハッチ』のキューシートを確認していて気になったんですが、「ハッチと話そうモシモシ電話」というコーナーがあることがわかったんですが、これはなんなんでしょう？

大野　あ、それは僕がやりました。ハッチと電話でお話ししましょうというキャンペーンを企画したんです。葉書で応募してくるわけですよ。選びまして、うちのスタジオに栗葉子さんを呼びましてね、電話で話してもらうんですよ。絵はスライドで用意して、予告の代わりにその音声を流すんですよ。何回かやりましたけど、これはいい企画だと思いましたよ（笑）。ただ、子供がなかなか電話切ってくれなくて、時間が押したり、大変でしたけど。こっちもディレクションしてると、いい話が聞きたいので、なかなか切れなくて。子供が「うちの方にはママがいるかもしれないから、おいでよ」なんて、ホントにハッチと話してるみたいな。テープはもう残ってないと思いますけどね……。

―― ハッチのエンディングが長いのが気になっていたんですけど、ようやくわかりました（笑）。『いなかっぺ大将』のオープニングでも、「大ちゃんダスダスクイズ」（？）みたいなことをやってましたよね。

大野　なんか、キャンペーンでいろんなことやってましたね（笑）。

―― 大野さんの読広入社は『ハッチ』の頃なんですか？

大野　僕は昭和46年入社なんで、『ハッチ』の途中からですね。予告編のナレーション原稿書いたりね。当時はね、1週間考える時間ありましたからね。編集見て、タツノコさんから送られてきたの（予告のフィルム）を見て、それにピタッと合うように。それが新入社員の教育。訓練でしたね。仕事、予告のナレーションを1週間に1本書くだけ、みたいな（笑）。

――予算はタツノコさんの仕切りではなく？

大野　なかった時期がありました。タツノコさんが絵の専門で、読広が音の専門みたいな感じで。だから、タツノコさんの制作費は絵の制作費だけ、音響制作費は別途みたいな時期がしばらくあって。後になると、絵も音も一緒に完成というふうになるんですけど。

――『ガッチャマン』で初めて音響監督をされた斯波（重治）にお会いした時、木村さんの音へのこだわり、真剣な姿勢に震えた、という話を聞いたのですが。

木村　ご迷惑をおかけしました（笑）。

大野　（木村さん）ご本人の口からは言えないでしょうけど、音へのこだわりは相当ありましたよ。ダビング完成した後も、一回回してチェックしたりしてね。それと、監督とのやりとりが、かなり火花を散らすというか、互いに引かないところがあって。そうやって、いいものにしていた経緯があったと思います。僕が駆けだしたの頃、『てんとう虫の歌』だったと思うんですけど、下駄の音が違うっていうんで、一晩かけてやり直したりね。僕も鍛えられましたよ。

――『いなかっぺ大将』は川崎のぼる原作ということで、タツノコとしては、初の社外原作ものになるわけですが、これは読広さんからの提案なんですか？

木村　そうです。あれは小学館でヒットしてるし、こういうものも作ってみてはどうですか、と。タツノコさんの趣旨とは違うんですけど、ヒットしましたし、プロダクションとしてひとつのステップとしては必要だと思いました。

――『いなかっぺ大将』の後、オリジナルの『ガッチャマン』になって、その後、また川崎のぼるの『てんとう虫の歌』になりますよね。あの枠をすべて原作モノにしていくという意図ではなかったわけですか？

木村　それは長い流れを見て、クライアントや放送局サイドのこともありますから、お客さんの幅を狭くしないようにということですね。

――読売広告社のほうでは、木村さん、大野さんの他に、内間さんという方が重要なお仕事をされていたそうで。

木村　最初のうちは私だけがタツノコさんと仕事をしていたんですが、とても私ではできないので、後を内間といういちばん信頼できる男に任せたんです。残念ながら、若くして他界しました。僕はその後、営業に行って、大阪支社長やったり、子供番組離れたんですね。大野君は僕がいる時に入ってきたんですが、これ、たまたまなんですけど、内間稔、大野実、木村実、字が違うけど、3人とも「ミノル」です（笑）。

――内間さんというのは、どういう方なんですか？

真面目な男で。それから、タツノコさん以外とも仕事をして、アニメ作品の幅を広げてくれたんですね。タツノコさんとだけでなく、アニメはいろいろやってるんです。『アタックNo.1』とか

■『マッハGoGoGo』

ね。それから『赤胴鈴之介』『荒野の少年イサム』とかね。

―― その頃の作品だと読売広告社の名前は出てませんよね。

最初のうちは「田舎から都」にやって来たって喜んで、とにかく名前を出してたんですけど(笑)。ただ間違えてタツノコさんより大きくだしちゃったりして(笑)。それで、我々は縁の下の力持ちなんだから、あまり名前は出さないほうがいいだろうって時代があったんです。

がんばりますから、いい仕事やりましょう

―― 竜夫さんの思い出を聞かせていただきたいのですが。

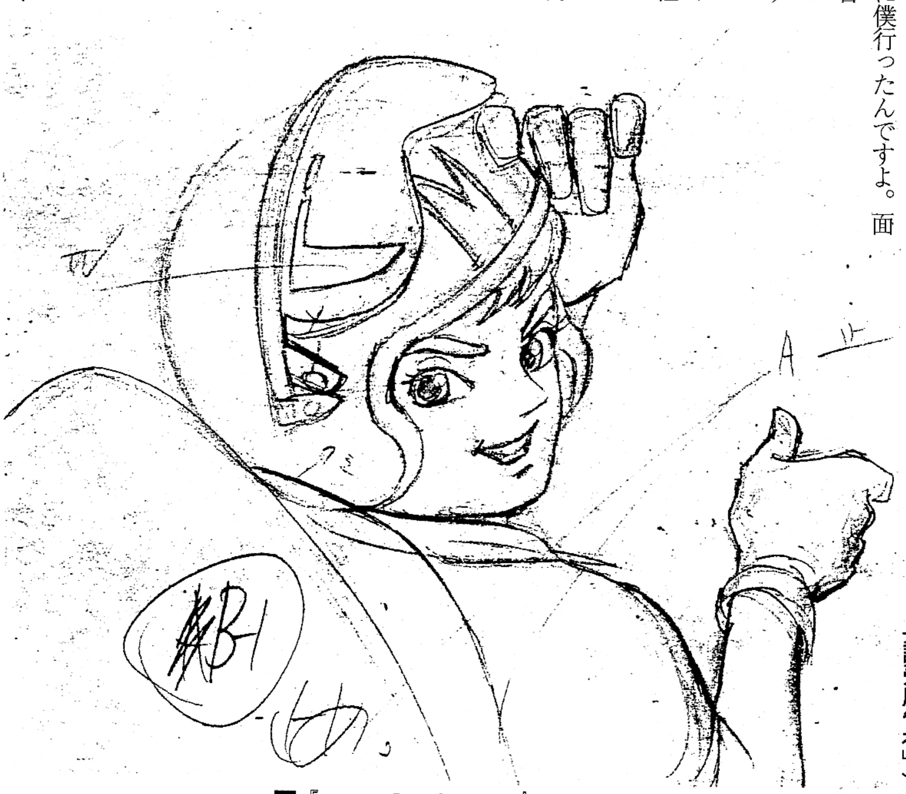
木村 純粋で、何事にも、誠実な人でした。激論を戦わしたことも少なくありませんが、お互いに一緒になって「新しいこと」へ挑戦してきた戦友のようでした。亡くなる前、伺った飯田橋の病院が最後でした。

大野 僕が入社した時、社長であり、クリエイターだったけど、クリエイターとしての印象がひじょうに強かった。『ガッチャマン』の打ち合わせなんか、僕、出てましたけど、カリスマ性があって、当時、真下さんとか押井さん、みんな慕ってましたよ。僕らみたいな入ったばっかりで若いペーペーでも、ちゃんと1票として聞いてくれるんですよ。偉い人の意見をまとめるんじゃなくて。我々の意見を大事にしてくれるんだなぁって思えば、やる気も起きますよね。本当にそういう人でした。亡くなる1週間前に僕行ったんですよ。面会謝絶になる前の最後の日で。そしたら竜夫さんが「大野さん、がんばりますから、いい仕事やりましょう」と仰ってくれて。それを聞いて複雑な思いで会社まで戻りましたね。

木村 ご兄弟3人「一本の弓矢」となって仲良く、力を合わせておられたのは、竜夫さんのキャラクターがありますね。非常にご家族思いで……。うらやましい限りでした。いろんなことを勉強していました。すごいロマンチストで。

我々が、こういう仕事ができたのは、そういう「人」に恵まれたからです。いい時代だったんですかね。この仕事を通して、様々な人々が、すべて自分のこととして、力を貸してくださいました。吉田竜夫さんはじめ、タツノコの皆さんとの触れあいは、生涯、忘れ得ぬことであり、本当に感謝しております。

（2002年5月31日、於／東京都中央区「読売広告社」）



■『マッハGoGoGo』

木村英俊

（きむら・ひでとし）

1934年6月10日、北海道札幌市出身。'57年に慶応義塾大学経済学部を卒業。朝鮮動乱による特需景気も終わりを告げ、景気は最悪。希望していたレコード会社や映画会社も新卒の採用ナシの状況で、日東金属鉱山の採用通知が来たため就職。しかし、鉱山業界の低迷から'63年2月、日東グループのひとつであった日本コロムビアに転職。同社の営業部を経て、学芸部に配属。朝日ソノラマのソノシートが全盛の時代に、初めてのレコード盤として『ジャングル大帝』を発売することに成功。以後、同社のＴＶ漫画路線を強化するきっかけを作った。

また、フジテレビの『ちびっこのどじまん』の受賞者の中から、嶋崎由理、堀江美都子、天童(吉田)よしみらをデビューさせ、水木一郎、佐々木功、大杉久美子といった人材を、コロムビアのアニメ音楽のポップス・シンガーとして育て上げる。

日本コロムビア役員を経て、平成４年フォルテ・ミュージックエンタテインメント社長を務める。平成６年同社を退社し、現在はジーベック音楽出版代表取締役社長。

「美空ひばりを貸せ」って言うんですよ

僕がコロムビアに入ったのは、美空ひばりのプロデューサーになりたかったからなんですよ。ところが僕、楽譜は読めましたからね、学芸が手伝ってくれって来るわけですよ。そうしてるうちに学芸部長にどうしてもディレクターに欲しいって言われまして。学芸って童謡なんですが、あんまり儲かりもしない、要するにコロムビアの組織の中じゃ、お荷物みたいな。そこでなにをやるのかなと思ったわけです。でも、制作で来てくれって言うなら、行ってやろうって。

その頃、ソノシートで朝日ソノラマさんがアニメを独占して、飛ぶように売れてるわけですよ。『鉄腕アトム』なんか40万50万売れてるって話で。だから学芸部長はどうしてもテレビマンガをやりたい。それで僕に白羽の矢が立てられたんですね。

――**最初の頃は虫プロに行っても、東映に行っても、ソノラマだけで十分だと、門前払いされたそうですが。**

そうそう。いろいろ苦労がありまして、結局、最初に手がけたのが東映動画の劇場用長編漫画映画『ガリバーの宇宙旅行』なんです。脚本の関沢

新一さんが、作詞家としては、たまたまコロムビアの専属なんですよ。それで木村くんのとこでしかできないって話になりまして、売れても売れなくても、これが第一歩だって。それでも、なかなかテレビはうまくいかない。東映動画に「そんなにやりたかったら、ソノラマの編集長がひとりでやってるから、彼の了解をとればやらせてやるよ」と。で、その編集長のところに行って、やらせてくれるわけないんですが(笑)、「やらせてください、あなたがOKと言えばいいんだから」。そしたら「美空ひばりを貸せ」って言うんですよ(笑)。そんなことできませんよ(笑)。

最初にテレビマンガ始めたのはね、小学館の『オバQ』でした。

——それは『オバQ』のアニメがこれから始まるという段階で、向こうから声をかけられたんですか?

いや、それは僕が小学館に行って、『トッポジージョ』を向こうから呼んできた宣伝部の人と話をまとめたんです。あの頃はまだキャラクター商売ってのがなくて、それを最初に立ち上げたのが小学館で、後の小学館プロダクションの始まりの頃ですね。

——それは音楽制作全般ですか?

そう。それから東映(動画)に版権部が初めてできた頃、荒井さんていう人が責任者になって、その人が僕が以前、けんもほろろに追い返されるのを見てたわけですよ。それに同情してくれたのか(笑)、『魔法使いサリー』は木村にやらせようって話になって、そこで初めてレコードと(ソノ)シートを分けてくれたわけですよ。レコードはコロムビアにやらせようって制作を依頼されたのが、東映さんとの最初ですね。

——歌手を変えるとかいう条件はあったわけですか?

結局、会社専属の歌い手を使いますから。その頃は、プロデューサーの歌わせたい歌い手がどこかの専属という場合もありますね。で、しょうがないから、テレビはそっちで録って、歌はこっちで誰か代わりを使うとかやったりしましたね。

——今みたいに、テレビと同じ歌い手であることっていうのは、最初の段階ではこだわりはなくて?

なんにも(笑)。最初ですから、とにかくやらせてもらえば、こっちはいいわけですから。

——その後、東映動画や虫プロだけでなく、タツノコにも売り込みに行かれたと。

そう、並行してね。今でも覚えてますけど、雨の日に鷹の台に行ってね。畑ばかりの道をすーっと入ってくと、あたりになにもないところに真っ白な建物が。道から会社に入るまでね、砂利が敷いてありました。

(吉田竜夫さんに)初めてお目にかかったわけですよ。こちらが、どうしてもやりたいと言うと、ご存じとは思いますけど、あの人、ギターやっててね。音楽家になるか漫画家になるかって、ま、それくらい好きなわけですよ。それでひじょうに話に乗ってくれましてね。で、遠いんだけど、足マメに通ってたら、間もなく竜夫さんから電話かかってきて、「今『紅三四郎』をやってるんだけど、どうもよくない。途中なんだけど、歌を変えたい」。聞いてる分には悪くないんですけど、ただパンチが足りないっていうか、印象が薄い。で、(こちらで)やりましょうと。こういうのやるんだったら、歌謡曲ではなく、ポップスで作ってやろうって。それで、丘灯至夫先生に頼んだわけですよ。あれ、1週間で仕上げたんですよ。とにかく早く取り替えたいっていうのが、竜夫さんの意向だったから。

あの子の声がものすごく好きだった

——後にタツノコ作品の主題歌歌手を多く輩出する、『ちびっこのど自慢』のお話をお願いしたいのですが。

当時、僕も番組を見て仰天したわけですよ。とにかく、うまい子がいっぱいいるわけですから。大人のひんしゅくはものすごかったけど、視聴率がすごくいいわけですよ。子供たちが歌だけじゃなくて、振りまで真似して。それで目をつけてね、これを担当してる野田(昌宏)氏のところへ行ったわけです。もちろん紹介なんかありませんよ。

——それが初対面で?

初対面。だけど、彼女たちの歌をレコードにしたいと言ったら、彼、ひじょうに前向きな人だから乗ってくれて。チャンピオンになった子たちを

コロムビアスタジオに集めてオーディションやりましたよ。いろんな子が来ましたよ、吉田よしみ=天童よしみも来たけど、えーと、ほら、名古屋の子で……。

――戸田恵子さん？

そう。戸田恵子。姉妹ふたりで来てたし。ずいぶんたくさん来てたけど、男の子は声変わりの後でないと使えないから、女の子だけ集めて20人くらい。その中でチャンピオンにならなかった子がひとりだけいて、それが堀江（美都子）なんだよ。

育てるにも、なにか仕事をやらないとうまくならないから、そのために、ちびっこポップスシリーズを作ったわけですよ。だけど当時は、今と違って『これ、子供じゃねーか』と相手にしてくれないんですよ。そこで考えて、この子たちがやるのはアニメがいちばんいいと。アニメがこれから大きな柱になるって予感はしてたし。それで第1弾で使ったのが、堀江、嶋崎（由理）ですよ。B面のほうは何人か歌ってると思いますけど。

――山尾百合子さんとかですか？

ああ、山尾百合子。新・青い三角定規の歌い手になった子だよね。

――堀江さんて、唯一、チャンピオンにならなかったのに、目をかけていたというのは、やはり才能を見出されていた？

あの子の声がものすごく好きだったんですね。伸びがいいんですよ。で、堀江を起用したのね。山尾さんは声にまだ子供だから色気がない。堀江よりひとつ下じゃなかったかな。堀江も当時、小学校6年生ですけど。ちびっこポップスがその後どんどん出てくるけど、堀江が最初ですよ。歌ができて、録音前に、作曲の和田香苗さんのところにレッスンに行かせたわけ。そこに先生の住み込みの弟子で男の子がいたんですよ。真面目な子でね、それが水木一郎ですよ(笑)。

堀江はうまくて、極端なこと言えばなんにでも使えたの。たとえば『紅三四郎』の歌謡ポップスもそれなりに歌っちゃう、『アクビ娘』みたいなコケティッシュな歌い方も実に器用に作っちゃう。嶋崎のほうはもの凄いぶきっちょなの。だけど、声にキャラクターがあって。後で『Gメン'75』の『面影』なんかミリオンセラーになるわけですよ。『みなしごハッチ』は嶋崎も声変わりの時だったし、

■『ハクション大魔王』アクビ娘

レコーディングに苦労しましたよ。でも、あのハスキーさが彼女の個性だったからね。竜夫さんは堀江と嶋崎、両方、気に入ってくれてましたけどね。

――やっぱりその『紅三四郎』がきっかけになって、タツノコで新作を作る時はコロムビアさんで、と方向転換することになったんですか？

そうです。丘灯至夫、堀江美都子っていうコンビは、『けろっこデメタン』まで続くわけですよ。で、まったくキャラクターを変えたのが、天童よしみが歌った『いなかっぺ大将』。あれはタツノコで初めて、竜夫さん(原作)じゃない作品をやるってことで、歌い手も変えたほうがいいってことになって。天童は地味な子だけど、歌の声量からいったらもの凄くて、スタジオにいても、そりゃもうたまげますよ。だけど、彼女はポップス系の声じゃない。アニメの世界でやってったら、使う範囲が限られちゃいますよ。で、作曲家の市川昭介さんに面倒見てもらったんです。

――堀江さんにインタビューしたところ、『紅三四郎』の後、『ハクション大魔王』か『みなしごハッチ』の頃に二子玉川園のステージで歌っていた記憶があるそうなんですが、当時のコロムビアさんは、そういう催し物を定期的にやられていたんですか？

あの頃は、早めにデパートの屋上だとか遊園地だとかにアニメの情報流すわけですよ。すると、1月頃に5月にこういうこと（催し物）やりたいって言ってくるわけですよ。じゃ、誰と誰、出し

ますって。

――堀江さんのように実際に主題歌を歌ってる歌手を派遣して？

そうですそうです。でないと子供に嘘になりますからね。ひどい時になると、デパート三つ掛け持ちですよ。こっちは嶋崎やっといてね、こっちは堀江入れて、またこっちは小野木（久美子）入れといてね。で、走り回るわけですよ。ひとりが三つも四つも掛け持ちゃんなきゃいけない時もあったし。

――それは発売中のキャンペーンというより、これから出るという時期に合わせて？

発売後ですね。子供たちが歌い始めてから出さないとわからないわけですから。子供たちからしてみれば、知ってる歌を歌ってくれてる、あの声だと。

――『ガッチャマン』の後、佐々木功さんがアニメの主題歌を歌うようになった経緯をお願いします。

吉田竜夫さんが『ガッチャマン』でコンドルのジョーで声優やってる佐々木って子が主題歌、歌いたがってる、と。僕は彼がコロムビアの専属ロカビリー歌手だったって、知らなかったわけですよ。僕が知ってたのは平尾（昌晃）さんとかね、山下敬二郎とか。だけど、歌わしてみたら、いい声なわけですよ。昔の彼のレコード聴きましたけど、全然違ってちゃんと大人の声で迫力あるわけですよ。水木はカッコよさだけど。佐々木には男の色気があってね。

――竜夫さんが連れてこられたというのは『新造人間キャシャーン』でデビューというのは決まっていたんですか？

決まってなかった。ただ、佐々木は才能あったからね。あれだけの歌は、当時の歌謡曲の連中には歌えませんからね。『キャシャーン』ていうのは僕は好きなんだけど、淋しいでしょ？　その切なさを歌えるのは水木じゃなくて佐々木だと。だから、佐々木を起用したんですよ。

アニメ主題歌の男性歌手は、1回歌謡曲で失敗して、挫折を抱えているのが多いわけですよ。影山（ヒロノブ）もそうですよ。

竜夫さんが最高でしたね

――『テンプルちゃん』は竜夫さんの遺作というか、準備されてる時に亡くなったと思うんですが、これについての木村さんのご記憶は？

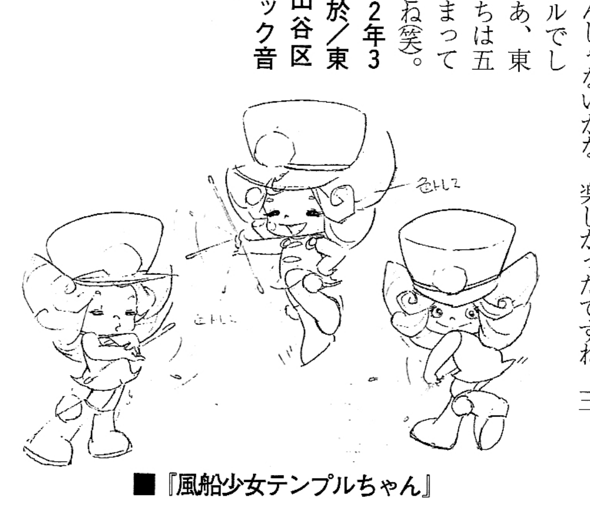
企画の話が出てたのは、竜夫さんが亡くなる3年前からで。もうキャラクターがあって『木村さん、これを音楽でやりたい』って、持ってきたわけですよ。これなら歌はなんぼでも入れられるって、私も乗ったんですけど、なかなかうまくいかなくて、3年くらいかかったですよ。行くたびに、その話、聞かされたですもん。

竜夫さんは音楽好きで、特にポップスを中心に詳しい。音楽をよくわかってくれる人というのは少ないですよ。ましてや監督さんとかね、僕が最初にやってた頃は、打ち合わせの相手はある程度年輩の人でしょ？　ああいう世代で音楽わかってくれるのは、竜夫さんが最高でしたね。音楽のこと、一日中、話してたもん。竜夫さんとはカンヌにも行きました。

――それはなにを出品されたんですか？

カンヌの映画祭とは別にテレビアニメの見本市があるので、なにをっていうより、タツノコの財産すべて持ってったわけです。あの頃は東映さん、みなさんやってたけど、ブースを持って営業していたのはタツノコがいちばん早かったんじゃないかな。楽しかったですね。三つ星ホテルでしたけど。あ、東映の人たちは五つ星に泊まってましたけどね（笑）。

（2002年3月18日、於／東京都世田谷区「ジーベック音楽出版」）



■『風船少女テンプルちゃん』

TATSUNOKO SOFT

SPECIAL PRESENT

1 けろっこデメタン セレクション1巻

PIBA-7145
DVD
1話「とび出せデメタン」2話「勇気だ父ちゃん」6話「ふたりぼっちのケロケロ笛」を収録

1名

2 けろっこデメタン セレクション2巻

PIBA-7146
DVD
11話「秀才蛙が現われた」14話「わんぱく蛙がやって来た」と27話の全3本を収録

1名

3 けろっこデメタン セレクション3巻

PIBA-7147
DVD
38話「ナマズ入道をやっつけろ」39話「ひびけ平和のケロケロ笛」と33話の全3本収録

1名

4 樫の木モック セレクション1巻

PIBA-7148
DVD
1話「ぼくは悲しい木の人形」2話「人形なんてもういやだ」と3話の全3本を収録

1名

5 樫の木モック セレクション2巻

PIBA-7149
DVD
10話「ぼくの鼻がのびる時」23話「おかねのなる木を育てよう」と28話の全3本を収録

1名

6 樫の木モック セレクション3巻

PIBA-7150
DVD
36話「ぼくの魔法は勇気と知恵だ」52話「ぼくの夢は輝く星に」他1本、全3本を収録

1名

7 ポールのミラクル大作戦セレクション1巻

PIBA-7151
DVD
1話「よみがえったベルト・サタン」2話「恐怖のクモの巣城」と5話の、全3本を収録

1名

8 ポールのミラクル大作戦セレクション2巻

PIBA-7152
DVD
11話「思い出のニーナの花」17話「ベルト・サタンの角を狙え」と、31話の全3本を収録

1名

9 ポールのミラクル大作戦セレクション3巻

PIBA-7152
DVD
38話「オモチャが作った愛の橋」50話「さようなら！ 不思議な世界」他の全3本収録

1名

10 みなしごハッチ セレクション1巻

PIBA-7154
DVD
1話「負けるなハッチ」2話「行け行けハッチ」7話「ママと呼びたいの」の全3本を収録

1名

11 みなしごハッチ セレクション2巻

PIBA-7155
DVD
8話「傷だらけのバレリーナ」20話「大ぼら大将の冒険」と53話の、全3本を収録

1名

12 みなしごハッチ セレクション3巻

PIBA-7156
DVD
74話「忘れな草に願いをこめて」と、90、91話「ママに抱かれて(前／後)」の全3本を収録

1名

13 ハクション大魔王 セレクション1巻

PIBA-7157
DVD
1回「出ました大魔王の話」「モーレツブル公の話」と2、7回の、全3回6話を収録

1名

14 ハクション大魔王 セレクション2巻

PIBA-7158
DVD
27回「マジックハンドの話」「壷はだれのものの話」と28、32回の全3回6話を収録

1名

15 ハクション大魔王 セレクション3巻

PIBA-7159
DVD
41、50回と、52回「魔王は町のナンバー1の話」「さよなら大魔王の話」の全3回を収録

1名

16 ガッチャマンヴォーカルコレクション

COCX-318278
CD
『科学忍者隊ガッチャマン』シリーズの主題歌、挿入歌を集大成した2枚組

5名

17 TVサイズ！ タツノコアニメ主題歌集

COCX-31856
CD
『宇宙エース』から、平成版『マッハGoGoGo』まで、全57曲を収録

5名

18 宇宙エース Music File

VPCD81438
CD
小森昭宏作曲のBGMに加え、いずみたく作曲の主題歌も収録

2名

希望商品番号を挟み込みのアンケート葉書に書いて御応募ください。平成15年4月25日到着分まで有効です。

19 マッハGoGoGo Music File-1

VPCD81433
CD
第15話までに使用されたBGMを、話数順に収録。作曲は越部信義

2名

20 マッハGoGoGo Music File-2

VPCD81437
CD
第16話以降に使用された越部信義作曲のBGMに加え、米版主題歌も収録

2名

21 紅三四郎 Music File

VPCD81439
CD
越部信義作曲のBGMに加え、美樹克彦の唄う初期主題歌もフルサイズで収録

2名

●1〜15
発売元:
東芝デジタルフロンティア株式会社
販売元:
パイオニアLDC株式会社
●16、17
発売元:
日本コロムビア株式会社
●18〜21
発売元:株式会社バップ

原口正宏／編

タツノコプロ FILMOGRAPHY '65〜'77

宇宙エース 319
マッハGoGoGo 315
おらぁグズラだど 312
ドカチン 308
紅三四郎 305
ハクション大魔王 303
昆虫物語みなしごハッチ 298
いなかっぺ大将 293
カバトット 284
決断 280
樫の木モック 277
科学忍者隊ガッチャマン 273
かいけつタマゴン 262
けろっこデメタン 259
新造人間キャシャーン 256
昆虫物語新みなしごハッチ 253
ウリクペン救助隊 250
破裏拳ポリマー 249
てんとう虫の歌 247
宇宙の騎士テッカマン 240
タイムボカン 238
ゴワッパー5（ファイブ）ゴーダム 233
ポールのミラクル大作戦 230
タイムボカンシリーズ ヤッターマン 226
一発貫太くん（いっぱつかんたくん） 216
風船少女テンプルちゃん 212

◇本リストは319ページよりお読みください。また、リストの表記についての補足は280ページを参照ください

ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／(仲木隆司)、(友近恵子)、(今西正男)、(大久保正信)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／宇田川一彦
■作画／前田康成、中村　清、なかむらたかし、吉田修久、高橋○○○※
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／東京アニメーションフイルム■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[リノ・ジュノベーゼ](八奈見乗児)、[サラ・ジュノベーゼ](高村章子)、[村人たち](広瀬正志)、[村人たち](稲葉　実)、[村人たち](田中　勝)、[その他](麻上洋子)
(注記)ＡＲ台本では、演出は「石黒　昇」と単独名で記載されている。声の出演[第２画面]の「友近恵子」から「大久保正信」はクレジット表示ミス。

第５話『オオカミの／森』(1977年10月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／宇田川一彦
■作画／前田康成、中村　清、なかむらたかし、吉田修久、高橋○○○※
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[その他](友近恵子)
(注記)ＡＲ台本では、演出は「奥田誠治」と単独名で記載されている。

第６話『夢の若草村』(1977年11月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／棚橋一徳
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄
■作画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、高島鉄夫、高橋理恵
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[牧場の奥さん](加川三起)、[村長](大久保正信)

第７話『タクトよ心を／つなげ』(1977年11月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄
■作画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、高島鉄夫、高橋理恵
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[モデラート](宮内幸平)、[オストハイル](寺島幹夫)、[マネージャー](仲木隆司)、[ママ](友近恵子)、[男①](広瀬正志)、[男②](塩沢兼人)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「植田秀仁」と記載されている。

第８話『バイオリンの／少女』(1977年11月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄
■作画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、高島鉄夫、高橋理恵
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[マリー](麻上洋子)

第９話『夢を結ぶ／リズム』(1977年11月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／棚橋一徳
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／親　　分(今西正男)、子　　分(大久保正信)、[子分Ａ・Ｂ](仲木隆司)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄
■作画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、高島鉄夫、高橋理恵
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[その他](田中　勝)
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「永田俊夫」「鳥海尽三」と連名になっている。また、演出が「植田秀仁」と記載されている。声の出演[第２画面]の「子　　分(大久保正信)」はクレジット表示ミス。

第10話『はらぺこ／音楽隊』(1977年12月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／九里一平、西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／林　政行■作画／入間市郎、高橋由美子、内田まゆみ、北林京子
■背景／佐藤広明、アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[ジャン](白石冬美)、[ガルボ](池田　勝)、[村人Ａ](田中　勝)、[村人Ｂ](小野丈夫)、[村人Ｃ](松川暢生)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「九里一平」と単独名で記載されている。

第11話『ドーラの／恋』(1977年12月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／大貫信夫、上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／大貫信夫■作画／中島京子、牧田由美、北條昌子、小国千代子、明石典子
■背景／佐藤広明、アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[ミケ](友近恵子)、[家の主人](西川幾雄)、[おかみさん達](山田礼子)、[おかみさん達](峰　あつ子)、[男（Ａ)](池田　勝)、[男（Ｂ)](津田英三)

第12話『人質になった／テンプル』(1977年12月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐久　正■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／西城隆詞■作画／池谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、南部あき子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／新井正彦
〈資料より補足〉
■声の出演／[サム](加藤精三)、[ジッパー警部](八奈見乗児)、[警官達](仲木隆司)、[ネズミ達](西川幾雄)

第13話『ピヨピヨ／行進曲』(1977年12月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元、鳥海尽三■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画／木下ゆうき、長谷川憲生、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[テンプルのママ](友近恵子)、[養鶏場のおじいさん](相沢治夫)、[ヒヨコ](津田英三)
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「毛利 元」と単独名で記載されている。

第14話『サミーの／風船』(1977年12月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／大貫信夫、上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チュッピー(矢野洋子)
■声の出演[第２画面]／フワット(久松夕子)、サミー(小原乃梨子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／大貫信夫■作画／中島京子、牧田由美、北條昌子、小国千代子、明石典子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[男　Ａ](池田　勝)、[男　Ｂ](田中　勝)、[村の人達](側見民雄)、[村人](加川三起)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「大貫信夫」と単独名で記載されている。

第15話『ママになった／テンプル』(1978年1月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプルちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画／木下ゆうき、長谷川憲生、本多　哲、平山則雄、福山政敏
(P.316に続く)

■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第49話『決戦!／東京代表戦』(1978年8月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、岡花子(黒須　薫)、郷則久(三橋洋一)、郷満太(北村弘一)、たぬき(たてかべ和也)、きつね(竜田直樹)、アナウンサー(千葉　繁)
■原画／本多　哲■動画／加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／三木幸子■進行／羽田野智子

第50話『本大会!／激突兄妹チーム』(1978年9月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロシ)、〃花子(黒須　薫)、花田裕治(水島裕治)、男(稲葉　実)、アナウンサー(千葉　繁)
■原動画／大貫信夫、中島京子、北条昌子、小国千代子、明石典子
■背景／アニメフレンド、岡田和夫
■仕上／井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド、平山則夫■編集／戸田れいこ■進行／新井正彦

第51話『ホーマーズ／出場停止!?』(1978年9月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、郷則久(三橋洋一)、アナウンサー(千葉　繁)、城山大作(渡部　猛)、委 員 長(小野文夫)、老骨ピッチャー(清川元夢)、主　審(稲葉　実)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第52話『準決勝／意外なヒーロー』(1978年9月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロオ)、〃　花子(黒須　薫)、大山豪太(東美江)、日高監督(稲葉　実)、美 代 子(滝沢久美子)、子 供 Ａ(松岡洋子)、部 員Ａ(千葉　繁)
■原画／川端　宏■動画／道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒仲
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション■編集／戸田れい子■進行／田村常夫

第53話『白球よ!／大空高く』(1978年9月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、郷則久(三橋洋一)、(稲葉　実)、(塩屋　翼)、(千葉　繁)、(小出和明)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

風船少女テンプルちゃん

1977年10月１日～1978年３月25日(第１～26話)　毎週土曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・全26話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、柳川　茂■原作／タツノコプロ企画室
■音楽／越部信義
■主題歌　コロムビアレコード
作詩／丘灯至夫　作曲／越部信義　歌／大杉久美子、ヤングフレッシュ
■全国放送愛好者会推選[表示開始話数不詳]
■連載／小学館学習雑誌、めばえ・よ　い　こ、幼稚園・小学一年生
■制作担当／横尾　潔、鈴木敏充、内間　稔(読広)、高妻知孝(読広)
■チーフディレクター／原セイタロウ
■プロデューサー／永井昌嗣■制作／フジテレビ、タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクター・デザイン／下元明子
■背景スタイリング／小林七郎■美術監督／多田喜久子
■現像／東京現像所■録音制作／ザック・プロモーション
■録音ディレクター／鳥海俊材■効果／新　音　響、南部満治
■録音／新坂スタジオ、高橋久義
■制作協力／アニメフレンド、アニメル－ム[1～23話]
■制作／フジテレビ、タツノコ プロ

第１話『まよいご／風船』(1977年10月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ド－ラ(緒方賢一)、ガッ ペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／パ　　パ(仲木隆司)、マ　　マ(友近恵子)、親　　分(今西正男)、子　　分(大久保正信)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／林　政行■作画／入間市郎、高橋由美子、内田まゆみ、北林京子
■背景／小林プロ■仕上／井上文子、内田千代子、杉崎容子、スタジオUFO、原田千尋
■撮影／東京アニメーションフイルム■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一

第２話『雨の中の／友情』(1977年10月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ド－ラ(緒方賢一)、ガッ ペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／[男Ａ〈のっぽ〉](仲木隆司)、(友近恵子)、(今西正男)、(大久保正信)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄■作画／海老沢幸夫、野田拓実、白土理徳、高島鉄雄、江崎桂子
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／東京アニメーションフイルム■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[男Ｂ〈でぶ〉](玄田哲章)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「原　征太郎」と記載されている。声の出演[第２画面]の「友近恵子」から「大久保正信」はクレジット表示ミス。

第３話『サフランの／詩[うた]』(1977年10月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司、鳥海尽三■演出／石黒　昇、棚橋一徳
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ド－ラ(緒方賢一)、ガッ ペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／老　　人(八奈見乗児)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／芦田豊雄
■作画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、高島鉄夫、高橋理恵
■背景／かぶと虫
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／東京アニメーションフイルム■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
(注記)ＡＲ台本では、演出が「原 セイタロウ」「石黒 昇」と記載されている。また、声の出演の「老　人」役も「宮内幸平」となっている。

第４話『ゴンドラの／舟唄』(1977年10月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／石黒　昇、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、

戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、立花(嶋　俊介)、チーコの母(つかせのり子)、チーコの義父(稲葉　実)、塁　審(千葉　繁)
■原動画／トップクラフト、正井　融、久保秀己、湯山国彦、細谷　満、原口ちはる、高橋幸江
■背景／勝井和子■仕上／トップクラフト、坂本則子、苅田聖子、石井恵美子
■撮影／於本廣*康、高山文彦■編集／戸田礼子■進行／浜野　久

第37話『七郎の／スイッチヒッター』(1978年5月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西久保瑞穂、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷則久(三橋洋一)、審　判(稲葉　実)、ひろみ(矢野陽子)、ミイ子(滝沢久美子)、テレビの アナウンサー(千葉　繁)
■原動画／タマプロダクション、池ノ谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、安田美幸
■背景／アニメフレンド、岡田和夫
■仕上／井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド、平山則夫■編集／戸田れいこ■進行／新井正彦

第38話『花子の／スコアブック』(1978年6月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、、[岡]花子(黒須　薫)、轟　投　手(稲葉　実)、子供 アナウンサー(松金よね子)、キャプテン(千葉　繁)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第39話『日本一の／ブルペン捕手』(1978年6月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
213
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、田中夏子(麻上洋子)、〃 壁男(村瀬正彦)、勝　田(森　功至)、アナウンサー(千葉　繁)、主　審(稲葉　実)
■原画／二宮常雄■動画／道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒伸
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／戸田礼子■進行／羽田野智子

第40話『ホーマーズ／解散!?』(1978年6月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／八尋　旭、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、〃 花子(黒須　薫)、郷則久(三橋洋一)、コーチ(稲葉　実)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／日椛幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第41話『行くぞ!／武者修行』(1978年7月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／押井　守
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、郷則久(三橋洋一)、竹　二　郎(稲葉　実)、竹　三　郎(野崎貴美子)、竹　五　郎(麻上洋子)、近目乱四郎(千葉　繁)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／三木幸子■進行／伏川政明

第42話『うばわれた／ポジション』(1978年7月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／ヒデオ(千々松幸子)、竜　介(沢つりお)、アナウンサー(松金よね子)、審　判(稲葉　実)
■原動画／タマプロダクション、池ノ谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、安田美幸
■背景／アニメフレンド、岡田和夫
■仕上／井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド、平山則夫■編集／戸田れいこ■進行／新井正彦

第43話『焼津港の／プレイボール』(1978年7月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、舟　夫(沢田和子)、船　長(渡部　猛)、玉　夫(水島　裕)、、審　判(稲葉　実)、運転手(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第44話『那智滝の／カラス天狗』(1978年7月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／小太郎(つかせのり子)、猿　彦(松田洋子)、警官Ａ(稲葉　実)、[警官]Ｂ(千葉　繁)、アナウンサー(松金よね子)
■原画／川端　宏■動画／加藤和恵、野崎恒伸、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション■編集／三木幸子■進行／羽田野智子

第45話『土佐に生きていた／父ちゃん』(1978年7月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三郎、海老沼三郎■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／江山(林　一夫)、江山の父(たてかべ和也)、村井(小野丈夫)、田中(千葉　繁)、球太郎(稲葉　実)、岡花子(黒須　薫)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／日椛幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第46話『瀬戸の／野球道場』(1978年8月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡花子(黒須　薫)、キミオ(丸山裕子)、大二郎(大宮悌二)、番　頭(千葉　繁)、アナウンサー(松金よね子)、医　師(稲葉　実)
■原動画／タマプロダクション、池ノ谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、安田美幸
■背景／アニメフレンド、岡田和夫
■仕上／井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド、平山則夫■編集／戸田れいこ■進行／新井正彦

第47話『宿命!／秋吉台の対決』(1978年8月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロオ)、[岡]　花子(黒須　薫)、秋吉大吉(加藤精三)、正　平(野崎貴美子)、、運転手(稲葉　実)
■原画／二宮常雄■動画／道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒伸
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／三木幸子■進行／伏川政明

第48話『阿蘇／最後の武者修行』(1978年8月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／竜　介(沢りつお)、アナウンサー(松金よね子)、医　者(稲葉　実)、耕　一(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵

第24話『母ちゃんは／名監督』(1978年2月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロシ)、市　村(石丸博也)、酔　客(中田浩二)、子　供(杉山佳寿子)、主　審(稲葉　実)、塁　審(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／日椛幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第25話『野球仮面／あらわる!』(1978年3月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、[岡]花子(黒須　薫)、八百松(永井一郎)
■原画／二宮常雄■動画／道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒仲
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第26話『スカウトが来た!』(1978年3月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロシ)、〃花子(黒須　薫)、黒　木(北村弘一)、栗　木(島　俊介)、主　審(千葉　繁)、一塁手(稲葉　実)
■原画／川端　宏■動画／加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第27話『貫太VSがき大将』(1978年3月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡花子(黒須　薫)、子　供(千葉　繁)、出っ歯(千々松幸子)、三　太(山本圭子)、父(稲葉　実)、和　尚(大宮悌二)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第28話『ワンマン／美少女投手』(1978年3月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／押井　守
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷　則久(三橋洋一)、塁　審(千葉　繁)、キャッチャー(稲葉　実)、トモエ(つかせのりこ)、ミチコ(峰あつ子)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／伏川政明

第29話『これが／男の野球道』(1978年4月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／押井　守、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／大星十徹(千葉耕一)、ピッチャー(稲葉　実)、客(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／日椛幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第30話『思い出の／グランド』(1978年4月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／彦　十(永井一郎)、配達人(稲葉　実)、男(千葉　繁)、塁審(黒部　鉄)
■原画／二宮常雄■動画／道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒仲
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第31話『傷だらけの／勝利』(1978年4月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／守　田(宮下　勝)、矢　島(石丸博也)、千　葉(三ツ矢雄二)、飛　田(千葉　繁)、無法虎(飯塚*昭三)、みよ子(滝沢久美子)、少　年(野崎貴美子)
■原動画／トップクラフト、正井　融、久保秀己、湯山国彦、細谷　満、原口ちはる、高橋幸江
■背景／渡部なおみ、勝井和子■仕上／布本由紀子、栗飯原君江、矢野順子
■撮影／於本廣*康、高山文彦■編集／木田伴子■進行／赤崎義人

第32話『友情の／大ファール』(1978年4月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高久　進■演出／矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロシ)、[岡]花子(黒須　薫)、ル　ミ(潘　恵子)、ルミの母(千々松幸子)、医　　師(稲葉　実)、婦　　長(遠藤　晴)、兄(千葉繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第33話『ホーマーズ／二軍落ち』(1978年4月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／土佐コーチ(玄田哲章)、わし尾(稲葉　実)、主　審(千葉繁)、塁　審(小出和昭)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション■編集／三木幸子、戸田礼子■進行／羽田野智子

第34話『ナゾの名コーチ』(1978年5月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元、海老沼三郎■演出／矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロシ)、海老沼(納谷六郎)、アナウンサー(千葉　繁)、〃　子供(丸山裕子)、審　　判(稲葉　実)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／日椛幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第35話『四郎の／マイコン野球』(1978年5月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡良吉(及川ヒロオ)、〃花子(黒須　薫)、出来田出来男(三ツ矢雄二)、[出来田]秀　子(潘　恵子)、審　　判(千葉　繁)
■原画／川端　宏■動画／加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／戸田礼子■進行／伏川政明

第36話『父ちゃんの／ピンチヒッター』(1978年5月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／佐々本皓一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、

(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／猿　丸(村越伊知郎)、刑　事(竜田直樹)、審　判(千葉　繁)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／日梳幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第12話『急病!仮病?／二郎の欠場』(1977年12月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／小　　村(村山　明)、サチコ(滝沢久美子)、医　　者(小出和也)、少　　年(矢野洋子)
■原動画／川端　宏、スタジオバーズ、泉口　薫、清水保之、細谷　満、泉口直子
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第13話『きょうだい三遊間』(1977年12月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／輝　子(友近恵子)、靖　夫(喜多道枝)、おじいさん(水島鉄夫)、審　　判(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第14話『モテモテ貫太の／悩み』(1977年12月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／笹川ひろし、真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロシ)、岡　花子(黒須　薫)、[岡]　京子(吉田理保子)、審　判(千葉　繁)、アキラ(古谷　徹)、(竜田直樹)
■原動画／二宮常雄、道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第15話『男だ!／野球十兵衛』(1977年12月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、下 級 生(麻上洋子)、番　　長(安原義人)、デッパ(千葉　繁)、ニ キ ビ(千々松幸子)、審　　判(稲葉　実)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第16話『ひとりぼっちの／エース』(1978年1月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／審　判(千葉　繁)、相手チームA(松岡洋子)、　〃　B(峰あつ子)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／日梳幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第17話『噂の名人／バット安』(1978年1月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／高木厚炎、佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／土佐コーチ(玄田哲章)、安(千葉耕市)、女　房(中村紀子)、審　判(千葉　繁)

■原動画／トップクラフト、正井　融、久保秀己、湯山国彦、細谷　満、小原秀一、金子紀男
■背景／勝井和子■仕上／トップクラフト、坂本則子、苅田聖子、石井恵美子
■撮影／於本廣*康、高山文彦■編集／木田伴子■進行／浜野　久

第18話『あこがれの／甲子園』(1978年1月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロオ)、泰　久(古谷　徹)、鬼　武(加藤精三)、校　長(稲葉　実)、先　生(小出和明)、アナウンサー(千葉　繁)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第19話『グランドキーパーの／ほこり』(1978年1月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／海老沼三郎、毛利　元■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロシ)、土佐コーチ(玄田哲章)、トンボじいさん(槐　柳二)、アナウンサー(千葉　繁)
■原動画／二宮常雄、道下有希子、林田雅子、加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第20話『もどれ十兵衛!／九番打者』(1978年1月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高久　進■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、(広瀬正志)、(稲葉　実)、(千葉　繁)
■原動画／川端　宏、スタジオバーズ、泉口　薫、清水保之、細谷　満、泉口直子
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第21話『青い目の／リリーフ投手』(1978年2月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、ボブ・ケント(小原乃梨子)、その父(村越伊知郎)、ニュースキャスタ(千葉　繁)、じいさん(小出和明)、サングラス(岩本紀昭)、ばか力(稲葉　実)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／日梳幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、鴻田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第22話『恐怖の／デッドボール』(1978年2月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、[岡]　俊夫(丸山裕子)、医　者(稲葉　実)、少年A(千々松幸子)、　B(峰あつ子)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第23話『六子[むつこ]の特訓志*願!』(1978年2月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／高木厚炎、佐々木的一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼人)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷　則久(三橋洋一)、主　　審(稲葉　実)、塁　　審(千葉繁)
■原動画／トップクラフト、正井　融、久保秀己、湯山国彦、細谷　満、小原秀一、金子紀男
■背景／勝井和子■仕上／トップクラフト、坂本則子、苅田聖子、石井恵美子
■撮影／於本廣*康、高山文彦■編集／木田伴子■進行／浜野　久

いっぱつかんた 一発貫太くん

1977年９月18日〜1978年９月24日(第１〜53話)　毎週日曜18時〜18時30分
＊1978年６月11日に第11話を再放映
フジテレビ系／30分カラー・全53話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、宮田知行■原作／タツノコプロ企画室
■音楽／市川昭介、はやしこば　作詞／伊藤アキラ　作曲／市川昭介
歌／ヤングフレッシュ、こおろぎ'73、コロムビアレコード、タツノコワールド
■プロデューサー／井上　明
■学研の「学習」「科学」、「どっかんＶ」連載[8話以降は「連載」の文字が頭につく]
■総監督／笹川ひろし■制作／フジテレビ、タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクターデザイン／下元明子、小池あゆみ[3〜53話]
■美術／野々宮恒男■作画担当／吉橋　節
■録音デレクター／水本　完(ザックプロモーション)
■録音／兼子芳博(新坂スタジオ)■効果／加藤昭二(アニメサウンド)
■現像／東洋現像所■制作担当／中野政則、内間　稔(読広)、大野　実(読広)
■制作／フジテレビ、タツノコプロ

第１話『とばせ／ホーマーズ誕生』(1977年9月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷　則久(三橋洋一)、岡　花子(黒須　薫)、キャプテン(玄田哲章)、アナウンサー(千葉　繁)、女　の　子(三田ゆう子)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第２話『あこがれの／ユニフォーム』(1977年9月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／笹川ひろし、上梨満雄
■声の出演第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷　則久(三橋洋一)、岡　花子(黒須　薫)、キャプテン(玄田哲章)、アナウンサー(千葉　繁)、女　の　子(三田ゆう子)
■原動画／スタジオ バーズ、泉口　薫、清水保之、細谷　満、泉口直子
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第３話『大奮闘!／オカラ応援団』(1977年10月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、岡　良吉(及川ヒロオ)、ラジオ アナウンサー(千葉　繁)、テレビ アナウンサー(西川幾雄)、男　　Ａ(竜田直樹)、
Ｂ(稲葉　実)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第４話『夢の／ホームランカー』(1977年10月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、海老沼三郎■演出／上梨満雄、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、山田(肝付兼太)、松ちゃん(稲葉　実)、アナウンサー(千葉　繁)、見 物 人(塩沢兼人)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第５話『花子の／がんばれおにぎり』(1977年10月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　花子(黒須　薫)、岡　良吉(及川ヒロシ)、キャッチャー(山口　健)、ピッチャー(千葉　繁)、主　　審(稲葉　実)、選　　手(斉藤正明)、選　　手(斉藤正明)
■原動画／川端　宏、堀川留子、加藤和恵、野崎恒仲、鈴木まり子、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第６話『笑顔の／父ちゃんボール』(1977年10月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／笹川ひろし、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロオ)、球太郎(千葉　繁)、監　　督(稲葉　実)、易　　者(緒方賢一)
■原動画／木場田実、大平博之、岡田行弘、斑目勝男、森　英哉、吉本桂子
■背景／日梳幸子、菅原聖二■仕上／田中節子、濃田光雄、成田美恵子
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／木村友和
■制作協力／(株)アド・コスモ

第７話『小さな／ルールブック』(1977年10月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／正吾(小原乃梨子)、正吾の母(友近恵子)、少　年(中川まり子)、　〃　(千葉　繁)、　〃　(稲葉　実)
■原画／二宮常雄■動画／加藤和恵、野崎恒仲、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、岡嶋国敏、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／田代文男

第８話『野球なんかやめだ!』(1977年11月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロシ)、岡　花子(黒須　薫)、土佐コーチ(玄田哲章)、(千田光夫)、(西川幾雄)、(竜田直樹)、(千葉　繁)
■原動画／スタジオ・ルック、飯野　孝、土橋　博、中嶋忠二、桑原玲子、青山　充
■背景／スタジオ ビック
■仕上／長岡　恵、薄井義雄、羽生道代、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロダクション、都島雅義■編集／木田伴子■進行／羽田野智子

第９話『打倒!シルバーフォックス』(1977年11月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／郷　則久(三橋洋一)、郷　満太(北村弘一)、田　　抜(たてかべ和也)、木　　常(竜田直樹)、管 理 人(稲葉　実)
■原動画／木場田実、及川博史、河合静男、坂田筆男、林　一哉、黒川芳信
■背景／加藤洋介、西本初枝■仕上／山越道子、北村ゆかり、後藤　恵
■撮影／タンク・ファイブ、福田岳志■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■制作協力／(株)アド・コスモ

第10話『すばらしき一点』(1977年11月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／曽田博久■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子(麻生美代子)、[戸馳]一郎(秋元千賀子)、[戸馳]二郎(塩沢兼太)
■声の出演[第２画面]／戸馳四郎(小宮和枝)、[戸馳]五子、[戸馳]六子(横沢啓子)、戸馳七郎(井上　瑶)、[戸馳]幼吉(鈴木れい子)
■声の出演[第３画面]／岡　良吉(及川ヒロシ)、岡　花子(黒須　薫)、郷　則久(三橋洋一)、主　　審(田中　勝)、ピッチャー(千葉　繁)、審　　判(水島　裕)
■原動画／川端　宏、堀川留子、加藤和恵、野崎恒仲、鈴木まり子、スタジオ オニオン
■背景／スタジオ ビック■仕上／小野静子、朝沼清良、深沢　弓、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション、結束義博■編集／木田伴子■進行／和久田俊文

第11話『おしかけ名コーチ／の秘密』(1977年11月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高久　進■演出／布川ゆうじ、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／戸馳貫太(太田淑子)、野球十兵衛(大平　透)、戸馳久美子

■制作協力／アニメルーム■作画監督／長谷川憲生
■背景／アドコスモ、鹿野良行、スタジオＳＦ
■原動画／長谷川憲生、斉藤文康
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド

第101話『アレスサンダー／大王だ／コロン』(1978年12月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／山谷光和、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、アレス サンダー大王(今西正男)、ロクサーヌ(岡田直子)、老　　　人(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／中村たかし■背景／アップル
■原動画／高橋由美子、星川信芳、福地信之、堀本善法、宮林栄子、高橋里江、山沢　実、波戸根良昭
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／五月女有作
■仕上／西香代子、半沢正幸、態補勇人、野田　稔
(注記)「宮林栄子」はクレジット表示ママ。

第102話『ヤシントン／大統領だ／コロン』(1978年12月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、ヤシントン(日高晤郎)、ヨワーソン(田中　勝)、女　　　Ａ(滝沢久美子)、　　　Ｂ(岡田直子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／平山則雄■背景／アニメフレンド
■原動画／川端　宏、薄井義雄、橋本とよ子、アニメフレンド
■撮影／天平フイルム■編集／戸田礼子■進行／上野　翼
■仕上／竜仕上センター、柴田文子、栗原ミヨ、塩谷多満子、石合美登里、五十嵐絹代、国武睦子、小野愛子

第103話『シッパイツァーだ／コロン』(1978年12月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ジーヤン(緒方賢一)、コ　ニ　ア(滝沢久美子)、村　　　長(相模太郎)、子　　供(岡田直子)、村　人　Ａ(田中　勝)、　　　Ｂ(荒川保男)、ヤッター パンダ(池田　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／平山則雄■背景／今村プロ
■原動画／半田輝男、中島京子、北條昌子
■撮影／天平フイルム■編集／津留洋子、谷川幸男■進行／新井正彦
■仕上／アニメフレンド、井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子、福地敦子

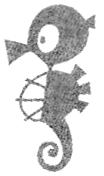
第104話『イヤ王だ コロン』(1978年12月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／山谷光和、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、イ　ヤ　王(宮内幸平)、コーダリア(岡田直子)、ゴ　ネ　ル(滝沢久美子)、ヘラニス国王(佐次和弘)、アズキ タクミノカミ(田中　勝)、茶マンジュウ(荒川保男)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／前田康成■背景／マスコット
■原動画／高橋由美子、福地信之、古瀬　登、松田芳明、佐藤　清、緒方泰彦、鈴木信一
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／吉田　哲
■仕上／スタジオＵＦＯ、、関口千恵子、片岡三生、渡辺洋子

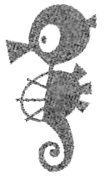
第105話『コレクター／博士だ／コロン』(1979年1月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／八尋　旭、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、コレクター(宮内幸平)、牧　　　師(田中　勝)、女　　　Ａ(滝沢久美子)、　　　Ｂ(岡田直子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／鈴木英二■背景／スタジオＳＦ
■原動画／斉藤文康、アドコスモ
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド

第106話『二宮銀次郎だ／コロン』(1979年1月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／海老沼三郎■演出／布川ゆうじ、高井戸仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、銀　次　郎(中川まり子)、イ　　　ネ(藤　夏子)、アキレ カエル(西川幾雄)、ニクマン メ　カ(荒川保男)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／中村たかし■背景／西　芳邦
■原動画／高橋由美子、星川信芳、宮林栄子、山沢　実、波戸根良昭
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／五月女有作
■仕上／島田信行、滝沢昭夫、赤嶺順子、片岡三生
(注記)「宮林栄子」はクレジット表示ママ。

第107話『ドジソンの／大発明だ／コロン』(1979年1月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、ドジソン(田中　勝)、レ　　ミ(滝沢久美子)、レミの母(矢野陽子)、フリンメカ(岡田直子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／木下ゆうき■背景／エリプロ、アドコスモ
■原動画／木下ゆうき、アドコスモ
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド

第108話『アワテルローの／戦いだ／コロン』(1979年1月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／八尋　旭、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾ　ウ(池田　勝)、ヤッター ヨコズナ(緒方賢一)、チビレオレ(田中　勝)、カエリント　ン(宮村義人)、客　　　Ａ(滝沢久美子)、　　　Ｂ(岡田直子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／鈴木英二■背景／スタジオＳＦ
■原動画／斉藤文康、アドコスモ
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド





マ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ノンキ ホーテ(西田昭市)、ヨンチョ(青野　武)、姫(滝沢久美子)、ヤッター ドジラ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／今村プロ
■原動画／さかいあきお、木口　準、安藤順子、北川祐子、小河清美
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／五月女有作
■仕上／西香代子、半沢正幸、態補勇人、野田　稔

第90話『コロンボスの／珍大陸だ／コロン』(1978年9月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／コロンボス(西田昭市)、長　　老(小野丈夫)、少　年　A(松岡洋子)、少　年　B(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／アップル
■原動画／海老沢幸男、白土理徳、安藤順子、北川祐子、高橋里江、角田　照
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／古俣政治
■仕上／スタジオＵＦＯ、八木原弘子、林　裕子、関口千恵子、小野寺悦子

第91話『わらしべ ノン太だ／コロン』(1978年9月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、ノ　ン　太(田中　勝)、女　　房(宮地牧子)、母　　親(矢野陽子)、若　い女(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／佐久間信■背景／今村プロ
■原動画／小野　茂、武田政夫、各務　修、柳田朝彦、増淵倫子、叶内孝行
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／大沢正喜
■仕上／島田信行、滝沢昭夫、赤嶺順子、片岡三生

第92話『春の夜の夢だ／コロン』(1978年10月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木悠紀■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、テイターニア(吉田理保子)、ペ　ッ　ク(丸山裕子)、客　A(峰あつ子)、　B(岡田直子)、男(側見民夫)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／アップル
■原動画／林　政行、森　安夫
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／五月女有作
■仕上／西香代子、半沢正幸、態補勇人、野田　稔

第93話『あっぱれ／トマトコケルだ／コロン』(1978年10月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、トマトコケル(水島　裕)、コワソイドル(田中　勝)、ミナテラス(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／大貫信男■背景／アニメフレンド
■原動画／中島京子、北条昌子、小国千代子、上田弘美、明石典子
■撮影／小西一広、橋本和典■編集／三木幸子、戸田礼子■進行／新井正彦
■仕上／アニメフレンド、井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子、福地敦子

第94話『レフト兄弟だ／コロン』(1978年10月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、ア　ニ　ー(古谷　徹)、ナ　ニ　ー(塩沢兼人)、ミ　ミ　ー(滝沢久美子)、キンコアメ(佐久間あい)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／長谷川憲生
■背景／アドコスモ、横山幸博、エリプロ
■原動画／長谷川憲生、斉藤文康
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド

第95話『ユメノパトラだ／コロン』(1978年10月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／山谷光和、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、アイトニー(井上真樹夫)、ユメノパトラ(横沢啓子)、クレオ パントラ(峰あつ子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／中村高志■背景／今村プロ
■原動画／堀本善法、星川信芳、高橋里江、宮林英子、関　文江、山沢　実
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／島田信行、滝沢昭夫、赤嶺順子、片岡三生
(注記)「中村高志」はクレジット表示ママ。

第96話『夕さぎの／恩返しだ／コロン』(1978年11月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／筒井ともみ■演出／八尋　旭、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／夕　さ　ぎ(滝沢久美子)、吾ひょう(石丸博也)、母(矢野陽子)、隊　　長(田中　勝)、ヤッターゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／前田康成■背景／今村プロ
■原動画／高橋由美子、福地信之、古瀬　登、松田芳明、佐藤　清、緒方泰彦、鈴木信一
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、赤嶺順子、松村美智子、佐藤澄子、西山和孝

第97話『ぶんぶく お釜 だ／コロン』(1978年11月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／日高武治■演出／八尋　旭、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／タ　ヌ　キ(白川澄子)、村　　人(緒方賢一)、パ　ン　ダ(池田　勝)、子パンダ(滝沢久美子)、玉ネギメカ(宮地牧子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／木下ゆうき
■背景／アドコスモ、鹿野良行、エリプロ
■原動画／正井　融、中村プロ、アドコスモ
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／谷田部勝義、沢田裕子
■仕上／アドコスモ、、山越道子、鴻田光世、青木利栄、柿本雪乃、佐藤布美子、スタジオ・ワールド

第98話『迷犬ラッキー だ／コロン』(1978年11月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ペ　ッ　ク(井上　瑶)、ペックの父(池田　勝)、ペックの母(小林由利)、ア　　ン(横沢啓子)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／阿部正己■背景／アップル
■原動画／小野　茂、武田政夫、各務　修、村山四郎、柳田朝彦
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／大沢正喜
■仕上／島田信行、滝沢昭夫、赤嶺順子、片岡三生

第99話『アーサー王の剣だ／コロン』(1978年11月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／山谷光和、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾウ(池田　勝)、ヤッター ヨコヅナ(緒方賢一)、ホイサー(滝沢久美子)、母(友近恵子)、大　　臣(宮内幸平)、客　　A(田中勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／今村プロ
■原動画／アベ正己、前田康成、岩沢紳一、野田道子、森　安夫、武井恒夫
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／吉田　哲
■仕上／スタジオＵＦＯ、、関口千恵子、片岡三生、渡辺洋子

第100話『エンゼルと／グレートルだ／コロン』(1978年12月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高木良子■演出／矢沢規夫、岩田　弘
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ゾウ(池田　勝)、ヤッター ドジラ(田中　勝)、エンゼル(滝沢久美子)、グレートル(白川澄子)、女(岡田直子)、ナレーター(富山　敬)

ラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／カストレー(村山　明)、フローラ(滝沢久美子)、金　仮　面(小野丈夫)、銀　仮　面(亀井三郎)、鉄　仮　面(岡田道郎)、女　の　客(矢野陽子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／今村プロ
■原動画／林　政行、森　安夫
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／近松　順
■仕上／島田信行、岡屋充代、川崎智子、鈴木順子、古屋和斉

第78話『ランプ売りの／少女だ／コロン』(1978年6月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター　ドジラ(田中　勝)、ジェニー(滝沢久美子)、客(矢野陽子)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／アップル
■原動画／楠田　悟、緒方泰彦、鈴木伸一、佐藤　清、瀬宮玲子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第79話『グズの／魔法使いだ／コロン』(1978年7月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／八尋　旭、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／姫(弥永和子)、門　番(岡田道郎)、ドーシー(滝沢久美子)、か　か　し(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／マスコット
■原動画／楠田　悟、岩沢明一、林　孝文、小林左希子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第80話『サトミ三犬伝だ／コロン』(1978年7月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／猿山大全(池田　勝)、三　ツ　姫(滝沢久美子)、犬鼻クン介(岡田道郎)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／アップル
■原動画／海老沢幸男、白土理徳、安藤順子、北川祐子、高橋里江、角田　照
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／近松　順
■仕上／島田信行、岡屋充代、川崎智子、鈴木順子、古屋和斉
(注記)この回の「背景」は、「背景景」と誤表示された。

第81話『凡才画家／ゴーマンだ／コロン』(1978年7月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／八尋　旭、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ゴーマン(寺島幹夫)、テ　ブ　ラ(滝沢久美子)、ヤッター　ドジラ(田中　勝)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／今村プロ
■原動画／楠田　悟、小山　規、佐藤　清、瀬宮玲子、山沢　実
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第82話『塚原ボケ伝だ／コロン』(1978年7月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／一太郎(鈴木れい子)、猟　　師(稲葉　実)、鎖　　鎌(宮村義人)、山　　伏(田中　勝)、ばあさん(扇谷　敏)、客(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／アップル
■原動画／木口　順、安藤順子、山河清美、高橋里江、渡辺　浩
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／近松　順
■仕上／島田信行、岡屋充代、川崎智子、鈴木順子、古屋和斉
(注記)「木口　順」「山河清美」はクレジット表示ママ。

第83話『半里の 長城 だ／コロン』(1978年7月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、来　　々(飯塚昭三)、麗　女(滝沢久美子)、明　　民(安原義人)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／マスコット
■原動画／海老沢幸男、白土理徳、安藤順子、北川祐子、高橋里江、角田　照
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第84話『勇士／スパルタオスだ／コロン』(1978年8月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／大貫信夫、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／スパル タオス(蟹江栄司)、隊　長(田中　勝)、オッチャン(松川暢生)、先　生(側見民雄)、そ　の　他(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／大貫信夫■背景／アニメフレンド
■原動画／中島京子、北条昌子、小国千代子、上田弘美、明石典子
■撮影／アニメフレンド、平山昭夫■編集／三木幸子、戸田礼子■進行／松本堯一
■仕上／アニメフレンド、井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子

第85話『人魚姫 だ コロン』(1978年8月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木悠紀■演出／山谷光和、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／王　子(三ツ矢雄二)、姫(麻上洋子)、ケ　イ　ト(滝沢久美子)、王　妃(矢野陽子)、兵　隊(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／今村プロ
■原動画／林　政行、森　安夫
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第86話『ジャンダック は／聖女だ／コロン』(1978年8月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／八尋　旭、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ジャンダック(岡真佐子)、シャレロ王子(水島　裕)、隊　長(池田　勝)、オグレス軍兵士(側見民雄)、見　張　り(田中　勝)、子パンダ(滝沢久美子)、(有馬瑞子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／佐久間信■背景／今村プロ
■原動画／清水恵蔵、矢尾正一、林　隆文、野崎温子、大町　環
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第87話『アララン の／魔法のランプ だ／コロン』(1978年9月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高木良子■演出／八尋　旭、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／アララン(野沢雅子)、太めの女(矢野陽子)、姫(滝沢久美子)、ヤッター ドジラ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／アップル
■原動画／楠田　悟、緒方泰彦、小西洋子、鈴木伸一
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第88話『赤毛のランだ／コロン』(1978年9月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／海老沼三郎■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ラ　ン(吉田理保子)、バーヤン(藤　夏子)、ア　ー　ス(田中　勝)、ア　ヒ　ル(滝沢久美子)、馬車じいさん(池田　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／アップル
■原動画／楠田　悟、緒方泰彦、小西洋子、鈴木伸一
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第89話『ノンキホーテだ／コロン』(1978年9月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／八尋　旭、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャ

■制作協力／アニメルーム■作画監督／落合正宗■背景／今村プロ
■原動画／落合プロ
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、小磯栄子、八木原弘子、山崎由起江、笠倉久美子

第66話『ハレマンジャロの／大爆発だ／コロン』(1978年4月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／西島　大■演出／八尋　旭、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ケ　　ン(白川澄子)、ハピネス(矢野陽子)、客(田中　勝、滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／マスコット
■原動画／楠田　悟、岩沢紳一、林　孝文、小林左希子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第67話『剣道一直線 だ／コロン』(1978年4月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／芦田豊雄、案濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／年　五　郎(鈴木れい子)、赤出九斉(渡部　猛)、み　ど　り(滝沢久美子)、男(田中　勝、塩沢兼人)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／マスコット
■原動画／木口　準、河合桃子、角田　照、小川清美
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生
(注記)「案濃たかし」はクレジット表示ママ。

第68話『雪の女王だ／コロン』(1978年4月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木悠紀■演出／野村和史、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、、ケ　　イ(一城みゆき)、ギル ダ(滝沢久美子)、ギルダの母(矢野陽子)、雪の女王(北浜晴子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／アップル
■原動画／楠田　悟、矢尾正一、寺川枝里子、幸田知子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、赤嶺順子、松村美智子、佐藤澄子、西山和孝

第69話『マボロスト山／征服だ／コロン』(1978年4月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／芦田豊雄、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／コパンダ(滝沢久美子)、ミ ラー(水島　裕)、シ ル パ(田中　勝)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／マスコット
■原動画／白土理徳、北川祐子、小河清美、安達淳子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、滝沢昭夫、鈴木順子、八木原弘子、青木カナ

第70話『くらい山の／ひよ若丸だ／コロン』(1978年4月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／八尋　旭、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、チョキ子(滝沢久美子)、ひよ若丸(千々松幸子)、和　　尚(宮内幸平)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／大貫信男■背景／アニメフレンド
■原動画／中島京子、北条昌子、小国千代子、上田弘美、明石典子
■撮影／アニメフレンド、平山昭夫■編集／三木幸子、戸田礼子■進行／松本堯一
■仕上／アニメフレンド、井上文子、杉崎容子、内田千代子、戸田真理子

第71話『泣き虫／鉢かぶり姫 だ／コロン』(1978年5月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／八尋　旭、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／尻陰の 未津庫(森　功至)、〃 奥方(峰あつ子)、(塩沢兼人)、ナレーター(富山　敬)

■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／今村プロ
■原動画／林　政行、高橋由美子、高橋里江、松田芳明、池部吉昭
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子

第72話『ネムール森の／美女だ／コロン』(1978年5月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高木良子■演出／環　　忍、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／王　　子(水島　裕)、ショーロラ姫(滝沢久美子)、乳母(矢野洋子)、魔　　女(肝付兼太)、ド　ジ　ラ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／アップル
■原動画／楠田　悟、緒方泰彦、鈴木伸一、佐藤　清、瀬宮玲子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、、小磯栄子、八木原弘子、山崎由起江、笠倉久美子

第73話『釜ゆで／ゴエモンだ／コロン』(1978年5月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／山田朝吉、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／砂川五ヱ門(亀井三郎)、平　　次(はせさんじ)、職　人Ａ(田中　勝)、　　Ｂ(扇谷　敬)、オカミさん(矢野洋子)、タ　ー　子(滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／マスコット
■原動画／さかいあきお、木口　準、河合桃子、小川清美、江崎圭子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生

第74話『ハシレメドスの／友情だ／コロン』(1978年5月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／八尋　旭、福村典義
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／コパンダ(滝沢久美子)、ハシレ メドス(塩沢兼人)、老母 トマレー(矢野陽子)、兵　　隊(田中　勝、扇谷　敬)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／楠田　悟■背景／今村プロ
■原動画／楠田　悟、森川明美、幸田知子、大町　環、野崎温子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、赤嶺順子、松村美智子、佐藤澄子、西山和孝
(注記)「扇谷　敬」はクレジット表示ママ。

第75話『忍術ジライヤだ／コロン』(1978年6月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、海老沼三郎■演出／芦田豊雄、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ジライヤ(亀井三郎)、戸沢黒雲斉(千葉耕一)、カ　ス　ミ(滝沢久美子)、客(田　中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／アップル
■原動画／白戸理徳、さかいあきお、木口　順、角田　照、北川祐子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／森　博景
■仕上／スタジオＵＦＯ、、佐藤澄子、松村美智子、小野寺悦子、林　祐子
(注記)「白戸理徳」「木口　順」「林　祐子」はクレジット表示ママ。

第76話『天の川の決闘だ／コロン』(1978年6月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／芦田豊雄、案濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／オリヒメ(滝沢久美子)、天　　帝(塩見竜介)、隊　　長(亀井三郎)、客(稲葉　実)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／マスコット
■原動画／木口　順、野田たくみ、江崎圭子、小河清美、河合桃子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／富田民幸
■仕上／スタジオＵＦＯ、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生
(注記)「案濃たかし」「木口　順」はクレジット表示ママ。

第77話『銅仮面だ コロン』(1978年6月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズ

マ(桂　玲子)、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／船　長(西田昭市)、おじいさん(扇谷　敏)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／林　政行
■原動画／林　政行、星川信芳、小山ただし、宮林英子、矢尾正一
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第55話『カン流島の／大決闘だ／コロン』(1978年1月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／押井　守、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／佐々木イジロー(田中　勝)、宮本ムサシ(松川暢生)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／海老沢幸男
■原動画／白土理徳、楠田　悟、豊里勝彦、澄川祐子、北川祐子
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、松村美智子、島田みゆき、山崎由紀江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第56話『ピンクペアの／ベルトだ／コロン』(1978年1月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ハンスー塩　田(小山まみ)、モック下田(滝沢久美子)、マネージャー(田中　勝)、プロレスラー(加川三起)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／さかいあきお
■原動画／さかいあきお、木口　準、小河清美、安藤淳子、角田てる、江崎桂子
■背景／ＡＲＴ テイクワン
■仕上／青木カナ、島田信行、西山和孝、赤嶺順子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第57話『カッパ河原の／決戦だ／コロン』(1978年1月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／平和　元■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／オカッパ(峰あつ子)、河太郎(つかせのり子)、母カッパ(矢野陽子)、父カッパ(田中　勝)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／中村たかし
■原動画／福地信之、星川信芳、堀本義則、高橋由美子、古瀬　登、高橋里江
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、八木原弘子、山崎由起江、笠原久美子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム
(注記)「堀本義則」はクレジット表示ママ。

第58話『舌切りインコだ／コロン』(1978年2月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／笹川ひろし、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／お爺さん(肝付兼太)、お婆さん(扇谷　敏)、インコ(滝沢久美子)、母(矢野陽子)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／林　政行
■原動画／林　政行、池部良秋、加藤のり子、北林京子、山沢　実、古瀬　登
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、松村美智子、島田みゆき、山崎由紀江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第59話『ポケトルマン／参上だ／コロン』(1978年2月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／押井　守、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、サイコロン(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、チョキ子(滝沢久美子)、助監督(塩沢兼人)、客(矢野洋子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／マスコット
■原動画／楠田　悟、白土理徳、加藤のり子、高橋里江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、小磯栄子、八木原弘子、山崎由起江、笠原久美子

第60話『アタランデスの／海坊主だ／コロン』(1978年2月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／布川ゆうじ、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、老　　人(肝付兼太)、若(扇谷　敏)、海坊主(稲葉　実)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／さかいあきお■背景／ＡＲＴ テイクワン
■原動画／木口　準、高島鉄雄、佐藤節子、宮林英子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■仕上／スタジオＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子

第61話『マンジュと／スシ王だ／コロン』(1978年2月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、案濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、マンジュ(滝沢久美子)、スシ王(白川澄子)、母(矢野陽子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／林　政行■背景／マスコット
■原動画／林　政行、池部よしあき、古瀬　登、宮林英子、山沢　実
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、赤嶺順子、松村美智子、佐藤澄子、西山和孝
(注記)「案濃たかし」はクレジット表示ママ。

第62話『空飛ぶ孫六空だ／コロン』(1978年3月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ヤッター ドジラ(田中　勝)、チョキ子(滝沢久美子)、沙四上(扇谷　敏)、子　　供(飯井啓子、矢野陽子)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／海老沢幸男■背景／ＡＲＴ テイクワン
■原動画／白土理徳、北川祐子、小河清美、安達淳子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■仕上／スタジオＵＦＯ、滝沢昭夫、鈴木順子、八木原弘子、青木カナ

第63話『イヤミ重太郎だ／コロン』(1978年3月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／環　　忍、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／婦　　人(矢野陽子)、重太郎(玄田哲章)、庄　　屋(宮内幸平)、庄屋の娘(滝沢久美子)、村　　人(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／中村たかし■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■原動画／楠田　悟、福地信之、高橋由美子、星川信芳、堀本義則
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、清水英代、川崎智子、鈴木正美、片岡三生
(注記)「堀本義則」はクレジット表示ママ。

第64話『タコの惑星だ／コロン』(1978年3月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／八尋　旭、安濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／皇　　帝(北村弘一)、王　　女(滝沢久美子)、アセリ(田中　勝)、、ナレーター(富山　敬)
■制作協力／アニメルーム■作画監督／落合正宗■背景／マスコット
■原動画／石井邦幸、今川よしみ、弓入叶子、平　英生
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■仕上／スタジオＵＦＯ、、赤嶺順子、松村美智子、佐藤澄子、西山和孝

第65話『らしょう門の／鬼だ／コロン』(1978年3月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／八尋　旭、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、、ヤッター キング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／綱の母(矢野陽子)、グー子(滝沢久美子)、鬼(大平透)、、ナレーター(富山　敬)

■作画監督／宇田川一彦
■原動画／中村　孝、楠田　悟、福地信之、山沢　実、高橋由美子
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小野寺悦子、小磯栄子、松村美智子、佐藤澄子
■撮影／テイ・西村■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第44話『ドロンボー／三銃士だ／コロン』(1977年10月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)(Y)、ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／シモン王子(古谷　徹)、ローズ姫(滝沢久美子)、イチタニアン(西川幾雄)、婦　　人(峰あつ子)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／海老沢幸男■原動画／谷田部雄二、白土理徳、角田てる、河合桃子
■背景／アップル
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、赤嶺順子、松村美智子、笠倉久美子、山崎由紀江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム
(注記)「谷田部雄二」はクレジット表示ママ。

第45話『雪女の秘密だ／コロン』(1977年11月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／雪　　女(北村晴子)、くん平(中川まり子)、女の子(黒須　薫)、男　　A(田中　勝)、　　B(広瀬正志)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／林　政行
■原動画／林　政行、佐藤勢津子、山沢　実、加藤のり子、高橋里江
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、西山和孝、滝沢昭夫、島田信行、外崎　清
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第46話『アイアムテルは／勇者だ／コロン』(1977年11月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／小出良一■演出／芦田豊雄、案濃たかし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ウルター(黒須　薫)、人　　形(田中　勝)、客(稲葉　実)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／さかいあきお
■原動画／木口　準、さかいあきお、白土理徳、豊里勝彦、角田てる
■背景／アップル
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム
(注記)「案濃たかし」はクレジット表示ママ。

第47話『家あり子の冒険だ／コロン』(1977年11月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／海老沼三郎■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ミ　レ(麻上洋子)、母(友近恵子)、ジャームズ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／楠田　悟、中村たかし、福地信之、池部よしあき、小山ただし、宮林英子
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、松村美智子、島田みゆき、山崎由紀江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第48話『死のレースに／挑戦だ／コロン』(1977年11月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ジャン(村山　明)、ア　　ン(潘　恵子)、運転手(小野丈夫)、客(田中　勝)(Y)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／海老沢幸男
■原動画／谷田部雄二、穴倉　敏、豊里勝彦、長田三枝子、澄川祐子
■背景／ＡＲＴテイクワン■仕上／青木カナ、島田信行、西山和孝、赤嶺順子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

(注記)「谷田部雄二」「穴倉　敏」はクレジット表示ママ。

第49話『オニエ山の／スッテン童子だ／コロン』(1977年12月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／月　姫(麻上洋子)、山　賊(小野丈夫)、女　　達(佐久間あい)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／安部正巳
■原動画／福地信之、楠田　悟、北村京子、古瀬　登、吉田修久、高橋里江
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、八木原弘子、山崎由紀江、笠原久美子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム
(注記)「北村京子」はクレジット表示ママ。

第50話『柿太郎の／鬼退治だ／コロン』(1977年12月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／平和　元■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／柿太郎(鈴木れい子)、お爺さん(松岡文雄)、お婆さん(松井千恵子)、鬼の少年(滝沢久美子)、客の男(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／林　政行
■原動画／林　政行、福地信之、堀本義則、加藤のり子、山沢　実
■背景／アップル
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第51話『カエルの王子様だ／コロン』(1977年12月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／主婦(矢野洋子)、〃　(友近恵子)、〃　(坂本富美代)、マリ姫(横沢啓子)、王　　子(古谷　徹)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／さかいあきお
■原動画／谷田部雄次、木口　準、近藤ひろ子、豊里勝彦、長田恵美子、澄川祐子
■背景／アートテイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、松村美智子、島田みゆき、山崎由紀江
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第52話『海賊船長／ジルバーだ／コロン』(1977年12月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ジルバー船長(加藤精三)、マンボ船長(富山　敬)、水夫(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／海老沢幸男
■原動画／さかいあきお、木口　準、白土理徳、豊里勝彦、安藤純子、小河清美
■背景／アップル
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、青木カナ、小野寺悦子、林　裕子、佐藤澄子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第53話『怪力／ヒネクレスだ／コロン』(1977年12月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、鈴木良武■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターキング(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／アントニー(滝沢久美子)、、母(宮地牧子)、大男A(松川暢生)、　　B(広瀬正志)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／楠田　悟、高橋由美子、星川信芳、堀本善法、福地信之、古瀬　登
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、八木原弘子、山崎由起江、笠原久美子
■撮影／テイ 西村撮影室■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第54話『赤鯨を狙えだ／コロン』(1978年1月7日放映)〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャ

野洋子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／芦田豊雄
■原動画／野田拓実、谷田部雄次、白土理徳、穴倉　敏、高島鉄雄、長田三枝子、澄川祐子
■背景／サン・アート
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、林　裕子、小野寺悦子、小磯栄子、松村美智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム
(注記)「穴倉　敏」はクレジット表示ママ。

第33話『モーロック／・オームズ だ／コロン』(1977年8月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／モーロック(千葉耕一)、、紳　　士(田中　勝)、子　　供(高木早苗、矢野洋子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／田中英二
■原動画／水村十司、岸　義之、山崎　茂、橋本一枝、細川たか子
■背景／ミニ・アート
■仕上／竜仕上センター、スタジオオニオン、小野静子、深沢　弓、長岡　恵
■撮影／都島雅義■編集／古川順康■進行／羽田野智子
(注記)「細川たか子」はクレジット表示ママ。

第34話『謎の／ヘンクツ王 だ／コロン』(1977年8月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／子供達(松井千恵子、矢野洋子、山田礼子)、ヘンクツ王(加藤精三)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／アベ正巳
■原動画／福地信之、楠田　悟、ナカムラタカシ、加藤政志、高橋由美子
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、富樫みどり、鈴木弥生、小磯栄子、佐藤澄子
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム

第35話『海底／ほとほと マイルだ／コロン』(1977年8月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター アンコー(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／客(田中　勝)、モ　　ネ(仁内達幸)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／大貫信夫
■原動画／北条昌子、中島京子、牧　由美、小国千代子、明石典子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／佐藤恭子、村田美智子
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／三木幸子■進行／小林正典
■制作協力／アニメ・フレンド

第36話『ハルメン／カスバに帰る／コロン』(1977年9月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／娘(滝沢久美子)、ホ　　セ(森　功至)、ハルメン(弥永和子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／林　政行
■原動画／高橋里江、宮林英子、内藤美智子、北林京子、地部吉昭
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、原田千尋、松村美智子、小野寺悦子、林　裕子
■撮影／都島雅義■編集／西出栄子■進行／伏川政明■制作協力／アニメルーム
(注記)「地部吉昭」はクレジット表示ママ。

第37話『ケチスの商人だ／コロン』(1977年9月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター アンコー(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／花　　嫁(滝沢久美子)、、花　　婿(田中　勝)、バッチリオ(立原淳平)、ポーチカ(松金よね子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／田中英二
■原動画／水村十司、岸　義之、山崎　茂、橋本一枝、金子成子
■背景／ミニ・アート■仕上／佐藤恭子、村田美智子
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／三木幸子■進行／小林正典
■制作協力／アニメ・フレンド

第38話『忍者サスケ は／男だ／コロン』(1977年9月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター アンコー(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／サ ス ケ(神谷 明)、サイゾウ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／アベ正巳、、前田康成、福地信之、、楠田　悟、、ナカムラタカシ
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、林　裕子、小野寺悦子、鈴木弥生
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第39話『エカコシストだ／コロン』(1977年9月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／富野喜幸、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッター アンコー(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／エカコシスト(千葉耕一)、ルドルフ(安原義人)、ドッチラケ(田中　勝)、主　　婦(山田礼子、滝沢久美子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／芦田豊雄
■原動画／スタジオ・ライブ、宍倉　敏、木 口 ジュン、木田幸一、江崎桂子、豊里勝彦
■背景／マスコット
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、佐藤澄子、小黒光子、吉川生子、松村美智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム

第40話『ブーブルースの／カップ だ／コロン』(1977年10月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／是恒雄太■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／カ ロ ネ(黒須　薫)、バーロン(寺島幹男)、小　　供(中川まり子)、客(田中　勝)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／大貫信夫
■原動画／北条昌子、中島京子、牧　由美、小国千代子、明石典子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／佐藤信子、深沢　弓
■撮影／平山昭夫、中野信也■編集／戸田礼子■進行／高野和雄
(注記)「寺島幹男」「小　　供」はクレジット表示ママ。

第41話『ピノッキン は／良い子 だ／コロン』(1977年10月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ピノッキン(井上　瑶)、子　　供(滝沢久美子)、　〃(矢野洋子)、依 頼 人(田中　勝)、おじいさん(矢田　稔)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／あべ正巳、中村　孝、加藤のり子、福地信之、高橋由美子
■背景／アップル
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、赤嶺順子、松村美智子、笠倉久美子、山崎由紀江
■撮影／結束義博、都島雅義■編集／西出栄子■進行／伏川政明
■制作協力／アニメルーム

第42話『国際列車／パニック だ／コロン』(1977年10月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ニ コ ル(千々松幸子)、母　　親(滝沢久美子)、アナウンサー(有馬瑞子)、運 転 手(西川幾雄)、、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／マエダエウセイ、楠田　悟、中村　孝、福地信之、佐藤勢津子
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、西山和孝、滝沢昭夫、島田信行、外崎　清
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム
(注記)「マエダエウセイ」はクレジット表示ママ。

第43話『白鳥の王子 だ／コロン』(1977年10月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木悠紀■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／エ リ ゼ(滝沢久美子)、ミニックイ(肝付兼太)、ナ ス 子(矢野洋子)、王 子 Ａ(稲葉　実)、王 子 Ｂ(塩沢兼人)、ナレーター(富山　敬)

■背景／アップルズ■仕上／原田千尋、佐藤澄子、山津真岐子
■撮影／伊井雅之、横山幸太郎■編集／西出栄子■進行／伏川政明
■制作協力／アニメルーム

第21話『燃えよ!／レッド スリー だ／コロン』(1977年5月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／レッド スリー(池水通洋)、少 年(中川まり子)、ブラック ツー(飯塚*昭三)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／アベ正巳
■原動画／ナカムラタカシ、楠田 悟、前田康成、福地信之、高橋由美子、北林京子
■背景／ＡＲＴテイク・ワン■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、吉川生子、鈴木弥生、川崎智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム

第22話『ナイババの宝 だ／コロン』(1977年5月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ナイババ(小関 一)、ホメット(蟹江栄司)、ダ シ ル(山本 梢)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／大貫信夫
■原動画／北条昌子、中島京子、牧 由美、小国千代子、明石典子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／佐藤恭子、村田美智子
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／三木幸子■進行／小林正典
■制作協力／アニメ・フレンド

第23話『フラダースの猫 だ／コロン』(1977年6月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／小出良一■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ラ ロ ア(麻上洋子)、パル ロ(松井千恵子)、ロ ハ ン(緒方賢一)、ク ゼ ツ(滝 雅也)、ニャン ラッシュ(田中 勝)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／入間 市■原動画／星川信芳、矢尾正一、古瀬 登、吉田修久、福地信之
■背景／アップルズ■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、吉川生子、鈴木弥生、川崎智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／富樫みどり■制作協力／アニメルーム

第24話『ナイチンガールは／天使だ／コロン』(1977年6月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ナイチン ガール(峰あつ子)、村 長(大久保正信)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／前田康成、楠田 悟、ナカムラタカシ、堀本善法、北林京子、高橋由美子
■背景／ＡＲＴテイク・ワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小野寺悦子、林 裕子、藤川朝子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／福村典義■制作協力／アニメルーム

第25話『ナゼカ平原 の／宇宙人 だ／コロン』(1977年6月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／芦田豊雄、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／宇 宙 人(田中 勝)、孫(黒須 薫)、〃(松井千恵子)、孫(五島美恵子)、おともだち(池田敬子)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／海老沢幸夫
■原動画／スタジオ・ライブ、谷田部雄二、高島鉄雄、江崎桂子、豊里勝彦、河合桃子
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、佐藤澄子、小黒光子、吉川生子、松村美智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム
(注記)「谷田部雄二」はクレジット表示ママ。

第26話『狼女がやって 来た／コロン』(1977年6月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／真下耕一、大貫信夫
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ウ ル コ(杉山佳寿子)、村 長(大久保正信)、召 使(佐藤輝昭)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／大貫信夫
■原動画／北条昌子、中島京子、牧 由美、小国千代子、明石典子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／佐藤恭子、村田美智子
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／戸田礼子■進行／小林正典
■制作協力／アニメ・フレンド

第27話『地底国の／大冒険だ／コロン』(1977年7月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本 優■演出／布川ゆうじ、原征太郎
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂 玲子)、ヤッター アンコー(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ケロッパ(井上 瑶)、大 王(渡部 猛)、地 底 人(田中 勝)、主 婦(若林真理子)、、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、岸 義之、山崎 茂、橋本一枝、金子成子
■背景／ミニ・アート■仕上／佐藤信子、深沢 弓
■撮影／平山昭夫、中野信也■編集／戸田礼子■進行／高野和雄

第28話『月世界の／かぐや姫だ／コロン』(1977年7月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利 元■演出／石黒 昇、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂 玲子)、ヤッター アンコー(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／宇 宙 人(田中 勝)、客(恵比寿まさ子)、おともだち(宮内尊寛)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／アベ正巳■原動画／楠田 悟、福地伸之、アベ正巳、池部吉昭
■背景／ＡＲＴテイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、原田千尋、鈴木弥生、川崎智子、松村美智子
■撮影／伊井雅之、横山幸太郎■編集／西出栄子■進行／伏川政明
■制作協力／アニメルーム
(注記)「福地伸之」はクレジット表示ママ。

第29話『ソーケー牧場 の／決闘 だ／コロン』(1977年7月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂 玲子)、ヤッター ペリカン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ケ ン(川島千代子)、おじいさん(槐 柳二)、勇(田中 勝)、イチゴ キッド(渡部 猛)、おともだち(滝口カオル)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／林 政行■原動画／内藤美智子、宮林英子、高橋里江、小山 規
■背景／アップルズ
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小磯栄子、林 裕子、小野寺悦子、鈴木弥生
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／西出栄子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第30話『キング モング の／島だ／コロン』(1977年7月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本 優■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂 玲子)、ヤッター アンコー(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／男(田中 勝)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山崎 茂、橋本一枝、横川たか子
■背景／ミニ・アート■仕上／村田美智子、金子マサ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／古川順康■進行／高野和雄

第31話『ドビンソン／クロースル だ／コロン』(1977年7月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉田嘉昭■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂 玲子)、ヤッターワン(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ドビンソン クロースル(寺島幹夫)、サンデー(丸山裕子)、女(松井千恵子)、ナレーター(富山 敬)
■作画監督／海老沢幸男
■原動画／谷田部雄二、江崎桂子、高島鉄雄、河合桃子、角田てる
■背景／ＡＲＴ・テイクワン
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、伊勢田美千代、飯島美江子、室賀隆子、平沼昭枝
■編集／西出栄子■進行／福村典義■制作協力／アニメルーム
(注記)「谷田部雄二」はクレジット表示ママ。

第32話『南極点の／ドクロだ／コロン』(1977年8月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／桜井正明■演出／奥田誠治、野村和史
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、オモッチャマ(桂 玲子)、ヤッター アンコー(池田 勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／スカット(大久保正信)、ロ ー ラ(黒須 薫)、子 供(矢

敬)
■作画監督／海老沢幸夫
■原動画／野田拓実、白土理徳、高島鉄雄、江崎桂子、中川ひろ子、河合桃子
■背景／ミニ・アート■仕上／伊勢田美千代、岡谷ゆり子、村山京子、若林豊子
■撮影／平山昭夫、橋本和典■編集／西出栄子■進行／伏川政明
■制作協力／アニメルーム
(注記)「飯塚*昭二」はクレジット表示ママ。

第9話『アフリシャ探険 だ／コロン』(1977年2月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／大貫信夫
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／フンダックル(飯塚*昭三)、酋*　長(藤本　譲)、息　子(中川まり子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／大貫信夫
■原動画／北条昌子、中島京子、牧　由美、小国千代子、明石典子
■背景／今村立夫■仕上／小野静子、市川あさ子
■撮影／結束義博■編集／戸田礼子、三木幸子■進行／横内昭二

第10話『ナス湖の／ナッシー だ／コロン』(1977年3月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／小林三男、長谷川康雄
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／ナッシー(中島喜美栄)、ナッシー仔(松金よね子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦■原動画／前田康成、中村　清、なかむらたかし、吉田修久
■背景／今村立夫■仕上／飛田富美子、岩田くに子、田中秀子、山津真岐子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／寺田好輝■制作協力／アニメルーム

第11話『ナゾの／三角領域だ／コロン』(1977年3月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／社　長(今西正男)、ペ　ロ(松尾佳子)、チ　ロ(井上瑶)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／みぶおさむ■原動画／坂井文雄、出塚*芳信、清島孝一郎、池部吉昭
■背景／ミニ・アート■仕上／遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博■編集／古川順康■進行／高野和雄

第12話『トースター島 の／秘密 だ／コロン』(1977年3月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／マガリン(宮内幸平)、ポリチネロ(中川まり子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／入間市郎、アベ正巳、星川信芳、矢尾正一、古瀬　登
■背景／今村立夫■仕上／山津真岐子、吉川生子、小黒光子、原田千尋
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／伏川政明■制作協力／アニメルーム

第13話『びっくり／アマゾメス だ／コロン』(1977年3月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／真下耕一
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／女　王(つかせのり子)、老　婆(赤木葉子)、ナレーター(富山　敬)
■原動画／田中　亨、湖川　滋、本多　哲、平山則雄、道下有希子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／永野知代枝、深沢　弓
■撮影／橋本和典、小西一広■編集／戸田礼子■進行／和久田俊文

第14話『大怪盗ドンパン だ／コロン』(1977年4月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／ドンパン(田中康郎)、マ　マ(友近恵子)、ネッコロンボ(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／芦田豊雄
■原動画／さかいあきお、望月敬一郎、谷田部雄次、江崎桂子、豊里勝彦
■背景／アップルズ■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、原田千尋、佐藤澄子、吉川生子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／富樫みどり

第15話『ナイプスの少女だ／コロン』(1977年4月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／平　和元■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／パイジ(黒須　薫)、ピーター(中川まり子)、ヘンジー(今西正男)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／田中英二
■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝、横川たか子、古川達也
■背景／ミニ・アート■仕上／村田美智子、金子マサ子
■撮影／結束義博■編集／三木幸子■進行／高野和雄

第16話『ヤメタイ国 の／女王 だ／コロン』(1977年4月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／石黒　昇、後藤雷太
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／ヒメ子(井上　瑶)、カメの隊長(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／前田康成、楠田、ナカムラタカシ、堀本善法、福地信之
■背景／アップルズ■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小黒光子、佐藤澄子、山津真岐子
■撮影／伊井雅之、横山幸太郎■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム
(注記)「楠田」はクレジット表示ママ。

第17話『ビートラズ は／歌う で／コロン』(1977年4月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／芦田豊雄、長谷川康雄
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／エリザデス女　王(池田和歌子)、マリー(横沢啓子)、マリーの母(矢野洋子)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／海老沢幸夫
■原動画／スタジオ・ライブ、野田拓実、白土*理徳、宍倉　敏、江崎桂子、高島鉄雄
■背景／ＡＲＴテイク・ワン■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、吉川生子、鈴木弥生、川崎智子
■撮影／結束義博■編集／西出栄子■進行／福村典義

第18話『赤ちゃんパンダが／生れる／コロン』(1977年4月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／原田益次■演出／真下耕一
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／スーミン(麻上洋子)、獣　医(田中　勝)、スーミンのパパ(神山卓三)、ナレーター(富山　敬)
■原動画／鈴木康彦、木下ゆうき、本多　哲、平山則雄、道下有希子
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／佐藤信子、深沢　弓
■撮影／平山昭夫、中野信也■編集／戸田礼子■進行／高野和雄
■制作協力／アニメルーム

第19話『ああ!／フンバルジャン で／コロン』(1977年5月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ、真下耕一
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／フンバル ジャン(平林尚三)、シーツコイ(田中　勝)、門衛(佐藤輝昭)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／田中英二
■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝、横川たか子、古川達也
■背景／ミニ・アート■仕上／村田美智子、金子マサ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／古川順康■進行／高野和雄

第20話『暗黒街の／カッポレ だ／コロン』(1977年5月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第1画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、、サイコロン(桂　玲子)、ヤッター ペリカン(池田　勝)
■声の出演[第2画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第3画面]／カッポレ(飯塚*昭三)、マリア(黒須　薫)、ジェムス(塩沢兼人)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／坂口　尚、アベ正巳、鎌田百合子、渡辺いずみ、武藤由美子

タイムボカンシリーズ ヤッターマン

1977年１月１日〜1979年１月27日(第１〜108話)　毎週土曜18時30分〜19時
＊1978年８月12日に第63話を再放映
フジテレビ系／30分カラー・全108話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、酒井あきよし■原作／タツノコプロ企画室
■音楽／神保正明、山本正之■協力／魔人社音楽工房[１〜58話]
■主題歌　ビクターレコード
　ヤッターマンの歌　　作詩／若林一郎　補作／山本正之　作曲／山本正之
　　　　　　　　　　　編曲／神保正明
　　　　　　　　　　　歌／山本正之、少年少女合唱団みずうみ
　天才ドロンボー　　　作詩／山本正之　作曲／山本正之　編曲／神保正明
　　　　　　　　　　　歌／小原乃梨子、八奈見乗児、たてかべ和也
　　　　　　　　　　　[以上、１〜58話]
■新主題歌　ビクターレコード
　ヤッターキング　　　作詩、作曲／山本正之　編曲／神保正明
　　　　　　　　　　　歌／山本正之、スクールメイツブラザース
　ドロンボーのシラーケ　作詩、作曲／山本正之　編曲／神保正明
　　　　　　　　　　　歌／小原乃梨子、八奈見乗児、たてかべ和也
　　　　　　　　　　　セリフ／滝口順平
　　　　　　　　　　　[以上、59〜108話]
■チーフディレクター／笹川ひろし、原　征太郎[以上、１〜46話]
■総監督／笹川ひろし[47〜108話]
■小学館　学習雑誌、テレビくん 連載
■プロデューサー／柴田　勝[１〜46話]、永井昌嗣[１〜46、話数不詳〜108話]、
　　　　　　　　　加藤 長輝[59〜話数不詳]
　　　　　　　　　[59話以降は、表示箇所が「総監督」クレジットの手前に移動]
■制作／フジテレビ、タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクターデザイン／
　天野嘉孝、高田明美[59、106話]、中森恵子[60〜105、107、108話]
　　　　　　　　　[59話以降は「キャラクター」「デザイン」と２行表記]
■メカニックデザイン／大河原邦男
　　　　　　　　　[59話以降は「メカニック」「デザイン」と２行表記]
■美術担当／岡田和夫、横瀬直人[１〜58話]
■録音ディレクター／鳥海俊材 (ザック・プロモーション)
　　　　　　　　　[59話以降は「録音」「ディレクター」と２行表記]
■録音／高橋久義 (新坂スタジオ)
■効果／加藤昭二 (アニメ・サウンド・プロダクション)
■現像／東京現像所 [59話以降は「現像所」表記]
■制作デスク／横尾　潔[１〜43話]
■制作担当／中野政則[44〜話数不詳]、小林正典[話数不詳〜108話]、
　内間　稔(読広)、鈴木利幸(読広)[１〜58話]、大野　実(読広)[44〜108話]・
　嘉義良隆[１〜16話]
　[59話以降は、表示箇所がオープニングの「プロデューサー」と同じ画面に移動。
　同時に、「内間稔」「大野実」というスペースのつまった表記に]
■制作／フジテレビ、タツノコプロ
(注記)「プロデューサー」及び「制作担当」のスタッフ名の推移は、本放映当時のフィルムが部分的にしか現存しないため、正確な話数が把握できていない。

第１話『ヤッターマン出動だ／コロン』(1977年1月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／配 達 人(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原画／マエダコーセイ、アベ正巳■動画／星川信芳、矢尾正一、古瀬　登
■背景／桜井真理子、宮川佳子■仕上／山津真岐子、吉川生子、増田嘉子
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、戸田礼子■進行／福村典義
■制作協力／アニメルーム

第２話『プジイプトの／水売り娘 だ／コロン』(1977年1月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／ナレーター(富山　敬)、ハッサン(丸山裕子)、ヨクババ(肝付兼太)、ベニマァル(小宮和枝)
■作画監督／芦田豊雄
■原動画／スタジオライブ、さかいあきお、望月敬一郎、谷田部 雄次、堀本善法、福地信之
■背景／桜 井 真理子、宮川佳子
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小黒光子、佐藤澄子、佐々木 順子
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／新井秀子■制作協力／アニメルーム

第３話『フロダリビーチの／大王だ コロン』(1977年1月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／石黒　昇、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／(松岡文雄)、(増岡　弘)、(富山　敬)
■作画監督／芦田豊雄
■原動画／スタジオライブ、さかいあきお、望月敬一郎、谷田部 雄次、堀本善法、福地信之
■背景／桜 井 真理子、宮川佳子
■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、小黒光子、佐藤澄子、佐々木 順子
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／新井秀子■制作協力／アニメルーム

第４話『北極海の／アザラシ だ／コロン』(1977年1月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／老　　人(宮内幸平)、子　　供(佐久間あい)、子　　供(田中　勝)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦
■原動画／入間市郎、アベ正巳、高橋由美子、内田まゆみ、北林京子
■仕上／原田千尋、山津真岐子、吉川生子
■撮影／緒方プロ■編集／西出栄子■進行／寺田憲生■制作協力／アニメルーム

第５話『イルカ王国の宝だ／コロン』(1977年1月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／石黒　昇、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／マ リ ア(横沢啓子)、博　　士(国坂　伸)、ヘルメット(北村弘一)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／宇田川一彦■原動画／前田康成、ナカムラタカシ、中村　清、吉田修久
■背景／今村立男■仕上／小黒光子、増田嘉子、佐藤澄子
■撮影／結束義博、橋本和典■編集／西出栄子■進行／寺田好輝
■制作協力／アニメルーム

第６話『トンカの／神殿を守る／コロン』(1977年2月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／長　　老(田中康郎)、客(塩沢兼人)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝、横川たか子
■背景／今村立夫■仕上／村田美智子、金子マサ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／古川順康■進行／高野和雄

第７話『レオの／カーニバル だ／コロン』(1977年2月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／石黒　昇、長谷川康雄
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／少　　女(佐久間あい)、委 員 長(田中　勝)、客(小関一)、ナレーター(富山　敬)
■作画監督／さかいあきお
■原動画／望月敬一郎、谷田部雄次、宍倉　敏、星川信芳、矢尾　登
■背景／アート・ノア■仕上／スタジオ・ＵＦＯ、伊勢田美千代、飯島美江、室画隆子
■撮影／橋本和典■編集／西出栄子■進行／福村典義

第８話『イマラヤの雪男 だ／コロン』(1977年2月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／奥田誠治、後藤雷太
■声の出演[第１画面]／ガンちゃん(太田淑子)、アイちゃん(岡本茉利)、オモッチャマ(桂　玲子)、ヤッターワン(池田　勝)
■声の出演[第２画面]／ドロンジョ(小原乃梨子)、ボヤッキー(八奈見乗児)、トンズラー(たてかべ和也)、ドクロベー(滝口順平)
■声の出演[第３画面]／雪　　男(飯塚昭二)、老　　人(槐　柳二)、ナレーター(富山

〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ジェニアール(千葉耕市)、アンナ(友近恵子)、ミエール(浜田寸躬子)、ウラジーノ(今西正男)、カール(古谷　徹)
■原動画／朝戸澄子、堀川留子、坂本英明、野島　進、野崎恒伸、道下有希子
■背景／スタジオ ビック■仕上／村田美知子、朝沼清良、遠藤京子、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、橋本和典■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第38話『オモチャが作った／愛の橋』(1977年6月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、アンディ(千々松幸子)、ガチョ(麻生美代子)、ガ　　バ(飯塚*昭三)、獣　　医(千田光夫)、運転手(黒部　鉄)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック■仕上／岡嶋国敏、羽生道代、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫

第39話『ふしぎな／数字人間』(1977年6月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／福島和美
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ジェニアール(千葉耕市)、エミール(浜田躬子)、王　　様(宮内幸平)、博　　士(加藤修)、ゼーロ(喜多道枝)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アド コスモ
(注記)「浜田躬子」はクレジット表示ママ。

第40話『海の中の／冒険野郎』(1977年7月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
227 ■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ウラジーノ(今西正男)、ジョー(黒部　鉄)、サンデイ(野沢雅子)、長　　老(北村弘一)、サンゴ人(A)(峰あつ子)
■原動画／川端　宏、沼尻　東、坂本英明、野島　進、野崎恒伸、道下有希子
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／和久田俊文

第41話『希望と勇気の／なる木』(1977年7月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ウラジーノ(今西正男)、マリソン(友近恵子)、カブリェル(藤本　譲)、パピー(栗　葉子)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオ ルック、竜仕上センター
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第42話『立ちあがれ!／アニマルナイツ』(1977年7月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、タイガーナイト(加藤　修)、ライオンナイト(立壁かずや)、ウサギナイト(峰あつ子)
■原動画／木場田実、スズキテルアキ、山崎隆生、林　一哉、小沢常男、田口一成
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／中田節子、山越道子、鴻田光世
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アド コスモ

第43話『シャボン玉よ／いつまでも』(1977年7月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、シャボスキー(槐　柳二)、シーラ(杉山佳寿子)、男　　A(稲葉　実)、　　B(大田黒武生)
■原動画／川端　宏、スタジオルック、加藤和恵、鈴木まり子、野島　進、野崎恒伸
■背景／スタジオ ビック■仕上／村田美知子、朝沼清良、遠藤京子、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、橋本和典■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫

第44話『トーテムポールの／怒り』(1977年7月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、長老(嶋　俊介)、ホルダー(竜田直樹)、ト　　ム(塩沢兼人)、子　　供(鈴木れい子、三田ゆう子)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック■仕上／岡嶋国敏、羽生道代、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／和久田俊文

第45話『花の妹リッピー』(1977年8月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、リカ(友近恵子)、リッピー(潘　恵子)、バラの精(三田ゆう子)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／伊藤　宏
■協力／アド・コスモ

第46話『ベルト・サタンの／復活』(1977年8月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ドラ・コーモラー(千葉耕市)、キャンサー(宮内幸平)、カニー・ケイ(塩沢兼人)、左　　官(竜田直樹)、子　　供(松田洋子)
■原動画／スタジオナイト、堀川留子、加藤和恵、鈴木マリ子、野島　進、野崎恒伸
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第47話『お菓子の国の／カーニバル(前編)』(1977年8月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山田ひろし■演出／島田政子
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、クリーム(松尾佳子)、チョコレ翁さん(千葉順二)、デコレ(峰　恵研)、隊　　員(千葉繁、稲葉　実)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／伊藤　宏
■協力／アド・コスモ

第48話『お菓子の国の／カーニバル(後編)』(1977年8月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／島田政子■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、クリーム(松尾佳子)、チョコレ翁さん(千葉順二)、デコレ(峰　恵研)、隊　　員(千葉繁、玄田哲章)
■原動画／川端　宏、堀川留子、加藤和恵、鈴木マリ子、野島　進、野崎恒伸
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／平山昭夫、橋本和典■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第49話『追いつめろ!／ベルト・サタン』(1977年9月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ゴールドデビル(加藤　修)、ストーン(井上　瑶*)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオ ルック、竜仕上センター
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第50話『さようなら!／不思議な世界』(1977年9月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ピーター(中川まり子)、メラーリの父(峰　恵研)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アド コスモ

■協力／アド・コスモ

第24話『ユラユラ影よ／立ちあがれ』(1977年3月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ベルモント(亀谷雅彦)、真空摩人(宮村義人)、モッキー(松島みのり)、ジャン(千千松幸子)、少　年(東　美江)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、朝沼清良、遠藤京子、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二
(注記)「真空摩人」はクレジット表示ママ。

第25話『絵本に描け!／自由の街』(1977年3月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、チューブ摩人(飯塚*昭三)、ペインタ(喜多道枝)、長　　老(宮内幸平)、絵本人間Ａ(西川幾雄)、　　　Ｂ(広瀬正志)
■原動画／岡田敏靖、、堀川留子、坂本英明、長谷川憲生
■背景／スタジオ ビック■仕上／岡嶋国敏、羽生道代、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫
(注記)「チューブ摩人」はクレジット表記ママ。

第26話『トッカメール刑事の／冒険』(1977年3月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、トッカメール(梓　欣造)、キノッピー(丸山裕子)、(納谷六朗)、(石丸博也)、(たてかべ和也)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／伊藤　宏
■協力／アド・コスモ

第27話『聖母マリアの涙』(1977年4月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、神父(仲木隆司)、ル　　イ(飯塚*昭三)、男　　Ａ(稲葉　実)、生物Ａ(井上　瑶)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／山田良一

第28話『音符人間よ／平和をよべ』(1977年4月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／加賀美しげ子■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、カスタム将軍(池田　勝)、牧　　師(稲葉　実)、トンキー(千々松幸子)、アリア(桂　玲子)、音符人(塩沢兼人)
■原動画／川端　宏、江尻　東、奥野芳久、江村豊秋、井口忠一、道下有希子
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二
(注記)「江尻 東」はクレジット表示ママ。

第29話『よみがえれ!／良心の灯』(1977年4月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／鳥海永行、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ジェニアール(千葉耕一)、エミール夫人(浜田寸射子)、キノッピー(丸山裕子)、ラ　　ラ(松島みのり)、タイフーガー(加藤　修)、ローラ(岡本茉利)
■原動画／木場田実、スズキテルアキ、山崎隆生、林　一哉、小沢常男、田口一成
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／中田節子、山越道子、鴻田光世
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アドコスモ

第30話『未来を／盗まれた国』(1977年4月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ピーター(大田淑子)、ネッケン隊長(村松康雄)、騎士Ａ(黒部　鉄)、　　Ｂ(稲葉　実)、　　Ｃ(塩沢兼人)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオ ルック、竜仕上センター
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫

第31話『太陽を失った／野菜人』(1977年5月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／海老沼三郎■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、カボチャじいさん(永井一郎)、ナスビ氏(竜田直樹)、トーナス氏(稲葉　実)、タマネギ君(中川まり子)、ネギちゃん(佐久間あい)
■原動画／朝戸澄子、堀川留子、坂本英明、野島　進、野崎恒伸、道下有希子
■背景／スタジオ ビック■仕上／村田美知子、朝沼清良、遠藤京子、竜仕上センター
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／和久田俊文

第32話『魔の細菌世界』(1977年5月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、、トッカメール(梓　欣造)、マイシン博士(宮内幸平)、少女ミリカ(井上　瑶)、テンパー人間Ａ(西川幾雄)、　　　Ｂ(竜田直樹)
■原動画／木場　実、スズキテルアキ、山崎隆生、かわいたくみ、坂田筆男、藤井美佐子
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／斉藤恵子、山崎千恵子、北村ゆかり
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アドコスモ

第33話『七つの色を／とりもどせ』(1977年5月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ホワイト氏(吉沢久嘉)、レッド(井上　瑶)、オレンジ(佐久間あい)、ミドリ(峰あつ子)、パール(中川まり子)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック■仕上／岡嶋国敏、羽生道代、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二

第34話『パックン／故郷へ帰る』(1977年5月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、パックンの父(稲葉　実)、パックンの母(友近恵子)、ダンパ(たてかべ和也)、老　　木(笹岡繁蔵)
■原動画／川端　宏、沼尻　東、、坂本英明、野島　進、野崎恒仲、道下有希子
■背景／スタジオ ビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオ オニオン
■撮影／平山昭夫、橋本和典■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫

第35話『陶器人の変身』(1977年5月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／加賀美しげ子■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、銀摩人(飯塚*昭三)、仙　　人(神山卓三)、マリア(弥永和子)、トビニ(久松夕子)、サ　　ム(東　美江)
■原動画／木場田実、スズキテルアキ、山崎隆生、林　一哉、小沢常男、田口一成
■背景／丸田智恵子、西本初枝■仕上／中田節子、山越道子、鴻田光世
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／西山孝一
■協力／アドコスモ
(注記)「銀摩人」はクレジット表示ママ。

第36話『ミニミニ国よ／手をつなげ(前編)』(1977年6月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ジェニアール(千葉耕市)、アンナ(友近恵子)、ミエール(浜田寸射子)、ウラジーノ(今西正男)、カール(古谷　徹)
■原動画／スタジオ ルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオ ルック、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、小西一広■編集／木田伴子、津留洋子■進行／和久田俊文
(注記)「ミエール」はクレジット表示ママ。

第37話『ミニミニ国よ／手をつなげ(後編)』(1977年6月12日放映)

■背景／宮川佳子、桜井真理子
■仕上／小野静子、竜仕上センター、スタジオルック、スタジオオニオン
■撮影／緒方プロダクション■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／召田和子
(注記)「西川行雄」はクレジット表示ママ。

第11話『思い出の／ニーナの花』(1976年12月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ポックリ(栗　葉子)、ネッコダー大王(飯塚*昭三)、兵士Ａ(水鳥鉄男)、　　Ｂ(笹岡繁三)、　　Ｄ(稲葉実)
■原動画／窪　秀己、吉田正宏、細谷照代、山泉利子、高橋幸江
■背景／ミニアート■仕上／正井陽子、久岡喜久子、山口恵美子、篠田ナナ子
■撮影／於本広康、太田孝二■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／酒井　澄
■制作協力／トップクラフト
(注記)「水鳥鉄男」「笹岡繁三」はクレジット表示ママ。

第12話『ドア城の少年』(1976年12月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ナニコーノ(仲木隆司)、ディーノ(峰あつ子)、ウラジーノ(今西正男)、アンナ(友近恵子)、キースケ(千々松幸子)、ドア魔人(大宮悌二)
■原動画／福田きよむ、木場田実、松崎　一、徳田悦郎、竹田士良、寺田順子
■背景／小板橋かよ子、丸田智恵子■仕上／嶋田美之、斉藤恵子、山崎千恵子
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／箕ノ口克己
■協力／アド・コスモ

第13話『夜の怪物／アクナイター』(1976年12月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、毛利　元■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、アクナイター(寺島幹夫)、虹の精(吉田理保子)、風の精(石森達幸)、雲の精(立壁和也)、かげろうの精(肝付兼太)、トッカメール刑事(梓　欽三)
■原動画／岡田靖敏、丹内　司、長谷川憲生、昆進之助
■背景／スタジオビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオルック、竜仕上センター
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／田代文夫
(注記)「梓 欽三」「岡田靖敏」はクレジット表示ママ。

第14話『燃えろ炎!／もう一度』(1977年1月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、メラーリ(松尾佳子)、氷魔王(島宇志夫)、父(島田　彰)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオルック、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／山田良一

第15話『巨人の国に／アタック』(1977年1月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤道雄■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、シャイアン(東　美江)、ジム(中川まり子)、巨　人(池田　勝)、巨人の母(此島愛子)、耳小僧(仲木隆司)
■原動画／福田きよむ、木場田実、松崎　一、徳田悦郎、竹田士良、寺田順子
■背景／小板橋かよ子、丸田智恵子■仕上／嶋田美之、斉藤恵子、山崎千恵子
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／箕ノ口克己
■協力／アド・コスモ

第16話『おりがみ国の決戦』(1977年1月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、毛利　元■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、アンナ(友近恵子)、パルプ長老(千葉耕一)、おりがみ様(池田和歌子)、紙の動物犬(たてかべ和也)、　〃　馬(笹岡繁蔵)
■原動画／川端　宏、沼尻　東、、長谷川憲生、今川道子、鈴木まり子
■背景／スタジオビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオルック、竜仕上センター
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／田代文夫

第17話『ベルト・サタンの／角を狙え』(1977年1月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、毛利　元■演出／佐々木的一
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ジェニアール(千葉耕一)、エミール(浜田寸射子)、オイソガシ おじいさん(北村弘一)、ドクター(山下啓介)
■原動画／窪　秀己、都丸　保、佐々木よし子、河田章子、加藤清美、倉持玉恵
■背景／宮川佳子、桜井真理子■仕上／田畑義則、鍋谷雅子、大沢生代、沼野美代子
■撮影／菊地一仁、於本廣*康■編集／谷口　肇、三木幸子■進行／細谷　満

第18話『スペード魔女の涙』(1977年1月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／笹川ひろし、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ジェニアール(千葉耕一)、エシール(浜田寸射子)、トッカメール(梓　欣造)、魔　女(麻生美代子)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオビック■仕上／村田美知子、朝沼清良、遠藤京子、竜仕上センター
■撮影／緒方プロダクション■編集／谷口　肇、木田伴子■進行／山田良一
(注記)「エシール」はクレジット表示ママ。

第19話『時を忘れた／時計国』(1977年2月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、ウラジーノ(今西正男)、アンナ(友近恵子)、磁鉄皇帝(寺島幹男)、ポッポ(井上 瑶)、チクター(島田 彰)、老　人(仲木隆司)
■原動画／岡田靖敏、丹内 司、、堀川留子、坂本英明、長谷川憲生
■背景／スタジオビック■仕上／岡嶋国敏、羽生道代、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／岡島雄二
(注記)「寺島幹男」「岡田靖敏」はクレジット表示ママ。

第20話『悲しみの／花火城』(1977年2月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、トッカメール(梓　欣造)、キノッピー(丸山裕子)、王(松岡武司)、姫(桂　玲子)、サーカス小僧(西川幾雄)、
　〃　　(宮下　勝)
■原動画／福田きよむ、木場田実、松崎　一、徳田悦郎、竹田士良、寺田順子
■背景／小板橋かよ子、丸田知恵子■仕上／中田節子、山越道子、水野三知子
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／箕ノ口克己
■協力／アド・コスモ

第21話『巨大レンズの／怒り』(1977年2月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、スプレー魔人(飯坂昭三)、ゴロッキー(渡部　猛)、父レンズ(納谷六朗)、凸チン(松島みのり)、凹チン(千々松幸子)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオビック
■仕上／井上文子、薄井義雄、橋本とよ子、スタジオオニオン
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫
(注記)「飯坂昭三」はクレジット表示ママ。

第22話『メカタウンの／最後』(1977年2月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、コパー(野沢雅子)、スパナ(玄田哲章)、ペンチ(たてかべ和也)、ドライバー(黒部鉄)
■原動画／川端　宏、沼尻　東、、堀川留子、坂本英明、長谷川憲生
■背景／スタジオビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオルック、竜仕上センター
■撮影／結束義博、平山昭夫■編集／木田伴子、津留洋子■進行／田代文夫

第23話『アベコベ／大騒動』(1977年3月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、キノッピー(丸山裕子)、総督(仲木隆司)、隊　長(笹岡繁蔵)、塾　長(和久井節緒)、アベコベ人(玄田哲章)、化猫怪獣(黒部　鉄)
■原動画／福田きよむ、木場田実、松崎　一、徳田悦郎、竹田士良、寺田順子
■背景／小板橋かよ子、丸田知恵子■仕上／中田節子、山越道子、水野三知子
■撮影／秋津　実、原　平一■編集／西出栄子■進行／箕ノ口克己

ポールのミラクル大作戦

1976年10月３日～1977年９月11日(第１～50話)　毎週日曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・全50話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■[推薦表示][13～50話]／全国放送愛好者会推薦番組
■製作／吉田竜夫　[1～12話は「吉田龍夫」表記]
■企画／鳥海尽三、柳川　茂■原作／タツノコプロ企画室
■音楽／菊地俊輔
作詩／若林一郎　作曲／菊地俊輔　歌／大杉久美子　コロムビアレコード
■プロデュサー／九里一平、柴田　勝、永井昌嗣
[13話以降、表示箇所が「制作」の手前に移動]
■チーフディレクター／笹川ひろし
小学館学習雑誌、てれびくん連載、、毎日小学生新聞連載
■制作／タツノコ プロ、――――――、フジテレビ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■作画監督／野部駿夫[1～26話]、福山政敏[3～6話] [1～6話は「野辺駿男」表記]
■[作画監督]助手／福山政敏[7～26話]
■美術監督／中村光毅[1～26話]■キャラクター デザイン／下元明子
■美術担当／野々宮恒男■　〃　[美術担当]／小杉光芳[27～50話]
■作画担当／福山政敏[27～50話]
■録音デレクター／水本　完、ザックプロモーション
[38話以降、「ザックプロモーション」に ( ) がつく]
■録音／高橋久義、新坂スタジオ
[38話以降、「新坂スタジオ」に ( ) がつく]
■効果／加藤昭二
■現　像 スキアニメート協　　力／東洋現像所[38～話]、な　　し
[38話以降、「現　像」と「スキアニメート」の行の間に線が挟まるようになる]
■制作デスク／関口和子[1～4話]
■制作担当／中野政則、、内間稔(読広)、大野実(読広)
■制作／フジテレビ、タツノコプロ

第１話『よみがえった／ベルト・サタン』(1976年10月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサターン(大平　透)、ウラジーノ(今西正男)、アンナ(友近恵子)、ロボット(千葉耕市)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、スタジオ オニオン、竜仕上センター、スタジオ ルック
■撮影／諸方範生、平山昭夫■編集／谷口　肇、戸田れい子■進行／召田和子
(注記)「諸方範生」はクレジット表示ママ。

第２話『恐怖のクモの巣城』(1976年10月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ウラジーノ(今西正男)、アンナ(友近恵子)、ジェニアール(千葉耕市)、クモ族の首領(野本礼三)、蟻人間(峰恵研)
■原動画／福田きょむ、木場田実、松崎　一、塩沢和夫、藤原景子、兼森あつ子
■背景／小板橋かよ子、丸田知恵子■仕上／中田節子、山越道子、水野三知子
■撮影／秋津　実、原　正一■編集／西出栄子■進行／椙田　隆
■制作協力／アドコスモ

第３話『ウツボカズラの追撃』(1976年10月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／笹川ひろし、西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、王子ピート(喜多道枝)、王女リップ(栗　葉子)、トッカメール(梓　欽造)、蜜蜂人(田口　昂*)、ウッボ首領(田中康郎)
■原動画／みぶおさむ、加藤誠一、岡崎恵三、出塚*芳信、清島考一郎、岡田敏靖
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、小野静子、スタジオ ルック、竜仕上センター
■撮影／緒方範生、結束義博■編集／谷口　肇、三木幸子■進行／山田良一
(注記)「梓 欽造」はクレジット表示ママ。

第４話『岩石巨人の秘密』(1976年10月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、熔岩小僧(東　美江)、岩石巨人(飯塚*昭三)、ト　　ム(つかせのり子)、先　　生(石森達幸)、生　　徒(峰あつ子)
■原動画／福田きょむ、木場田実、松崎　一、塩沢和夫、藤原景子、兼森あつ子
■背景／小板橋かよ子、丸田知恵子■仕上／中田節子、山越道子、水野三知子
■撮影／秋津　実、原　正一■編集／西出栄子■進行／椙田　隆
■制作協力／アドコスモ

第５話『ガイコツの逆襲』(1976年10月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鈴木良武■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ウラジーノ(今西正男)、アンナ(友近恵子)、象ガイコツ(神山卓三)、コンドル婆(赤木葉子)、虎ガイコツ(平林尚三)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、スタジオ オニオン、竜仕上センター、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、三木幸子■進行／関口和子、山田良一

第６話『雷電魔人の対決』(1976年11月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／笹川ひろし、佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ジェニアール(千葉耕市)、エミール夫人(浜田寸躬子)、雷電魔人(加藤精三)、ピッカリ(松島みのり)、電気人間(西川行雄)
■原動画／窪　秀己、都丸　保、佐々木よし子、河田章子、加藤清美、倉持玉恵
■背景／ミニアート■仕上／田畑義則、鍋谷雅子、大沢生代、沼野美代子
■撮影／菊地一仁、於本廣*康■編集／谷口　肇、三木幸子
■進行／関口和子、細谷　満■制作協力／トップクラフト
(注記)「西川行雄」はクレジット表示ママ。

第７話『恐怖のローラー巨人』(1976年11月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤道雄■演出／小笠原秀樹、矢沢規夫
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、ジ　　ム(峰あつ子)、ベルモント先生(加藤　修)、ローラー巨人(田中康郎)、ピアノ(大木民夫)、ドラム(石丸博也)
■原動画／福田きょむ、木場田実、松崎　一、塩沢和夫、藤原景子、兼森あつ子
■背景／小板橋かよ子、丸田知恵子■仕上／中田節子、山越道子、水野三知子
■撮影／秋津　実、原　正一■編集／西出栄子■進行／椙田　隆
■制作協力／アドコスモ

第８話『サボテン国に／花よ咲け』(1976年11月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、鬼トゲＡ(加藤　修)、　　Ｂ(西川幾雄)、竜巻サボテン(立壁和也)、ジェニアール氏(千葉耕一)、エミール夫人(浜田寸躬子)、チック(井上　瑶)
■原動画／岡田敏靖■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、スタジオ オニオン、竜仕上センター、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、三木幸子■進行／関口和子、山田良一
(注記)「千葉耕一」はクレジット表示ママ。

第９話『悪党鳥人を倒せ』(1976年11月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、双頭の首領(渡辺　猛)、その部下(立壁和也)、その部下(玄田哲章)、リリー(峰あつ子)、九官鳥の子供(堀　絢*子)
■原動画／スタジオルック、加藤興治、飯野　孝、佐々木正広、中嶋忠二、上杉遵史
■背景／スタジオ ビック
■仕上／村田美知子、スタジオ オニオン、竜仕上センター、スタジオ ルック
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇、三木幸子■進行／関口和子、山田良一

第10話『めざめよ!／青銅の騎士』(1976年12月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／高山由紀子■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／ポール(白川澄子)、ニーナ(横沢啓子)、ドッペ(田の中勇)、パックン(麻上洋子)、ナレーション(此島愛子)
■[声の出演][第２画面]／ベルトサタン(大平　透)、青銅の騎士(西川行雄)、隊長(笹岡繁蔵)、人形使い(池田　勝)、リ　　ス(高坂真琴)、ロ　　バ(神山卓三)
■原動画／川端　宏、沼尻　東、丹内　司、長谷川憲生、今川道子、鈴木まり子

■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／小西一広■進行／田代文夫

第25話『地獄花!キュウコンダー』(1976年10月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／荒船師団長(亀井三郎)、ロマンダ(中田浩二)、隊　　長(田口　昂*)、ドックガーン(加藤精三)、部　　下(黒部　鉄)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一
■作画／坂口　尚、中島京子、鎌田百合子、牧　由美、北条昌子、渡辺いずみ、小国千代子、武藤由美子
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／深沢　弓、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第26話『大出現!ジャンボキノッコー』(1976年10月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、センター員(黒部　鉄)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、江村豊秋、平山則雄、小島幸雄
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／永野知代枝、遠藤京子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／橋本和典■進行／岡島雄二

第27話『巨大ロボット!ベアズリー』(1976年10月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／荒船師団長(亀井三郎)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、キ　ン　グ(古谷　徹)、隊　　長(立壁和也)、少　　年(峰あつ子)、〃(山田礼子)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／野崎恒伸、長谷川憲生、江村豊秋、平山則雄
■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／市川あさ子、佐藤信子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／和久田俊文

第28話『幻[まぼろし]怪獣!ミエンガー』(1976年11月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、磯貝長官(加藤　修)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、記　　者(水鳥鉄夫)、兵　　士(広瀬正志)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／二宮常雄、平山則雄、江村豊秋、小島幸雄
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、木田伴子■撮影／平山昭夫■進行／田代文夫

第29話『大暴れ!コンガーキング』(1976年11月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、磯貝長官(加藤　修)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、皇帝ジゴクダー(渡辺　猛)、隊　　員(黒部　鉄)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／昆進之介、江村豊秋、平山則雄、小島幸雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／深沢　弓、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／横内昭二

第30話『岩石巨人!ジャリアント』(1976年11月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／将軍ドッグガーン(加藤精三)、荒船師団長(亀井三郎)、円盤の隊長(加藤　修)、ジ　ロ　ー(丸山裕子)、タクシー運転手(広瀬正志)、客(平島　朗)、ナレーター(家弓家正)
■作画／木下ゆうき、長谷川憲生、野崎恒伸
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／市川あさ子、佐藤信子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、木田伴子■撮影／小西一広■進行／岡島雄二

第31話『大攻撃！マブッダー』(1976年11月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、須田博士(伊武雅之)、ザ　ラ　イ(田中康郎)、ナレーター(家弓家正)
■作画／湖川　滋、平山則雄、江村豊秋
■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■仕上／永野知代枝、遠藤京子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／和久田俊文

第32話『吠えろ！ゴーダムタイガー』(1976年12月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、エ　リ　カ(松島みのり)、荒船師団長(亀井三郎)、須　　田(伊武雅之)、ナレーター(家弓家正)
■作画／鎌田百合子、小国千代子、中島京子、奥野芳久、井口忠一、江村豊秋
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、木田伴子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第33話『はじけ!パチンガーX』(1976年12月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、隊　　長(大竹　宏)、兵　　士(黒部　鉄)、、ナレーター(家弓家正)
■作画／二宮常雄、平山則雄、江村豊秋、小島幸雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／市川あさ子、佐藤信子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／橋本和典■進行／小林正典

第34話『大作戦!ゴーダムジャック』(1976年12月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、皇帝ジゴクダー(渡辺　猛)、隊　　長(加藤　修)、兵士ドロンジャー(黒部鉄)、ナレーター(家弓家正)
■作画／長谷川憲生、木下ゆうき、昆進之介、泉口　薫
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、木田伴子■撮影／小西一広■進行／岡島雄二

第35話『モーレツ!巨大カブトーザー』(1976年12月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／将軍ドッグガーン(加藤精三)、皇帝ジゴクダー(渡部猛)、荒船師団長(亀井三郎)、滝川博士(塩見竜介)、妻(友近恵子)、ナレーター(家弓家正)
■作画／湖川　滋、平山則雄、江村豊秋
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／永野知代枝、遠藤京子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／和久田俊文

第36話『決戦!ジゴクダー』(1976年12月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、荒船師団長(亀井三郎)、磯貝長官(加藤　修)、皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作画／二宮常雄、奥野芳久、井口忠一、江村豊秋
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／小西一広■進行／横内昭二

■脚本／陶山　智■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、荒船師団長(亀井三郎)、大吉の母(藤　夏子)、レーダー係(西川幾雄)、ネンドロイド(黒部　鉄)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、沼尻　東、江村豊秋、平山則雄
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／村田美智子、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／緒方プロ■進行／和久田俊文

第12話『突撃! モグラック』(1976年7月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／田口章一、中原　朗■演出／上原一夫
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、荒船師団長(亀井三郎)、景　　子(芝田清子)、健　　一(白川澄子)、よし子(桂　令子)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／山田政紀、富沢雄三、福田　皖、昆進之介
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／シャフト、近藤隆文、浦上　淑■色指定／岡嶋春樹■特殊効果／五代儀進
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／旭プロダクション
■進行／今井広美■制作協力／サンライズ

第13話『炎の悪魔! オオリュウダー』(1976年7月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、まゆ　み(栗　葉子)、村　　長(宮内幸平)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／二宮常雄、平山則雄、江村豊秋、小島幸雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／村田美智子、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第14話『大攻撃! サンドフーン』(1976年7月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、荒船師団長(亀井三郎)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一
■作画／坂口　尚、北条昌子、渡辺いずみ、小国千代子、武藤由美子
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、桜井真理子
■仕上／深沢　弓、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／小西一広■進行／和久田俊文

第15話『大追跡! パトンボー』(1976年7月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／須田正己、木下ゆうき、平山則雄、江村豊秋
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／永野知代枝、遠藤京子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／橋本和典■進行／田代文夫

第16話『襲撃! 謎の巨大魚』(1976年8月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／上原一夫
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／山崎和夫、山田政紀、富沢雄三、サンライズ
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／シャフト■色指定／西牧民子■特殊効果／今井宏美
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／旭プロダクション
■進行／豊住政弘■制作協力／サンライズ

第17話『怒れ! タートルタンク』(1976年8月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／小出良一■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、沼尻　東、江村豊秋、平山則雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／市川あさ子、佐藤信子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／横内昭二

第18話『逆襲! ゴーダムレーザー』(1976年8月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、のり助のパパ(城山馨夫)、のり助のママ(松金よね子)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／二宮常雄、江村豊秋、長谷川憲生、平山則雄
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、桜井真理子
■仕上／山嵜三重子、沢田早苗■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／平山昭夫■進行／和久田俊文

第19話『超兵器! ハネボンダー』(1976年8月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、磯貝長官(加藤　修)、、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一
■作画／坂口　尚、中島京子、鎌田百合子、牧　由美、北条昌子、渡辺いずみ、小国千代子、武藤由美子
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／小西一広■進行／田代文夫

第20話『合体獣! シャチホコラー』(1976年9月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／上原一夫
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、荒船師団長(亀井三郎)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／山崎和夫、山田政紀、富沢雄三、サンライズ
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／富士田和子、浦上　淑、古安多恵子、福田　泉■色指定／岡嶋国敏
■特殊効果／羽須次郎■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／旭プロダクション
■進行／今井広美■制作協力／サンライズ

第21話『疾風! チテイライダー』(1976年9月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、木下ゆうき、江村豊秋、平山則雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／深沢　弓、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第22話『三段変身! ドクンガー』(1976年9月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、荒船師団長(亀井三郎)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／昆進之介、江村豊秋、平山則雄、小島幸雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、宮川佳子
■仕上／永野知代枝、遠藤京子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／橋本和典■進行／岡島雄二

第23話『マグダーの最期』(1976年9月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、マ　リ　ア(麻上洋子)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／二宮常雄、平山則雄、江村豊秋、小島幸雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／市川あさ子、佐藤信子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／結束義博■進行／和久田俊文

第24話『砂魔神! スフィンガー』(1976年10月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍ドッグガーン(加藤精三)、サグアロ王(国坂　伸)、フラワン王女(栗　葉子)、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／昆進之介、木下ゆうき、江村豊秋、平山則雄

ゴワッパー5 ゴーダム

1976年４月４日～1976年９月26日(第１～23話)　毎週日曜19時～19時30分
1976年10月６日～1976年12月29日(第24～36話)　毎週水曜18時～18時30分
朝日放送系(第１～23話)・ＮＥＴ系(第24～36話)／30分カラー・全36話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、酒井あきよし
■原作／タツノコプロ企画室■雑誌連載／たのしい幼稚園、おともだち、冒　険　王
■音楽／ボブ佐久間
■主題歌　作詞／若林一郎　作曲／小林亜星　歌／水木一郎、ヤングフレッシュ　コロムビアレコードＳＣＳ-289
■制作デスク／栃平吉和■制作担当／鎌田正治[1～23話]、高妻知孝(読広)
■プロデューサー／後藤武彦(ＮＥＴ)[以上、24～36話]、永井昌嗣
■総監督／鳥海永行
■制作／◇タツノコプロ、朝日放送[以上、1～23話]
　　　　Ｎ　Ｅ　Ｔ、タツノコプロ[以上、24～36話]
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクター デザイン／天野嘉孝■メカニック デザイン／大河原邦男
■録音ディレクター／水本　完、ザック・プロモーション
■録音／高橋久義、兼子芳博、新坂スタジオ
■効果／加藤昭二、石田サウンドプロ [1～3話は「イシダサウンドプロ」表記]
■現像／東京現像所
■制作／タツノコプロ、朝日放送[以上、1～23話]
　　　　Ｎ　Ｅ　Ｔ、タツノコプロ[以上、24～36話]

第１話『ゴワッパー５／出動せよ！』(1976年4月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／須田正己、二宮常雄■作画／奥野芳久、井口忠一、江村豊秋、長谷川憲生
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、桜井真理子
■仕上／スタジオ・古留美、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■編集／谷口　肇、三木幸子
■撮影／緒方プロ■進行／石田昌久

第２話『出たか!ネンドロイド』(1976年4月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、木下ゆうき、江村豊秋、長谷川憲生
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、島谷　忍
■仕上／スタジオ・古留美、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■編集／谷口　肇、三木幸子
■撮影／緒方プロ■進行／石田昌久

第３話『さがせ!地底魔人』(1976年4月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、植木田博士(矢田耕司)、ミ　ド　リ(吉田理保子)、技　術　者(西川幾雄)、、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一
■作画／二宮常雄、スタジオ・ナイト、平山則雄、長谷川憲生
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、桜井真理子
■仕上／スタジオ・古留美、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■編集／谷口　肇、津留洋子
■撮影／緒方プロ■進行／関口和子

第４話『たたけ!ドカンパー』(1976年4月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、磯貝長官(加藤　修)、、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／須田正己、江村豊秋、平山則雄、長谷川憲生
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、島谷　忍
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／結束義博■進行／石川　勝

第５話『くだけ!ユサブランカー』(1976年5月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、のり助のママ(松金よね子)、メグミのパパ(池水通洋)、メグミのママ(友近恵子)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、木下ゆうき、江村豊秋、長谷川憲生
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、宮川佳子
■仕上／小野静子、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第６話『ぶっつぶせ!アリジャンボ』(1976年5月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／大貫信男
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／志摩仙太郎(曽我部和行)、皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、磯貝長官(加藤　修)、、大洗博士、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、平山則雄
■作画／上村栄司、牧　由美、鎌田百合子、北条昌子、渡辺いづみ
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、島谷　忍
■仕上／永野知代枝、スタジオ・古留美■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／結束義博■進行／関口和子

第７話『海の悪魔ハイザブン』(1976年5月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／野村和史
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、マ　　コ(桂　令子)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、平山則雄■作画／福田　皖、清山滋崇、山崎和夫、高崎勝夫
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ
■仕上／シャフト■色指定／岡嶋春樹■特殊効果／寺田憲史
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／旭　プ　ロ
■進行／伊那克平■制作協力／サンライズ

第８話『強敵!モスンダー』(1976年5月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／田口章一、中原　朗■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、戸川博士(村瀬正彦)、一　　郎(神谷　明)、研究所員(熊倉重之)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／二宮常雄、江村豊秋、長谷川憲生、平山則雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／結束義博■進行／石川　勝

第９話『挑戦! オトガート』(1976年6月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／富野喜幸
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、志摩仙太郎(曽我部和行)、大吉の父(千田光夫)、大吉の母(藤　夏子)、〃　祖父(宮内幸平)、ミ　　キ(峰あつ子)、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／須田正己、江村豊秋、平山則雄、長谷川憲生
■美術設定／小杉光芳■背景／ムツゴロウ、桜井真理子
■仕上／村田美智子、スタジオ・オニオン■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、津留洋子■撮影／平山昭夫■進行／横内昭二

第10話『どこだ地底秘密基地』(1976年6月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／岬　洋子(二木てるみ)、津波　豪(安原義人)、亀山大吉(肝付兼太)、小石川五右ェ門(小宮山清)、河口のり助(千々松幸子)
■[声の出演][第２画面]／皇帝ジゴクダー(渡部　猛)、将軍マグダー(寺島幹夫)、鉄　造(加藤精三)、森　　夫(古谷　徹)、船　　長(立壁和也)、隊　　員(野部　鉄)、アナウンサー(小出和明)、、ゴーダム、ナレーター(家弓家正)
■作監／奥野芳久、井口忠一■作画／湖川　滋、木下ゆうき、江村豊秋、長谷川憲生
■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア、桜井真理子
■仕上／小野静子、村田美知子■色指定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■編集／谷口　肇、三木幸子■撮影／緒方プロ■進行／横内昭二
(注記)「野部　鉄」はクレジット表示ママ。

第11話『炎の決闘!ジムグリラ』(1976年6月27日放映)
〈エンディングクレジット〉

■作画監督／田中英二■原動画／古川達也、山崎　茂、橋本和枝、横川たか子
■背景／今村立夫■仕上／小野静子、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第50話『赤い靴は悲しい／ペッチャ』(1976年10月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、カーレン(吉田理保子)、マダムリンドン(高村章子)、友田博士(池田　勝)
■作画監督／田中　享■原動画／道下有希子、坂本英明、井口忠一
■背景／今村立夫■仕上／羽生道代、永野知代枝、小野静子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／徳永竜雄

第51話『月の世界は／ステキだ／ペッチャ』(1976年10月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／真下耕一、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ムーン王子(古谷　徹)、月の人A(西川幾雄)、[月の人]B(笹岡繁蔵)
■原動画／川端　宏、鈴木康彦、多田　信、鈴木まり子
■背景／桜井真理子■仕上／遠藤京子、山嵜三重子、深沢　弓
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／高野和男

第52話『人魚姫を／助ける／ペッチャ』(1976年10月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／布川郁司、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、人　　魚(田浦　環)、王　　子(神谷　明)、老　　婆(西乃砂恵)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、、山崎　茂、橋本一枝
■背景／今村立男■仕上／村田美知子、沢田早苗、永野知代枝
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／小林正典

第53話『透明人間は／つらい／ペッチャ』(1976年10月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ケンプ(大宮悌二)、透明人間(田中康郎)、下　　男(池田　勝)
■作画監督／みぶおさむ■原動画／加藤誠一、岡崎恵三、出塚芳信、清島孝一郎
■背景／スタジオ・ビック■仕上／オニオン、竜仕上センター■特殊効果／永野知代枝
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／高野和雄

第54話『地底王国の／ナゾだ／ペッチャ』(1976年11月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、友田博士(池田　勝)、ラムー(千葉順二)、イキキ(塩沢兼人)、ウキキ(塩谷　翼)
■原動画／鈴木康彦、多田　信、川端　宏
■背景／今村立夫■仕上／スタジオ・オニオン、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／徳永竜雄

第55話『ピラミッドを／つくる／ペッチャ』(1976年11月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／真下耕一、大貫信夫
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ヘテプ(池田　勝)、ハ　　ピ(高坂真琴)、ドレンゾ(田中康郎)
■原動画／武藤由美子、北条昌子、小国千代子、牧　由美
■背景／宮川佳子■仕上／竜仕上センター、スタジオ・オニオン
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第56話『イースター島の／巨人騒動だ／ペッチャ』(1976年11月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、、グロッキー(八奈見乗児)、、ワルサー(立壁和也)、、チヌチヌ(麻上洋子)
■原動画／田中　享、道下有希子、鈴木まり子
■背景／今村立夫■仕上／スタジオ・オニオン、竜仕上センター
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／徳永竜雄

第57話『ぶどう畑の／宝だ／ペッチャ』(1976年11月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／秦泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、イソイッチ(神谷　明)、イソツー(山下敬介)、イソサーン(高坂真琴)、領主(藤本　譲)
■作画監督／水村十司■原動画／橋本一枝、横川たか子、山崎　茂、南部あき子
■背景／今村立夫■仕上／竜仕上センター、スタジオ・オニオン
■撮影／伊井雅之、中野信也、横山幸太郎■進行／高野和雄

第58話『雀のお宿は／どこだ／ペッチャ』(1976年12月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、おじいさん(松岡文雄)、おばあさん(赤木葉子)、チュン吉(高坂真琴)
■原動画／鈴木康彦、多田　信、鈴木まり子
■背景／今村立夫■仕上／羽生道代、永野知代枝、小野静子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／徳永竜雄

第59話『ぼくたち／ガリバーになった／ペッチャ』(1976年12月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三郎■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、巨　　人(池田　勝)、小人A(松川暢生)、小人B(杉本　彰)、小人C(小高三良)
■作画監督／みぶおさむ■原動画／加藤誠一、岡崎恵三、出塚芳信、清島孝一郎
■背景／スタジオ・ビック■仕上／遠藤京子、山嵜三重子、深沢　弓
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／高野和男

第60話『シンドバットの／ロマンだ／ペッチャ』(1976年12月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／平　和元■演出／泰泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、シンドバット(小原乃梨子)、その母(友近恵子)、男　　A(池田　勝)
■作画監督／水村十司■原動画／橋本一枝、横川たか子、山崎　茂、南部あき子
■背景／今村立夫■仕上／竜仕上センター、スタジオ・オニオン
■撮影／横山幸太郎、伊井雅之、中野信也■進行／高野和雄

第61話『ダイナモンドを／発見だ／ペッチャ』(1976年12月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、、グロッキー(八奈見乗児)、、ワルサー(立壁和也)、、オタケさん(遠藤　晴)
■原動画／田中　享、道下有希子、多田　信
■背景／今村立夫■仕上／竜仕上センター、スタジオ・オニオン
■撮影／横山幸太郎、伊井雅之、中野信也■進行／高野和雄、徳永竜雄

■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、花岡正代、島村照代
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／新沼耕也、近江妙子、岸本房根
■撮影／アート・スタジオ
■協力／トップ クラフト

第35話『フランケン！／がまんだペッチャ』(1976年6月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(横沢啓子)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、フランケン博士(大木民夫)、フランケン二世(池田　勝)、イゴール(水鳥鉄夫)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、古川達也
■背景／スタジオ・ビック■仕上／山崗三重子、羽生道代■特殊効果／佐藤広明
■撮影／橋本和典、結束義博■進行／小林正典

第36話『未来は／ヒヒの国だ／ペッチャ』(1976年6月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(横沢啓子)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、アイラ(山乃広美)、カエレーン(千葉順二)、ビッドラ(飯塚昭三)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝
■背景／スタジオ・ビック■仕上／沢田早苗、大津光子■特殊効果／佐藤広明
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／かぎよしたか

第37話『王様は裸だ／ペッチャ』(1976年6月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、王(今西正男)、将　　軍(渡部　猛)、ヨプセン(三田松五郎)、ヨ ハ ン(丸山裕子)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、花岡正代、島村照代
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／新沼耕也、近江妙子、岸本房根
■撮影／アート・スタジオ
■協力／トップ クラフト

第38話『桃太郎の／鬼退治だ／ペッチャ』(1976年6月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、桃 太 郎(松島みのり)、鬼の頭目(増岡　弘)、おばあさん(鈴木れい子)、赤鬼(池田　勝)
■原画／林　政行■動画／今川道子、鈴木まり子、道下有希子
■背景／スタジオ・ビック■仕上／山崗三重子、羽生道代■特殊効果／佐藤広明
■撮影／橋本和典、結束義博■進行／小林正典

第39話『ハメルンの／笛*吹きだ／ペッチャ』(1976年7月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／真下耕一、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、少　　年(白川澄子)、市　　長(塩見竜介)、市　　民(佐久間あい)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第40話『鶴の恩返しだ／ペッチャ』(1976年7月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／秦泉寺博、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、お つ る(櫛*部小百合)、弥　　吉(石丸博也)、十 兵 衛(大久保正信)
■原画／堀池義治、鈴木康彦■動画／今川道子、鈴木まり子、道下有希子
■背景／今村立男■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第41話『竜宮は最高だ／ペッチャ』(1976年7月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三郎■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、竜　　王(大久保正信)、乙　　姫(芝田清子)、た　　こ(池田　勝)、魚(田中勝)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、古川達也
■背景／スタジオ・ビック■仕上／オニオン、竜仕上センター■特殊効果／永野知代枝
■撮影／平山昭夫、橋本和典■進行／高野日出夫

第42話『アパッチ谷の／秘密だ／ペッチャ』(1976年7月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ジェロニモ(森　功至)、大 酋*長(飯塚昭三)、サ ッ チ(横沢啓子)
■作画監督／窪　秀己■原動画／高橋幸江、加藤清美、小泉利子、倉持玉恵
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／大沢生代、楠　小文
■撮影／倉本和人、太田孝二■進行／細谷　満■協力／トップ・クラフト

第43話『かぐや姫は／美人だ／ペッチャ』(1976年8月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、かぐや姫(山乃廣*美)、おじいさん(大久保正信)、若 武 者(康　晃人)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／今村立男■仕上／オニオン、竜仕上センター■特殊効果／永野知代枝
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／高野和雄

第44話『サルカニ合戦だ／ペッチャ』(1976年8月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、木江田博士(槐　柳二)、カ　　ニ(丸山裕子)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第45話『ジキル博士の／ナゾだ／ペッチャ』(1976年9月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／平　和元■演出／真下耕一、大貫信夫
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ジ キ ル(寺島幹夫)、メアリー(峰あつ子)、友田博士(池田　勝)
■原動画／坂口　尚、鎌田百合子、中島京子、渡辺いずみ
■背景／今村立夫■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第46話『マッチ売りの／少女だ／ペッチャ』(1976年9月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ア ン ナ(小竹外登美)、おばあさん(伊島幸子)、親　　方(大宮悌二)
■原動画／田中　享、多田　信、坂口　尚、渡辺いづみ
■背景／スタジオ・ビック■仕上／小野静子、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第47話『アラジンと／魔法のランプだ／ペッチャ』(1976年9月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／真下耕一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、アラジン(丸山裕子)、マッホー(飯塚昭三)、アラジンの母(山本与志恵)
■作画監督／窪　秀己■原動画／高橋幸江、加藤清美、小泉利子
■背景／今村立夫■仕上／小野静子、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／小林正典

第48話『足柄山の／金太郎だ／ペッチャ』(1976年9月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／大貫信夫、布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、金 太 郎(松島みのり)、母(加川三起)、貴　　族(北村弘一)
■原動画／坂口　尚、鎌田百合子、中島京子、渡辺いずみ
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、沢田早苗、山崗三重子
■撮影／小西一広、平山昭夫■進行／高野和雄

第49話『海さち山さち／仲直りだ／ペッチャ』(1976年10月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペ ラ 助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、海さち彦(玄田哲章)、山さち彦(三橋洋一)

■作画監督／田中英二■原動画／西城隆詞、池谷安夫、森中正春
■背景／今村立男■仕上／小野静子、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／石田昌久

第20話『イワンはウソを／いわない／ペッチャ』(1976年2月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山野　博■演出／案納正美、布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、イワン(沢田和子)、小悪魔(肝付兼太)、親　　方(渡辺　猛)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、鈴木信一、古川達也
■背景／アート・ノア、スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／石田昌久

第21話『そこのけ！／ドン・キホーテだ／ペッチャ』(1976年2月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／柳川　茂■演出／案納正美、布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ドン・キホーテ(千葉順二)、黒騎士(飯塚昭三)、母　　親(鈴木礼子)
■原動画／二宮常雄、湖川　滋、木下ゆうき
■背景／今村立男■仕上／小野静子、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／石田昌久

第22話『ピノキオの／大冒険だ／ペッチャ』(1976年2月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／秦泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ピノキオ(白川澄子)、バテレン(内海賢二)、親　　方(野本礼三)
■作画監督／田中英二■原動画／西城隆詞、山崎　茂、橋本一枝
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／嘉義良隆

第23話『黄門さまは／ステキだ／ペッチャ』(1976年3月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭■演出／案納正美、笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、水戸黄門(宮内幸平)、格さん(宮下　勝)、代　　官(塩見竜介)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／今村立男■仕上／小野静子、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／石田昌久

第24話『牛若丸と弁慶の／大決闘だ／ペッチャ』(1976年3月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、牛若丸(喜多道枝)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、弁　　慶(大宮悌二)、烏天狗(西川幾雄)、占い婆ア(赤木葉子)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、佐々木よし子、吉田正宏
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／新沼耕也、近江妙子、岸本房根
■撮影／アート・スタジオ
■協力／トップクラフト

第25話『出たぞ！／ロビンフッドだ／ペッチャ』(1976年3月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／金子　裕■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ロビン・フッド(池水通洋)、王　　子(千々松幸子)、ダンカン(増岡　弘)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、古川達也
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第26話『それ行け／やれ行け／宝島だ／ペッチャ』(1976年3月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／秦泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ジ　　ム(白川澄子)、シルバー(渡部　猛)、ジムの母(浜田寸躬子)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝
■背景／スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第27話『木江田博士を／発見だ／ペッチャ』(1976年4月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／案納正美、布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、オタケさん(遠藤　晴)、エンマ大王(加藤精三)、昆　虫　人(笹岡繁蔵)、罪人(西川幾雄)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／今村立男、スタジオ ビック■仕上／小野静子、金子マサ子、永野知代枝
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／小笠原誠紀

第28話『ジャックと豆の木／大騒動だ／ペッチャ』(1976年4月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／山田勝久
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、若い母(佐久間あい)、ジャック(丸山裕子)、母(藤　夏子)、大　　男(今西正男)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、佐々木よし子、河田章子
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／岸本房根、副馬理美子、野口昌子
■撮影／アート・スタジオ
■製作協力／トップ　クラフト

第29話『枯木に花を／咲かせる／ペッチャ』(1976年4月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／古川惣司■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、花咲か爺さん(宮内幸平)、ポ　　チ(田中　勝)、信　　長(池田　勝)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、古川達也
■背景／今村立男、スタジオ ビック■仕上／村田美知子、永野知代枝■特効／田中豊
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／かぎよしたか

第30話『赤頭巾ちゃん／気をつけてだ／ペッチャ』(1976年4月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／秦泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、木江田博士(槐　柳二)、赤ずきん(峰あつ子)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山崎　茂、橋本一枝
■背景／スタジオ・ビック■仕上／村田美知子、永野知代枝■特殊効果／佐藤広明
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第31話『夢みる／シンデレラ姫だ／ペッチャ』(1976年5月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、シンデレラ(麻上洋子)、母　　親(遠藤　晴)、王　　子(塩沢兼人)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、佐々木よし子、吉田正宏
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／新沼耕也、近江妙子、岸本房根
■撮影／アート・スタジオ
■協力／トップクラフト

第32話『未来の象さんを／守ろうペッチャ』(1976年5月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉川惣司■演出／案納正美、笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、新　　一(白川澄子)、オカーネギ(青森　伸)
■作画／田中　享、大鹿日出明、沼尻　東、鈴木康彦、堀池義治
■背景／今村立男■仕上／新沼耕也、近江妙子、岸本房根
■撮影／アート・スタジオ
■協力／トップクラフト

第33話『ビックリ!／天女は宇宙人だ／ペッチャ』(1976年5月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／真下耕一、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、チョロ坊(桂　玲子)、ペラ助(滝口順平)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ルナメ(増山江威子)、岩　　根(田中　勝)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／小野静子、金子マサ子、永野知代枝
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／小笠原誠紀

第34話『突撃！／ヤマタのオロチだ／ペッチャ』(1976年5月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／山田勝久
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(横沢啓子)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、木江田博士(槐　柳二)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、天照大神(柴田清子)、スサノオ(森　功至)、サクヤ姫(山乃廣*美)

(立壁和也)、先　　生(戸部光代)、金　　角(若本紀昭)、アルカモネ(千葉耕一)
■作画監督／飯野　皓■原動画／朝倉　隆、飯野　孝、外山一博、叶内孝行
■背景／スタジオビック■仕上／スタジオ・コルミ、若尾知子、大武正枝
■撮影／緒方プロ■進行／中島忠二

第5話『原始人はやさしい／ペッチャ』(1975年11月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／笹川ひろし
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、、グロッキー(八奈見乗児)、、ワルサー(立壁和也)、、長　　老(加藤　修)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／シャフト、富岡祐子、安藤明美
■撮影／緒方プロ■進行／嘉義良隆

第6話『海賊は／オウムが好きだ／ペッチャ』(1975年11月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／小山高男■演出／岡本良雄、布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、木江田博士(槐　柳二)、オタケさん(遠藤　晴)、コック船長(渡部　猛)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／スタジオ・コルミ、大武正枝、塩谷典子
■撮影／緒方プロ■進行／中島忠二

第7話『合図は／ひらけ ゴマだ／ペッチャ』(1975年11月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ハッサン(雨森雅司)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、アリジン(塚田正昭)、盗　　賊(千田光夫)、盗　　賊(笹岡繁蔵)(X)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／スタジオ・ビック■仕上／スタジオ・コルミ、大武正枝、塩谷典子
■撮影／緒方プロ■進行／中島忠二

第8話『大登場!／ジンギスカンだ／ペッチャ』(1975年11月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／山田勝久
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ジンギスカン(渡部　猛)、ドウモスカン(野沢雅子)、モンドール(肝付兼太)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、佐々木よし子、河田章子
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／岸本房根、副馬理美子、野口昌子
■撮影／アート・スタジオ
■製作協力／トップ　クラフト

第9話『西部の大決闘だ／ペッチャ』(1975年11月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ジ　　ム(村山　明)、ワイアットアープ(仲本隆司)、ゴロンボ(平林尚三)
■作画監督／田中英二■原動画／西城隆司、池谷安夫、森中正春
■背景／スタジオ・ビック■仕上／スタジオ・コルミ、ヤマトプロダクション■特殊効果／朝沼清良
■撮影／緒方プロ■進行／嘉義良隆

第10話『かっこいい忍者だ／ペッチャ』(1975年12月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭■演出／秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、猿飛佐助(安原義人)、真田幸村(加藤精三)、忍　　者(千田光夫)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、古川達也、鈴木信一
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／スタジオ・コルミ、ヤマトプロ
■撮影／緒方プロ、サンゴ礁■進行／小林正典

第11話『インカの宝みつけた／ペッチャ』(1975年12月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、皇　　帝(田村錦人)、王　　子(神谷　明)、ワリンカ(平林尚三)
■作画監督／飯野　皓■原動画／朝倉　隆、飯野　孝、外山一博、叶内孝行
■背景／桜井真理子、島谷　忍■仕上／スタジオ・オニオン、スタジオ・コルミ、ヤマトプロ
■撮影／緒方プロ■進行／嘉義良隆

第12話『モナリザの秘密だ／ペッチャ』(1975年12月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／桜井正明■演出／案納正美、布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、、グロッキー(八奈見乗児)、、ワルサー(立壁和也)、、ダビンチ(北村弘一)
■作画監督／田中英二■原動画／西城隆詞、山崎　茂、橋本一枝
■背景／スタジオ・ビック■仕上／シャフト、スタジオ・コルミ、スタジオ・オニオン
■撮影／緒方プロ■進行／小林正典

第13話『大沈没！／アトランティスだ／ペッチャ』(1975年12月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／岡本良雄、秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、メイル(杉山佳寿子)、ワルダー(鎗田順吉)、隊　　長(大山高男)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／今村立男■仕上／スタジオ・コルミ、ヤマトプロ
■撮影／緒方プロ、サンゴ礁■進行／小林正典

第14話『ドラキュラが出た／ペッチャ』(1976年1月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ドラキュラ(田中康郎)、友田博士(肝付兼太)
■作画監督／田中英二■原動画／西城隆詞、池谷安夫、森中正春
■背景／スタジオビック、マスコット■仕上／スタジオ・オニオン、スタジオ・コルミ、ヤマトプロ
■撮影／緒方プロ■進行／嘉義良隆

第15話『打ち出の／小づちを振る／ペッチャ』(1976年1月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、一寸法師(栗　葉子)、お姫さま(小宮和枝)、博　　士(中村武己)、コンピューター(仲木隆司)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、鈴木信一、古川達也
■背景／アート・ノア、スタジオ・ビック■仕上／スタジオ・オニオン、スタジオ・コルミ、ヤマトプロ
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／児玉八郎

第16話『ズッコケ!／ライト兄弟だ／ペッチャ』(1976年1月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山崎晴哉■演出／秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、木江田博士(槐　柳二)、役名表示なし(井関　一)(X)、ナリーキン(梓　欽造)
■原動画／二宮常雄、湖川　滋、木下ゆうき
■背景／今村立男■仕上／スタジオ・オニオン
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／小林正典

第17話『ドロロン!／五右衛門だ／ペッチャ』(1976年1月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美、秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ゴエモン君(白川澄子)、隊　　長(田口　昂*)
■作画監督／田中英二■原動画／西城隆詞、山崎　茂、橋本一枝
■背景／アート・ノア、スタジオ・ビック■仕上／小野静子、金子マサ子、市川あさ子
■撮影／平山昭夫、小西一広■進行／石田昌久

第18話『急げ!／白雪姫があぶない／ペッチャ』(1976年1月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／秦泉寺博
■声の出演[第1画面]／丹　　平(大田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ワルジョ(京田尚子)、白雪姫(栗　葉子)、王　　子(小宮山清)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／アート・ノア、スタジオ・ビック■仕上／永野知代枝、遠藤京子、佐藤信子
■撮影／結束義博、橋本和典■進行／児玉八郎

第19話『1000年後の／ロボット国だ／ペッチャ』(1976年2月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／布川郁司
■声の出演[第1画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペラ助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、浩　　二(丸山裕子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第2画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、ボスロボ(神山卓三)、ミケロボ(山本嘉子)、ワルロボ(寺島幹夫)

第20話『宇宙ロボット・ガニラ』(1975年11月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、ガ ニ ラ(西村知道)
■原画／二宮常雄■動画／井口忠一■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・オニオン
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第21話『対決!ぼうけん少女』(1975年11月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、ユ　　リ(杉山佳寿子)
■原動画／湖川　滋、鈴木康彦■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／金子マサコ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第22話『アンドロー危機*いっぱつ』(1975年11月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)
■原動画／木下ゆうき、井口忠一■美術設定／野々宮恒男■背景／今村立夫
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・オニオン■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／サンゴ礁■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第23話『ボルテッカ三段返し』(1975年12月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、管 制 員(小出和明)
■原画／須田正己■動画／多田　信■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／小野静子■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第24話『砕け!魔のお化けメカ』(1975年12月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、少　　年(浅井淑子)
■原動画／須田正己、木下ゆうき■美術設定／野々宮恒男■背景／今村立夫
■特殊効果／朝沼清良■仕上／小野静子■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第25話『ちびっ子勇者の挑戦』(1975年12月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、ジュピター(藤本　譲)、勝(浅井淑子)
■原画／二宮常雄■動画／井口忠一■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・オニオン■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄、石田昌久

第26話『勝利のテッカマン』(1975年12月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智、鳥海永行■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペ ガ ス(徳丸　完)、ジュピター(藤本　譲)、勝(浅井淑子)
■原画／須田正己、二宮常雄■美術設定／野々宮恒男■背景／今村立夫
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・オニオン■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄、石田昌久

タイムボカン

1975年10月４日～1976年12月25日(第１～61話)　毎週土曜18時30分～19時
＊1976年５月８日に第３話、1976年７月31日に第29話、1976年８月７日に第31話、1976年８月14日に第30話を再放映
フジテレビ系／30分カラー・全61話(全65回)

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、柳川　茂■原作／タツノコプロ企画室
■音楽／山本正之
■[主題歌]　作詩・作曲／市　　久、山本正之　協力／魔人社音楽工房
レコード／ワーナー・パイオニア
歌／山本正之、ロイヤルナイツ、サカモト児童合唱団
■総監督／笹川ひろし　小学館学習雑誌連載
■プロデューサー／柴田　勝、永井昌嗣■制作／◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■美術監督、メカニック デザイン／中村光毅■キャラクター デザイン／天野嘉孝
■美術担当／岡田和夫[1～18、37～61話]、野々宮恒男[19～36話]
■スキ・アニメート／東洋現像所 ビデオセンター
[19～36話は「スキアニメート」表記]
■録音ディレクター／水本　完[1～27話]、鳥海俊材[28～61話]、(ザック・プロモーション)
■録音／新坂スタジオ(高橋久義)
■効果／イシダサウンドプロ[1～27話]
イシダ・サウンド・プロ(加藤昭二)[28～61話]
■現像／東洋現像所
■編集／谷口　肇[1～50話]
戸田禮*子[14～20、51～61話] [51～61話は「戸田れい子」表記]
古川順康[51～61話]
■制作担当／横尾　潔、内間 稔(読広)、大野 実(読広)[以上、1～13、15、21～44話]
横尾　潔、内間　稔、(読広)、大野　実、(読広)[以上、14、16～20話]
鎌田正治、内間 稔(読広)、大野 実(読広)[以上、45～61話]
■制作／フジテレビ、◇タツノコ プロ

第１話『発進！／タイムボカンだ／ペッチャ』(1975年10月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、クリステン(横沢啓子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、木江田博士(槐　柳二)、オタケさん(遠藤　晴)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／桜井真理子、島谷　忍■仕上／スタジオ・コルミ、大武正枝、塩谷典子
■撮影／緒方プロ■進行／中島忠二

第２話『ギリシアの／ズッコケ戦争だ／ペッチャ』(1975年10月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、アレキサンダー大王(大竹　宏)、ダルイダス大王(和久井節緒)、隊　　長(加藤　修)
■作画監督／田中英二■原動画／水村十司、山口　聡、岸　義之
■背景／桜井真理子、島谷　忍■仕上／スタジオ・コルミ、山田恵己子、吉村プロ
■撮影／緒方プロ■進行／嘉義良隆

第３話『恐怖の／魔女狩りだ／ペッチャ』(1975年10月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭■演出／岡本良雄、佐々木皓一
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、クリステン(横沢啓子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー(立壁和也)、裁 判 長(田口　昂)、村　　長(島田　彰)、母　　親(畠山洋子)
■作画監督／窪　秀己■原動画／都丸　保、佐々木よし子、河田章子
■背景／田原優子、金子英俊■仕上／阿部信子、坂下優子、近江妙子
■撮影／アート・スタジオ■進行／中島忠二■協力／トップクラフト

第４話『へんてこ 西遊記だ／ペッチャ』(1975年10月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／秦泉寺博
■声の出演[第１画面]／丹　　平(太田淑子)、淳　　子(岡本茉利)、ペ ラ 助(滝口順平)、チョロ坊(桂　玲子)、ナレーター(富山　敬)
■声の出演[第２画面]／マージョ(小原乃梨子)、グロッキー(八奈見乗児)、ワルサー

■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、大統領(徳丸　完)、タスダルワ(石森達幸)
■原画／須田正己■動画／坂本英明■美術設定／小杉光芳■背景／島谷　忍
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・キリー■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第６話『月面アリ地獄』(1975年8月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ジュビダー(田中康郎)、管制員(徳丸　完)
■原画／湖川　滋■動画／井口忠一■美術設定／野々宮恒男■背景／宮川佳子
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・キリー■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第７話『宇宙輸送船Ｋ４３２』(1975年8月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、少　年(白川澄子)、隊　長(徳丸　完)
■原画／二宮常雄■動画／洋　燈　社■美術設定／小杉光芳■背景／宮川佳子
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・キリー■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第８話『宇宙の食人草』(1975年8月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、クリング(徳丸　完)、青葉博士(藤本　譲)
■原画／須田正己■動画／坂本英明■美術設定／小杉光芳■背景／アイ・プロ
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・キリー■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

239 第９話『宇宙忍者シノビーノ』(1975年8月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／群　幸司■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ブレーン(沢りつお)、クリング局長(徳丸　完)
■原画／湖川　滋■動画／石之博和■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄、広川和之

第10話『わんぱくテッカマン隊／大活躍』(1975年9月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロー梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ムータン(小宮和枝)、ナレーター(中江真司)、ビリー(塩谷　翼)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、技師長(徳丸　完)、ブレーン(沢りつお)、チビＡ(松原まき子)、ノッポＢ(鈴木れい子)、ホビー(中川まり子)
■原動画／兼森義則、及川博史、稲野義信、木下ゆうき
■美術設定／小杉光芳■背景／アイ・プロ
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博、緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第11話『失われた宇宙船』(1975年9月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、カレン(田浦　環)、ペガス(徳丸　完)
■原画／二宮常雄■動画／井口忠一■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／平山昭夫、緒方プロ■編集／谷口　肇
■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第12話『激突!ロボット軍団』(1975年9月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／坂本ひろし、鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペガス(徳丸　完)、所員Ａ(田口　昂)、部　下(窪田　等)
■原動画／湖川　滋、鈴木康彦■美術設定／小杉光芳■背景／アイ・プロ
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博、緒方プロ■編集／谷口　肇
■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第13話『決死の宇宙海戦』(1975年9月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペガス(徳丸　完)、ジュビダー(藤本　譲)、男　Ａ(曽我部和行)
■原画／須田正巳■動画／多田　信■美術設定／野々宮恒男■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／平山昭夫、緒方プロ■編集／谷口　肇
■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第14話『せまる巨大惑星』(1975年10月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ゲルマー大統領(緒方賢一)、ジュビダー長官(藤本　譲)、アクジェー博士(徳丸　完)
■原動画／木下ゆうき、吉田忠勝■美術設定／野々宮恒男■背景／今村立夫
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／平山昭夫、緒方プロ■編集／谷口　肇
■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第15話『地球人ぜんめつ作戦』(1975年10月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、クリング局長(徳丸　完)、ラ　ラ(沢田和子)
■原画／二宮常雄■動画／及川博史■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／平山昭夫、緒方プロ■編集／谷口　肇
■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第16話『ミクロ・アリ星人』(1975年10月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／田口章一■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、津村博士(木原正二郎)、美　子(斉藤昌子)、ユリ子(鵜飼るみ子)
■原動画／新田敏夫、谷沢　豊、石井康雄、鎌田百合子
■美術設定／野々宮恒男■背景／遠藤重義
■撮影／サンゴ礁■編集／谷口　肇■進行／四十八願恵子

第17話『宇宙怪鳥ヒヨクダー』(1975年10月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペガス(徳丸　完)、ギャブダー(藤本　譲)
■原動画／鈴木康彦、石之博和■美術設定／野々宮恒男■背景／今村立夫
■特殊効果／朝沼清良■仕上／小野静子■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第18話『大回転・テックランサー！』(1975年10月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、ペガス(徳丸　完)、アイス星人(小出和明)、警備兵(黒部　鉄)
■原画／須田正己■動画／多田　信■美術設定／小杉光芳■背景／アート・ノア
■特殊効果／朝沼清良■仕上／小野静子■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／結束義博■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第19話『宇宙ランド作戦』(1975年11月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／大貫信夫
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、カスタム(徳丸　完)、主　任(宮下　勝)
■原動画／湖川　滋、新田敏夫、石井康雄、中島京子
■編集／谷口　肇■撮影／サンゴ礁■美術設定／野々宮恒男■背景／遠藤重義
■進行／四十八願恵子

■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第98話『ターザンに／なったひよ』(1976年8月15日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／原 征太郎、西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、熊 さ ん
(立壁和也)、老　　人(矢田　稔)、ヨ イ チ(増岡　弘)、カ ア コ(松金よね子)
■作画／川端　宏、鈴木康彦、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、小野静子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／召田和子
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第99話『あこがれの／ハワイ旅行＊』(1976年8月22日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛 利 元■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、明　　美(麻生美代子)、南(玄田哲章)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、沢田早苗
■撮影／小西一広■編集／森田清次■進行／山田良一
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第100話『ひよの／動物大作戦』(1976年8月29日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／堀田 史門■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、校長先生
(野本礼三)、エンマ大王(玄田哲章)、ヨ イ チ(増岡　弘)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／ア　ク　ト、大坂竹志、伊藤幸松、藤島国夫、小柴重光、天野公子
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／緒方プロ■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第101話『ミニサーカスが／やってきた』(1976年9月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／出 崎 哲
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、南(田村錦人)、熊 さ ん(立壁和也)、所　　長(玄田哲章)
■作画／大鹿日出夫、野部駿夫、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、遠藤京子
■撮影／橋本和典■編集／森田清次■進行／徳永龍雄
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第102話『ひよの／ボーイフレンド』(1976年9月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／佐藤利男■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、静　　男
(喜多道枝)、そ の 母(戸部光代)、豪　　太(野沢雅子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／鈴木康彦、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、小野静子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／召田和子
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第103話『てんとう虫／幼稚園』(1976年9月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、の ぼ る(白川澄子)、そ の 母(佐久間あい)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、佐藤信子
■撮影／橋本和典■編集／森田清次■進行／山田良一
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第104話『ひびけ！／てんとう虫の歌』(1976年9月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／竹内進、鳥海尽三■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第２画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、休美の声(麻生美代子)、ヨ イ チ(増岡　弘)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、小野静子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／召田和子
■制作担当／中野政則、————、内間 稔(読広)、大野 実(読広)

宇宙の騎士 テッカマン

1975年７月２日～1975年12月24日(第１～26話)　毎週水曜19時～19時30分
＊第14話のみ、1975年10月3日(金)の18時～18時30分に放映
ＮＥＴ系／30分カラー・全26話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■製作／吉田竜夫■原作／竜の子プロ企画室■企画／鳥海尽三、陶山　智
■音楽／ボブ・佐久間■美術監督／中村光毅■ＳＦ考証／小隅　黎
■プロデューサー／宮崎慎一(ＮＥＴ)[14～26話]、九里一平
■総監督／笹川ひろし[1～13話]、鳥海永行[14～26話]
■[主題歌]　テッカマンのうた　スペースナイツの歌
作詞／竜の子プロ企画部　作曲／小林亜星
歌／水木一郎、コロムビアゆりかご会
■制作／ＮＥＴテレビ、タツノコ プロ■協力／第一広告社
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクター デザイン[表示は4話より]／天野嘉孝
■メカニック デザイン[表示は4話より]／大河原邦男
■アシスタント プロデューサー／鎌田正治 [4話以降は「現像」の後へ移動]
■録音ディレクター／本田保則、アーツプロ[4～26話]
[4話以降は「録　音 ディレクター」表記]
■効果／イシダサウンドプロ■録音[1～3話]／アーツプロ
■担当／永島敬一郎 [4話以降は「録　音 ディレクター」の後へ移動]
■スタジオ／整音スタジオ■現像／東洋現像所
■雑誌連載／たのしい幼稚園、冒険王、テレビマガジン、おともだち、ディズニーランド
■制作／ＮＥＴテレビ、タツノコ プロ■協力／第一広告社

第１話『太陽の勇者』(1975年7月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロー梅田(山田康雄)、、天地局長(内海賢二)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、南 の 父(鈴木泰明)、所　　員(徳丸完)、ナレーター(中江真司)
■原動画／タマプロダクション■美術設定／野々宮恒男■背景／桜井真理子
■色彩設定／岡嶋国敏■検査／仲　正美
■作画監修／二宮常雄■仕上／スタジオ・キリー■特殊効果／朝沼清良
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第２話『悪党星団／ワルダスター』(1975年7月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロー梅田(山田康雄)、、天地局長(内海賢二)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、平 部 長(伊武雅之)、ナレーター(中江真司)
■原動画／須田正己、塩山紀生■美術設定／野々宮恒男■背景／島谷　忍
■色彩設定／岡嶋国敏■仕上／スタジオ・キリー■特殊効果／朝沼清良
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄

第３話『影狩り宇宙人』(1975年7月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロー梅田(山田康雄)、、天地局長(内海賢二)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、宇宙人隊長(野本礼三)、ナレーター(中江真司)
■原動画／タマプロダクション■色彩設定／岡嶋国敏■美術設定／小杉光芳
■背景／宮川佳子■仕上／スタジオ・コルミ■特殊効果／朝沼清良
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■進行／小島幸雄■演出助手／広川和之

第４話『スペース・ナイツ誕生』(1975年7月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫、鳥海尽三■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／南　城二(森　功至)、天地ひろみ(上田みゆき)、アンドロ・梅田(山田康雄)、天地局長(内海賢二)、ナレーター(中江真司)
■声の出演[第２画面]／ランボス(滝口順平)、ドブライ(桑原たけし)、ムータン(小宮和枝)、宇宙人隊長(峰　恵研)、ペ ガ ス(徳丸　完)
■原画／二宮常雄■動画／須田　勝■美術設定／野々宮恒男■背景／桜井 真理子
■特殊効果／朝沼清良■仕上／スタジオ・コルミ■色彩設定／岡嶋国敏
■撮影／緒方プロ■編集／谷口　肇■演出助手／広川和之

第５話『アステロイド大作戦』(1975年7月30日放映)
〈エンディングクレジット〉

(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、ソーロク(玄田哲章)、カアコ(松金よね子)
■作画／木村圭一郎、鈴木康彦、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／マスコット■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第84話『ドスコイすもう旅』(1976年5月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利元■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、上り杉
(玄田哲章)、その母(遠藤　晴)、山　嵐(阪　脩)、熊さん(立壁和也)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、永野知代枝
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第85話『てんとう虫／大パーティー』(1976年5月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、平野巡査
(水鳥鉄夫)、伴先生(増岡　弘)、女先生(芝田清子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、小野静子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第86話『ガキ大将が／やってきた』(1976年5月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、健太郎
(駒村クリ子)、その母(浅井淑子)、大　介(兼本新悟)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、永野知代枝
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第87話『泳げ!日本一』(1976年5月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／竹内進■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、木　島
(城山知馨夫)、寺　村(水鳥鉄夫)、アナウンサー(玄田哲章)、伴先生(増岡　弘)
■作画／ア　ク　ト、大坂竹志、伊藤幸松、藤島国夫、小柴重光、天野公子
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第88話『ひよの潮干狩』(1976年6月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／原田益次■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、伴先生
(増岡　弘)、カアコ(松金よね子)、ソーロク(玄田哲章)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、永野知代枝
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第89話『さよなら／曽場先生』(1976年6月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／出崎　哲
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、曽場先生
(小宮和枝)、伴先生(増岡　弘)、その母(島美弥子)、うらら(栗　葉子)
■作画／大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、遠藤京子
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第90話『お姉ちゃんに／なったひよ』(1976年6月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、ガンちゃ
ん(杉山佳寿子)、そのママ(松金よね子)、金魚屋(野本礼三)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、沼尻　東、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、佐藤信子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第91話『ひよの／アゲハチョウ』(1976年6月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、一　郎
(野村道子)、二　郎(高橋和枝)、三　郎(白川澄子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／ア　ク　ト、大坂竹志、伊藤幸松、藤島国夫、小柴重光、天野公子
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第92話『走れ!／友情の船』(1976年7月4日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鷺山京子■演出／原征太郎、西久保利彦
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、ひさし
(喜多道枝)、その父(村松康男)、〃　母(荘司美代子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／川端　宏、野部駿夫、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、永野知代枝
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第93話『がんこ先生は／日本一』(1976年7月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、ソ　ネ(近藤高子)、村　長(増岡　弘)、医　者(水鳥鉄夫)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、遠藤京子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／山田良一
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第94話『正義の味方!／てんとう仮面』(1976年7月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利元■演出／原征太郎、西久保利彦
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、カラ兵衛
(立壁和也)、ソーロク(玄田哲章)、ベラスケ(水鳥鉄夫)、カアコ(松金よね子)
■作画／川端　宏、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、遠藤京子
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第95話『カラ兵衛の／ママ現わる』(1976年7月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利元■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、カラ兵衛
(立壁和也)、カアコ(松金よね子)、間　太(増岡　弘)、休　美(麻生美代子)
■作画／ア　ク　ト、大坂竹志、伊藤幸松、藤島国夫、小柴重光、天野公子
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／東京アニメーションフィルム■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第96話『ひよの／汽車ポッポ』(1976年8月1日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／竹内進■演出／出崎哲
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、信　吉
(野沢雅子)、大　造(増岡　弘)、カラ兵衛(立壁和也)、ベラスケ(水鳥鉄夫)
■作画／大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、佐藤信子
■撮影／橋本和典■編集／森田清次■進行／山田良一
■制作担当／中野政則、――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第97話『帰ってきた／金二郎』(1976年8月8日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、金二郎
(松金よね子)、金　太(大竹　宏)、うらら(栗　葉子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／野部駿夫、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、深沢　弓
■撮影／小西一広■編集／森田清次■進行／徳永龍雄

■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、一　郎(小宮山清)、その母(沢田敏子)、モモエ(麻生美代子)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／村田美知子
■撮影／緒方範生■編集／森田清次、三木幸子■進行／中野政則
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第70話『下町ワンちゃん／大行進』(1976年2月1日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、信　一(吉田理保子)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、ベラスケ(水鳥鉄夫)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、宮元万里子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第71話『けんかチビッコ剣士』(1976年2月8日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、坂　本(松尾佳子)、その父(兼本新吾)、春野博士(水鳥鉄夫)
■作画／木村圭一郎、鈴木康彦、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／マスコット■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第72話『それ打て!／ホームラン』(1976年2月15日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鷲山京子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、玉　野(小宮山清)、太　助(大竹　宏)、主　審(水鳥鉄夫)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、福山政敏、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／村田美知子
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第73話『もしも／大人になったなら』(1976年2月22日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、熊さん(立壁和也)、一　郎(納谷六朗)、美　智(野崎貴美子)、ギャング(芹川　洋)
■作画／沼尻　東、本多　哲、平山則雄、江村豊秋、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／小野静子
■撮影／緒方範生■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第74話『負けるな!／マラソン校長』(1976年2月29日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、校長先生(大竹　宏)、伴先生(増岡　弘)、春野博士(水鳥鉄夫)、うらら(栗　葉子)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／緒方範生■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第75話『自転車は／ぼくの夢』(1976年3月7日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、平　太(吉田理保子)、その父(矢田　稔)、医　者(大竹　宏)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、江村豊秋、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／永野知代枝
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第76話『熊さんの／恋人あらわる』(1976年3月14日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、熊さん(立壁和也)、その母(遠藤　晴)、太　助(大竹　宏)、仲　子(松金よね子)
■作画／木村圭一郎、鈴木康彦、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／マスコット■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第77話『東京は／ぼくらのふるさと』(1976年3月21日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／山本　優■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、間　太(増岡　弘)、休　美(麻生美代子)、熊さん(立壁和也)、運転手(横井光夫)
■作画／須田正己、福山政敏、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、永野知代枝
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第78話『ＵＦＯ[ユーフォー]が／やってきた!』(1976年3月28日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／竹内進■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、平野巡査(水鳥鉄夫)、モモエ(麻生美代子)、署　長(増岡　弘)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、沼尻　東、川端　宏、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、小野静子
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第79話『ひよの／お料理大修業』(1976年4月4日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、太　助(石丸博也)、仲　子(松金よね子)、平野巡査(水鳥鉄夫)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第80話『友情の土俵入り』(1976年4月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／米陀黎子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、太　田(神谷　明)、上り杉(横井光夫)、うらら(栗　葉子)、伴先生(増岡　弘)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、村田美知子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第81話『家族って／なんだろう？』(1976年4月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、ジロー(白川澄子)、その父(横井光夫)、〃　母(戸部光代)、平野巡査(水鳥鉄夫)
■作画／沼尻　東、大鹿日出明、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／金子マサ子、鈴木まり子
■撮影／平山昭夫■編集／森田清次■進行／和久田俊文
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)

第82話『おれは／キャプテン!』(1976年4月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、桜　井(塩谷　翼)、天　吉(田中亮一)、花　菱(森　功至)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、松宮正純、山口あきら■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／中野政則、―――――、内間稔(読広)、大野実(読広)
(注記)「塩谷　翼」はクレジット表示ママ。

第83話『雪山に／消えたひよ』(1976年5月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、カラ兵衛

第55話『さようなら！／金二郎』(1975年10月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／原 征太郎
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、金 二 郎
(松金よね子)、金　　太(大竹　宏)、か　　ね(戸部光代)、う ら ら(栗　葉子)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／緒方範生■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第56話『お見合いだよ！／おじいちゃん』(1975年10月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、モ モ エ(麻生美代子)、太　　助(大竹　宏)、仲　　子(松金よね子)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第57話『わんぱく／長ぐつ大将』(1975年11月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利 元■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、ひよし丸
(菅谷政子)、和　　尚(千葉順二)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第58話『トランプうらない／大さわぎ』(1975年11月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、モ モ エ
(麻生美代子)、太　　助(大竹　宏)、仲　　子(松金よね子)、平野巡査(水鳥鉄夫)
■作画／木村圭一郎、高倉建夫、綾部重夫、高橋のぼる
■背景／マスコット■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第59話『もらわれて行ったひよ』(1975年11月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／原 征太郎
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、小　　梨
(山内雅人)、そ の 妻(前田敏子)、平野巡査(水鳥鉄夫)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／沼尻　東、毘進之介、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／結束義博■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第60話『おしかけ／モモエ婆ちゃん』(1975年11月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／久岡敬史
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、モ モ エ(麻生美代子)、太　　助(大竹　宏)、仲　　子(松金よね子)
■作画／木村圭一郎、高倉建夫、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／尾山星一■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／剣持　大
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第61話『泣き虫大どろぼう』(1975年11月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武 末　勝■演出／西牧 秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、ガ ン 太(増岡　弘)、ジ ョ ー(野島昭生)、平野巡査(水鳥鉄夫)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／村田美知子
■撮影／緒方範生■編集／森田清次、三木幸子■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第62話『モデルになった／月美姉ちゃん』(1975年12月7日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／竹 内　進■演出／西牧 秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、理　　絵
(栗　葉子)、ス　　ミ(荘司美代子)、カメラマン(曽我部和行)、モ モ エ(麻生美代
子)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第63話『がんばれ!／土丸たんてい』(1975年12月14日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／原 征太郎
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、ゴン太郎
(浅井淑子)、そ の 妹(杉山 佳寿子)、生　　徒(野沢マキ)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／沼尻　東、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／村田美知子
■撮影／緒方範生■編集／森田清次、三木幸子■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第64話『ひよの／一日セールスマン』(1975年12月21日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／笹川ひろし■演出／笹川ひろし(X)
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、牛 太 郎
(立壁和也)、馬 さ ん(青野　武)、ヨ イ チ(増岡　弘)、ソーロク(大竹　宏)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／村田美知子
■撮影／緒方範生■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第65話『父ちゃんは名スター』(1975年12月28日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／西牧 秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、キ ミ 子
(菅谷政子)、市 九 郎(増岡　弘)、座　　長(平井道子)、男 の 子(吉田理保子)
■作画／大坂竹志、遠藤裕一、伊藤幸松、天野公子、藤島国夫、小柴重光
■背景／窪田忠雄、加藤隆文、宮元万里子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次、三木幸子■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第66話『ハトよ はばたけ!』(1976年1月4日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／すずきよしたけ■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、東吾少年
(平井道子)、カラ兵衛(立壁和也)、カ ア コ(松金よね子)、ソーロク(大竹　宏)
■作画／木村圭一郎、綾部重夫、高橋のぼる、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／マスコット■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／剣持　大
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第67話『100点だよ！／火児にいちゃん』(1976年1月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／堀田 史門■演出／西牧 秀雄
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、石　　田
(野島昭生)、伴 先 生(増岡　弘)、う ら ら(栗　葉子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大鹿日出明、川端　宏、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／小野静子
■撮影／結束義博■編集／森田清次、三木幸子■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第68話『いなかっぺ大将が／やってきた』(1976年1月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／毛利 元■演出／原 征太郎
■声の出演[第1画面]／日 曜 子[ひ よ こ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金 太 郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄 之 助
(大平　透)、大ちゃん(野沢雅子)、主　　将(神谷　明)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／沼尻　東、福山政敏、本多　哲、平山則雄、江村豊秋
■背景／横瀬直人■仕上／永野知代枝
■撮影／緒方範生■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／中野政則
■制作担当／内間 稔(読広)、大野 実(読広)

第69話『おにぎり の 歌』(1976年1月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原 征太郎

■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第41話『夏休みだよ！／移動動物園』(1975年7月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、熊さん(立壁和也)、園　　長(宮内幸平)、馬　　主(水鳥鉄夫)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第42話『ちびっ子ゲタっ子／長靴っ子』(1975年7月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／堀田史門■演出／上梨満*雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、ひよ太郎
(喜多道枝)、その父(永井一郎)、熊さん(立壁和也)、園　　長(宮内幸平)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第43話『お山の大将／オレひとり』(1975年7月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／笹川ひろし■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、太　　郎
(小宮山清)、次　　郎(杉山佳寿子)、戸呂呂(北村弘一)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／杉野昭夫、、大坂竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／大野実(読広)

第44話『はじめての／海*水浴』(1975年8月3日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／田沢あき■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、市　　長
(大竹　宏)、奥さん(浅井淑子)、大五郎(栗　葉子)、先　　生(水鳥鉄夫)
■作画／田中　享、、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／大野実(読広)

第45話『嵐の中の／ゴールイン』(1975年8月10日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高男■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、たみ子
(栗　葉子)、お婆さん(沼波輝枝)、船　　長(杉田俊也)、園　　長(宮内幸平)
■作画／杉野昭夫、、遠藤裕一、みぶおさむ、靈城　愛
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／大野実(読広)

第46話『けったいな／お婆ちゃん』(1975年8月17日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、お婆ちゃ
ん(川路夏子)、チャコ(杉山佳寿子)、五　　平(水鳥鉄夫)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／川端　宏、昆進之介、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／大野実(読広)

第47話『ひとりぼっちの／お使い』(1975年8月24日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／松岡清治■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、外　　人(津嘉山正種)、ベラスケ(水鳥鉄夫)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／大野実(読広)

第48話『友情の／やぐら太鼓』(1975年8月31日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／島惇一■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、上り杉
(兼本新悟)、磯の海(大竹　宏)、荒波親方(増岡　弘)、アナウンサー(千田光男)
■作画／杉野昭夫、、大坂竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第49話『ゆうれいが／出たァ!!』(1975年9月7日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、ミ　　コ
(菅谷政子)、お婆さん(沼波輝枝)、金二郎(松金よね子)、金魚屋(大竹　宏)
■作画／沼尻　東、大鹿日出明、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第50話『お面一本！／おじいちゃん』(1975年9月14日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、小次郎(村山　明)、伴先生(増岡　弘)、金二郎(松金よね子)
■作画／田中　享、、本多　哲、平山則雄
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第51話『ペットは友だち』(1975年9月21日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西牧秀雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、キヨシ
(白川澄子)、その父(増岡　弘)、　〃　母(佐久間あい)、熊さん(立壁和也)
■作画／杉野昭夫、、大坂竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第52話『みんなの／サイクリング・コース』(1975年9月28日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／柳川茂■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、金　　太(大竹　宏)、金二郎(松金よね子)、お婆さん(京田尚子)
■作画／川端　宏、大鹿日出明、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／緒方範生■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第53話『友情のメダル』(1975年10月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高男■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、金二郎
(松金よね子)、伴先生(増岡　弘)、うらら(栗　葉子)、か　　ね(戸部光代)
■作画／木村圭一郎、高倉建夫、綾部重夫、高橋のぼる
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第54話『山寺の／モーレツ修行』(1975年10月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　　美(岡本茉利)、
火　　児(安原義人)、水　　男(山本嘉子)、木　　介(山下啓介)
■[声の出演][第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、三　　休(増岡　弘)、和　　尚(田村錦人)、観音さま(麻生美代子)
■作画／沼尻　東、昆進之介、本多　哲、福山政敏
■背景／横瀬直人■仕上／田中孝夫
■撮影／緒方範生■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、モモエ(麻生美代子)、太　助(大竹　宏)、仲　子(松金よね子)
■作画／木村圭一郎、高倉建夫、金山八郎、渡辺秀雄
■背景／尾山星一■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次、戸田禮*子■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第27話『幸せを／テニスにかけろ』(1975年4月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、すみれ(塚*田恵美子)、その父(嶋　俊介)、〃　母(荘司美代子)、うらら(栗　葉子)
■作画／田中　享、大鹿日出明、沼尻　東、本多　哲、井口忠一
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第28話『金太郎は／だれの子？』(1975年4月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／笹川ひろし■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、おばさん(島美弥子)、間　太(増岡　弘)、休　美(麻生美代子)
■作画／杉野昭夫、大阪竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／永山邦明
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第29話『幼稚園は／ひょの夢』(1975年4月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海*尽三■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、園　長(沢田敏子)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)
■作画／大鹿日出明、沼尻　東、清山滋崇、田中　享
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第30話『オニババが／やってきた』(1975年4月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、おばさん(京田尚子)、カラ兵衛(立壁和也)、ベラスケ(水鳥鉄夫)
■作画／杉野昭夫、遠藤裕一、みぶおさむ、霊城　愛
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／永山邦明
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第31話『月美姉ちゃんの／誕生日』(1975年5月4日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、カアコ(松金よね子)、ベラスケ(水鳥鉄夫)
■作画／川端　宏、沼尻　東、清山滋崇、大鹿日出明
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第32話『教育ママを／ぶっとばせ!』(1975年5月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、トミ夫(野村道子)、その母(栗　葉子)、塾　長(大竹　宏)
■作画／塩山紀生、加藤　茂、木下ゆうき、福山政敏
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　ク■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第33話『おてんば／ひょ姫』(1975年5月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、間　太(増岡　弘)、休　美(麻生美代子)、鉄之助(大平　透)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／杉野昭夫、大阪竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第34話『おさがりは／イヤだ！』(1975年5月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／松岡清治■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、休　美(麻生美代子)、鉄之助(大平　透)、金二郎(松金よね子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、井口忠一、本多　哲、平山則雄
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第35話『親孝行って／なんだ？』(1975年6月1日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高*男■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、熊さん(立壁和也)、その母(遠藤　晴)、三　吉(駒村クリ子)、校　長(大竹　宏)
■作画／杉野昭夫、遠藤裕一、みぶおさむ、霊城　愛
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第36話『ハリキリ／ひょ婦*警』(1975年6月8日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、金二郎(松金よね子)、婦警さん(弥永和子)、お婆さん(川路夏子)、コソ泥(水鳥鉄夫)
■作画／沼尻　東、大鹿日出明、本多　哲、石之博和
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第37話『ずっこけ／カウボーイ金太郎』(1975年6月15日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、牛太郎(神山卓三)、羊　子(島木綿子)、浅田先生(水鳥鉄夫)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／杉野昭夫、大坂竹志、伊藤幸松、天野公子
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第38話『海のガキ大将』(1975年6月22日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、ガキ大将(野沢雅子)、ミドリ(貴家堂子)、その母(遠藤　晴)、伴先生(増岡　弘)
■作画／川端　宏、塩山紀生、本多　哲、井口忠一
■背景／島谷　忍■仕上／須永友子
■撮影／中野政則■編集／森田清次■進行／横尾　潔
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第39話『ダンプ父ちゃんの／子守うた』(1975年6月29日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武内進■演出／西牧秀雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、正　助(内海賢二)、金二郎(松金よね子)、か　ね(戸部光代)、巡　査(水鳥鉄夫)
■作画／杉野昭夫、遠藤裕一、みぶおさむ、霊城　愛
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／斉藤昭一郎
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第40話『負けるな／ラーメンお爺さん』(1975年7月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、金二郎(松金よね子)、か　ね(戸部光代)、うらら(栗　葉子)
■作画／田中　享、本多　哲、平山則雄

■脚本／落合茂一■演出／笹川ひろし
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、ソーロク(大竹　宏)
■作画／清山滋崇、沼尻　東、岡　豊
■背景／桜井真理子、島谷　忍■仕上／スタジオ・キリー、田中孝夫
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第13話『負けるな！／でっかい夢くらべ』(1974年12月29日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／出崎哲
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、ゴン太
(野沢雅子)、三　休(塩谷　翼)、コソドロ(俵　一)、金　太(大竹　宏)
■作画／大阪竹志、伊藤幸松、清水恵蔵
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／林富士男
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第14話『ひよママの／子守唄』(1975年1月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一、鳥海*尽三■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、赤ちゃん
(千々松幸子)、父　親(曽我部和行)、巡　査(俵　一)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／みぶおさむ、田中　享、加藤誠一
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／スタジオ・古留美、須永友子
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第15話『ゲンコツばかりが／男じゃない』(1975年1月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／出崎　哲
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、拳(津嘉
山正種)、源さん(立壁和也)、新聞店主(水鳥鉄夫)、金二郎(松金よね子)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／多田喜久子、アップルズ■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第16話『走れ！／てんとう虫きょうだい』(1975年1月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／布川郁司
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、まもる
(桂　令子)、その母(荘司美代子)、うらら(栗　葉子)、金二郎(松金よね子)
■作画／清山滋崇、沼尻　東、大鹿日出明
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／スタジオ・キリー、仲　正美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第17話『ちっちゃな／お手伝いさん』(1975年1月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／寺田和男
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、校　長
(大竹　宏)、奥さん(島美弥子)、伴先生(増岡　弘)、金二郎(松金よね子)
■作画／佐々角信芳、山崎和男、長谷川稔
■背景／宮野　隆、スタジオ・ユニ■仕上／アド・リブ
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／芝野達弥
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第18話『父ちゃんのゲタは／ひよのゲタ』(1975年2月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、間　太
(増岡　弘)、休　美(麻生美代子)、鈍　吉(倉口佳三)、金二郎(松金よね子)
■作画／みぶおさむ、霊城　愛、加藤誠一
■背景／多田喜久子、アップルズ■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第19話『集まれ！／七つの流れ星』(1975年2月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／坂本ひろし、鳥海*尽三■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、曽場先生(小宮和枝)、校長先生(大竹　宏)、医　者(立壁和也)
■作画／田中　享、阿部　司、玉沢君子
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　グ■仕上／スタジオ・古留美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第20話『父ちゃんの／動物園を守れ！』(1975年2月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／柳川茂■演出／出崎哲
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、熊さん
(立壁和也)、園　長(神山卓三)、金二郎(松金よね子)、コック(横井光夫)
■作画／大阪竹志、伊藤幸松、清水恵蔵
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／林富士男
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第21話『父ちゃんは／つらいよ』(1975年2月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／寺田和男
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、間　太
(増岡　弘)、熊さん(立壁和也)、うらら(栗　葉子)、金二郎(松金よね子)
■作画／進藤満尾、玉沢　武、長谷川稔
■背景／宮野　隆、スタジオ・ユニ■仕上／アド・リブ
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次
■進行／善名良行■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第22話『カラ兵衛たちも／家族だよ』(1975年3月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺田信義■演出／原征太郎
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、カラ兵衛
(立壁和也)、ソーロク(大竹　宏)、ヨイチ(増岡　弘)、カアコ(松金よね子)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　ク■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次
■進行／剣持　大■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第23話『家出しちゃった／ひよ』(1975年3月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／宮原和男■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、栃成金太(大竹　宏)、〃かね(戸部光代)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／清山滋崇、沼尻　東、大鹿日出明
■背景／岡田和夫、アップルズ■仕上／スタジオ・キリー、仲　正美
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第24話『ハロー!／アメリカのママ』(1975年3月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／出崎　哲
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、明　美(麻生美代子)、パ　パ(水鳥鉄夫)、母　親(松金よね子)
■作画／大阪竹志、伊藤幸松、清水恵蔵
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／林富士男
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第25話『ぼくらは／大スター』(1975年3月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■声の出演[第２画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助
(大平　透)、うらら(栗　葉子)、熊さん(立壁和也)、金二郎(松金よね子)
■作画／みぶおさむ、霊城　愛、加藤誠一
■背景／岡田和夫、ビ　ッ　ク■仕上／アート・スタジオ
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第26話『熊さんの／お嫁さんやーい』(1975年3月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、

てんとう虫の歌

1974年10月6日～1976年9月26日(第1～104話)　毎週日曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・全104話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正AR台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(AR台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　ぼくら きょうだい てんとう虫
　原作詞／川崎のぼる　作詞／若林一郎　作曲／菊池俊輔　歌／堀江美都子
　コロムビア・レコードSCS-238　C*　小学館プロダクション
■原作／川崎のぼる、小学館学習雑誌連載
■企画／鳥海尽三、小山高男[1～55、58話]、酒井あきよし[56、57、59～104話]
■音楽／菊池俊輔■総監督／笹川ひろし■制作／◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■主題歌
　ぼくら そろって一週間
　作詞／若林一郎　作曲／菊池俊輔　歌／こおろぎ'73、ヤング・フレッシュ
　コロムビア・レコードSCS-238　C*　小学館プロダクション[以上、1～82話]
　ひよこでしゅら
　作詞／若林一郎　作曲／菊池俊輔　歌／堀江美都子
　コロムビア・レコードSCS-298[以上、83～104話]
■作画監督[1～25話]／林　政行、川端　宏、源田秀夫■美術／多田喜久子
■録音ディレクター／斯波重治■効果／イシダ・サウンドプロ
■録音／オムニバス・プロ、桑原邦男、読広スタジオ■現像／東京現像所
■プロデューサー／永井昌嗣■アシスタント プロデューサー[1～73話]／栃平吉和
■制作デスク[74～104話]／栃平吉和
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ[以上、1話]
　　　◇タツノコプロ[2～104話]
■協力／フジテレビ

第1話『きょうだいそろって／ドンといけ!』(1974年10月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、父(増岡　弘)、母(麻生美代子)、カラ兵衛(立壁和也)、ソーロク(大竹　宏)
■原動画／清山滋崇、沼尻　東、内海勇夫
■背景／桜井真理子、島谷　忍■仕上／向井　稔■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／栃平吉和
■制作担当／内間稔(読広)

第2話『ぼくらきょうだい／てんとう虫』(1974年10月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、カアコ(松金よね子)
■作画／ア　ク　ト、清山滋崇、沼尻　東
■背景／岡田和夫、アイプロ■仕上／スタジオ・古留美、スタジオ・オニオン
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／中野政則
■制作担当／大野実(読広)

第3話『できたぞ!／天下のちびっ子ホーム』(1974年10月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、栃成金太(大竹　宏)、金二郎(松金よね子)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／田中　享、内海勇夫、五沢君子
■背景／多田喜久子、アップルズ■仕上／スタジオ・キリー、須永友子
■撮影／コスモス■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第4話『授業参観だよ!／火児父ちゃん』(1974年10月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高男■演出／原征太郎
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、カラ兵衛(立壁和也)、伴先生(増岡　弘)、浅田先生(大竹　宏)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／岡田和夫、アイプロ■仕上／松島克子、横山美智子
■撮影／加藤昭治■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第5話『アルバイトだよ!／全員集合』(1974年11月3日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、カラ兵衛(立壁和也)、ヨイチ(増岡　弘)、曽場先生(小宮和枝)
■作画／清山滋崇、沼尻　東、黒川　豊
■背景／アップルズ、桜井真理子■仕上／スタジオ・古留美、須永友子
■撮影／コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第6話『指きりげんまん／さようなら』(1974年11月10日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、みどり(小宮和枝)、金二郎(松金よね子)、ガキ大将(大竹　宏)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／みぶおさむ、霊城　愛、加藤誠一
■背景／岡田和夫、プロダクションわーと■仕上／前川康子、堀口ひとみ
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第7話『日本晴れ!／修学旅行』(1974年11月17日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／出崎　哲
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、チャコ(杉山佳寿子)、その父(水鳥鉄夫)、伴先生(増岡　弘)、カラ兵衛(立壁和也)
■作画／大阪竹志、伊藤幸松、清水恵蔵
■背景／窪田忠雄、迎　陽子■仕上／篠田公恵、加藤貴代美
■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次■進行／林富士男
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第8話『たたされ大将／火児兄ちゃん』(1974年11月24日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、伴先生(増岡　弘)、校　長(大竹　宏)、栃成かね(戸部光代)、金二郎(松金よね子)
■作画／田中　享、阿部　司、玉沢君子
■背景／アップルズ、多田喜久子■仕上／アート・スタジオ、亀井知津子
■撮影／加藤昭治■編集／森田清次■進行／剣持　大
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第9話『勝利の／ノックダウン』(1974年12月1日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三、永田俊夫■演出／上梨満雄
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、うらら(栗　葉子)、その父(水鳥鉄夫)、錠(田中秀幸)、金二郎(松金よね子)
■作画／アニメ・ルーム、八武崎好郎、安部正己
■背景／岡田和夫、プロダクションわーと■仕上／スタジオ・キリー、嶋崎吏之
■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次■進行／青木直行
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第10話『幸福の／えんどう豆』(1974年12月8日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／出崎　哲
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、おばさん(麻生美代子)、現場監督(水鳥鉄夫)、金二郎(松金よね子)
■作画／みぶおさむ、霊城　愛、加藤誠一
■背景／アップルズ、多田喜久子■仕上／スタジオ・古留美、須永友子
■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第11話『大失敗!／土丸たんてい』(1974年12月15日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末勝■演出／布川ゆうじ
■声の出演[第1画面]／日曜子[ひよこ](松島みのり)、月　美(岡本茉利)、
　火　児(安原義人)、水　男(山本嘉子)、木　介(山下啓介)
■[声の出演[第2画面]／金太郎(つかせのりこ)、土　丸(丸山裕子)、鉄之助(大平　透)、おじさん(大竹　宏)、司会者(立壁和也)、ベラスケ(水鳥鉄夫)
■作画／田中　享、大鹿日出明、黒川　豊
■背景／多田喜久子、アップルズ■仕上／アート・スタジオ、亀井知津子
■撮影／加藤昭治■編集／森田清次■進行／加藤　博
■制作担当／内間稔(読広)、大野実(読広)

第12話『サンタが／わが家にやってきた』(1974年12月22日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉

第13話『幻影 おぼろ蝶』(1974年12月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／おぼろ蝶(二見忠男)、警　　部(徳丸　完)、警 備 員(笹岡繁蔵)、紳　　士(石井敏郎)
■原動画／石山卓也、寺田直明
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／嘉義良隆

第14話『ちゅうちゅう大作戦』(1975年1月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／どぶねずみ(永井一郎)、ハラグロ(野本礼三)、警　　部(徳丸　完)、侍　　女(宮崎恵子)、警 備 員(笹岡繁蔵)
■原動画／谷口守泰、池田順一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／小島幸雄

第15話『稲妻怪人 ピカデール』(1975年1月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ピカデール(石井敏郎)、老　　婆(島木綿子)、デレット警部(徳丸　完)、警　　官(笹岡繁蔵)、警　　官(宮下　勝)
■原動画／須田正己、塩山紀生
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／嘉義良隆

第16話『獣魚海*賊／ピーラカンス』(1975年1月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／隊長・ピーラカンス(滝口順平)、幹　　部(徳丸　完)、警　　官(笹岡繁蔵)、船　　員(村山　明)、女　　1(佐々間あい)
■原動画／西城隆詞、水村十司
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第17話『ポリマー誕生の秘密』(1975年1月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／鬼トカゲ首領(木原正二郎)、オレガー博士(徳丸　完)、ルンバ・リー(笹岡繁蔵)、、ナレーター(中江真司)
■原動画／高橋資祐、奥野芳久
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／鎌田正治

第18話『マイナス５０度の危機』(1975年1月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／富野喜幸
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／コーリー(桑原たけし)、デレット(徳丸　完)、部　　下(笹岡繁蔵)、フオンテイン(宮崎恵子)
■原動画／湖川　滋、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／鎌田正治

第19話『えん魔怪人／ベロダッセ』(1975年2月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ベロダッセ(滝口順平)、デレット(徳丸　完)、刑　　事(笹岡繁蔵)、警　　官(宮下　勝)
■原動画／西城隆詞、水村十司
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第20話『怪盗てっぽう魚人』(1975年2月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ドクターイエス(北村弘一)、デレット(徳丸　完)、リーダー(若本紀夫)、魚　　人(笹岡繁蔵)
■原動画／須田正己、塩山紀生
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／小島幸雄

第21話『コンコン七[しち]変化』(1975年2月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／銀　　狐(来宮良子)、ミッチー首領(水沢有美)、デレット(徳丸　完)、警　　官(田中　昴*)、隊　　員(笹岡繁蔵)
■原動画／西城隆詞、水村十司
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第22話『復讐鬼ケラカブト』(1975年2月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／田口章一■演出／富野喜幸
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／カブト団首領(渡部　猛)、ウイリアム(森　功至)、デレット警部(徳丸　完)、警　　官(笹岡繁蔵)
■原動画／湖川　滋、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／鎌田正治

第23話『海*底魔人／ウオトンビ』(1975年3月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ウオトンビ隊長(今西正男)、幹　　部(徳丸　完)、操 縦 士(宮下　勝)、警 備 隊(笹岡繁蔵)、アナウンサー(宮崎恵子)
■原動画／谷口守泰、池田順一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／嘉義良隆

第24話『怪傑タコ仮面』(1975年3月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／高橋資祐
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／アルセーヌ・パポン(仲村秀生)、タコ仮面(野本礼三)、伯爵ヨクバリー(飯塚*昭三)、執　　事(徳丸　完)、警　　官(笹岡繁蔵)
■原動画／高橋資祐、塩山紀生
■美術設定／小杉光芳■背景／新井寅雄■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治

第25話『海亀将軍 ベッコーダー』(1975年3月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／島　順一■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／将　　軍(内海賢二)、コーモリ男(石森達幸)、デレット(徳丸　完)、アイアンショット博士(石井敏郎)、警 備 員(笹岡繁蔵)
■原動画／須田正己、西城隆詞
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／緒方範生■編集／三木幸子■進行／小島幸雄

第26話『ポリマー最後の決戦』(1975年3月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、久保田圭司■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／将　　軍(内海賢二)、コーモリ男(石森達幸)、デレット(徳丸　完)、警　　官(笹岡繁蔵)
■原動画／湖川　滋、西城隆詞
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／緒方範生■編集／三木幸子■進行／嘉義良隆

破裏拳ポリマー

1974年10月４日～1975年３月28日(第１～26話)　毎週金曜18時～18時30分
ＮＥＴ系／30分カラー・全26話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　戦え！ポリマー
作詩／鳥海尽三　作曲／菊地俊輔　歌／ささきいさお、コロムビアゆりかご会
■たのしい幼稚園、冒　険　王他連載
■原作／吉田竜夫、タツノコプロ企画室■企画／鳥海尽三、酒井あきよし
■キャラクター デザイン／吉田竜夫、天野喜孝
■メカニック デザイン／中村光毅、大河原邦男
■音楽／菊地俊輔■音響制作／アーツプロ■効果／イシダサウンドプロ
■総監督／鳥海永行
■プロデューサー／宮崎慎一(ＮＥＴ)、佐藤光雄、衛藤公彦(萬年社)
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■[主題歌]　転身ポリマー
作詩／酒井あきよし　作曲／菊地俊輔　歌／ささきいさお、コロムビアゆりかご会
■作画監督／二宮常雄■美術監督／中村光毅
■色彩設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良
■録音ディレクター／本田保則■録音／早稲田アバコスタジオ
■現像／東洋現像所■アシスタント プロデューサー／鎌田正治
■制作／Ｎ　Ｅ　Ｔ、タツノコプロ、萬年社
(注記)「菊地俊輔」はクレジット表示ママ

第１話『怪盗むささび党』(1974年10月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／首領ゴルダー(家弓家正)、むささび党(田口　昂*)、むささび党(笹岡繁蔵)、警備隊長(徳丸　完)、アナウンサー(宮崎恵子)
■原動画／西城隆詩、湖川　滋
■美術設定／野々宮恒人■背景／小杉光芳
■仕上／館野透治
■撮影／森口洋輔■編集／谷口　肇
■進行／大平秀明

第２話『暗殺鬼紅さそり』(1974年10月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／紅サソリ(鈴木弘子)、ナバニー(石森達幸)、大 頭 領(石井敏郎)、デレット警部(徳丸　完)、手　　下(笹岡繁蔵)
■原動画／加藤　茂、塩山紀生
■美術設定／野々宮恒人■背景／小杉光芳■仕上／館野透治
■撮影／森口洋輔■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治

第３話『メカギャング／むかで作戦』(1974年10月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ハンドレッド(木原正二郎)、市　　長(藤本　譲)、助手(徳丸　完)、運 転 手(田口　昂*)、警　　官(笹岡繁蔵)
■原動画／水村十司、池谷安夫
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／森口洋輔■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第４話『とぐろ魔王ガラガラ蛇』(1974年10月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ジュニア(小宮山　清)、蛇 仮 面(村松康雄)、王　　女(麻上洋子)、ママ・ジュニア(花形恵子)、幹　　部(笹岡繁蔵)
■原動画／高橋資祐、奥野芳久
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／森口洋輔■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治

第５話『糸ぐる魔人土ぐも』(1974年11月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ラウン国王(上田敏也)、王　　妃(菊地紘*子)、クモーダ(徳丸　完)、外 交 官(水鳥鉄夫)、ソッキーン(藤城裕士)
■原動画／西城隆詞、山口　聡
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／篠田成大

第６話『メカ変化もぐら盗賊団』(1974年11月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／富野喜幸
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ハカアラース教授(千葉耕一)、署　　長(飯塚*昭三)、秘　　書(伊武雅之)、カ セ ム(田中　昴*)、ダンサー(宮崎恵子)
■原動画／谷口守泰、池田順一
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第７話『わんわん カムキラー』(1974年11月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／サ リ ー(火野捷子)、ギルゾー(徳丸　完)、ブラックジャック(田中康郎)、秘　　書(伊武雅之)、諜 報 員(笹岡繁蔵)
■原動画／加藤　茂、塩山紀生
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治

第８話『溶解マシン ウツボーラ』(1974年11月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ラード博士(兼本新吾)、研究所長(石井敏郎)、ホット博士(野本礼三)、部　　下(笹岡繁蔵)
■原動画／西城隆詞、山口　聡
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／小島幸雄

第９話『猫魔団 闇に踊る』(1974年11月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／首　　領(仁内達之)、ジツシャック博士(塚*田正昭)、乃見野博士(徳丸　完)、部　　下(笹岡繁蔵)
■原動画／須田正己、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第10話『電魔団 クラゲラー』(1974年12月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／隊長・クラゲラー(加藤精三)、執　　事(徳丸　完)、部　　下(笹岡繁蔵)、部　　下(木戸太一)
■原動画／西城隆詞、水村十司
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

第11話『メカ獣団／ホワイトウルフ』(1974年12月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ムクレ博士(宮内幸平)、ホワイトウルフ(藤本　譲)、警部(徳丸　完)、タイフーン(中川まり子)、警　　官(笹岡繁蔵)
■[声の出演][表示なし]／[予告ナレーション](富山　敬)
■原動画／湖川　滋、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／嘉義良隆

第12話『鳥人トリメカマン』(1974年12月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
■[声の出演][第１画面]／鎧 武 士、ポリマー(曽我部和行)、車　　錠(青野　武)、南波テル(落合美穂)、鬼河原虎五郎(雨森雅司)、男　　爵(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／フライダー(石森達幸)、ヘイワード(峰　恵研)、幹　　部(徳丸　完)、隊　　長(沢りつお)
■原動画／西城隆詞、水村十司
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／館野透治
■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／中野政則

ウリクペン救助隊

1974年９月30日～1975年３月29日(第１～132話)　毎週月～土曜18時55分～19時
フジテレビ系／５分カラー・全22週(全132話)

(データソース)共通クレジットのオープニング以外は、週単位のサブタイトル、脚本、演出をまとめたリストが現存するのみ。『カバ　トット』『かいけつ　タマゴン』と同様、本作もまた全26週の放映に対し、資料に記録された制作数は全22週。４週分の再放映がどこかに挟まれていたはずだが、詳細は判明していない。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■制作／uninax＆ＭＫ、タツノコプロ
(注記)フィルム上のクレジット以外に、従来のアニメ関係資料で発表されたことのあるメインスタッフ、メインキャストデータは以下の通りである。
■原作／金子　満■企画／鳥海尽三■プロデューサー／永井昌嗣
■総監督／笹川ひろし■キャラクターデザイン／杉野昭夫■作画／田中　享
■美術／中村光毅■音楽／菊地俊輔
■声の出演／ライオンの王様(加藤　修)、ショータロー(喜多道枝)、ハチゴロー(たてかべ和也)、ギンタ(千々松幸子)、ナレーター(納谷六朗)、ハングルフ(水鳥鉄夫)
(注記)ＡＲ台本に記載されたスタッフデータは以下の通り。
■原作／ユニマックス、Ｍ　Ｋ■総監督／笹川ひろし、原　征太郎
■音楽／菊池俊輔■制作／ユニマックス･ＭＫ、竜の子プロダクション
■録音ディレクター／水本　完■効果／イシダ･サウンドプロ
■録音／新坂スタジオ
■制作担当／染野茂夫(読広)、横尾　潔(竜の子プロダクション)
■文芸担当／柳川　茂
■プロデューサー／永井昌嗣

第１週『ふしぎ草を探せ！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし、樋口雅一

第２週『ザネリの大火事＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂■演出／富永貞義

第３週『ヒエビエ村を救え！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／小山高男■演出／樋口雅一

第４週『氷を溶かすな！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富永貞義

第５週『ビックラ火山の一大事＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂■演出／樋口雅一

第６週『三匹の子豚救出作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／小山高男■演出／布川郁司、樋口雅一

第７週『洪水村を救え！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／陶山　智■演出／池野文雄

第８週『悪魔の実を刈りとれ！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／山本　優■演出／富永貞義、池野文雄

第９週『コアラゆうかい事件＊』
〈資料より補足〉
■脚本／酒井あきよし■演出／笹川ひろし、樋口雅一

第10週『ダイナマイト作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／池野文雄

第11週『暴走列車を止めろ！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章■演出／樋口雅一

第12週『ダチョウの卵を救え！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／山本　優■演出／池野文雄

第13週『恐怖の風船飛行＊』
〈資料より補足〉
■脚本／落合茂一■演出／池野文雄

第14週『ウリクペン越冬作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井正明■演出／樋口雅一

第15週『ナダレ山荘を救え！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／山本　優■演出／池野文雄

第16週『救助隊　海を行け！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕■演出／樋口雅一

第17週『巨象ジャンボを止めろ！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／落合茂一■演出／池野文雄

第18週『それ行け！@地底大進撃＊』
〈資料より補足〉
■脚本／山本　優■演出／池野文雄

第19週『恐怖の滝つぼ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／笹川ひろし■演出／笹川ひろし、本多　哲

第20週『ムラサキ水仙を枯らすな！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／笹川ひろし■演出／布川郁司、池野文雄

第21週『早く電気を！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇■演出／池野文雄

第22週『赤ちゃん牛が待っている＊』
〈資料より補足〉
■脚本／落合茂一■演出／原　征太郎、本多　哲

■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／角田秀一■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第18話『アリの巣城の／チョウチョ』(1974年8月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小林義昭■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演[第２画面]／クロジイ(千葉順二)、ジミイ(麻上洋子)、ヤスデ(笹岡繁蔵)、クロオオアリ(立壁和也)、〃(田口　昂*)、〃(宮下　勝)
■原動画／西城隆詞、山口　聡、岸　義之、森中正春、橋本一枝
■仕上／岡島国敏、西島敏子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／アップルズ■撮影／和光プロダクション、スタジオ・コスモス
■編集／森田清次■進行／中野政則

第19話『タガメ海賊の／襲撃』(1974年8月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／高橋資祐、布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、ナレーター(前田敏子)、テンテン(堀　絢子)、ケ　ン(白川澄子)、ケラ吉(松岡文雄)
■[声の出演[第２画面]／ガキ大将(増岡　弘)、トンボ(麻上洋子)、〃(三浦理江)、アメンボ(梅田信一)、コオイムシ(水鳥鉄夫)、メダカ(国弘陽子)
■原動画／田中　保、大鹿日出明、内海勇夫、高木　清
■仕上／岡島国敏、浅上マリ子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／プロダクション・わーと■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次
■進行／中野政則

第20話『燃えろ!／砂漠の決闘』(1974年8月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演[第２画面]／テンテン(堀　絢子)、アバッチ(丸山裕子)、ハジミ(野沢雅子)
■原動画／小川隆雄、海老沢幸男、谷田部雄次、谷川さち子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／角田秀一■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第21話『飛べ!飛べ!／虫の運動会』(1974年8月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／田井洋子■演出／林　政行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀絢子)、母親(前田敏子)、キン子(松尾佳子)、黒アゲハ(戸部光代)
■[声の出演[第２画面]／ヤンマ(西川幾雄)、ミンミンゼミ(立壁和也)、カブト虫(若本紀夫)、タマムシ(井口成人)、カマキリ(梅田信一)、バッタ(塚*田恵美子)、ハチ(国弘陽子)
■原動画／西城隆詞、山口聡、岸義之、森中正春、橋本一枝
■仕上／岡島国敏、野村千恵子、串田清美、山崎雅典、花輪久美子
■背景／桜井真理子、島谷忍■撮影／和光プロダクション、スタジオ・コスモス
■編集／森田清次■進行／中野政則

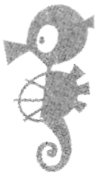
第22話『コロコロ・リンリン／のどじまん』(1974年8月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演[第２画面]／スズ子(岡本茉利)、ウマ子(丸山裕子)、クツ夫(西川幾雄)、ムッシュ(田口　昂*)、司会者(神谷　明)、子　供(吉田鈴香)
■原動画／西城隆詞、山口　聡、岸　義之、森中正春、橋本一枝
■仕上／岡島国敏、野村千恵子、串田清美、山崎雅典、花輪久美子
■背景／アップルズ■撮影／和光プロダクション、スタジオ・コスモス
■編集／森田清次■進行／中野政則

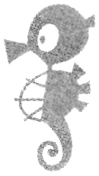
第23話『せまる!／コウモリ軍団』(1974年9月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演[第２画面]／コ　ロ(沢田和子)、コロの母(遠藤　晴)、ゴミムシ(立壁和也)、〃(若本紀夫)、〃(梅田信一)
■原動画／金山明博、加藤政志、酒井あきお、樋口美知子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／弘野正之■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第24話『決戦！／ジガバチ砦』(1974年9月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海*尽三■演出／林　政行、原征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)、天太郎(立壁和也)、ブン太(麻上洋子)
■[声の出演[第２画面]／立五郎(村松康雄)、ジガバッチ(水鳥鉄夫)、女の虫(戸部光代)、〃(松村洋子)、ジガバチ(若本紀夫)、〃(西川幾雄)、〃(俵　一)、子　供(吉田鈴香)
■原動画／田中　保、大鹿日出明、内海勇夫、高木　清
■仕上／岡島国敏、野村千恵子、串田清美、山崎雅典、花輪久美子
■背景／プロダクション・わーと■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次
■進行／中野政則

第25話『火の山！／最後の死闘』(1974年9月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演[第２画面]／アバッチ(丸山裕子)、ムカデ爺さん(立壁和也)、子　供(塚田恵美子)、〃(麻上洋子)、〃(吉田鈴香)
■原動画／西城隆詞、山口　聡、岸　義之、森中正春、橋本一枝
■仕上／岡島国敏、西島敏子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／アップルズ■撮影／和光プロダクション、スタジオ・コスモス
■編集／森田清次■進行／中野政則

第26話『ああ!ハッチ／最後の日』(1974年9月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／高*橋資祐、原征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)、バッタバ(藤本　譲)、バッチャ(麻上洋子)
■[声の出演[第２画面]／バッタ(立壁和也)、〃(水鳥鉄夫)、〃(若本紀夫)、バッタ(宮下　勝)、〃(城山知馨夫)、〃(松村洋子)、〃(吉田鈴香)
■原動画／芦田豊雄、金山明博、古沢秀雄、動画工房、高木　清
■仕上／岡島国敏、西島敏子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／プロダクション・わーと■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次
■進行／中野政則





■[声の出演][第２画面]／ナレーター(前田敏子)、気まま爺さん(北村弘一)
■原動画／内海勇夫、スタジオ・ルック、Ｆプロダクション
■仕上／岡島国敏、野村千恵子、串田清美、山崎雅典、花輪久美子
■背景／スタジオ・69■撮影／スタジオ・コスモス■編集／谷口　肇
■制作進行／中野政則

第５話『カマキリ一座の／踊り子アーヤ』(1974年5月3日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／ブン太(野沢雅子)、カマ蔵(飯塚昭三)、ミズ介(沢田和子)、ハキリ虫の父親(谷口　節)、シデムシ(宮下　勝)、、トックリバチ(広見多子)
■原動画／金山明博、加藤政志、酒井あきお、樋口美知子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、K.Kパサ、斉藤トミ子
■背景／(株)ジャック■撮影／佐藤　均■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第６話『泣くな／テンテンぼうず』(1974年5月10日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／光延博愛
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、マ　マ(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／テンテン(堀　絢子)、天　太　郎(峰　恵研)、ワルムチキッド(田口　昂*)、ジェロイモ(立壁和也)
■原動画／鈴木欽一郎、三重野要一、山崎　仁、小島秀人
■仕上／水上八重子、中田節子、安野富子、山田礼子、遠藤昌広
■背景／スタジオ・ユニ、プロダクション・わーと
■撮影／朝日フィルム■編集／谷口　肇
■進行／猪狩　肇■協力／土田プロダクション

第７話『ハッチ／大都会をいく』(1974年5月17日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐、新田義方
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、マ　マ(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／コロ吉(白川澄子)、エ　マ(松尾佳子)、パ　パ(松岡文雄)
■原動画／江藤文男、石山卓也、白川　忠、田島　実
■仕上／小林義明、市川美鈴、松島克子、五十嵐　純、亀井知津子
■背景／アトリエ・69■撮影／アート・スタジオ■編集／谷口　肇
■制作進行／剣持　大■協力／アート・スタジオ

第８話『きもっ玉／シデムシおばさん』(1974年5月24日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／シデムシおばさん(麻生美代子)、イナゴの子(三浦利江)、カナブンの子(麻上洋子)、ハンミョウの子(広見多子)
■原動画／内海勇夫、中川　暁、古沢秀雄、(動画工房)
■仕上／岡島国敏、浅上マリ子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／スタジオ・ジャック■撮影／スタジオ・コスモス■編集／谷口　肇
■進行／中野政則

第９話『飛べ!／みなしご三びき』(1974年5月31日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、マ　マ(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／テンテン(堀　絢子)、アバッチ(丸山裕子)、亀　虫(田口昂*)、蛾(宮下　勝)、ア　ブ(谷口　節)、ハニー(広見多子)
■原動画／小川隆雄、海老沢幸男、谷田部雄次、谷川さち子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／弘野正之■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第10話『ホタル／まつりの夜』(1974年6月7日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／高橋資祐、原　征太郎
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／ヒカル(恵比寿まさ子)、ホタルの男(田口　昂*)、ホタルの男(俵　　一)、〃(石井敏郎)、子　供(国弘陽子)
■原動画／芦田豊雄、野田拓実、広瀬和子、望月敬一郎、山口寿一
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／ジャック■撮影／スタジオ・コスモス■編集／谷口　肇
■進行／中野政則

第11話『もーれつ!／しごき魔』(1974年6月14日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／カスタロー(久松夕子)、サミー(瀬能礼子)、カメムシ(麻上洋子)、カミキリムシ(塚田恵美子)、ヨコバイの爺さん(笹岡繁蔵)、子　供(国弘陽子)
■原動画／金山明博、加藤政志、酒井あきお、樋口美知子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／角田秀一■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第12話『ああ!セミ吉くんの／168時間』(1974年6月21日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／Ｊ・沢田、安彦良和
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／セミ吉(丸山裕子)、ナガメの爺さん(立壁和也)、蜜蜂の女王(芝田清子)、カナブン(遠藤　晴)
■原動画／田中　保、高木　清、青木健二
■仕上／小林義明、市川美鈴、松島克子、五十嵐　純、亀井知津子
■背景／アトリエ・69■撮影／アート・スタジオ■編集／森田清次
■制作進行／剣持　大、千田正芳■協力／アート・スタジオ

第13話『アバッチ番長を／ぶっとばせ!』(1974年6月28日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、マ　マ(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／テンテン(堀　絢子)、アバッチ(丸山裕子)、バーヤ(広見多子)
■原動画／小川隆雄、海老沢幸男、谷田部雄次、谷川さち子
■仕上／若井喜治、中谷三枝子、福吉紀恵、八嶋素美、金子博亘
■背景／(株)ジャック■撮影／佐藤　均■編集／鶴渕允寿
■進行／山口信次、伊藤貞幸■協力／和光プロダクション

第14話『毒ぐもの罠』(1974年7月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／高橋資祐、原　征太郎
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／蝶の王(石井敏郎)、王　子(白川澄子)、蝶　子(岡本茉利)、毒ぐも(立壁和也)、蝶の娘(松村洋子)、〃(広見多子)、〃(国弘陽子)
■原動画／内海勇夫、古沢日出夫、昆　進
■仕上／岡島国敏、野村千恵子、串田清美、山崎雅典、花輪久美子
■背景／プロダクション・わーと■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次
■進行／中野政則

第15話『みの虫の消える／悪魔の森』(1974年7月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／柏戸比呂子■演出／富野喜幸、Ｊ・沢田
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／みの虫(富山　敬)、トゲ蟻(加藤　修)、トックリ蜂(立壁和也)
■原動画／仲本　通、三重野要一、鈴木欽一郎、山崎　仁
■仕上／こずえ・アニメ、鈴木和子、田村明美、梢*志津子、遠藤昌広
■背景／スタジオ・ユ　ニ■撮影／スタジオ・コスモス■編集／森田清次
■進行／猪狩　肇、千田正芳■協力／土田プロダクション

第16話『がんばれ!／ブーブー大将』(1974年7月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐、安彦良和
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、テンテン(堀　絢子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／ブー太郎(野沢雅子)、ブー子(広見多子)、クモェ門(立壁和也)、子供(麻上洋子)、子供(戸部光代)、子供(国弘陽子)
■原動画／芦田豊雄、野田拓実、広瀬和子、望月敬一郎、山口寿一
■仕上／岡島国敏、浅上マリ子、須永友子、山崎雅典、花輪久美子
■背景／プロダクション・わーと■撮影／和光プロダクション■編集／森田清次
■進行／中野政則

第17話『ラブラブ／テンテン・港町』(1974年7月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三、小山高男■演出／樋口雅一
〈エンディングクレジット〉〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、マ　マ(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)
■[声の出演][第２画面]／テンテン(堀　絢子)、ナナ(岡本茉莉)、フナムシ(立壁和也)
■原動画／金山明博、加藤政志、酒井あきお、樋口美知子

■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、レオーヌ(池水通洋)、ギャビィ(芝田清子)
■[声の出演][第２画面]／ブラキン(内海賢二)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、バラシン(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／中村　明、菊地城二、黒川　豊■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／嶋崎吏之■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[街の女(Ａ)](野村道子)、[街の女(Ｂ)](鈴木礼子)

第31話『新造人間を造る街』(1974年5月7日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、閣　　下(富田耕生)、ニ セ ル(大木民夫)
■[声の出演][第２画面]／ブラキン(内海賢二)、、バラシン(立壁和也)、、サグレー(加藤　修)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、高木　清、黒川　豊■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／池宮　隆■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／高山幸直

第32話『涙の電光パンチ』(1974年5月14日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、マ ー ル(野沢雅子)、ブラキン(内海賢二)
■[声の出演][第２画面]／アクボーン(仲木隆司)、サグレー(加藤　修)、バラシン(立壁和也)、市　　民(井口雅人)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／清山滋崇、菊地城二、高木　清■美術設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■仕上／須永友子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[人々](沢　りつお)、[ロボ](井口成人)

第33話『スワニー危機一髪』(1974年6月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、み ど り(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、ブラキン(内海賢二)
■[声の出演][第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、ミカエル(石丸博也)、サミール(池水通洋)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、岸　義之、森中正春■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／スタジオ・オニオン■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹
〈資料より補足〉
■声の出演／[市　民(１)](宮下　勝)、[市　民(２)](井口成人)

第34話『キャシャーン対ロボットエース』(1974年6月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高男■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東 博 士(山内雅人)、み ど り(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演][第２画面]／ブラキン(内海賢二)、アクボーン(仲木隆司)、サグレー(加藤　修)、バラシン(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、黒川　豊、高木　清■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／村上幸栄■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／高山幸直

第35話『地球最大の決戦』(1974年6月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東 博 士(山内雅人)、み ど り(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演][第２画面]／ブラキン(内海賢二)、、アクボーン(仲木隆司)、、バラシン(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、山口　聡、岸　義之、森中正春■美術設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■仕上／秋山まゆみ■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹
(注記)ＡＲ台本では、演出が「笹川ひろし」と記載されている。

昆虫物語 新みなしごハッチ

1974年４月５日～1974年９月27日(第１～26話)　毎週金曜19時～19時30分
毎日放送(ＮＥＴ)系／30分カラー・全26話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■原作／吉田竜夫、竜の子プロ企画室
(小学館学習雑誌連載)[3～26話] [14話以降は()なし]
■企画／鳥海尽三、酒井あきよし
■[主題歌] 作詩／若林一郎 オープニング、やなせ　たかし エンディング
作曲／渡辺宙明 オープニング、横山菁児 エンディング　歌／島崎由理
[以上、1、2話。3話以降は「オープニング」「エンディング」の文字がなくなり、「横山菁児」が「横山菁*児」表記に]　コロムビア・レコード[5～26話]
■音楽／横山菁児[3話以降は「横山菁*児」表記]■美術／中村光毅
■総監督／原　征太郎[1、2話]■チーフ ディレクター／原　征太郎[3～26話]
[3～13話は「チーフ デレクター」表記]
■制作／◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラデザイン／天野嘉孝、源田秀夫
■作画監督／岡田敏靖、川端　宏、大鹿 日出明[2～10話]■美術設定／中村光毅
■仕上担当[2～26話]／池宮　隆■制作担当／横尾　潔
■録音ディレクター／水本　完、オムニバス プロ
[1～10話は「録音デレクター」表記]
■効果／石田サウンドプロ■録音スタジオ／新坂スタジオ
■現像／東京現像所■プロデューサー／九里一平、柴田　勝、永井昌嗣
■制作／◇タツノコ プロ

第１話『あらしの／みつばち城』(1974年4月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■[声の出演][第１画面]／ハ　ッ　チ(栗　葉子)、ア　ー　ヤ(野村道子)、女　王(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)、ア　グ　リ(麻生美代子)、ドロシー(恵比寿まさ子)、隊　長(飯塚昭三)
■[声の出演][第２画面]／(水島　晋)、(今西正男)、(白川澄子)、(桂　玲子)、(神谷明)、(安原義人)、(沢田和子)
■原動画／１田中英二、２池之谷 安 夫、３福田健一、４古川竜也
■色指定／岡島国敏■トレス／西島敏子■ペイント／須永友子
■検査／花 輪 久美子■特効／山崎雅典■背景／中村光毅
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■制作進行／中野政則
(注記)原動画の人名にふられた番号はクレジット表示通り。「古川竜也」もクレジット表示ママ。

第２話『ママ／死なないで!』(1974年4月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐、原 征太郎
〈エンディングクレジット)〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、女　王(北浜晴子)、ナレーター(前田敏子)、ア　グ　リ(麻生美代子)、ドロシー(恵比寿まさ子)
■[声の出演][第２画面]／アバッチ(丸山裕子)、スズメバチ 大 将(渡部　猛)、ヒゲバチ(立壁和也)、ローザ(白見多子)、侍　従(若本紀夫)、隊　長(宮下　勝)
■原動画／内海勇夫、古沢 日出夫、昆　進
■仕上／岡島国敏、西島敏子、須永友子、山崎雅典、花輪 久美子
■背景／アトリエローク■撮影／和光プロダクション■編集／谷口　肇
■制作進行／中野政則
(注記)「白見多子」はクレジット表示ママ。

第３話『幻のママが／よんでいる』(1974年4月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井 あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット)〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、女　王(北浜晴子)
■[声の出演][第２画面]／ナレーター(前田敏子)、アバッチ(丸山裕子)、ハッサム(丸山詠二)、ア ブ(水鳥鉄夫)
■原動画／野辺駿夫、大鹿 日出明、アド・ファイブ
■仕上／稲垣行男、西島敏子、須永友子、山崎雅典、花輪 久美子
■背景／アトリエローク■撮影／和光プロダクション■編集／谷口　肇
■制作進行／中野政則

第４話『飛びたて！／美しの丘へ』(1974年4月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／高橋資祐、原　征太郎
〈エンディングクレジット)〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アーヤ(野村道子)、女　王(北浜晴子)

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、００Ａ号(肝付兼太)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、黒川　豊、高木　清■美術設定／中村光毅
■背景／アップルズ■仕上／野村千恵子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[トーリヤンサー](肝付兼太)、[マリア](菅谷政子)、[諜報ロボット００Ａ号](増岡　弘)
(注記)「００Ａ号」役が「肝付兼太」となっているのはクレジットミス。実際は「００Ａ号」役は「増岡　弘」。一方、「肝付兼太」は「トーリヤンサー」を演じている。

第18話『巨象対アンドロ軍団』(1974年2月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／マーサ(荘司美代子)、キ　　ム(野沢雅也)、団　　長(仁内達之)、ピエロ(仲木隆司)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、鈴木信一■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／村上幸栄■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／横尾　潔

第19話『恐怖のピエロボット』(1974年2月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／富野喜*幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、大統領(家弓家正)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／清山滋崇、塩山紀生、黒川　豊■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／西嶋敏子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／高山幸直

第20話『死刑台のキャシャーン』(1974年2月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、チート(丸山裕子)、バンテス(渡部　猛)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、大鹿日出明■美術設定／多田喜久子
■背景／島谷　忍■仕上／レオプロダクション■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／千田正芳

第21話『ロボット・ハイジャック』(1974年2月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／牧　　師(仲木隆司)、機　　長(加藤　修)、スチュワーデス(三浦理江)、乗　　客(水鳥鉄夫)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／菊地プロダクション、中村プロダクション、高木　清
■美術設定／岡田和夫■背景／プロダクションわーと■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／山崎雅典■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹

第22話『脱走ロボット・ロメオ』(1974年3月5日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／武末　勝■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、町　　長(仲木隆司)、ロメオ(峰恵研)、ジョイ(田口　昂*)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、古川達也■美術設定／多田喜久子
■背景／桜井真理子■仕上／池宮　隆■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／横尾　潔
〈資料より補足〉
■声の出演／[古　老](丸山詠二)

第23話『ロボット工場大脱出』(1974年3月12日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、アクボーン(仲木隆司)
■[声の出演[第２画面]／チーフ・ロボ(加藤　修)、ビリー(石丸博也)、ミレーヌ(芝田清子)、ルガー(肝付兼太)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、高木　清、黒川　豊■美術設定／岡田和夫
■背景／アップルズ■仕上／レオプロダクション■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／高山幸直

第24話『バウンダーロボの挑戦』(1974年3月19日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／石井喜一■演出／岡迫和之
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、ドクターロボ(横井光夫)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／岡迫亘弘、黒川　豊、高木　清■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／須永友子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[サラナ](荘司美代子)、[ジェリー](沢田和子)

第25話『不死身のキャシャーン』(1974年3月26日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三、小山高男■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、ヤービィー(仲木隆司)、ローラー(柴田清子)、老　　婆(赤木葉子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／清山滋崇、沼尻　東、黒川　豊■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／秋山まゆみ■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／横尾　潔

第26話『キャシャーンの秘密』(1974年4月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東博士(山内雅人)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、バラシン(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、山口　聡、森中正春■美術設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■仕上／村上篤美■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／長谷川徹
〈資料より補足〉
■声の出演／[子　供(Ａ)](丸山裕子)、[子　供(Ｂ)](沢田和子)

第27話『消えたＭＦ銃?』(1974年4月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、フローラ(岡本茉利)、おじいさん(北村弘一)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、アクボーン(仲木隆司)、サグレー(加藤　修)、バラシン(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、岸　義之、鈴木信一■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／奥秋英子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[男](横井光夫)

第28話『怒りの騎馬隊』(1974年4月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、ブラキン(内海賢二)、アクボーン(仲木隆司)、サグレー(加藤　修)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、カペル(寺島幹夫)、カルル(池水通洋)、カルルの母(柴田清子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／塩山紀生、高木　清、黒川　豊■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／野村千恵子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／高山幸直

第29話『高熱ロボ・ネオタロス』(1974年4月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ル　　ナ(塚*田恵美子)、メリナ博士(平井道子)、マリオ(白川澄子)、ウルゴ(沢田和子)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、アクボーン(仲木隆司)、市　　民(谷口　節)、子　　供(三浦理江)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、福田健一、山口　聡■美術設定／岡田和夫
■背景／アップルズ■仕上／レオプロダクション■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹
〈資料より補足〉
■声の出演／[バラシン](立壁和也)、[サグレー](加藤　修)

第30話『ロボ退治ナンバーワン』(1974年4月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／松浦健郎、石原久夫■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉

■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／上月博士(北村弘一)、バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(田口　昂*)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／塩山紀生、黒川　豊、須田　勝■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／近江美樹子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／横尾　潔

第５話『戦いの灯[ともしび]を消すな』(1973年10月30日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／ロゲロ(安原義人)、バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詩、福田健一、岸　義之■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／斉藤弥生■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹
〈資料より補足〉
■声の出演／[子　供](沢田和子)

第６話『疾風フレンダー』(1973年11月6日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、、アクボーン(仲木隆司)、、００Ｈ(立壁和也)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／清山滋崇、塩山紀生、黒川　豊■美術設定／中村光毅
■背景／アップルズ■仕上／串田清美■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／高山幸直

第７話『英雄キケロへの誓い』(1973年11月13日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、長　老(永井一郎)、ミローダ(駒村クリ子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、黒川　豊、須田　勝■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／秋山まゆみ■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳
〈資料より補足〉
■声の出演／[子　供(Ａ)](三浦理江)

第８話『野獣ロボが吠える』(1973年11月20日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、洋　子(友近恵子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、山口　聡■美術設定／中村光毅
■背景／プロダクションわーと■仕上／村上幸栄■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／横尾　潔
〈資料より補足〉
■声の出演／[羽賀根博士](木下秀雄)

第９話『戦火に響け協奏曲[コンチェルト]』(1973年11月27日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)、バラシン(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／サグレー(加藤　修)、マリーノ(森　功至)、モレーナ(岡本茉利)、音楽家(仲木隆司)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／清山滋崇、塩山紀生、沼尻　東■美術設定／岡田和夫
■背景／アップルズ■仕上／奥秋英子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／高山幸直
〈資料より補足〉
■声の出演／[兵　士(Ａ)](田口　昂*)、[孫](沢田和子)

第10話『死の砂漠に命をかけろ』(1973年12月4日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／福井　忠■演出／岡迫和之
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、シモンズ博士(保科三良)、技　師(鈴木泰明)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詩、水村十司、福田健二■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／野村千恵子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／長谷川徹
(注記)ＡＲ台本では、演出が「岡迫和之」と「笹川ひろし」の連名になっている。

第11話『悪魔の巨像』(1973年12月11日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／若松はじめ■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東博士(山内雅人)、みどり(武藤礼子)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、バラシン(立壁和也)、彫刻家(中田浩二)、男(加藤　修)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／上梨壱也、野田祐実、石黒　篤■美術設定／中村光毅
■背景／下道文治■仕上／関根史子■特殊効果／鈴木絢子
■撮影／モビッシュ・ハウス■編集／尾形治敏■進行／サイケ・吉岡
〈資料より補足〉
■声の出演／[男](仲木隆司)

第12話『鉄の悪党列車』(1973年12月18日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東博士(山内雅人)、みどり(武藤礼子)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、黒川　豊、坂元政弘■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／西嶋敏子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳

第13話『裏切りロボット五号』(1973年12月25日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／布川郁司
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)、アクボーン(仲木隆司)
■[声の出演[第２画面]／アンドロイド五号(神谷　明)、ロボット(Ａ)(立壁和也)、ロボット(Ｂ)(加藤　修)、母　親(沢田和子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、岸　義之■美術設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■仕上／須永友子■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／長谷川徹

第14話『キャシャーン無用の街』(1974年1月8日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／原　征太郎

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、市　長(永井一郎)、ボンド(田口　昂*)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、、アクボーン(仲木隆司)、、男の子(沢田和子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／塩山紀生、清山滋崇、沼尻　東■美術設定／中村光毅
■背景／プロダクションわーと■仕上／串田清美■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／羽場　武■進行／横尾　潔
〈資料より補足〉
■声の出演／[議　員(Ｂ)](神谷　明)、[議員(Ｃ)](加藤　修)、[女の子](塚*田恵美子)

第15話『復讐に小犬は駆ける』(1974年1月15日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／岡迫和之
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、ブラキン(内海賢二)、バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)
■[声の出演[第２画面]／ダイナード(仲木隆司)、子供(Ａ)(沢田和子)、子供(Ｂ)(塚*田恵美子)、子供(Ｃ)(三浦理江)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詞、水村十司、森中正春■美術設定／岡田和夫
■背景／プロダクションわーと■仕上／秋山まゆみ■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／長谷川徹

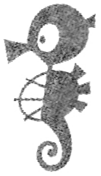
第16話『スワニー・愛の翼』(1974年1月22日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／多村映美■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、ル　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、アクボーン(仲木隆司)、ミリー(吉田理保子)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／塩山紀生、黒川　豊、沼尻　東■美術設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■仕上／奥秋英子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／神田博史■進行／高山幸直
〈資料より補足〉
■声の出演／[ルマンチャ](矢田耕司)

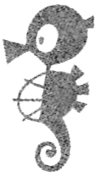
第17話『ロボット子守唄』(1974年1月29日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／布川郁司

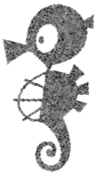
■特殊効果／山崎雅典■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第38話『ナマズ入道を／やっつけろ』(1973年9月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演[第２画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、ザ　　リ(田中康郎)、なまず入道(水島　晋)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／大沼敏孝
■背景／アップルズ■色指定／近江美樹子■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／嶋崎吏子■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／長谷川徹■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第39話『ひびけ平和の／ケロケロ笛』(1973年9月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)
■[声の出演[第２画面]／キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、なまず入道(水島　晋)、エレ吉(つかせのりこ)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井寅雄■色指定／近江美樹子■仕上／佐藤育子、跡部妙子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)







新造人間キャシャーン

1973年10月２日～1974年６月25日(第１～35話)　毎週火曜19時～19時30分
＊1974年５月21日に第７話、1974年５月28日に第９話、1973年５月28日に第13話を再放映
フジテレビ系／30分カラー・全35話(全38回)

(データソース)原則としてオープニング、サブタイトル画面、エンディングクレジットの内容を記載。[ ] 囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌／たたかえ！キャシャーン
作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／菊池俊輔　歌／ささきいさお
コロムビア・レコードSCS-516
■原作／吉田竜夫、タツノコプロダクション企画室
■連載／講談社児童雑誌ほか[1～7話]
講談社、テレビマガジンほか、秋田書店、冒　険　王[以上、8～35話]
■企画／鳥海尽三■ＳＦ考証／小隅　黎■文芸担当／小山高男
■音楽／菊池俊輔■美術／中村光毅■総監督／笹川ひろし
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ[以上、1～25話]
◇タツノコプロ、フジテレビ[以上、26～35話]
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■主題歌　おれは新造人間
作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／菊池俊輔　歌／ささきいさお
コロムビア・レコードSCS-516
■キャラクターデザイン／吉田竜夫、天野嘉孝
■作画監督／林　政行、川端　宏、井口忠一
■効果／イシダ・サウンドプロ
■録音ディレクター[1､26～35話]／水本　完、オムニバス・プロ
■録音／読広スタジオ、棚岡　元[以上、1話]
オムニバス・プロ、水本　完、、新坂スタジオ、読広スタジオ[以上、2～25話]
新坂スタジオ、高橋久義[以上、26～35話]
■現像／東京現像所■プロデューサー／吉田健二、九里一平
■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)[1～24話]、内間稔(読広)[25話]
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ[以上、1～25話]
◇タツノコプロ、フジテレビ[以上、26～35話]
■協力／フジテレビ[1～25話]

256

第１話『不死身の挑戦者』(1973年10月2日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／東鉄也(キャシャーン)(西川幾雄)、東博士(山内雅人)、みどり(武藤礼子)、ル　　ナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／ブラキン(内海賢二)、隊　　長(田口　昂*)、隊　　員(峰　恵研)、議　　員(加藤　修)、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詩、池ノ谷安夫、森中正春■美術設定／中村光毅
■背景／山口幸子■仕上／向井　稔■特殊効果／朝沼清良
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳

第２話『月光に勝利をかけろ』(1973年10月9日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／鳥海尽三、落合茂一■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、東博士(山内雅人)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)
■[声の出演[第２画面]／バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、父　　親(峰　恵研)、母　　親(松村洋子)、パイロット(大野　健)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／西城隆詩、福田健二、岸　義之■美術設定／中村光毅
■背景／プロダクションわーど■仕上／村上篤美■特殊効果／山崎雅典
■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子■進行／千田正芳

第３話『廃墟*の中に明日を呼べ』(1973年10月16日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／キャシャーン(西川幾雄)、みどり(武藤礼子)、ブラキン(内海賢二)、上月ルナ(塚*田恵美子)
■[声の出演[第２画面]／上月博士(北村弘一)、バラシン(立壁和也)、サグレー(加藤　修)、議　　員(田口　昂*)、、ナレーター(納谷悟朗)
■原動画／田中　享、清山滋崇、黒川　豊■美術設定／岡田和夫
■背景／アップルズ■仕上／野村千恵子■特殊効果／嶋崎吏之
■撮影／天平フィルム■編集／森田清次■進行／千田正芳

第４話『ＭＦ銃に怒りをこめろ』(1973年10月23日放映)
〈サブタイトル画面クレジット〉
■脚本／小山高男■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉

■原動画／田中　享、須田　勝、黒川　豊■背景設定／多田喜久子
■背景／新井實雄■色指定／金原恵美■仕上／野村千恵子、奥秋英子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第25話『消すな／命の炎』(1973年6月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鹿島恒保
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／ザ　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、ドラ先生(八奈見乗児)、入　道(水島　晋)、タニシ(麻生美代子)、、ナレーター(北浜晴子)■原動画／遠藤克己、昆　進、増淵文雄■背景設定／新井實雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／岡嶋国敏■仕上／原田千尋、仲川由美子
■特殊効果／山口真紀■検査／吉沢巳知代■撮影／西城栄寿■編集／三木幸子
■進行／山口信次■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第26話『負けるな／やせ蛙』(1973年6月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、入　道(水島　晋)、ドラ先生(八奈見乗児)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／藤原万秀、清山滋崇、須田　勝■背景設定／大沼敏孝
■背景／新井實雄■色指定／近江美樹子■仕上／田辺常子、大平恭子
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／長谷川徹■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第27話『なまず入道／大あばれ』(1973年7月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)
■[声の出演][第2画面]／ヒゲ爺さん(肝付兼太)、入　道(水島　晋)、パア助(白川澄子)、エレ吉(つかせのりこ)、父　親(西山　連)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■色指定／金原恵美■仕上／串田清美、佐野和子
■特殊効果／嶋崎吏之■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
257 ■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第28話『ひびけ！／愛のケロケロ笛』(1973年7月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／小山高男■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、イボ吉(大竹　宏)
■[声の出演][第2画面]／キャール(八代　駿)、アオ太郎(神谷　明)、アオ子(菅谷政子)、アオ吉(辻*村真人)、ツノ吉(芹川　洋)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田中　享、須田　勝、黒川　豊■背景設定／多田喜久子
■背景／新井實雄■色指定／金原恵美■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／朝沼清良■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第29話『わたせ／友情のかけ橋』(1973年7月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)
■[声の出演][第2画面]／キャール(八代　駿)、チー助(松島みのり)、住人(A)(芹川　洋)、住人(B)(大野　健)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／大沼敏孝
■背景／新井實雄■色指定／近江美樹子■仕上／串田清美、佐野和子
■特殊効果／山崎雅典■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第30話『さよなら／カニッ子たち』(1973年7月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／林　政行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)
■[声の出演][第2画面]／サワガニ(石森達幸)、ギョロメ(沢田和子)、チョッキン(松島みのり)、アワ子(山本嘉子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／清山滋崇、藤原万秀、須田　勝■背景設定／多田喜久子
■背景／プロダクションわーと■色指定／金原恵美■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／嶋崎吏之■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／長谷川徹■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第31話『炎に負けるな』(1973年7月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、アオエ門(石井敏郎)、ハチドリ(三輪勝恵)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／大沼敏孝
■背景／アップルズ■色指定／近江美樹子■仕上／野村千恵子、奥秋英子
■特殊効果／嶋崎吏子■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第32話『小さな池の／王様』(1973年8月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、、ラナタン(岡本茉利)、、ドラ先生(八奈見乗児)
■[声の出演][第2画面]／タ　ケ(つかせのりこ)、、リ　リ(山本嘉子)、、タケの父(水鳥鉄夫)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井實雄■色指定／金原恵美■仕上／西嶋敏子、浅上まり子
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第33話『虹の池が／かわく時』(1973年8月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／若松はじめ■演出／鈴木康彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、アオエ門(石井敏郎)、なまず入道(水島　晋)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／鈴木康彦、竹市正勝、五十嵐和子■背景設定／新井實雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／岡嶋国敏■仕上／倉科洋子、田中節子
■特殊効果／内山純子■検査／中谷三枝子■撮影／西城栄寿■編集／三木幸子
■進行／山口信次■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第34話『頑張れ／デメタン』(1973年8月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／光延博愛
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)
■[声の出演][第2画面]／キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、アオエ門(石井敏郎)、ヒナドリ(山本嘉子)、母トンビ(遠藤　晴)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／川島　明、山崎　久、小島秀人■背景設定／新井實雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／赤羽礼子■仕上／水野八重、鈴木英子
■特殊効果／内山純一■検査／林　克子■撮影／高橋宏固*■編集／森田清次
■進行／呉田　勝■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第35話『戦え！／デメタン』(1973年8月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／ザ　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、なまず入道(水島　晋)、タニシ(赤木葉子)、ビケ太(西川幾雄)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／藤原万秀、清山滋崇、五十嵐和子■背景設定／多田喜久子
■背景／アップルズ■色指定／近江美樹子■仕上／跡部妙子、佐藤育子
■特殊効果／嶋崎吏之■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／長谷川徹■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第36話『ナマズ入道に／負けるな』(1973年9月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、、ラナタン(岡本茉利)、、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／なまず入道(水島　晋)、、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、、うしろ山(神山卓三)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／大沼敏孝
■背景／新井實雄■色指定／近江美樹子■仕上／西嶋敏子、浅上まり子
■特殊効果／朝沼清良■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第37話『恐怖の／地獄ジャングル』(1973年9月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、、ラナタン(岡本茉利)、、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、ザ　リ(田中康郎)、なまず入道(水島　晋)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井實雄■色指定／近江美樹子■仕上／野村千恵子、奥秋英子

■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第12話『ギヤ太の／策 略』(1973年3月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／棚橋一徳
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、ＡＢＣ警部(大竹　宏)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、沢 五 郎(加藤精三)、()(Y)、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井寅雄■色指定／近江美樹子■仕上／松本道子、嶋崎吏之
■特殊効果／山崎雅典■検査／村上篤美■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／米津和彦■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、「演出」が「石黒　昇」と記載。

第13話『生 き ろ／広い世界で』(1973年3月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、ギ ヤ 太(富田耕生)、イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)
■[声の出演][第２画面]／ザ　　リ(田中康郎)、アオヱ門(石井敏郎)、川 ヘ ビ(加藤　修)、先　　生(河野たみ)、デメキン(丸山裕子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／大沼敏孝
■背景／アップルズ■色指定／金原恵美■仕上／野村千恵子、浅上まり子
■特殊効果／朝沼清良■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／狩野耕一■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第14話『わんぱく蛙が／やって来*た』(1973年4月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鹿島恒保
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／ケ ロ 太(松島みのり)、沢 ガ ニ(遠藤　晴)、ネ ズ ミ(水鳥鉄夫)、警　　部(大竹　宏)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田中　享、橋野利夫、出光　節■背景設定／新井寅雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／岡嶋国敏■仕上／原田千尋、中谷三枝子
■特殊効果／山口信次■検査／福島信行■撮影／熱田よう■編集／森田清次
■進行／古沢洋二■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第15話『命の川を／とりもどせ』(1973年4月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、カ ン タ(神山卓三)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／清山滋崇、藤原万秀、須田　勝■背景設定／中村光毅
■背景／吉原一輔■色指定／近江美樹子■仕上／串田清美、佐野和子
■特殊効果／山崎雅典■検査／飯田 不二枝■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第16話『救 え／緑 の 命』(1973年4月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、ギ ヤ 太(富田耕生)、イ ボ 吉(大竹　宏)、ザ　　リ(田中康郎)
■[声の出演][第２画面]／キャール(八代　駿)、アオヱ門(石井敏郎)、女 の 子(野村道子)、住　　人(須田博光)、〃(大野　健)、、ナレーター(北浜晴子)■原動画／飯野皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井寅雄■色指定／金原恵美■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／米津和彦■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第17話『虹の池の 魔 神』(1973年4月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／ザ　　リ(田中康郎)、警　　部(大竹　宏)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、入　　道(水島　晋)、イ モ リ(渡部　猛)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／大沼敏孝
■背景／アップルズ■色指定／近江美樹子■仕上／野村千恵子、奥秋英子
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第18話『飛ぶんだ／大 空 へ』(1973年5月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、チ　　ロ(山本嘉子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／遠藤克己、昆　　進、増淵文雄■背景設定／新井寅雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／岡嶋国敏■仕上／原田千尋、仲川由美子
■特殊効果／山口真紀■検査／吉沢巳知代■撮影／角田秀一■編集／森田清次
■進行／古沢洋二■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第19話『開け希望の灯[ともしび]』(1973年5月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、母　　親(前田敏子)、ヨ ボ 平(槐　柳二)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／多田喜久子
■背景／新井寅雄■色指定／金原恵美■仕上／田辺常子、大平恭子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／狩野耕一■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第20話『シャボン玉は／海*に向かう』(1973年5月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、ギ ヤ 太(富田耕生)、イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)
■[声の出演][第２画面]／ザ　　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、赤　　助(渡部　猛)、カッチン(沢田和子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／藤原万秀、清山滋崇、須田　勝■背景設定／大沼敏孝
■背景／アップルズ■色指定／近江美樹子■仕上／松本道子、嶋崎吏之
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第21話『泣くな友情の／ケロケロ笛』(1973年5月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／小山高男■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／ザ　　リ(田中康郎)、亡　　霊(水鳥鉄夫)、モ リ 太(つかせのりこ)、モ リ 子(麻生美代子)、イ モ 虫(八代　駿)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田中　享、橋野利夫、中島公生■背景設定／新井寅雄
■背景／プロダクションわーと■色指定／岡嶋国敏■仕上／原田千尋、仲川由美子
■特殊効果／山口真紀■検査／吉沢巳知代■撮影／西城栄寿■編集／三木幸子
■進行／山口信次■制作担当／栃平吉和、――――、大野 実(読広)

第22話『デメタン／海*からかえる』(1973年5月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、、ラナタン(岡本茉利)、、チュウ治(大宮悌二)
■[声の出演][第２画面]／ガ リ 太(大竹　宏)、、ク ン 三(肝付兼太)、、イ ン コ(松島みのり)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／多田喜久子
■背景／新井寅雄■色指定／金原恵美■仕上／串田清美、佐野和子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上幸栄■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第23話『捨てるな勇 気』(1973年6月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／笹川ひろし■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、ア マ 子(荘司美代子)、ギ ヤ 太(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／イ ボ 吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、カ　　ニ(今西正男)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／飯野　皓、津野二郎、門間悦子■背景設定／大沼敏孝
■背景／山口幸子■色指定／近江美樹子■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／狩野耕一■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第24話『へそ蛙くん／さようなら』(1973年6月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉利)、雨 太 郎(北村弘一)、イ ボ 吉(大竹　宏)
■[声の出演][第２画面]／キャール(八代　駿)、ヘ ソ 蛙(大山のぶ代)、ドラ先生(八奈見乗児)、先　　生(水島　晋)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田中　享、須田　勝、黒川　豊■背景設定／多田喜久子

けろっこデメタン

1973年1月2日～1973年9月25日(第1～39話)　毎週火曜19時～19時30分
フジテレビ系／30分カラー・全39話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正AR台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(AR台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■けろっこ デメタン　主題歌／コロムビア・レコードSCS-186
作詞／丘　灯至夫　作曲／越部　信義　歌／堀江美都子
■企画／吉田竜夫■原作／鳥海尽三■構成／酒井あきよし■美術／中村光毅
■音楽／越部信義、音楽企画センター■総監督／笹川ひろし
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■負けるなデメタン　作詞／丘灯至夫　作曲／越部信義　歌／堀江美都子
コロムビア・レコードSCS-186
■キャラクターデザイン／吉田竜夫、天野嘉孝、■作画監督／林　政行、川端　宏
■効果／イシダ・サウンドプロ■録音ディレクター／水本　完、オムニバス・プロ
■録音／読広スタジオ、棚岡　元■現像／東京現像所
■プロデューサー／吉田健二、九里一平
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ■協力／フジテレビ

第1話『とび出せ／デメタン』(1973年1月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／吉田竜夫、原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／田中英二、西城隆詩■動画／水村十司、加藤　茂
■背景／多田喜久子■色指定／向井　稔■仕上／池宮　隆、北川展子
■特殊効果／朝沼清良■検査／斉藤弥生■撮影／細野　正■編集／谷口　肇
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第2話『勇気だ!／父ちゃん』(1973年1月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ビキ助(金井　大)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、タニシ(赤木葉子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／永樹凡人、大貫信夫■動画／永樹たつひろ、檜田久美子
■背景／新井寅雄■色指定／佐藤育子■仕上／須永友子、西嶋敏子
■特殊効果／山崎雅典■検査／飯田不二枝■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第3話『負けるな!／三段跳び』(1973年1月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、選　手(つかせのりこ)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／田島　実、前田英美■動画／中村　実、松本　清
■背景／アップルズ■色指定／金原恵美■仕上／野村千恵子、浅上まり子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上篤美■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／米津和彦■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第4話『守れ!／愛のタマゴ』(1973年1月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)、ザ　リ(田中康郎)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、執　事(石井敏郎)、ヘ　ビ(西山　連)、カメおばさん(瀬野礼子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／飯野　皓、津野二郎■動画／岡　豊、門間悦子
■背景／多田喜久子■色指定／近江美樹子■仕上／内山陽子、串田清美
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／竹中京子
■進行／狩野耕一■制作担当／栃平吉和、――――、大野実(読広)

第5話『泣くな!／デメタン』(1973年1月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ガマ平(西山　連)、カエルの子(近藤高子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／飯野　皓、津野二郎■動画／岡　豊、門間悦子
■背景／大沼敏孝■色指定／金原恵美■仕上／佐野和子、松井利栄子
■特殊効果／朝沼清良■検査／飯田不二枝■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇
■進行／横尾　潔■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第6話『ふたりぼっちの／ケロケロ笛』(1973年2月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ヒゲ爺さん(肝付兼太)、ザ　リ(田中康郎)、カエルの子(友近恵子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／鈴木　満、上条　修■動画／佐藤　徹、荒井政長志
■背景／新井寅雄■色指定／岡嶋国敏■仕上／池宮　隆、佐藤ヨシ子
■特殊効果／山崎雅典■検査／村上篤美■撮影／西城栄寿■編集／三木幸子
■進行／福島信行■制作担当／栃平吉和、――――、大野実(読広)

第7話『まごころに消えた／憎しみ…』(1973年2月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／柴田夏余■演出／富野喜幸
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)
■[声の出演][第2画面]／ザ　リ(田中康郎)、ばあや(赤木葉子)、ドラ先生(八奈見乗児)、カエル(徳丸　完)、老　婆(津田まり子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／田島　実、前田英美■動画／中村　実、松本　清
■背景／吉原一輔■色指定／近江美樹子■仕上／北川展子、須永友子
■特殊効果／朝沼清良■検査／斉藤弥生■撮影／天平フィルム■編集／竹中京子
■進行／米津和彦■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第8話『さようなら／小さな旅人』(1973年2月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)
■[声の出演][第2画面]／カメの子(杉山佳寿子)、住　人(田口　昂*)、〃(肝付兼太)、子　供(荘司美代子)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／飯野　皓、津野二郎■動画／岡　豊、門間悦子
■背景／大沼敏孝■色指定／金原恵美■仕上／西嶋敏子、野村千恵子
■特殊効果／山崎雅典■検査／飯田不二枝■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子
■進行／狩野耕一■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第9話『虹の池の／地獄ジャングル』(1973年2月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、ギヤ太(富田耕生)、ザ　リ(田中康郎)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、入　道(水島　晋)、住　人(肝付兼太)、〃(峰　恵研)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／清山滋崇、藤原万秀■動画／須田　勝、土橋　博
■背景／新井寅雄■色指定／近江美樹子■仕上／浅上まり子、奥秋英子
■特殊効果／朝沼清良■検査／村上篤美■撮影／天平フィルム■編集／森田清次
■進行／高山幸直■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第10話『友情は／海*の彼方に』(1973年3月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／棚橋一徳
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、ギヤ太(富田耕生)、イボ吉(大竹　宏)、ザ　リ(田中康郎)
■[声の出演][第2画面]／雷　魚(渡部　猛)、ニョロ吉(つかせのりこ)、ばあや(赤木葉子)、アオ衛門(三田松五郎)、、ナレーター(北浜晴子)
■原画／川端　宏、葛*岡　博■動画／橋野利夫、出光　節
■背景／新井寅雄■色指定／岡嶋国敏■仕上／池宮　隆、原田千尋
■特殊効果／山崎雅典■検査／斉藤弥生■撮影／弘野正之■編集／竹中京子
■進行／福島信行■制作担当／栃平吉和、――――、津田義夫(読広)

第11話『秀才蛙が／現われた』(1973年3月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／デメタン(久松夕子)、ラナタン(岡本茉莉)、雨太郎(北村弘一)、アマ子(荘司美代子)、ギヤ太(富田耕生)
■[声の出演][第2画面]／イボ吉(大竹　宏)、キャール(八代　駿)、ザ　リ(田中康郎)、コロロ(松島みのり)、、ナレーター(北浜晴子)
■原動画／田島　実、前田英美、池田輝男■背景設定／大沼敏孝
■背景／吉原一輔■色指定／金原恵美■仕上／田辺常子、太平恭子
■特殊効果／朝沼清良■検査／飯田不二枝■撮影／天平フィルム■編集／三木幸子

■脚本／田宮　順
第132話『怪獣オカチメンコ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第133話『呪文思い出し怪獣ジューモン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第134話『ゴリ押し怪獣エッサッサー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第135話『夢作り怪獣ユメラー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第136話『悲しきキリギリス＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第137話『釣りの名人＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第138話『シャワーを浴びたいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第139話『地震怪獣ユサユサゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第140話『電気怪獣ビリビリー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第141話『怪獣ハリハリー＊』
第142話『スカンク坊やの悩み＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第143話『山火事を消そう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第144話『怪獣ヤキニクーイ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第145話『子供がほしいの＊』
第146話『ライオン通りの歩道橋＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第147話『怪獣カバゴング＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第148話『ハゲの治し方＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第149話『自動車に乗せて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第150話『ゴルフボールは何処に＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第151話『お宿を守って＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第152話『寝坊助雄鶏＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
話『迷犬タマゴン誕生＊』
第154話『泥棒猫をつかまえろ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第155話『小鳥とハンター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第156話『ヘビと不思議な卵＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第157話『綱渡り怪獣ムチラー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第158話『シーソー怪獣イネムレー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第159話『怪獣クモスケット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第160話『怪獣ユゲポッポー＊』
第161話『ダーリンの仇をとって＊』
第162話『恐竜さんこんにちわ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第163話『蛙大きいか？＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第164話『ケチンボ王様＊』
第165話『春よ来い＊』
第166話『怪獣ヘルプゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第167話『袋作り怪獣アミモノー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第168話『ラブレター怪獣ペンピツー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第169話『打ち上げ花火＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第170話『カバとスッポン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第171話『怪獣メンドミー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第172話『足生やし怪獣アシハエール＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第173話『氷の家造り＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第174話『おいしい汁を吸わせて＊』
第175話『七面鳥の七面相＊』
第176話『玉のりタマゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第177話『看護怪獣ホータイヘン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第178話『槍投げ怪獣エイヤットー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第179話『花壇を守って下さい＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第180話『怪獣オバケツ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第181話『蓑よどこへ行く＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第182話『落書は消えない＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第183話『子供に負けたガンマン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第184話『嘴がほしいキツツキ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第185話『暴れ牛をつかまえて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第186話『怪獣・ジモグリー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第187話『雪溶かし怪獣ネップー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第188話『どうぞう歩かせて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第189話『ゴンベエが種蒔きゃ＊』
(注記)資料１では「権兵衛が種蒔きゃ…」と表記。
第190話『背中のかゆいカメ君＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第191話『怪獣ドラネコゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第192話『角を作って＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第193話『怪獣ドカタン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第194話『火の鳥がやって来た＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第195話『鉄砲ダマをなんとかして＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順

〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第64話『鴨とタマタマーの知恵くらべ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第65話『オンブ怪獣ラクチンダー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第66話『王様の自慢は…＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第67話『怪獣スタコーラ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第68話『花を召しませ＊』
第69話『蝶々をつかまえて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第70話『踏み切り番No１＊』
第71話『爆弾が大好物なの＊』
(注記)資料１では「爆弾が大好きなの」と表記。
第72話『ジャンプ怪獣ピョンピョン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第73話『努力しないで優勝する法＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第74話『ネズミ退治はこの手に限る＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第75話『怪獣モウギラー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第76話『透明人間を見せて＊』
第77話『哀れな恐妻家＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第78話『Ｘ線怪獣オミトオシー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第79話『黙って手を振りゃピタリと吸いつく＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第80話『マンガ食べます＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第81話『泳げない亀ちゃん＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第82話『長生きしたい雪ダルマ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第83話『パイロット救出作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第84話『落し物怪獣メッケタドン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第85話『怪獣エンストン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第86話『ゴムマリ怪獣ボヨヨーン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第87話『西部女にゃトゲがある＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第88話『過保護はカホゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第89話『ハオーッ！タマゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第90話『明日のお天気は…』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第91話『怪獣ラブラブゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第92話『ウサギと亀の駆け競べ＊』
第93話『怪獣コナゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
(注記)本話のみ資料１の表記を採用。資料２には第91話と同じ「怪獣ラブラブゴン」が記載されていたため。
第94話『洗濯物を乾かして＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第95話『狼が恐いの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第96話『雨がやんだら…＊』
『騒音防止法違反＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第98話『海底自転車散歩＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第99話『スイカ泥棒がゆく＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第100話『ゴミの山に花を…＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第101話『壁塗り怪獣ベッタベター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第102話『鉄橋を渡ると涙がこぼれる＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第103話『リンゴ園の惨事＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第104話『天災的芸術家＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第105話『笑いじょうごとおこりんぼ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第106話『誘拐魔をやっつけろ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第107話『入れ歯奪回作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第108話『ダイナマイトに火がついた＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第109話『怪獣ラヴハンター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第110話『白雪姫を助けろ＊』
第111話『金の卵を食べたいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第112話『マフィアを殺せ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
(注記)資料１では「殺」に「バラ」というルビあり。
第113話『怪獣ヨダレゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第114話『牛が逃げてくウシシシー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第115話『タイヤ怪獣グルグルー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第116話『世紀の傑作＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第117話『死斗ミイラ男＊』
第118話『近眼のワンちゃん＊』
第119話『牛の気持とハエの気持＊』
第120話『危うし赤ずきんちゃん＊』
第121話『鯨の悩み＊』
第122話『蜂蜜が食べたい＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第123話『怪獣ノミラー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第124話『お袋さんを捜して＊』
(注記)資料１では「ゴリラのお袋さん」と表記。
第125話『タマゴに負けたタマゴン＊』
第126話『故郷に帰してー＊』
第127話『ボクにも吸わせて＊』
第128話『改札係は大忙し＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第129話『トンネル掘りは楽じゃない＊』
第130話『イビキ怪獣ネンコロリン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
話『蚊とり怪獣カトラー＊』
〈資料より補足〉

かいけつタマゴン

1972年10月1日～1973年9月28日(第1～195話)　毎週月～土曜18時55分～19時
フジテレビ系／5分カラー・全195話

(データソース)本作も『カバ　トット』と同様、共通クレジットのオープニング以外は、現存する資料が限られている。確認できるのは、「梗概一覧」と書かれた各話サブタイトル、あらすじの資料(以下、資料1)と、各話サブタイトルと脚本家をまとめたリスト(以下、資料2)のみ。ただし、リストが放映No順に記載されている点が『カバ　トット』より恵まれている。それでも1年の放映期間中、どこに再放映が挟まったかという手がかりがない点は同じ。脚本家のリストにも空欄が多々見受けられる。本リストでは、竜の子プロ社内の上記2資料のうち、資料2をもとにサブタイトルと脚本家名を記載。ただし、資料2の記載が明らかな誤字と思われるものは、資料1を参考にして修正を施した。また、両者の資料でサブタイトル表記が極端にくい違う場合は、(注記)にその旨を記載した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌
作詞／竜の子プロ企画文芸　作曲／はやし.こば　(コロムビアレコード)
■音楽／はやし.こば
■声／[タマゴン](大平 透)・[ナレーター](大竹宏)
■製作／吉田竜夫、タツノコプロ■現像／東京現像所
(注記)AR台本に記載されたスタッフデータは以下の通り。
■原作／吉田竜夫■総監督／笹川ひろし
■音楽／はやし・こば■竜の子プロダクション、読売広告社、────、フジテレビ
■録音ディレクター／浜崎暎一■効果／イシダ・サウンドプロ
■録音／読広スタジオ、オムニバス・プロモーション、
アコースティック・スタジオ[第16週掲載分まで]、
T・E・A スタジオ[第17週掲載分より]、────、宮尾　登(読広)
■担当／小山高男[第4週掲載分より]、永井昌嗣(竜の子プロダクション)、
────、染野茂夫(読広)、大野　実(読広)

第1話『タマゴンはかいけつします＊』
第2話『怪獣オドロン＊』
第3話『モグラ君の海水浴＊』
第4話『空とぶ象さん＊』
第5話『やせた豚になりたい＊』
第6話『雄鶏にも卵を＊』
第7話『怪獣オタスケゴンと怪獣サメラー＊』
(注記)資料1では「無人島救出作戦」と表記。
第8話『怪獣プーラー＊』
(注記)資料1では「すいたプールで泳ぎたい」と表記。
第9話『怪獣ユキコンコン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／小山高男
(注記)資料1では「南の島に雪が降る」と表記。本話の脚本家名は、小山高生氏がシナリオの現物を所蔵していたことにより判明。
第10話『ボール怪獣ストライク＊』
〈資料より補足〉
■脚本／小山高男
(注記)資料1では「やったぁー・ストライクだ」と表記。本話の脚本家名は、小山高生氏がシナリオの現物を所蔵していたことにより判明。
第11話『高所恐怖症＊』
第12話『爆弾怪獣＊』
(注記)資料1では「爆弾の利用法」と表記。
第13話『怪獣ポンプラー＊』
第14話『キリンの首を伸して＊』
第15話『怪獣バッティングラー＊』
第16話『縦にも歩きたい＊』
第17話『地球の裏まで掘り進め＊』
〈資料より補足〉
■脚本／小山高男
(注記)本話の脚本家名は、小山高生氏がシナリオの現物を所蔵していたことにより判明。
第18話『怪獣チャッチーノミ退治＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第19話『俺様の歯を磨け＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第20話『お金をガードして＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第21話『なぐられ屋さん頼みます＊』
第22話『うちの亭主はきれい好き＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第23話『怪獣タネラー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第24話『怪獣アワシャボーン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第25話『寒がりのペンギン君＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第26話『走れ走れヒンケール＊』
第27話『ズッコケ犬小舎作り＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三枝かつじ
第28話『魚がいない水族館＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第29話『砂糖と塩がぶつかった＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第30話『金庫を守れ＊』
第31話『青いお空をかえして＊』
第32話『禁煙したいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第33話『火事だ火事だ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第34話『俺は決斗狂＊』
第35話『銀行襲撃に腕を貸せ＊』
第36話『煙突掃除はまかせとけ＊』
第37話『キャベツ畑の帝王＊』
第38話『お掃除怪獣キレイズキー＊』
第39話『新婚旅行は海の中＊』
第40話『世界一のお寝坊さん＊』
第41話『砂漠が海になっちゃった＊』
第42話『子守怪獣イナイイナイバー＊』
第43話『危うしタマゴン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第44話『ナマズラー登場＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第45話『テレビが見たいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第46話『海底宝探し＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第47話『おねんねしたいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第48話『ある日突然ターザンが＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第49話『機関銃に勝ちたいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第50話『缶切り忘れてきちゃったの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第51話『球拾いはまかせとけ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第52話『ジャジャ馬ならし＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第53話『ゴミ公害かいけつします＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第54話『棒高とび世界ビリ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第55話『ケーキ作りは楽じゃない＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
(注記)資料1では「ケーキ作りも楽じゃない」と表記。
第56話『星が欲しいの＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田宮　順
第57話『寒さ過ぎれば暑くなる＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第58話『悲しきセールスマン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第59話『悲しみに泣いておくれ＊』
第60話『ホームランを打ちたい＊』
第61話『暴走列車が行く＊』
〈資料より補足〉
■脚本／門　寿太
第62話『車はこれにかぎる＊』
第63話『草刈り怪獣カマゴン＊』

ダーソン長官(大宮悌二)、大統領(村松康雄)、隊　　長(田中康郎)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、白川忠志、坂本英明
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[係　員](平林尚三)、[側　近](芹川　洋)、[スピーカの声](横井光夫)

第98話『球形鉄獣／グレープボンバー』(1974年8月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、老母(島木綿子)、メッケル(富山　敬)、隊　　員(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、清山滋崇、山田政紀
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(２)](若本紀夫)、[隊　員(３)](宮下　勝)

第99話『傷だらけの／G_２号*』(1974年8月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊員(横井光夫)、隊　　員(松岡武司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、谷口守泰、白川忠志
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／高山幸直
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(１)](田口　昂*)、[隊　員(２)](俵　　一)

第100話『20年後の／ガッチャマン』(1974年8月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、マキシム博士(宮内幸平)、機　　長(横井光夫)、医　　師(川野耕司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)

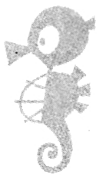
第101話『狙撃集団／ヘビーコブラ』(1974年9月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、係員(島　俊介)、情報部員(横井光夫)、〃(山下啓介)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、塩山紀生、鈴木紀子
■美術設定／野々宮恒人■背景／アイ・プロ■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[パイロット](松岡武司)

第102話『逆転！／チェックメイトＸ』(1974年9月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海永行■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、女カッツェ(此島愛子)、総裁Ｘ(田中信夫)、アンダーソン(大宮悌二)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[医　師](北村弘一)、[アナウンサー](横井光夫)

第103話『死を賭けた／G２号』(1974年9月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、医　　師(矢田　稔)、チーフ(野本礼三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、大凪和進、坂本英明
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／高田秀雄■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)

第104話『魔のブラックホール／大作戦』(1974年9月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、アンダーソン(大宮悌二)、正木(レッドインパルス)(青野　武)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、日下部光雄、島村美代子
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／森口洋輔■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)

第105話『地球消滅!／0002』(1974年9月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本、演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、研究員(芹川　洋)、隊　　員(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、山田政紀、坂本英明
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／高田秀雄■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田正治、――――、内間稔(読広)



第87話『三段合体鉄獣／パトギラー』(1974年5月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／ベルク・カッツェ(大平　透)、アリア(岡本茉莉)、署長(川野耕司)、刑　　事(鈴木泰明)、隊　　員(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、塩山紀生、鈴木紀子
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(A)その他](田中康郎)
(注記)ベルク・カッツェの声優が「大平　透」と表示されるが「寺島幹夫」の誤り。大平　透の出演はない。また、「アリア」は「マリア」の誤植である。

第88話『鉄獣スネーク／８２８』(1974年6月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本、演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ハワード教授(宮内幸平)、ヒューム教授(池田一臣)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、坂本英明、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　長](渡部　猛)、[ブラックバード隊員(A)](横井光夫)

第89話『三日月基地に／罠を張れ』(1974年6月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、スパイ衛星隊長(横井光夫)、パトロール隊長(神山卓三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／沼尻　東、塩山紀生、平山則雄
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)

第90話『装甲鉄獣*／マタンガー』(1974年6月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊員(横井光夫)、隊員(A)(芹川　洋)、フィンガー博士(川久保潔)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)

第91話『三日月基地／爆破計画完了』(1974年6月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、老人(田口　昂*)、隊　　員(木原正二郎)、隊　　員(肥土尚弘)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、野崎恒伸、杉井興治
■美術設定／野々宮恒人■背景／プロダクションわーと■仕上／氏田秀男
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(C)](横井光夫)、[隊　員(D)](国坂　伸)

第92話『三日月基地の最後』(1974年6月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海永行、陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、技師(肥土尚弘)、技　　師(横井光夫)、隊　　員(芹川　洋)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、山田政紀、坂本英明
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／浅上まり子
■特殊効果／向井　稔■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(B)](俵　　一)、[スピーカーの声](安原義人)

第93話『逆襲！／地中魚雷作戦』(1974年7月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、艦　　長(水島　晋)、隊　　員(松岡武司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、清山滋崇、山田政紀
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(B)](横井光夫)、[他の隊員](笹岡繁蔵)

第94話『電魔獣／アングラー』(1974年7月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／小山高男■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、母親(佐久間あい)、コミーベ博士(神山卓三)、医　　師(仲木隆司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[医　師(２)](横井光夫)、[所　員](俵　　一)

第95話『合体忍者大魔人』(1974年7月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、老人(千葉順二)、ジュピター隊員(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、坂本英明、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)

第96話『ギャラクター本部に／突入せよ』(1974年7月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ヘムラー(田中秀幸)、主　　人(石井敏郎)、ギャラクター隊長(加藤　修)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／沼尻　東、塩山紀生、平山則雄
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、鎌田 正治、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(Ａ２号)](横井光夫)

第97話『明日なき宇宙*船／レオナ３号』(1974年8月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、アン

〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　長](西崎章治)、[隊　員(A)](谷口　節)、[女　(母　親)](戸部光代)

第77話『成功した／ベルクカッツェ』(1974年3月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、大統領(仲木隆司)、ブラックバード隊長(横井光男)、少　年(白川澄子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／木村一郎、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／秋吉幸紀■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[国防長官](川野耕司)、[執　事](肝付兼太)、[母](落合美穂)

第78話『死斗!／海*底１万メートル』(1974年3月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松下幹夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ギャラクター隊長(相模太郎)、ギャラクター隊員(横井光男)、ギャラクター隊員(山下敬介)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、坂本英明、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女の声](吉*田理保子)

第79話『奪われた／ガッチャマン情報』(1974年3月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／徳増正彦、陶山　智■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉

■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ボロンボ博士(矢田　稔)、ル　ミ(塚*田恵美子)、ボーイ(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、野崎恒伸、平山則雄
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(A)](松岡武司)

第80話『よみがえれ！／ブーメラン』(1974年4月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／柳川　茂、陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、アッシャム国首相(横井光夫)、隊　員(川野耕司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／秋吉幸紀■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[子](広見多子)、[母](戸部光代)

第81話『ギャラクター島の／決斗』(1974年4月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、神父・アラン(富山　敬)、市　　長(宮内幸平)、隊　　員(中村武巳)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、沼尻　東、坂本英明
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[乞　食(１)](及川宏夫)

第82話『三日月サンゴ礁*を／狙え！』(1974年4月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　　員(田中康郎)、〃(横井光夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／平山則雄、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(Ｃ)](城山知馨夫)

第83話『炎の決死圏』(1974年4月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松下幹夫■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、カリグ博士(仁内達之)、隊　　長(横井光夫)、作業員(池田一臣)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、木村一郎、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)

第84話『くもの巣鉄獣／スモッグファイバー』(1974年5月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／徳増正彦■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、デーメン博士(小林清志)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[機　長](川野耕司)、[副　長](横井光夫)

第85話『Ｇ-４号は／あいつだ』(1974年5月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、デーブー(雨森雅司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、湖川　滋、坂本英明
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ブラック・バードのライダー(Ａ)](芹川　洋)、[ブラック・バードのライダー(Ｂ)](横井光夫)、[ブラック・バードのライダー(Ｃ)](肥土尚弘)
(注記)南部博士役として「大平　透」が表示されるが、クレジットミスであり、実際の出演はなし。

第86話『ギャラクターの／買占め作戦』(1974年5月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ギルマン(青野　武)、サリー(戸部光代)、艦　　長(平林尚三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[登山者(Ａ)](宮下　勝)、[登山者(Ｂ)](横井光夫)、[隊　員](仲木隆司)

■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、杉井興治、加藤　茂
■美術設定／大沼敏孝■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／秋吉幸紀■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[侍　女(A)](白川澄子)、[侍　女(B)](佐久間あい)、[隊　員(A)](戸部光代)、[兵　士](若本紀夫)

第67話『必殺!／ガッチャマンファイヤー』(1974年1月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、島　民(峰　恵研)、隊　員(若本紀夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／高橋資祐、本多　哲、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／小杉光芳■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／三木幸子■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[若い男(A)](田中秀幸)、[若い男(B)](大野　健)

第68話『粒子鉄獣／ミクロサターン』(1974年1月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本、演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、調査官(石井敏郎)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、坂本英明、山田政紀
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／秋吉幸紀■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[係　官(1)](村山　明)、[係　官(2)](仲木隆司)
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「陶山　智」と「鳥海永行」の連名になっている。

第69話『月下の墓場』(1974年1月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、おばさん(麻生美代子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　長](鈴木泰明)、[隊　員](鈴木清信)、[ギャラクター隊員(A)](清川元夢)、[住　民](谷口　節)

第70話『合体!死神少女』(1974年1月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／多村映美■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、女(沢田敏子)、マ　　ヤ(吉田理保子)、病院長(加藤　修)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／本多　哲、木村一郎、井口忠一
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男](鈴木清信)、[運転手](若本紀夫)

第71話『不死身の総裁Ｘ』(1974年2月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智、鳥海永行■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　　員(城山知馨夫)、〃(松岡武司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、平山則雄、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／秋吉幸紀■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[村　人](神山卓三)

第72話『大群!／ミニ鉄獣の襲来』(1974年2月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、戸　　田(矢田　稔)、兵　　士(有本欽隆)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／三木幸子■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[兵　士(B)](川野耕司)

第73話『カッツェを／追撃せよ！』(1974年2月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、コマンド部隊々長(川野耕司)、隊　　員(芹川　洋)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、坂本英明、山田政紀
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)

第74話『バードスタイル／の秘密』(1974年2月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　　長(芹川　洋)、女校長(森ひろ子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、杉井興治、脇　東海男
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／秋吉幸紀■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(A)](中村武己)、[アナウンサー](横井光男)、[女の子(A)](戸部光代)、[女の子(B)](佐久間あい)

第75話『海魔王／ジャンボシャコラ』(1974年3月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、竜の父(辻村真人)、誠　　二(野沢雅子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／三木幸子■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[船　員(A)](横井光男)、[船　員(B)](川野耕司)、[船　員(C)](山下啓介)

第76話『あばかれた／ブレスレット』(1974年3月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第2画面]／南部博士(大平　透)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ミスノ博士(北村弘一)、レッドインパルス・正木(横井光男)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／スタジオ・オニオン
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、矢羽コウジ(田中亮一)、士　官(石森達幸)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／大沼敏孝■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)

第57話『魔の白い海*』(1973年10月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ミラー老人(及川広夫)、司令隊長(神山卓三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／杉井興治、菊地晃夫、加藤　茂
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／永井昌嗣
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](横井光男)、[看　守](中野文吾)、[管制官の声](中村武己)

第58話『地獄の／メカブッタ』(1973年11月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松下幹夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　長(仁内達之)、所　長(松岡武司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、二宮常雄、坂本英明
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[守　衛(A)](横井光男)、[守　衛(B)](立壁和也)

第59話『怪獣メカ工場／の秘密』(1973年11月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、オガワラー博士(国坂　伸)、ナカモーラ助手(納谷六朗)、隊　長(村松康雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒人■背景／坂本信人■仕上／金原恵美
■特殊効果／向井　稔■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[舵手](横井光男)

第60話『科学忍者隊／G-6号』(1973年11月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、青年(G6号)(神谷　明)、隊　長(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、平山則雄、木村一郎
■美術設定／大沼敏孝■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／秋吉幸紀■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)

第61話『幻の／レッドインパルス』(1973年11月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、レッドインパルス隊長(実はカッツェ)(吉沢久嘉)、隊　員(城山知馨夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、加藤興治、山田政紀
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／金原恵美
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／羽場　武■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員(ギャラクターB*)](加藤正之)、[隊　員(ギャラクター①)](有本欽隆)

第62話『雪魔王／ブリザーダー』(1973年12月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、総裁X(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　長(沢りつお)、隊　員(若本紀夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[所　員](有本欽隆)

第63話『皆*殺しの／メカ魔球』(1973年12月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／多村映美■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(有本欽隆)、警視総監(山下敬介)、アナウンサー(納谷六朗)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／秋吉幸紀■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女アナ](佐久間あい)

第64話『死のクリスマス／プレゼント』(1973年12月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松下幹夫■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ソムレー将軍(加藤　修)、知　事(藤本　譲)、首　相(神山卓三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、杉井興治、加藤　茂
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／金原恵美
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／羽場　武■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[少年１](丸山裕子)、[少年２](清水マリ)、[少年３](白川澄子)、[少年４](千々松幸子)、[少年５](菊地紘子)、[少　女](麻上洋子)、[少　年(B)](桂令子)、[警　官](城山知馨夫)、[警　官](横井光夫)

第65話『合成鉄獣／スーパー・ベム』(1973年12月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　長(西崎昌二)、隊　員(納谷六朗)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、南家講二、菊地晃夫
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／熊尾義之、本多　哲、奥野芳久
■美術設定／中村光毅■背景／野々宮恒人■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ガードマン(A)](納谷六朗)、[ガードマン(B)](横井光男)

第66話『悪魔の／ファッションショー』(1973年12月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演[第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁X(田中信夫)、カリドン(沢田敏子)、フレーク王妃(谷　育子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄、菊地晃夫、池田茂之

Ｘ(田中信夫)、アンダーソン長官(大宮悌二)、隊　　長(若本紀夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、坂本英明、風間殊里
■美術設定／岡田和夫■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[科学者 博士(Ａ)](三田松五郎)、[科学者 博士(Ｂ)](徳丸　完)、[船長](市川　治)、[作業員(ＩＳＯ)Ａ](横井光雄)

第46話『死の谷の／ガッチャマン』(1973年8月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、男(野沢那智)、女隊長(沢田敏子)
■[声の出演][第２画面]／レインジャー部隊隊　　長(青野　武)、、〃隊員(横井光雄)、、アインシュタイン国首　　相(加藤　修)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／湖川　滋、阿部　司、横山淳一
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[アインシュタイン国秘書](芹川　洋)

第47話『悪魔の／エアー・*ライン』(1973年8月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、アンダーソン長官(大宮悌二)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／金原恵美
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[機　長](近水圭二)、[副操縦士](横井光男)、[スチュワーデス](吉田理保子)

第48話『カメラ鉄獣／シャッター・キラー』(1973年8月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊　　長(加茂嘉久)、隊　　員(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／南家講二、池田茂之、菊地晃夫
■美術設定／新井寓雄■背景／坂本信人■仕上／秋山まゆみ■特殊効果／吉沢　誠
■撮影／和光プロダクション■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)

第49話『恐怖のメカドクガ』(1973年9月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(納谷六朗)、隊　　員(城山知馨夫)、〃(松岡武司)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／飯山嘉昌、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／岡田和夫■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男　(Ａ)](城山知馨夫)、[隊員(Ａ)](横井光男)

第50話『白骨恐竜／トラコドン』(1973年9月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、刑　　事(藤本　譲)、所　　長(島　俊介)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／杉井興治、菊地晃夫、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒人■背景／小杉光芳■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／永井昌嗣
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[通信士](横井光雄)、[メイド](戸部光代)
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「陶山　智」と「鳥海永行」の連名になっている。

第51話『回転獣／キャタローラー』(1973年9月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、国防長官(水島　晋)、警察隊長(若本紀夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／二宮常雄、野崎恒仲、平山則雄
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男　(Ａ)](横井光雄)、[ケイカン](芹川　洋)

第52話『レッドインパルス／の秘密』(1973年9月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海永行■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、警察隊長(若本紀夫)、サ　　ブ(石丸博也)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、湖川　滋、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間 稔(読広)

第53話『さらば／レッドインパルス』(1973年9月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智、鳥海永行■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、アンダーソン長官(大宮悌二)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、ギャラクター隊長(青野　武)、、ナレーター(木下秀雄) 268
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／加藤　茂、奥野芳久、乾ひろ子
■美術設定／大沼敏孝■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)

第54話『怒りに燃えた／ガッチャマン』(1973年10月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、総裁Ｘ(田中信夫)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊　　長(田中康郎)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／須田正己、二宮常雄、山田政紀
■美術設定／野々宮恒人■背景／明石貞一■仕上／秋山まゆみ
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[代　表(Ａ)](横井光男)、[お巡り](沢りつお)

第55話『決死の／ミニ潜水艦』(1973年10月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、、隊員(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／大河原邦男■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒人■背景／プロダクションわーと■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／向井　稔■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤 誠(読広)

第56話『うらみの／バードミサイル』(1973年10月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／徳増正彦■演出／西牧秀雄

雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[兵　①](芹川　洋)、[警察大臣](石井敏郎)

第36話『ちびっ子／ガッチャマン』(1973年6月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、父(矢田　稔)、太　郎(つかせのりこ)、次　郎(松島みのり)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／乾ひろ子、菊地晃夫、平山則雄
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[船　長](横井光男)、[航海士](田口　昂*)、[通信員](若本紀夫)、[太郎の母](赤木葉子)、[船員](松岡武司)

第37話『電子怪獣／レンジラー』(1973年6月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／落合茂一■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、三輪博士(杉田俊也)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、飯山嘉昌、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ギャラクター技師(Ａ)](西崎章治)、[ギャラクター技師(Ｂ)](横井光雄)、[ギャラクター隊員(Ａ)](宮下　勝)、[ギャラクター隊員(Ｂ)](大野　健)

第38話『謎のメカニック／ジャングル』(1973年6月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、ムカシスキー(滝口順平)、隊　長(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／津野二郎、飯野　皓、湖川　滋
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[子供達](秋元千賀子)、[子供達](鈴木？)、[子供達](清野？)
(注記)資料補足の声の出演者のうち、「鈴木」「清野」に関しては苗字のみが記載されており、名前は不詳。

第39話『人喰い花ジゴキラー／前編』(1973年6月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、司令(国坂　伸)、隊　員(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、野崎恒仲、加藤　茂
■美術設定／岡田和夫■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女](福村　恵)

第40話『人喰い花ジゴキラー／後編』(1973年7月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、司　令(国坂　伸)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄■メカニックデザイン／中村光毅
■原動画／二宮常雄、杉井興治、菊地晃夫
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／加納次男
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[アナウンサー](横井光雄)

第41話『殺人ミュージック』(1973年7月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、デーモンファイブ(西山　蓮*)、〃(城山知馨夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／中村光毅■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／小杉光芳■背景／宮本清司■仕上／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](横井光雄)、[作業員](若本紀夫)、[女](塚*田恵美子)、[ピアノデーモンファイブ](石丸博也)、[ボーカルデーモンファイブ](塚*田恵美子)
(注記)ＡＲ台本では「デーモンファイブ」のメンバーのうち、西山　蓮*の役名に「エレキ」、城山知馨夫の役名に「ドラム」との補足がある。

第42話『大脱走／トリック作戦』(1973年7月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、ブラッキー(大木民夫)、カポン(城山知馨夫)、ジ　ム(神山卓三)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／中村光毅■原動画／湖川　滋、飯山嘉昌、坂本英明
■美術設定／岡田和夫■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊員Ａ*](横井光雄)、[隊員Ｂ*](松岡武司)、[囚人(２)](石森達幸)、[囚人(３)](横井光雄)

第43話『悪に消えた／ロマンス』(1973年7月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／徳増正彦■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、ロミナ(神谷　明)、ジュリア(塚*田恵美子)、、ナレーター(木下秀雄)
■作画監督／宮本貞雄
■メカニックデザイン／中村光毅■原動画／菊地晃夫、加藤　茂、奥野芳久
■美術設定／野々宮恒人■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／千田正芳
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[イリヤ](安原義人)、[隊　員](横井光雄)

第44話『ギャラクターの／挑戦状』(1973年7月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、陶山　智■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、アルケオ隊長(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、坂本英明、山田政紀
■美術設定／小杉光芳■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／有竹　厚
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[アナウンサー](宮下　勝)、[女](麻上洋子)

第45話『夜*霧のアシカ／忍者隊』(1973年8月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、少　女(吉田理保子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／村田四郎、木村一郎、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、――――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[所　長](宮内幸平)、[技師(Ａ)](横井光夫)

第26話『よみがえれ／ゴッドフェニックス』(1973年3月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／棚橋一徳
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、司令(水島　晋)、組合長(辻*村真人)、誠　二(野沢雅子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／大坂竹志、清水敬蔵、秋山恵美子
■美術設定／伊豆島君江■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／千田正芳
■制作担当／佐藤光雄、――――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／石黒　昇■声の出演／[手　下](横井光夫)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「石黒　昇」と記載されている。

第27話『ギャラクターの／魔女レーサー』(1973年4月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／大村節夫
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊長(国坂　伸)、ルシー(沢田敏子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、湖川　滋、菊地晃夫
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[兵　隊](横井光夫)

第28話『見えない悪魔』(1973年4月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、少年(つかせのりこ)、アナウンサー(鈴木泰明)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、乾ひろ子、加藤　茂
■美術設定／伊豆島君江■背景／宮本清司■仕上／池宮　隆
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／千田正芳
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊員(Ａ)](笹岡繁蔵)、[隊員(Ｂ)](村松康雄)、[隊員(Ｃ)](大野健)、[少年Ｄ](千々松幸子)

第29話『魔人ギャラックＸ』(1973年4月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／久保田圭司■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、女セコンド(坂井志満)、少　年(つかせのりこ)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／谷口守康、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](城山知馨夫)、[少年(Ａ)](麻上洋子)、[アナウンサー](横井光夫)

第30話『ギロチン鉄獣／カミソラール』(1973年4月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、(松山プロ芸文室)■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(青野　武)、司令官(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／湖川　滋、飯山嘉昌、菊地晃夫
■美術設定／中村光毅■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](安原義人)

第31話『南部博士／暗殺計画』(1973年4月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、女忍者隊長(森ひろ子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、乾ひろ子、坂本英明
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／桜井一郎
■制作担当／佐藤光雄、――――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女忍者(Ａ)](友近恵子)

第32話『ゲゾラ大作戦／(前編)』(1973年5月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、女(沢田敏子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、木村一郎、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／千田正芳
■制作担当／佐藤光雄、――――――、近藤 誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　長](西崎章治)、[隊員(Ｂ)](横井光夫)、[隊員(Ｃ)](神山卓三)、[隊員(Ｄ)](林　一夫)、[少　年](沢田和子)

第33話『ゲゾラ大作戦／(後編)』(1973年5月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、女(沢田敏子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／湖川　滋、飯山嘉昌、加藤　茂
■美術設定／中村光毅■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](横井光男)、[ロンパーク市長](神山卓三)、[少年(Ａ)の母](沢田和子)、[工場員(Ａ)](安原義人)

第34話『魔のオーロラ作戦』(1973年5月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／梅谷卓司、松山プロ芸文室■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊　長(加藤　修)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／菊地晃夫、加藤　茂、平山則雄
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、――――――、内間 稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ドクター](梓　欣造)、[副機長](田中亮一)、[アナウンサー](横井光男)

第35話『燃えろ砂漠の炎』(1973年5月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、国王(渡部　猛)、アリ王子(沢井正延)、空軍隊長(横井光雄)、、ナレーター(木下秀

■声の出演／[子供(B)](麻上洋子)、[船　長](市川　治)、[船客(A)](城山知馨夫)、[船客(B)](峰　恵研)、[兵　隊](西山　連)

第15話『恐怖の／クラゲ レンズ』(1973年1月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／湖川　滋、横山淳一、白鳥泉己
■美術設定／野々宮恒男■背景／吉原一輔■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[機　長](藤本　譲)、[管制官](横井光夫)、[観測官](城山　堅)

第16話『無敵マシン／メカニカ』(1973年1月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、ギャラクター隊長(飯塚*昭三)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／池宮　隆
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、────、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ギャラクター隊員Ａ](鈴木泰明)、[ギャラクター隊員Ｂ](笹岡繁蔵)、[ギャラクター隊員Ｃ](大野　健)

第17話『昆虫大作戦』(1973年1月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、子　供(野沢雅子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、加藤　茂、南家講二
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／今西和政
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[子供(B)](東　美江)、[子供(C)](麻上洋子)、[警官(A)](石井敏郎)、[隊　長](岡部政明)
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「陣野　修」と「陶山　智」の連名になっている。

第18話『復讐！／くじら作戦』(1973年1月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、司令隊長(田中康郎)、隊　員(横井光雄)、水　夫(市川　治)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、飯山嘉昌、杉井興治
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)

第19話『地獄の／スピード・レース』(1973年2月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、ルーマン国王(千葉耕市)、ルーカー殿下(西川幾雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／湖川　滋、星川達男、阿部　司
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)

第20話『科学忍者隊／危機一発』(1973年2月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／大村節夫
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(加藤　修)、操作員(城山知馨夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／飯山嘉昌、平山則雄、森　安夫
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[運転手](横井光雄)

第21話『総裁Ｘは誰れだ』(1973年2月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、ヘンジンマン博士(槐　柳二)、アナウンサー(原田一夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／谷口守泰、池田順一、村中博美
■美術設定／野々宮恒男■背景／宮本清司■仕上／池宮　隆
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／今西和政
■制作担当／佐藤光雄、────、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男(ギャラクター)(Ａ)](横井光雄)

第22話『火の鳥／対／火喰い竜』(1973年2月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智、鳥海永行■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、乾ひろ子、杉井興治
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、────、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[代表(Ａ)](三田松五郎)、[代表(Ｂ)](藤城裕士)、[マンモスタイガー司令](横井光夫)

第23話『大暴れ／メカ・ボール』(1973年3月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／山田勝久
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、アナウンサー(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／村田四郎、木場田　実、細谷秋夫
■美術設定／大河原邦男■背景／田原優子■仕上／スタジオ・トップ
■特殊効果／朝沼清良■撮影／福田　武■編集／谷口　肇■進行／小池　進
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男](笹岡繁蔵)、[女](秋元千賀子)

第24話『闇に笑う／ネオン巨人』(1973年3月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩屋　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、科学者(立壁和也)、隊長(ブラックバード)(飯塚*昭三)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、飯山嘉昌、杉井興治
■美術設定／中村光毅■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、────、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[職　員](横井光夫)、[科学者Ｃ](若本紀夫)

第25話『地獄の帝王／マグマ巨人』(1973年3月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男

〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、中原所長(宮内幸平)、ナオミ(栗　葉子)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／田中　保、杉井興治、加藤　茂
■美術設定／野々宮恒男■背景／吉原一輔■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊長(メカデゴンの)](仁内達之)

第５話『地獄／の／幽霊艦隊』(1972年10月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、潜水艦長(安原義人)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、平山則雄、野崎恒伸
■美術設定／野々宮恒男■背景／明石貞一■仕上／加藤　博
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[船　長](諏訪孝二)

第６話『ミニ・ロボット／大作戦』(1972年11月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／案納正美
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊　　長(田中康郎)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／白土　武、土屋幹夫、杉井興治
■美術設定／中村光毅■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[隊　員](横井光夫)

第7話『ギャラクター／の／大航空ショー』(1972年11月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、カッツェンベルヒ(寺島幹夫)、隊長(立壁和也)、隊　　員(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、平山則雄、杉井興治
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／今西和政
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)

第８話『三日月／サンゴ礁の秘密』(1972年11月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、係　　員(横井光雄)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、菊地晃夫、加藤　茂
■美術設定／伊豆島君江■背景／吉原一輔■仕上／加藤　博
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／新井良蔵
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[男の子(Ａ)](つかせのり子)、[男の子(Ｂ)](友近恵子)

第９話『月よりの悪魔』(1972年11月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊　　長(加藤　修)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／杉井興治、木村一郎、七戸洋之助
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、―――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[司　令](城山知馨夫)、[男](石森達幸)

第10話『地底怪獣大戦争』(1972年12月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、管制官(芹沢　洋)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／佐々門信芳、札木幾夫、川尻善昭
■美術設定／中村光毅■背景／宮本清司■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、―――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[所　員](横井光雄)

第11話『謎の／レッド・インパルス』(1972年12月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊長(レッドインパルス)(吉沢久嘉)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／乾ひろ子、須田正己、杉井興治
■美術設定／野々宮恒男■背景／吉原一輔■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治
■制作担当／佐藤光雄、―――――、近藤誠(読広)

第12話『大喰い怪獣／イブクロン』(1972年12月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、隊　　長(青野　武)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／白土　武、土屋幹夫、杉井興治
■美術設定／野々宮恒男■背景／岡田和夫■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／新井良蔵
■制作担当／佐藤光雄、―――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[アナウンサー](横井光夫)、[手　下](村山　明)、[子　供](麻上洋子)

第13話『謎の赤い砂』(1972年12月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、長　　老(及川広夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／二宮常雄、飯山嘉昌、平山則雄
■美術設定／伊豆島君江■背景／明石貞一■仕上／加藤　博
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／今西和政
■制作担当／佐藤光雄、―――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[通信士](立壁和也)、[研究者(１)](安原義人)、[研究者(２)](三田松五郎)、[隊　長](坂　脩)

第14話『恐怖の／アイス・キャンダー』(1972年12月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／大村節夫
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、少女(恵比寿まさ子)、老　　人(上田敏也)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／大河原邦男
■作画監督／宮本貞雄■原動画／広田　全、平山則雄、飯山嘉昌
■美術設定／伊豆島君江■背景／宮本清司■仕上／稲垣行雄
■特殊効果／吉沢　誠■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／井上　明
■制作担当／佐藤光雄、―――――、近藤誠(読広)
〈資料より補足〉

雅司)、ハナグロ(滝口順平)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ジーナ(友近恵子)、船　　長(国坂　伸)、男(峰　恵研)、〃(肝付兼太)、〃(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／近江美樹子■原画／アニメ・プロ
■動画／五十嵐和子■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第49話『地獄島は死んでいる＊』(1972年12月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、、お爺さん(矢田　稔)、、妖　　精(池田昌子)
■[声の出演][第２画面]／ジーナ(友近恵子)、、入　　道(塩見竜介)、、ナレーター(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／金原恵美■原画／ベンゲシャン
■動画／川端　宏■背景／アップルズ■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第50話『よみがえれ！地獄島＊』(1972年12月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　　精(池田昌子)、ジーナ(友近恵子)、大ガメ(遠藤　晴)
■[声の出演][第２画面]／入　　道(塩見竜介)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、赤ヒゲ(立壁和也)、、ナレーター(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／金原恵美■原画／内海勇夫
■動画／五十嵐和子■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第51話『悲しいイブに鐘が鳴る＊』(1972年12月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、鶴田節子■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ジーナ(友近恵子)、ジュリエッタ(松島みのり)、隊長(石森達幸)、兵(田中康郎)、牧　　師(宮内幸平)、女の子(千々松幸子)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／近江美樹子■原画／藤原万秀
■動画／阿部　司■背景／サン・アート■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／天平フィルム■編集／竹中京子■進行／狩野耕一

273

第52話『ぼくの夢は輝く星に＊』(1972年12月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、近藤若菜■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　　精(池田昌子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演][第２画面]／ジーナ(友近恵子)、赤ヒゲ(立壁和也)、古　　木(宮内幸平)、医　　者(肝付兼太)、村　　人(松島みのり)、男の子(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／金原恵美■原画／林　政行
■動画／川端　宏■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／天平フィルム■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

科学忍者隊ガッチャマン

1972年10月１日～1974年９月29日(第１～105話)　毎週日曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・全105話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌
倒せ！ギャラクター　作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／小林亜星
歌／コロムビアゆりかご会　コロムビア・レコードSCS-505[以上、1～22話]
ガッチャマンの歌　　作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／小林亜星
歌／子門真人　コロムビア・レコードSCS-505
■原作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三、陶山　智■総監督／鳥海永行
■音楽／ボブ佐久間■効果／イシダ・サウンドプロ
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■主題歌
ガッチャマンの歌　　作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／小林亜星
歌／子門真人　コロムビア・レコードSCS-505[以上、2～22話]
倒せ！ギャラクター　作詞／竜の子プロ企画文芸部　作曲／小林亜星
歌／コロムビアゆりかご会　コロムビア・レコードSCS-505
■キャラクターデザイン／吉田竜夫
■録音ディレクター／斯波重治■録音／読広スタジオ、オムニバス・プロ
■現像／東洋現像所■プロデューサー／九里一平
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ■協力／フジテレビ
〈資料より補足〉
■制作担当／前里元義■録音／桑原邦男、石川武人(読広)

第１話『ガッチャマン／対／タートル・キング』(1972年10月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、竜(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、アンダーソン長官(大宮悌二)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総　　裁(田中信夫)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、田中　保、杉井興治
■美術設定／中村光毅■背景／野畑照子■仕上／岡嶋国敏
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[代　表(Ａ)](石井敏郎)、[隊　長](藤本　譲)

第２話『魔の／お化け空母／現わる』(1972年10月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陶山　智■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、総裁Ｘ(田中信夫)、司　　令(藤本　譲)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／田中英二、西城隆司、菊地晃夫
■美術設定／中村光毅■背景／明石貞一■仕上／池宮　隆
■特殊効果／朝沼清良■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／高山幸直
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[参　謀](村山　明)

第３話『嵐を呼ぶ／ミイラ巨人』(1972年10月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ガッチャマン(森　功至)、ジュン(杉山佳寿子)、ジョー(佐々木功)、じん平(塩谷　翼)、りゅう(兼本新吾)
■[声の出演][第２画面]／南部博士(大平　透)、ベルク・カッツェ(寺島幹夫)、高原博士(吉沢久士)、誠(喜多道枝)、、ナレーター(木下秀雄)
■メカニックデザイン／中村光毅
■作画監督／宮本貞雄■原動画／須田正己、杉井興治、七戸洋之助
■美術設定／中村光毅■背景／明石貞一■仕上／向井　稔
■特殊効果／朝沼清良■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄
■制作担当／佐藤光雄、――――、内間稔(読広)
〈資料より補足〉
■声の出演／[部　下](池水通洋)、[機　長](水鳥鉄夫)

第４話『鉄獣／メカデゴンに／復しゅうだ』(1972年10月22日放映)

第34話『ぼくは神の子モックだ！＊』(1972年8月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／森　忠明■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、赤ヒゲ(立壁和也)、妖　精(池田昌子)、親　方(富田耕生)
■[声の出演[第２画面]／司　教(千葉耕市)、その娘(富田千代美)、君　主(満井哲夫)、隊　長(飯塚昭三)、博　士(肝付兼太)、兵　隊(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／稲垣行雄■原画／湖川　滋
■動画／阿部　司■背景／渡辺　毅■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／平山昭夫■編集／竹中京子■進行／狩野耕一

第35話『墓守怪獣よいつまでも！＊』(1972年8月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／森　忠明■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／子怪獣(高橋和枝)、その父(島田　彰)、その母(芝田清子)、親　方(富田耕生)、隊　商(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／桑原玲子■原画／西城隆詩
■動画／タマプロダクション■背景／新井寅雄■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第36話『ぼくの魔法は勇気と知恵だ！＊』(1972年9月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／ドラゴン(水島　晋)、ゲ　ロ(渡部　猛)、レイレ姫(友近恵子)、ライオン(緑川　稔)、ワ　ニ(田中康郎)、ウサギ(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／稲垣行雄■原画／西城隆詩
■動画／タマプロダクション■背景／千葉秀雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／中野政則■編集／竹中京子■進行／狩野耕一

第37話『悪い夢は砂漠にすてろ！＊』(1972年9月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、赤ヒゲ(立壁和也)、親　方(富田耕生)
■[声の出演[第２画面]／ハゲタカの子(沢田和子)、門　番(安田　隆)、〃(城山知馨夫)、ド　ロ(渡部　猛)、人　形(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／桑原玲子■原画／永樹凡人
■動画／福山政敏■背景／新井寅雄■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第38話『サーカス一座はもういやだ！＊』(1972年9月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／柴田夏余■演出／西谷克和
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、赤ヒゲ(立壁和也)、親　方(富田耕生)
■[声の出演[第２画面]／ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、ダブル(田中信夫)、ド　ロ(渡部　猛)、ナレーター(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／稲垣行雄■原画／内海勇夫
■動画／泉口　薫■背景／渡辺　毅■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／竹中京子■進行／米津和彦

第39話『飛べ気球！ふるさとへ＊』(1972年9月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、、少　年(神谷　明)、、犬(永井一郎)
■[声の出演[第２画面]／鳥(島田　彰)、カモメ(立壁和也)、、〃(田口　昂*)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／桑原玲子■原画／西城隆詩
■動画／福山政敏■背景／新井寅雄■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／中野政則■編集／平野　勇■進行／狩野耕一

第40話『火喰い親方をやっつけろ！＊』(1972年10月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／親　方(富田耕生)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、ド　ロ(渡部　猛)、オットセイ(遠藤　晴)、インコ(仲木隆司)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／稲垣行雄■原画／アニメルーム
■動画／川端　宏■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／トランス・アーツ■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第41話『立ちあがれ！大木魔神＊』(1972年10月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　精(池田昌子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演[第２画面]／大木魔神(立壁和也)、ノーラ(林　洋子)、隊　長(渡部　猛)、村　人(宮内幸平)、〃(肝付兼太)、〃(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／桑原玲子■原画／湖川　滋
■動画／ベンゲシャン■背景／町野好昭■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／平山昭夫■編集／竹中京子■進行／米津和彦

第42話『悪夢の精よ さようなら＊』(1972年10月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、悪夢の精(千葉耕市)
■[声の出演[第２画面]／老　人(肝付兼太)、その孫(桂　玲子)、隊　長(渡部　猛)、兵　士(立壁和也)、〃(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／岡嶋国敏■原画／内海勇夫
■動画／阿部　司■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／平野　勇■進行／狩野耕一

第43話『死のトリデを打ちやぶれ！＊』(1972年10月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／西谷克和
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／ブラッド(西　桂太)、マリオ(沢田和子)、隊　長(肝付兼太)、兵(若本紀夫)、〃(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／稲垣行雄■原画／湖川　滋
■動画／ベンゲシャン■背景／町野好昭■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第44話『ぼくを燃やして！＊』(1972年10月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、女の子(松島みのり)、ウサギ(千々松幸子)
■[声の出演[第２画面]／男の子(西川幾雄)、〃(石丸博也)、〃(神谷　明)、牧師(肝付兼太)、救援隊(立壁和也)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／金原恵美■原画／Ｆプロダクション
■動画／川端　宏■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／平山昭夫■編集／平野　勇■進行／米津和彦

274

第45話『雪女よ静かに眠れ＊』(1972年11月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／森　忠明■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　精(池田昌子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演[第２画面]／雪　女(北浜晴子)、アリス(松島みのり)、テレス(千々松幸子)、隊　長(鈴木泰明)、村　長(西山　連)、農　婦(相良孝子)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／向井　稔■原画／内海勇夫
■動画／阿部　司■背景／渡辺　毅■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第46話『賞金かせぎを追っぱらえ！＊』(1972年11月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／猟　師(渡部　猛)、医　者(永井一郎)、エリナ(桂玲子)、、ナレーター(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■カラー設定／金原恵美■原画／Ｆプロダクション
■動画／アニメ・プロ■背景／新井寅雄■特殊効果／吉沢　誠
■仕上／向井　稔■撮影／天平フィルム■編集／竹中京子■進行／横尾　潔

第47話『木はみんなぼくの仲間＊』(1972年11月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　精(池田昌子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演[第２画面]／赤ヒゲ(立壁和也)、植木屋(宮内幸平)、スミヤキ隊長(加藤　修)、フクロウ(肝付兼太)、兵　隊(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■カラー設定／金原恵美■原画／内海勇夫
■動画／泉口　薫■背景／サン・アート■特殊効果／朝沼清良
■仕上／向井　稔■撮影／細野　正■編集／竹中京子■進行／米津和彦

第48話『海魔王の怒りにいどめ！＊』(1972年11月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、ケンケン(雨森

■美術設定／小林七郎■原動画／内海勇夫■背景／太刀川筆子
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／広江　武

第20話『負けるな！魔法のバイオリン／(後編)＊』(1972年5月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、将　軍(木下秀雄)、総　理(今西正男)、バイオリン(塩見竜介)
■[声の出演][第２画面]／王　様(寺島幹夫)、王　妃(荘司美代子)、姫(池田昌子)、牢　番(肝付兼太)、兵　隊(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■原動画／須田正己■背景／新井寅雄
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第21話『ぼくがさがした宝物＊』(1972年5月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、レオン(神谷明)、アンナ(栗　葉子)
■[声の出演][第２画面]／フランコ(野沢雅子)、その父(島田　彰)、ドメンコ(東美江)、漁　師(肝付兼太)、〃(武川　信)
■美術設定／中村光毅■原動画／タマプロダクション■背景／山口幸子
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第22話『カナシミ博士さようなら＊』(1972年5月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、ケンケン(相模太郎)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演][第２画面]／カナシミ博士(千葉順二)、ロ　バ(槐　柳二)、タヌキ(今西正男)、老　婆(遠藤　晴)、母ウサギ(芝田清子)、子ウサギ(千々松幸子)
■美術設定／大沼敏孝■原動画／湖川　滋■背景／渡辺　毅
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／広江　武

第23話『おかねのなる木を育てよう＊』(1972年6月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／鳥海永行

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ケンケン(相模太郎)、ハナグロ(滝口順平)、老　婆(遠藤　晴)、親リス(芝田清子)、子リス(高坂真琴)、男(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／貝瀬達代
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第24話『人魚とともに消えた夢／(前編)＊』(1972年6月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、人魚姫(松島みのり)、老人魚(麻生美代子)、親　方(富田耕生)、アンナ(栗　葉子)
■[声の出演][第２画面]／キャプテンキット(矢田耕司)、その手下(立壁和也)、〃(肝付兼太)、フランコ(野沢雅子)、ジーノ(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■原動画／内海勇夫■背景／新井寅雄
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第25話『人魚とともに消えた夢／(後編)＊』(1972年6月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、人魚姫(松島みのり)、老人魚(麻生美代子)、親　方(富田耕生)、大ナマコ(加藤　修)
■[声の出演][第２画面]／キャプテンキット(矢田耕司)、その手下(西山　連)、イルカ(立壁和也)、ノコギリザメ(肝付兼太)、アンナ(栗　葉子)、フランコ(野沢雅子)
■美術設定／新井寅雄■原動画／須田正己■背景／山口幸子
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第26話『おじいちゃん死なないで！＊』(1972年6月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、赤ヒゲ(立壁和也)
■[声の出演][第２画面]／ケンケン(相模太郎)、ハナグロ(滝口順平)、大　蛇(田中康郎)、〃(兼本新吾)、〃(増岡　弘)、男の子(神谷　明)
■美術設定／小林七郎■原動画／タマプロダクション■背景／岡田和夫
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第27話『心の翼をありがとう＊』(1972年7月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、カラス天狗(西山　連)、子ガラス(山本嘉子)
■[声の出演][第２画面]／リーナ(菅谷政子)、農　夫(立壁和也)、カラス(徳丸　完)、〃(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■原動画／アニメルーム■背景／渡部　毅
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第28話『ぼくの脚に根がはえた！＊』(1972年7月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／田井洋子■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、アフリー(槐　柳二)
■[声の出演][第２画面]／紳　士(水鳥鉄夫)、その夫人(芝田清子)、木こり(峰恵研)、フランコ(野沢雅子)、ジーノ(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■原動画／タマプロダクション■背景／新井寅雄
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第29話『山賊どもの前にたて！＊』(1972年7月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、パズーラ(渡部　猛)
■[声の出演][第２画面]／ルチア(松尾佳子)、その父(宮内幸平)、〃　母(荘司美代子)、フランコ(野沢雅子)、その父(島田　彰)、親　方(富田耕生)
■美術設定／新井寅雄■原動画／湖川　滋■背景／町野好昭
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第30話『ぼくはピエロじゃない！＊』(1972年7月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／岡崎邦彦
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、ケンケン(相模武)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演][第２画面]／親　方(富田耕生)、赤ヒゲ(立壁和也)、少　女(千々松幸子)、男(神谷　明)
■美術設定／大沼敏孝■原動画／須田正己■背景／小林七郎
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／吉沢　誠■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／竹中京子■進行／狩野耕一

第31話『自由にむかって逃げるんだ！＊』(1972年8月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、赤ヒゲ(立壁和也)、ケンケン(相模　武)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演][第２画面]／親　方(富田耕生)、ド　ロ(渡部　猛)、コオロギ(肝付兼太)、女　客(相良孝子)、男　客(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■原動画／タマプロダクション■背景／新井寅雄
■カラー設定／桑原玲子■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

第32話『別れの船は暗黒大陸[アフリカ]へ＊』(1972年8月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西谷克和
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　精(池田昌子)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)
■[声の出演][第２画面]／親　方(富田耕生)、ド　ロ(渡部　猛)、赤ヒゲ(立壁和也)、紳　士(北村弘一)、客(遠藤　晴)、〃(肝付兼太)
■美術設定／多田喜久子■原動画／スタジオジョーク■背景／新井寅雄
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／吉沢　誠■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／竹中京子■進行／米津和彦

第33話『オモチャだっておこるさ！＊』(1972年8月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、デニス(田中亮子)、その父(田村錦人)、少　女(恵比寿まさ子)、船　長(肝付兼太)
■[声の出演][第２画面]／猫(東　美江)、マリオ(山本嘉子)、ロザンナ(麻上洋子)、ラルフ(神谷　明)、木の声(立壁和也)
■美術設定／大沼敏孝■原動画／アニメルーム■背景／小林七郎
■カラー設定／桑原玲子■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／横尾　潔

兼太)、妖　　精(池田昌子)、フランコ(山本圭子)
■[声の出演[第２画面]／ノ ー ラ(林　洋子)、ジ ー ノ(白川澄子)、そ の 父(神山卓三)、そ の 母(前田敏子)、女 の 子(五島美恵子)、男 の 子(千々松幸子)
■美術設定／中村光毅■原動画／木村一郎■背景／小関俊之
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第６話『ぼくの心にすむ悪魔／(前編)＊』(1972年2月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、魔　　女(肝付兼太)、レオナール 夫 人(来宮良子)
■[声の出演[第２画面]／フランコ(野沢雅子)、そ の 父(島田　彰)、マ ル コ(神谷　明)、そ の 父(石井敏郎)、アン ナ(栗　葉子)、ジ ー ノ(杉山佳寿子)
■美術設定／中村光毅■原動画／須田正己■背景／小林七郎
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／広江　武

第７話『ぼくの心にすむ悪魔／(後編)＊』(1972年2月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、魔　　女(麻生美代子)
■[声の出演[第２画面]／レオナール 夫 人(来宮良子)、ア ン ナ(栗　葉子)、そ の 母(沢田敏子)、ソフィア(石川留美子)、そ の 母(野沢雅子)、マ リ オ(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／内海勇夫■背景／小関俊之
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第８話『悪い妖精が呼んでいる＊』(1972年2月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／寺田信義■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)
■[声の出演[第２画面]／ケーシー(武藤礼子)、先　　生(神山卓三)、フランコ(野沢雅子)、子　　供(立壁和也)、〃(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／西　芳邦
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／萩原和義

第９話『ぼくは哀れな悪魔人間＊』(1972年2月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、親　　方(渡部　猛)
■[声の出演[第２画面]／ブルーノ(沢田和子)、カ ラ ス(槐　柳二)、菓 子 屋(立壁和也)、人　　形(駒村クリ子)、〃(松金よね子)、〃(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／木村一郎■背景／新井寅雄
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第10話『ぼくの鼻がのびる時＊』(1972年3月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、妖　　精(池田昌子)、サンドロ(峰　恵研)、町　　長(雨森雅司)
■[声の出演[第２画面]／ケンケン(相模　武)、ハナグロ(滝口順平)、フランコ(野沢雅子)、ロベルト(島田　彰)、乞　　食(宮内幸平)、男 の 子(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／内海勇夫■背景／小林七郎
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／広江　武

第11話『母の愛が知りたいの＊』(1972年3月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、フランコ(野沢雅子)
■[声の出演[第２画面]／コ ー ル(駒村クリ子)、そ の 母(前田敏子)、子　　供(松金よね子)、〃(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／須田正己■背景／小関俊之
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第12話『ぼくはもうだまされない＊』(1972年3月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)
■[声の出演[第２画面]／赤 ヒ ゲ(立壁和也)、ケンケン(雨森雅司)、ハナグロ(滝口順平)、ノ ー ラ(林　洋子)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／新井寅雄
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／萩原和義

第13話『ぼくにだって夢がある＊』(1972年3月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、紳　　士(石井敏郎)
■[声の出演[第２画面]／メ レ リ(岡本茉利)、そ の 父(島　俊介)、　〃　母(荘司美代子)、イボンヌ(東　美江)、カン ヌ(恵比寿まさ子)、ミ コ ル(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／湖川　滋■背景／大沼敏孝
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第14話『ぼくの樫の木はのこった＊』(1972年4月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／石森史郎■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、カ ラ ス(槐　柳二)
■[声の出演[第２画面]／社　　長(北村弘一)、フランコ(野沢雅子)、そ の 父(島田　彰)、技　　師(武川　信)、山　　鳥(中村武巳)、リ　　ス(及川広夫)
■美術設定／中村光毅■原動画／内海勇夫■背景／多田喜久子
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／広江　武

第15話『木の脚だって生きている＊』(1972年4月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)
■[声の出演[第２画面]／ケンケン(相模　武)、ハナグロ(滝口順平)、フランコ(野沢雅子)、子　　供(千々松幸子)、〃(神谷　明)
■美術設定／中村光毅■原動画／須田正己■背景／西　芳邦
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第16話『教えてよ サル先生＊』(1972年4月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)
■[声の出演[第２画面]／ケンケン(相模太郎)、ハナグロ(滝口順平)、チ カ ロ(富山　敬)、夫　　人(森ひろ子)、ベルロック(芝田清子)
■美術設定／多田喜久子■原動画／アニメルーム■背景／新井寅雄
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／萩原和義

第17話『ぼくの希望が飛んでいく＊』(1972年4月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、ヒ ナ 鳥(松島みのり)、赤 ヒ ゲ(立壁和也)
■[声の出演[第２画面]／フランコ(野沢雅子)、コウノトリ(石井敏郎)、フクロウ(雨森雅司)、ウ サ ギ(鳥山京子)、生　　徒(高坂真琴)、男 の 子(神谷　明)
■美術設定／多田喜久子■原動画／タマプロダクション■背景／新井寅雄
■カラー設定／稲垣行雄■特殊効果／朝沼清良■仕上／向井　稔
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一

第18話『人形だって偉いんだ＊』(1972年5月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／柴山達雄■演出／高橋資祐
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、領　　主(渡部　猛)
■[声の出演[第２画面]／ケンケン(相模太郎)、ハナグロ(滝口順平)、アン ナ(栗　葉子)、村　　人(遠藤　晴)、カル ロ(仲木隆司)、召 使 い(武川　信)
■美術設定／大沼敏孝■原動画／湖川　滋■背景／小関俊之
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／高山幸直■仕上／向井　稔
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第19話『負けるな！魔法のバイオリン／(前編)＊』(1972年5月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モ ッ ク(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　　精(池田昌子)、フクロウ(塩見竜介)
■[声の出演[第２画面]／王　　様(寺島幹夫)、王　　姫(荘司美代子)、赤 ヒ ゲ(立壁和也)、アン ナ(栗　葉子)、フランコ(野沢雅子)、農　　夫(植田敏生)

■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／加藤　博■制作担当／佐藤光雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[三上参謀](敦賀岑一)

第25話『最後の決断』(1971年9月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[阿南陸相](富田耕生)、[米内海相](大木民夫)、[鈴木首相](勝田　久)
■[声の出演][第２画面]／[東郷外相](木下秀雄)、[下村　宏](矢田　稔)、[迫　水](寺島幹夫)、[親　泊](仲村秀生)
■[声の出演][第３画面]／[海軍情報官](城山智馨夫)、[陸軍情報官](藤本　譲)、[左近司](三田松五郎)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■作画監修／宮本貞雄■美術設定／中村光穀
■原動画／飯山嘉昌、湖川　滋、須田正己■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄■制作担当／佐藤光雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[記　者(Ｂ)](安田　隆)

第26話『川上監督の決断＊』(1971年9月25日放映)
〈資料より補足〉
■演出／佐藤孝吉■構成／岡本克己■音楽／越部信義
■制作／日本テレビ、読売広告社■プロデューサー／増*田善次郎
■撮影／影山雅英、木村静*雄■編集／窪岡文男■音響効果／今泉
■演出スタッフ／佐藤孝吉、三島岩夫■営業担当／山中徹夫、渡貫康子
■制作担当／内間　稔(読売)
■Ｓ・Ｗ／酒井昭一■ＣＡＭ／大沢　満、須田邦彦、小林秀樹
■ＭＩＸ／安西義雄■ＢＯＯＭ／笹川■照明／松村登貴雄■美術／小林庸尅
■出演　巨人軍／川上哲治 監督(スタジオ)、長島茂雄 (フィルム)、王　貞治(〃)
コロムビア専属／幹　和之　インタビュー／志生野温夫(ＮＴＶ)
ナレーター／田中信夫
(注記)テレビカメラによるスタジオ収録映像に、16ミリフィルムを交えて送る特別編。この話のみ、制作に竜の子プロダクションは加わっていないが、参考のため、判明する限りのスタッフ、キャストデータを訂正ＡＲ台本から拾ってみた。
番組冒頭のナレーション(訂正ＡＲ台本より)
「昭和十六年　真珠湾攻撃にはじまった太平洋戦争も　日本の優勢は半年であったのびきった戦線を押しもどされ追いつめられて　昭和二十年八月十五日を迎える塩跡と食糧不足の戦後は　やがてＧＮＰ二位の繁栄に変った。人生には決断の時がある。生死や一国の運命を賭ける一瞬も決断なら、今、私達の身辺にも極く日常的に決断を迫られる時が少くない
今日は私達の日常とすぐ隣合せた処にある、プロ野球の世界をとりあげ、巨人軍川上監督の場合を中心に追ってみることにした。
プレーする監督にとって、野球は決断の連続である」

樫(かし)の木(き)モック

1972年１月４日～1972年12月26日(第１～52話)　毎週火曜19時～19時30分
フジテレビ系／30分カラー・全52話

(データソース)原則としてオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■企画･制作／吉田竜夫■構成／鳥海尽三■総監督／原　征太郎
■音楽／越部信義、音楽企画センター■効果／イシダ･サウンドプロ
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■文芸担当／森　忠明
■キャラクター デザイン／吉田竜夫[1、2話]、九里一平[3～14話]、天野喜孝[15～52話]
■作画監督／宮本貞雄[1～33話]、林　政行[34～52話]
■作画チーフ[1～33話]／杉井興治
■制作担当／栃平 吉和、──────、大野　実(読広)
■録音ディレクター／水本　完、オムニバス･プロ　＊14～41話は「水本　完」表記
■録音／読広スタジオ、平野　勝[1～4話]、棚岡　元[5～52話]■現像／東洋現像所
■プロデューサー／吉田健二、前里元義
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ■協力／フジテレビ

第１話『ぼくは悲しい木の人形＊』(1972年1月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／吉田竜夫、原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)、親　方(富田耕生)
■[声の出演][第２画面]／フランコ(野沢雅子)、アンナ(栗　葉子)、男の子(西川幾雄)、女の子(高坂真琴)、人　形(鈴木泰明)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／新井寅雄
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／栃平吉和

第２話『人形なんてもういやだ＊』(1972年1月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)
■[声の出演][第２画面]／親　方(富田耕生)、人　形(島田　彰)、〃(菅谷政子)、〃(仲木隆司)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／野畑照子
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／米津和彦

第３話『お願いぼくを信じて＊』(1972年1月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／石森史郎■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、妖　精(池田昌子)
■[声の出演][第２画面]／赤ヒゲ(立壁和也)、ケンケン(相模　武)、ハナグロ(滝口順平)、男の子(福原圭一)
■美術設定／中村光毅■原動画／アニメルーム■背景／小林七郎
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／狩野耕一
(注記)この回のみ、「脚本」「演出」クレジットが画面上寄りに表示された。

第４話『人形だって勇気があるんだ＊』(1972年1月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／石森史郎■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付兼太)、赤ヒゲ(立壁和也)、ケンケン(相模　武)
■[声の出演][第２画面]／ハナグロ(滝口順平)、ピイ公(あぼくみこ)、ピ　コ(高坂真琴)、村　人(神谷　明)、〃(田口　昂*)
■美術設定／中村光毅■原動画／須田正己■背景／新井寅雄
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／萩原和義

第５話『人間はなんてすばらしい＊』(1972年2月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／原　征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／モック(丸山裕子)、お爺さん(矢田　稔)、コオロギ(肝付

第14話『加藤隼戦闘隊』(1971年7月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、松沢　申■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[桧　中尉](加茂嘉久)、[加藤建夫](柴田秀勝)、[遠藤中尉](渡辺　猛)
■[声の出演[第2画面]／[奥山曹長](城山　堅)、[大森曹長](藤本　譲)、[高　山](敦賀岑一)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■美術設定／小林七郎■作画監修／宮本貞雄
■原動画／西城隆詞、須田正己、加藤　茂■背景／坂本信人
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／今井七生■編集／谷口　肇■進行／米津和彦■制作担当／佐藤光雄
(注記)「渡辺　猛」はクレジット表示ママ。

第15話『ラバウル航空隊』(1971年7月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田義昭■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[上条大尉](大木民夫)、[司令長官(古賀)](山内雅人)、[司令官](吉沢久嘉)、[航空参謀](原田一夫)
■[声の出演[第2画面]／[通信兵](仲村秀生)、[副　長](細井重之)、[三　田](納谷六朗)、[大　川](城山　堅)
■[声の出演[第3画面]／[飛行長](村松康雄)、[笹川上飛曹](木原規之)、[矢部機長](池水通洋)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■美術設定／中村光毅■作画監修／宮本貞雄
■原動画／平山則雄、野崎恒仲、菊地晃夫■背景／今村立夫
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／加藤　博■制作担当／佐藤光雄

第16話『キスカ島撤退』(1971年7月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、川内　勉■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[木村少将](納谷六郎)、[河瀬中将](塩見竜介)、[峯木少将](仁内達之)
■[声の出演[第2画面]／[有近少佐](原田一夫)、[参　謀(A)](神山卓三)、[米　兵(B)](兼本新吾)、[参　謀(B)](城山　堅)
■[声の出演[第3画面]／[藤木少佐](安田　隆)、[若い中尉](木原規之)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■美術設定／井岡雅宏■作画監修／宮本貞雄
■原動画／西城隆詞、熊尾義之、七戸洋之助■背景／野畑照子
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／荒木良克■制作担当／佐藤光雄
(注記)「納谷六郎」はクレジット表示ママ。ＡＲ台本では、脚本が「川内　勉」、改訂脚本が「鳥海尽三」と記載されている。

第17話『特攻隊誕生』(1971年7月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／直居欽哉■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[植村少尉](堀勝之祐)、[玉井中佐](大木民夫)、[大西中将](家弓家正)
■[声の出演[第2画面]／[久納中尉](関根信昭)、[関　大尉](嶋　俊介)、[中島少佐](寺島幹夫)
■[声の出演[第3画面]／[猪口参謀](矢田耕司)、[永井二飛曹](城山　堅)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／井岡雅宏■作画監修／宮本貞雄
■原動画／須田正己、杉井興治、湖川　滋■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治■制作担当／佐藤光雄

第18話『山本五十六の死』(1971年7月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／松浦健郎、曽田博久■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[樋端中佐](山内雅人)、[ニミッツ](木下秀雄)、[近衛文麿](羽佐間道夫)、[ルーズベルト](勝田　久)
■[声の出演[第2画面]／[山本長官](小林　修)、[宇垣中将](仁内達之)、[ダイアー](原田一夫)、[城島少将](渡辺　猛)、[草鹿中将](諏訪孝二)
■[声の出演[第3画面]／[リング少佐](城山　堅)、[衛　兵](安田　隆)、[山谷飛曹長](敦賀岑一)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／渡辺　毅■作画監修／宮本貞雄
■原動画／西城隆詞、野崎恒仲、菊地晃夫■背景／渡部　孝
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／今井七生■編集／谷口　肇■進行／米津和彦■制作担当／佐藤光雄
(注記)「渡辺　猛」はクレジット表示ママ。

第19話『ルンガ沖夜戦』(1971年8月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[田中少将](川久保潔)、(島宇志夫)、[江田航海長](辻*村真人)、[長波艦長](寺島幹夫)
■[声の出演[第2画面]／[神田中佐](青野　武)、[陽炎艦長](城山　堅)、[兵　隊①](石井敏郎)、[城戸軍医長](村松康雄)、[小倉艦長](藤本　譲)
■[声の出演[第3画面]／[無線士](峰　恵研)、[池田信号長](飯塚*昭三)、[水雷長](立壁和也)、ナレーター(浦野　光)、詩　吟(荒木照行)
■キャラクター デザイン／宇垣　昭■美術設定／中村光毅■作画監修／宮本貞雄
■原動画／平山則雄、木村一郎、熊尾義之■背景／井岡雅宏
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄■制作担当／佐藤光雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[ライト少将](大木民夫)
(注記)クレジットでは声の出演に「島宇志夫」の名があるが、訂正ＡＲ台本にはなく、代わりに「大木民夫」の名がある。現場で島→大木という変更が行われた可能性があるが、ここでは別々のキャストとして扱った。

第20話『マリアナ沖海戦』(1971年8月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[ミッチャー中将](山内雅人)、[小沢中将](木下秀雄)、[航海長](仁内達之)
■[声の出演[第2画面]／[副　官](青野　武)、[参謀長](神山卓三)、[参謀長](宮内幸平)、[瑞鶴艦長](加藤　修)
■[声の出演[第3画面]／[通信兵](城山　堅)、[甲板長](藤本　譲)、[飛行隊長](木原規之)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／中村光毅■作画監修／宮本貞雄
■原動画／須田正己、湖川　滋、野崎恒仲■背景／今村立夫
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／加藤　博■制作担当／佐藤光雄

第21話『レイテ沖海戦／(前篇)』(1971年8月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[猪口中将](木下秀雄)、[栗田中将](大木民夫)、[摩耶艦長](田中信夫)
■[声の出演[第2画面]／[小柳参謀長](仲村秀生)、[臼　井](納谷六朗)、[長門艦長](島田　彰)、[高雄艦長](城山　堅)
■[声の出演[第3画面]／[愛宕艦長](村松康雄)、[鳥海艦長](国坂　伸)、[加藤副長](藤本　譲)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■美術設定／井岡雅宏■作画監修／宮本貞雄
■原動画／西城隆詞、菊地晃夫、杉井興治■背景／島　厚子
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治■制作担当／佐藤光雄

第22話『レイテ沖海戦／(後篇)』(1971年8月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[栗田長官](大木民夫)、[大和艦長](和田　敬)、[ハルゼー](木下秀雄)
■[声の出演[第2画面]／[宇垣司令官](仁内達之)、[小柳参謀長](仲村秀生)、[参謀長](寺島幹夫)、[山本参謀](島田　彰)
■[声の出演[第3画面]／[スプレイグ少将](城山智馨夫)、[エバンス中佐](石井敏郎)、[大谷作戦参謀](石丸博也)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／中村光毅■作画監修／九里一平
■原動画／津野二朗、菊地晃夫、野崎恒仲■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／今井七生■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治■制作担当／佐藤光雄

第23話『硫黄島作戦』(1971年9月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[栗林兵団長](家弓家正)、[田中大隊長](和田文夫)、[厚地大隊長](雨森雅司)
■[声の出演[第2画面]／[堀　参謀](仁内達之)、[浦部参謀](諏訪孝二)、[藤田副官](藤本　譲)
■[声の出演[第3画面]／[和智海軍中佐](城山智馨夫)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■作画監修／宮本貞雄■美術設定／渡辺　毅
■原動画／須田正己、平山則雄、熊尾義之■背景／渡部　孝
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／米津和彦■制作担当／佐藤光雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[市丸少将](神山卓三)

第24話『連合艦隊の最期』(1971年9月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／新井　一、吉田義昭■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[森下参謀](山内雅人)、[古　村](木下秀雄)、[能村参謀](西　桂太)
■[声の出演[第2画面]／[草鹿参謀長](寺島幹夫)、[伊藤司令官](千葉耕一)、[山本先任参謀](仲村秀生)
■[声の出演[第3画面]／[有賀艦長](石井敏郎)、[当直士官](城山　堅)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／依光　隆■作画監修／宮本貞雄■美術設定／中村光毅
■原動画／木村一郎、西城隆詞、杉井興治■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝

の記載を尊重し、演出を「九里一平」とした。

第４話『マレー突進作戦』(1971年4月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、永田俊夫■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[山本奉文](富田耕生)、[鈴木宗作](勝田　久)、[パーシバル](和田文夫)、[松井中将](雨森雅司)
■[声の出演[第２画面]／[杉浦少将](杉田俊也)、[島田戦車隊長](宮田　光)、[横山大佐](北川国光)、[ベネット](松岡文雄)
■[声の出演[第３画面]／[連隊長](兼本新吾)、[操舵兵](武川　信)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■美術設定／新井寅雄
■原動画／平山則雄、野崎恒仲■背景／小林七郎
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／篠原　正■進行／佐藤光雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[杉浦少将副官](加藤　修)
(注記)「北川国光」はクレジット表示ママ。市販のビデオソフト版では脚本が「鳥海尽三、滝　三郎」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第７話のフィルムのつなぎ間違い)の可能性が高い。ここではＡＲ台本の記載を尊重し、脚本を「鳥海尽三、永田俊夫」とした。

第５話『シンガポール攻略』(1971年5月1日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[山本奉文](富田耕生)、[鈴木宗作中将](勝田　久)、[Ａ・パーシバル](和田文夫)、[松井太久郎中将](雨森雅司)
■[声の出演[第２画面]／[辻　政信中佐](水島　普)、[池谷半二郎大佐](細井重之)、[G・ベネット少将](松岡文雄)、[ジェントン・トーマス監督](城山　堅)
■[声の出演[第３画面]／ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■作画監修／宮本貞雄■美術設定／新井寅雄
■原動画／高木　清、加藤　茂■背景／小林七郎
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／今井七生■編集／篠原　正■進行／荒木良克
(注記)訂正ＡＲ台本では、「ジェントン・トーマス監督」その他の役は「城山知馨夫」と記載されているが、クレジットでは「城山　堅」となっている。以後、第６、７、９、10、12～20、22～25話でも、訂正ＡＲ台本とクレジットとで同様のくい違いが確認されている。ここでは、ＡＲ台本の書き込みミスと判断し、上記の話数に関しては「城山知馨夫」と記載された役をすべて「城山　堅」が演じた役として扱った。

279

第６話『香港攻略』(1971年5月8日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[マーク・ヤング総督](吉沢久嘉)、[ジョーンズ大尉](関根信昭)、[佐野忠義中将](仁内達之)、[北島驥子雄中将](三田松五郎)
■[声の出演[第２画面]／[樋口敬七郎少将](神山卓三)、[日本軍歩兵部隊軍曹](渡部　猛)、[ボクサー少佐](城山　堅)、[多田督知中尉](近水圭二)
■[声の出演[第３画面]／[酒井　隆中将](鈴木泰明)、[若い少尉](森　功至)、[若林恵一中尉](敦賀岑一)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／依光　隆■作画監修／吉田竜夫■美術設定／井岡雅宏
■原動画／須田正己、菊地晃夫■背景／中村光毅
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／篠原　正■進行／加藤　博

第７話『マレー沖海戦』(1971年5月15日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、滝　三郎■演出／西牧秀雄
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[フィリップス](大木民夫)、[機　長](家弓家正)、[参　謀(Ａ)](神山卓三)、[松永少将](青野　武)
■[声の出演[第２画面]／[参　謀(Ｃ)](原田一夫)、[近藤大佐](細井重之)、[柴田少佐](加藤　修)、[偵察員](兼本新吾)
■[声の出演[第３画面]／[小沢中将](近水圭二)、[監視員](城山　堅)、[参　謀(Ｂ)](立壁和也)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／依光　隆■作画監修／宮本貞雄■美術設定／井岡雅宏
■原動画／田中英二、西城隆詞■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／篠原　正■進行／荒木良克

第８話『珊瑚海海戦』(1971年5月22日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[原　少将](小林　修)、[高木中将](和田文夫)、[井上中将](矢田　稔)、[山本大将](辻村真人)
■[声の出演[第２画面]／[江間大尉](仲村秀生)、[岸田一飛曹](諏訪孝二)、[森上飛曹長](阪　脩)、[城島大佐](加藤　修)
■[声の出演[第３画面]／[市原大尉](城山　堅)、[高橋少佐](国坂　伸)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■作画監修／宮本貞雄■美術設定／小林七朗
■原動画／村田四郎、野崎恒仲■背景／今村立夫
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／峰　勇■編集／谷口　肇■進行／加藤　博

第９話『ジャワ攻略』(1971年5月29日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[今村中将](家弓家正)、[テルプールテン中将](木下秀雄)、[柳川中尉](寺島幹夫)
■[声の出演[第２画面]／[現地人](肝付兼太)、、[参謀長](青野　武)、、[作戦参謀](諏訪孝二)
■[声の出演[第３画面]／[参　謀](城山　堅)、[若松少佐](兼本新吾)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■作画監修／宮本貞雄■美術設定／中村光毅
■原動画／西城隆詞、須田正己■背景／小林七朗
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／佐藤光雄

第10話『海軍落下傘部隊』(1971年6月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[村井少尉](柴田秀勝)、[立野少尉](市川　治)、[塚原司令官](木下秀雄)、[作戦参謀](古賀浩二)
■[声の出演[第２画面]／[報道員(Ａ)](中村武巳)、[参　謀(Ａ)](城山　堅)、[大隊長](寺島幹夫)、[落下傘兵(Ａ)](兼本新吾)、[子供　①](白川澄子)
■[声の出演[第３画面]／[老　婆](赤木葉子)、[地上軍兵(Ａ)](池水通洋)、[子供　②](三浦利子)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■作画監修／宮本貞雄■美術設定／井岡雅宏
■原動画／杉井興治、峰　一臣■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／今井七生■編集／谷口　肇■進行／佐原三郎

第11話『バターン／コレヒドール攻略』(1971年6月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、滝　三郎■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[杉　山](大宮悌二)、[青木少将](和田　敬)、[マッカーサー](加藤精三)、[本間中将](仁内達之)
■[声の出演[第２画面]／[田中中将](桑原　猛)、[参　謀(１)](矢田耕司)、[前田少将](藤本　譲)、[塚田中将](安田　隆)
■[声の出演[第３画面]／[参　謀(２)](池水通洋)、[兵](石丸博也)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／吉田竜夫■作画監修／宮本貞雄■美術設定／小林七朗
■原動画／西城隆詞、須田正己■背景／中村光毅
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／谷口　肇■進行／荒木良克
(注記)市販のビデオソフト版では脚本が「陣野　修」、演出が「鳥海永行」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第10話のフィルムのつなぎ間違い)の可能性が高い。ここではＡＲ台本の記載を尊重し、脚本を「鳥海尽三、滝　三郎」、演出を「九里一平」とした。

第12話『潜水艦 伊一168』(1971年6月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平田穂生■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[艦　長](小林　修)、[聴音長](原田一夫)、[航海長](三田松五郎)
■[声の出演[第２画面]／[探信員](城山　堅)、[連管長](加藤　修)、[将　校](諏訪孝二)、[水雷長](国坂　伸)
■[声の出演[第３画面]／(安田　隆)、[軍医長](阪　脩)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／宇垣　昭■作画監修／宮本貞雄■美術設定／井岡雅宏
■原動画／野崎恒仲、菊地　晃■背景／今村立夫
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／谷口　肇■進行／加藤　博
〈資料より補足〉
■声の出演／[機関長](藤本　譲)
(注記)市販のビデオソフト版では脚本が「鳥海尽三、滝　三郎」、演出が「九里一平」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第　話のフィルムのつなぎ間違い)の可能性が高い。ここではＡＲ台本の記載を尊重し、脚本を「平田穂生」、演出を「黒川文男」とした。また、クレジットでは声の出演に「安田　隆」の名があるが、訂正ＡＲ台本にはなく、代わりに「藤本　譲」の名がある。現場で安田→藤本という変更が行われた可能性があるが、ここでは別々のキャストとして扱った。

第13話『第一次ソロモン海戦』(1971年6月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／永田俊夫■演出／黒川文男
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[フレッチャー中将](中村　正)、[三川中将](木下秀雄)、[通信参謀](北村弘一)
■[声の出演[第２画面]／[早川大佐](村越伊知郎)、[大西少将](神山卓三)、[高橋大佐](城山　堅)、[神　大佐](藤本　譲)
■[声の出演[第３画面]／[山田少将](西山　連)、[大前中佐](安田　隆)、、ナレーター(浦野　光)
■キャラクターデザイン／宇垣　昭■美術設定／井岡雅宏■作画監修／宮本貞雄
■原動画／杉井興治、村田四郎、七戸洋之助■背景／野畑照子
■カラー設定／岡嶋国敏■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／中野政則■編集／谷口　肇■進行／鎌田正治■制作担当／佐藤光雄

■脚本／金沢文平
第295話『病院物語＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第296話『大盗賊トットだあ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／牧野和夫
第297話『ギャンブラートット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第298話『カバ君の結婚式＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第299話『トットの交通整理＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第300話『いじわるサーフィン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金沢文平

◆リストの表記についての補足◆

1）リスト中、サブタイトルの「／」は画面上の行替え箇所を示します。
2）人名の間の「､」が２つ続いている場合(､､)は、そこに１行分の空白があったことを示します。
3）リスト中、*印が後についた文字は「異字体」や「旧字体」にあたるもので、ページに印刷された書体と、実際の画面の書体との間に以下のような違いがあります。

塚* → 「塚」の字の右側中央に点があります。
琢* → 「琢」の字の右側中央に点があります。
辻* → 「辻」の“しんにょう”部分の点が１つです。
樋* → 「樋」の“しんにょう”部分の点が２つです。
蓮* → 「蓮」の“しんにょう”部分の点が２つです。
吉* → 「吉」の上部分が「土」です。
嘉* → 「嘉」の上部分が「土」です。
喜* → 「喜」の上部分が「土」です。
志* → 「志」の上部分が「土」です。
巻* → 「巻」の上部分が「ソ」のように上に向かって開いています。
高* → 「高」の“なべぶた”部分の下が「目」のようにつながっています。
海* → 「海」の右下部分が「母」です。
敏* → 「敏」の左下部分が「母」です。
才* → 「才」の右上に点があります。
土* → 「土」の右上に点があります。
弱* → 「弱」の下部分が「ン」ではなく「〃」です。
昂* → 「昂」の左下部分が「エ」です。
邦* → 「邦」の左側部分の縦棒が上に飛び出ません。
芸* → 「芸」の「云」の上の横棒が点になっています。
武* → 「武」の左上部分の横棒が点になっています。
涙* → 「涙」の右上部分の横棒が点になっています。
葛* → 「葛」の下部分が「L」と「人」で構成されています。
勝* → 「勝」の右側の横棒が３本あります。
聞* → 「聞」の“もんがまえ”が略字体です。
宏* → 「宏」の左側に「糸」がつきます。
来* → 「来」の縦棒と交わる上部分が「三」になっています。
襄* → 「襄」の“なべぶた”の下が「口」２つになっています。
増* → 「増」の右上部分が「八」になっています。
梢* → 「梢」の上部分が「八」になっています。
酋* → 「酋」の上部分が「八」になっています。
静* → 「静」の左側部分が「青」です。
菁* → 「菁」の下部分が「青」です。
禮* → 「禮」の左側部分が「ネ」です。
廣* → 「廣」の“まだれ”の下が「黄」です。
A* → 「A」が丸囲みになっています。
B* → 「A」が丸囲みになっています。
C* → 「A」が丸囲みになっています。
子* → 「子」が丸囲みになっています。

決断

1971年４月３日～1971年９月25日(第１～26話)　毎週土曜19時30分～20時
フジテレビ系／30分カラー・全26話

(データソース)第１～25話はオープニング、エンディングクレジットの内容を記載。第26話は映像自体を確認できなかったため、ＡＲ台本よりデータを転載した。[ ] 囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジットに明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　決断　コロムビア・レコードSCS—127
作詞／丘 灯至夫　作曲／古関裕而　歌／幹　和之
■作･監修／児 島　襄*■構成／鳥海尽三■総監督／九里一平
■音楽／越部信義■効果／東宝効果集団、イシダ･サウンドプロ
■プロデューサー[13～25話]／吉田健二、前里元義
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■メカニック デザイン／池田献児、秋吉文夫、有元秀光、木内一郎
■題字／賀茂牛之■録音ディレクター／水 本　完
■録音／読広スタジオ、棚岡　元、､オムニバス･プロ■現像／東洋現像所
■プロデューサー[1～12話]／吉田健二、前里元義
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ
〈資料より補足〉
■音楽進行／音楽企画センター■音楽ディレクター／奥田公男(読広)
■録音／東京エレクトリック アコースティック■制作担当／内間　稔(読広)

第１話『真珠湾奇襲』(1971年4月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平田穂生■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[草鹿竜之介](真木恭介)、[キンメル](高塔正康)、[南雲忠一](塩見竜介)、[渕田美津雄](田中信夫)
■[声の出演][第２画面]／[山　口](家弓家正)、[加　藤](村越伊智郎)、[山本五十六](辻*村真人)、[源田　実](原田一夫)、[柚　木](古賀浩二)
■[声の出演][第３画面]／[早　川](城山　堅)、[森　機長](藤本　譲)、[下士官](武川　信)、､ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／中村光毅
■原動画／内野純夫、野崎恒仲■背景／今村立夫
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／細野　正■編集／篠原　正■進行／加藤　博
(注記)「村越伊智郎」はクレジット表示ママ。市販のビデオソフト版では演出が「黒川文男」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第12話のフィルムのつなぎ間違い)の可能性が高い。ここではＡＲ台本の記載を尊重し、演出を「九里一平」とした。

第２話『ミッドウェー海戦／前　編』(1971年4月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[草鹿竜之介](真木恭介)、[宇　垣](山内雅人)、[山　口](家弓家正)、[渕田美津雄](田中信夫)
■[声の出演][第２画面]／[南雲忠一](塩見竜介)、[ブローニング](西　桂太)、[山本五十六](辻*村真人)、[通信参謀](寺島幹夫)、[源田　実](原田一夫)
■[声の出演][第３画面]／[大　石](藤本　譲)、[黒　島](城山　堅)、[友　永](藤本　譲)、[兵　曹②](武川　信)、ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／中村光毅
■原動画／須田正己、菊地晃夫■背景／井岡雅宏
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／峰　　勇■編集／篠原　正■進行／加藤　博
〈資料より補足〉
■声の出演／[パイロット](渡部　猛)

第３話『ミッドウェイ海戦／(後　編)』(1971年4月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平田穂生■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[スプルーアンス](川久保　潔)、[草鹿竜之介](真木恭介)、[参　謀](西　桂太)、[山口多聞](家弓家正)
■[声の出演][第２画面]／[南雲忠一](塩見竜介)、[山本五十六](辻*村真人)、[源田実](原田一夫)、[伊　藤](青野　武)、[小　林](国坂　伸)
■[声の出演][第３画面]／[友　永](藤本　譲)、[作業員](峰　恵研)、[艦長(A)](安田　隆)、､ナレーター(浦野　光)
■キャラクター デザイン／吉田竜夫■美術設定／中村光毅
■原動画／九里一平、西城隆詞■背景／井岡雅宏
■カラー設定／向井　稔■特殊効果／朝沼清良■仕上／柴田　勝
■撮影／平山昭夫■編集／篠原　正■進行／荒木良克
〈資料より補足〉
■声の出演／[渕田美津雄](田中信夫)
(注記)市販のビデオソフト版では演出が「黒川文男」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第12話のフィルムのつなぎ間違い)である可能性が高い。ここではＡＲ台本

第236話『人魚姫＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第237話『さようなら、地球さん＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第238話『つりと番人＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第239話『酔っぱらいはごめんだ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第240話『恐怖のスタントカー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第241話『ならべ、ならべ＊』
第242話『乗合バス＊』
第243話『打止めなし＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第244話『牛も歩けば＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第245話『空飛ぶジュータン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／和光プロ
第246話『サッカーなのだ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第247話『ガンマンは死なず＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第248話『見世物に御用心＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第249話『乗車拒否は高くつく＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第250話『やせるには御用心＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第251話『スリに御用心＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第252話『卵に気をつけて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第253話『スイカ泥棒に気をつけろ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第254話『コロコロコロ転って＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第255話『あわれトットは立体絵本＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第256話『電車に乗るには＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第257話『リンゴをかじる憎い奴＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第258話『昼下りの対決＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第259話『猛烈社員＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第260話『カミナリはトットの敵＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第261話『命がけだぞ ボブスレー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第262話『とかく落ちろというものは＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第263話『ステレオ狂騒曲＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第264話『表と裏＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第265話『スターのある日＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第266話『オレンジ大事件＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第267話『カバ君のいねむり電話＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第268話『素晴しい飛行機＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金沢文平
第269話『自動車教習所＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第270話『トイレに行きたい＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第271話『復讐は辛いぜ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第272話『晴れた空から石が降る＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第273話『教会では静かに＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第274話『橋をかけよう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第275話『ケチはわざわいのもと＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第276話『トットのゴルフ教室＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第277話『空手対ボクシング＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第278話『乳しぼり＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第279話『さても気になる人のこと＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第280話『サンタクロースに罪はなし＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第281話『灯台守と船長＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
話『何でも言うこときく薬＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第283話『アパート暮しは楽じゃない＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第284話『モーターボートレース＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第285話『やめてくれ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第286話『トットのあや取り 命取り＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第287話『自然は大切に＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第288話『危険な危険なエレベーター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第289話『スターと照明＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第290話『フランケンシュタイン物語＊』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第291話『モービル飛行機＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第292話『大空中戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第293話『家を建てよう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／玉名はじめ
第294話『ゴミ大戦争＊』
〈資料より補足〉

第177話『トットのカミナリ族＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第178話『お墓の中には＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第179話『なげなわ名人＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第180話『カバトットの大掃除＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田畠喜雄
第181話『透明人間カバトット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田畠喜雄
第182話『カバトットの曲芸演奏＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田畠喜雄
第183話『一本橋に気をつけろ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三宅直子
第184話『ビルをこわそう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第185話『南の島にも雪が降る＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第186話『真のカミナリ族とは＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第187話『名ピアニスト＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第188話『彼女にフラレたの＊』
第189話『生きているミイラ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第190話『棒高飛び＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三宅直子
第191話『かなしい、かなしい物語＊』
〈資料より補足〉
■脚本／村林信一
第192話『荒野の決斗＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第193話『捨子騒動＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第194話『お靴をどうぞ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第195話『私は誰でしょう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第196話『笑っていただきま〜す＊』
第197話『嫉妬心とは＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第198話『ビルディングを建てるのだ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第199話『目には目を、歯には歯を＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第200話『トットの仕立屋＊』
〈資料より補足〉
■脚本／村林信一
第201話『いつ通れるの！＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第202話『宝さがし潜水夫＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第203話『シャワーを浴びよう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第204話『栓ヌキがない時は＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第205話『審　　判＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第206話『映画騒動＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第207話『電気掃除機騒動＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第208話『ハエ捕り作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第209話『電波を出すテレビ塔＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第210話『アゴがはずれた時には＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第211話『カバ君の買い物＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第212話『子守も大変＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第213話『ミクロの世界のカバトット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第214話『恐竜大作戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／和光プロ、大宮進之介
第215話『トットの毛はえ薬＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第216話『ドクタートットの大手術＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第217話『料理創世紀悲話＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第218話『ターゲット(標的)＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第219話『ジェットコースターに乗ろう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第220話『どっちが先に駆けつくか＊』
〈資料より補足〉
■脚本／和光プロ、小金井小夜子
第221話『単調悲話＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第222話『雨に歩けば＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第223話『逃亡者＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第224話『太陽とレンズ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第225話『かっこ悪い、消防隊員＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第226話『墓穴を堀ったジャンパー＊』
〈資料より補足〉
■脚本／和光プロ
(注記)「堀」は文字資料の表記ママ。
第227話『箱舟物語＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第228話『犬を飼うのだ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第229話『ああ、地球はるかなり＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第230話『アフターサービスはつらいね＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第231話『リングの対決＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第232話『ああ、サラリーマン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第233話『無人島漂流記＊』
〈資料より補足〉
■脚本／和光プロ
第234話『時計を直そう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第235話『うめ、うめ、玉子＊』

第53話『そっとしておいてほしい＊』
第54話『カバトットの斗牛士＊』
第55話『ジャングルに、日が昇りゃ＊』
第56話『赤いウェディングドレス＊』
第57話『カバトットの水泳大会＊』
第58話『洗たくされたトット＊』
第59話『カバトット王子＊』
第60話『カミナリバーベキュー＊』
第61話『カバトットのボクシング＊』
第62話『ウィリアム・トット＊』
第63話『カバトットの宇宙旅行＊』
第64話『ごちそう戦争＊』
第65話『雪やこんこん＊』
第66話『ヒッチハイクも命がけ＊』
第67話『ガンマン達＊』
第68話『サイクリングは楽しいな＊』
第69話『カバトットの猛獣狩り＊』
第70話『ハリネズミ＊』
第71話『カバトットの大トンネル＊』
第72話『テニスコートの誓い＊』
第73話『風船を割るな＊』
第74話『不思議な時計＊』
第75話『カバとボールは使いよう＊』
第76話『あさがおにカバをとられて＊』
第77話『光るゆうれいが出たぞ＊』
第78話『自動販売機の怪＊』
第79話『恐竜はこわい＊』
第80話『ジャズはお好き＊』
第81話『カバトットの大サーカス＊』
第82話『罠には罠＊』
第83話『母よ、あなたは強かった＊』
第84話『トラ、トラ、トラ＊』
第85話『わたしの顔を返して＊』
第86話『キンキラキンの花＊』
第87話『ボートレース＊』
第88話『カバトットの世界旅行＊』
第89話『雨と傘＊』
第90話『真黒なトットの夢＊』
第91話『ねむれや、ねむれ＊』
第92話『すてきな飛行機野郎＊』
第93話『アルピニスト＊』
第94話『ノースモーキング＊』
第95話『ボデービル＊』
第96話『巨人トット＊』
第97話『おれたちゃハスラー＊』
第98話『トットの豆の木＊』
第99話『プレゼント合戦＊』
第100話『すてきなブーメラン＊』
第101話『バッチリ、写したるぞ＊』
第102話『宇宙船カバトット号＊』
第103話『盗まれた入歯＊』
第104話『おかしな列車強盗＊』
第105話『芸は身をほろぼす＊』
第106話『おばけだぞ＊』
第107話『カバトットの避暑法＊』
第108話『カバトットのゴルフ＊』
第109話『殺し屋トット＊』
第110話『いい湯だな＊』
第111話『小さなカバ、大きなトット＊』
第112話『遠メガネ＊』
第113話『チョウをつかまえたいなあ＊』
第114話『デパート掃除のアルバイト＊』
第115話『引越し騒動＊』
第116話『ブドウ酒づくり＊』
第117話『潜水艦作戦＊』
第118話『美カバコンテスト＊』
第119話『ボディペインティング＊』
第120話『カバトットの登山家＊』
第121話『熱砂の果てに＊』
第122話『カバのラインダンス＊』
第123話『夢遊病カバ＊』
第124話『怪盗あらわる＊』
第125話『パラシュート作戦＊』
第126話『海　　賊＊』
第127話『凧・凧・上がれ＊』
第128話『へんてこな花＊』
第129話『ぼくは名指揮者＊』
第130話『走れ走れカバトット＊』
第131話『重量級トット＊』
第132話『トットのロボット＊』
第133話『プラモデル＊』
第134話『トットのにせもの＊』
第135話『スーパートット＊』
第136話『タイムマシン＊』
第137話『雪男現わる＊』
第138話『水上スキー＊』
第139話『先の事などわからない＊』
第140話『とんだ所へ、居候う＊』
第141話『さあ、大変だァ＊』
第142話『カバトット脱出＊』
第143話『人気者は はかない＊』
第144話『故郷はいいなあ＊』
第145話『不思議なタマゴ＊』
第146話『カバトットの海水浴＊』
第147話『トットの科学者＊』
第148話『恋人たち＊』
第149話『オルゴール＊』
第150話『乞食合戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第151話『コンバット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第152話『ズウズウしいタコ＊』
第153話『地震来しゅう＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第154話『いたずらっ子合戦＊』
第155話『ペンキ屋カバトット＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第156話『ケーブルカー大混戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／関根　章
第157話『いたずら合戦＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第158話『大金持と大盗賊＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第159話『カバトットのああ無情＊』
〈資料より補足〉
■脚本／田畠喜雄
第160話『悲しき花売り＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第161話『何が何でもクジラとり＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第162話『ジャンピングボール＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第163話『トットはノイローゼ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第164話『しんから苦労スイミング‥‥なのだ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／金子　裕
第165話『マジックハンド＊』
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久
第166話『赤ズキンちゃんに気をつけろ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／三宅直子
第167話『トランポリン＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第168話『オレはドラキュラ＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第169話『大脱走』
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介
第170話『レンズは何に使うかについて＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第171話『トットは大スター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第172話『バトンガールも楽じゃない＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇
第173話『サボテン栽培＊』
〈資料より補足〉
■脚本／村林信一
第174話『雲にのるには＊』
〈資料より補足〉
■脚本／柳川　茂
第175話『トットの別荘＊』
第176話『シー・ハンター＊』
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇

第100回Bパート『わしの名前が／さえる だス』(1972年8月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山　昇[A・Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋 唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)

第101回Aパート『二人の愛が／燃えるだス』(1972年9月3日放映)
第101回Bパート『女百人／男一人／だス』(1972年9月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海*尽三[Aパート]、若松 はじめ[Bパート]
■演出／高橋資祐[Aパート]、本多　哲[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[トン丸木](丸山裕子)、[神　主](石森達幸)、[新　郎](肝付兼太)、[新　婦](吉*田理保子)、[係　員](池水通洋)、[女](秋元千賀子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[和　尚](肝付兼太)、[女](吉田理保子)、[女](秋元千賀子)

第102回Aパート『結ばにゃ ならぬ／愛の糸 だス』(1972年9月10日放映)
第102回Bパート『男のなかの／女 だス』(1972年9月10日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし[Aパート]、若松 はじめ[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋 唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[おバアさん](赤木葉子)、[マサミ](神谷　明)、[女](丸山裕子)、[男](池水通洋)、[ユキオ](牧野和子)

第103回Aパート『キャット空中／六回転 だス』(1972年9月17日放映)
第103回Bパート『行くは男の／いばら道／だス』(1972年9月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／小山高男[Aパート]、牧野和夫[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、高橋資祐[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[大ニャンコ](八奈見乗児)、[竜巻五郎](大竹　宏)、[記　者](池水通洋)、[おばあさん](丸山裕子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[西　はじめ](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[嵐先生](池水通洋)、[運転手](肝付兼太)、[係　(B)](鈴木利秋)、[審　判](八奈見乗児)、[ニャンコ](愛川欽也)

第104回Aパート『遠くて近きは／男女の仲だス』(1972年9月24日放映)
第104回Bパート『かがやく未来に／歩む だス』(1972年9月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海*尽三[A・Bパート]
■演出／高橋資祐[Aパート]、高橋 唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[矢五郎](大平　透)、[陣八郎](千葉耕市)、[西　　一](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[駅 アナ](池水通洋)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[白雪先生](沢田敏子)、[トン丸木](丸山裕子)、[吾　作](宮内幸平)、[陣八郎](千葉耕市)、[嵐先生](池水通洋)、[教　頭](八奈見乗児)、[西　二](山本圭子)、[男(A)](西川幾雄)、[司会者](大竹　宏)、[チーコ](友近恵子)、[ゲバクロ](肝付兼太)

カバトット

1971年1月1日～1972年9月30日(第1～300話)　毎週月～土曜18時55分～19時
フジテレビ系／5分カラー・全50週(全300話)

(データソース)本作は、共通クレジットの表示されるオープニングが現存する以外は、極端に記録資料が不足している。竜の子プロ社内には、各話サブタイトルと担当脚本家のリストが保管されているが、これは制作順を示すもので、実際の放映順についての記録は残っていない。1年10ヶ月にわたる放映期間から考えると、多くの再放映も挟まれていたはずなのだが、その詳細も不明のままだ。また、上記の脚本家リストについても、幾つかの断片的な文字資料のつきあわせから構成されたもの。判明しているのはシリーズ後半のみで、欠落もある。本リストでは、現存する制作順の文字資料からすべてのサブタイトルを転記し、脚本家名が判明しているものはそれを付した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■監督／笹川ひろし■原案／原征太郎
■文芸／由起　圭■担当／佐藤光雄、若尾博司
■制作／吉田竜夫、タツノコプロダクション■協力／和光 プロダクション
■主題歌／作詞 丘 灯至夫、作曲 水上 勉、(コロムビアレコード)■音楽／はやしこば■声／［カバ］(大平透)、［トット］(曽我町子)、［ナレーター］(原田一夫)
(注記)AR台本に記載されたスタッフデータは以下の通り。
■原案／原　征太郎■総監督／笹川ひろし
■音楽／はやし・こば■竜の子プロダクション、読売広告社、――――、フジテレビ
■録音ディレクター／水本　完[第11週掲載分まで・第13週掲載分]、浜崎暎一[第12週掲載分・第14週掲載分より]
■効果／赤塚不二夫、PAGプロデュース
■音楽進行／奥田公男(読広)
■録音／読広スタジオ、オムニバス・プロモーション、
■担当／佐藤光雄 (竜の子プロダクション)[第42週掲載分まで]、永井昌嗣 (竜の子プロダクション)[第43週掲載分より]、――――、奥田公男(読広)[第44週掲載分まで]、内間　稔(〃)[第44週掲載分まで]、近藤　誠(読広)[第45週掲載分より]

第1話『めぐりあいのカバトット＊』
第2話『晴れのち雨＊』
第3話『ヘンナキノコ＊』
第4話『虫　　歯＊』
第5話『ヤシの実＊』
第6話『なにか面白いことは＊』
第7話『そんなはずじゃなかった＊』
第8話『美容体操＊』
第9話『美容コンサルタント＊』
第10話『公害カバトット＊』
第11話『あとの祭り＊』
第12話『メロメロ大作戦＊』
第13話『どっちがバカかキチガイか＊』
第14話『魚釣り＊』
第15話『誕生日の涙＊』
第16話『歯をみがきましょう＊』
第17話『楽園を求めて＊』
第18話『まいこんだ居候＊』
第19話『苦、大なれば、楽もまた大なり＊』
第20話『それはお船か、ひこうきか＊』
第21話『明日では、おそすぎる＊』
第22話『彼女はカッコいいのがお好き＊』
第23話『待ちぼうけ＊』
第24話『落し穴作戦＊』
第25話『カユーイ、カユーイ＊』
第26話『フシギなフシギな木の実のかわり＊』
第27話『どうゆう訳かついてない＊』
第28話『秋深し＊』
第29話『人をこき使うのは、人にこき使われることなり＊』
第30話『それ台風だ＊』
第31話『トマト＊』
第32話『タネもしかけもありません＊』
第33話『電子レンヂはキケン＊』
第34話『でかい獲物にゃ、エサのいるださ＊』
第35話『生兵法は大怪我のもと＊』
第36話『おしゃれなトット＊』
第37話『宝はどこぞ＊』
第38話『ネムイ戦争＊』
第39話『電話がこわい＊』
第40話『貝がらの家＊』
第41話『ボクも人形が欲しい＊』
第42話『禍、転じて？となる＊』
第43話『空を飛びたい＊』
第44話『トットのバレリーナ＊』
第45話『バクダンをおさえろ＊』
第46話『足ながドロボー＊』
第47話『花をささげて＊』
第48話『突きまくれ＊』
第49話『シャッターチャンス＊』
第50話『野球じあい＊』
第51話『自動車レース＊』
第52話『星になりたい＊』

[男](遠矢忠宏)、[電工(A)](肝付兼太)、[電工(B)](池水通洋)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[ゲバクロ](大竹　宏)、[やおやのネコ](遠矢忠宏)、[おやじ](池水通洋)、[おまわり](肝付兼太)

第89回Aパート『そろた娘と/田植え唄だス』(1972年6月11日放映)
第89回Bパート『大左ェ門は/男 だス』(1972年6月11日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/牧野和夫[Aパート]、加藤有芳[Bパート]
■演出/高橋資祐[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[母](太田淑子)、[女性(A)](吉田理保子)、[女　性](芝田清子)、[豚丸木](丸山裕子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[正　太](太田淑子)、[美　奈](芝田清子)

第90回Aパート『こっちの水は/あまいだス』(1972年6月18日放映)
第90回Bパート『モテる男は/みな敵 だス』(1972年6月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/玉 名 はじめ[Aパート]、平谷寿敏[Bパート]
■演出/高橋資祐[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[管理人](遠矢忠宏)、[男](肝付兼太)、[きよ子](芝田清子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西](八代　駿)、[白雪先生](沢田敏子)、[トン丸木](丸山裕子)、[南　おわり](松島みのり)、[生徒(A)](吉*田理保子)、[生徒(B)](芝田清子)、[生徒(C)](肝付兼太)、[生徒](遠矢忠宏)

第91回Aパート『のらねばならぬ/その話 だス』(1972年6月25日放映)
第91回Bパート『ソレをなめなきゃ/おさまらぬ だス』(1972年6月25日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/加藤有芳[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出/布川郁司[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[嵐先生](池水通洋)、[用務員](大竹　宏)、[大山](肝付兼太)、[場内アナウンス](吉*田理保子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[マ　マ](牧野和子)、[医　師](肝付兼太)、[奥さん](遠藤　晴)、[看護婦](吉*田理保子)、[老　人](大竹　宏)

第92回Aパート『花の東京/あとにして だス』(1972年7月2日放映)
第92回Bパート『着いた ところは/カマボコの宿/だス』(1972年7月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/城山　昇[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出/案納正美[Aパート]、高橋資祐[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[トン丸木](丸山裕子)、[西　はじめ](八代　駿)、[花　子](杉山佳寿子)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[ゲバクロ](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　はじめ](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[カマボコ屋の主人](肝付兼太)、[宿屋の女中](友近恵子)、[宿屋の女中](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)

第93回Aパート『ズッコケ/雲助道中/だス』(1972年7月9日放映)
第93回Bパート『ぬまずくわずも/修業 だス』(1972年7月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/鳥海*尽三[Aパート]、鳥海*尽三[Bパート]
■演出/高橋唯貴雄[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　はじめ](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[運ちゃん](池水通洋)、[婆さん](肝付兼太)、[雲助(A)](西川幾雄)、[雲助(C)](遠矢忠宏)、[巡査](飯塚昭三)、[女　客](芝田清子)、[ニャンコ](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　はじめ](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[ひろ子](芝田清子)、[門　弟(A)](遠矢忠宏)、[ニャンコ](愛川欽也)

第94回Aパート『旅は道づれ/世は情 だス』(1972年7月16日放映)
第94回Bパート『男の道に/茶のかおり だス』(1972年7月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/陶山　智[Aパート]、鳥海*尽三[Bパート]
■演出/高橋唯貴雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[座　長](飯塚昭三)、[ルミ子](桂　玲子)、[弟子(A)](西川幾雄)、[弟子(B)](遠矢忠宏)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[お　蝶](吉田理保子)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[次郎ネコ](宮内幸平)、[ドモネコ](飯塚昭三)、[ドモの子分猫(A)](西川幾雄)、[ドモの子分猫(B)](遠矢忠宏)、[ク　ロ](田中　勝)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Bパートの「ドモの子分猫(B)」役が「西川幾雄」、「ク ロ」役が「大竹 宏」となっている。

第95回Aパート『越すに越されぬ/大井川だス』(1972年7月23日放映)
第95回Bパート『うなぎを食えば/血がさわぐ/だス』(1972年7月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/酒井あきよし[Aパート]、笹川ひろし[Bパート]
■演出/高橋資祐[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[トン丸子](丸山裕子)、[男](池水通洋)、[女](杉山佳寿子)、[女性(A)](吉田理保子)、[女性(B)](芝田清子)、[客](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[宇奈木](肝付兼太)、[男](池水通洋)、[大熊](芝田清子)、[女　(A)](吉田理保子)、[女　(B)](丸山裕子)
(注記)ＡＲ台本では、Bパート脚本は「笹川ひろし」と記載されている。対するオープニングでは、脚本表示は「酒井あきよし」のみ。ただし、この回に限っては、他の回の編集ミスとは考えにくい(脚本、演出が同じ組み合わせとなる他の回の候補が見当たらないため)。総監督自らが脚本も兼任していることから、画面表示を省略したのではないか、とも考えられる。ここでは、ＡＲ台本の記載をもとに、データを補った。「トン丸子」は、ＡＲ台本の表記ママ。訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Aパートの「女」役が「吉田理保子」、「女性(A)」役が「芝田清子」、「女性(B)」役が「吉田理保子」、「女性(C)」役が「杉山佳寿子」となっている。

第96回Aパート『狐がくれた/花嫁 だス』(1972年7月30日放映)
第96回Bパート『わしは天下の/日吉*丸だス』(1972年7月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/牧野和夫[Aパート]、牧野和夫[Bパート]
■演出/蓬田正憲[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[村人(百姓)　(A)](鈴木利秋)、[村人(百姓)　(B)](飯塚昭三)、[村人(百姓)　(C)](肝付兼太)、[爺さん](大竹　宏)、[悦　子](芝田清子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[蜂須賀　小　六](飯塚昭三)、[手　下](肝付兼太)、[師　範](大竹　宏)、[女の子　(A)](吉*田理保子)、[女の子　(B)](丸山裕子)、[女の子　(C)](芝田清子)(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Bパートの「女の子　(A)」役が「芝田清子」となっている。

第97回Aパート『幽霊は/城でもつ/だス』(1972年8月6日放映)
第97回Bパート『食いねえ食いねえ/ネコ食いねえ/だス＊』(1972年8月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/小山高男[Aパート]、酒井あきよし[Bパート]
■演出/高橋資祐[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[花　姫](杉山佳寿子)、[殿](肝付兼太)、[老　婆](赤木葉子)、[警官](大竹　宏)、[少　年](丸山裕子)、[ミーコ](吉田理保子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[先　生](吉田理保子)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Aパートの「警　官」役が「肝付兼太」となっている。

第98回Aパート『その手は/くわなのはまぐり/だス＊』(1972年8月13日放映)
第98回Bパート『黒い涙で/サヨナラ/だス＊』(1972年8月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/柳川　茂[Aパート]、森　忠明[Bパート]
■演出/高橋資祐[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[男　先生](西川幾雄)、[店　員](池水通洋)、[女性(A)](友近恵子)、[女性(C)](塚田えみ子)、[女性(D)](高橋ひろ子)、[係　員](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[ひろ子](塚田えみ子)、[記　者](西川幾雄)、[ミー](友近恵子)

第99回Aパート『忍者の里を/通りゃんせ/だス』(1972年8月20日放映)
第99回Bパート『琵琶湖の水は/あまいだス』(1972年8月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/山木 ひろ子[Aパート]、鳥海*尽三[Bパート]
■演出/本 多　哲[Aパート]、高橋資祐[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[じいさん](肝付兼太)、[忍　者](大竹　宏)、[忍　者](大野　健)、[女の人](吉田理保子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[メリー](吉*田理保子)、[同　会](大竹　宏)、[外　人](秋元千賀子)

第100回Aパート『京の五条の/橋の上 だス』(1972年8月27日放映)

■演出／西牧秀雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[お　花](杉山佳寿子)、[西はじめ](八代　駿)、[吾　作](大竹　宏)、[息　子](肝付兼太)、[駅員](池水通洋)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[西はじめ](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[子ニャンコ](五島美恵子)、[男　(A)](池水通洋)、[男　(B)](肝付兼太)、[婆さん](赤木葉子)、[ゲバクロ](大竹　宏)、[子ニャンコ達](杉山佳寿子)

第78回Aパート『ズッコケ道[どう]を／一人行く／だス』(1972年3月26日放映)
第78回Bパート『ズッコケ風が／身にしみる だス』(1972年3月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山　昇[A・Bパート]
■演出／岡崎邦彦[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[署　長](大竹　宏)、[トン丸木](丸山裕子)、[西](八代　駿)、[車陣八郎](千葉耕市)、[嵐先生](池水通洋)、[老猫(A)](肝付兼太)、[仔ニャンコ達・子供達](杉山佳寿子)、[チーコ](友近恵子)、[警　官](肝付兼太)、[警　官](池水通洋)、[警　官](八代　駿)、[爺さん](大竹　宏)、[ネコ(B)](八代　駿)、[ネコ(C)](池水通洋)、[おやじ](肝付兼太)、[仔ニャンコ達・子供達](丸山裕子)、[仔ニャンコ達・子供達](友近恵子)、[仔ニャンコ達・子供達](肝付兼太)、[男](大竹　宏)
■声の出演[Bパート]／[アナウンス](肝付兼太)、[仔ニャンコ](杉山佳寿子)、[仔ニャンコ](丸山裕子)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Aパートの「ネコ(C)」役が「肝付兼太」となっている。

第79回Aパート『鬼っ子どもの／お通り だス』(1972年4月2日放映)
第79回Bパート『春雨に／ぬれていく だス』(1972年4月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／西牧秀雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西](八代　駿)、[西の弟二](山本圭子)、[男の子](友近恵子)、[教　頭](八奈見乗児)、[先生](小泉栄子)、[女の子](桂　玲子)、[小　使](峰　恵研)、[女　(A)](五島美恵子)、[男生徒(B)](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ユリ子](小泉栄子)、[ル　ミ](桂　玲子)、[ルミの母](五島美恵子)、[巡　査](峰　恵研)、[ミーコ](友近恵子)、[生　徒](肝付兼太)
(注記)ＡＲ台本では、Aパート演出が「西牧秀雄」、Bパート演出が「岡崎邦彦」と記載されている。対するオープニングの演出表示は「西牧秀雄」「案納正美」。ただし、この回に限っては、他の回のオープニングの編集ミスとは考えにくい(脚本、演出が同じ組み合わせとなる他の回の候補が見当たらないため)。ここでは、画面の表示を尊重し、データを作成した。訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Aパートの「先 生」役が「弥永和子」、「男　(A)」役が「五島美恵子」、「男　(B)」役が「峰　恵研」、「女生徒(A)」役が「小泉栄子」、「女生徒(C)」役が「友近恵子」となっている。

第80回Aパート『ドボジデ／鼠になめられる／だス』(1972年4月9日放映)
第80回Bパート『タダいる猫は／働く だス』(1972年4月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／岡崎邦彦[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ボスネズミ](近石真介)、[子ネズミ(A)](肝付兼太)、[ネズミ達](五島美恵子)、[ネズミ達](貴家堂子)、[ネズミ達](友近恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[ク　ロ](肝付兼太)、[八百屋のカミさん](遠藤晴)、[女](五島美恵子)、[母　親](伊島幸子)、[ター坊](西川幾雄)、[ネズミ](近石真介)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、「ゲバクロ」役として「田中　勝」の書き込みがある。

第81回Aパート『見せちゃならない／コレだけは／だス』(1972年4月16日放映)
第81回Bパート『世にもふしぎな／大魔術だス』(1972年4月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／桜井京介[Aパート]、牧野和夫[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[A・Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[西](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男　(A)](武川　信)、[女](吉田理保子)、[お手伝い](五島美恵子)、[アナウンサー](池水通洋)、[男　(B)](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西](八代駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ゲッペラー](家弓家正)、[美　女(A)](吉田理保子)、[美　女(B)](五島美恵子)、[団員(A)](武川　信)、[団員(B)](池水通洋)、[団員(C)](肝付兼太)

第82回Aパート『これが男の／情け だス』(1972年4月23日放映)
第82回Bパート『逃がした魚は／大きい だス』(1972年4月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、玉名はじめ[Bパート]
■演出／岡崎邦彦[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[西の母](牧野和子)、[白雪先生](沢田敏子)、[花　子](杉山佳寿子)、[医者](北村弘一)、[花ヤ](肝付兼太)、[女生徒A](熊沢恵子)、[男生徒A](神　雄二)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[老　犬](北村弘一)、[おやじ](肝付兼太)

第83回Aパート『帰って来た／花婿さん／だス』(1972年4月30日放映)
第83回Bパート『男の節句に／モテモテ だス』(1972年4月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[大　作](池水通洋)、[サナエ](吉田理保子)、[サナエの母](太田淑子)、[じいさん](肝付兼太)、[バァさん](赤木葉子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ヒロシ](太田淑子)、[あやめ](芝田清子)、[つばき](吉田理保子)

第84回Aパート『ここで男は／耐える だス』(1972年5月7日放映)
第84回Bパート『ペダルを踏めば／身も踊る だス』(1972年5月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、玉名はじめ[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[A・Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[白雪先生](沢田敏子)、[先生(A)](肝付兼太)、[男の子(A)](友近恵子)、[A子(るみ子)](吉田理保子)、[用務員のおじさん](大竹　宏)、[先生　(B)](池水通洋)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男　(B)](肝付兼太)、[男　(C)](大竹　宏)、[男　(E)](池水通洋)

第85回Aパート『甘くせつない／ひざまくらだス』(1972年5月14日放映)
第85回Bパート『なにがなんでも／守るだス』(1972年5月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／高橋資祐[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男](肝付兼太)、[少　女](吉田理保子)、[奥さま](沢田敏子)、[夫人](友近恵子)、[仔ニャンコ達](西川幾雄)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[男](西川幾雄)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ゲバクロ](肝付兼太)、[仔猫達](吉田理保子)、[仔猫達](沢田敏子)、[記　者(A)](大竹　宏)、[チーコ](友近恵子)

286

第86回Aパート『わしはどこの／誰 だスか？』(1972年5月21日放映)
第86回Bパート『「ドボジデ 男は／弱いのよ」／だス』(1972年5月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／太田イサム[Aパート]、加藤有芳[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[西はじめ](八代　駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[医　者](肝付兼太)、[生徒(A)](池水通洋)、[生徒(C)](牧野和子)、[生徒](友近恵子)、[生徒](丸山裕子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ツルペロリ](八奈見乗児)、[奥さん](牧野和子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[ゲバクロ](肝付兼太)
(注記)ＡＲ台本では、Aパート脚本が「鹿島　昇る」、Bパート脚本が「加藤有芳」と記載されている。対するオープニングの脚本表示は「太田イサム」「加藤有芳」。ただし、この回に限っては、他の回のオープニングの編集ミスとは考えにくい(脚本、演出が同じ組み合わせとなる他の回の候補が見当たらないため)。ここでは、画面の表示を尊重し、データを作成した。

第87回Aパート『わしはボインに／弱いだス』(1972年5月28日放映)
第87回Bパート『ここは地獄の／一丁目だス』(1972年5月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／高橋資祐[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[フミ子](吉田理保子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[牛](肝付兼太)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[和　尚](大竹　宏)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女](吉田理保子)、[えんま大王](加藤　修)、[鬼　(A)](肝付兼太)、[鬼　(B)](遠矢忠宏)、[鬼　(C)](西川幾雄)

第88回Aパート『出るに出られぬ／ハコの中だス』(1972年6月4日放映)
第88回Bパート『子連れニャンコの／一大事 だス』(1972年6月4日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／牧野和夫[Aパート]、城山　昇[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[A・Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[白雪先生](沢田敏子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女](千々松幸子)、

駿)、[男 (A)](飯塚昭三)、[男 (B)](池水通洋)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[小左エ門](滝口順平)、[月光](大竹 宏)、[メリ犬](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[プロデューサー](飯塚昭三)、[朝野](池水通洋)、[女性](五島美恵子)、[デレクター](大竹 宏)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「メリ犬」が「メス犬」と修正されており、声優名も「五島美恵子」となっている。

第65回Aパート『頭かくして/尻かくさずだス』(1971年12月26日放映)
第65回Bパート『入れて下さい/この釜にだス』(1971年12月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/平谷寿敏[Aパート]、太田イサム[Bパート]
■演出/西牧秀雄[Aパート]、富野喜幸[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[床 や](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[救世軍①](池水通洋)、[救世軍②](田中 勝)、[カマや](大竹 宏)、[奥さん](高*橋直子)、[女学生](杉山佳寿子)、[女学生](五島美恵子)

第66回Aパート『アローハ/新年おめでとう/だス』(1972年1月2日放映)
第66回Bパート『アローハ/今年もよろしく/だス』(1972年1月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/牧野和夫[A・Bパート]
■演出/高橋唯貴雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男 (A)](池水通洋)、[おじさん](島田 彰)、[審 判](飯塚昭三)、[ジャンボ・デーカー](田中 勝)、[メスネコ](五島美恵子)、[ウーララ](石川留美子)、[土人A](藤本 譲)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ジャンボ・デーカー](田中 勝)、[審判](飯塚昭三)、[ウーララ](石川留美子)、[ツルカメハ王](島田 彰)、[ラバー王女](五島美恵子)、[カ プ](藤本 譲)、[花ちゃん](杉山佳寿子)

第67回Aパート『デッカイ夢に/かけるだス』(1972年1月9日放映)
第67回Bパート『清き一票/このわしにだス』(1972年1月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/中原 薫[Aパート]、太田イサム[Bパート]
■演出/岡崎邦*彦[A・Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[看護婦](松金よねこ)、[ニャンニャン](友近恵子)、[ク ロ](大竹 宏)、[花 子](杉山佳寿子)、[牛](西川幾雄)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西](八代 駿)、[男 (A)](池水通洋)、[男 (B)](西川幾雄)、[男 (C)](大竹 宏)、[女 (A)](松金よね子)、[女 (B)](友近恵子)、[女 (C)](杉山佳寿子)

第68回Aパート『熱い血潮で/耐えるだス』(1972年1月16日放映)
第68回Bパート『頑張らなくちゃ/ソノためにだス』(1972年1月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/吉*田喜昭[Aパート]、鹿島 昇[Bパート]
■演出/布川郁司[Aパート]、富野喜幸[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[医 者](藤本 譲)、[父](池水通洋)、[新聞配達](大竹 宏)、[氷屋店員](西川幾雄)、[仔ニャンコ達](丸山裕子)、[仔ニャンコ達](松金よね子)、[仔ニャンコ達](友近恵子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[坊や(A)](白川澄子)、[坊や(B)](五島美恵子)、[坊や(C)](友近恵子)、[助 手](西川幾雄)、[親 父](大竹 宏)、[母親(B)](江藤久里子)

第69回Aパート『めでたくもあり/めでたくもなし/だス』(1972年1月23日放映)
第69回Bパート『タンタン狸の/いびり汁だス』(1972年1月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/吉*田喜昭[Aパート]、桜井京介[Bパート]
■演出/西牧秀雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[すみれ](坂井すみ江)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女](五島美恵子)、[男](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ポン太](松島みのり)、[うさぎ](友近恵子)

第70回Aパート『オオ!/白銀はまねく/だス』(1972年1月30日放映)
第70回Bパート『わしは/マンガのモデル/だス』(1972年1月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/鹿島 昇[Aパート]、牧野和夫[Bパート]
■演出/岡崎邦*彦[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西 一](八代 駿)、[花 子](杉山佳寿子)、[神 主](大竹 宏)、[アナウンサー](池水通洋)、[小左ェ門](相模 武)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[川 崎](西川幾雄)、[原大作](相模 武)、[弟子](大竹 宏)、[弟 子](池水通洋)

第71回Aパート『ズッコケ/寒中水泳/だス』(1972年2月6日放映)
第71回Bパート『ドボジデ/そんなに泣くん/だス』(1972年2月6日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/中原 薫[Aパート]、鹿島 昇[Bパート]
■演出/高橋唯貴雄[Aパート]、布川郁司[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西はじめ](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[審査員](大竹 宏)、[役 員(A)](西川幾雄)、[役 員(B)](池水通洋)、[子ニャンコ](五島美恵子)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[西はじめ](八代 駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[女の子](桂 玲子)、[母 親](友近恵子)、[巡 査](西川幾雄)、[生徒達](大竹 宏)

第72回Aパート『日本一の/しあわせ者/だス』(1972年2月13日放映)
第72回Bパート『ドバッとぬいで/頑張るだス』(1972年2月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/平谷寿敏[Aパート]、牧野和夫[Bパート]
■演出/岡崎邦*彦[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西はじめ](八代 駿)、[白雪先生](北浜晴子)、[生徒(A)](神谷 明)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[西はじめ](八代 駿)

第73回Aパート『抱いてやるだス/この胸にだス』(1972年2月20日放映)
第73回Bパート『イビリ狐に/ワナかけろだス』(1972年2月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/平谷寿敏[Aパート]、鹿島 昇[Bパート]
■演出/西牧秀雄[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[大ちゃんの父](明石 良)、[キク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ]、(愛川欽也[アイ子](松尾佳子)、[アイ子母](遠藤 晴)、[女の子](五島美恵子)、[女の子 父](大宮悌二)、[写真屋](田中 勝)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西はじめ](八代 駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[司会者](明石 良)、[ジット・ミ・トール](大宮悌二)、[落語家](田中 勝)

第74回Aパート『ばかと迷犬は/使いようだス』(1972年2月27日放映)
第74回Bパート『食って食って/食いまくる/だス』(1972年2月27日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/高木国子[Aパート]、玉名はじめ[Bパート]
■演出/岡崎邦*彦[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[小左エ門](滝口順平)、[男](神山卓三)、[ブル](田中 勝)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チンドン屋](田中 勝)、[主 人](神山卓三)、[トン丸木](丸山裕子)、[店 員](五島美恵子)、[行 司](肝付兼太)、[ダウンする人達](滝口順平)

第75回Aパート『花の都の/いなかっぺ/だス』(1972年3月5日放映)
第75回Bパート『ニャンタレ!/世紀の大決闘/だス』(1972年3月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/城山 昇[Aパート]、平谷寿敏[Bパート]
■演出/西牧秀雄[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[花 子](杉山佳寿子)、[ター坊](西川幾雄)、[ヒロシ](山本圭子)、[サチ子](友近恵子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[婦人警官](五島美恵子)、[警 官](矢田耕司)、[アナウンサー](池水通洋)、[アベック](田中 勝)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ニャンコ夫人](友近恵子)、[子ニャンコ達](西川幾雄)、[ク ロ](田中 勝)、[女の子](五島美恵子)、[親父ネコ](池水通洋)、[女ニャンコ](山本圭子)、[女ニャンコ](杉山佳寿子)、[レフリー](矢田耕司)

第76回Aパート『ドボジデ/アンヨがからむ/だス』(1972年3月12日放映)
第76回Bパート『悩める者は/みなきたれ/だス』(1972年3月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/平谷寿敏[Aパート]、鹿島 昇[Bパート]
■演出/高橋唯貴雄[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西はじめ](八代 駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[魚 屋](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]/[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[子チャンコ達](丸山裕子)、[ゲバクロ](大竹宏)、[ニャンニャン](友近恵子)、[ブチオ](肝付兼太)、[女の子](吉田理保子)、[イメージの中の女](五島美恵子)
(注記)「子チャンコ達」はAR台本の表記ママ。

第77回Aパート『姿よりも/心だス』(1972年3月19日放映)
第77回Bパート『踊るアホウに/イビリ節だス』(1972年3月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/平谷寿敏[Aパート]、桜井京介[Bパート]

〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山 昇[A・Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、布川郁司[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ニャンコ夫人](友近恵子)、[西はじめ](八代 駿)、[さつき](杉山佳寿子)、[女生徒 (A)](五島美恵子)、[女生徒 (B)](松金よねこ)、[日本選手(1)](神谷 明)、[ソ連選手 (A)](大竹 宏)、[ソ連選手 (B)](山下啓介)、[アナウンサー](池水通洋)、[先 生](平井道子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[浪](池水通洋)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ニャンコ夫人](友近恵子)、[学 生](神谷 明)、[小学生(1)](平井道子)、[小学生(2)](松金よねこ)、[小学生(4)](池水通洋)、[老 人](大竹 宏)、[子 供(1)](五島美恵子)、[子 供(2)](杉山佳寿子)、[電気工夫(1)](八代 駿)、[電気工夫(2)](山下啓介)

第55回Aパート『温泉ホテルの／番頭 だス』(1971年10月17日放映)
第55回Bパート『もてるモデル は／このモデル／だス』(1971年10月17日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山 昇[Aパート]、[柳川 茂[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代 駿)、[西の父](西山 連)、[旅館の主人](藤本 譲)、[女中頭](中島喜*美栄)、[女 中](熊沢恵子)、[男の子](友近恵子)、[少 女](五島美恵子)、[おばあさん](丸山裕子)、[男](山下啓介)、[男](長谷川誠三)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西はじめ](八代 駿)、[アナウンサー](友近恵子)、[木 持](西山 連)、[女](五島美恵子)、[郵便ヤ](山下啓介)
(注記)ＡＲ台本では、Ｂパート脚本が「柳川 茂」と記載されている。対するオープニングの脚本表示は「城山 昇」のみ。ただし、この回に限っては、他の回のオープニングの編集ミスとは考えにくい(脚本、演出が同じ組み合わせとなる他の回の候補が見当たらないため)。ここでは、Ｂパート脚本の表示洩れと判断し、ＡＲ台本をもとにデータを補った。訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、「郵便ヤ」役が「長谷川誠三」となっている。

第56回Aパート『好きになったら／もろいだス』(1971年10月24日放映)
第56回Bパート『ほれっぽいのが／玉にキズだス』(1971年10月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山 昇[A・Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[桜岡健児](田中亮一)、[みどり](杉山佳寿子)、[鬼 沢](石丸博也)、[男 (A)](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西はじめ](八代 駿)、[桜岡健児](田中亮一)、[みどり](杉山佳寿子)、[鬼 沢](石丸博也)、[空手部員(A)](大竹 宏)、[空手部員(B)](神谷 明)、[空手部員(C)](武川 信)

第57回Aパート『語るも／涙*の話だス』(1971年10月31日放映)
第57回Bパート『ソコにつける／薬はない だス』(1971年10月31日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭[Aパート]、柳川 茂[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、布川郁司[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[和 尚](八奈見乗児)、[五 郎](太田淑子)、[産 婆](遠藤 晴)、[祖 父](大竹 宏)、[父](飯塚昭三)、[機関士](鈴木利明)、[奥さん](友近恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[さくら](太田淑子)、[ゆ り](友近恵子)、[駅 員](鈴木利明)、[老婆](遠藤 晴)、[男(伊井加元)](八奈見乗児)、[男 (A)](大竹 宏)、[男(B)](飯塚昭三)
(注記)「鈴木利明」は訂正ＡＲ台本の表記ママ。

第58回Aパート『生まれた子ニャンコ／1.2.3 ……／だス』(1971年11月7日放映)
第58回Bパート『ニャンコ子ニャンコ／ニャンパラリだス』(1971年11月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山 昇[Aパート]、平谷寿敏[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[院 長](藤本 譲)、[看護婦](石川留美子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[シロ](松尾佳子)、[ク ロ](大竹 宏)、[仔猫達](五島美恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[魚 屋](藤本 譲)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[シ ロ](松尾佳子)、[クロ](大竹 宏)、[ミ ー](五島美恵子)、[小左ェ門](藤本 譲)

第59回Aパート『ズッコケ／男のはな道／だス』(1971年11月14日放映)
第59回Bパート『追い出せ！／下宿人 だス』(1971年11月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鹿島 昇[Aパート]、城山 昇[Bパート]
■演出／西牧秀雄[A・Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[豚丸木](丸山裕子)、[中村先生](松島みのり)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ク ロ](大竹 宏)、[子猫達](田中 勝)、[子猫達](五島美恵子)、[子猫達](友近恵子)、[友](斉藤靖子)、[友](島本文子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[薩摩芋吉](田中 勝)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)

第60回Aパート『ズッコケ／消防署長／だス』(1971年11月21日放映)
第60回Bパート『柔の道を／捨てる だス』(1971年11月21日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／太田イサム[Aパート]、平谷寿敏[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男 (A)](池水通洋)、[男 (B)](大竹 宏)、[女 (A)](沢田敏子)、[消防署長](加藤 修)、[奥さん](五島美恵子)、[子 供](杉山佳寿子)、[団員(A)](石丸博也)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[お 花](杉山佳寿子)、[嵐先生](池水通洋)、[白雪先生](沢田敏子)、[西](八代 駿)、[田 中](田中亮一)、[山 田](大竹 宏)、[水 野](石丸博也)、[池 田](加藤 修)
(注記)現在の再放映では、脚本が「吉田喜昭」「玉 名 はじめ」、演出が「高 橋唯貴雄」「西牧秀雄」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第61回のつなぎ間違い)の可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ａパート脚本を「太田イサム」、Ｂパート脚本を「平谷寿敏」、Ｂパート演出を「案納正美」とした。訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Ａパートの「女 (A)」役が「五島美恵子」、「奥さん」役が「沢田敏子」となっている。

第61回Aパート『わるのり／ボウリング／だス』(1971年11月28日放映)
第61回Bパート『サヨナラ銚路の／マドロス だス』(1971年11月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭[Aパート]、玉名はじめ[Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[外山フリ子](川島フジコ)、[アナウンサー](池水通洋)、[女 (A)](鳥越 碧)、[男 (A)](大竹 宏)、[男 (B)](沢りつお)、[ガードマン(A)](西崎章治)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西はじめ](八代 駿)、[西の父](大竹 宏)、[船員](西崎章治)、[女](川島ふじ子)、[アナウンサー](沢りつお)
(注記)訂正ＡＲ台本では、「受 付」役として「西崎章治」の名前が記載されている。一方、台本の予備のほうでは、「ガードマン(A)」及び「ガードマン(B)」役として同じ「西崎章治」の名がある。ここでは、後者の記載を妥当なものと判断し、採用してある。また、台本の予備のほうでは、Ｂパートの「アナウンサー」役(「上野アナウンサー」という手書きの補足あり)が「大竹or池水」となっている。

第62回Aパート『うらめしや／幽霊 だス』(1971年12月5日放映)
第62回Bパート『きらいきらいも／好きのうちだス』(1971年12月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／太田イサム[Aパート]、城山 昇[Bパート]
■演出／岡崎邦*彦[Aパート]、西牧秀雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男 (A)](神谷 明)、[男(B)](池水通洋)、[男 (C)](大竹 宏)、[寺男](八奈見乗児)、[和 尚](加藤修)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代駿)、[白雪先生](北浜晴子)、[ツルペロリ](八奈見乗児)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ク ロ](大竹 宏)、[女 医](五島美恵子)、[仔猫達 (白)](友近恵子)、(仔猫達(A)](神谷 明)、[仔猫達](丸山裕子)、[仔猫達](池水通洋)

第63回Aパート『きりりとしめれば／心がしまる／だス』(1971年12月12日放映)
第63回Bパート『出る時寝る時／火の用心／だス』(1971年12月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭[Aパート]、鹿島 昇[Bパート]
■演出／布川郁司[Aパート]、案納正美[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[園 長](高*村章子)、[教 頭](大竹 宏)、[嵐先生](池水通洋)、[白雪先生](沢田敏子)、[ＰＴＡ会長](藤本 譲)、[奥さん(1)](五島美恵子)、[奥さん(2)](友近恵子)、[男生徒(1)](神 雄二)、[男生徒(2)](西川幾雄)、[男生徒(3)](沢井正延)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ソバ屋](大竹 宏)、[客](池水通洋)、[男](西川幾雄)、[女](五島美恵子)、[男](藤本 譲)
(注記)訂正ＡＲ台本では、Ａパートの「男生徒(1)」役が「池水通洋」となっているが、台本の予備では、それが「神 雄二」に修正されている。さらに、他の配役についても、正本では空欄(未定箇所)が多いのに対し、予備のほうではすべてが記入されている。以上の状況から、この回は台本の予備を尊重し、データを作成した。Ｂパートに関しても予備のほうが記載内容が詳しいが唯一のくい違いとして、「町人 B」役が正本では「大竹 宏」なのに対し、予備では「田中」となっている。また、「仔ニャンコ達」役の２人目にも「田中」の記載がある。

第64回Aパート『犬も歩けば／土俵に上[あが]る／だス』(1971年12月19日放映)
第64回Bパート『男らしさ を／見せる だス』(1971年12月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、太田イサム[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代

R台本の記載を尊重し、Bパート脚本を「吉田喜昭」、Aパート演出を「岡崎邦*彦」、Bパート演出を「案納正美」とした。

第42回Aパート『泥棒ねずみの／皮をはげ!／だス』(1971年7月18日放映)
第42回Bパート『そこが女の／泣きどころだス』(1971年7月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久[A・Bパート]
■演出／高*橋唯貴雄[A・Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平 透)、[キ ク](岡本茉利)、[ボーイ(A)](西川幾雄)、[泥 棒](中村武己)、[警備員](大竹 宏)、[女 客](熊沢恵子)、[司会者](牧野和子)、[女 A](中村紀子子)、[女 B](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[一 郎](神谷 明)、[父](大竹 宏)、[母](中村紀子子)、[松 子](牧野和子)、[竹 子](杉山佳寿子)、[梅 子](友近恵子)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「女 D」役として「沢田」という書き込みがある。

第43回Aパート『ズッコケ／盆踊りだス』(1971年7月25日放映)
第43回Bパート『チクリと痛い／イビリ節だス』(1971年7月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Aパート]、伊東恒久[Bパート]
■演出／笹川ひろし[Aパート]、高*橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西](八代 駿)、[花 子](杉山佳寿子)、[サユリ](平井道子)、[男](関 富也)、[吾作爺さん](大竹 宏)、[ネズミ](坪井章子)、[駅員A](塩瀬新一)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[トモ子](坪井章子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ゴ ロ](滝口順平)、[マリ子](平井道子)

第44回Aパート『わしは映画の／主 役 だス』(1971年8月1日放映)
第44回Bパート『日本一の／ほれられ男／だス』(1971年8月1日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久[Aパート]、城山 昇[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代 駿)、[山中一平](西川幾雄)、[監 督](大竹 宏)、[助監督](敦賀峯一)、[グレン隊(A)](関 富也)、[女](友近恵子)、[女 ①](沢田和子)、[女 ②](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[婦 人](沼波輝枝)、[少 女](杉山佳寿子)、[運転手](関 富也)、[女 中](友近恵子)、[マリちゃん](沢田和子)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「グレン隊(B)」役として「神雄二」、「グレン隊(C)」役として「長谷川誠三」という書き込みがある。

第45回Aパート『「熊さん／お手を どうぞ」／だス』(1971年8月8日放映)
第45回Bパート『デートに胸が／燃える だス』(1971年8月8日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山 昇[A・Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西 一](八代 駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[嵐 先生](仲村秀生)、[警備隊長](大竹 宏)、[猟 師(A)](峰 恵研)、[猟 師(B)](鈴木利秋)、[ク マ(3)](友近恵子)、[ク マ(4)](五島美恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西 一](八代 駿)、[嵐 先生](仲村秀生)、[ニャンコ](愛川欽也)、[カエルの親子](大竹 宏)、[カエルの親子](友近恵子)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、「ク マ(1)」役が「友近恵子」、「ク マ(2)」役が「五島美恵子」、「ク マ(3)」役が「高橋哲夫」、「ク マ(4)」役が「泉 正信」となっている。

第46回Aパート『人情／ズッコケ風呂／だス』(1971年8月15日放映)
第46回Bパート『写真家泣かせの／モデル だス』(1971年8月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野 修[A・Bパート]
■演出／高橋唯貴雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西 一](八代 駿)、[おやじ](加藤 修)、[おかみ](遠藤 晴)、[男 (A)](大竹 宏)、[男 (B)](西山 連)、[男 (C)](武川 信)、[女 ①](五島美恵子)、[女 ②](丸山裕子)、[女 ③](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西 一](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[矢五郎](大平 透)、[落 語](加藤 修)、[トン丸木](丸山裕子)、[女 ①](杉山佳寿子)、[女 ②](五島美恵子)、[写真家](大竹 宏)

第47回Aパート『恋 する／海の男だス』(1971年8月22日放映)
第47回Bパート『女の誘いにゃ／弱いだス』(1971年8月22日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平谷寿敏[Aパート]、城山 昇[Bパート]
■演出／岡崎邦*彦[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西はじめ](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[子 供A](友近恵子)、[おやじ](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[矢五郎](大平 透)、[おばあさん](麻生美代子)、[少 女](友近恵子)、[おじさん](大竹 宏)、[かねたたき](八代 駿)

第48回Aパート『猫も歩けば／雀に当るだス』(1971年8月29日放映)
第48回Bパート『浮ればやしに／のらん だス』(1971年8月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山 昇[Aパート]、平谷寿敏[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ク ロ](大竹 宏)、[坊 や](島本文子)、[矢五郎](大平 透)、[母](友近恵子)、[和 尚](槐 柳二)、[スズメ](五島美恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女](斉藤靖子)、[女](友近恵子)

第49回Aパート『チビット古い／新入生 だス』(1971年9月5日放映)
第49回Bパート『「買って来*るぞ」と／勇しく だス』(1971年9月5日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／松沢 甲[Aパート]、霧生克已[Bパート]
■演出／笹川ひろし[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代 駿)、[トン丸木](丸山裕子)、[白雪ケメ子先生](武藤礼子)、[さくら](赤木葉子)、[嵐先生](池水通洋)、[女生徒(A)](五島美恵子)、[女生徒(B)](杉山佳寿子)、[女生徒(C)](角本みゆき)、[男生徒(A)](神谷 明)、[男生徒(B)](大竹 宏)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女客(A)](杉山佳寿子)、[女客(B)](丸山裕子)、[女客(C)](赤木葉子)、[ペルネャネコ(B)](角本みゆき)、[マ マ](武藤礼子)、[男店員(A)](大竹 宏)、[男店員(B)](池水通洋)、[くるみ](五島美恵子)、[男店員(C)](神谷 明)

第50回Aパート『ハエに大福／なめられただス』(1971年9月12日放映)
第50回Bパート『顔じゃないだス／心 だス』(1971年9月12日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平谷寿敏*[Aパート]、柳川 茂[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[桜井ユリ](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[裕次郎](野沢雅子)、[シャムネコ](杉山佳寿子)、[おばあさん](丸山裕子)、[男 (A)](西川幾雄)、[男 (B)](池水通洋)、[男 (C)](神谷 明)、[女 (A)](高*橋直子)、[女 (B)](高*坂真琴)、[召使い](熊沢恵子)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Bパートの「シャムネコ」役が「井関栄子」になっている。

第51回Aパート『今晩わ／大福奴 だス』(1971年9月19日放映)
第51回Bパート『猫がだめなら／犬がいる だス』(1971年9月19日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平谷寿敏*[A・Bパート]
■演出／岡崎邦*彦[A・Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西はじめ](八代 駿)、[女生徒(A)](友近恵子)、[PTA会長](藤本 譲)、[欲張](西山 連)、[校 長](近藤高*子)、[教 頭](大竹 宏)、[嵐先生](池水通洋)、[白雪先生](牧野和子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[西はじめ](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[ク ロ](大竹 宏)、[おやじ](西山 連)、[庄左エ門](藤本 譲)、[チビ犬](池水通洋)、[母](牧野和子)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「女生徒(A)」役が「島本文子」、「芸 者」役が「石堂洋子」になっている。

第52回Aパート『わしは／西部の勇者だス＊』(1971年9月26日放映)
第52回Bパート『虫歯は／抜くにかぎるだス＊』(1971年9月26日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／牧野和夫[Aパート]、平谷寿敏*[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平 透)、[西](八代 駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[社 員](大竹 宏)、[馭 馬](八奈見乗児)、[酋 長](家弓家正)、[インデアン(A)](塩瀬新一)、[インデアン(C)](藤本 譲)、[インデアン猫](友近恵子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[男(客) (A)](八奈見乗児)、[男(客) (B)](藤本 譲)、[男(客)(C)](大竹 宏)、[女 (客)](五島美恵子)、[子供](友近恵子)、[医 者](家弓家正)

第53回Aパート『ニャンとも／アツイ話／だス』(1971年10月3日放映)
第53回Bパート『ニャンとも／めでたい話／だス』(1971年10月3日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／平谷寿敏*[A・Bパート]
■演出／西牧秀雄[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[チーコ](友近恵子)、[花 子](杉山佳寿子)、[小左エ門](藤本 譲)、[クロネコ](大竹 宏)、[夫 人](高*橋直子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[床やのオヤジ](兼本新吾)、[客 (外人)](西山 連)、[ク ロ](大竹 宏)、[チーコ](友近恵子)、[客 達](五島美恵子)、[客 達](高*橋直子)、[客 達](杉山佳寿子)、[客 達](藤本 譲)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「夫人」役が「五島美恵子」、Bパートの「客 達」役が「杉山・五島・友近 大竹・藤本」となっている。

第54回Aパート『やらねばならぬ／バレー だス』(1971年10月10日放映)
第54回Bパート『ケンカは／わしがあずかる／だス』(1971年10月10日放映)

第31回Ａパート『波のまにまに／ドンブラコ／だス』(1971年5月2日放映)
第31回Ｂパート『D51[でごいち]／機関車魂／だス』(1971年5月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／伊東恒久[Ａパート]、陣野　修[Ｂパート]
■演出／高*橋資祐[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／大ちゃん(野沢雅子)、キクちゃん(岡本茉利)[Ａパート]、ニャンコ先生(愛川欽也)、西一(八代　駿)[Ａパート]
■[声の出演[第２画面]／船長(大竹　宏)[Ａパート]、駅長(安田　隆)[Ｂパート]、ジンジロベエ(矢田　稔)[Ｂパート]、作業員(峰　恵研)[Ｂパート]、　〃　(武川　信)[Ｂパート]
■原動画／遠藤克己、高倉建夫、榎本久雄、杉浦よし子、丹内　司、本多　哲
■美術設定／新井寅雄■背景／伊豆島君江、吉原一輔■仕上／柴田　勝
■色彩設定／山崎厚子■特殊効果／山崎雅典■トレス彩色／浅見文子
■検査／飯田不二枝■撮影／和光プロダクション、北川　嵩■編集／金子登喜代
■進行／小峰次男、新井　孝
〈資料より補足〉
■声の出演[Ｂパート]／[管理局長](大竹　宏)、[作業員(Ｃ)](八代　駿)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Ｂパートの「作業員(Ｄ)」役の右に「神」、「作業員(Ｄ)」役のすぐ下に「石川留美子」という書き込みがある。

第32回Ａパート『そこに山が／あるからだス』(1971年5月9日放映)
第32回Ｂパート『ズッコケ／ご先祖さま／だス』(1971年5月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／野田　恵[Ａパート]、陣野　修[Ｂパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Ａパート]、岡崎邦*彦[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[トン丸木](丸山裕子)、[西はじめ](八代　駿)、[女生徒(Ａ)](石川留美子)、[女生徒(Ｂ)](友近恵子)、[へ　ビ](大竹　宏)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[御先祖様](大竹　宏)

第33回Ａパート『わしの近道／通りゃんせだ／だス』(1971年5月16日放映)
第33回Ｂパート『当るも当らぬも／時の運だス』(1971年5月16日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平谷寿敏*[Ａパート]、吉田喜昭[Ｂパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西　はじめ](八代　駿)、[サト子](平井道子)、[サト子の父](寺島幹夫)、[ヤブ医者](辻村真人)、[リル](丸山裕子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[南　田](西川幾雄)、[南田の父](寺島幹夫)、[豚丸木](丸山裕子)、[仲間　(Ｂ)](神谷　明)、[西　はじめ](八代　駿)、[易　者](辻村真人)、[女](平井道子)

第34回Ａパート『お上りニャンコを／探すだス』(1971年5月23日放映)
第34回Ｂパート『母ちゃんは／いいもんだス』(1971年5月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久[Ａパート]、平谷寿敏*[Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａパート]、岡崎邦彦[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[婦　人](遠藤　晴)、[男](田中　勝)、[女](五島美恵子)、[女の子](坪井章子)、[ドロボー猫](大竹　宏)、[トメコ](坪井章子)、[メス猫(Ａ)](丸山裕子)、[メス猫(Ｂ)](杉山佳寿子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[母　親](高*村章子)、[リ　コ](杉山佳寿子)

第35回Ａパート『わしは／応援団長／だス』(1971年5月30日放映)
第35回Ｂパート『どっちが／本当の大将／だスか』(1971年5月30日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野修[Ａパート]、桜井京介[Ｂパート]
■演出／高橋唯貴雄[Ａパート]、笹川ひろし[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[主審](大竹　宏)、[豚丸木](丸山裕子)、[Ａチーム　(3)](石川留美子)、[Ａチーム　(5)](柴田昭子)、[Ａチーム　(6)](熊沢恵子)、[Ｂチーム(1)](小泉栄子)、[Ｂチーム　(3)](樋上啓子)、[Ｂチーム　(4)](鳥越　碧)、[犬](田中　勝)、[女(Ａ)](斉藤靖子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[西郷アワモリ](大竹　宏)、[ニャンコ](愛川欽也)、[土佐犬](田中勝)、[女　(Ａ)](樋上啓子)、[女　(Ｂ)](柴田昭子)、[女　(Ｃ)](鳥越　碧)、[女(Ｄ)](石川留美子)、[女　(Ｅ)](小泉栄子)、[男　(Ａ)](神谷　明)、[男　(Ｂ)](鈴木利秋)、[豚丸木](丸山裕子)
(注記)現在の再放映では、脚本が「吉田喜*昭」「桜井京介」、演出が「案納正美」「高橋唯貴雄」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第36回のつなぎ間違い)の可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ａパート脚本を「陣野　修」、Ａパート演出を「高橋唯貴雄」、Ｂパート演出を「笹川ひろし」とした。

第36回Ａパート『大ちゃん鍋で／頑張るだス』(1971年6月6日放映)
第36回Ｂパート『聞いちゃならない／音楽会だス』(1971年6月6日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜*昭[Ａパート]、桜井京介[Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａパート]、高橋唯貴雄[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[弘のママ](中村紀子子)、[弘](神谷　明)、[ラーメンヤ主人](大竹　宏)、[生徒(Ａ)(デブ)](丸山裕子)、[生徒(Ｂ)(メガネ)](川島ふじ子)、[生徒(Ｃ)(ピンク)](五島美恵子)、[生徒(Ｄ)(テッペン)](友近恵子)、[生徒(Ｅ)(オクさん)](柴崎汎子)、[生徒(Ｆ)(若い)](杉山佳寿子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ルリ子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[郵便や](大竹　宏)、[指揮者](山下啓介)、[客　女①](川島ふじ子)、[受　付](五島美恵子)、[アナウンス](友近恵子)、[客　女②](中村紀子子)、[客　女③](丸山裕子)
(注記)現在の再放映及び市販のビデオソフト版では、脚本が「陣野修」「桜井京介」、演出が「高橋唯貴雄」「笹川ひろし」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第35回のつなぎ間違い)の可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ａパート脚本を「吉田喜*昭」、Ａパート演出を「案納正美」、Ｂパート演出を「高橋唯貴雄」とした。

第37回Ａパート『わしはズッコケ／お手伝いだス』(1971年6月13日放映)
第37回Ｂパート『男涙の／子守歌だス』(1971年6月13日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Ａパート]、伊東恒久[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、笹川ひろし[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[奥さん](北浜晴子)、[おトクさん](丸山裕子)、[テレビ内のタレント](峰　恵研)
■声の出演[Ｂパート]／[ニャンコ](愛川欽也)、[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[西](八代　駿)、[ケメコ先生](北浜晴子)、[トン丸木](丸山裕子)、[お巡り(Ａ)](峰　恵研)、[お巡り(Ｂ)](大竹　宏)、[店員(Ａ)](山下啓介)、[母　(Ａ)](杉山佳寿子)、[母　(Ｄ)](五島美恵子)

(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Ｂパートの「母　(Ａ)(Ｅ)」役として「五島美恵子」、「母　(Ｂ)(Ｆ)」役として「斉藤靖子」「北浜」、「母　(Ｃ)」もしくは「母(Ｄ)(Ｇ)」役として「丸山」という書き込みがある。

第38回Ａパート『サルも木から／落ちるだス』(1971年6月20日放映)
第38回Ｂパート『外人さんにゃ／弱いだス』(1971年6月20日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、平谷寿敏[Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａパート]、高橋唯貴雄[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[運転手](大竹　宏)、[荷物の男](立壁和也)、[客(Ａ)](牧野和子)、[客　(Ｂ)](五島美恵子)、[客　(Ｃ)](山下啓介)、[人　夫](千葉耕市)、[母](友近恵子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[陣八郎](千葉耕市)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ロバート](大竹　宏)、[メアリー](牧野和子)、[マイク](神谷　明)
(注記)現在の再放映では、オープニングが第37回と同じものになっている。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ａパート脚本を「城山　昇」、Ｂパート脚本を「平谷寿敏」、Ａパート演出を「案納正美」、Ｂパート演出を「高橋唯貴雄」とした。

第39回Ａパート『心の修業に／旅立つだス』(1971年6月27日放映)
第39回Ｂパート『東海道は／日本晴れ／だス』(1971年6月27日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、吉田喜昭[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[西](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[豚丸木](丸山裕子)、[女生徒(Ａ)](五島美恵子)、[女生徒(Ｂ)](杉山佳寿子)、[和　尚](大竹　宏)、[リーダー](宮内幸平)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西はじめ](八代　駿)、[西の父](宮内幸平)、[ミドリ](杉山佳寿子)、[生徒(1)](高橋哲夫)、[アナウンス](大竹　宏)
(注記)現在の再放映では、オープニングが第41回と同じものになっている。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ａパート脚本を「城山　昇」とした。

第40回Ａパート『ズッコケ／ハッピーバースディー／だス』(1971年7月4日放映)
第40回Ｂパート『愛して恋して／ニャンパラリ／だス』(1971年7月4日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、吉田喜昭[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[豚丸木](丸山裕子)、[西](八代　駿)、[店員(女)](五島美恵子)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[じいちゃん](大竹　宏)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[オス猫](大竹　宏)、[おかみさん(3)](川島ふじ子)

第41回Ａパート『チビット／やける話だス』(1971年7月11日放映)
第41回Ｂパート『情は人の／ためならず／だス』(1971年7月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久[Ａパート]、吉田喜昭[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[フリート](阪　脩)、[ジェニー](太田淑子)、[記者(Ａ)](池水通洋)、[記者(Ｂ)](塩瀬新一)、[男　(Ｂ)](大竹　宏)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[押　豪造](大竹　宏)、[仲間(Ａ)](阪　脩)、[仲間(Ｂ)](池水通洋)、[おかみさん(1)](江藤久里子)、[おかみさん(2)](白川澄子)、[おかみさん(3)](川島ふじ子)、[おかみさん(4)](太田淑子)
(注記)訂正ＡＲ台本の予備のほうでは、Ｂパートの「仲間(Ａ)」役が「池水通洋」、「仲間(Ｂ)」役が「阪　脩」、「おかみさん(4)」役が「斉藤靖子」、「おかみさん(5)」役が「白川澄子」、「母」役が「江藤久里子」となっている。
現在の再放映では、オープニングが第42回と同じものになっている。ここでは、Ａ

(菊地紘子)、[トミ子](太田淑子)、[ヤブ田](大竹　宏)、[ウグイス](北浜晴子)、[西　　一](八代　駿)

第19回Aパート『わしは／宮本武蔵／だス』(1971年2月7日放映)
第19回Bパート『モーレツ／寒げいこだス』(1971年2月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭[Aパート]、山下圭一[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、池端俊策[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[西　　一](八代　駿)、[嵐　大作](仲村秀生)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[宮本武蔵](大竹　宏)、[お　通](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[じいさん](北村弘一)、[お花ちゃん](杉山佳寿子)、[医　者](大竹宏)、[矢五郎](大平　透)

第20回Aパート『両手に花は／困るだス』(1971年2月14日放映)
第20回Bパート『男の道は／つらいだス』(1971年2月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／武末　勝[Aパート]、吉田喜昭[Bパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[スピーカー](大竹　宏)、[運転手](田中　勝)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[白雪ケメ子先生](北浜晴子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[運転手(A)](大竹　宏)、[西　　一](八代　駿)、[不良学生(1)](田中勝)、[不良学生(2)](神谷　明)、[不良学生(3)](長谷川誠三)、[不良学生(4)](波多野樹三)

第21回Aパート『花嫁先生／さようならだス』(1971年2月21日放映)
第21回Bパート『すべるだス／転ぶだス／ダルマだス』(1971年2月21日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／武末　勝[Aパート]、陣野　修[Bパート]
■演出／笹川ひろし[Aパート]、高*橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[キク子](岡本茉利)、[西　　一](八代　駿)、[矢五郎](大平　透)、[白雪ケメ子](北浜晴子)、[豚ノッポ](大竹　宏)、[浅見　勇](池水通洋)、[会場係](山下啓介)、[豚丸木](丸山裕子)、[女生徒(B)](石川留美子)、[女生徒(C)](松金よねこ)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女の子(A)](石川留美子)、[女の子(B)](松金よねこ)、[女の子(C)](丸山裕子)、[選　手](池水通洋)、[男　(A)](大竹宏)、[男　(B)](山下啓介)

第22回Aパート『ズッコケ／ボイン投げ／だス』(1971年2月28日放映)
第22回Bパート『ドジョウに／行先聞*いてくれ／だス』(1971年2月28日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／伊東恒久[Aパート]、武末　勝[Bパート]
■演出／池端俊策[Aパート]、高橋資祐[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／大ちゃん(野沢雅子)、キクちゃん(岡本茉利)、ニャンコ先生(愛川欽也)、大柿矢五郎(大平　透)[Bパート]
■声の出演[第2画面]／白雪先生(北浜晴子)[Bパート]、つゆ子(小林裕子)[Aパート]、女レスラー(丸山裕子)[Aパート]、魚や(大竹　宏)[Bパート]、鳥肉屋(西川幾雄)[Bパート]
■原動画／二宮常雄、鹿島恒保、又野龍也、風間殊里、本多　哲、奥野芳久
■美術設定／新井寅雄■背景／吉原一輔、伊豆島君江■仕上／石田康実
■色彩設定／佐藤育子■特殊効果／山崎雅典■トレス彩色／氏田秀男
■検査／宇野　薫■撮影／和光プロダクション、馬場　健■編集／金子登喜代
■進行／土橋　博、荒木良克
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[かわい子ちゃん](北浜晴子)
■声の出演[Bパート]／[西　はじめ](八代　駿)、[トンマル木](丸山裕子)、[客(A)](小林裕子)

第23回Aパート『桃の節句に／うきうきだス』(1971年3月7日放映)
第23回Bパート『遠くにあって／近いだス』(1971年3月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[A・Bパート]
■演出／岡崎邦*彦[Aパート]、案納正美[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[豚丸木](丸山裕子)、[女生徒(A)](杉山佳寿子)、[孤児院の先生](清水マリ)、[西　　一](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[西　　一](八代　駿)、[嵐](仲村秀生)、[キク子](岡本茉利)、[豚丸木](丸山裕子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[ミケコ](清水マリ)、[花ちゃん](杉山佳寿子)

第24回Aパート『嵐の中の／男だス』(1971年3月14日放映)
第24回Bパート『これは天下の／一大事だス』(1971年3月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平田　稔[Aパート]、武末　勝[Bパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[ニャンコ](愛川欽也)、[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[西　　一](八代　駿)、[豚丸木](丸山裕子)、[生　徒(A)](沢りつお)、[生　徒(B)](田口　昂*)、[生　徒(C)](小泉栄子)、[村　人(A)](大竹宏)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[看護人　(A)](青野　武)、[看護人　(B)](田口　昂*)、[牛](大竹　宏)、[馬　方](沢　りつお)、[ドロボー猫](丸山裕子)、[タマ](小泉栄子)、[選手(C)](八代　駿)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Aパートの「生　徒(A)」役、Bパートの「馬方」役、「アベック」役、「選手B」役が「西崎章治」、「選手A」役が「大竹　宏」、「選手C」役が「田口　昂*」、「選手D」役が「八代　駿」、「選手E」役が「青野武」になっている。

第25回Aパート『やって来る来る／お花ちゃん／だス』(1971年3月21日放映)
第25回Bパート『ドボジデ／こんなにもてる／だス』(1971年3月21日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／三宅直子[Aパート]、伊東恒久[Bパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Aパート]、高*橋資祐[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[運転手](西川幾雄)、[駅アナウンサー](大竹宏)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[ボーイ](西川幾雄)、[父](大竹　宏)、[娘](石川留美子)、[婦人](高*橋直子)、[少　女(C)](五島美恵子)

第26回Aパート『わしは／バリカン大将／だス』(1971年3月28日放映)
第26回Bパート『わしの道は／一本だス』(1971年3月28日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／山下圭一[Aパート]、武末　勝[Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、高*橋資祐[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[床や主人](宮内幸平)、[客　(A)](市川　治)、[客　(B)](八奈見乗児)、[アナウンサー(A)](大竹　宏)、[アナウンサー(B)](松金よねこ)、[アナウンサー(C)](斉藤靖子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[大金持介](大竹　宏)、[西　はじめ](八代　駿)、[工夫(A)](宮内幸平)、[工夫(B)](市川　治)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[玩具や](八奈見乗児)、[子供　(A)](丸山裕子)、[子供　(B)](松金よねこ)

第27回Aパート『勉強勉強／また勉強／だス』(1971年4月4日放映)
第27回Bパート『別れのつらさは／身にしみる／だス』(1971年4月4日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／平田　稔[Aパート]、吉田喜昭[Bパート]
■演出／高*橋資祐[A・Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　はじめ](八代　駿)、[西の母](北浜晴子)、[運転手](山下啓介)、[警官(A)](峰　恵研)、[警官(B)](西川幾雄)、[男](大竹宏)、[門弟達](丸山裕子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[白雪先生](北浜晴子)、[西　はじめ](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[豚丸木](丸山裕子)、[柔三四郎](西川幾雄)

第28回Aパート『ズッコケても／ズッコケても／だス』(1971年4月11日放映)
第28回Bパート『オオ！／ミステークだス』(1971年4月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[A・Bパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Aパート]、案納正美[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[白雪ケメ子](北浜晴子)、[嵐先生](仲村秀生)、[豚丸木](丸山裕子)、[先生](大竹　宏)、[西　はじめ](八代　駿)、[生徒　(1)](西川幾雄)、[女生徒(A)](五島美恵子)、[女生徒(B)](井関栄子)、[花ちゃん](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[キク子](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[メリー](杉山佳寿子)、[トミイ](西川幾雄)、[犬](大竹　宏)

第29回Aパート『花を愛する／心だス』(1971年4月18日放映)
第29回Bパート『ここがまんの／しどころだス』(1971年4月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Aパート]、吉田喜昭[Bパート]
■演出／岡崎邦*彦[Aパート]、高*橋唯貴雄[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ](愛川欽也)、[教育ママ](北浜晴子)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[矢五郎](大平　透)、[西　はじめ](八代　駿)、[白雪ケメ子](北浜晴子)、[トン丸木](丸山裕子)、[生　徒(A)](神谷明)、[生　徒(B)](菊地紘子)、[ニャンコ](愛川欽也)

第30回Aパート『わしは／名パイロット／だス』(1971年4月25日放映)
第30回Bパート『猛獣の中に／われ一人／だス』(1971年4月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修[A・Bパート]
■演出／案納正美[Aパート]、岡崎邦*彦[Bパート]
■声の出演[Aパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[西はじめ](八代　駿)、[女の子](北浜晴子)、[女の子](高*橋直子)、[女の子](丸山裕子)、[花](杉山佳寿子)、[ギャング男](阪　脩)、[ギャング男(B)](加藤　修)、[守　衛](島田　彰)、[吾　作](千葉耕市)
■声の出演[Bパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[白雪先生](北浜晴子)、[西はじめ](八代　駿)、[母](高*橋直子)、[坊　や](杉山佳寿子)、[トン丸木](丸山裕子)、[園　長](島田　彰)、[男　(A)](千葉耕市)、[男　(B)](阪脩)、[ライオンA](加藤　修)
(注記)訂正AR台本の予備のほうでは、Bパートの「ライオン」役の2人目が「島田彰」に、「カンガルー子*」が「丸山裕子」になっている。

(B)](杉山佳寿子)、[店員(女)(C)](北浜晴子)、[店員(女)(D)](遠藤　晴)、[店員(男)(A)](市川　治)、[客](八奈見乗児)
(注記)「武末　勝*」はクレジット表示ママ。

第８回Ａパート『わしも歩けば／棒に当るだス』(1970年11月22日放映)
第８回Ｂパート『子供は／風の子だス』(1970年11月22日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／小泉　陽[Ａパート]、城山　昇[Ｂパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Ａパート]、岡崎邦*彦[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／岡部英二■絵コンテ[Ｂパート]／竹内啓雄
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[少　年](西川幾雄)、[女の子(A)](橘　和香)、[女の子(B)](松金よね子)、[ポインター](大竹　宏)、[少年　A](八代　駿)、[少年　B](丸山裕子)、[恋人達](中山愛子)、[母　犬](北浜晴子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[白雪先生](北浜晴子)、[豚丸木](丸山裕子)、[女生徒(A)](橘　和香)、[女生徒(B)](松金よね子)、[女生徒(C)](中山愛子)、[ニャンコ先生](愛川欽也)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａ・Ｂパート「脚本」が「武末　勝」、Ａパート「演出」が「笹川ひろし」、Ｂパート「演出」が「高*橋唯貴雄」と記載。

第９回Ａパート『わしはやるだス／男だス』(1970年11月29日放映)
第９回Ｂパート『心のまよいは／すてるだス』(1970年11月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａ・Ｂパート]
■演出／高*橋資祐[Ａ・Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／案納正美■絵コンテ[Ｂパート]／岡部英二
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[白雪先生](北浜晴子)、[嵐　先生](仲村秀生)、[綱山健二](前川功人)、[健二の母](島　美弥子)、[ボ　ス](大竹　宏)、[少　年(C)](北村弘一)、[志賀鉄也](仲村秀生)、[大文字　一](徳丸　完)、[審　判](阪　修)、[仔犬](杉山佳寿子)、[女生徒達](石川留美子)、[女生徒達](松金よね子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[白雪先生](北浜晴子)、[嵐　先生](仲村秀生)、[大柿矢五郎](大平　透)、[吾作じいさん](北村弘一)、[綱山健二](前川功人)、[健二の母](島　美弥子)、[アナウンサー](徳丸　完)、[主　審](阪　修)、[老　人](大竹　宏)、[女生徒(A)](杉山佳寿子)、[女生徒(B)](松金よね子)、[女生徒(C)](石川留美子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａ・Ｂパート「脚本」が「武末　勝」、Ａパート「演出」が「案納正美」、Ｂパート「演出」が「高*橋唯貴雄」と記載。

第10回Ａパート『とつげき／新聞*配達だス』(1970年12月6日放映)
第10回Ｂパート『かわいこちゃん／にゃ／弱いだス』(1970年12月6日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／斉藤　寛[Ａパート]、伊東恒久[Ｂパート]
■演出／市江建次[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／市江けんじ■絵コンテ[Ｂパート]／黒川文男
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[西　一](八代　駿)、[新聞店主(１)](和田　啓)、[新聞店主(２)](島　俊介)、[女の先生](北浜晴子)、[大　男](大竹　宏)、[若夫婦](武藤礼子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[キクちゃん](岡本茉利)、[銀　子](武藤礼子)、[ペ　ル](山本よし子)、[白　猫](北浜晴子)、[男　A](和田　啓)、[門　弟(A)](大竹　宏)、[門　弟(B)](島　俊介)
(注記)サブタイトルの「聞」は門がまえが略字。竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａパート「脚本」が「武末　勝」、Ｂパート「脚本」が「城山　昇」と記載。

第11回Ａパート『どっちの手紙が／先だスか』(1970年12月13日放映)
第11回Ｂパート『わしは故郷の／大物だス』(1970年12月13日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修[Ａ・Ｂパート]
■演出／高*橋資祐[Ａ・Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Ｂパート]／高*橋資祐
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[吾作じいや](北村弘一)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[郵便配達員](大竹　宏)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[花ちゃん](杉山佳寿子)、[吾作じいや](北村弘一)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[村　長](神山卓三)、[村　人A](峰　恵研)、[村　人B](沢　りつお)、[村　人C](作間　功)、[駅　長](大竹　宏)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａパート「脚本」が「吉*田喜*昭」、Ｂパート「脚本」が「城山　昇」と記載。

第12回Ａパート『飛んで火に入る／四悪人だス』(1970年12月20日放映)
第12回Ｂパート『サンタは本当に／来るだスか』(1970年12月20日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、武*末　勝[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａ・Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[嵐　先生](仲村秀生)、[女生徒達](松島みのり)、[女生徒達](菊地紘子)、[ボ　ス](千葉耕市)(R)、[子　分(１)](大竹　宏)、[子　分(２)](沢　りつお)、[子　分(３)](雨森雅司)、[ニャンコ](愛川欽也)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[西](八代　駿)、[ニャンコ](愛川欽也)、[女の子の母](菊地紘*子)、[女の子](松島みのり)、[ガキ大将](大竹　宏)、[子　分](沢　りつお)、[子　分](仲村秀生)

第13回Ａパート『つまみ食いは／高いだス』(1970年12月27日放映)
第13回Ｂパート『わしは天下の／大スター／だス』(1970年12月27日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭[Ａ・Ｂパート]
■演出／高橋資祐[Ａパート]、高橋唯貴雄[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[西　一](八代　駿)、[主　人](大竹　宏)、[店　員](杉山佳寿子)、[店　員](作間　功)、[客　(A)](峰　恵研)、[客　(B)](水鳥鉄夫)、[ソバ屋出前持](武川　信)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[大柿矢五郎](大平　透)、[キクちゃん](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[二船老人](大竹　宏)、[候補者](峰　恵研)、[おまわり](武川　信)、[記　者](水鳥鉄夫)、[男　(１)](作間　功)、[女　(１)](小泉栄子)、[女　(２)](杉山佳寿子)、[女　(３)](松金よねこ)
(注記)現在の再放映では、脚本が「城山　昇」、演出が「高*橋資祐」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第９回のつなぎ間違い)の可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、脚本を「吉田喜昭」、Ａパート演出を高橋資祐」、Ｂパート演出を「高橋唯貴雄」とした。

第14回Ａパート『明けまして／ズッコケた／だス』(1971年1月3日放映)
第14回Ｂパート『大将凧よ／上[あが]れだス』(1971年1月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Ａパート]、城山　昇[Ｂパート]
■演出／高*橋唯貴雄[Ａパート]、高*橋資祐[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[西　一](八代　駿)、[豚丸木](丸山裕子)、[少　女](遠藤晴)、[石　松](大竹　宏)、[サル廻し](峰　恵研)、[ネ　コ](田中　勝)
■声の出演[Ｂパート]／[ニャンコ先生](愛川欽也)、[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[大柿矢五郎](大平　透)、[西　一](八代　駿)、[嵐　先生](仲村秀生)、[女生徒(１)](杉山佳寿子)、[女生徒(２)](菊地紘子)、[女生徒(３)](北浜晴子)

第15回Ａパート『都会の空気は／にがいだス』(1971年1月10日放映)
第15回Ｂパート『決死の／大サーカス だス』(1971年1月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／伊東紀子[Ａパート]、桜井京介[Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａ・Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[ニャンコ先生](愛川欽也)、[白雪ケメコ先生](北浜晴子)、[大ちゃん](野沢雅子)、[大柿矢五郎](大平　透)、[キクちゃん](岡本茉利)、[医師](北村弘一)、[社　長](大竹　宏)、[社　員](西川幾雄)、[客　①](八代　駿)、[警　官](仲村秀生)、[花　子](杉山佳寿子)、[ハル夫の母](菊地紘子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[団　長](大竹　宏)、[隊　長](峰　恵研)、[隊　員(A)](田中　勝)

第16回Ａパート『ズッコケ山の／ボス猿だス』(1971年1月17日放映)
第16回Ｂパート『花の姿よ／この胸にだス』(1971年1月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修[Ａパート]、吉田喜昭[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、高橋資祐[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[白雪先生](北浜晴子)、[キク子](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[女生徒](杉山佳寿子)、[ボスザル](雨森雅司)、[ナ　ナ](坪井章子)、[片目ザル](加藤　修)、[委員長ザル](大竹　宏)、[若者ザル](田中　勝)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[花　子](杉山佳寿子)、[ニャンコ](愛川欽也)、[西　一](八代　駿)、[古道具やの主人](大竹　宏)、[西の母](北浜晴子)、[赤ちゃん](坪井章子)、[男](加藤　修)、[男生徒](田中　勝)

第17回Ａパート『天才／チンドン屋だス＊』(1971年1月24日放映)
第17回Ｂパート『わしは／スーパージャックだス＊』(1971年1月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、陣野　修[Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａ・Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[矢五郎](大平　透)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[親　方](大竹　宏)、[女　房](丸山裕子)、[旗持ち](八代　駿)、[クラリネット吹き](教賀岑一)、[警　官(A)](峰　恵研)、[教　頭](和久井節緒)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[西　一](八代　駿)、[スーパー　ジャック](教賀岑一)、[男　(A)](大竹　宏)、[男(B)](八代　駿)、[男　(C)](峰　恵研)、[女店員](高*橋直子)、[老　婆](赤木葉子)、[親　父](和久井節緒)、[お手伝いさん](丸山裕子)

第18回Ａパート『福は外だス／鬼は内だス』(1971年1月31日放映)
第18回Ｂパート『春だス／梅にうぐいす／だス』(1971年1月31日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／武末　勝[Ａ・Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、高*橋資祐[Ｂパート]
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[西　はじめ](八代　駿)、[教　頭](矢田　稔)、[白雪先生](北浜晴子)、[女生徒(A)](菊地紘子)、[女生徒(B)](丸山裕子)、[女生徒(C)](太田淑子)、[用務員](大竹　宏)、[ニャンコ](愛川欽也)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キク子](岡本茉利)、[ニャンコ](愛川欽也)、[クズヤのダンナ](矢田　稔)、[クズヤの女房](丸山裕子)、[奥さん]

いなかっぺ大将（たいしょう）

1970年10月4日～1972年9月24日(第1～104回)　毎週日曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・1回2話構成・全104回(全208話)

(データソース)本作のタイトルクレジットは、オープニングに関してはフィルムへの焼き込みにより、エンディングに関してはタイトルカードの使用により、それぞれ表示が行われていたらしい。現在確認できるエンディングのプリントが全話にわたってノンクレジットであること、第22回と第31回についてはエンディング用のタイトルカードが現存していることがその根拠である。ただし、後番組となる『科学忍者隊　ガッチャマン』はオープニング、エンディングともに焼き込み表示となること、並行放映されていた『昆虫物語　みなしごハッチ』についてはシリーズの途中からオープニング、エンディングが焼き込み表示へと移行した可能性があること、などから、本作においても、シリーズ後半は焼き込み表示が行われた事実があるかも知れない。
　本リストでは、オープニングに関しては現存する全話分のクレジット内容を、エンディングに関してはカードが現存する上記2回分のみ、その表示内容を記載した。[ ]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記した。
　また、2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。例えば本作は、ほとんどの話数において訂正ＡＲ台本が2種類(正本と予備)保存されていた。両者の内容が矛盾しない限りは、その2つの情報を総合して記載したが、くい違いが見られる場合は正本の内容を優先し、相違点に関しては(注記)欄にその旨を記すようにした。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　コロンビアレコード　SCS-114　大ちゃん 数え唄
　原案／川崎 のぼる　作詞／石本美由紀　作曲／市川昭介　歌／吉田 よしみ
　C*小学館プロダクション
■原作／川崎のぼる　小学館の学年別・学習雑誌連載[26～49回は「・」なし]
■企画文芸*／鳥海*尽三、平谷寿敏*[1～94回]、酒井あきよし[95～104回]
■音楽／中村勝彦
■効果／イシダ.サウンドプロ
　[26～49回は「.」が「・」に、81～104回は「.」がなくなる]
■オープニング アニメーション／二宮常雄[26～49話]
■総監督／笹川ひろし
■制作／吉田竜夫、◇ タツノコ プロ[81～104回は「◇ 竜の子プロダクション」表記]
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■いなかっぺ大将 の 歌　コロムビア・レコードSCS-114
　原案／川崎のぼる　作詞／石本美由起　作曲／市川昭介　歌／吉田よしみ
　C*小学館プロダクション
■現像／東洋現像所■録音ディレクター／鳥海俊材
■録音／読広スタジオ、オムニバス・プロ
■プロデューサー／吉田健二
■制作／吉田竜夫、◇ タツノコ プロ■協力／フジテレビ

　ＡＲ台本には毎回、録音スタッフ名が印刷されていた。内容は以下の通り。
■録音ディレクター／鳥海俊材
■効果／イシダ サウンド プロ
■音楽進行／奥田公男 (読広)
■録音／読広スタジオ、オムニバス プロモーション
■制作担当／佐藤光雄 (竜の子プロダクション)、────、
　内間　稔(読広)[1～76、91～104回]、染野茂夫(読広)[1～90回]、
　林　秀博(読広)[77～90回]、近藤　誠(読広)[91～104回]

第1回Ａパート『わしは／風大左ェ門／だ ス』(1970年10月4日放映)
第1回Ｂパート『東京は／スゴイ とこ／だス』(1970年10月4日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａパート]、桜井京介[Ｂパート]
■演出／笹川ひろし[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Ｂパート]／案納正美
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ハナちゃん](杉山佳寿子)、[吾作](北村弘一)、[大柿矢五郎](大平　透)、[駅　長](和久井節緒)、[黒ベエ](増岡　弘)、[牛](永井一郎)、[猿](北浜晴子)、[タヌキ](矢田　稔)、[リス](岡本茉利)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キ　ク](岡本茉利)、[大柿矢五郎](大平　透)、[駅のアナウンサー](増岡　弘)、[運転手](矢田　稔)、[警　官](永井一郎)、[婦　警](北浜晴子)、[男](和久井節緒)、[女　1](杉山佳寿子)
(注記)現在の再放映及び市販のビデオソフト版では、脚本が「城山　昇」、演出が「高橋唯雄」「案納正美」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第3回のフィルムつなぎ間違い)の可能性が高い。ここではＡＲ台本の記載を尊重し、Ｂパート脚本を「桜井京介」、Ａパート演出を「笹川ひろし」とした。

第2回Ａパート『柔の道は／チビシイ／だス』(1970年10月11日放映)
第2回Ｂパート『わしは／学園の人気者／だス』(1970年10月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Ａパート]、平田 稔[Ｂパート]
■演出／高橋資祐[Ａパート]、笹川ひろし[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／高橋資祐■絵コンテ[Ｂパート]／西牧秀雄
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[大柿矢五郎](大平　透)、[ハナちゃん](杉山佳寿子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[男　(Ａ)](千葉耕市)、[男　(Ｂ)](大竹　宏)、[男　(Ｃ)](矢田　稔)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[大柿矢五郎](大平　透)、[キクちゃん](岡本茉利)、[白バラ学園園長](中村紀子子)、[白雪先生](北浜晴子)、[教頭先生](矢田　稔)、[黒部先生](仲村秀生)、[小　使](大竹　宏)、[千葉トン子](丸山裕子)
(注記)現在の再放映では、脚本が「桜井京介」「城山　昇」、演出が「岡崎邦*彦」「高橋資祐」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第4回のつなぎ間違い)である可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ｂパート脚本を「平田 稔」、Ａパート演出を「高橋資祐」、Ｂパート演出を「笹川ひろし」とした。

第3回Ａパート『これは／夢か幻だスか』(1970年10月18日放映)
第3回Ｂパート『祭ばやしにゃ／弱いだス』(1970年10月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａ・Ｂパート]
■演出／高 橋 唯貴雄[Ａパート]、案納正美[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／高橋唯貴雄■絵コンテ[Ｂパート]／案納正美
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ハナちゃん](杉山佳寿子)、[嵐先生](仲村秀生)、[車　陣八郎](千葉耕市)、[豚　丸木](丸山裕子)、[生　徒(Ｂ)](杉山佳寿子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[嵐　先生](仲村秀生)、[車　陣八郎](千葉耕市)

第4回Ａパート『キャット／空中三回転／だス』(1970年10月25日放映)
第4回Ｂパート『学芸*会は／メタメタだス』(1970年10月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Ａパート]、城山　昇[Ｂパート]
■演出／岡崎邦*彦[Ａパート]、高橋資祐[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／岡崎邦*彦■絵コンテ[Ｂパート]／岡部英二
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[大柿矢五郎](大平　透)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[白雪先生](北浜晴子)、[西　　一](八代　駿)、[豚丸木](丸山裕子)
(注記)現在の再放映及び市販のビデオソフト版では、脚本が「桜井京介」」「平田 稔」、演出が「高橋資祐」「笹川ひろし」と表示されるが、映像原版の編集ミス(第2回のつなぎ間違い)の可能性が高い。ここでは、ＡＲ台本の記載を尊重し、Ｂパート脚本を「城山　昇」、Ａパート演出を「岡崎邦*彦」、Ｂパート演出を「高橋資祐」とした。

第5回Ａパート『ワンとも／困っただス』(1970年11月1日放映)
第5回Ｂパート『これが／本当の野球／だス』(1970年11月1日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／城山　昇[Ａ・Ｂパート]
■演出／市江建次[Ａパート]、高橋唯貴夫[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／吉*田喜*昭、タカハシユキオ
■絵コンテ[Ｂパート]／西牧秀雄
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[白雪先生](北浜晴子)、[警　部](及川広夫)、[警　官Ａ](安田　隆)、[警　官Ｂ](加藤　修)、[警　官Ｃ](神山卓三)、[男　Ｂ](大竹　宏)、[生　徒](小沢悦子)、[西　一](八代　駿)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[西　　一](八代　駿)、[選　手(Ａ)](神山卓三)、[選　手(Ｂ)](加藤　修)、[選　手(Ｄ)](安田　隆)、[ピッチャー](大竹　宏)、[打　者](及川広夫)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａパート「脚本」が「小泉　陽」、Ｂパート「脚本」が「桜井京介」、Ａパート「演出」が「高橋唯貴雄」、Ｂパート「演出」が「高橋資祐」と記載。「高橋唯貴夫」はクレジット表示ママ。

第6回Ａパート『ズッコケ／大特訓だス』(1970年11月8日放映)
第6回Ｂパート『成せば成るだス／成らぬだス』(1970年11月8日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介[Ａパート]、武末　勝*[Ｂパート]
■演出／高橋資祐[Ａパート]、市江建次[Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／竹内啓雄■絵コンテ[Ｂパート]／市江けんじ
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[嵐　先生](仲村秀生)、[魚　屋](大竹　宏)、[車　掌](槐　柳二)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[三毛ネコ](北浜晴子)、[女](麻生みつ子)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[白雪先生](北浜晴子)、[五十嵐](大竹　宏)、[審　判](仲村秀生)、[健　児](小宮山清)、[オタケ](麻生みつ子)、[老　人](槐　柳二)、[西　　一](八代　駿)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、Ａパート「脚本」が「武末　勝」、Ｂパート「脚本」が「城山　昇」と記載。「武末　勝*」はクレジット表示ママ。

第7回Ａパート『朝の夢は／冷たいだス』(1970年11月15日放映)
第7回Ｂパート『デパートは／不便 だス』(1970年11月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／武末　勝*[Ａ・Ｂパート]
■演出／案納正美[Ａ・Ｂパート]
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Ａパート]／案納正美
■声の出演[Ａパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[キクちゃん](岡本茉利)、[白雪先生](北浜晴子)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[女](遠藤　晴)、[男](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[大ちゃん](野沢雅子)、[ニャンコ先生](愛川欽也)、[キクちゃん](岡本茉利)、[運転手](大竹　宏)、[店員(女)(Ａ)](小泉栄子)、[店員(女)

■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[アンチャ](久松夕子)、[テンコ](貴家堂子)、[シンガサハムシ(兄)](松金よね子)、[シンガサハムシ(弟)](高坂真琴)、[カマドウマ](峰　恵研)、[ナレーター](前田敏子)

第74話『忘れな草に願いをこめて＊』（1971年8月31日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／梅田智江■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[女　王](北浜晴子)、[アーヤ](山本嘉*子)、[母](中島喜美栄)、[ミツコ](白石冬美)、[ジロー](野沢雅子)、[ヒゲ爺さん](島田彰)、[家　来(A)](城山知馨夫)、[ア　リ](仲木隆司)、[長太郎](三浦利子)、[ナレーター](前田敏子)

第75話『愛は闘いの果てに＊』（1971年9月7日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[爺さん](今西正男)、[女　王](森川久美子)、[祈祷師](千葉耕市)、[王　子　クシー](松島みのり)、[バチカ](飯塚昭三)、[部　下(A)](峰　恵研)、[部　下(B)](田口　昂*)、[ナレーター](前田敏子)

第76話『森は呼んでいる＊』（1971年9月14日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／牧野和夫■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[マ　マ](北浜晴子)、[プー太](野沢雅子)、[プー次](あぽくみこ)、[プー三](三浦リコ)、[プー四郎](松島みのり)、[シデ虫](城山知馨夫)、[ヤスデ](水鳥鉄夫)、[ゴミ虫](武川　信)、[ナレーター](前田敏子)

第77話『はばたけ親子蝶＊』（1971年9月21日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／滝　三郎
■演出／原　征太郎■絵コンテ／原　征太郎
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ジミイ](松島みのり)、[パ　パ](石井敏郎)、[アリ](渡部　猛)、[ナレーター](前田敏子)、[子供たち](三浦利子)、[子供たち](千々松幸子)、[子供たち](三上由起)

第78話『死の池からの脱出＊』（1971年9月28日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／金沢文平■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第79話『輝ける生命＊』（1971年10月5日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[女　王](瀬能礼子)、[兵　隊(A)](武川　信)、[兵　隊(B)](田口　昂*)、[ロミー](石丸博也)、[ジュリー](杉山佳寿子)、[スズメガ](宮内幸平)、[ドクガ](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)

第80話『パパはひとりぼっち＊』（1971年10月12日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／梅田智江■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[長　助](今西正男)、[おちょう](松島みのり)、[女　王](来宮良子)、[爺さん](松岡文雄)、[虫　A](沢田和子)、[虫　B](三浦リコ)、[虫　C](千々松幸子)、[ナレーター](前田敏子)

第81話『炎の中のママ＊』（1971年10月19日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[坊　や](菅谷政子)、[スズメガ](宮内幸平)、[蝶](仲木隆司)、[テントウ虫](城山知馨夫)、[トンボ](田口　昂*)、[女　王](北浜晴子)、[アーヤ](山本嘉*子)、[ナレーター](前田敏子)

第82話『涙の中でありがとう＊』（1971年10月26日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／牧野和夫■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第83話『飛べ！ママを信じて＊』（1971年11月2日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、梅田智江■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「梅田智江」単独名で記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第84話『五匹のスズメバチ野郎＊』（1971年11月9日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／滝　三郎■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第85話『怒りの矢＊』（1971年11月16日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第86話『ハッチにつづけ！＊』（1971年11月23日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／金沢文平■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「陶山　智」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第87話『たくましき母の愛＊』（1971年11月30日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／原　征太郎■絵コンテ／黒川文男
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出が「黒川文男」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第88話『ママは涙のかなたに／前編＊』（1971年12月7日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第89話『ママは涙のかなたに／後編＊』（1971年12月14日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第90話『ママに抱かれて／前編＊』（1971年12月21日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、滝　三郎■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「鳥海尽三」単独名で記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第91話『ママに抱かれて／後編＊』（1971年12月28日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、滝　三郎■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「鳥海尽三」単独名で記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

■シノプシス／武末　勝■脚本／鳥海尽三、由起　圭
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ヒラタカメ虫](諏訪孝二)、[シャチホコガ](立壁和也)、[シャクトリガ](仲木隆司)、[スズメガ](古賀浩二)、[ヤ　ガ](武川信)、[キック](野沢雅子)、[オケラ博士](宮内幸平)、[ケラ子](杉山佳寿子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「武末　勝」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第52話『陽蔭の虫野郎＊』（1971年3月30日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[スカラベ](雨森雅司)、[ブランコ](武藤礼子)、母(木村令子)、[ダスティ](諏訪孝二)、[テント虫](城山　堅)、[オサ虫](加藤修)、[ヤステ](水島　晋)、[タマ虫](芹川　洋)、[ナレーター](前田敏子)

第53話『魔の虫喰い草＊』（1971年4月6日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／鳥海永行■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ピョン吉](山本嘉*子)、[トン吉*](久松夕子)、[トン吉*(父)](富山　敬)、[チョン子](菅谷政子)、[アゲハの母](高村章子)、[長老](及川広夫)、[大人虫　(Ａ)](水島　晋)、[大人虫　(Ｂ)](中村武己)、[大人虫　(Ｃ)](武川　信)、[大人虫　(Ｄ)](水鳥鉄夫)、[ナレーター](前田敏子)、[ママ](北浜晴子)

第54話『ママは海の彼方に＊』（1971年4月13日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[トラフ](八奈見乗児)、[ハ　チ(Ａ)](駒村クリ子)、[マ　マ](荘司美代子)、[シロベエ](沢田和子)、[蝶　(Ａ)](遠藤　晴)、[蝶(Ｃ)](武川　信)、[蝶　(Ｄ)](田口　昂*)、[長　老](千葉耕市)、[カマキリ](水鳥鉄夫)、[ナレーター](前田敏子)

第55話『ひとりぼっちの三匹＊』（1971年4月20日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[幼虫](久松夕子)、[子グモ](野沢雅子)、[ナレーター](前田敏子)

第56話『雪山の太陽＊』（1971年4月27日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／能　加平■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ドクター](家弓家正)、[ク　モ](立壁和也)、[雪虫](貴家堂子)、[雪　虫](山本嘉*子)、[シルバー](渡部　猛)、[ナレーター](前田敏子)

第57話『南の国の子守唄＊』（1971年5月4日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／原　征太郎■絵コンテ／西牧秀雄
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ガラ](西　桂太)、[シロ](桂　玲子)、[母](荘司美代子)、[トンボ](駒村クリ子)、[蛾　(子)](沢田和子)、[ア　ブ](三浦利子)、[大アゲハ](平井道子)、[虫　(Ａ)](峰　恵研)、[虫　(Ｂ)](田口　昂*)、[虫　(Ｃ)](西川幾雄)、[ナレーター](前田敏子)

第58話『父の星、母の星＊』（1971年5月11日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ショウジョウバエ(母)](渡辺典子)、[ショウジョウバエ(父)](水鳥鉄夫)、[ピート](太田淑子)、[カムロ](永井一郎)、[おシマさん](寺島信子)、[イモムシ](立壁和也)、[カタツムリ](加藤　修)、[ナレーター](前田敏子)

第59話『悲しい友情＊』（1971年5月18日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[チップ](喜多道枝)、[クワガタ](沢　りつお)、[坊　や](坪井章子)、[女　王](荘司美代子)、[隊　長](梶　哲也)、[ナレーター](前田敏子)

第60話『大海の一葉＊』（1971年5月25日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ロミー](山本嘉子)、[ジャン](沢田和子)、[玉虫](千葉順二)、[クロオオアリ](水島　晋)、[エンマ虫](渡部　猛)、[ナレーター](前田敏子)

第61話『美しき、いのち＊』（1971年6月1日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／田井洋子■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[エンマ・コオロギ](立壁和也)、[王　様](高塔正翁)、[王　妃](花形恵子)、[アポロ](白川澄子)、[エメラルド](松尾佳子)、[玉虫達Ａ](武川　信)、[玉虫達　Ｂ](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)

第62話『幸せはママの願い＊』（1971年6月8日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／柏戸比呂子■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[父](梓　欣造)、[母](佐原妙子)、[坊　や](沢田和子)、[バッタ](加藤　修)、[マイマイ](武川　信)、[ナレーター](前田敏子)

第63話『底ぬけ三匹の虫野郎＊』（1971年6月15日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ニワ吉](相模　武)、[マル太郎](肝付兼太)、[黒助](仲木隆司)、[村　長](吉*沢久嘉)、[村　人(Ａ)](立壁和也)、[村　人(Ｂ)](武川　信)、[村　人(Ｃ)](田口　昂*)、[アンナ](坂井すみえ)、[ナレーター](前田敏子)

第64話『もうひとりのママ＊』（1971年6月22日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ハナアブ](瀬能礼子)、[医　者](早野寿郎)、[玉虫](中村武己)、[タイコウチ](増岡　弘)、[村　人](武川　信)、[子　供(Ａ)](朝井ゆかり)、[子　供(Ｂ)](駒村クリ子)、[子　供](三浦利子)、[ナレーター](前田敏子)

第65話『燃えろ朝やけ＊』（1971年6月29日放映）
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、水カマキリ(緑川　稔)、ブン吉(野沢雅子)
■[声の出演][第２画面]／父(辻*村真人)、母(森 ひろ子)、、ナレーター(前田敏子)
■原動画／田中英二、水村十司■美術設定／五十嵐忠司■背景／小関俊之
■色指定／岡嶋国敏■仕上／池宮　隆■特殊効果／高山幸直■検査／藤田三知子
■撮影／中野政則■編集／篠原　正■進行／広江　武
〈資料より補足〉
■脚本／梅田智江■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸

第66話『悲しき母子草＊』（1971年7月6日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[クロ](白川澄子)、[クロの母](花形恵子)、[ミドリ](岡本茉利)、[老人医者](槐　柳二)、[村人(Ａ)](武川　信)、[村人(Ｂ)](加藤修)、[テントウ虫(子)](東　美江)、[カナブン](沢田和子)、[コメツキ虫](あぼくみこ)、[ナレーター](前田敏子)、[クモ](立壁和也)

第67話『いつわりの花園＊』（1971年7月13日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／田井洋子■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[母](麻生美代子)、[ムンタ](松島みのり)、[キキー](山本嘉*子)、[奥さん](遠藤　晴)、[テントウ虫](加茂嘉久)、[青じょうかい](立壁和也)、[ノコギリカマキリ](雨森雅司)、[白スジカマキリ](石井敏郎)、[ナレーター](前田敏子)

第68話『まぼろしの吸血鬼＊』（1971年7月20日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ザンバ](山本嘉*子)、[父](島　俊介)、[母](島美弥子)、[ゲンゴロー父](武川　信)、[タイコウチ](峰　恵研)、[リップ](田中信夫)、[ナレーター](前田敏子)、[子供Ａ](三浦利子)、[子供Ｂ](高坂真琴)

第69話『愛のうらぎり者＊』（1971年7月27日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／原　征太郎■絵コンテ／原　征太郎
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[パッチ](松島みのり)、[パッチの母](平井道子)、[シカバチ](杉山佳寿子)、[トラマルハナバチの隊長](古賀浩二)、[オオトラフユガネ](宮内幸平)、[おばあさん](赤木葉子)、[兵隊　オケラ](武川　信)、[オケラ](高坂真琴)、[ナレーター](前田敏子)

第70話『美しき、いけにえ＊』（1971年8月3日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久■演出／高橋資祐■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[アカリ](山本嘉*子)、[アカリの母](瀬能礼子)、[カメ五郎](和田　啓)、[カブト虫](国坂　伸)、[アリベエ](立壁和也)、[虫(Ａ)](石井敏郎)、[虫　(Ｂ)](武川　信)、[虫　(Ｃ)](増岡　弘)、[ハンミョウ(Ａ)](渡部　猛)、[ハッチの母](北浜晴子)、[ナレーター](前田敏子)

第71話『愛の対決＊』（1971年8月10日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／由起　圭■脚本／鳥海尽三■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、女(麻生美代子)、[カマ助](松島みのり)、[カブ警部](渡部　猛)、[熊　吉](野沢雅子)、[イナゴ](田口　昂*)、[女　王](北浜晴子)、[蛾](武川　信)、[ナレーター](前田敏子)

第72話『ハッチ故郷[ふるさと]へ帰る＊』（1971年8月17日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／高橋資祐■絵コンテ／高橋資祐
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[おしまさん](寺島信子)、[テントウ虫(母)](麻生美代子)、[テントウ虫　子(Ａ)](駒村クリ子)、[テントウ虫　子(Ｂ)](千々松幸子)、[カマ吉](飯塚昭三)、[フンコロガシ](雨森雅司)、[ジガバチ父](北村弘一)、[ジガバチ子](高坂真琴)、[葉切り蜂](峰　恵研)、[ナレーター](前田敏子)

第73話『夕やけの兄妹＊』（1971年8月24日放映）
〈資料より補足〉

データは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第29話『この空のどこかに＊』（1970年10月20日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／九里一平■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[女王蜂](北浜晴子)、[隊　長](飯塚昭三)、[クロオオアリ(Ａ)](本田　晋)、[クロオオアリ(Ｂ)](田口　昂*)、[クロオオアリ(Ｃ)](富山　敬)、[長　老](北村弘一)、[アブの子](杉山佳寿子)、[ウジバエ](田中康郎)、[ナレーター](前田敏子)

第30話『太陽のママ＊』（1970年10月27日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久■演出／原　征太郎■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[母　親](瀬能礼子)、[テン一](駒村クリ子)、[テン次](白川澄子)、[テン子](恵比寿まさ子)、[ア　リ](久松夕子)、[ナレーター](前田敏子)

第31話『広い世界が呼んでいる＊』（1970年11月3日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／多地映一■演出／鳥海永行■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[カール](肝付兼太)、[ゲール](松尾佳子)、[トビー](沢田和子)、[ピー太](芹川　洋)、[先　生](雨森雅司)、[ナレーター](前田敏子)、[ゴミ虫](水鳥鉄夫)、[ゴミ虫](渡部　猛)

第32話『ひとりぼっちの熊王＊』（1970年11月10日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／原　征太郎■絵コンテ／岡部英二
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)

第33話『炎の中のいのち＊』（1970年11月17日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)ＡＲ台本の表紙では、サブタイトルは「炎の中の真実」と記載。

第34話『栄光のアリ塚／前編＊』（1970年11月24日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／滝　三郎■脚本／由起　圭■演出／九里一平■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[老イナゴ](北村弘一)、[アリータ](松島みのり)、[女　王](来宮良子)、[武　官](増岡　弘)、[隊　長](古賀浩二)、[兵アリ(Ａ)](立壁和也)、[兵アリ(Ｂ)](城山　堅)、[兵アリ(Ｃ)](三川雄三)、[ナレーター](前田敏子)

第35話『栄光のアリ塚／後編＊』（1970年12月1日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／滝　三郎■脚本／由起　圭■演出／九里一平■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[女　王](来宮良子)、[王子　アリータ](松島みのり)、[侍　従](増岡　弘)、[ピョン爺さん](北村弘一)、[隊　長](古賀浩二)、[兵士](立壁和也)、[ドレイ(Ａ)](城山　堅)、[ドレイ(Ｂ)](三川雄三)、[ナレーター](前田敏子)

第36話『愛のコンサート＊』（1970年12月8日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／鳥海尽三、前里元義
■演出／九里一平■絵コンテ／山内六生
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[老　人](矢田　稔)、[キリヤン](原田一夫)、[サギリ](武藤礼子)、[コガネ虫の子](沢田和子)、[其の他の虫(Ａ)](田中康郎)、[其の他の虫(Ｂ)](武川信)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第37話『さようなら子供たち＊』（1970年12月15日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス／平見修二■脚本／能　加平
■演出／原　征太郎■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[働きアリ(Ａ)](三浦利子)、[ハバチ](森川久美子)、[カマキリ](田口　昂*)、[ムカデ](遠藤　晴)、[ムカデ](渡部　猛)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「平見修二」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第38話『ゆずり葉の唄＊』（1970年12月22日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／田井洋子■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[父　虫](大宮悌二)、[母　虫](五月女道子)、[子供(Ａ)](白川澄子)、[子　供(Ｂ)](恵比寿まさ子)、[子　供(Ｃ)](沢田和子)、[大黒コガネ](峰　恵研)、[バッタ(Ａ)](阪　脩)、[バッタ(Ｂ)](寺田彦右)、[ナレーター](前田敏子)

第39話『パパとママの真実＊』（1970年12月29日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／柏戸比呂子■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[マグソコガネ](緑川　稔)、[クツワ虫の夫](嶋俊介)、[クツワ虫の妻](荘司美代子)、[クツワ虫の子](山本嘉*子)、[コオロギの子](駒村クリ子)、[ツチハンミョウ](朝井ゆかり)、[虫　(Ａ)](牛崎敬子)、[ナレーター](前田敏子)

第40話『勇気を持って立ち上れ＊』（1971年1月5日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[イーグル公爵](緑川　稔)、[キャシー](菅谷政子)、[女　王](武藤礼子)、[武　官](藤本　譲)、[ピジョン](北村弘一)、[隊　長](飯塚昭三)、[ポール](駒村クリ子)、[ア　ブ](麻生美代子)、[ナレーター](前田敏子)、[ハッチのママ](北浜晴子)

第41話『十二匹の子供達＊』（1971年1月12日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／高藤彰子■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[米つき虫](宮内幸平)、[子守グモ(パパ)](峰恵研)、[子守グモ(ママ)](平井道子)、[チビ子](貴家堂子)、[子グモ(Ａ)](沢田和子)、[子グモ(Ｂ)](白川澄子)、[子グモ(Ｃ)](東　美江)、[ア　リ(Ａ)](渡部猛)、[ア　リ(Ｃ)](仲木隆司)、[ナレーター](前田敏子)

第42話『それでも飛ぶんだ＊』（1971年1月19日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／松岡励子■演出／市江建二■絵コンテ／市江けんじ
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[おじさん](辻村真人)、[チ　ビ](山本嘉*子)、[パ　パ](古賀浩二)、[ハムシ(１)](中村武巳)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出が「原　征太郎」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第43話『悲しみは、ママだけに＊』（1971年1月26日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉、梅田智江■演出／原　征太郎■絵コンテ／西牧秀雄
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[王　子](桂　玲子)、[マ　マ](瀬能礼子)、[ペティ](杉山佳寿子)、[男の子(Ａ)](沢田和子)、[男の子(Ｂ)](東　美江)、[園　長](槙　伸子)、[医　者](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本が「山崎晴哉」単独名で記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第44話『雨のおたまが池＊』（1971年2月2日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／近藤若菜■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ピロ吉](朝井ゆかり)、[オタマ(Ａ)](東　美江)、[オタマ(Ｂ)](三浦利子)、[ハサミムシ子供(Ａ)](駒村クリ子)、[ハサミムシ子供(Ｂ)](沢田和子)、[プクスケ](肝付兼太)、[ナレーター](前田敏子)

第45話『嵐の中の友情＊』（1971年2月9日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[アメ二郎](北村弘一)、[アメコ](武藤礼子)、[ゲン](渡部　猛)、[ゴロウ](沢田和子)、[子　供(Ａ)](駒村クリ子)、[子　供(Ｂ)](三浦利子)、[コオロギ](遠藤　晴)、[カムシ](加藤　修)、[ナレーター](前田敏子)、[バッタ](立壁和也)

第46話『飛べよハッチ＊』（1971年2月16日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／原　征太郎■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[爺さん](千葉順二)、[バ　ラ](駒村クリ子)、[モドキ](北山年夫)、[医　者](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)、[マ　マ](北浜晴子)

第47話『牧場の城＊』（1971年2月23日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ピータ](松島みのり)、[マ　マ](中村紀子子)、[カタツムリ](今西正男)、[ナレーター](前田敏子)

第48話『闇に光る涙＊』（1971年3月2日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／桜井京介■演出／富野喜幸■絵コンテ／西牧秀雄
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[バニー](森　功至)、[老　婆](川路夏子)、[カレン](小泉栄子)、[ハナアブ(Ａ)](安田　隆)、[ハナアブ(Ｂ)](峰　恵研)、[ハナアブ(Ｃ)](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)

第49話『雪山の彼方に＊』（1971年3月9日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／富野喜幸■絵コンテ／富野喜幸
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ハナバチ](白川澄子)、[赤ちゃん](沢田和子)、[オサムシ(Ａ)](加藤　修)、[オサムシ(Ｂ)](増岡　弘)、[長　老](伊藤惣一)、[ナレーター](前田敏子)

第50話『森の忍者虫／前編＊』（1971年5月18日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／武末　勝■演出／鳥海永行■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[キック](野沢雅子)、[ピョン子](堀川和栄)、[オケラ博士](宮内幸平)、[ケラ子](杉山佳寿子)、[カリゴチョウ](古賀浩二)、[ヒラタカメ虫](武川　信)、[シャクトリガ](中村武己)、[シャチ](立壁和也)、[ナレーター](前田敏子)、[マ　マ](北浜晴子)

第51話『森の忍者虫／後編＊』（1971年5月25日放映）
〈資料より補足〉

〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、監督(千葉耕市)、カイ子(菅谷政子)
■[声の出演[第２画面]／イト子(沢田和子)、、六助(加茂嘉久)、、ナレーター(前田敏子)
■原動画／内野純夫、天野嘉孝■美術設定／西　芳邦■仕上／柴田　勝、平井静子
■背景／伊豆島君江■撮影／細野　正■編集／金子登喜代■進行／栃平吉和
〈資料より補足〉
■絵コンテ／鳥海永行

第13話『灯よいつまでも』（1970年6月30日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、平谷寿敏■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、、ムーン(渋沢詩子)
■[声の出演[第２画面]／医者(田村錦人)、、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山内六生
(注記)ＡＲ台本では、脚本が「鳥海盡三、平谷寿敏*、滝　三郎」と三者連名で記載。

第14話『涙こらえて＊』（1970年7月7日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[女郎グモ](遠藤　晴)、[子グモ](松島みのり)、[ゾウ虫](島田　彰)、[ベッコウ蜂Ａ](安田　隆)、[番　兵](加藤　修)、[マ　マ](北浜晴子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出は「鳥海永行」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第15話『花のみつばち娘』（1970年7月14日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／伊東恒久■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ミミ(松尾佳子)、老蜂(槐　柳二)、カブト虫(増岡　弘)
■[声の出演[第２画面]／襲蜂(西川幾雄、朝倉宏二、安田　隆)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山本　功

第16話『花園の暴れ者』（1970年7月21日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／林　純夫■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ノッポ(井出涼太)、アブ(久松夕子)、ピーター(白川澄子)
■[声の出演[第２画面]／ウスバカ(山本圭子)、クモ(宮内幸平)、ヨトウ蛾(大宮悌二)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／林　純夫

第17話『夕焼けに鳴る鐘』（1970年7月28日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ムグ(堀　絢子)、ムグのママ(高村章子)
■[声の出演[第２画面]／カナブン(恵比寿まさ子)、医師(藤本　譲)、牧師(富山　敬)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／九里一平、陣野　修

第18話『めぐりあいの子守唄』（1970年8月4日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／城山　昇■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、タマオ(山本圭子)、タマオのママ(水城蘭子)、タマコガネ(駒村クリ子、三浦利子)
■[声の出演[第２画面]／熊ん蜂(雨森雅司)、鬼グモ(田中康郎)、ボブ(青野　武)、パック(田口　昂*)、イモ虫(沢田和子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／鳥海永行

第19話『悪者じゃないんだ』（1970年8月11日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アクロ(高塔正康)、ハナキチ(石森達幸)、ハナコ(武藤礼子)
■[声の出演[第２画面]／カメ虫(武川　信)、クマンバチ(加藤　修)、虫(仲木隆司)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■シノプシス／多地映一
■絵コンテ／山本　功
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリスト及びＡＲ台本では、脚本は「多地映一」と記載。上記のデータは、タイトルカードの表記に準拠したもの。

第20話『大ぼら大将の冒険』（1970年8月18日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ピヨン伯爵(滝口順平)、ウマ(島田　彰)
■[声の出演[第２画面]／ナナフシ(池田一臣)、アメンボ(富山　敬)、アブのボス(坂田純子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山本　功

第21話『ハニーの剣＊』（1970年8月25日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／林　純夫■演出／九里一平■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[ハニー](山本嘉子)、[ノッポ](富山　敬)、[ゾウ虫](仲木隆司)、[オオセイボウ(Ａ)](藤本　譲)、[オオセイボウ(Ｂ)](武川　信)、[マイマイカブリ](渡辺　猛)、[女王Ｂ](荘司美代子)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)ＡＲ台本では、演出が「林　純夫」と記載。上記のデータは、竜の子プロ保管のスタッフリストに準拠したもの。

第22話『憎しみよさようなら』（1970年9月1日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／林　純夫■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ジガバチのママ(森川久美子)、デカ(沢田和子)、カマキリ(水鳥鉄夫)
■[声の出演[第２画面]／カン太(井上真樹夫)、幼虫(三浦利子)、〃(小沢悦子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／林　純夫

第23話『ガラスの中のママ』（1970年9月8日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、前里元義■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、アカネ姉(菅谷政子)、アカネ弟(白川澄子)
■[声の出演[第２画面]／銀次(野沢雅子)、キリギリス(田口　昂*)、セミ(武川　信)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山内六生

第24話『海を見たカゲロウ』（1970年9月15日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／伊東恒久■演出／九里一平■絵コンテ／小島秀男
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[カゲロウ](久松夕子)、[小母さん](遠藤　晴)、[青　虫](田口　昂*)、[オニヤンマ](青野　武)、[カブト虫の隊長](雨森雅司)、[ナレーター](前田敏子)

第25話『老兵スズメバチ』（1970年9月22日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／佐々木みどり■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、老スズメバチ(巌　金四郎)、ゴン(藤本　譲)、オニ吉(近水圭二)
■[声の出演[第２画面]／シラガトンボ(西川幾雄)、小虫(沢田和子)、〃(駒村クリ子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／鳥海永行

第26話『スズ虫はもう鳴かない』（1970年9月29日放映）
〈オープニングクレジット〉
■脚本／能　加平■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、キザ太郎(納谷六朗)、小供コオロギ(駒村クリ子)
■[声の出演[第２画面]／指揮者(石井敏郎)、ヤモリ(山本圭子)、女コオロギ(堀川和栄)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／林　純夫

第27話『盗まれた王子』（1970年10月6日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／能　加平■演出／原　征太郎■絵コンテ／山本　功
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[王](富山　敬)、[王　女](松島みのり)、[王子](白川澄子)、[侍　医](緑川　稔)、[ゴロギン](池田一臣)、[ナレーター](前田敏子)

第28話『泣くなアーリン』（1970年10月13日放映）
〈資料より補足〉
■脚本／吉田喜昭■演出／鳥海永行■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[アーリン](山本嘉*子)、[アーリンの父](梓　欣造)、[使用人(Ａ)](城山　堅)、[使用人(Ｂ)](仲木隆司)、[使用人(Ｃ)](本田晋)、[使用人(Ｄ)](福原圭一)、[婆　や](沼波輝枝)、[ヒラタアブの幼虫](加藤昭二)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出は「九里一平」と記載。上記の

昆虫物語 みなしごハッチ

1970年４月７日～1971年12月28日(第１～91話)　毎週火曜19時～19時30分
フジテレビ系／30分カラー・全91話

(データソース)本作は、オープニング、エンディング用のタイトルカードが部分的ながら初期２クール分のみ現存(第26話までのうち19話分)する一方で、クレジットが焼き込まれたエンディング映像も１話分のみ存在が確認されている(第65話)。また、「脚本」や「演出」の表示が欠落した形での、クレジット入りオープニングも１種類現存している。これは、本作がクレジットの表示方式の移行期(タイトルカード使用からフィルム焼き込みへ)に位置していたことと関係があるとも考えられる。ただし、第65話のエンディングが、タイトルカードをもとに後年作成された再放映用のフィルムである可能性も残る。本リストでは、カードが現存する回数のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。サブタイトルは、タイトルカードが現存する話数はその表示内容に準拠し、それ以外は訂正ＡＲ台本表紙の記載を参考に表記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■原作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三
■総監督／九里一平[第５話のみ「久里一平」表記]
■音楽／越部信義、音楽企画センター■効果／イシダ・サウンドプロ
■みなしごハッチ
　主題歌　作詞／丘灯至夫　作曲／越部信義　歌／島崎由理
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■第２主題歌　ママをたずねて
　作詞／丘灯至夫　作曲／和田香苗　歌／島崎由理
■現像／東洋現像所■録音 プロデューサー／本田保則
■録音 ディレクター／水本　完、オムニバス・プロ
■録音／読広スタジオ、平野　勝
■プロデューサー／吉田健二
■担当／朝香正則[初期]、栃平吉和[中期以降]、――――[中期以降]、染野茂夫(読広)[中期以降]
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ■協力／フジテレビ
(注記)現存する焼き込みオープニング映像は、「原作」「企画」を表示するクレジット第画面、「脚本」「演出」「総監督」を表示するクレジット第２画面がそれぞれ映像ごと編集カットされた形になっている。ここでは、欠落クレジット部分を、現存するタイトルカード内容をもとに補足した。
　ＡＲ台本には毎回、録音スタッフ名が印刷されていた。内容は以下の通り。
■録音ディレクター／水本　完、オムニバス・プロモーション
■効果／イシダサウンド・プロ
■音楽進行／音楽企画センター、奥田公男(読広)[第２話分以降に記載]
■録音／読広スタジオ、平野　勝
■プロデューサー[第29話分まで記載]／吉*田健二
■担当[第29話分まで記載]／本田保則(竜の子プロダクション)
■制作担当[第30話分より記載]／栃平吉和(竜の子プロダクション)、――――、内間　稔(読広)、染野茂夫(〃)

第１話『負けるなハッチ＊』(1970年4月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／吉田竜夫、林　純夫■絵コンテ／芹川有吾
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[シマコハナバチのおばさん](寺島信子)、[男の子(Ａ)](駒村クリ子)、[男の子(Ｂ)](松島みのり)、[女の子(Ａ)](桂　玲子)、[女の子(Ｂ)](杉山佳寿子)、[ペチャクチャ婆さん](麻生美代子)、[ミツバチの女王](北浜晴子)、[鎌　吉](渡部　猛)、[ナレーター](前田敏子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出が「吉田竜夫」単独名で記載。

第２話『行け行けハッチ＊』(1970年4月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、前里元義■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
■声の出演／[ハッチ](栗　葉子)、[チヨ子](野田睦子)、[ピョン吉](松島みのり)、[パ　パ](肝付兼太)、[爺さん](雨森雅司)、[女王蜂](北浜晴子)、[ナレーター](前田敏子)

第３話『悲しき対決』(1970年4月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、リップ(曽我町子)、パーラン(恵比寿まさ子)、ベーロン(鈴木泰明)
■[声の出演][第２画面]／医師(富山　敬)、タガメ(加藤精三)、クモ(西山　連)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／鳥海永行

第４話『第４話／サムライアリの襲撃』(1970年4月28日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修■演出／原征太郎■絵コンテ／九里一平

第５話『飛べよ／みにくき天使』(1970年5月5日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／吉田喜昭■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ピッコロ(千葉順二)、キアゲハ(関根信昭)、フラワー(松尾佳子)
■[声の出演][第２画面]／カメ虫のボス(渡辺　猛)、カメ虫の子(沢田和子、牛崎敬子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山内六生
(注記)「渡辺　猛」はクレジット表記ママ。

第６話『泣くなハッチ』(1970年5月12日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三、由起　圭■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、女王(小沢沙季子)、ローザ(山本嘉子)、ポップ博士(古賀浩二)
■[声の出演][第２画面]／バーゼン大尉(峰　恵研)、オケラ先生(槐　柳二)、守衛(武川　信)、ナレーター(前田敏子)
■原動画／田中英二、田中　保■美術設定／多田喜久子■仕上／柴田　勝、豊島紘子
■背景／小林七郎■撮影／細野　正■編集／金子登喜代■進行／栃平吉和
〈資料より補足〉
■絵コンテ／鳥海永行

第７話『ママと呼びたいの』(1970年5月19日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、トックリバチのママ(里見京子)、クリ(三輪勝恵)、おばあさん(麻生みつ子)
■[声の出演][第２画面]／ガ(辻*村真人)、イラムシ(沢　りつお)、ジガバチ(沢田和子)、　〃　(峰　恵研)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／九里一平

第８話『傷だらけのバレリーナ』(1970年5月26日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／多地映一■演出／原 征太郎
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、ジル(加茂嘉久)、パピー(池田昌子)、長老(今西正男)
■[声の出演][第２画面]／ヤンマ博士(島田　彰)、保安官(及川広夫)、タマ虫(田中勝)、タランチュラ(西乃砂恵)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山本　功

第９話『闘え！弱虫野郎／前編』(1970年6月2日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、青年カブト虫(朝倉宏二)、老カブト虫(国坂　伸)、カナブン(白川澄子)
■[声の出演][第２画面]／キコリ(藤本　譲、水鳥鉄夫)、アブ(石森達幸)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／大西　清

第10話『闘え！弱虫野郎／後編』(1970年6月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、青年カブト虫(朝倉宏二)、ボスクワガタ(水鳥鉄夫)、メスクワガタ(国坂　伸)
■[声の出演][第２画面]／カナブン(白川澄子)、キコリ(藤本　譲)、虫(石森達幸)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／九里一平

第11話『坊や泣かないで』(1970年6月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／山崎晴哉■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ハッチ(栗　葉子)、チョコ チョイチョイ(肝付兼太)、カマ子(川路夏子)、ハッチの母(北浜晴子)
■[声の出演][第２画面]／カマキリ(千々松幸子)、カマキリ(山本嘉子、桂　令子、白川澄子)、ナレーター(前田敏子)
〈資料より補足〉
■絵コンテ／山本　功

第12話『やさしきまゆ娘』(1970年6月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／武末　勝■演出／鳥海永行
〈エンディングクレジット〉

第46回Aパート『魔王の／花よめさんやーい／の話』（1970年8月16日放映）
第46回Bパート『正直魔王と／忠犬ブル公／の話』（1970年8月16日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／滝　三郎■脚本[Bパート]／平田　稔
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／木村圭一郎■絵コンテ[Bパート]／高*橋資祐
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[パ　パ](田の中　勇)、[それからおじさん](愛川欽也)

第47回Aパート『ま夏の空に／雪が降る／の話』（1970年8月23日放映）
第47回Bパート『魔女マヌーバ／の話』（1970年8月23日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ユリ子](松島みのり)、[大大魔王](永井一郎)、[それからおじさん](愛川欽也)

第48回Aパート『ハッピー・バースディー／アクビちゃん／の話』（1970年8月30日放映）
第48回Bパート『魔法の／メガネでごじゃる／の話』（1970年8月30日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東紀子■脚本[Bパート]／桜井京介
■演出[Aパート]／高*橋唯貴雄■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／岡本良雄■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ユリ子](松島みのり)、[ユリ子のママ](沢田敏子)、[女の子(C)](桂　玲子)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[アクビ](貴家堂子)、[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[老　人](辻村真人)、[リリカ](桂　玲子)、[女の先生](沢田敏子)、[アナウンサー](矢田耕司)、[女　(A)](松島みのり)、[それからおじさん](愛川欽也)

第49回Aパート『ゲップ／小魔王／の話』（1970年9月6日放映）
第49回Bパート『すきすき／赤ちゃん／の話』（1970年9月6日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／滝　三郎■脚本[Bパート]／滝　三郎
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／木村圭一郎■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[マ　マ](麻生みつ子)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[おばさん](津田マリ)、[おじさん](相模　武)、[赤ちゃん](あぼ　くみこ)、[それからオジサン](愛川欽也)

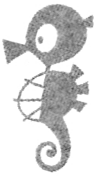
第50回Aパート『コオロギ／かんちゃん／の話』（1970年9月13日放映）
第50回Bパート『モシモシ…／ご主人／の話』（1970年9月13日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／吉*田喜昭
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／桜井京介
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／高*橋資祐
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[交換嬢](沢田敏子)、[奥さん(1)](沢田和子)、[コック](田口　昂*)、[坊　主](島田　彰)、[それからおじさん](愛川欽也)

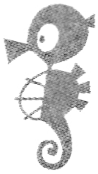
第51回Aパート『アベコベ親子／の話』（1970年9月20日放映）
第51回Bパート『となりの人は／ダーレ?!／の話』（1970年9月20日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／桜井京介■脚本[Bパート]／平田　稔
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[社　長](今西正男)、[得意客](兼本新吾)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ガイコツ](今西正男)、[ユウレイ](沢田和子)、[博　士](兼本新吾)、[それからおじさん](愛川欽也)

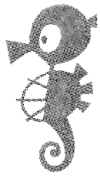
第52回Aパート『魔王は／町のナンバー1／の話』（1970年9月27日放映）

第52回Bパート『さよなら／大魔王／の話』（1970年9月27日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／桜井京介■脚本[Bパート]／桜井京介
■演出[Aパート]／高*橋唯貴雄■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／高*橋唯貴雄■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[ユリ子](松島みのり)、[大大魔王](永井一郎)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[凡　太](白川澄子)、[バッテラ魔王](島田　彰)、[デブ山](遠藤　晴)、[おじいさん](槐　柳二)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[ユリ子](松島みのり)、[ペチャ子](遠藤　晴)、[ゲジゴン](立壁和也)、[運転手](島田　彰)、[ト　ゲ](沢田和子)、[おじいさん](槐　柳二)、[それからおじさん](愛川欽也)

（『風船少女テンプルちゃん』P.306より続き）
洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／大貫信夫■作画／中島京子、牧田由美、北條昌子、小国千代子、明石典子
■背景／アップルス■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／新井正彦
〈資料より補足〉
■声の出演／[ナンシー](高村章子)、[トミー](仲木隆司)、[スリー](友近恵子)、[牧　師](八奈見乗児)、[村　人](池田　勝)、[村　人](田中　勝)







■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／奥田誠二
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[園　長](八奈見乗児)、[ペンギン(A)メス](松島みのり)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[マ　マ](麻生みつ子)、[先　生](八奈見乗児)、[メス犬](松島みのり)、[それからオジサン](愛川欽也)

第35回Aパート『西部の／ガンマンでごじゃる／の話』（1970年5月31日放映）
第35回Bパート『ひみつ好きな／王子さま／の話』（1970年5月31日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／城山　昇■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／高*橋資祐■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[メリー](松島みのり)、[町の大きい男](飯塚昭三)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[ハルオ](駒村クリ子)、[女の生徒](沢田和子)、[門　番](飯塚昭三)、[それからオジサン](愛川欽也)

第36回Aパート『ブルも歩けば／宝にあたる／の話』（1970年6月7日放映）
第36回Bパート『ロボット／大魔王／の話』（1970年6月7日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／城山　昇■脚本[Bパート]／吉*田喜昭
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／木村圭一郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパ－ト]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[先　生](遠藤　晴)、[生　徒(１)](貴家堂子)、[生　徒(２)](麻生みつ子)、[長　官](雨森雅司)、[M博士](富山　敬)、[B博士](田の中　勇)、[C博士](細井重之)、[それからオジサン](愛川欽也)

第37回Aパート『ランプ大魔人／アーラー／の話』（1970年6月14日放映）
第37回Bパート『ハクション／カメラ作戦／の話』（1970年6月14日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／城山　昇
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／吉*田喜昭
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／高*橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／岡本良雄■絵コンテ[Bパート]／高*橋資祐
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ダラジン](雨森雅司)、[アーラー](富山　敬)、[客　(B)](麻生みつ子)、[客(D)](遠藤　晴)、[老　人](田の中　勇)、[男](細井重之)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[大大魔王](永井一郎)、[それからオジサン](愛川欽也)

第38回Aパート『魔法対／忍 法／の話』（1970年6月21日放映）
第38回Bパート『ブル公が／一番恐いもの の話』（1970年6月21日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／桜井京介
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[忍者の先生](千葉耕市)、[猿飛](松島みのり)、[生　徒(A)](槙　伸子)、[群　衆(A)](田の中　勇)、[群　衆(B)](相模　武)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[野犬狩(A)](田の中　勇)、[野犬狩(B)](千葉耕市)、[それからオジサン](愛川欽也)

第39回Aパート『ブクブク／カナヅチ作戦／の話』（1970年6月28日放映）
第39回Bパート『大海賊で／ごじゃるよ／の話』（1970年6月28日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／城山　昇■脚本[Bパート]／桜井京介
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[金有婦人](北浜晴子)、[ブル公](相模　武)、[ガードマン](青野　武)、[スイカ売り](田の中　勇)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[ユリ子ちゃん](松島みのり)、[ブルクーダー](相模　武)、[子　分](青野　武)、[男](城山　堅)、[それからオジサン](愛川欽也)

第40回Aパート『大魔王 は／大先生／の話』（1970年7月5日放映）
第40回Bパート『空とぶ／ローラースケート／の話』（1970年7月5日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／吉*田喜昭■シノプシス[Bパート]／伊東紀子
■脚本[Aパート]／吉*田喜昭■脚本[Bパート]／伊東紀子
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／木村圭一郎■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[凡　太](白川澄子)、[凡太の母](高村章子)、[騎　士(赤)](武川　信)、[騎　士(白)](納谷六郎)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[ミチ子](白川澄子)、[女の子(A)](高村章子)、[女の子(B)](麻生みつ子)、[おまわり](納谷六郎)、[男](武川　信)、[ドライバー](田の中　勇)、[それからオジサン](愛川欽也)

第41回Aパート『尻尾の生えた／カンちゃん／の話』（1970年7月12日放映）
第41回Bパート『アカムラサキ／ブルーアゲハ／の話』（1970年7月12日放映）
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ユリ子](松島みのり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[先　生](原田一夫)、[校　医](田の中　勇)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[山野蝶吉](原田一夫)、[それからオジサン](愛川欽也)
■脚本[Aパート]／桜井京介■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／高*橋資祐■絵コンテ[Bパート]／案納正美

第42回Aパート『アクビ／女王陛下／の話』（1970年7月19日放映）
第42回Bパート『明日新聞／の話』（1970年7月19日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／吉*田喜昭■脚本[Bパート]／滝　三郎
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／木村圭一郎■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ケン太のパパ](細井重之)、[ケン太のママ](遠藤　晴)、[ユリ子](松島みのり)、[子　供(A)](桂　玲子)、[子　供(B)](駒村クリ子)、[男　(A)](田口　昂*)、[ブル公](相模　武)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[子　供(A)](駒村クリ子)、[子　供(B)](桂　玲子)、[子　供(C)](松島みのり)、[子　供(D)](麻生みつ子)、[デブ山先生](遠藤晴)、[街の男達(A)](細井重之)、[街の男達(B)](田の中　勇)、[街の男達(C)](相模　武)、[おまわり](田口　昂*)、[それからおじさん](愛川欽也)

第43回Aパート『魔法／ファッションショー／の話』（1970年7月26日放映）
第43回Bパート『モーれつ／闘牛士でごじゃる／の話』（1970年7月26日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／伊東紀子
■演出[Aパート]／高*橋資祐■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／高*橋資祐■絵コンテ[Bパート]／高*橋唯貴雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ゆき子](沢田敏子)、[司会者](麻生みつ子)、[ブル](相模　武)、[観　客](城山　堅)、[観　客](田の中　勇)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[官　僚(A)](城山　堅)、[国　王](田の中　勇)、[姫](沢田敏子)、[おばあさん](麻生みつ子)、[ガイド](田口　昂*)、[それからおじさん](愛川欽也)

第44回Aパート『ためろや／貯めろ／の話』（1970年8月2日放映）
第44回Bパート『魔法の壺を／とり返せ／の話』（1970年8月2日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東紀子■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[カンちゃんのパパ](田の中　勇)、[カンちゃんのママ](麻生みつ子)、[ケン坊](荘司美代子)、[ユリ子](松島みのり)、[セールス・マン](富山　敬)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[総理大臣](富山　敬)、[外務大臣](風祭修一)、[農林大臣](和久井節緒)、[警備員(A)](仲木隆司)、[それからおじさん](愛川欽也)

第45回Aパート『世界の皆さん／今日わ／の話』（1970年8月9日放映）
第45回Bパート『ハクション／魔法パビリオン／の話』（1970年8月9日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／平谷寿敏
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[社　長](相模　武)、[重　役(A)](水鳥鉄夫)、[重　役(B)](今西正男)、[重　役(C)](渡部　猛)、[専　務](緑川　稔)、[ジュリー](清水マリ)、[案内嬢](貴家堂子)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ジュリー](清水マリ)、[スパイA](渡部　猛)、[スパイB](水鳥鉄夫)、[少　年(B)](貴家堂子)、[ガードマン隊長](今西正男)、[社　長](相模　武)、[専　務](緑川稔)、[それからおじさん](愛川欽也)

■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／鈴木良武
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ボケ田君](白川澄子)、[客　A](武川　信)、[客　B](遠藤　晴)、[客　C](立壁和也)、[客　D](中村武巳)、[客　F](山本嘉子)、[客　G](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[サーカスの団長](立壁和也)、[その娘ハル子](山本嘉子)、[太　郎](八奈見乗児)、[男　(B)](武川　信)、[男　(C)](中村武巳)

第23回Aパート『ハクション／一座／の話』（1970年3月8日放映）
第23回Bパート『ハクション／ガードマン／の話』（1970年3月8日放映）
〈資料より補足〉
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[車　掌](水鳥鉄夫)、[ケチベエ](北村弘一)、[タメゴロウ](原田一夫)、[バアさん](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パパ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[黒猫のダンゴ](原田一夫)、[黒猫のスキャット](水鳥鉄夫)、[黒猫のキョロ吉](田の中　勇)、[黒猫のパァ平](北村弘一)
■シノプシス[Aパート]／滝　三郎■シノプシス[Bパート]／陣野　修
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／柳　英二■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄

第24回Aパート『ワンワン／コンテスト／の話』（1970年3月15日放映）
第24回Bパート『月征服／かなわんよ／の話』（1970年3月15日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／陣野　修
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／由起　圭
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／奥田誠二
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[ユリ子](松島みのり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[先　生](遠藤　晴)、[司会者](島田　彰)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[金　田](麻生みつ子)、[運転手](島田　彰)、[生　徒(A)](遠藤　晴)、[生　徒(B)](沢田和子)、[生　徒(C)](松島みのり)、[パ　パ](田の中　勇)

第25回Aパート『テレビスターで／ごじゃるよ／の話』（1970年3月22日放映）
第25回Bパート『プロレスラーで／ごじゃるよ／の話』（1970年3月22日放映）
〈資料より補足〉

■シノプシス[Aパート]／野田　恵■シノプシス[Bパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／由起　圭■脚本[Bパート]／平谷寿敏
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[テレビ監督](八奈見乗児)、[C　A](安田　隆)、[星由美子](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子ちゃん](松島みのり)、[弱　井](遠藤　晴)、[アナウンサー](安田隆)、[トレーナー](八奈見乗児)、[ブルキング](相模　武)

第26回Aパート『ブル公／追い出し作戦／の話』（1970年3月29日放映）
第26回Bパート『アクビ／モーレツ作戦／の話』（1970年3月29日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／野田　恵■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[アナウンサー](田の中　勇)、[女の声(アナウンス)](遠藤　晴)、[ネ　コ](麻生みつ子)、[女](松島みのり)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[先　生](遠藤　晴)

第27回Aパート『マジック／ハンド／の話』（1970年4月5日放映）
第27回Bパート『壺は／だれのもの／の話』（1970年4月5日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／滝　三郎
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／平谷寿敏
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[パ　パ](田の中　勇)、[大大魔王](永井一郎)、[じいさん](愛川欽也)、[女](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[カモ平](城山　堅)、[じいさん](愛川欽也)

第28回Aパート『アクビは／カガミに弱＊い／の話』（1970年4月12日放映）
第28回Bパート『ブル公の／結婚式／の話』（1970年4月12日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／滝　三郎
■演出[Aパート]／高＊橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／高＊橋資祐■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[それからおじさん](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[テリー](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[夫　人](北浜晴子)、[盲目主人](田の中　勇)、[神　父](槐　柳二)、[司会者](増岡　弘)、[それからおじさん](愛川欽也)

第29回Aパート『ヤセ馬／がんばれ／の話』（1970年4月19日放映）
第29回Bパート『アクビは／だれの子／の話』（1970年4月19日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／村林信一■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／高＊橋資祐■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／白川忠志■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[ヤセ馬](及川広夫)、[騎　手](肝付兼太)、[じいさん](愛川欽也)、[警　官](相模　武)、[騎手達](原田一夫)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[おくさん](恵比寿まさ子)、[召使男(A)](肝付兼太)、[召　使男(B)](及川広夫)、[ブル公](相模　武)

第30回Aパート『ブル公／コテンパン／の話』（1970年4月26日放映）
第30回Bパート『ブルブル／空中戦／の話』（1970年4月26日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／川内　勉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／平谷寿敏
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／高＊橋資祐
■絵コンテ[Aパート]／岡本良雄■絵コンテ[Bパート]／高＊橋資祐
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[パパ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[リュー](立壁和也)、[片目の犬](緑川　稔)、[ドラ猫](沢田和子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ケジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[町　長](緑川　稔)、[整理員](田の中　勇)
(注記)「ケジゴン」はＡＲ台本の表記通り。

第31回Aパート『雪男は／文明人／の話』（1970年5月3日放映）
第31回Bパート『おばけ屋敷の／３悪人／の話』（1970年5月3日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／陣野　修
■脚本[Aパート]／由起　圭■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／岡本良雄■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[モノズキ探険隊長](神山卓三)、[モノズキ探険隊員](村松康雄)、[雪　男](藤本　譲)、[その子供達](三上由紀)、[その子供達](麻生みつ子)、[記　者](矢田耕司)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ボ　ス](神山卓三)、[ジョー](矢田耕司)、[タンク](村松康雄)、[警　官](藤本　譲)、[それからおじさん](愛川欽也)

第32回Aパート『カンちゃんサンマと／フグ魔王の話』（1970年5月10日放映）
第32回Bパート『追い出せ／ガリベン先生／の話』（1970年5月10日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／村林信一
■演出[Aパート]／高＊橋資祐■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／高＊橋資祐■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ユリ姫](松島みのり)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[マ　マ(ユリ子の)](麻生みつ子)、[先　生](遠藤　晴)、[先　生](京田尚子)、[運ちゃん](田の中　勇)、[それからオジサン](愛川欽也)

第33回Aパート『弱＊虫仮面／売ります／の話』（1970年5月17日放映）
第33回Bパート『大魔王は／コケッコー／の話』（1970年5月17日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／岡本良雄■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[セールスマン](滝口順平)、[それからオジサン](愛川欽也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[おじいさん](槐　柳二)、[月亭可朝](相模　武)、[それからオジサン](愛川欽也)

第34回Aパート『アラビン号／南極へ行くの話』（1970年5月24日放映）
第34回Bパート『メタメタ／魔法テストの話』（1970年5月24日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／安西秀織
■脚本[Aパート]／平谷寿敏■脚本[Bパート]／滝　三郎

■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[八っつぁん](北村弘一)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[コソ泥](槐　柳二)

第10回Aパート『ブル公は／大病／の話』（1969年12月7日放映）
第10回Bパート『ご主人は／カワイ子ちゃん／の話』（1969年12月7日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／白川忠志■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)

第11回Aパート『魚つりは／かなわんよ／の話』（1969年12月14日放映）
第11回Bパート『迷い子／ペスやーい／の話』（1969年12月14日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／川内　勉■脚本[Bパート]／野田　恵
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[ブル公](相模　武)、[ゲジゴン](立壁和也)、[サボテン](沢田和子)、[ブタマン](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子ちゃん](松島みのり)、[アクビ](貴家堂子)、[おばあさん](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[ペ　ス](沢田和子)

第12回Aパート『ハクション／剣士／の話』（1969年12月21日放映）
第12回Bパート『とめてくれるな／ご主人さま／の話』（1969年12月21日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／白川忠志■絵コンテ[Bパート]／岡本良雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子ちゃん](松島みのり)、[A　子](杉山佳寿子)、[生　徒A](千々松幸子)、[生　徒B](あぼくみこ)、[剣道の先生(馬場先生)](北村弘一)、[ゲジゴン](立壁和也)、[サボテン](沢田和子)、[ブタマン](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[ゲジゴン](立壁和也)、[老　人](北村弘一)、[サ　ブ](松島みのり)、[子供A](杉山佳寿子)、[子供B](あぼくみこ)、[子供C](千々松幸子)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)

第13回Aパート『ご主人さまは／30人／の話』（1969年12月28日放映）
第13回Bパート『大モテ／ジャングル王様の話』（1969年12月28日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／永井昌嗣
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[運ちゃん](肝付兼太)、[村　長](千葉耕市)、[肉　屋](雨森雅司)、[タゴ作](及川広夫)、[牛かた](村松康雄)、[男](田の中　勇)、[女](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[アナウンサー](村松康雄)、[酋　長](千葉耕市)、[バタコ](杉山佳寿子)、[土　人](肝付兼太)、[土　人](及川広夫)、[ライオン](雨森雅司)

第14回Aパート『モーレツ／ババア／の話』（1970年1月4日放映）
第14回Bパート『かっとばせ／ダイマオーズ／の話』（1970年1月4日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／永井昌嗣
■脚本[Aパート]／滝　三郎■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／白川忠志
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子ちゃん](松島みのり)、[ババア](麻生美代子)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリちゃん](松島みのり)、[ペチャ子](麻生みつ子)、[ポチャ子](麻生美代子)、[ゲジゴン](立壁和也)、[中田次郎](あぼくみ子)、[ノッポ](沢田和子)、[審　判](相模　武)、[アナウンサー](杉山佳寿子)

第15回Aパート『プレゼント／大合戦／の話』（1970年1月11日放映）
第15回Bパート『みんなひっこめ／ツボの中／の話』（1970年1月11日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／案納正美■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ユリコちゃん](松島みのり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ケチオ](山本嘉子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[料理の先生](京田尚子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[ママ](麻生みつ子)

第16回Aパート『テストは／ケンカの始まり／の話』（1970年1月18日放映）
第16回Bパート『いたずら／大作戦／の話』（1970年1月18日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／滝　三郎
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[先　生(デブ山先生)](中島喜美栄)、[ゲジゴン](立壁和也)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[校　長](八奈見乗児)、[ゲジゴン](立壁和也)、[サボテン](沢田和子)、[ブタマン](麻生みつ子)

第17回Aパート『アクビ／アツアツ／の話』（1970年1月25日放映）
第17回Bパート『アラビン／子守歌／の話』（1970年1月25日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／野田　恵
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ハクション大魔王](大平透)、[アクビ](貴家堂子)、[金田有麿](麻生みつ子)、[運転手](立壁和也)、[女中](沢田和子)、[召　使](仲木隆司)、[召　使](相模　武)
■声の出演[Bパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ハクション大魔王](大平透)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)、[男](仲木隆司)

第18回Aパート『大もて／クイズ旅行／の話』（1970年2月1日放映）
第18回Bパート『ハッケヨイ／大魔王／の話』（1970年2月1日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／永井昌嗣
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／滝　三郎
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／白川忠志■絵コンテ[Bパート]／案納正美
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ゆり子](松島みのり)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ハクション大魔王](大平透)、[アクビ](貴家堂子)

第19回Aパート『魔法の国よ／こんにちわ／の話』（1970年2月8日放映）
第19回Bパート『算数怪獣／さようなら／の話』（1970年2月8日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[パパ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[大大魔王](永井一郎)、[兵　隊](大宮悌二)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)
■声の出演[Bパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ユリ子](松島みのり)、[パパ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[大大魔王](永井一郎)、[兵　隊](大宮悌二)、[ゲジゴン](立壁和也)、[ト　ゲ](沢田和子)、[ハ　ゲ](麻生みつ子)、[ブル公](相模　武)

第20回Aパート『ジュータン／ヒコーキ／の話』（1970年2月15日放映）
第20回Bパート『ごめんね／仔ブタちゃん／の話』（1970年2月15日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／笹川ひろし
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／奥田誠二
■声の出演[Aパート]／[カンちゃん](加藤みどり)、[ハクション大魔王](大平透)、[パ　パ](田の中　勇)、[ブル公](相模　武)、[仔　豚](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[女の子](加藤みどり)、[金　田](麻生みつ子)

第21回Aパート『アクビ／シンデレラ／の話』（1970年2月22日放映）
第21回Bパート『パパさん／しごくでごじゃる／の話』（1970年2月22日放映）
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／柳　英二
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ヒトミ](栗　葉子)、[オバさん](遠藤　晴)、[メチャ子](麻生みつ子)、[クチャ子](杉山佳寿子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[アクビ](貴家堂子)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[刑　事](安田　隆)

第22回Aパート『ハンバーグ／大安売り／の話』（1970年3月1日放映）
第22回Bパート『ハクション／サーカス／の話』（1970年3月1日放映）
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／滝　三郎

ハクション大魔王

1969年10月5日～1970年9月27日(第1～52話)　毎週日曜18時～18時30分
フジテレビ系／30分カラー・1回2話構成・全52回(全104話)

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは本来、タイトルカードによって表示が行われていたと推測される。しかし本作に関する限り、各話クレジット用のカードはまったく発見されていない。わずかな手がかりとして、当時のタイトルカードをもとにクレジットを焼き込んだと思われるエンディングが1種類だけ存在しているが、これが第何話のクレジット内容を示しているのかは不明である。以上のことから、本作の各話データは、サブタイトルのみをフィルムから転記し、そのほかのスタッフ、キャストデータに関しては、すべて竜の子プロ社内の文字資料(AR台本、スタッフリストなど)を参考にして作成した。2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉[1～26回該当分]
■ハクション大魔王の歌　コロムビア・レコードSCS—89
作詞／丘 灯至夫　作曲／市川昭介　歌／島崎由理
■原作／吉田竜夫■企画／鳥海尽三■総監督／笹川ひろし
■効果／イシダ・サウンドプロ
■録音／読広スタジオ、棚岡　元、石川武人
■録音プロデューサー／本田保則
■録音ディレクター／水本　完、オムニバス・プロ
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ■協力／フジテレビ

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉[27～52回該当分]
■アクビ娘の歌(コロムビア・レコード)
作詞／丘　灯至夫　作曲／和田香苗　歌／堀江美都子(12才・横浜市)
■原作／吉田竜夫〈週刊ぼくらマガジン〉〈たのしい幼稚園〉連載
■企画／鳥海尽三■総監督／笹川ひろし
■音楽／若月明人、音楽企画センター
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ

〈現存エンディングクレジット〉[1～26回該当分]
■声の出演／大魔王(大平　透)、アクビ(貴家堂子)、カンちゃん(加藤みどり)、パパ(田の中勇)、ママ(麻生みつ子)
■プロデューサー／吉田健二■担当／永井昌嗣
■撮影／池田仁男、池田仁男■編集／中溝哲生■進行／前里元義、佐原三郎
■現像／東洋現像所
■原動画／山本　繁、高橋資祐■美術設定／吉原一輔■背景／伊豆島君江
■仕上／柴田　勝、石田康実、向井　稔

(注記)本作は、クレジットの焼き込まれたオープニングが2種(前期版と後記版)、エンディングが1種(前期版のみ)現存している。しかし、そこにかぶったテロップ内容は、メインスタッフ表示としては不完全であり、その表示順にも整合性が認められない。例えば前期版オープニングでは、当然表示されるべき「音楽」のクレジットが欠落している一方で、通常はエンディングに入るはずの「録音ディレクター」や「録音」のクレジットが表示されている。エンディングに関しても、竜の子プロ作品の平均的な表示順では「原動画、美術設定、背景、仕上」→「撮影、編集、進行、現像」→「プロデューサー、担当」となるべきところ、現存フィルムでは「プロデューサー、担当」→「撮影、編集、進行、現像」→「原動画、美術設定、背景、仕上」とクレジットが逆行している。これは仮説だが、3種のクレジット入りフィルムのうち、特に前期版にあたるオープニングとエンディング各1種については、後年になってから再放映用に加工作成されたものなのではないだろうか。その際、テロップの原版として、本放映時のタイトルカードが再利用された、と考えるとさまざまな疑問が氷解するのだ。ここでは、参考までに全3種のクレジット内容を、現状の表示順のままに掲載してみた。なお、AR台本に毎回印刷された録音スタッフ名の一覧も、メインスタッフの推移を知る上で参考になる。内容は以下の通り。

■録音ディレクター／水本　完、オムニバス・プロモーション[以上、27回分まで]
本田保則[28回分より]
■効果／イシダサウンド・プロ■音楽進行／音楽企画センター
■録音／読広スタジオ、棚岡　元
■担当[27回分まで掲載]／本田保則(竜の子プロダクション)
■協力[28回分より掲載]／オムニバス・プロモーション

第1回Aパート『出ました／大魔王／の話』(1969年10月5日放映)
第1回Bパート『モーレツ／ブル公／の話』(1969年10月5日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)、[マ　マ](麻生みつ子)、[おまわり](及川広夫)、[肉屋の主人](水鳥鉄夫)
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄

第2回Aパート『算数は／かなわんよ／の話』(1969年10月12日放映)
第2回Bパート『ご主人は／大ドロボー／の話』(1969年10月12日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)

第3回Aパート『ニャンとも／ヒゲエ／話』(1969年10月19日放映)
第3回Bパート『お手伝いさんは／泣けてくる／話』(1969年10月19日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／滝　三郎■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／西岡たかし
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ニャン太郎](高橋和枝)、[ネズミ](貴家堂子)、[漫才師](及川広夫)、[漫才師](前川功人)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[王　子](前川功人)

第4回Aパート『天才は／泣けてくるの話』(1969年10月26日放映)
第4回Bパート『ハクション／くずやの話』(1969年10月26日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／滝　三郎■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[先　生](遠藤　晴)、[アナウンサー](西川幾雄)、[ウラン博士](永井一郎)、[ミゾ川博士](相模　武)、[ゼロ山博士](仲木隆司)、[生徒達](桂　玲子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[クズ屋のおじいさん](永井一郎)、[ハルコ](桂　玲子)、[クズ鉄](相模　武)、[奥さん(A)](遠藤　晴)

第5回Aパート『ズッコケ／手品師／の話』(1969年11月2日放映)
第5回Bパート『ゲジゴン／番長／の話』(1969年11月2日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／川内　勉
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[デブ山先生](遠藤　晴)、[生徒(A)](沢田和子)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[ゲジゴン](立壁和也)、[デ　ブ](麻生みつ子)、[ブタ](沢田和子)

第6回Aパート『カンちゃん／モテモテない／話』(1969年11月9日放映)
第6回Bパート『オモチャ／大魔王／の話』(1969年11月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[アクビ](貴家堂子)、[デブ子](大山のぶ代)、[ペチャ子](麻生みつ子)、[ユリ子](松島みのり)、[ユリ子のママ](渡辺典子)、[生徒(B)](水鳥鉄夫)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[エジキン](八奈見乗児)、[ブタ田](水鳥鉄夫)

第7回Aパート『ハクション／大作戦／の話』(1969年11月16日放映)
第7回Bパート『大魔王は／二人でごじゃる／の話』(1969年11月16日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／西牧秀雄
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／白川忠志■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[マ　マ](麻生みつ子)、[世界の大金持](相模　武)、[息　子](山口奈々)、[店員(男)](田の中　勇)、[ボ　ケ](島　俊介)、[ナ　ス](石井敏郎)、[パ　ア](渡辺猛)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[パ　パ](田の中　勇)、[マ　マ](麻生みつ子)、[隊　長](渡辺　猛)

第8回Aパート『番長／大戦争／の話』(1969年11月23日放映)
第8回Bパート『モーレツ／大魔王／の話』(1969年11月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)
■声の出演[Bパート]／[ハクション大魔王](大平　透)、[カンちゃん](加藤みどり)、[ブル公](相模　武)

第9回Aパート『ハ・ハ・ハンと／泣けてくる／話』(1969年11月30日放映)
第9回Bパート『パパごのみの／壺の話』(1969年11月30日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／野田　恵■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／西牧秀雄

〈エンディングクレジット〉
■原動画／田中　保、内野純夫、田中英二
■美術設定／椋尾　篁■背景／椋尾　篁
■仕上／柴田　勝、豊島紘子■撮影／池田仁男■進行／永井昌嗣、朝香正則
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／滝　三郎
■演出／案納正美■絵コンテ／案納正美
■声の出演／[紅 三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ドン警部](鈴木泰明)、[ポンキー](滝口順平)、[ディック](原田一夫)、[ボエグ](古賀浩二)、[大ボス](矢田耕司)、[ナレーター](内海賢二)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第15話『第15話／決死の復讐犬』(1969年7月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、メリー(菅谷政子)
■[きょうの声の出演][第２画面]／ブラック氏(北山年夫)、執事(中村武己)、ガードマン(本田　晋)、じいさん(永井一郎)、ナレーター(内海賢二)
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉、鳥海尽三
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行

第16話『第16話／地獄の三四郎』(1969年7月16日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／滝　三郎■脚本／酒井　仁
■演出／西牧秀雄■絵コンテ／西牧秀雄
■声の出演／[紅 三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ポール](納谷六朗)、[ルナ](あぽくみこ)、[モルガン](寺島幹夫)、[ディック](武川　信)、[ナレーター](内海賢二)、[子供Ａ](駒村クリ子)、[子供Ｂ](三浦利子)、[子供Ｃ](角本みゆき)、[子供Ｄ](采野圭子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「山崎晴哉、滝　三郎」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第17話『第17話／片目の鬼将軍』(1969年7月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、片目将軍(高塔正康)
■[きょうの声の出演][第２画面]／ジョー(青野　武)、ワンタンメン(肝付兼太)、ゲバラ(村松康雄)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／田中　保、内野純夫、斉藤義一
■美術設定／しまあきら■背景／しまあきら
■仕上／柴田　勝、朝沼清良■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■脚本／山崎晴哉、酒井　仁
■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「山崎晴哉、鳥海尽三」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第18話『第18話／墓場をあばけ』(1969年7月30日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、ヘレナ(山口奈々)
■[きょうの声の出演][第２画面]／スポット(千葉耕市)、マック(中田浩二)、片目の男(田中康郎)、家政婦(遠藤　晴)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／内野純夫、高橋資祐、田中英二
■美術設定／新井實雄■背景／前　美智子
■仕上／柴田　勝、平井静子■撮影／高田秀雄■進行／永井昌嗣、加藤　博
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし

第19話『第19話／裏切りの報酬』(1969年8月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、、ケン坊(雷門ケン坊)、、ボケ(大竹　宏)
■[きょうの声の出演][第２画面]／ミレーヌ(鈴木弘子)、フランセ(村越伊知郎)、ボス(加藤精三)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／高橋資祐、田中　保、斎藤義一
■美術設定／椋尾　篁■背景／椋尾　篁
■仕上／柴田　勝、氏田秀男■撮影／細野　正■進行／永井昌嗣、朝香正則
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／富野喜幸
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、演出、絵コンテは「笹川ひろし」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第20話『第20話／片目の白虎 前篇』(1969年8月13日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井　仁、山崎晴哉■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、ルニヤ(恵比寿まさ子)
■[きょうの声の出演][第２画面]／カミール(松島みのり)、長老(石森達幸)、ハンター(武川　信)、紅正五郎(矢田耕司)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／内野純夫、高橋資祐、田中英二
■美術設定／しまあきら■背景／しまあきら
■仕上／柴田　勝、永井巳知代■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス／滝　三郎
■絵コンテ／九里一平
(注記)脚本は、竜の子プロ保管のスタッフリストでは「鳥海尽三、滝　三郎」、ＡＲ台本では「酒井　仁」と記載。

第21話『第21話／片目の白虎 後篇』(1969年8月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／酒井　仁、前里元義■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、ルニヤ(恵比寿まさ子)
■[きょうの声の出演][第２画面]／カミール(松島みのり)、長老(石森達幸)、村人(矢田耕司)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／田中　保、内野純夫、田中英二
■美術設定／しまあきら■背景／しまあきら
■仕上／柴田　勝、豊島紘子■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス／陣野　修
■絵コンテ／九里一平
(注記)脚本は、竜の子プロ保管のスタッフリストでは「鳥海尽三、陣野　修」、ＡＲ台本では「酒井　仁」と記載。

第22話『第22話／必殺マグマ流＊』(1969年8月27日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／林　すみ子
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅 三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[地底人長老](小林清志)、[その娘　オリガ](野村道子)、[ディック](朝戸鉄也)、[教授](石井敏郎)、[ナレーター](内海賢二)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「林　純夫」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第23話『第23話／三四郎絶体絶命』(1969年9月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、ミリー(沢田敏子)、保安官(国坂　伸)
■原動画／高橋資祐、田中　保、窪　召之
■美術設定／しま あきら■背景／しま あきら
■仕上／柴田　勝、永井 己知代
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
■声の出演／[ブラック・ナラーズ](寺島幹夫)、[ジャック](及川広夫)、[ペニー](峰　恵研)、[村人](武川　信)、[ナレーター](内海賢二)
(注記)「窪　召之」はクレジット表示ママ。

第24話『第24話／極意 天地崩し＊』(1969年9月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第１画面]／紅 三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、ナタリー(鈴木弘子)
■[きょうの声の出演][第２画面]／三四郎の父(矢田耕司)、片目(渡辺　猛)、団長(原田一夫)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／田中　保、内野純夫、田中英二
■美術設定／椋尾　篁■背景／椋尾　篁
■仕上／柴田　勝、朝沼清良■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス／伊東恒久■脚本／山崎晴哉、酒井　仁
■演出／案納正美■絵コンテ／案納正美
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「伊東恒久」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第25話『第25話／猿人殺法』(1969年9月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
■声の出演／[紅 三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[少女](池田昌子)、[ボス猿](加藤精三)、[ナレーター](内海賢二)

第26話『第26話／秘剣 美少女＊』(1969年9月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅 三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ボス](村越伊知郎)、[マリ](北浜晴子)、[若者(Ａ)](武川　信)、[ナレーター](内海賢二)

紅三四郎

1969年4月2日～1969年9月24日(第1～26話)　毎週水曜19時～19時30分
フジテレビ系／30分カラー・全26話

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは、タイトルカードによって表示が行われていた。そのため、本リストでは、カードが現存する話数のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正AR台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(AR台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。サブタイトルは、タイトルカードが現存しなかった話数に関しては他の資料(竜の子プロ保管のスタッフリストやAR台本)を参考にして表記し、最後に「*」マークを付した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■原作／吉田竜夫〈少年ジャンプ連載〉■企画／鳥海尽三
■音楽／越部信義、音楽企画センター■効果／イシダ・サウンドプロ
■総監督／九里一平
■主題歌
CROWN クラウン・レコード　作詞／関沢新一　作曲／越部信義　歌／美樹克彦
[以上、1～13話]
作詞／丘　灯至夫　作曲／和田香苗　歌／堀江美都子(12才・横浜市)
[以上、14～26話]
■プロデューサー／吉田健二
■担当／木村実(読広)、――――[以上、1～12話]、前里元義
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■第二主題歌[14～26話]
夕陽の男　作詞／丘　灯至夫　作曲／和田香苗　歌／島崎由理(12才・横浜市)
■編集／中溝哲生■協力／富士写真フィルム■録音プロデューサー／本田保則
■録音ディレクター／水本　完、オムニバス・プロ■録音／読広スタジオ、平野　勝
■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ■協力／フジテレビ、八百板　勉
(注記)オープニング、エンディングの主題歌交替時期に関しては、現存するカードの記載内容に鑑みて、第13～15話のいずれかの話数であると思われる。ここでは、番組改編時の常識に照らし、便宜的に第14話を変わり目と判断した。

第1話『第1話／紅の風雲児*』(1969年4月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第1画面]／紅三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、少女まゆみ(上田みゆき)
■撮影／池田仁男
■進行／永井昌嗣
〈資料より補足〉
■シノプシス／陣野　修■脚本／鳥海尽三、陣野　修
■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
■声の出演／[三四郎の父](立壁和也)、[謎の外人紳士](小山源喜)、[少年A*](納谷六郎)、[少年B*](立壁和也)、[少年C*](福原圭一)、[ナレーター](内海賢二)

第2話『第2話／摩天楼の片目*』(1969年4月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ミリイ](栗　葉子)、[ナレーター](内海賢二)

第3話『第3話／猫魔族の挑戦*』(1969年4月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■原動画／斉藤義一、田中英二
■美術設定／新井寅雄■背景／朝日享子
■仕上／柴田　勝、朝沼清良
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、山崎晴哉
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[タマラ](高橋和枝、恵比寿まさ子)、[サムダ](今西正男)、[カムラン](寺島幹夫)、[大臣](内海賢二)

第4話『第4話／燃ゆる大平原』(1969年4月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[オテマ](松尾佳子)、[馬賊の頭領](加藤精三)、[老人](石井敏郎)、[馬賊の子分(A)](水鳥鉄夫)、[馬賊の子分(B)](肝付兼太)、[ナレーター](内海賢二)

第5話『第5話／荒野の暴れん坊*』(1969年4月30日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／鳥海尽三、鈴木良武
■演出／案納正美、奥田誠二■絵コンテ／奥田誠二
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[村の長老](北村弘一)、[ヘレーネ　少女](松島みのり)、[老婆](遠藤　晴)、[グラコン](近石真介)、[カミロ](雨森雅司)、[ナレーター](内海賢二)

第6話『第6話／必殺！紅十字星*』(1969年5月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[イーゲル](伊藤　克)、[ユリ](鈴木弘子)、[ジュン少年](田上和枝)、[教主](杉田俊也)、[ナレーター](内海賢二)

第7話『第7話／海の虎(ハリマオ)*』(1969年5月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、山崎晴哉
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[グラハム](田村錦人)、[ハイム](藤本　譲)、[マッキンレイ](諏訪孝二)、[ゲバルト](竹尾智晴)、[ゲバルト](小林恭治)、[ジョージ](田村錦人)、[キャシイ](沢田敏子)、[コング](増岡　弘)、[ナレーター](内海賢二)

第8話『第8話／魔の超人マシン*』(1969年5月21日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／陣野　修(A)■脚本／陣野　修
■演出／九里一平、奥田誠二■絵コンテ／奥田誠二
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ギャビン博士](千葉耕市)、[マリー](北浜晴子)、[シャドウ(一号)](飯田和平)、[ナレーター](内海賢二)

第9話『第9話／白銀の対決*』(1969年5月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■原動画／高橋資祐、田中　保、斉藤義一
■美術設定／中村光毅■背景／中塚ひろ子
■仕上／柴田　勝、向井　稔■撮影／池田仁男■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／鳥海尽三、鈴木良武
■演出／鳥海永行■絵コンテ／鳥海永行
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[紅正五郎](矢田耕司)、[チャイナ](辻村真人)、[巨漢(片目)](小林清志)、[ジェーン](白石冬美)、[ナレーター](内海賢二)

第10話『第10話／幻の独眼帝王』(1969年6月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第1画面]／紅三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)
■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、朝香正則
〈資料より補足〉
■脚本／陣野　修
■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
■声の出演／[老婆](川路夏子)、[旅僧](宮内幸平)、[アレク帝王](塩見竜介)、[ナイル](武藤礼子)、ナレーター(内海賢二)

第11話『第11話／キリマンジャロの戦士*』(1969年6月11日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／林　純夫■脚本／林　すみ子
■演出／鳥海永行■絵コンテ／林　純夫
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ラムイの父](大竹　宏)、[ラムイ](藤本　譲)、[ナリータ](池田昌子)、[豹族(A)](内海賢二)、[豹族(B)](国坂　伸)、[片眼](飯塚昭三)、[マサイ(A)](矢田耕司)、酋長(国坂　伸)、ナレーター(内海賢二)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「林　純夫」と記載。上記のデータは、AR台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第12話『第12話／夕陽の決闘』(1969年6月18日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修■演出／九里一平
〈エンディングクレジット〉
■きょうの声の出演[第1画面]／紅三四郎(西川幾雄)、ケン坊(雷門ケン坊)、ボケ(大竹　宏)、少女(千々松幸子)、おじいさん(槐　柳二)
■[きょうの声の出演][第2画面]／長老(斎藤三勇)、店の人(池田一臣)、母親(島美弥子)、ボス(水道　晋)、大男(西川　達)、ナレーター(内海賢二)
■原動画／内野純夫、高橋資祐、田中英二
■美術設定／新井寅雄■背景／今村立夫
■仕上／柴田　勝、氏田秀男■撮影／加藤昭治■進行／永井昌嗣、朝香正則
〈資料より補足〉
■絵コンテ／九里一平

第13話『第13話／紅脱出作戦*』(1969年6月25日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／山崎晴哉
■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
■声の出演／[紅三四郎](西川幾雄)、[ケン坊](雷門ケン坊)、[ボケ](大竹　宏)、[ポール博士](仲木隆司)、[マリア](北浜晴子)、[兵隊(A)](細井重之)、[兵隊(D)](水鳥鉄夫)、[ナレーター](内海賢二)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、鈴木良武」と記載。上記のデータは、AR台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第14話『第14話／殺し屋オリンピック*』(1969年7月2日放映)

■声の出演[Aパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)
(注記)「奥田誠二」は資料表記ママ。

第20回Aパート『原始狩り／ウヒャヒャ／の巻*＊』(1969年2月12日放映)
第20回Bパート『ヘイ！／ドカチン／の巻*＊』(1969年2月12日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／吉田喜昭
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／不二みね雄
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第21回Aパート『ブニャブニャ／展覧会／の巻*＊』(1969年2月19日放映)
第21回Bパート『学校／すきすき／の巻*＊』(1969年2月19日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Bパート]／林　純夫
■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Bパート]／西岡たかし
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン](中村メイコ)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)

第22回Aパート『ドカチン番長／の巻*＊』(1969年2月26日放映)
第22回Bパート『サブタイトル不詳』(1969年2月26日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／西岡たかし
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[パンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)

第23回Aパート『チビ怪獣／ドッカーン／の巻*＊』(1969年3月5日放映)
第23回Bパート『大恐竜／アッチッチ／の巻*＊』(1969年3月5日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／山崎晴哉
■脚本[Aパート]／林　純夫■脚本[Bパート]／林　純夫
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／白川忠志
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)

第24回Aパート『ドカチン／ランナー／の巻*＊』(1969年3月12日放映)
第24回Bパート『トトト／病気になる／の巻*＊』(1969年3月12日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／村林信一■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／野島　進■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、カカカ、キザ夫](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[パ　ク](加藤みどり)

第25回Aパート『ばくだん／先生／の巻*＊』(1969年3月19日放映)
第25回Bパート『バイバイ／パァー公／の巻*＊』(1969年3月19日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／伊東恒久■シノプシス[Bパート]／野田　恵
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／案納正美■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／西岡たかし
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[パンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パンク博士](八奈見乗児)

第26回Aパート『ＯＨ!!／ワンダフル真珠／の巻*＊』(1969年3月26日放映)
第26回Bパート『チンドン屋／集合／の巻*＊』(1969年3月26日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／原　征太郎■絵コンテ[Bパート]／不二みね雄
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザ夫](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)、[トトト](神山卓三)、[ババババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[パンク博士](八奈見乗児)

(『風船少女テンプルちゃん』P.316より続き)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ラリー](松岡洋子)、[ポ　プ](仲木隆司)、[ヒョロ](松井千恵子)、[デブ](飯井啓子)、[母　親](友近恵子)、[男（A）](田中　勝)

第21話『雪山の／親子』(1978年2月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画／長谷川憲生、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[老　人](千葉耕市)、[仔　狼](峰　あつ子)、[トミー](仲木隆司)、[マリー](友近恵子)

第22話『チビッコイルカ／の／海』(1978年2月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／植田秀仁
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／池谷安夫■作画／山崎　茂、渋谷保徳、南部あき子
■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメ フレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[プッチ](雨森雅司)(A)、[街の人々](城山知馨夫)、[観客A](田中　勝)

第23話『汽車に乗った／テンプル』(1978年3月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／毛利　元■演出／永樹凡人
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)、ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)
■声の出演[第２画面]／親　　分(今西正男)、子　　分(大久保正信)、[旅芸人　A](仲木隆司)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／永樹たつひろ■作画／本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／下川忠海■仕上／(有)シャフト、西牧たみ子、常田明子、川添由美
■撮影／トップクラフト■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／宇田八郎
〈資料より補足〉
■声の出演／[旅芸人　B](田中　勝)、[エ　マ](松島みのり)
(注記)声の出演[第２画面]の「子　　分(大久保正信)」はクレジット表示ミス。

第24話『テンプルの／花火』(1978年3月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐藤和男■演出／布川ゆうじ、植田秀仁
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画／長谷川憲生、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／佐藤広明■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[ジーダ](八奈見乗児)、[バーヤン](高村章子)、[村人A](仲木隆司)、[村人B](田中　勝)

第25話『ふたりの／道しるべ』(1978年3月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／酒井あきよし■演出／昆進之介、西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／池谷安夫■作画／山崎　茂、渋谷保徳、南部あき子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメ フレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
〈資料より補足〉
■声の出演／[キッコリーン](滝口順平)、[ジーダ](八奈見乗児)、[バーヤン](高村章子)、[父](仲木隆司)、[母](友近恵子)

第26話『若草村の／パパと／ママ』(1978年3月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／山本　優■演出／大貫信夫、上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野
(P.299へ続く)

ババ](麻生みつ子)

第５回Ａパート『ドカチン／新入生／の巻*＊』(1968年10月30日放映)
第５回Ｂパート『ハッスル／バババ／の巻*＊』(1968年10月30日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／陣野　修■脚本[Ｂパート]／山崎晴哉
■演出[Ａパート]／原　征太郎■演出[Ｂパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Ａパート]／白川忠志■絵コンテ[Ｂパート]／西牧秀雄
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第６回Ａパート『トトト／チィチィパッパ／の巻*＊』(1968年11月6日放映)
第６回Ｂパート『原始王／ワルザン／の巻*＊』(1968年11月6日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／陣野　修■脚本[Ｂパート]／伊東恒久
■演出[Ａパート]／原　征太郎■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／青木　茂■絵コンテ[Ｂパート]／西牧秀雄
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[トトト](神山卓三)、[チイ子](松尾佳子)、[パンク博士](八奈見乗児)

第７回Ａパート『遠足／テッテッポッポ／の巻*＊』(1968年11月13日放映)
第７回Ｂパート『バババ／なつかしや／の巻*＊』(1968年11月13日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／山崎晴哉■脚本[Ｂパート]／草川　隆
■演出[Ａパート]／原　征太郎■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Ｂパート]／白川忠志
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)

第８回Ａパート『ビックラ／ムシムシ／の巻*＊』(1968年11月20日放映)
第８回Ｂパート『ベロベロ／バァー／の巻*＊』(1968年11月20日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／林　純夫■脚本[Ｂパート]／吉*田喜昭
■演出[Ａパート]／笹川ひろし■演出[Ｂパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Ａパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Ｂパート]／白川忠志
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[パンク博士](八奈見乗児)

第９回Ａパート『ドカドカ／ドカチン／の巻*＊』(1968年11月27日放映)
第９回Ｂパート『トンカチ／ビューン／の巻*＊』(1968年11月27日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／林　純夫■脚本[Ｂパート]／林　純夫
■演出[Ａパート]／原　征太郎■演出[Ｂパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Ａパート]／白川忠志■絵コンテ[Ｂパート]／坂本雄作
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[トトト](神山卓三)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第10回Ａパート『トトト／アゴ～～／の巻*＊』(1968年12月4日放映)
第10回Ｂパート『ドカチン／大作戦／の巻*＊』(1968年12月4日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／山崎晴哉■脚本[Ｂパート]／山崎晴哉
■演出[Ａパート]／笹川ひろし■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／白川忠志■絵コンテ[Ｂパート]／原　征太郎
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)

第11回Ａパート『ドカチン／グランプリ／の巻*＊』(1968年12月11日放映)
第11回Ｂパート『文化教育／ブニャン／の巻*＊』(1968年12月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／伊東恒久■脚本[Ｂパート]／山崎晴哉
■演出[Ａパート]／西岡たかし■演出[Ｂパート]／案納正美
■絵コンテ[Ａパート]／西岡たかし■絵コンテ[Ｂパート]／案納正美
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)
(注記)現存するＡＲ台本では、Ｂパートのキャスティングページが切り取られており、確認できない。

第12回Ａパート『ドカチン／狂騒曲／の巻*＊』(1968年12月18日放映)
第12回Ｂパート『シュシュポッポ／大作戦／の巻*＊』(1968年12月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／草川　隆■脚本[Ｂパート]／吉*田喜昭
■演出[Ａパート]／西岡たかし■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／野島　進■絵コンテ[Ｂパート]／原　征太郎
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第13回Ａパート『ドッカーン！／クリスマス／の巻*＊』(1968年12月25日放映)第13回Ｂパート『ドカチン聖者／の巻*＊』(1968年12月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／陣野　修■脚本[Ｂパート]／陣野　修
■演出[Ａパート]／笹川ひろし■演出[Ｂパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Ａパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Ｂパート]／笹川ひろし
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[トトト](神山卓三)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第14回Ａパート『昔も未来も／ありゃしない／の巻*＊』(1969年1月1日放映)
第14回Ｂパート『ブタ公／アゴォ～～／の巻*＊』(1969年1月1日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／村林信一■脚本[Ｂパート]／林　純夫
■演出[Ａパート]／鳥海永行■演出[Ｂパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Ａパート]／鳥海永行■絵コンテ[Ｂパート]／西岡たかし
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[パ　ク](加藤みどり)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)

第15回Ａパート『ブルブル／原始ゾーン／の巻*＊』(1969年1月8日放映)
第15回Ｂパート『ドカチン／総理大臣／の巻*＊』(1969年1月8日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／伊東恒久■脚本[Ｂパート]／吉*田喜昭
■演出[Ａパート]／不二みね雄■演出[Ｂパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Ａパート]／不二みね雄■絵コンテ[Ｂパート]／不二みね雄
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[トトト](神山卓三)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)

第16回Ａパート『スーパー／ドカチン／の巻*＊』(1969年1月15日放映)
第16回Ｂパート『のらねこ／ホイホイ／の巻*＊』(1969年1月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／伊東恒久■脚本[Ｂパート]／伊東恒久
■演出[Ａパート]／案納正美■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／案納正美■絵コンテ[Ｂパート]／原　征太郎
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザオ](中村メイコ)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、キザオ](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)、[トトト](神山卓三)

第17回Ａパート『べんけい寺の／ドカチン坊主／の巻*＊』(1969年1月22日放映)
第17回Ｂパート『ドカチン／ゲンメツする／の巻*＊』(1969年1月22日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／山崎晴哉■脚本[Ｂパート]／草川　隆
■演出[Ａパート]／案納正美■演出[Ｂパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Ａパート]／白川忠志■絵コンテ[Ｂパート]／西岡たかし
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザ夫](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[パ　ク](加藤みどり)、[チイ子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[チイ子](松尾佳子)

第18回Ａパート『ドッカーン！／ホームラン／の巻*＊』(1969年1月29日放映)
第18回Ｂパート『トモダチ／ブニャ～～／の巻*＊』(1969年1月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／山崎晴哉■脚本[Ｂパート]／伊東恒久
■演出[Ａパート]／案納正美■演出[Ｂパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Ａパート]／白川忠志■絵コンテ[Ｂパート]／西牧秀雄
■声の出演[Ａパート]／[ドカチン、キザ夫、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[チイ子](松尾佳子)
■声の出演[Ｂパート]／[ドカチン](中村メイコ)、[バババ](麻生みつ子)

第19回Ａパート『遊園地／プーパッパ／の巻*＊』(1969年2月5日放映)
第19回Ｂパート『ドカドカ／原始人／の巻*＊』(1969年2月5日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Ａパート]／伊東恒久■脚本[Ｂパート]／吉*田喜昭
■演出[Ａパート]／西岡たかし■演出[Ｂパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Ａパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Ｂパート]／奥田誠二

〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[男B](八奈見乗児)、[看　守](増岡　弘)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[番　頭](八奈見乗児)、[A氏](増岡　弘)、[C　氏](和久井節緒)

第48回Aパート『グズラ／社長／の巻*＊』(1968年8月28日放映)
第48回Bパート『グズラ／駅長／の巻*＊』(1968年8月28日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)

第49回Aパート『怪獣／居候会議／の巻*＊』(1968年9月4日放映)
第49回Bパート『怪獣／やじきた道中／の巻*』(1968年9月4日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／鳥海尽三■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／佐々木次治■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[モゲラドン](増岡　弘)、[スイトン](肝付兼太)、[グーダラ](近石真介)、[タコラン](井出涼太)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パパ(太郎吉)](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[カゴカキA](八奈見乗児)

第50回Aパート『チャララ／かわいや／の巻*＊』(1968年9月11日放映)
第50回Bパート『チンドン屋／大はんじょう／の巻*＊』(1968年9月11日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／鳥海尽三
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／三谷光房
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[易　者](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[チンドン屋の社長](肝付兼太)、[グーダラ](近石真介)、[タコラン](井出涼太)、[モゲラドン](増岡　弘)

第51回Aパート『ドタバタ／世界旅行／の巻*＊』(1968年9月18日放映)
第51回Bパート『おらあの／子供は１ダース／の巻*＊』(1968年9月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／案納正美
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／木下連三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男](八奈見乗児)、[スチュワーデス](近藤高子)、[ケイカン](増岡　弘)、[客](和久井節緒)、[子　供](三上由紀)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[易　者](八奈見乗児)

第52回Aパート『グズラの／おまわりさん／の巻*＊』(1968年9月25日放映)
第52回Bパート『チュウチュウ／コンサート／の巻*＊』(1968年9月25日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／野田　恵■脚本[Bパート]／鳥海尽三
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／三谷光房■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[老巡査](八奈見乗児)、[運チャン](和久井節緒)、[警視総監](増岡　弘)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ネズミ](近藤高子)、[子ネズミ](三上由紀)

ドカチン

1968年10月２日～1969年３月26日(第１～26回)　毎週水曜19時～19時30分
フジテレビ系／30分モノクロ・１回２話構成・全26回(全52話)

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは、タイトルカードによって表示が行われていた。そのため、本リストでは、カードが現存する回数(第３回)のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。　サブタイトルは、フィルムへの焼き込みで表示されたと思われるが、今回は現物の確認が出来なかった。ここでは、現存するタイトルカード及び訂正ＡＲ台本表紙の記載を参考に、サブタイトルを表記している。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　作詞／鳥海尽三、伊藤アキラ　作曲／宇野誠一郎　歌／中村メイコ
■原作／吉田竜夫〈少年サンデー連載〉■企画／鳥海尽三
■総監督／笹川ひろし■音楽／中村勝彦、音楽企画センター
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■第二主題歌《オモッチョロイ ドカチン!》
作詞／伊藤アキラ　作曲／宇野誠一郎　歌／中村メイコ
■効果／石田秀憲、伊藤克己■録音ディレクター／本田保則
■録音／読広スタジオ、平野　勝、棚岡元
■プロデューサー／吉田健二■担当／木村　実、前里元義
■制作／吉田竜夫、◇タツノコ プロ■協力／フジテレビ、八百板　勉

第１回Aパート『ドッカーン／ドカチン／の巻*＊』(1968年10月2日放映)
第１回Bパート『団地／ブニャーン／の巻*＊』(1968年10月2日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／鳥海尽三■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チー子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[ナレーター](富山　敬)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チー子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)、[キザオのパパ](富山　敬)

第２回Aパート『おつむ／テッテッポッポ／の巻*＊』(1968年10月9日放映)
第２回Bパート『ギャング／アゴ～～／の巻*＊』(1968年10月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／鳥海尽三■脚本[Bパート]／村林信一
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バババ](麻生みつ子)、[パ　ク](加藤みどり)、[チー子](松尾佳子)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザオ、カカカ](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[チー子](松尾佳子)

第３回Aパート『ミイラ／トリトル先生／の巻*＊』(1968年10月16日放映)
第３回Bパート『テレビ／スカンチン／の巻*＊』(1968年10月16日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／山崎晴哉[Aパート]、林 すみ子[Bパート]
■演出／笹川ひろし[Aパート]、原 征太郎[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／ドカチン、キザオ、カカカ[Aパート](中村メイコ)、トトト(神山卓三)[Aパート]、バババ(麻生みつ子)[Aパート]、パク(加藤みどり)[Aパート]、チイ子(松尾佳子)
■[声の出演[第２画面]／ノーテンパンク博士(八奈見乗児)、記者(中山輝夫)[Aパート]、トリトル先生(小林恭治)[Aパート]、監督(近石真介)[Bパート]、助監督(肝付兼太)[Bパート]
■原動画／山本　繁、斎藤義一■美術デザイン／中村光毅■背景／前　美智子
■仕上／柴田　勝、向井　稔■撮影／池田仁男■編集／中溝克之
■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／林　純夫
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／原 征太郎

第４回Aパート『ドカチン／ガキ大将／の巻*＊』(1968年10月23日放映)
第４回Bパート『ホイホイ／原始の巻*＊』(1968年10月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／草川　隆■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／原　征太郎
■声の出演[Aパート]／[ドカチン、キザオ](中村メイコ)、[ノーテンパンク博士](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[ドカチン、キザ夫](中村メイコ)、[トトト](神山卓三)、[バ

■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／伊東恒久
■演出[Aパート]／鳥海永行■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／鳥海永行■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チチララ](堀　絢子)、[ボンタ](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[笹やぶ先生](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)
(注記)「太平　透」「チチララ」「笹やぶ先生」はＡＲ台本の表記ママ。

第35回Ａパート『グズラ／ガンマン／の巻*＊』(1968年5月29日放映)
第35回Ｂパート『おらぁ／見ちゃったど／の巻*＊』(1968年5月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／奥田誠二■絵コンテ[Bパート]／西岡たかし
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[ボ　ス](勝田　久)、[乾分Ａ](富山　敬)、[乾分Ｂ](槐　柳二)、[シェリフ](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男達](八奈見乗児)、[男　達](槐　柳二)〈資料より補足〉

第36回Ａパート『怪獣／ゲラゴン／の巻*＊』(1968年6月5日放映)
第36回Ｂパート『カッチョイイ／パイロット／の巻*＊』(1968年6月5日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／前里元義■脚本[Bパート]／林　純夫
■演出[Aパート]／鳥海永行■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／鳥海永行■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[頭取](八奈見乗児)、[ゲラゴン](井出涼太)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[校長](八奈見乗児)、[教　官](井出涼太)

第37回Ａパート『会いたい／会いたい／の巻*＊』(1968年6月12日放映)
第37回Ｂパート『地獄／よいとこ／の巻*＊』(1968年6月12日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／奥田誠二■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[タラフク夫](上田敏也)、[タラフク妻](北川智恵子)、[ロボット](神山卓三)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[死　神](麻生みつ子)、[青　鬼](富山　敬)、[赤鬼](上田敏也)、[えんま](神山卓三)

第38回Ａパート『怪獣／スパイ作戦／の巻*＊』(1968年6月19日放映)
第38回Ｂパート『カッコマン／消防士／の巻*＊』(1968年6月19日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男Ｂ](田の中　勇)、[頭　取](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男Ｂ](田の中　勇)、[頭　取](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[部長](田の中　勇)、[署　長](八奈見乗児)

第39回Ａパート『グズラ親分／捕物帳／の巻*＊』(1968年6月26日放映)
第39回Ｂパート『出た出た／おばけ／の巻*＊』(1968年6月26日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／鈴木良武■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／鳥海永行■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／佐々木次治■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太(ボンハ)](東　美江)、[スズ子(おすず)](松尾佳子)、[パ　パ(パパ吉)](富山　敬)、[マ　マ(おママ)](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生(千久里)](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[家　主](富山　敬)、[フランケン](八奈見乗児)、[奥さん](東　美江)、[せがれ](松尾佳子)、[婆さん](麻生みつ子)

第40回Ａパート『グズラ音頭／の巻*＊』(1968年7月3日放映)
第40回Ｂパート『花嫁／チャララ／の巻*＊』(1968年7月3日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／吉*田喜昭■シノプシス[Bパート]／鈴木良武
■脚本[Aパート]／鈴木良武■脚本[Bパート]／吉*田喜昭
■演出[Aパート]／西牧秀雄■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／田中英二
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[おばあちゃん](戸川暁子)、[郵便屋](中山輝夫)、[村　長](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[校長](戸川暁子)、[委員Ａ](中山輝夫)、[料理の先生](八奈見乗児)〈資料より補足〉

第41回Ａパート『おらぁ／ボーイスカウトだど／の巻*＊』(1968年7月10日放映)
第41回Ｂパート『宇宙怪獣／アカンベーダ／の巻*＊』(1968年7月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[隊　長](緑川　稔)、[隊員Ａ](篠原大作)、[隊員Ｂ](麻生みつ子)、[隊員Ｃ](富山　敬)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[アカンベーダーＡ](緑川　稔)、[女の人](麻生みつ子)、[総　統](篠原大作)

第42回Ａパート『おらぁ／ノックダウンだど／の巻*＊』(1968年7月17日放映)
第42回Ｂパート『猛獣／かわいや／の巻*＊』(1968年7月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／永井昌嗣
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三■絵コンテ[Bパート]／佐々木次治
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男(トレーナー)](増岡　弘)、[オロチ](八奈見乗児)、[レフリー](井出涼太)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[熊](八奈見乗児)、[ゴリラ](増岡　弘)、[ライオン](井出涼太)

第43回Ａパート『南極探検／の巻*＊』(1968年7月24日放映)
第43回Ｂパート『おらぁ／魔術師だど／の巻*＊』(1968年7月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／野田　恵
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三■絵コンテ[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[大臣](八奈見乗児)、[サムイ(隊長)](緑川　稔)、[隊　員](加藤　修)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[Ｗバラン](緑川　稔)、[手品師](八奈見乗児)、[観客](加藤　修)、[観　客](堀　絢子)

第44回Ａパート『おとぼけ／海坊主／の巻*＊』(1968年7月31日放映)
第44回Ｂパート『お姫様は／ミニスカート／の巻*＊』(1968年7月31日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／吉*田喜昭
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男(海坊主)](八奈見乗児)、[坊　主](大矢兼臣)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[カラス](麻生みつ子)、[三太夫](八奈見乗児)、[城主](大矢兼臣)、[ルリ姫](坂井すみ江)

第45回Ａパート『オシャレ／怪獣／の巻*＊』(1968年8月7日放映)
第45回Ｂパート『海賊／退治／の巻*＊』(1968年8月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／鳥海永行■演出[Bパート]／西牧秀雄
■絵コンテ[Aパート]／富野喜幸■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[マネキン](三上由紀)、[先　生](山田千枝)、[モウケ氏](八奈見乗児)、[オシャレ怪獣](阿部光子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[長官](西尾　徳)、[隊　長](岡部政明)、[ボス(海賊船)](八奈見乗児)

第46回Ａパート『カッチョイイ／新兵さん／の巻*＊』(1968年8月14日放映)
第46回Ｂパート『カッチョイイ／隊長さん／の巻*＊』(1968年8月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[隊長](西尾　徳)、[係　官](八奈見乗児)、[前　川](岡部政明)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](太平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[前川君](岡部政明)、[鬼山隊長](西尾　徳)

第47回Ａパート『飛び出した／ミイラ坊や／の巻*＊』(1968年8月21日放映)
第47回Ｂパート『鉄が／ガバチョだど／の巻*＊』(1968年8月21日放映)

■仕上／柴田　勝、金井秀男■特殊効果／石田康実■検査／氏田秀男
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、中野政則
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Aパート]／高*橋良輔■絵コンテ[Bパート]／林　純夫
■声の出演[Aパート]／[八百屋](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[アナウンサー](内海賢二)

第22回Aパート『グズラ君を／お忘れなく／の巻*＊』(1968年3月2日放映)
第22回Bパート『おらぁ／ぶったまげたど／の巻*＊』(1968年3月2日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第23回Aパート『泣くな／グズラ／の巻*＊』(1968年3月9日放映)
第23回Bパート『おらぁ／関取でどんす／の巻*＊』(1968年3月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[スズ子](松尾佳子)、[ボン太](東　美江)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[さいみん術の先生](八奈見乗児)、[蝶](桂　玲子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[スズ子](松尾佳子)、[ボン太](東　美江)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[アナウンサー](神山卓三)、[青木山](八奈見乗児)、[親　方](和久井節緒)

第24回Aパート『拝啓／モンペ大臣殿／の巻*＊』(1968年3月16日放映)
第24回Bパート『ペット・／コンテスト／の巻*＊』(1968年3月16日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／瀬山義文■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第25回Aパート『グズラ・／オーケストラ／の巻*＊』(1968年3月23日放映)
第25回Bパート『グズラ・／マシン／の巻*＊』(1968年3月23日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三[Aパート]、陣野　修[Bパート]
■演出／西岡たかし[A・Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／グズラ(大平　透)、チャララ(堀　絢子)、ボン太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)
■[声の出演[第２画面]／パパ(富山　敬)、マ　マ(麻生みつ子)[Aパート]、少　女(野村道子)[Aパート]、ロボット・グズラ(和久井節緒)[Bパート]
■原動画／久米順三、高橋資祐■美術デザイン／中村光毅■背景／前　美智子
■仕上／柴田　勝、金井秀男■特殊効果／朝沼清良■検査／平山昭夫
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、佐藤光雄
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／鈴木良武
■絵コンテ[Aパート]／佐々木次治
■声の出演[Aパート]／[楽士A*](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]／[中　村](麻生みつ子)、[子供A](野村道子)、[子供C](堀　絢子)

第26回Aパート『怪獣／やめた／の巻*＊』(1968年3月30日放映)
第26回Bパート『大きいことは／いいことだど／の巻*＊』(1968年3月30日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／陣野　修[A・Bパート]
■演出／鳥海永行[Aパート]、原　征太郎[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／グズラ(大平　透)、チャララ(堀　絢子)、ボン太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)
■[声の出演[第２画面]／パパ(富山　敬)、マ　マ(麻生みつ子)、おおがた氏(八奈見乗児)、お手伝いさん(川路夏子)
■原動画／久米順三■美術デザイン／新井寅雄■背景／伊豆島君江
■仕上／柴田　勝、金井秀男■特殊効果／向井　稔■検査／氏田秀男
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、大館勝一
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三

第27回Aパート『カッチョイイ／芸術家／の巻*＊』(1968年4月3日放映)
第27回Bパート『怪獣／タコラン／の巻*＊』(1968年4月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／村林信一
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男　イ](北村弘一)、[男　ハ](大竹　宏)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[タコラン](大竹　宏)、[男　A](富山　敬)、[船長](北村弘一)

第28回Aパート『爆弾／赤ちゃん／の巻*＊』(1968年4月10日放映)
第28回Bパート『ハッスル／チャララ／の巻*＊』(1968年4月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／原　征太郎■演出[Bパート]／鳥海永行
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ドロボウ](日笠潤一)、[女性](白石冬美)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[坊や](白石冬美)、[バナナ屋](日笠潤一)

第29回Aパート『うかれ／タヌゴン／の巻*＊』(1968年4月17日放映)
第29回Bパート『怪獣／グーダラ／の巻*＊』(1968年4月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／佐々木次治■絵コンテ[Bパート]／瀬山義文
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[父親](北村弘一)、[タヌゴン](近石真介)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[グーダラ](近石真介)、[課　長](北村弘一)

第30回Aパート『怪獣／ダイヤラ／の巻*＊』(1968年4月24日放映)
第30回Bパート『トントン／奥さん／の巻*＊』(1968年4月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／林　純夫
■演出[Aパート]／不二みね雄■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Bパート]／林　純夫
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[銭無](大竹　宏)、[ダイヤラ](増岡　弘)、[警　官](丸山詠二)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[巡査](大竹　宏)

第31回Aパート『グズラ／金太郎／の巻*＊』(1968年5月1日放映)
第31回Bパート『逃げろや／逃げろ／の巻*＊』(1968年5月1日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／草川　隆
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[人夫A](依田英助)、[人夫B](加藤　修)、[カネアリ](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[変な男](依田英助)、[獣医A*](加藤　修)

第32回Aパート『わしは／百才じゃ／の巻*＊』(1968年5月8日放映)
第32回Bパート『学芸会に／出るど／の巻*＊』(1968年5月8日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／陣野　修■脚本[Bパート]／草川　隆
■演出[Aパート]／鳥海永行■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Bパート]／木下蓮三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[お爺さん](八奈見乗児)、[小　僧](岩城和男)、[玉売のねえちゃん](沢田和子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[校長](八奈見乗児)、[市　長](岩城和男)、[かんとく](沢田和子)

第33回Aパート『親切は／コリゴリだ／の巻*＊』(1968年5月15日放映)
第33回Bパート『パパに／紹介してトン／の*＊』(1968年5月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／板井れんたろう■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／西岡たかし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[駅員(A)](増岡　弘)、[駅　員(B)](大矢兼臣)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[クズ鉄屋　(B)](大矢兼臣)、[税務課員　(A)](増岡　弘)

第34回Aパート『おらぁ／死んじまったど／の巻*＊』(1968年5月22日放映)
第34回Bパート『怪獣／アルバイト／の巻*＊』(1968年5月22日放映)
〈資料より補足〉

■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第9回Aパート『おらぁ/ぬすまれたど/の巻*＊』(1967年12月2日放映)
第9回Bパート『スーパー・/ノミラ/の巻*＊』(1967年12月2日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]/芹川有吾
■脚本[Aパート]/鈴木良武■脚本[Bパート]/鳥海尽三
■演出[Aパート]/原　征太郎■演出[Bパート]/笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]/木下連三■絵コンテ[Bパート]/芹川有吾
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第10回Aパート『プロレス/チャンピオン/の巻*＊』(1967年12月9日放映)
第10回Bパート『デパート/すきすき/の巻*＊』(1967年12月9日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]/芹川有吾
■脚本[Aパート]/出崎　哲■脚本[Bパート]/鳥海尽三
■演出[Aパート]/笹川ひろし■演出[Bパート]/西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]/瀬山義文■絵コンテ[Bパート]/芹川有吾
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[星野ジムのオヤジ](八奈見乗児)、[星野ジムの子　供](三浦利子)、[ジジババ](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第11回Aパート『おらぁ/イカッたど/の巻*＊』(1967年12月16日放映)
第11回Bパート『カッチョイイ/選手/の巻*＊』(1967年12月16日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/伊東恒久■脚本[Bパート]/山崎晴哉
■演出[Aパート]/西岡たかし■演出[Bパート]/原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]/西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]/木下連三
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)

第12回Aパート『鉄を/くいねえ/の巻*＊』(1967年12月23日放映)
第12回Bパート『グズラ/サンタ/の巻*＊』(1967年12月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/陣野　修■脚本[Bパート]/山崎晴哉
■演出[Aパート]/笹川ひろし■演出[Bパート]/鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]/坂本雄作■絵コンテ[Bパート]/西牧秀雄
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[中　村](麻生みつ子)、[デ　ブ](和久井節緒)、[ノッポ](富山　敬)、[おやじ](八奈見乗児)、[運転手](内海賢二)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[男　(A)](和久井節緒)、[男　(B)](内海賢二)、[貧　田](八奈見乗児)、[おまわり](和久井節緒)、[一郎](富山　敬)、[二　郎](麻生みつ子)、[三　郎](松尾佳子)、[商店主](富山　敬)

第13回Aパート『グズラ流/忍法/の巻*＊』(1967年12月30日放映)
第13回Bパート『どたばた/大晦日/の巻*＊』(1967年12月30日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/伊東恒久■脚本[Bパート]/山崎晴哉
■演出[Aパート]/笹川ひろし■演出[Bパート]/原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]/西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]/高*橋良輔
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)

第14回Aパート『おらぁ/みなし子だど/の巻*＊』(1968年1月6日放映)
第14回Bパート『びっくら島/の巻*＊』(1968年1月6日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]/高*橋良輔
■脚本[Aパート]/伊東恒久■脚本[Bパート]/鳥海尽三
■演出[Aパート]/原　征太郎■演出[Bパート]/不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]/高*橋良輔■絵コンテ[Bパート]/高*橋良輔
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生和子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)

第15回Aパート『ちゃっかり/チャララ/の巻*＊』(1968年1月13日放映)
第15回Bパート『パパは/ノイローゼ/の巻*＊』(1968年1月13日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]/鈴木良武
■脚本[Aパート]/陣野　修■脚本[Bパート]/鳥海尽三
■演出[Aパート]/原　征太郎■演出[Bパート]/笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]/瀬山義文■絵コンテ[Bパート]/林　純夫
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[チャララ](堀　絢子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[チャララ](堀　絢子)

第16回Aパート『グズラ/一年生/の巻*＊』(1968年1月20日放映)
第16回Bパート『グズラ/にせ病/の巻*＊』(1968年1月20日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/陣野　修[Aパート]、鳥海尽三[Bパート]
■演出/原　征太郎[Aパート]、笹川ひろし[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]/グズラ(大平　透)、チャララ(堀　絢子)、凡太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)
■[声の出演[第2画面]/パパ(富山　敬)[Bパート]、マ　マ(麻生みつ子)[Bパート]、笹ヤブ先生(和久井節緒)[Bパート]、博　士(八奈見乗児)、〃　(藤本譲)
■原動画/久米順三、田中　保■美術デザイン/新井寅雄■背景/伊豆島君江
■仕上/柴田　勝、金井秀男、河合祥子■特殊効果/榎本　誠■検査/佐野光雄
■撮影/池田仁男■編集/篠原　正■進行/永井昌嗣、大平秀明
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]/陣野　修■シノプシス[Bパート]/芹川有吾
■絵コンテ[Aパート]/瀬山義文■絵コンテ[Bパート]/林　純夫
■声の出演[Aパート]/、[グズラの母(声)](麻生みつ子)、[校　長](和久井節緒)、[生徒(A)](富山　敬)

第17回Aパート『怪獣/お手伝いさん/の巻*＊』(1968年1月27日放映)
第17回Bパート『グズラ/おぼっちゃま/の巻*＊』(1968年1月27日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]/芹川有吾
■脚本[Aパート]/伊東恒久■脚本[Bパート]/鳥海尽三
■演出[Aパート]/西岡たかし■演出[Bパート]/鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]/林　純夫■絵コンテ[Bパート]/芹川有吾
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[ミチコ](三浦利子)、[おじいちゃん](八奈見乗児)、[押し売り](富山　敬)、[家の人(女)](麻生みつ子)、[医　者](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[アホダラ社長](和久井節緒)、[息子ダダオ](三浦利子)、[家　令](八奈見乗児)

第18回Aパート『スピード・/カッコマン/の巻*＊』(1968年2月3日放映)
第18回Bパート『図々しい/雪男/の巻*＊』(1968年2月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/陣野　修■脚本[Bパート]/伊東恒久
■演出[Aパート]/原　征太郎■演出[Bパート]/西岡たかし
■絵コンテ[Aパート]/木下連三■絵コンテ[Bパート]/木下連三
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[スカウト](井出涼太)、[教習所のおじさん](八奈見乗児)、[署　長](和久井節緒)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ヒョロリー](井出涼太)、[以前のディレクター](八奈見乗児)、[雪　男](和久井節緒)

第19回Aパート『グズラと/グズラ/の巻*＊』(1968年2月10日放映)
第19回Bパート『ダイコン先生/の巻*＊』(1968年2月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/山崎晴哉■脚本[Bパート]/吉*田喜昭
■演出[Aパート]/不二みね雄■演出[Bパート]/原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]/西牧秀雄
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[草井](北村弘一)、[トン田刑事](和久井節緒)、[和　尚](八奈見乗児)、[ポコ念](菅谷政子)
■声の出演[Bパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[大根](和久井節緒)

第20回Aパート『死にたく/ないど/の巻*＊』(1968年2月17日放映)
第20回Bパート『注射/がまんするど/の巻*＊』(1968年2月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]/陣野　修■脚本[Bパート]/山崎晴哉
■演出[Aパート]/西岡たかし■演出[Bパート]/不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]/瀬山義文■絵コンテ[Bパート]/木下連三
■声の出演[Aパート]/[グズラ](大平　透)、[チャララ](堀　絢子)、[ボン太](東美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[親神](八奈見乗児)、[大　王](今西正男)、[主　人](和久井節緒)

第21回Aパート『いっちょう/やったるど/の巻*＊』(1968年2月24日放映)
第21回Bパート『大馬鹿/イモドン/の巻*＊』(1968年2月24日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本/陣野　修[A・Bパート]
■演出/原　征太郎[Aパート]、笹川ひろし[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]/グズラ(大平　透)、チャララ(堀　絢子)、ボン太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)
■[声の出演[第2画面]/パパ(富山　敬)、マ　マ(麻生みつ子)[Aパート]、音吉(沢田和子)[Aパート]、その父(内海賢二)[Aパート]、イモドン(八奈見乗児)[Bパート]
■原動画/久米順三、高橋資祐■美術デザイン/新井寅雄■背景/朝日享子

おらぁグズラだど

1967年10月2日～1968年3月30日(第1～26回)　毎週土曜19時～19時30分
1968年4月3日～1968年9月25日(第27～52回)　毎週水曜19時30分～20時
フジテレビ系／30分モノクロ・1回2話構成・全52回(全104話)

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは、タイトルカードによって表示が行われていた。そのため、本リストでは、カードが現存する回数(第1、2、3、16、21、25、26回)のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正AR台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(AR台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、2種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。サブタイトルは、フィルムへの焼き込みで表示されたと思われるが、今回は現物の確認が出来なかった。ここでは、現存するタイトルカード及び訂正AR台本表紙の記載を参考に、サブタイトルを表記している。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■主題歌　作詞／青島雪男　作曲／馬渡誠一　歌／谷　　啓
■原作／笹川ひろし〈少年サンデー連載〉■企画／鳥海尽三
■音楽／小野崎孝輔■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■キャラクターデザイン／吉田竜夫
■効果／いしだ・いとう、グズラ効果グループ[以上、初期]、
石田秀憲・伊藤克己、グズラ効果グループ[以上、中期以降]
■録音ディレクター／石田忠賢[前期]、石田桂資[中期以降]、本田保則
■録音／読広スタジオ、棚岡　元■プロデューサー／吉田健二
■担当／木村　実、前里元義■制作／吉田竜夫、◇タツノコプロ
■協力／フジテレビ、八百板　勉
(注記)エンディングクレジットのうち、「効果」と「録音ディレクター」の内容が第3回と第16回との間で変わっているが、現存するタイトルカードが少ないため、その正確な変更話数が判らない。ここでは便宜上、「前期」「中期以降」という但し書きをつけてある。
　AR台本では、第41回分から「主題歌」とは別に副主題歌「グズラ音頭」の歌詞が掲載される。第40回Aパートが「グズラ音頭　の巻*」であることから、それに合わせ、番組のエンディングもそれまでの曲(オープニングと同じ歌)から「グズラ音頭」へ)と変更されたと思われる。ただし、その変更が第40回と第41回、どちらの回で行われたのかについては、今回の調査では解明できなかった。ちなみに、AR台本に記載された「グズラ音頭」に関するスタッフ名は以下の通り。
■作詩[第43回より「作詞」]／鳥海尽三　作曲／小野崎孝輔　唄／大平　透　ほか
　さらに、第51、52回のAR台本には、「録音スタッフ」という見出しとともに、シリーズ末期の音響関係者の人名が印刷されている。内容は以下の通り。
■録音ディレクター／本田保則
■音楽進行／中村勝彦
■演技進行／吉*原綾子
■録音／棚岡　元、平野　勝、日沼　勲
■プロデューサー／吉*田健二
■担当／木村　實、――――、永井昌嗣、、八百板　勉(フジテレビ)

第1回Aパート『カッチョイーッ／の巻**』(1967年10月7日放映)
第1回Bパート『注射こわい／の巻**』(1967年10月7日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三[Aパート]、吉永由紀[Bパート]
■演出／笹川ひろし[Aパート]、原　征太郎[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／グズラ(大平　透)、凡　太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)、パ　パ(富山　敬)[Bパート]
■[声の出演][第2画面]／マ　マ(麻生みつ子)[Bパート]、笹ヤブ博士(和久井節緒)、[船員(B)](北村弘一)[Aパート]、[船　長](八奈見 乗児)[Aパート]
■原動画／久米順三、高橋資祐■美術デザイン／中村光毅■背景／朝日享子
■仕上／柴田　勝、河合祥子■特殊効果／石田康実■検査／金井秀夫
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、青木　隆
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／笹川ひろし■シノプシス[Bパート]／吉*永由記
■絵コンテ[Aパート]／笹川ひろし■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[ナレーター](富山　敬)
■声の出演[Bパート]／[飼育係(A)](北村弘一)、[飼育係(B)](八奈見乗児)

第2回Aパート『頭さきだど／の巻**』(1967年10月14日放映)
第2回Bパート『宇宙／カッコマン／の巻**』(1967年10月14日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鈴木良武[Aパート]、酒井　仁[Bパート]
■演出／西岡たかし[Aパート]、笹川ひろし[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／グズラ(大平　透)、凡太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)、パパ(富山　敬)
■[声の出演][第2画面]／マ　マ(麻生みつ子)、[進行係](八奈見乗児)[Aパート]、[ディレクター(A)](和久井節緒)[Aパート]、[エースマン](加藤　修)[Aパート]
■原動画／久米順三、木暮輝夫■美術デザイン／新井寅雄■背景／前　美智子
■仕上／柴田　勝、平井静子■特殊効果／朝沼清良■検査／氏田秀男
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、大館勝一
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／笹川ひろし
■声の出演[Bパート]／[ゲップ](八奈見乗児)、[客](加藤　修)、[医　者](和久井節緒)

第3回Aパート『ゴミクズラ／の巻**』(1967年10月21日放映)
第3回Bパート『金庫／ムシャムシャ／の巻**』(1967年10月21日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鈴木良武[Aパート]、山崎晴哉[Bパート]
■演出／鳥海永行[Aパート]、不二みねお[Bパート]
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／グズラ(大平　透)、凡太(東　美江)、スズ子(松尾佳子)、パパ(富山　敬)[Bパート]
■[声の出演][第2画面]／マ　マ(麻生みつ子)、頭　取(八奈見乗児)[Bパート]、学　者(和久井節緒)、こども(近藤高子)[Bパート]
■原動画／斎藤義一、田中　保■美術デザイン／中村光毅■背景／阿部由美子
■仕上／柴田　勝、河合祥子■特殊効果／石田康実■検査／金井秀夫
■撮影／池田仁男■編集／篠原　正■進行／永井昌嗣、大井正雄
〈資料より補足〉
■絵コンテ[Aパート]／木下連三■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[運転手](和久井節緒)、[学者(A)](八奈見乗児)、[学　者(B)](富山　敬)、[女学生(B)](近藤高子)
■声の出演[Bパート]／[ドロボー三人組　デ　ブ](和久井節緒)、[ドロボー三人組　チ　ビ](富山　敬)
(注記)タイトルカードでは「学者」役が「和久井節緒」だが、訂正AR台本では「八奈見乗児」「富山　敬」の2名となっており、くい違いが見られる。

第4回Aパート『サイティ／マウス／の巻*』(1967年10月28日放映)
第4回Bパート『怪獣／モゲラドン／の巻*』(1967年10月28日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／吉*永由記■シノプシス[Bパート]／酒井　仁
■脚本[Aパート]／村林信一■脚本[Bパート]／芹川有吾
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／芹川有吾■絵コンテ[Bパート]／芹川有吾
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[サイテイマウス](八奈見乗児)、[ネズミ(A)](増岡　弘)、[ネズミ(B)](近藤高子)、[ネズミ(C)](瀬里ナツル)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[ボン太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[モゲラ](増岡　弘)、[捕　手](近藤高子)、[コーチ](増岡　弘)、[少年C](瀬里ナツル)、[社　長](八奈見乗児)

第5回Aパート『サーカスの／スターだど／の巻**』(1967年11月4日放映)
第5回Bパート『おらぁ／番怪獣だど／の巻**』(1967年11月4日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Bパート]／笹川ひろし
■脚本[Aパート]／村林信一■脚本[Bパート]／鳥海尽三
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／笹川ひろし
■絵コンテ[Aパート]／林　純夫■絵コンテ(B)／笹川ひろし
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[笹ヤブ先生](和久井節緒)、[サーカスの支配人](八奈見乗児)、[子供A](麻生みつ子)、[子供B](松尾佳子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[押し売](八奈見乗児)、[調教師(B)](和久井節緒)

第6回Aパート『おばあちゃんと／グズラ／の巻**』(1967年11月11日放映)
第6回Bパート『くず鉄／レストラン／の巻**』(1967年11月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／伊東恒久■脚本[Bパート]／坂本雄作
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／鳥海永行
■絵コンテ[Aパート]／高*橋良輔■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)

第7回Aパート『怪獣／スイトン／の巻**』(1967年11月18日放映)
第7回Bパート『だだっ子／ペリガン／の巻**』(1967年11月18日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス[Aパート]／山崎晴哉
■脚本[Aパート]／山崎晴哉■脚本[Bパート]／陣野　修
■演出[Aパート]／西岡たかし■演出[Bパート]／原　征太郎
■絵コンテ[Aパート]／高*橋良輔■絵コンテ[Bパート]／木下連三
■声の出演[Aパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[マ　マ](麻生みつ子)、[怪獣スイトン](和久井節緒)、[給水車の男](北村弘一)、[アナウンサー(B)](八奈見乗児)
■声の出演[Bパート]／[グズラ](大平　透)、[凡　太](東　美江)、[スズ子](松尾佳子)、[パ　パ](富山　敬)、[その親(ペリガンの親)](麻生みつ子)、[ヒヨコ屋](八奈見乗児)、[乞　食](北村弘一)

第8回Aパート『ブル公／やっつけ作戦／の巻**』(1967年11月25日放映)
第8回Bパート『パパさん／泣くな／の巻**』(1967年11月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本[Aパート]／瀬間三枝子■脚本[Bパート]／山崎晴哉
■演出[Aパート]／笹川ひろし■演出[Bパート]／不二みね雄
■絵コンテ[Aパート]／西牧秀雄■絵コンテ[Bパート]／西牧秀雄

■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ターニャ](菅谷政子)、[ミサロ](愛川欽也)、[村人達・多勢](内海賢二)、[村人達・多勢](雨森雅司)、[村人達・多勢](北村弘一)、[村人達・多勢](矢田耕司)

第34話『第34話／暴走レコードカー＊』(1967年11月19日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[六郷警部](内海賢二)、[ハヤブサ・モータース社長](矢田耕司)、[横　島](愛川欽也)、[委員長](雨森雅司)、[調査員](北村弘一)

第35話『第35話／密林の怪戦車／(前篇)＊』(1967年11月26日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、草川　隆■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[ロバート博士](雨森雅司)、[グール](中村　正)、[その部下男(A)](愛川欽也)、[その部下男(B)](富山　敬)、[アナウンサー](矢田耕司)、[首　長](北村弘一)

第36話『第36話／密林の怪戦車／(后篇)＊』(1967年12月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、草川　隆■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[ロバート博士](雨森雅司)、[グール](中村　正)、[マッド博士](内海賢二)、[その部下男(A)](愛川欽也)、[その部下男(B)](富山　敬)

第37話『第37話／地獄の計算魔＊』(1967年12月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／不二峯夫
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ファーストバック博士](愛川欽也)、[デカ(刑事)](内海賢二)、[胴　元](北村弘一)、[紳士(A)](矢田耕司)

第38話『第38話／秘密情報部員Ｎｏ９／(前篇)＊』(1967年12月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[秘密情報部課長](富山　敬)、[秘密情報員８号](大宮悌二)、[秘密情報部課長秘書](来宮良子)、[秘密情報部暗殺隊長](内海賢二)、[チェッカー団団員(A)](雨森雅司)、[チェッカー団団員(C)](北村弘一)、[チェッカー団駐車係](矢田耕司)

313

第39話『第39話／秘密情報部員Ｎｏ９／(后篇)＊』(1967年12月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[秘密情報部課長](富山　敬)、[秘密情報部女秘書](来宮良子)、[副大統領ナルディ](雨森雅司)、[国務長官](大宮悌二)、[記者A](富山　敬)、[記者B](矢田耕司)、[自動車連盟会長](北村弘一)

第40話『第40話／恐怖の爆弾カー＊』(1967年12月31日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[ア　ヤ](来宮良子)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[六郷警部](内海賢二)、[古山博士](北村弘一)、[倉　田](富山　敬)、[秘密情報部の男](矢田耕司)

第41話『第41話／鉄のまぼろし城＊』(1968年1月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[六郷警部](内海賢二)、[城山博士](愛川欽也)、[その息子・達也](近藤高子)、[署長](雨森雅司)、[アベックの男](富山　敬)

第42話『第42話／パイナップル.レース＊』(1968年1月14日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[リ　オ](内海賢二)、[その妹エリカ](瀬里ナツル)、[テンダ](雨森雅司)、[その子分(A)](矢田耕司)、[その子分(B)](愛川欽也)

第43話『第43話／魔女ナンバー・０＊』(1968年1月21日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[魔女ナンバー・X](来宮良子)、[魔女ナンバー・7](堀　絢子)、[新聞記者(C)](内海賢二)、[サウディラ王女](瀬里ナツル)

第44話『第44話／殺人カー・Ｖ２号＊』(1968年1月28日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[カンナ](恵比寿まさ子)、[その父](富山　敬)、[王単面](勝田　久)、[首　領](北村弘一)、[その子分　男(A)](鈴木泰明)、[その子分　男(C)](雨森雅司)、[その子分　男(D)](矢田耕司)

第45話『第45話／カーレスラー・Ｘ＊』(1968年2月4日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](神山卓三)、[クリ夫](堀　絢子)、[サ　ブ](富山　敬)、[早　房](小林恭治)、[その妻](佐原妙子)、[その息子　タケシ](加藤みどり)、[ボ　ス](雨森雅司)、[監　督](北村弘一)、[子分(A)](内海賢二)、[自動車会社係員](矢田耕司)

第46話『第46話／オート、アパッチの襲撃＊』(1968年2月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[ジェロニモ](野島昭生)、[アパッチ　(A)](北村弘一)、[アパッチ　(B)](愛川欽也)、[アパッチ　(C)](矢田耕司)、[アパッチ　(D)](内海賢二)、[アパッチ(E)](富山　敬)、[謎の紳士](中村　正)

第47話『第47話／モンスター、カーの復活＊』(1968年2月18日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](神山卓三)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ダンカン](加藤精三)、[隊　長](内海賢二)、[本部長](愛川欽也)、[艦　長](北村弘一)、[警官A*](雨森雅司)、[幹部B*](矢田耕司)、[女の子](加藤みどり)

第48話『第48話／ポンコツカー・グランプリー＊』(1968年2月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／不二みねお
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[マ　ミ](武藤礼子)、[ケチン公](北村弘一)、[執　事](愛川欽也)、[ゴンザル](内海賢二)、[その子分　(A)](矢田耕司)、[孤児(A)](あぼくみこ)

第49話『第49話／決死の風船脱出＊』(1968年3月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](神山卓三)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[金　田](和久井節緒)、[木佐野](愛川欽也)、[谷　保](内海賢二)、[マ　リ](向井真理子)、[学　者](北村弘一)、[パイロットA](鈴木泰明)、[アナウンサーA](矢田耕司)

第50話『第50話／アクロバット族の逆襲＊』(1968年3月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](神山卓三)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[アクロバト族首長](北村弘一)、[太田黒](内海賢二)、[ナレーター](小林清志)
(注記)「アクロバト族」はＡＲ台本の表記ママ。

第51話『第52話／史上最大のレース／(前篇)＊』(1968年3月17日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](神山卓三)、[ア　ヤ](来宮良子)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ゼンダ氏](北村弘一)、[その娘ビアンカ](加藤みどり)、[じいや](八奈見乗児)、[シカゴ(兄)](雨森雅司)、[シカゴ(弟)](小林清志)、[プリンス](矢田耕司)、[記者(A)](愛川欽也)、[アクアラングの男](内海賢二)

第52話『第52話(最終回)／史上最大のレース／(後篇)＊』(1968年3月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／鳥海永行
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](神山卓三)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[ゼンダ氏](北村弘一)、[その娘ビアンカ](加藤みどり)、[じいや](八奈見乗児)、[シカゴ兄弟(兄)](雨森雅司)、[シカゴ兄弟(弟)](小林清志)、[プリンス](矢田耕司)、[ポップ](内海賢二)

子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ズール将軍](北村弘一)、[キムク](野沢那智)、[ジョウ大佐](小林清志)、[隊　長A](雨森雅司)、[隊　長B](依田英助)、[クンパ王子](朝戸正明)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、草川　隆」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第16話『第16話／インカ地底レース／(前篇)＊』(1967年7月16日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／津久井丈人■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[首　長](小林　修)、[シルナ](上田みゆき)、[ピサロ](家弓家正)、[サソリ](内海賢二)、[議　員B](矢田耕司)、[部　下B](北村弘一)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第17話『第17話／インカ地底レース／(后篇)＊』(1967年7月23日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／津久井丈人■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[首　長](小林　修)、[シルナ](上田みゆき)、[ピサロ](家弓家正)、[黒サソリ](内海賢二)、[司　祭](北村弘一)、[部下Ａ*](矢田耕司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第18話『第18話／ナイアガラの秘宝／(前篇)＊』(1967年7月30日放映)
〈資料より補足〉
■アイデア／久米みのる■脚本／久米みのる、広瀬　正■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[団　長](北村弘一)、[ヘレン](五月女道子)、[タイガー](加藤精三)、[警　官](矢田耕司)、[男　一](愛川欽也)、[男　三](雨森雅司)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第19話『第19話／ナイアガラの秘宝／(后篇)＊』(1967年8月6日放映)
〈資料より補足〉
■アイデア／久米みのる■脚本／広瀬　正、久米みのる■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[ヘレン](五月女道子)、[団　長](北村弘一)、[タイガー](加藤精三)、[男　(一)](矢田耕司)、[男　(二)](愛川欽也)、[男　(三)](雨森雅司)
(注記)脚本は、竜の子プロ保管のスタッフリストでは「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第20話『第20話／悪魔のレースカー／(前篇)＊』(1967年8月13日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／能　加平■演出／原　征太郎
■[声の出演][資料より]／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[サ　ブ](富山　敬)、[志村美智](野村道子)、[茂](竹尾智晴)、[花田ミツ子](来宮良子)、[富士見](矢田耕司)、[ジ　ム](愛川欽也)、[インド人](雨森雅司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、能　加平」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第21話『第21話／悪魔のレースカー／(后篇)＊』(1967年8月20日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／能　加平
■演出／原　征太郎
■[声の出演][資料より]／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[ア　ヤ](来宮良子)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[茂](竹尾智晴)、[富士見](矢田耕司)、[ジ　ム](愛川欽也)、[インド人](雨森雅司)、[アナウンサー](富山　敬)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、能　加平」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第22話『第22話／マッハ号危機一髪／(前篇)＊』(1967年8月27日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[六郷警部](内海賢二)、クーパー博士(寺島幹夫)、[ローラ](富田千代美)、[コブラ](金井　大)、[警備員　(A)](北村弘一)、[警備員　(B)](雨森雅司)、[テレビ・アナウンサー](矢田耕司)、[刑　事](愛川欽也)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第23話『第23話／マッハ号危機一髪／(后篇)＊』(1967年9月3日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[六郷警部](内海賢二)、[コブラ](金井　大)、クーパー博士(寺島幹夫)、[ローラ](富田千代美)、[コブラの部下(A)](愛川欽也)、[コブラの部下(B)](矢田耕司)、[警官(１)](北村弘一)、[警官(２)](雨森雅司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第24話『第24話／チビッ子グランプリ／(前篇)＊』(1967年9月10日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[ジャム国国王](北村弘一)、[悪人ガス](愛川欽也)、[悪人クラッチ](和久井節緒)、[悪人ブレーキ](加藤　修)、[悪大臣クロパン](雨森雅司)、[カレー屋の主人](内海賢二)、[親衛隊隊長](矢田耕司)、[アナウンサー](富山　敬)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、草川　隆」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第25話『第25話／チビッ子グランプリ／(后篇)＊』(1967年9月17日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／草川　隆■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[バリカーン国王](北村弘一)、[悪大臣クロパン](雨森雅司)、[悪人ガス](愛川欽也)、[悪人ブレーキ](和久井節緒)、[悪人クラッチ](加藤　修)、[コッペ王子](富山　敬)、[子供レーサー(A)](三浦利子)、[隊長](矢田耕司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、草川　隆」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第26話『第26話／スピードを消せ！＊』(1967年9月24日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[倉　田](寺島幹夫)、[その娘・サユリ[倉田の娘]](松尾佳子)、[与太者ワン](雨森雅司)、[与太者チャノ](愛川欽也)、[与太者ホイ](富山　敬)、[少年(A)](矢田耕司)

第27話『第27話／呪いのクレオパトラ／(前篇)＊』(1967年10月1日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[志村美智](野村道子)、[クリ夫](堀　絢子)、[スタンダード博士](北村弘一)、[その娘デラ](杉田郁子)、[カスタム](愛川欽也)、[銃で狙う男](矢田耕司)、[カスタムの部下・兵士(A)](雨森雅司)、[カスタムの部下・兵士(B)](富山　敬)、[剣斗士](内海賢二)

第28話『第28話／呪いのクレオパトラ／(后篇)＊』(1967年10月8日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／広瀬　正■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[デ　ラ](杉田郁子)、[カスタム](愛川欽也)、[その部下兵士(A)](内海賢二)、[その部下兵士(B)](北村弘一)、[その部下兵士(C)](富山　敬)、[その部下兵士(D)](矢田耕司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」、演出は「不二みね雄」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第29話『第29話／黄金の腕＊』(1967年10月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[ア　ヤ](来宮良子)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[鷹村　拳](羽佐間道夫)、[ジャック自動車の社長](内海賢二)、[その子分 男(A)](愛川欽也)、[その子分 男 B](雨森雅司)、[レース場審判員](矢田耕司)

第30話『第30話／ダムサイトの対決＊』(1967年10月22日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鈴木良武■脚本／鳥海尽三■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[大　介](大宮悌二)、[クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[リ　カ](桂　玲子)、[溝　川](小林恭治)、[横　車](愛川欽也)、[その手下子分(１)](雨森雅司)、[その手下子分(２)](富山　敬)、[六郷警部](内海賢二)、[警察司令部アナ](北村弘一)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第31話『第31話／疾風！忍者カー／(前篇)＊』(1967年10月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[黒メガネの男](雨森雅司)、[忍者(B)](矢田耕司)、[警官(A)](北村弘一)、[ジャリ大統領](内海賢二)

第32話『第32話／疾風忍者カー／(后篇)＊』(1967年11月5日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／西岡たかし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[暗殺団の首領](内海賢二)、[黒メガネの男](雨森雅司)、[忍者　(A)](富山　敬)、[忍者　(B)](矢田耕司)、[各国大臣(A)](北村弘一)、[子供(A)](近藤高子)

第33話『第33話／嵐の決闘＊』(1967年11月12日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし

マッハGoGoGo

1967年４月２日～1967年６月25日(第１～13話)　毎週日曜19時～19時30分
1967年７月２日～1968年３月31日(第14～52話)　毎週日曜18時30分～19時
フジテレビ系／30分カラー・全52話

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは、タイトルカードによって表示が行われていた。そのため、本リストでは、カードが現存する話数(第２話)のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の訂正ＡＲ台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料(ＡＲ台本、スタッフリストなど)から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。また、２種以上の文字資料の間で、スタッフ、キャストの記載内容に差異が認められる場合、あるいはクレジット内容に明らかな誤記が認められる場合は、(注記)という但し書きをつけた上で、その内容を記した。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■原作／吉田竜夫〈少年ブック連載〉
■音楽／越部信義、音楽企画センター
■主題歌　作詞／吉田竜夫　補作／伊藤アキラ　作曲／越部信義
■プロデューサー／吉田健二■担当／六郷晃生、木村　実
■制作／◇タツノコ プロ
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■現像／東洋現像所
■効果／森　健二、大野義信■録音ディレクター／石田忠賢、内間　　稔[後者は小さく表示]
■録音／読広スタジオ、平野　勝[後者は小さく表示]
■制作／◇タツノコ プロ■協力／フジテレビ、八百板　勉
(注記)ＡＲ台本では、第14話分から「主題歌」としてオープニングの歌詞が掲載される。第22話分からは、さらに「第二主題歌」として「たまにゃのどかに」の歌詞が追加されるが、同曲が途中から番組のエンディングとして使用されたかどうかは不詳である。というのは、「第二主題歌」という見出しの直後に「〈マッハ〉のサブ・テーマが、コロンビアレコードから発売されます。」という但し書きも印刷されているからである。シングル・レコードのＢ面曲を紹介する目的で、ＡＲ台本に歌詞が掲載されただけ、という可能性も残るのだ。ちなみに、第22話のアフレコ日は、台本内のスケジュール表への書き込みによれば６月６日。エンディングが変更されたとすれば、その境界は６～７月頃と類推される。
　第50～52話のＡＲ台本には、「録音スタッフ」という見出しとともに、シリーズ末期の音響関係者の人名が印刷されている。内容は以下の通り。
■録音ディレクター／石田桂資、本田保則
■効果／森　健二、大野義信
■録音／平野　勝、棚岡　元、日沼　勲
■音楽進行／中村勝彦、音楽企画センター
■演技進行／吉*原綾子、柳川昌子
■プロデューサー／吉*田健二
■担当／六郷晃生、木村　実、――――、八百板　勉(フジテレビ)

第１話『第１話／飛ばせ！／マッハ号／(前篇)＊』(1967年4月2日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平◆絵コンテ／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](松尾佳子)、[サ　ブ](富山　敬)、[坂井元三](矢田耕司)、[鬼　村](内海賢二)、[ブラック](小林清志)、[社　長](北村弘一)、[オトキチ鉄](愛川欽也)、[オトキチＣ](雨森雅司)
(注記)ＡＲ台本の表紙では、九里一平は「動画演出」という役職名で記載されている。

第２話『第２話／飛ばせ！／マッハ号／(后篇)＊』(1967年4月9日放映)
〈オープニングクレジット〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
〈エンディングクレジット〉
■きょうの 声の出演[第１画面]／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)
■[きょうの声の出演][第２画面]／[坂井元三](矢田耕司)、[その子分Ａ*](富山　敬)、[その子分Ｂ*](雨森雅司)、[ブラック](小林清志)
■作画監督／九里一平■原動画／原　征太郎、西岡たかし
■美術デザイン／中村光毅■背景／山口あきら、平沢繁太郎
■色彩設定／向井　稔■仕上／柴田　勝、金井秀雄、平井静子■特殊効果／石田康実
■検査／東海林　武■撮影／松下勝臣、緒方範生■編集／篠原　正
■進行／前里元義、永井昌嗣、大館勝一
(注記)ＡＲ台本では、田中雪弥は「田中庸元」名義で記載されている。

第３話『第３話／謎の覆面レーサー／(前篇)＊』(1967年4月16日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／九里一平■絵コンテ／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[坂井元三](矢田耕司)、[覆面レーサー](愛川欽也)

第４話『第４話／謎の覆面レーサー／(后篇)＊』(1967年4月23日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／笹川ひろし■絵コンテ／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[サ　ブ](富山　敬)、[坂井元三](矢田耕司)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[大田黒](内海賢二)、[アルファチームのマネージャー](北村弘一)、[男　(一)](雨森雅司)

第５話『第５話／クラシックカーの秘密／(前篇)＊』(1967年4月30日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[サ　ブ](富山　敬)、[黒沢老人](永井一郎)、[ミチル](向井真理子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[鬼河原](杉田俊也)、[笠原教官](北村弘一)、[訓練生](富山　敬)、[客　(三)](矢田耕司)

第６話『第６話／クラシックカーの秘密／(后篇)＊』(1967年5月7日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[黒沢老人](永井一郎)、[ミチル](向井真理子)、[大郷警部](内海賢二)、[鬼河原](杉田俊也)、[覆面レーサー](愛川欽也)

第７話『第７話／マンモスカーの挑戦／(前篇)＊』(1967年5月14日放映)
〈資料より補足〉
■アイデア／久米みのる■脚本／久米みのる、津久井丈人■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[大郷警部](内海賢二)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　隆」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第８話『第８話／マンモスカーの挑戦／(后篇)＊』(1967年5月21日放映)
〈資料より補足〉
■アイデア／久米みのる■脚本／久米みのる、津久井丈人■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[大郷警部](内海賢二)、[ゲルト](小林清志)、[マンモスカーの運転手Ａ](雨森雅司)、[アナウンサー](矢田耕司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、鈴木良武」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第９話『第９話／魔のアクロバット族／(前篇)＊』(1967年5月28日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](杉田郁子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[アナウンサー](矢田耕司)

第10話『魔のアクロバット族／(中篇)＊』(1967年6月4日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシス／鳥海尽三■脚本／広瀬　正■演出／九里一平
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船アヤ](来宮良子)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第11話『魔のアクロバット族／(后篇)＊』(1967年6月11日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[サ　ブ](富山　敬)、[覆面レーサー](愛川欽也)、[首　長](北村弘一)、[スネーク](朝戸正明)、コブラ(内海賢二)

第12話『マレンゴの復讐／(前篇)＊』(1967年6月18日放映)
〈資料より補足〉
■シノプシカ／鳥海尽三■脚本／広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[大郷警部](内海賢二)、[アナウンサー](矢田耕司)
(注記)竜の子プロ保管のスタッフリストでは、脚本は「鳥海尽三、広瀬　正」と記載。上記のデータは、ＡＲ台本表紙のスタッフ名に準拠したもの。

第13話『マレンゴの復讐／(后篇)＊』(1967年6月25日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、広瀬　正■演出／原　征太郎
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船大介](大宮悌二)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[大郷警部](内海賢二)、[山中技師](北村弘一)、[山中四郎](近石真介)、[山中ユリ](上田みゆき)、[男　　Ａ*](愛川欽也)、[スピーカー](矢田耕司)

第14話『第14話／死の砂漠レース／(前篇)＊』(1967年7月2日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三、草川　隆■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中雪弥)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道子)、[サ　ブ](富山　敬)、[キムク](野沢那智)、[隊　長](雨森雅司)、[黒メガネの男](小林清志)、[兵　士](北村弘一)、[スチュワデス](麻生みつ子)

第15話『第15話／死の砂漠レース／(后篇)＊』(1967年7月9日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／鳥海尽三■演出／笹川ひろし
■声の出演／[三船　剛](田中庸元)、[三船クリ夫](堀　絢子)、[志村美智](野村道

■脚本／鳥海尽三、イデア工房■演出／九里一平

第42話『第42話／指令・R-001号＊』(1966年2月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[チ　ビ](矢田耕司)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女ボス](来宮良子)、[子分Ａ](大山　豊)、[子分Ｂ](谷津　勲)、[ローラ](浅川みゆ起)、[デ　ブ](雨森雅司)、[ノッポ](北村弘一)、[アトラス工場・社長](藤岡琢*也)
■脚本／鳥海尽三、イデア工房■演出／九里一平、西田　淳

第43話『第43話／地球危機一髪＊』(1966年2月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[イ　ボ](内海賢二)
■[声の出演[第２画面]／[長　官](雨森雅司)、[指揮官](大山　豊)、[議　長](谷津　勲)、[パチンコ博士](矢田耕司)、、[アルファ博士](北村弘一)
■脚本／広瀬　正、イデア工房■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎

第44話『第44話／失なわれた99時間』(1966年3月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)
〈資料より補足〉
■声の出演／[木の実博士](藤岡琢*也)、[くるみ](杉田郁子)、[オリオン星人](内海賢二)、[男](雨森雅司)、[ロボット](北村弘一)
■脚本／笹川ひろし■演出／笹川ひろし

第45話『第45話／応答せよ,第３惑星＊』(1966年3月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[マック](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[モンゴリー博士](大山　豊)
〈資料より補足〉
■声の出演／[女ボス](来宮良子)、[ギャラクターの子分　(Ａ)](北村弘一)、[ギャラクターの子分　(Ｂ)](雨森雅司)、[ギャラクターの子分　(Ｃ)](藤岡琢*也)、[ギャラクターの子分　(Ｄ)](矢田耕司)、[ギャラクターの子分　(Ｅ)](谷津　勲)
■脚本／草川　隆、イデア工房■演出／朝日プロ

第46話『第46話／ギャラクターの逆襲』(1966年3月19日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[女ボス](来宮良子)、[議　長](藤岡琢*也)、[科学者Ａ](谷津　勲)、[科学者Ｂ](雨森雅司)、[科学者Ｄ](大山　豊)、[ウレシガル代表](矢田耕司)、[子分Ａ](北村弘一)
■脚本／草川　隆、イデア工房■演出／朝日プロ

第47話『第47話／土星脱走計画』(1966年3月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[ロッキイ](谷津　勲)
〈資料より補足〉
■声の出演／[リリイ](杉田郁子)、[ノッポ](北村弘一)、[チ　ビ](矢田耕司)、[デブ](雨森雅司)、[アルカッポレ](藤岡琢*也)、[隊　長](大山　豊)
■脚本／鳥海尽三、イデア工房■演出／笹川ひろし、山谷光和

第48話『第48話／宇宙の密使』(1966年4月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[通信ロボット](矢田耕司)
〈資料より補足〉
■声の出演／[ニセの アサリ](坂井すみ江)、[ビッツェ長官](藤岡琢*也)、[長　官](雨森雅司)、[オリオン星人　(Ａ)](大山　豊)、[オリオン星人　(Ｂ)](谷津　勲)、[ナレーター](北村弘一)
■脚本／津久井丈人、イデア工房■演出／原　征太郎、山谷光和

第49話『第49話／テレキネシス星人』(1966年4月7日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[ピクルス](北村弘一)、[エッグ](麻生みつ子)、[父　親](雨森雅司)、[給仕ロボット](矢田耕司)
■脚本／陶山　智、イデア工房■演出／笹川ひろし、朝日プロ

第50話『第50話／魔の宇宙要塞＊』(1966年4月14日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[グラム博士](藤岡琢*也)、[長　官](雨森雅司)、[オリオン星人　Ｂ](谷津　勲)、[オリオン星人　Ｃ](矢田耕司)、[スモール星人](英保久美子)
■脚本／草川　隆、イデア工房■演出／九里一平、茨木啓一

第51話『第51話／サイボーグ艦隊＊』(1966年4月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[イ　ボ](内海賢二)
〈資料より補足〉
■声の出演／[大統領](谷津　勲)、[ゴネール](藤岡琢*也)、[管制官Ａ](北村弘一)、[通信ロボット](矢田耕司)、[キングエース](大山　豊)、[司令官](雨森雅司)
■脚本／広瀬　正、イデア工房■演出／原　征太郎、山谷光和

第52話『第52話／一最終回一／大宇宙戦』(1966年4月28日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[キングエース](大山　豊)、[ゴールド星大統領](谷津　勲)、[ゴールド星 司令官](雨森雅司)、[ゴネール将軍](藤岡琢*也)、[オリオン星人のボス](内海賢二)、[操縦ロボット](矢田耕司)、[ナレーター](北村弘一)
■脚本／草川　隆、イデア工房■演出／原　征太郎、山谷光和

(『風船少女テンプルちゃん』P.211より続き)
■背景／スタジオ ビック■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／新井正彦
〈資料より補足〉
■声の出演／[百姓の女](加川三起)、[仔犬](麻上洋子)、[テンプルのパパ](仲木隆司)、[テンプルのママ](友近恵子)

第16話『泣きむし／ロザンナ』(1978年1月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／滝　三朗■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画／木下ゆうき、長谷川憲生、本多　哲、平山則雄、福山政敏
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[ロザンナ](麻上洋子)、[ロザンナの母](松島みのり)、[ロザンナの父](田中 勝)、[テンプルのママ](友近恵子)、[街の人達](稲葉 実)

第17話『ジプシーの／うらない』(1978年1月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／寺島アキ子■演出／奥田誠治、上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／西城隆詞■作画／池谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、南部あき子
■背景／今村立男、ムツゴロウ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[カルロス](千々松幸子)、[ジュゼッペ爺さん](宮内幸平)、[エリザベータ](峰 あつ子)、[父](仲木隆司)、[母](友近恵子)

第18話『さくら貝の／少女』(1978年1月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／佐久　正■演出／大貫信夫、上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／大貫信夫■作画／中島京子、牧田由美、北條昌子、小国千代子、明石典子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／松本堯一
〈資料より補足〉
■声の出演／[アンナ](潘 恵子)、[ジュリアン](山路和弘)、[ゴンザレス](雨森雅司)

第19話『天使像の／渡り鳥』(1978年2月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／竹内　進■演出／西久保瑞穂
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／西城隆詞■作画／池谷安夫、山崎　茂、渋谷保徳、南部あき子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメフレンド■編集／戸田禮子、三木幸子■進行／新井正彦
〈資料より補足〉
■声の出演／[ベン爺さん](宮内幸平)、[マルチロ町長](宮川洋一)、[役吏達](田中勝)

第20話『空とぶ／人間』(1978年2月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／三宅直子■演出／上梨満雄
■声の出演[第１画面]／テンプル ちゃん(滝沢久美子)、タムタム(つかせのりこ)
■声の出演[第２画面]／ドーラ(緒方賢一)、ガッペ(肝付兼太)、チッピー(矢野洋子)、フワット(久松夕子)、ナレーター(谷　育子)
■作画監督／大貫信夫■作画／中島京子、牧田由美、北條昌子、小国千代子、明石典子
■背景／アップルズ■仕上／内田千代子、井上文子、杉崎容子、戸田真理子
■撮影／アニメ フレンド■編集／戸田禮*子、三木幸子■進行／高野和雄
(P.306へ続く)

■脚本／鳥海尽三、草川　隆■演出／西田　淳、竜の子プロ演出部
■作画監督／吉田竜夫
■原・動画／青木　茂、水村十司、野島　進、菊地政明、渡辺くにを
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／半藤美術研究所
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第28話『第28話／銀河系大会議』(1965年11月13日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[キングエース](大山　豊)
■[声の出演][第２画面]／[ロボット](矢田耕司)、[ゴールド星人](谷津　勲)、[ドテピン星人](雨森雅司)、[宇宙人　A星人](北村弘一)、、[宇宙人　B星人](藤岡琢*也)
■脚本／鳥海尽三、草川　隆■演出／笹川ひろし■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、平山則雄
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／東海林　武■撮影／ネズ・プロ

第29話『第29話／78番星作戦』(1965年11月20日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[イ　ボ](内海賢二)
■[声の出演][第２画面]／[ピ　ム](北村弘一)、[ランサー](谷津　勲)、[ダ　ラ](藤岡琢*也)、[隊　長](雨森雅司)、、[衛　兵](矢田耕司)
■脚本／津久井丈人、九里一平■演出／山谷光和■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、泉口　薫
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ

第30話『第30話／まぼろしの潜入者』(1965年11月27日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[イ　ボ](内海賢二)、[ランサー](谷津　勲)、[ダ　ラ](藤岡琢*也)
■[声の出演][第２画面]／[黒の男](雨森雅司)、[ラ　リ](杉田郁子)、[バ　グ](北村弘一)、[ロ　ー](矢田耕司)、、[キングエース](大山　豊)
■脚本／能　加平■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、吉田せい子
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

317 第31話『第31話／エコー・ロボット』(1965年12月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[皇　帝](雨森雅司)
■[声の出演][第２画面]／[ギット副官](北村弘一)、[司令官ボス](谷津　勲)、[高官A](大山　豊)、[高官B](矢田耕司)、[トップ少年](森川久美子)、[豆ロボット](北川麻理)
■脚本／久米みのる■演出／竜の子プロ演出部■作画監督／吉田竜夫
■原・動画／青木　茂、水村十司、野島　進、菊地政明、渡辺くにを
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／半藤美術研究所
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／東海林武■撮影／ネズ・プロ

第32話『第32話／宇宙最大の悪魔／(前篇)』(1965年12月11日放映)
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[操縦ロボット](矢田耕司)、[ボス](内海賢二)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／鳥海尽三、イデア工房■演出／笹川　浩■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、磯部新一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／半藤美術研究所
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ

第33話『第33話／宇宙最大の悪魔／(後篇)』(1965年12月18日放映)
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、(愛川欽也)
■脚本／津久井丈人、イデア工房■演出／笹川ひろし■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、樋*口雅一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ
〈資料より補足〉
■声の出演／[アサリ](向井真理子)、[イ　ボ](内海賢二)、[操縦ロボット](矢田耕司)、[オリオン星人](大山　豊)、[オリオン星兵](谷津　勲)、[ナレーター](藤岡琢*也)

第34話『第34話／まぼろしの地球』(1965年12月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[イ　ボ](内海賢二)
■[声の出演][第２画面]／[手下A](雨森雅司)、[手下B](大山　豊)、[手下C](谷津　勲)、[操縦ロボット](矢田耕司)、、[スピーカーの声](北村弘一)
■脚本／広瀬　正、イデア工房■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、森　利夫
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ

第35話『第35話／わんぱく革命』(1966年1月1日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[案内ロボット](谷津　勲)
■[声の出演][第２画面]／[パチンコ博士](矢田耕司)、[子　分](北村弘一)、[ダンプ](雨森雅司)、[守　衛](大山　豊)、[レフト](山本圭子)、[ム　シ](麻生みつ子)、[チ　ビ](北川麻理)
■脚本／草川　隆、イデア工房■演出／笹川ひろし■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、吉田せい子
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／東海林　武■撮影／ネズ・プロ

第36話『第36話／太陽一周レース／(前篇)』(1966年1月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[パチンコ博士](矢田耕司)
■[声の出演][第２画面]／[マッハ星人(A)](北村弘一)、[マッハ星人(B)](雨森雅司)、[議　長](谷津　勲)、[審査員](大山　豊)、[レフト](山本圭子)、[フラッシュ](風祭修一)
■脚本／鳥海尽三、イデア工房■演出／竜の子プロ演出部、山谷光和
■作画監督／九里一平
■原・動画／青木　茂、水村十司、野島　進、菊地政明、渡辺くにを
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／半藤美術研究所
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ
〈資料より補足〉
■シノプシス／久米みのる

第37話『第37話／太陽一周レース／(後篇)』(1966年1月15日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[パチンコ博士](矢田耕司)
■[声の出演][第２画面]／[マッハ星人(A)](北村弘一)、[マッハ星人(B)](雨森雅司)、[フラッシュ](谷津　勲)、[スパイロボット](大山　豊)、[レフト](山本圭子)、[ナレーター](風祭修一)
■脚本／久米みのる、イデア工房■演出／竜の子プロ演出部、山谷光和
■作画監督／九里一平
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　詔之
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第38話『第38話／狂った総統』(1966年1月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[総統](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[イ　ボ](内海賢二)
■[声の出演][第２画面]／[科学者　A](北村弘一)、[科学者　C](雨森雅司)、[科学者　D](大山　豊)、[ナレーター](矢田耕司)、[王女](杉田郁子)
■脚本／天馬正人、竜の子プロ 出版部■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、磯部新一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／篠原　正■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ
〈資料より補足〉
■声の出演／[科学者　B](谷津　勲)■シノプシス／吉田竜夫

第39話『第39話／宇宙幽霊船』(1966年1月29日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)
■[声の出演][第２画面]／[イ　ボ](内海賢二)、[パチンコ博士](矢田耕司)、[ダンプ](雨森雅司)、[宇宙人](北村弘一)、[レフト](山本圭子)、[チ　ビ](麻生みつ子)
■脚本、演出／笹川ひろし■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、樋*口雅一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ

第40話『第40話／火星Ｓ・Ｏ・Ｓ』(1966年2月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■脚本／広瀬　正、イデア工房■演出／山内六生、竜の子プロ演出部
■原・動画／青木　茂、水村十司、野島　進、菊地政明、渡辺くにを
■仕上／今井紀子、村上ひろみ
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[ベリー](矢田耕司)、[本部長](雨森雅司)、[ブラッド](谷津　勲)、[女ボス](来宮良子)、[ナレーター](北村弘一)

第41話『第41話／タイムマシン作戦＊』(1966年2月12日放映)
〈資料より補足〉
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[オリオン星人 隊長](雨森雅司)、[オリオン星人 A](北村弘一)、[オリオン星人 B](大山　豊)、[オリオン星人 C](矢田耕司)、[サムライ](藤岡琢*也)、[コワッパ](大山　豊)、[サーリ](坂井すみ江)、[サーリの父](谷津　勲)

第13話『第13話／見えない怪星』(1965年7月31日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、(愛川欽也)、(内海賢二)、[パチンコ博士](加茂嘉久)
■声の出演[第２画面]／[モンゴメリー博士](大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕司)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(藤岡琢*也)
■脚本、演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、泉口　薫
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／四本兼昭■撮影／ネズ・プロ
〈資料より補足〉
■シノプシス／久米みのる

第14話『第14話／人魚の歌』(1965年8月7日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イボ犬](内海賢二)、(雨森雅司)
■声の出演[第２画面]／(藤岡琢*也)、(北村弘一)、(大山　豊)、(森　千永子)、(北川麻里)
■脚本／能　加平■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、磯部新一、藤城義一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／工藤　順■撮影／ネズ・プロ

第15話『第15話／にせものエース』(1965年8月14日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、(加茂嘉久)、[イボ犬](内海賢二)
■声の出演[第２画面]／(北村弘一)、(雨森雅司)、(谷津　勲)、(矢田耕介)、(大山　豊)、(山本圭子)
■脚本／広瀬　正■演出／笹川　浩、山内六生■作画監督／笹川　浩
■原画／青木　茂■動画／野島　進、田中英二、————、アニメ・プロ
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／東海林　武■撮影／ネズ・プロ

第16話『第16話／斗争好きの宇宙人』(1965年8月21日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イボ犬](内海賢二)、[モンゴリ博士](大山　豊)
■声の出演[第２画面]／(北村弘一)、(雨森雅司)、(加茂嘉久)、(矢田耕介)、(谷津　勲)、(風祭修一)
■脚本／広瀬　正■演出／吉田竜夫■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、磯部新一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第17話『第17話／プラチナ光線』(1965年8月28日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[科学者　D](愛川欽也)、[本部長](内海賢二)、[科学者　E](大山　豊)
■声の出演[第２画面]／[科学者　C](北村弘一)、(雨森雅司)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[科学者　B](矢田耕介)、[科学者　A](谷津　勲)、[ナレーター](風祭修一)
■脚本／小隅　黎、鳥海尽三■演出／吉田竜夫■作画監督／吉田竜夫
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、平山則雄
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／東海林　武■撮影／ネズ・プロ
(注記)テロップカードには演出が「吉田竜夫」と記載されているが、実際の演出は笹川ひろし(笹川　浩)によるもの。おそらくクレジットの表示ミスと思われる。

第18話『第18話／四次元の抜け穴』(1965年9月4日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イボ犬](内海賢二)、[パチンコ博士](加茂嘉久)
■声の出演[第２画面]／(谷津　勲)、(北村弘一)、(大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕介)、(麻生 みつ子)、(北川麻里)
■脚本／小隅　黎、鳥海尽三■演出／吉田竜夫■作画監督／吉田竜夫
■原画／青木　茂■動画／野島　進、————、アニメ・プロ
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／工藤　順■撮影／ネズ・プロ

第19話『第19話／魚人境』(1965年9月11日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、(愛川欽也)、(加茂嘉久)、(内海賢二)
■声の出演[第２画面]／(大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕司)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(藤岡琢*也)
■脚本／寺島　久、鳥海尽三■演出／笹川　浩■監修／笹川　浩
■原・動画、背景／テレビ動画
■編集／工藤義彦■進行／四本兼昭■撮影／ネズ・プロ

第20話『第20話／冬眠人間』(1965年9月18日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[イボ犬](内海賢二)
■声の出演[第２画面]／[モンゴリー博士](大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕司)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(藤岡琢*也)
■脚本／広瀬　正■演出／笹川　浩、山内六生■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／工藤　順■撮影／ネズ・プロ

第21話『第21話／摩天楼少年＊』(1965年9月25日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イボ犬](内海賢二)、[パチンコ博士](加茂嘉久)
■声の出演[第２画面]／(雨森雅司)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(大山　豊)、(矢田耕介)、(麻生 みつ子)
■脚本／能　加平■演出／笹川　浩■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／東海林武■撮影／ネズ・プロ

第22話『第22話／怪獣ギラー』(1965年10月2日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、、[艦　長](北村弘一)
■声の出演[第２画面]／[学者　A](谷津　勲)、[学者　B](大山　豊)、[学者　C](矢田耕介)、[係　員](内海賢二)、[操舵係](藤岡琢*也)
■脚本／津久井丈人■演出／九里一平■監修／吉田竜夫
■原・動画、背景／テレビ動画■編集／工藤義彦■進行／四本兼昭■撮影／ネズ・プロ

第23話『第23話／ギャラクターの挑戦』(1965年10月9日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ニッキ](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[スチーブ](大山　豊)
■声の出演[第２画面]／[子分Ａ](谷津　勲)、[子分Ｂ](北村弘一)、[守衛Ｂ](矢田耕司)、[科学カーの運転手](雨森雅司)、[ター坊](山本圭子)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／広瀬　正■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、吉田せい子
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第24話『第24話／月世界の対決』(1965年10月16日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ニッキ](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[スチーブ](大山　豊)
■声の出演[第２画面]／(谷津　勲)、(北村弘一)、(矢田耕司)、(雨森雅司)、[ター坊](山本圭子)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／広瀬　正■演出／九里一平■作画監督／原　征太郎
■原・動画／西岡たかし、奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、藤城義一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／東海林　武■撮影／ネズ・プロ

第25話『第25話／シー・ホース号発進』(1965年10月23日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、(谷津　勲)
■声の出演[第２画面]／(北村弘一)、(大山　豊)、(矢田耕司)、(雨森雅司)、、(藤岡琢*也)
■脚本／能　加平■演出／山内六生、竜の子プロ演出部■作画監督／吉田竜夫
■原画／青木　茂■動画／野島　進、渡辺くにを、————、アニメ・プロ
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／半藤美術研究所
■編集／工藤欣之、沢村公子■進行／工藤　順■撮影／ネズ・プロ

第26話『第26話／X—13号ステーション』(1965年10月30日放映)
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、(谷津　勲)
■声の出演[第２画面]／[ブランデー博士](北村弘一)、(大山　豊)、(矢田耕司)、(雨森雅司)、、(山本圭子)
■脚本／天馬正人■演出／笹川　浩■作画監督／原　征太郎
■原画／西岡たかし■動画／奥田竜緒、窪　詔之、坪田力蔵、磯部新一
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅
■編集／工藤欣之、篠原　正■進行／藤田　宏■撮影／ネズ・プロ

第27話『第27話／なぐりこみエース』(1965年11月6日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第１画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[イ　ボ](内海賢二)、[パールム星人](雨森雅司)
■声の出演[第２画面]／[ロボット](矢田耕司)、[オリオン星人Ａ](北村弘一)、[オリオン星人Ｂ](谷津　勲)、[オリオン星人Ｃ](大山　豊)、、[火星人](藤岡琢*也)

宇宙エース

1965年5月8日〜1966年4月2日(第1〜48話)　毎週土曜18時15分〜18時45分
1966年4月7日〜1966年4月28日(第49〜52話)　毎週木曜19時〜19時30分
フジテレビ系／30分モノクロ・全52話

(データソース)本作のオープニング、エンディングクレジットは、タイトルカードによって表示が行われていた。そのため、本リストでは、カードが現存する話数のみ、そのクレジット内容を記載。[]囲みの配役名は、竜の子プロ保存の修正AR台本より補ったもの。そのほか、竜の子プロ社内の文字資料から判明したスタッフ、キャストデータは、〈資料より補足〉という但し書きをつけた上で、随時補記してある。

〈共通スタッフ(オープニングクレジット)〉
■原作／吉田竜夫〈少年ブック連載〉
■制作／竜の子プロダクション、読売広告社
〈共通スタッフ(エンディングクレジット)〉
■主題歌　作詞／やなせ・たかし　作曲／いずみ・たく
歌／みすず児童合唱団、東京混声合唱団(朝日ソノラマ)
■SF考証[第27話〜]／宇宙塵同人
■キャラクター・デザイン／九里一平[1〜20、22話]、吉田竜夫[21、23〜52話]
＊8〜14話は「キャラクター デザイン」、15〜20、22話は「キャラクターデザイン」表記]
■プロデューサー／吉田健二、六郷晃生
■現像／キヌタ・ラボラトリー[1〜21話]、東映化学工業[22〜52話]
■音楽／小森昭宏(音楽企画センター)
■効果／森　健二、大野義信■録音／朝日録音
■制作／◇竜の子プロダクション、読売広告社■協力／フジテレビ
■担当／平野　保[前期]、石田忠賢[後期]、木村　実／別所孝治
(注記)オープニングの「原作」に関しては、「吉田竜夫　〈少年ブック〉連載」と表記されたテロップカードも現存。同様にエンディングの「主題歌」に関しても、「作詞／やなせ・たかし　作曲／いずみ・たく」とのみ表記されたカードが現存しているが、どちらも使用された話数範囲は不詳。また、エンディングの「担当」における「平野　保」から「石田忠賢」への交替話数も不詳。現存カードの裏に記載された話数メモから、少なくとも第11話以降であると推測される。

第1話『第1話／宇宙エース誕生＊』(1965年5月8日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[隊員(A)](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／[エースの父親](大山　豊)、[科学者(A)](雨森雅司)、[科学者(B)](矢田耕介)、[科学者(C)](北村弘一)、[科学者(D)](谷津　勲)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本・演出／笹川　浩■作画監督／木下敏治
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら
■編集／工藤義彦■進行／東海林武■撮影／阿佐谷スタジオ

第2話『第2話／復讐ロボット＊』(1965年5月15日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／笹川　浩■演出／笹川　浩

第3話『第3話／地球追放＊』(1965年5月22日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[宇宙基地隊長](内海賢二)
■脚本／丸山健二■演出・作画監督／木下敏治
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／東海林武■撮影／ネズ・プロ
〈資料より補足〉
■声の出演／[ザリガニ警部](今西正男)、[守　衛](大山　豊)、[戦車隊長](矢田耕介)、[科学者A](北村弘一)、[科学者B](雨森雅司)、[通信員](谷津　勲)

第4話『第4話／蟻人王国＊』(1965年5月29日放映)
〈資料より補足〉
■脚本／笹川　浩■演出／笹川　浩
■声の出演／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[案内ロボット](矢田耕介)、[M国科学長官](北村弘一)、[M国　係　員](谷津　勲)、[M国　科学者](大山　豊)、[スパイA](雨森雅司)、[スパイ　B](加茂嘉久)、[ニューマンの王](内海賢二)、[ニューマンの王子](英保久美子)、[ナレーター](藤岡琢*也)

第5話『第5話／勇者の復活＊』(1965年6月5日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[宇宙人隊長](加茂嘉久)、[本屋の主人](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／[ジンギス汗](大山　豊)、[ジンギス汗の子分A](雨森雅司)、[宇宙人隊員](矢田耕介)、[宇宙防衛隊 隊員A](北村弘一)、[宇宙防衛隊　隊　長](谷津　勲)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／丸山健二■演出／木下敏治■作画監督／笹川　浩
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら
■編集／工藤義彦■進行／東海林　武■撮影／阿佐谷スタジオ

第6話『第6話／太陽マグネ／(前篇)』(1965年6月12日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、(加茂嘉久)、[こうのとり〈父〉](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／(大山　豊)、[マグネ博士](雨森雅司)、(矢田耕司)、[コーワス博士](北村弘一)、(谷津　勲)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／天馬正人■演出／笹川　浩■作画監督／木下敏治
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／東海林武■撮影／阿佐谷スタジオ

第7話『第7話／太陽マグネ／(後篇)＊』(1965年6月19日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、(加茂嘉久)、(内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／(大山　豊)、[マグネ博士](雨森雅司)、(矢田耕司)、[コーワス博士](北村弘一)、(谷津　勲)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／天馬正人■演出／笹川　浩■作画監督／木下敏治
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら
■編集／工藤義彦■進行／東海林　武■撮影／阿佐谷スタジオ

第8話『第8話／光る湖城』(1965年6月26日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、(愛川欽也)、(加茂嘉久)、(内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／(大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕介)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(杉田郁子)、(藤岡琢*也)
■脚本／九里一平■演出／九里一平■作画監督／木下敏治
■原画・動画／青木　茂、野島　進、田中英二／アニメ・プロ
■仕上／今井紀子■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第9話『第9話／原始巨人現わる』(1965年7月3日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[パチンコ助手](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／[警視総監](大山　豊)、[客　A](雨森雅司)、[アナウンサーB](矢田耕司)、[科学者](北村弘一)、[客　B](谷津　勲)、[アナウンサー(室内)](藤岡琢*也)
■脚本／広瀬　正■演出／笹川　浩■作画監督／木下敏治
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／工藤　順■撮影／ネズ・プロ

第10話『第10話／宇宙海賊』(1965年7月10日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[子　分](加茂嘉久)、[イ　ボ](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／[街の人A](大山　豊)、[ボンボン](雨森雅司)、[ギロン](矢田耕介)、[ヒョロ・ヒョロ](北村弘一)、[警察長官](谷津　勲)、[ブース](小宮山　清)、[ビリケン親分](藤岡琢*也)
■脚本／津久井丈人■演出／木下敏治■作画監督／笹川　浩
■原画／原　征太郎■動画／西岡たかし、奥田竜緒、坪田力蔵、窪　韶之
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら
■編集／工藤義彦■進行／東海林武■撮影／ネズ・プロ

第11話『第11話／宇宙のピエロ』(1965年7月17日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、[パチンコ博士](加茂嘉久)、[イボ犬](内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／[殺し屋　C](大山　豊)、[殺し屋　D](雨森雅司)、[サーカス団長](矢田耕介)、[観客A](北村弘一)、[観客C](谷津　勲)、[カプセル](小宮山　清)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本、演出、作画監督／笹川　浩
■原画／奥田竜緒■動画／窪　韶之、坪田力蔵、吉田せい子、―――
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、半藤美術研究室
■編集／工藤義彦■進行／柴田　勝■撮影／ネズ・プロ

第12話『第12話／宇宙の花』(1965年7月24日放映)
〈エンディングクレジット〉
■声の出演[第1画面]／[宇宙エース](白川澄子)、[タツノコ博士](家弓家正)、[アサリ](向井真理子)、[ヤドカリ記者](愛川欽也)、(加茂嘉久)、(内海賢二)
■[声の出演[第2画面]／(大山　豊)、(雨森雅司)、(矢田耕司)、(北村弘一)、(谷津　勲)、(杉田郁子)、[ナレーター](藤岡琢*也)
■脚本／伊藤セツ■演出／九里一平、山内六生■作画監督／九里一平
■原画／青木　茂■動画／野島　進、田中英二、――――、アニメ・プロ
■仕上／今井紀子、村上ひろみ■背景／山口あきら、中村光毅、槻間八郎
■編集／工藤義彦■進行／市村輝夫■撮影／ネズ・プロ

STAFF

企画・監修／タツノコプロ
吉田昇一
渡辺季之
さとうけいいち

編集／TARKUS

編集協力／和智正喜
岩瀬　忠

高橋和光
谷崎あきら
田中晋輔

タマ・プロダクション

小野浩一郎
西村祐次

東芝デジタルフロンティア
コロムビアミュージックエンタテインメント
vap

アートディレクション／岡　泰司
デザイン／泰司デザイン事務所
酒井夕里
亀山絵里香
山下圭子
プランニングオフィス 遊

撮影／小森谷信治
玉井聡一郎

タツノコ漫画作品リスト・スタッフ
■調査・入力・作成／長尾けんじ（リスト制作委員会）
■調査補佐／和田理、夢之猿
■入力協力／BU-FU-UH
■資料協力／伊藤秀明、タツノコフレンド
■参考文献／なんでもプレイ百科(11)ワイド版　なつ漫グラフィティー（双葉社）
別冊太陽　子供の昭和史　少年マンガの世界。【昭和二十年▼三十五年】（平凡社）
新潮文庫　梶原一騎伝（新潮社）
少年画報大全　昭和23年▼昭和46年（少年画報社）
少年なつ漫王　30号［九里一平大特集］（アップルBOXクリエート）

タツノコプロフィルモグラフィー'65〜'72・スタッフ
■調査・入力・作成／原口正宏 (リスト制作委員会)
■入力補佐／道原しょう子 (リスト制作委員会)
■資料調査補佐／磯部正義
■資料協力／繁尾　努、斉藤雅人

N.D.C.726　320p　21cm

タツノコプロインサイダーズ

2002年12月20日　第１刷発行

定価はカバーに表示してあります。

著　者　原口正宏
長尾けんじ
赤星政尚

発行者　五十嵐隆夫
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽２－12－21
郵便番号　112-8001
電話　第三編集局（03）5395-3717
コミック第二販売部（03）5395-3608
雑誌業務部（03）5395-3603
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社

©タツノコプロ　2002
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社雑誌業務部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
なお、この本についてのお問い合わせは、第三編集局あてにお願いいたします。

Printed in Japan
ISBN4-06-330179-6

原口正宏(はらぐち・まさひろ)
アニメーション史研究家。1962年４月８日、東京に生まれる。早稲田大学文学部西洋史学専修を卒業。在学中より、日本の商業アニメーションのスタッフワークの記録、制作スタジオ史の研究を開始、資料保存グループ「リスト制作委員会」を結成する。1984〜86年、テレビや劇場アニメーションに従事する制作スタッフ名を記録、集計した『リスト'83』〜『リスト'85』を自主刊行。1985年からは、徳間書店の月刊アニメーション情報誌『アニメージュ』で毎月放映されるテレビアニメーションのサブタイトルとスタッフ名を記録した「パーフェクトデータ」欄を担当、現在に至る。執筆に参加した書籍は『スタジオジブリ作品関連資料集Ⅰ〜Ⅴ』(徳間書店)、『マジンガーZ解体新書　鉄の城』(講談社)、『前略、押井守様。』(フットワーク出版)、『富野由悠季全仕事』(キネマ旬報社)、『宮崎 駿　漫画映画の系譜』(徳間書店)など。2001年からは、虫プロダクション製作作品のDVD化プロジェクト(発売元／コロムビアミュージックエンタテインメント)に参加、その映像構成と解説書編集に従事。2002年は、同DVDと本書の作業で日々の大半を過ごす。

長尾けんじ(ながお・けんじ)
1969年6月8日、東京都生まれ。道都大学美術学部デザイン学科卒業。92年に三和広告社にデザイナーとして入社。懇意にしていたタツノコプロの天馬正人氏の薦めもあり、公認FCを発足させ執筆活動を開始する。代表作は『タイムボカン全集』(ソフトバンク)、『AICクロニクル』(メディアワークス)など。近年はタツノコプロや虫プロ作品のDVD-BOXの解説書編集に、眠れぬ日々を過ごす。「リスト制作委員会」所属。

赤星政尚(あかほし・まさなお)
1965年12月20日、福岡県生まれ。最近は東映ビデオの『デビルマン』『マジンガーZ』や、東芝デジタルフロンティアの「東映アニメーションクラッシックス」シリーズなど、DVD-BOXがらみのお仕事で大変。本書には編集者、つーより雑用係として参加（って、それ同義語か）。

ISBN4-06-330179-6

C0979 ¥2000E (0)

講談社
定価:本体2000円 (税別)